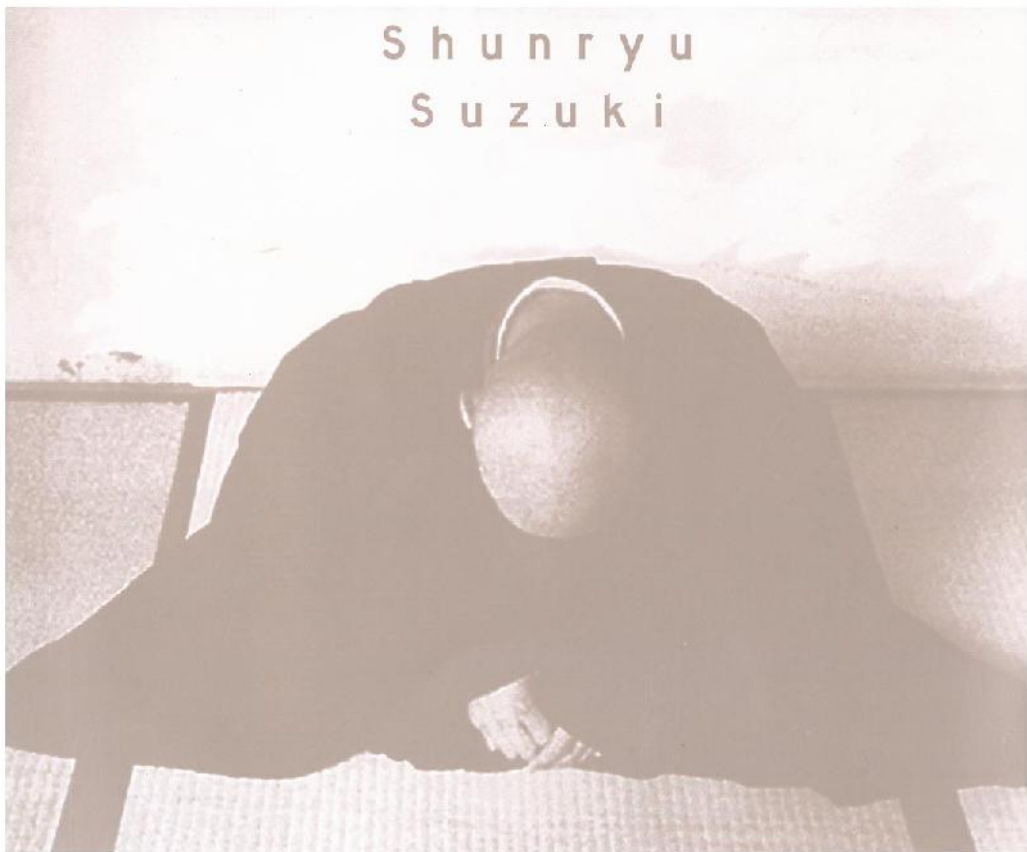


Crooked
Cucumber
The Life
and Zen
Teaching
of
Shunryu
Suzuki



鈴木俊隆の生涯と
禅の教え

C r o o k e d
C u c u m b e r
T h e L i f e
a n d Z e n
T e a c h i n g
o f
S h u n r y u
S u z u k i

デイヴィッド・チャドウィック 著
浅岡定義 訳 藤田一照 監訳

まがったキュウリ

サンガ



日本の親愛なる友人たちへ

私の著書 *Crooked Cucumber: The life and Zen Teaching of Shimryu Suzuki* が「まがったキウリ 鈴木俊隆の生涯と禅の教え」として日本語に翻訳され、サンガから出版されてあなたたちのもとへとこうして届けられるようになったことを、この上なく嬉しく思っています。私は長い間、そういうことがいつか起こるのをこの目で見たいと切望してきました——二〇年前にこの本が初めて出版されたときからずっとです。

日本の読者の皆さんに私がお伝えしたいことはほとんど全て、この本のために書いた序文の中に含まれています。この場を借りて、私自身のことについてほんの少しだけ述べておこうと思います。

私はテキサス州のアジアの思想や文化に共感する家庭で育ちました。母は日本の芸術を愛し、居間のテーブルの上に日本に関する写真集を一〇年以上にわたって置いていました。私がそれに基づいて育てられたキリスト教は、仏教とヒンドゥー教に影響を受けたもので、非有神論的でした。このようなキリスト教においては、イエスは悟りを開いた人間であったとみなされていましたし、神というのは私たち一人一人から切り離されたものではない、究極の普遍的真理を表す言葉であるとされていました。

二一歳のときに、私は師を探し始め、それから数カ月のうちにはサンフランシスコの桑港寺という曹洞宗の寺において鈴木俊隆老師の下で禅の修行をするようになり、サ

ンフランシスコのジャパン・タウンで暮らしていました。一九六七年には、鈴木老師がアジア以外では最初の曹洞禅の修行道場であるタサハラ禅マウンテンセンター禅心寺を創設するお手伝いをしました。そこで何年にもわたって暮らし、さらに彼の法脈に属する弟子たちによって創設された各地の禅センターの内部や外部で、鈴木老師のやり方での禅の修行を続けました。

鈴木老師は常に英語で教えを説き、弟子たちには日本語を勉強するように要求することはありませんでした。しかし、私は一九六九年から熱心に日本語の勉強を行い、そのあとは、自分たちが読経する経典、日本語や中国語で書かれた書物を鈴木老師や他の日本人僧侶たちの下で集中的に学びました。鈴木老師は私が禅を勉強しに日本に行くことを望んでいましたが、私は老師が生きている間は彼の下を離れることを拒んでいました。彼は一九七一年に遷化しました。一九八八年に私はついに日本に行き、岡山に四年間住んで、臨済宗の曹源寺におられた原田正道老師の下で修行しました。その間は、曹源寺の隣に妻と住んで、英語を教えていました。ときどき、鈴木老師の自坊であった焼津の林叟院を訪ねました。日本にいた四年間の生活について *Thank You and OK! An American Zen Future in Japan* 『ありがとう、そしてオッケー！——日本における、禅に失敗したあるアメリカ人』という本を書きました。また、本書と鈴木老師の寸描集である *Zen is Right Here* の執筆にも取り掛かりました。後者の本は、すでにサンガから『禅は、今ここ。一九六〇年代アメリカに禅を広めた、鈴木俊隆の教えと逸話』と題して出版されています。

私は鈴木俊隆老師が残したものと、自分たちの人生の道が老師の人生の道と交差した人たちの思い出を保存するという仕事を継続し、その企画をCuke Archives (キューク・アーカイブス「キューリ記録保管所」と呼びました。それは、<http://cuke.com>、<http://shunryusuzuki.com>というネット上のサイトで閲覧できる膨大な量の、講義、記憶、物語の口伝えあるいは文字に書かれた歴史です。アメリカ、ヨーロッパ、さらに他の場所には、鈴木老師やその法脈に属する彼の弟子、指導者によって始められた坐禅グループがたくさんあります。また、彼の講義を基にした書物や、彼の教えに影響を受けた人たちの書物を通して、彼の影響は世界中に広まっています。

鈴木俊隆老師は仏教の普遍性、日本文化の価値と深遠さ、そして、西洋の人々がそうした貴重な宝について自らを開いて学ぶようになることを信じていました。国境を越えて協力し合えることを常に確信していました。西洋には東洋から学ぶべきことがたくさんあり、またその逆に東洋にも西洋から学ばなければならないことが多々あると鈴木老師は思っていました。そして、注意深く、最善で最も健全なものだけをお互いに与え、お互いから受け取るべきであることを強調しました。鈴木老師は、自分が提供するものは全て、自分自身が師匠たちから学んだことであり、消費の対象になる製品よりはるかに偉大で、単なる知的な理解よりもはるかに深い、日本が提供するところができる最善のものであると語りました。彼は日本にいる間は、地位の高い僧侶でもなければ、成功した指導者でもありませんでした。しかし、アメリカにいた一二年という短い期間に、彼の才能は花開きました。そして、彼は静かに祖師の道をアメリカ

カの大地に植えることに成功し、それは根付き、育ち、広がっていったのです。

この最も貴重な、日本からの贈り物を西洋にもたらし、人々の心や日常生活にしっかりと定着させることにおいて、鈴木俊隆老師が果たした大きな貢献とその成功を、日本は誇りに思うべきでしょう。

デイヴィッド・チャドウィック

(訳・藤田一照)

日本版刊行に寄せて

世界には歴史書があり、国にも国史がある。また寺院にも縁起や由来が残されている。少なからず世に功績を残した人物に対して、人となり、人間史を知りたいと思うことは当然のことであろう。最初、Crocket Curumberが完成し、私の手元に届けられたとき、英文であるため内容については、残念ながら読み取ることができなかった。出版されてから数年後、本書の中に出てくる高草山グループのメンバー数名が、林叟院を訪ねてきた。そのとき、刊行からまだ日が浅い本書をお見せすると、中におられた、浅岡定義氏が、即座に数ページを黙読し、目を輝かせて言われた。「是非これを翻訳してみたい、大変興味があります」。私は、「どうぞどうぞ、是非お願い致します」と申し上げた。数ヵ月後、浅岡氏から訳本が届いた。仏教に関する字句、用語を正しながら読ませていただいた。そこで初めてその内容に触れることができた。

鈴木俊隆の人間史、伝記を著そうという取り組みは最初、アメリカのスタンフォード大学教授カール・ビュールフェルト氏によって試みられたが、さまざまな面で時期尚早の感があり、完成には至らなかった。しかし、米国人の多くの思いや希望を感じ取ったデイヴィッド・チャドウィック氏は、前者の志を嗣ぎ、多くの苦難を乗り越えて『*Crocket Curumber: The Life and Zen Teaching of Shunryu Suzuki*』まがったキエウリ鈴木俊隆の生涯と禅の教え』の出版に漕ぎ着けた。それに至る道のりは並々ならぬ

ものがあったであろうと思う。特に日本での俊隆の遍歴、人間関係はかなり複雑なものがあり、それをまとめるために何度となく訪日し、取材を重ねなければならなかったであろう。氏の努力と尽力には心から敬意を表したい。

そこに現れている、我が師であり父である鈴木俊隆の姿は私の知らなかったことについて多く語られており、大きな驚きを覚えた。師父は子である私たちには、自分の前歴についてあまり話そうとはしなかった。なぜかはわからないが、多分少々複雑な自分の半生について子どもに話しても、それを理解するには時期を得ていないと考えたか、あるいは、何から話せばよいのかわからなかったからではなからうか。とにかく、師父俊隆のことは、あまり詳しくは知ることはなかった。訳本を拝読すると、それは幼き日の師父俊隆が目の前を走り回っているようであり、東奔西走して活動する青年僧俊隆の姿を彷彿させるものがあった。

昭和三年、師父が渡米する二年ほど前、私は駒澤大学の入学試験のため、父と共に東海道線で上京したが、その途中、平塚あたりを通過した際、「わしはあの山の向こうで生まれた」とポツリと言った。私は「ブーン」と言っただけであつたと思う。それ以上は父は何も言わなかったし、私も尋ねようとしなかった。私は父の幼少の頃はどんなだっただろうと思ひ、父は悲喜交々(うれしあせむ)の昔を思い出しているのだろうと思つてゐた。また、渡米してからのことについても、自分から苦勞話や問題点について話すことはあまりなかった。ましてや、どんな成果が上がっているかについて語ることはなかった。ただ「米国人の方が禅をよく理解し修行する」ということは言つてゐた。

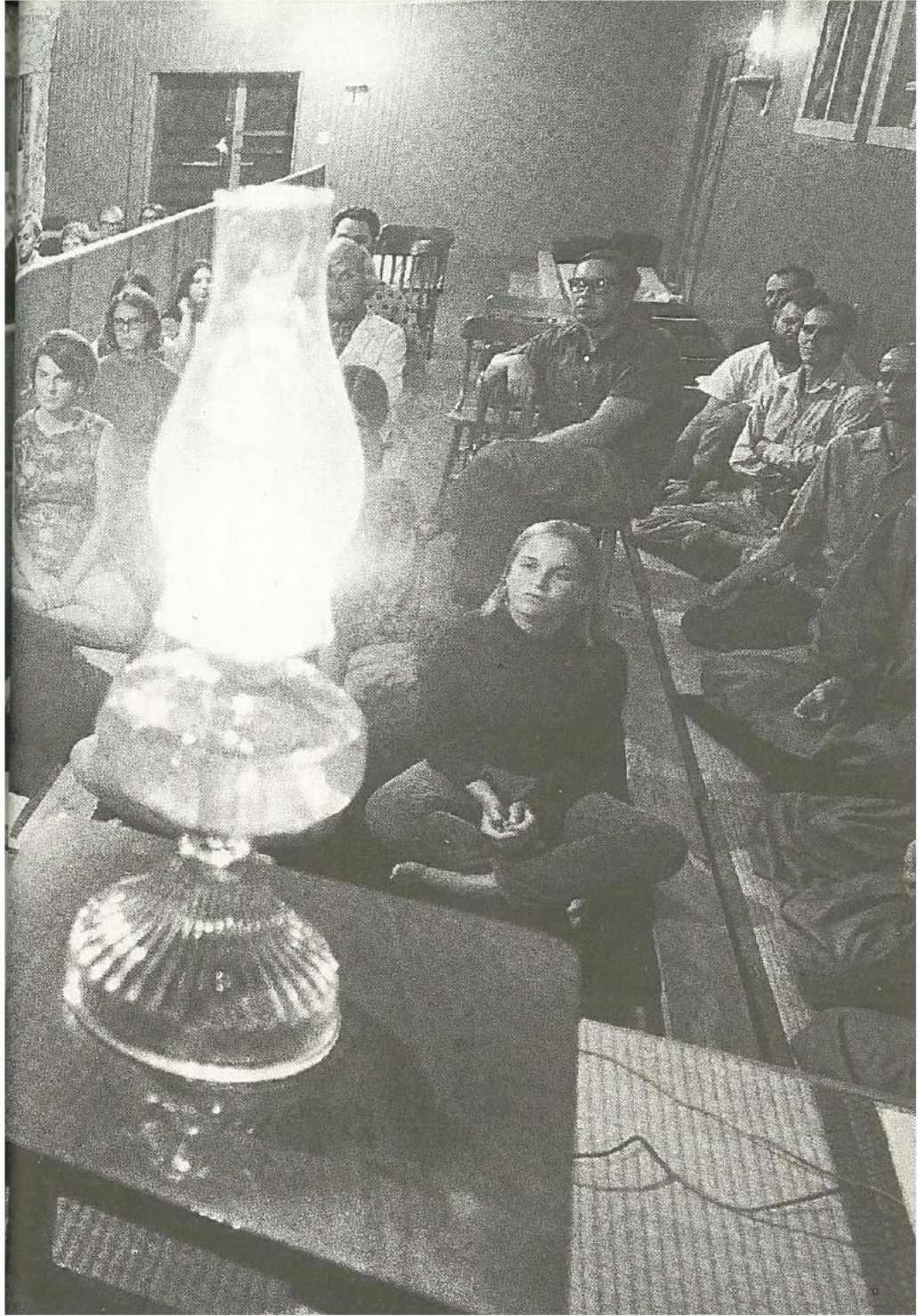
今ここに日本版「まがつたキュウリ 鈴木俊隆の生涯と禅の教え」が出版されるこ

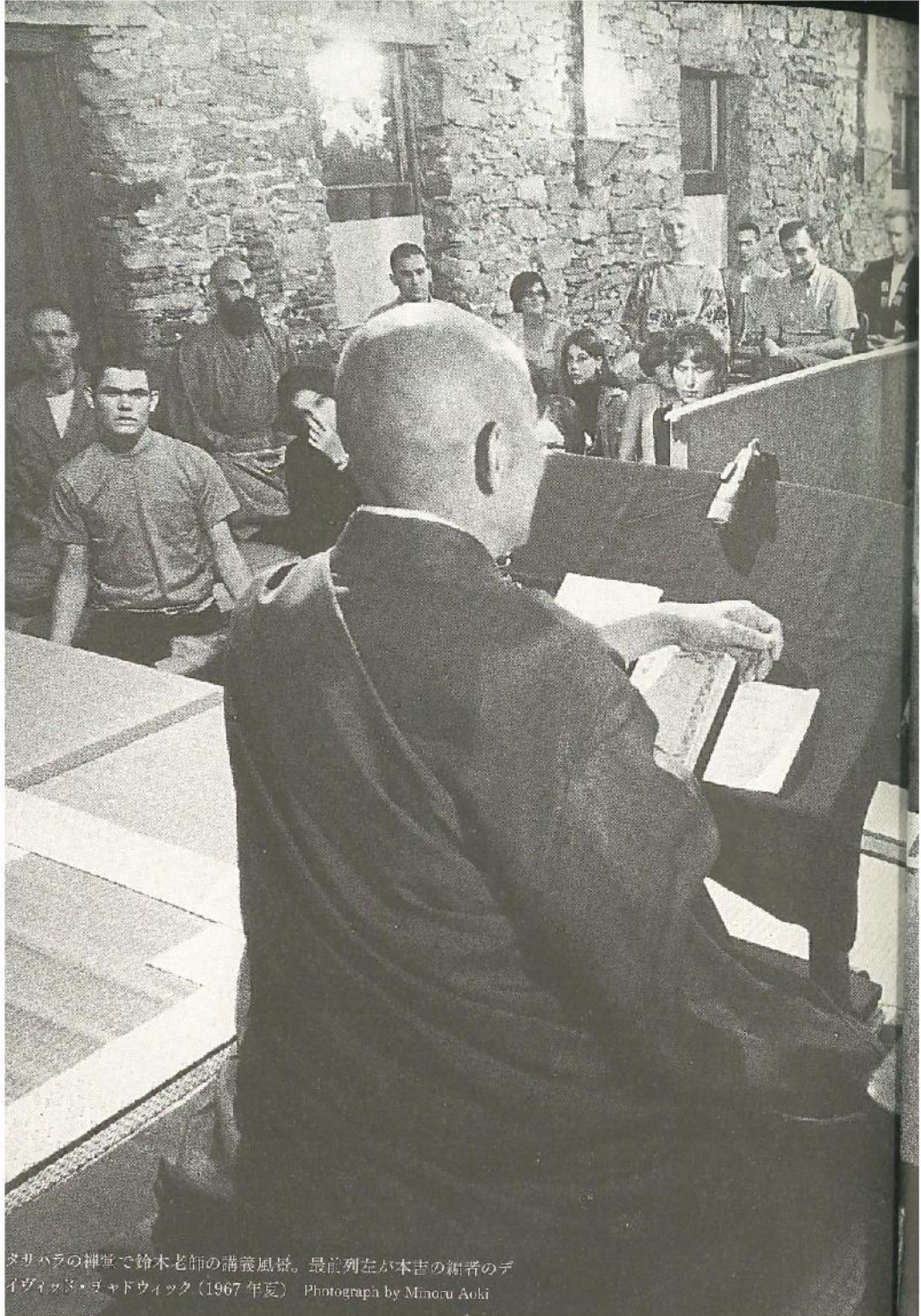
とによって、師父俊隆についてよく知ることができたことは、子弟として嬉しいことである。そして、この書は単に人間史、伝記としてでなく、語録的な要素が加味されている点も、チャドウィック氏の工夫が光った書となっている。

実行として禅を伝えた一人として、鈴木俊隆の存在が語り継がれていくかもしれない。または、人々に忘れ去られてしまうかもしれない。しかし当の本人は一向に、それについて関心を持つてはいなかったと思う。ただ関心があったのは、調和の道、静寂の行である坐禅が、世界の人々に広く行ぜられていくかどうか、ということであつたであらう。

Cooked Cucumber が出版されてから二十年、先師俊隆遷化から五〇年になろうとしている今日、これが日本語となつて出版されることになり、これに携わつてこられた、株式会社サンガの荒金かほる氏、川島栄作氏の努力と理解に深く御礼申し上げます。特に訳者である浅岡定義氏の切なる遺志を継ぎ、ご尽力くださったことに、心からの敬意を表したい。

鈴木俊隆遺弟、長男 林叟院住職 鈴木包一 九拝





メサハラの神堂で鈴木老師の講義風景。最前列左が本吉の編輯のデ
イヴィッド・ヨドウィック（1967年夏） Photograph by Minoru Aoki

日本の親愛なる友人たちへの挨拶 デイヴィッド・チャドウィック 3

日本版刊行に寄せて 鈴木包一 7

序文 Introduction 18

Part One
日本編 Japan 1904-1959

Chapter 1 幼年時代 Childhood 1904-1916 28

Chapter 2 師匠と弟子 Master and Disciple 1916-1923 40

Chapter 3 進学 Higher Education 1924-1930 61

Chapter 4 大本山僧堂 Great Root Monasteries 1930-1932 84

Chapter 5 住職 Temple Priest 1932-1939 97

Chapter 6 戦時中 Wartime 1940-1945 112

Chapter 7	占領下	The Occupation 1945-1952	134
Chapter 8	家族と死	Family and Death 1952-1956	154
Chapter 9	序幕	An Opening 1956-1959	169

鈴木俊隆アルバム 178

Part Two
アメリカ編 America 1959-1971

Chapter 10	新たな出発	A New Leaf 1959	194
Chapter 11	礼拝	Bowing 1960	215
Chapter 12	僧伽	Sangha 1961-1962	233
Chapter 13	旅	Journeys 1963-1964	256

Chapter 14 定着 Taking Root 1965-1966 281

Chapter 15 タサハラ Tassajara 1967-1968 310

Chapter 16 市内 The City 1968-1969 336

Chapter 17 一と多 One and Many 1969-1970 366

Chapter 18 運転手 The Driver 1971 394

Chapter 19 最後の季節、秋 Final Season: Autumn 1971 420

結び Epilogue: 1998.12.4 446

円相 449

解説

鈴木俊隆と北アメリカの禪

サンフランシスコ禪センターをめぐる 石井清純 450

欧米禪略年表 469

『まがつたキユウリ 鈴木俊隆の生涯と禅の教え』に寄せられた書評 472

訳者あとがき 474

鈴木俊隆年譜 477

参考文献 480

凡例

- ・原文における [Eiŋ] 表記の肉声に関しては、フォントと段組を変えて記してあります。
- ・原著の用語集用の [Eiŋ] 表記の単語に関しては、特に区別はしていません。
- ・日本語としての読みやすさを勘案して、訳者により適宜「」をつけた部分があります。
- ・また訳者補足として、原語のニュアンスを活かした方がよい部分、および日本語による他の訳語の補足に「(」をつけました。
- ・本書には道元禅師の言葉が多く引用されておりますが、原著にはその出典は記されておりません。本書もそれにならない、出典は記しておりません。
- ・また、雑語および公案名も英文の日本語訳を基本とし、その名称を記しておりません。
- ・訳註は*で示しています。

To Shogaku Shinryu Suzuki-roshi
And all sentient beings,
"wisdom seeking wisdom."

鈴木祥岳俊隆老師および一切衆生、
「叡智を求める叡智」に捧ぐ。

*Do I contradict myself?
Very well then I contradict myself;
(I am large, I contain multitudes.)*

WALT WHITMAN from *Song of Myself*

僕が矛盾しているのかい、
それなら大いに結構、ぼくはたつぷり矛盾してやる、
(だってぼくは大きくて、中身がどつさり詰まっているんだ)

ウォルト・ホイットマン「草の葉(上)」(岩波書店)

まがったキュウリ

鈴木俊隆の生涯と禅の教え

序文

Introduction

教えは言い古された言葉や古くさい物語であつてはならない。
つねに新鮮でなければならぬ。それが眞の教えである。

*The teaching must not be stock words or stale stories
but must be always kept fresh. That is real teaching.*

一九六八年二月のある晩、カリフォルニア州ビッグサーから内陸部に一六キロほど、山懐深く入ったタサハラ・スプリングフィールド（タサハラ温泉）の禪マウンテンセンター（禪心寺）で、五〇人の、——そのほとんどは若いアメリカ人であつた——黒のローブ（黒衣）をまとつた仲間の弟子たちとともに私は坐つていた。石油ランプの光が、凍てつく部屋の冬の冷気の中で、吐く息を白く照らしていた。

わたしたちの前では、西半球で最初に造られた禪の僧堂の創設者である鈴木俊隆老師が、演壇上の講話を終えたところであつた。「ありがとうございました」。彼は心からの感謝を込めて静かに言つた。鈴木老師は水を一口飲んで喉を潤してから弟子たちを見回した。「何か、質問はありませんか」。戸外の暗闇に流れる小川の水音の中で、

やっと聞き取れる程度の声で老師は尋ねた。

私は合掌して頭を下げ彼の目を見た。

「はい」と老師は言った。

「鈴木老師、私はあなたの講話を数年間聴いてまいりました」と私は言った。「實際、私はそうした講話が好きですし、とても勇気づけられています。そして老師が話しておられることは、非常に明快で簡潔です。しかし、私は正直言つて、老師の講話を理解しているとは言えません。私は、老師の講話は好きですが、たとえ千年間いたとしても、理解できないような気がします。すみませんが、エッセンスを教えていただけませんか。仏教を一言でまとめていただけますか」

一同は大笑いした。老師も笑つた。何と云うばかげた質問だろう。老師がこの質問に答えるとは誰も思つていなかった。老師は人に言われて言う人ではないし、また弟子たちがすがりつくような特定の答えを与えることを好まなかつた。仏教とは何かという「特定の考え」を持つべきではないと彼はしばしば言つていた。

しかし老師は答えた。彼は私を見て言つた。

——「全ては変化します」

そして、ほかに質問はないかとたずねた。

鈴木俊隆は禪宗の一派である曹洞宗の日本人僧侶であり、一九五九年、日系アメリカ人の小さな教区の僧侶としてサンフランシスコにやつて来た。彼に何か計画があつたわけではないが、彼がこれまで師匠たちから学んできた仏教の要である修行を受

け入れる欧米人もいるだろうという確信は抱いていた。彼は、この世に居心地よくいるための手がかりを与えてくれる諸々の事象——樹木、岩、衣服、家具、歩行、坐法についての術を心得ていた。彼にはまた、人を引きつける術や、人々に傾聴させる話法、特にアメリカにおいて、とりわけ英語で抜群の効果を発揮すると思われる類まれな才能に恵まれていた。

彼の講義を巧みに編纂し、一九七〇年に出版された著書 *Zen Mind, Beginner's Mind* [邦訳「禅マインド ビギナーズ・マインド」] は、四五カ国語以上翻訳され百万部以上が販売された。この本は、鈴木が情熱を傾けた諸々の活動を反映している——多くの人々とともに禅の修行を継続する中で、彼は特別他人に記憶されたり、何事にせよ自分になんで名前がつけられたりすることを望まなかった。彼は自分の学んだことを人に伝え、それによって仏教がアメリカで盛んになり、ひいては日本の仏教が再活性化されることを望んでいた。

エマソンやソローの超越主義の興隆以来、仏教思想はアメリカの思想界に浸透していた。一八九三年にシカゴで開かれた世界宗教会議で、釈宗演が西洋に向けて初めて禅の講演を行ったとき聴衆を魅了した、彼の弟子であり翻訳者でもあった鈴木大拙は、ハーバード大学とコロンビア大学で教鞭を取り、また多数の、広く読まれた仏教に関する書籍を英語で出版し、東西の偉大な架け橋となった。鈴木大拙と混同されたとき、鈴木俊隆はこう答えたものだ。「いや、彼はビッグ鈴木で、私はリトル鈴木です」。

仏教の研究と瞑想のための小さなグループが、東海岸では佐々木指月しげつきのもとに、西海岸では千崎如幻ちざきにょげんのもとに集まった。ヘルマン・ヘッセやエズラ・パウンドやビート作家たちによって伝えられた仏教の書籍は、ニューヨークやサンフランシスコのコーヒーハウスで、あるいはオハイオ州やテキサス州の大学生たちの間で論議された。卓越した伝達者であったアラン・ワッツは、新たな方向性を渴望する世代をさらに仏教に熱狂させ、影響を与えていった。

西欧人にとってはほぼ完全な知的関心の対象とされていたものを体現し実証した鈴木俊隆は、このようなさなかに登場したのである。彼は彼が重視していた禅の瞑想である日々の *zazen* (坐禅)、そして彼が「Practice (修行)」と呼んでいたもの、すなわち日常の全ての活動に押し広げた坐禅、をもたらしした。彼の生活、また人生についての語らいには、膨大な活力、畏敬の念を起こさせる存在感、わかりやすいユーモアのセンスと、ときに多少の茶目っ気を交えた斬新な取り組みがあった。

彼が一才で初めて僧侶になったときから、鈴木すずきの師匠であった玉潤鈴木祖温たまじゆんすずきそゑんは、彼を「Crooked Cucumber (へばキュウリ)」と呼んだ。へばキュウリへまがったキュウリは売り物にならない。つたの先に、小さく曲がりうらなっている。祖温は鈴木が気の毒だと言ったのである。というのも彼は決してよい弟子を持つことはできないと思つたからである。長い間、祖温の言つたことは正しかったように見えた。それからへばキュウリは生涯の夢を達成した。彼はアメリカにやつて来て、そこで多くの生徒を得た後、米米の成果を十二分に花開かせて死んだ。彼の一二年半に及ぶアメリカ滞在は、彼の人生、そして他の多くの人々の人生をも大きく変化させるものであった。

一九九三年八月のあるおだやかな火曜日午後、——鈴木俊隆老師の死後約二二年を経て、——私はその未亡人、鈴木みつさんと会う約束を取りつけていた。サンフランシスコ禅センターの三階建ての赤煉瓦造りの建物の二階に通じる中央階段を上り、鈴木俊隆に捧げられた閑山堂を通り過ぎた。ボリナスの砂州から取りよせたブロンドサイプラスの切り株に彫られた、老日本人彫刻家の手になるほぼ等身大の彼の像がその部屋を陣取っていた。「こんにちは老師、さよなら老師」と私は呟き、急いで会釈して通り過ぎた。

鈴木みつ先生は、私が気にかかっていた人であった。わたしたちは親しい間柄ではあったが、近年あまり会ってはいなかった。間もなく彼女は太平洋を渡って永遠に故国に帰ってしまうのである。私はいささか神経質になっていた。私は彼女に話しておく必要があった。あまり時間の余裕はなかったが、性急に進めることもしたくなかった。私は彼女から同意を得たかったのだ。

「お入り、デイヴィッド」、ホールの端にある台所の戸口から高音の優しい声で彼女は言った。私は中に入った。そこには、七〇才代の後半にしては驚くほど若く見えるみつさんがいた。「抱擁はなしよ」と私をかむすために手を伸ばし、自分の胸を擦りながら慌てて彼女は言った。一五年ほど前に、私の愛情を示す抱擁が、いささか元気がよすぎたため、彼女の肋骨を痛めたのにちがいない。私は、日本人がするように（手を握らう）上体を曲げてお辞儀し、日本語で丁寧な言葉を掛けた。

彼女は、私より三一センチほど低い位置に立っていた。彼女の顔は丸くて以前と同

じように子どもっぽかった。髪は長くて真つすぐで黒く、所々に白髪が混じっていた。手製のゆったりしたスラックスに菊をプリントしたブラウスを着ていた。上下とも同じ素材でできた、黄上色と淡いブルーのものであった。小さな台所はいつものように小物類で溢れており、壁は押し絵やら写真やらカレンダーやらでおおわれていた。しばらく家族や私の書いた本について雑談したあとで、私は訪問の目的を持ちだした。

「出版社の中には興味を持つているところもありましようし……私にどうかと……鈴木老師について何か書いたらと。口述された彼の経歴とか、鈴木老師についての話とか、人々の記憶を集めて」

「方丈さんの事を書いてくださるなんてありがとう」と彼女はThankをしり上がりの調子で言った。「Hojosaa (方丈さん)」とは彼女がいつも自分の夫を呼んでいた言葉である。「方丈」とは寺の住職であり、「さん」は人を呼ぶ場合の丁寧な言い方である。

「では、私が鈴木老師の本を書くことに賛成していただけるのですね」

「もちろんです」と彼女は力を込めて答えた。「面白い話をたくさん書いてください」

「うーん……面白い話ね、はい……だけど面白い話だけでなくて、真面目な話も、悲しい話も全てをね、よろしいでしょうか」

「はい、だけど皆さんは面白い話が好きなんです。主に面白い話を書くべきです。それでよいのです。方丈さんは面白い話が好きでした。誰でも面白い話を読むのは楽しいでしょう」

「私がこの本を書くべきではないと思う人がいるかもしれませんが」

彼女はテーブルの向こう側に腰をおろして真つすぐに私を見た。「今、私が話しているとき、私の口を通して出てきているのは鈴木老師の言葉です。老師はこう言っているのです、(どうぞ私について本を書いてください。私について書いてくれることを、大いに感謝します)」と、これは彼の言葉です。私は彼に代わって話しているのです」

おいとまする時間になった。彼女は、掌に入るほどの大きさの緑色の金属製の蛙を私にくれた。「さあ、これを持って行って」と彼女は言った。「これは方丈さんの物だったんです。あなたが持っていてくださいれば喜ぶでしょう。彼は、蛙がとーっても好きだったのです」彼女は *Wendy* の最初の音を長く伸ばして言った。「私はみんなにあげています。日本に帰るときは蟬のようにして帰ります。蟬は抜け殻を残します。私もそうしたいのです」

「日本にあなたを訪ねて行って、方丈さんのことを伺いたいと思っています」

「いえ、いえ、いえ」彼女は頑かたなに言った。「英語はもうたくさん。私の貧弱な英語はここに置いて帰りたいのです」

「では、私は貧弱な日本語で話しましょう」と私は貧弱な日本語で言った。

「オーケー、それなら訪ねていらっしやい。けど、喋るときは小さな声で話してください。あなたの声は大きすぎますからね」

「オーケー」私は小さな声で言つて、戸口に立っていた彼女のかたわらを通り抜けた。本能的に萎縮する彼女に、お別れの抱擁はしない、と安心させて。

「忘れないで」と彼女は言った。「面白い話をたくさん書くことをね」。そして聞い

た。「あなたが方丈さんの本を書くことを嫌う人があるというのはなぜなの」

「色々な理由があります。あなたもご存知のとおり、老師はそうしたことは好みませんでしたから。彼のことを正確に伝えようがないです。野扒のい老師が二〇年以上も前に言った言葉を「ご存知ですか」

野扒は鈴木と同僚で、伝統に忠実な激しい僧侶であり、今は年老いて尊敬されている。

「いいえ、野扒さんは何とおっしゃいましたの」

「鈴木老師は今世紀で最も偉大な日本人の一人であるから、彼の三昧さんまい〔深い瞑想状態〕の全てを知る者でない限り誰も彼のことを書くべきではない、と言ったのです」

彼女は「すてき！」と、手をたたいて喜びに溢れた声で言った。「あなたの最初の面白い話ね」



日本編

Part One

JAPAN
1904-1959

幼年時代 1904-1916

CHAPTER 1 Childhood

私たちの心は

過去の轍から

解放されていなければならぬ。

ちようど、春の花のように。

*Our mind should be free from traces of the past,
just like the flowers of spring.*

緑の丘を横切つて激しい風が田舎の寺、松岩寺の雨戸に吹きつけていた。一九〇四年五月一八日、鈴木よねが男の子を出産した。彼女の夫、この寺の住職であつた祖学は、初めて生まれた息子に俊隆という名前をつけた。優秀な、人に抜きん出るといふ意味の漢字を使い、大きな期待を込めた、本格的な仏教徒の名前である。

それは明治三十七年辰年であつた。激烈な戦闘が満州の原野などで、日本帝国と帝政ロシアとの間で繰り広

げられており、祖学は松岩寺の本堂で、うら若い兵士の葬儀の準備をしていた。そのときに、小さな畳の部屋で俊隆が生を受けたのである。

現在の神奈川県平塚市の端、下吉沢の集落の丘の上にある四百年を経た小寺、松岩寺に通ずる急な坂道には桜の並木がづらなり、竹藪が点在していた。寺の墓場からは——その土地の家族や歴代の住職の骨が、風雨に曝された石碑の下に埋葬されている平和で神聖な場所——北京に位置する東京湾に連なり、太平洋に向かつて広がっている相模湾の壮大な眺望が見渡された。武家政治ならびに仏教の中心であつた鎌倉は、緑と青の眺望の端に横たわっている。松岩寺の形の整つた草葺きの屋根は、樹木の生い茂つた山並に囲まれて遠くからも見ることができた。急速に発展していた横浜の工場群の煙の彼方に。

子どもの頃、鈴木俊隆はトシタカ、つめてトシと呼
ばれていた。トシタカは俊隆という漢字を訓読みで発
音したもので、より柔らかかで砕けた感触を持つてい
る。トシは、母の最初の結婚で生まれた異父兄、嶋芳
浪と共に寺の周りで遊びながら成長した。彼が三歳の
とき、妹とりが生まれ、そして六歳のときにもう一人
の妹愛子を得た。トシは小柄ではあったが強健で勉強
熱心な子であった。物心つくまでは気が短く神経質、
親切ではあったがすぐに怒りを爆發させる傾向があっ
た。そして何事にせよ忘れ物をする癖があった。成績
表や教科書、帽子や小銭等を家や学校どこにでも置き
忘れるのであった。

トシは一九一〇年四月、ほぼ六歳のときに六年制の
義務教育を受け始めた。彼が、自分の家が並外れて貧
乏だと気づいたのは学校に入ってからだ。ほとんどの
生徒は草履を履いた。片方の鼻緒が切れると、子ども
たちは通常両方の草履を捨ててしまった。トシはまだ
履ける方の草履を持って帰り、新しいペアを作ってい
た。パリカンを買う金を惜しんで、彼の父親はトシの
頭を、自分と同じように剃った。学校では男児は全員

髪を短く刈っていたが、剃っている者はいなかった。

瘦身で律儀な五〇歳近い仏門鈴木祖学は、最初の息
子を持つにしては年を取り過ぎていた。この時期、曹
洞宗の僧侶は、わずか数十年前に妻帯を始めたばかり
だった。仏教の僧侶の勢力を抑えることに熱心だった
政府が強く奨励したのだ。妻帯は、曹洞宗では正式に
は認められていなかったが、やりやすくなるはなってい
た。当初、家族は僧侶と離れて寺の外に住まなければ
ならなかったが、一九〇四年までには家族も寺の中で
同居する事が許されるようになっていた。松岩寺には
家族専用の住居がなかったので、家族は本堂で休み、
同じ部屋は毎日の勤めにも使われ、隣人や檀家の人た
ちと共同で使用せねばならなかった。

松岩寺は大きな、裕福な檀家——お寺を支える会員
の集まり——がいなかった。多量の年貢米をもたらす
広い土地も持っていないかった。祖学とよねは外部の仕
事で寺の収入を補わねばならず、細かい儉約にも気を
配らねばならなかった。

よねは小柄で飾り気がなく、勤勉な働き手として頑
丈な体躯と、厳しい生活に耐える柔軟性を備えてい

*原文は土沢とあるが、下吉沢が正しい。

た。彼女は今でいう職業高校で一〇代の女生徒たちに裁縫を教えていた。彼女には裁縫の知識があり、よりよい教師を目指し、毎晩遅くまで勉強することを日課としていた。彼女の評判が広まったので、彼女は寺で裁縫教室を開き、大勢の生徒を集めていた。よねは夫より厳しい親であった。子どもたちは、寺のお客によい印象を与え、家族に恥をかかせないように礼儀正しく、丁寧に振る舞い、学校でよい成績を取るようにと教えられた。

人々は四季折々の仏教の祭日に、あるいは葬式に、あるときは助言を求めて、あるときは近所付き合いの挨拶に松岩寺にやってきた。祖学にお客があれば、よねはお茶と菓子でもてなした。祖学が外出しているときは、彼女自身が接客した。これらが、子どもたちの養育や、料理、掃除、洗濯、その他の電化以前の肉体的労働的な仕事に加えて、彼女がこなさなければならぬ役目であった。

祖学は鉄の鑄型から、寺で使うろうそくを作った。

彼は多めにろうそくを作り、それがたまと約八キロの道のりを歩き、大磯町に売りに行った。ときには帰り道、道端に捨てられた野菜を拾い、袋に詰めて持ち

帰った。それは彼が貧しかったからではない。これが彼のやり方だったのだ。彼の息子（後隆）は、半世紀を経過後、しばしばこの話をしていた。

私の父の寺の前には小川がありました。たくさんの腐った古い野菜が上流の山側から流れてくるのですが、農夫やそのほかの人たちが捨てた物です。これらは野菜のような物ですが、正確には野菜ではありません（笑）。堆肥にはよいのかも知れませんが食べるには向いていない物です。しかし彼はこれらの野菜を見つかるや否や直ちに料理してこう言うのです。「全ての物は仏性を持つている。お前たちはどんな物でも捨ててはいけません」。彼はどこへ行っても、食物がいかに尊いものであり、捨て去るべきものではないと語るのでした。

祖学はまた家計を補うために豚を飼った。僧侶が畜を飼うというのは衝撃的なことのようにではあるが、一般的に日本の仏教、特に曹洞宗は厳格な菜食主義ではなかった。一九七一年の講話で、鈴木俊隆はこの豚を思い出して語っている。

仏陀は常にあなたたちを助けています。しかし私たちはいつも仏陀の救いの手を拒んでいるのです。たとえば、あなたたちはしばしば何か特別なものを求めています。これはあなたたちがすでに与えられた宝物を受け取るのを拒んでいることを意味しています。あなたたちは豚のようなものです。私が若い頃、父は非常に貧乏だったので、たくさんの豚を飼っていました。私がバケツいっぱい餌を与える、彼らは私が立ち去ってからその餌を食べることに気づきました。私がそこにいる限り、豚はもつと餌をくれるだろう、と期待して食べようとはしないのです。私は非常に注意深く行動しなければなりません。もし私が早く動き過ぎると、豚はバケツをひっくり返してしまうのです。あなたたちがやっているのはこれと同じだと思います。より多くの問題を引き起こすためにあなたたちは何かを求めています。しかしあなたたちは何も求める必要はないのです。あなたたちは適当な量だけ問題を抱えているのです。これは不可思議なことです。人生の不可思議でしよう。私たちは多過ぎもせず、少な過ぎもしない、ちょうどよい程度の問題を抱えているのです。

静岡県浜松市に近い掛川で生まれた祖学は、數代にわたって布の染色用の竹の振り台を兼業で作っていた貧しい農家の出身であった。長男であったにもかかわらず、彼は一〇代の若さで家を離れ、仏教の僧侶として得度し、曹洞宗の禪僧逆質祖順（さかじゆん）の弟子となった。祖学は家族の生計を弟に委ねた。彼が家を離れたのは、より安易な生活や社会的な名声を求めたためではなかった。彼には、献身的で堅い決意が必要とされた。それは彼が出家した当時、明治時代（一八六八—一九二二）が始まっており、古い秩序が去り、仏教がすでに日本の未来を設計する者たちにとっては好ましいものではなかったからである。

浜松市郊外、天童川畔出身の僧侶の娘、嶋よねは独立心が強過ぎたために、最初の夫と離婚した。彼女は世紀が移り変わった直後、鈴木祖学と結婚した。彼らが出会ったとき、祖学は森町から少し北に行った所にある立派な古い寺、藏雲院に住んでいた。彼は一八九一年四月以来、この寺の住職を務めていた。結婚後間もなく、彼は寺の土地に関与するある事件で、寺の世話役たちとの争いに巻き込まれた。寺の業務を手助けしていたある信徒が、寺の土地の一部を、

祖学や寺の世話役たちに黙って、売り払ってしまったのだ。そこで対立が生じた。祖学は当惑した。寺院内の不和の責任を痛感して、彼は住職を辞任し妻とともに住みなれた寺を去り、より小さな寺に移った。その寺が、彼と家族が二六年間に渡り住むことになった、言わば異郷の地、松岩寺である。

トシが生まれる前に、祖学は寺の土地に梅の樹を植えた。芳浪とトシの二人の少年は、寺の周りの野菜畑の世話や庭木の剪定や樹木の手入れの手助けをするのが常であった。彼らは寺の周りの道路の落ち葉を掃き、花や燃え尽きた線香や酒の杯の供えられた石碑が立ち並ぶ、墓場の通路を清掃した。

トシは、父親が寺の周りや石庭で石を移動させる仕事を手伝うことが特に好きであった。彼は石、小川、樹木、カブト虫、昆虫や蝶の友達であった。彼は檜の樹の向こう側のお墓の周りの低い石垣に腰掛け、黄昏どきに、狐、狸、鹿やリスなどが出てくるのを待った。夜、母の背中を揉みながら母や兄妹たちに、寺の隣接地に動物園を建てる計画を話した。彼は大勢の人たちが動物園を見にこられるように、下の町からそこまで汽車を走らせたいと思った。

春になって水田に水がいっぱいになり、そこら一面に蛙の鳴き声が満ち溢れる頃、子どもたちは遊び戯れながら学校から帰ってくる。子どもたちの中には好んで蛙を捕らえ、肛門から麦わらを通し腹が破裂するまで息を吹き込み込む者もあった。最初にこれを見たときトシは激怒したが、どうしようもなかった——というのも、他の子どもたちは皆彼より大きかったからである。そこで彼は一計を案じた。トシは学校が終わるや否や、いち早く学校を飛び出し、長い竿を持って先に走っていき、水田の土手を叩いて大声を出し、両生類の友達を驚かせ、隠れさせようとした。

「ただ今帰りました」、夕方帰宅すると祖学は袋を下ろし、丁寧に辞儀をして大きな声で言った。「お帰りなさい」、声が聞こえた者たちは皆返事をした。妻や子どもたちは玄關にやって来た。ときどき彼はトシが特に好きな甘いものを持ってきたり、ときには妹たちにリボン等を持ち帰って驚かせたりもした。

子どもたちはもらった物はどんな些細な物でも、どんな衣類でも大切にした。冬の大雪の後で、父親が学校に彼らを迎えに行き一緒に帰宅するとき、子どもたちは深く感謝した。暑い夏の日の午後、戸外の鉄製の

浴槽に冷たい水をいっぱいに満たしてくれたとき、彼らはその中に入って大喜びで遊んだ。そしてときどき彼はトシに特別な贈り物をした。

侍が穿くスカートのような衣服は袴と呼ばれている。少年たちは学校で特別な儀礼のあるときには袴を穿いた。トシの母は彼に袴を作つてやる暇がなかったので、儀礼のある日は、彼は仲間から取り残されたような気がした。一九二二年の一二月に、それまでのトシの人生にとって最も意義深い出来事として記憶されている、非常に重要な儀礼が行われようとしていた。

明治天皇が崩御し、新しい天皇とその時代である大正、偉大なる正義の御代を祝福する式典が、トシの学校で行われようとしていた。

式の前日、祖学は息子のために新しい袴を持つて帰宅した。トシは興奮して、友達と同じようにして袴を穿いた。祖学はその穿き方は正しくないと言ひ、正式な伝統の様式で帯を結び直した。少年たちは誰もそのようには穿いていなかった。翌日の朝、寺の門を出るとすぐトシは立ち止まり袴を穿き直した。そのとき、彼は背後に何者かの気配を感じた。振り返ると父親が怒つてステッキを振りかざしながら、彼をめぐらして走ってくるのが見えた。トシは一目散に逃げ去つた。

トシは日常生活の基となる儀礼や、慣習、伝統が豊かな環境の下に育つた。仏教寺院、神社、学校、そして家庭も、毎年規則正しく行われる祭事を受け継いでいった。松岩寺は夏の終わり頃に行われるお盆の間は、さまざまな行事で活気づく。お盆には亡くなった人々の魂が地上に帰ってくるといわれている。正月は俊隆にとって特別嬉しい日であった。後年、彼は深い愛着を込め、正月について語つていた。

大晦日には檀家や隣人たちが大きな鐘を撞きにやつてきた。祖学は彼らに挨拶し、この日のために、中国の古典的な様式で書いた詩を元氣のいい声で朗唱した。そして餅を準備した。子どもたちと両親は、交互に夜遅くまで、臼の中の餅を杵でついた。翌日子どもたちは丸い餅を木の枝に付け、祖学とよねは赤と黒の漆塗りの盆にピラミッド状に積んだ丸い餅を本堂の仏壇に供えた。寺の中は一面が石油ランプと台所の薪の煙で満たされた。

子どもたちは古い飾り物、神棚、供え物、紙提灯や、不要になつた寺のお札を集め、新しいお札を用意する手助けをした。元日に彼らは両親とともにこれらの古くなつた物を近くの神社に持つて行き、他の者た

ちが持つてきた物と一緒に高く積み上げた。それから一四日の夜、焚き上げをするため神社に行った——昨年のお札を焼き払い、火の近くで餅を焼いた。

就寝時には、よねが日本、中国、インドの民話や仏教の言い伝えを子どもたちに話して聞かせ、お祝いを一層豊かなものにした。新年のかがり火が近づくと、歳神が全ての人を調べにやると言って、彼女は子どもたちの注意を引いた。歳神は、規則を破った者を処罰するために昨年の書類に目を通す。しかし、歳神はどんな不正の証拠も発見できない——古い物は焼却されてしまっているのです、人々は自分のしたことと、処罰されずに済むのである。

「申し訳ありません」。よねは怒った神に言うのである。「全て燃やしてしまつたので、あなたは私たちを取り調べることはできないのです。今年はいい行いをしよう努めます。細心の注意を払います。来年またおいでください」

夕方、兄や妹たちと寄り添いながら、トシは日本の有名な戦士のおとき話を母に繰り返しせがんだ。それは六〇年近く後、彼が生徒や仏弟子に伝えた物語である。

日本人は非常に頑なだというかもしれません。しかし、これは日本人の性格の一面にすぎません。一方では柔軟です。彼らは仏教徒として長い間このように訓練されてきたのです。日本の人たちは非常に親切です。私の母は桃太郎、すなわちピーチボーイ、という英雄の物語の歌をよく歌っていました。老夫婦が川の近くに住んでいました。ある日おばあさんが川で桃を拾いました。その桃から桃太郎が生まれました。桃太郎は非常に強いが、親切で優しい——理想的な日本の国民的英雄です。柔軟な心がなくては、真に強くはなれないのです。

* * *

学校生活は楽しくなかったのです、私は校庭で遊ぶより、むしろ教室に残っている方を好んだ。

*My life at school was not so happy
so I preferred staying in the classroom
rather than playing in the schoolyard.*

祖学はトシが学校で辛い目にあっていることを知っ

ていた。父親が彼の頭を剃るといつも少年たちは彼のつるつるした頭を平手で叩き、彼が僧侶の倅であることをからかった。そこで祖学は彼を前に坐らせ、廃仏棄釈——明治維新の仏教迫害について語った。廃仏棄釈とは「仏陀を捨て、釈迦牟尼（仏陀の名前）を破壊する」という意味である。

一八五八年、祖学が生まれた頃、日本の民衆は、数年前に現在の東京湾にやってきた「黒船」を見て圧倒されていた。数年の間に、政治家たちは政策の急激な転換を試みた。彼らは、日本をヨーロッパの立憲君主国のような近代的工業国家に発展させることにした。

そこで、新たな全日本的な国家宗教を必要とした。日本の至るところに存在していた神話的な、古代の精霊信仰である神道がその唯一の選択肢であった。こうして、天皇を人類創造の最高位者とし、従来より遙かに熱心に牛神様とみなす新しい神道が作られた。仏教の影響は大幅に制限された。天皇は、神道の名目上の長であったと同時に、一三〇〇年の間仏教徒でもあった。今や天皇は神道においてのみ、従来より遙かに高い地位に祭り上げられた。ほとどの時代でも、仏教寺院と神道の神社は密接な関係を保ってきたが、突如として仏教は外国の宗教であり、卑しむべきものである

とみなされ、仏教に対する厳しい迫害の時代が始まった。これは日本文化の中軸に加えられた攻撃であった。

しかしながら、仏教の僧侶が皆無実の被害者というわけではなかった。仏教寺院は、幕府の統治機構の構成要素をなす一部であり、それまで武士や貴族の教育に関わってきた。僧侶は人口調査に携わつてもいた。ある家庭の素性を知る必要がある際は、彼らの記録は仏教寺院で調べることができた。つまり仏教は、旧体制と協調していたのである。明治維新の指導者たちは古い階級組織——実際は、身分制度のようなものであった——を廃止し、平等な社会に置き換えると、宣言していた。結果は平等な社会の実現ではなく、権力の移行であり、仏教の僧侶や寺院はこの移行の矢面に立たされたのである。古代のインドでは、仏陀がカースト制度（身分階級制度）を否認したが、今や皮肉にも仏教は日本でカースト制度を支持したために災難に遭つたのである。寺の土地は奪われ、神社に与えられた。一八六八年の最悪の年には、無頼の徒が徘徊し、寺院を焼き払い、僧侶を殺した。今日、首を切りとられた石仏が、この年の凶暴な反仏教徒の猛威を示す遺物として、墓場に散乱している。最大宗派の一つであ

る曹洞宗は、貴族よりはむしろ農民との関係が深かったにもかかわらず、この肅正を免れることはできなかった。

日本の仏教は何世紀にも渡り、政治的指導者たちの意図に翻弄されてきた。僧侶は、江戸時代（一六〇〇—一八六七）には贅沢な生活をしてきた。仏教は大改革を必要としていた。そして明治時代はその過酷な改革をしたのである。この時代は、強靱で崇高な仏教の僧侶を輩出した。それは、彼らには社会的地位がなかったので、確固たる信念を持ち、苦難に耐える心構えが必要であったからだ。廃仏棄釈の余波は、トシの少年時代にもなお感じられた。仏教が軽蔑される風潮について、父親から歴史的な説明を聞き、友人たちが悪し様に彼を扱う理由が理解できた。

父親が語った話の一例は、以前、彼自身がいた森町の寺の近くの寺についてであった。その寺の境内には大きな神道の社があった。寺の門は古代の守護神の像とともに焼き払われ、その土地の所有権は神社に与えられた。神社を管理する僧侶は、寺と神社双方の管理人であったが、政府が、寺のあった所に浴場を建てるように命令した。彼は命令を実行し、政府の長官

が風呂を浴びにきた。彼の帰り際に、僧侶は言った、「仏、神の浴場で入浴するのは爽快でしょうね。仏陀はご親切にもあなたのためにこの珍しい浴場を作ってくださいだったので。仏陀のお慈悲に私は驚いております」。この言葉は長官をぎよつとさせた。一週間後、彼が視力を失ったとき、人々は皆、彼が仏教をぞんざいに扱ったせいだと言った。彼は、病氣治療に効能があることで有名な温泉のある、油山の仏教寺院に行き、沐浴してお許しと視力の快復を祈った。

私の父はときどきこのような話をしました。若かったので、私は大変感銘を受けました。私の友人たちはしばしば私をからかったもので、私は普通の生活ができませんでした。世俗の人々の中には、僧侶や若い修行者を笑い者にする者もいて、私は彼らを敵視しました。世の中には、仏教を敬わない人々がたくさんいました。政府の方針は仏教を弱め、神道を国教として推進しようというものでした。私が僧侶になろうと決心したのは、このようなときであったと思います。しかし、通常の僧侶ではありません。私は、仏教とは何か、真実とは何かということを人に教えることができる

ような、非凡な僧侶になりたかったのです。私は説教をするに値する立派な者になりたかったのです。それで私は立派な僧侶になる決心をしました。

小学校でトシは非常に尊敬できる教師に出会った。

彼はトシに強くなり感傷癡を克服するように、と励ました。トシは、もはや修行する弟子の僧侶がない父親から戒を受けることに、疑問を抱いていた。父親は彼にとつて大切な人ではあったが、少し弱過ぎるように思われた。彼はしばしば自分の寺を失ったことに不平を言い、寺を離れるべきではなかった、とこぼした。彼はまた自分の息子に執着し過ぎていた。トシは彼を師として見ることはできなかったのだ。

私の父は過剰なほどよく私の面倒を見ました。

そんなわけで、私は心の中で常に家族的な感情、過大な情緒、過大な愛情を抱いていました。小学校の私の先生は、このような点について私に警告しました。彼は常にこう言いました。「君は強靱にならなければいけない」

俊隆の成績はいつもクラスで主席であった。その教師は、彼に偉大な人間に成長するように、偉大な人間になるためには、困難を避けるのではなく、その困難を役立てるようにすべきであると語った。

彼は言いました。この地方には偉大な人間はいません。というのも、この土地の人々は東京に行つて一生懸命勉強しようとはしませんし、またこの土地を離れる勇氣を持つていないからです、と。もし成功したいと思うならば、神奈川県から出なければならぬ、ということです。そこで私は、この土地を離れる決意をしました。

トシは一一歳までに、その当時の彼の人生にとって最も重大な二つのことを決意した。僧侶になることと、神奈川を去ることである。「そのときの私の志は目標の達成という狭い考え方でしたが、私は家庭を去り、厳しい師の下で修行をしようとした」。

彼は、僧侶になることによつて、九代まで遡つて先祖を救済する、という世俗の仏教徒の信仰に感銘を受けていた。しかし彼はどこに行くべきか、誰について学ぶべきか。ときは一九一六年三月、彼はちょうど小学

校を卒業したところであった。

この時期はしばしば少年の経歴を決定付ける。商家の徒弟になるか、軍隊の学校に入るか、または他の訓練を受けるか、さもなければ田畑に出て父親と一緒に働き始める時期である。当時は——特にこの地域では——少数の者しか上級の学校には行かなかった。トシが父親の職業に就くのは通常のことではあったが、父親と共に仕事を始めしばらく経った後で他の所に行くのではなく、両親が彼を手放す気になる前に、遠く離れていく決心をした事は稀なことであった。

トシがこのようなことを考えていたときに、松岩寺に一人の客が現れた。師匠祖学に挨拶をするために、年に数回現れる僧侶であった。祖学の養子の玉潤鈴木祖温は、祖学の以前の寺であった藏雲院の住職になったところであった。彼はトシにとっては堂々とした男に見えた——背が高く、タフで自信に溢れていた。トシは彼に惚れ込んだ。

私は彼をよく知っていましたし、彼が大変好きでした。私が彼の寺に連れて行ってほしいと頼んだとき、彼は驚きましたが、そうしても構わないと言いました。私は父に、彼と一緒に静岡県に

行ってもよいかと尋ねました。彼が了承したので、私は一三歳のときに師匠の寺に行ったのです。

トシは、実際は満一歳であり、そのときはほぼ一二歳になろうとしていた。彼は、生まれたときにすでに一歳で翌年の正月に二歳になる、という戦前の数え方で一三歳と数えられていたのである。

トシはこれらの決定を自分独りだと思っていたが、実際その陰でかなりの間議論が交わされていたのである。彼の意図と両親の意図は、時期(タイミング)の点を除いては一致していた。両親は、彼が若過ぎると思い、翌年まで待つようにと言っていた。しかしトシはすぐに発ちたかった。彼は父親の祖学も、幼年にして、師匠の下で見習いを始める選択をしたことを指摘した。トシも父と同じようにしたかったのである。

こうしたことがあまりにも迅速に行われたので、彼の妹や異父兄は、彼が家庭から急に連れ去られてしまったように感じた。祖学とよねは余生を松岩寺で過ごしたくはなかった。祖温は彼の最初の弟子であるから、祖学から藏雲院を継承するのは正当なことであった。もしトシが祖温とうまくやっていけば、祖温から

藏雲院を引き継ぐことは可能であろう。その際、祖学とよねは藏雲院で隠世することができるのである。もしトシの父親が、彼が家を離れる前に彼を授戒させ彼の正師になったとしたら、祖温は彼の二番目の師匠となり、トシは藏雲院を継承する歴任にはならないであろう。いずれにしろ祖学はトシを指導するには年を

取り過ぎており、一般的に父親は自分の息子を正しく指導することはできないと考えられていた。諺にあるように、「可愛い子には旅をさせよ」である。そこでトシは、一歳で彼の最初の師匠、玉潤祖温と共に旅立ったのである。

— * 原文には一九一六年とあるが、一九一五年が正しい。
** 原文には法系とあるが、歴任（歴代仕職）が正しい。

師匠と弟子 1916-1923

CHAPTER 2

Master and Disciple

師匠と私が雨の中を歩いているとき、
師匠はこのように言うのであった、

「そんなに早く歩くな、
雨は至るところで降っている」

*When my master and I were walking in the rain,
he would say,*

"Do not walk so fast, the rain is everywhere."

祖温は森町で列車を降りた。彼の背後には新しい弟子——若く非常に小柄な帰依者——鈴木俊隆が従っていた。彼らは丘の上の寺に向かって田舎道を歩いていった。所持品を運びながら、トシは急な石段を上り、丈の高い古びた茅葺きの山門をくぐって境内に入った。一つの寺から別の寺へ移っただけのことではあるが、それは、彼の人生をすっかり変える環境に入っていくことも意味している。彼は百日安居修行の

最中に寺に着いた。数名の僧侶と若い修行者を含む八人の弟子たちが祖温の修行に参加していた。トシはその中でも一番若かった。寺院内には小さな子どもや女性はいなかった。特別大きくはないものの、藏雲院は松岩寺よりは、遥かに大きく堂々としていた。多くの畳や木の床の部屋、仏陀の像を祭った中央の立派な須彌壇と、両側にその他の尊い仏像を納めた祭壇のある広い本堂、本堂の背後の開山堂、美しい境内、広くはないが手入れのよく行き届いた庭園があった。トシは弟子たちが寝る部屋に連れていかれた。彼は、下に布団がしまつてある黒ずんだ木の戸棚に自分の所持品を入れた。

彼は今まで、このように厳しいスケジュールの下で暮らしたことはなかった。全員が朝の四時に起床し、禅の瞑想である坐禅をした。それから読経のお勤めがあり、続いて寺院全体の清掃が行われ、弟子たちは元

氣よくこれを実行した。彼らは塵を払い、箒ほうきで掃き、木の部分は濡れた布で拭いた。木の床は身体を曲げて雑巾を前に押しながら走って拭いた。寒い朝でさえ、彼らは着物と薄い下着しか身に着けなかった——僧侶の暖かい外衣の重ね着はしなかった。白い米の飯と生卵、味噌汁、魚と漬物の朝飯を済ませた後に、寺に滞在していた若い少年たちの中には学校に出掛ける者もあった。トシには一日中仕事があり、夕方にはさらに坐禅をしなければならなかった。彼は、かかとの上に尻を乗せて坐る、伝統的な正坐の代わりに、両脚を交差して坐る結跏趺坐けつかふせを習わなければならなかった。坐禅については、ただ坐って動かない、ということ以外には何も言われなかった。

トシはホームシックにはならなかった。というのも蔵雲院での活動は爽やかなものであったし、祖温に対する愛情もあつたからである。彼にやる気を起こさせるものは仏教ではなかった。「仏教に関しては、仏教とは何であるかという、おぼろげかつ単純な概念を持っていたに過ぎない。彼を鼓舞したのは祖温であつた。トシは祖温に焦点を合わせ、新しい師匠に一心不乱に奉仕した。二五年前に祖温が祖学に奉仕したのと同じように。

一八九一年に祖学が蔵雲院の住職になったとき、彼は寺の世話役たちに若い少年を彼の弟子として所望した。そして一四歳の孤児を受け入れたのであつた。祖学はこの少年を養子として授戒し、法名の玉潤たまづく祖温と、彼の姓である「鈴木」とを与えた。祖学は祖温を学校にやり、世紀の移り変わる前に彼は東京の曹洞宗の大学（駒澤大学林）に入った。

そこで三年間在学した後、祖温は東京の南、伊豆半島にあつた著名な僧侶の修行の寺、修禅寺に入った。そこで彼は偉大な丘宗潭かきむねについて勉強した。丘は祖温が在学当時、曹洞宗の大学の学長であつた。丘は著名な学者であり、数冊の仏教書の著者でもあつた。彼は坐禅修行と仏教教義、特に行動の指針となる「戒律」の研究の重要性を強調した。彼の師匠である、西有穆さいいう山の仕事を継承し、丘は大作「正法眼蔵」（其の仏法の眼の宝）の研究復活を唱える指導者となつた。この書は、一三世紀の僧侶で日本の曹洞禅の創始者である道元の代表作であり、その大部の深遠な著述は、今日、禅の哲学的表現の頂点とみなされている。伝統に従えば、玉潤祖温は彼を授戒した僧侶であり、彼の最初の師匠であつた鈴木祖学から嗣法しほふ（指導についての認可）を受け、その法系に籍を置いていたが、彼の仏教への理

解は丘宗潭の下で成熟した。祖温は修禪寺で開花し、その寺の役寮に昇進した。

一九一六年祖温は、初期の修行をした寺である、藏雲院の住職になるために修禪寺を離れた。こうして、祖学は一三年前に藏雲院を離れたものの、よき管理者としての評価を得た弟子の祖温により、彼の法系内に藏雲院を維持できたのである。彼の師匠の息子、鈴木俊隆が藏雲院に到着し、新たな人生を歩み始めたのは、祖温が藏雲院の住職に任命されて間もない頃のことであった。

祖温には厳しい威信があった。彼の存在は至るところに感じられた。彼の姿が見えないときでも、彼の存在は感じられた。祖温は祖学が望んでいた藏雲院で、堂々と振る舞っていた。

長身で強健な祖温は長年弓道を修練していた。ある日寺に来た客人が、壁に掛かっていた特別長い弓について尋ねたとき、祖温は弟子を呼び集めて弓道の実演を行うと宣言した。彼は自分の背丈よりも高い、長く太い弓を取り上げトシに藁的と的用意させた。仏壇に線香を供えるときと同じように、精神を集中し弓に矢をつがえ、弦をゆっくりと深く引き絞り、矢を放つ

た。そして少年たちを振り返り、彼らに弦を引き絞ってみるように言った。彼らの中には一〇代後半になった者もおり、決して非力ではなかったが、それぞれ試してみたものの、誰一人として引き絞ることはできなかった。そこで客人も試してみたが、やはりできなかった。こうして実演は終わった。

祖温はトシに無愛想に接した。主に無視していた一方で、彼が非常に若かったので、多少手を緩めてもいた。たとえトシが起床の鐘と共に起きてこなくても何も言わなかった。彼は起きようと努力したが無駄であった。毎朝のように彼は再び眠りに落ちてしまい、次に眼を覚ましたときには、本堂から心経を朗誦する声が聞こえてきた——「観自在菩薩 行深般若波羅密多……」。松岩寺では彼は、父が朝一人で、また祭式の際には他の僧侶と共に説経をするのを聞いていた。

トシが寺に来て間もなく、年老いた丘宗潭が長年の愛弟子である慧座けいざと共にやってきた。二人は祖温から恭しく丘老師、慧座老師と呼ばれていた。老師とは年配の僧侶に対する敬称である。彼の師匠が二人の老僧と共にいるのを目にし、また彼らが皆厳しく己を律す

る姿を見ることで、トシは今まで聞いたことのある偉大な只中にいる想いがした。彼の生涯の務めは彼らのようになることであつた。

「私がそこに居合わせたのは幸運なことであり、彼らに勇気づけられました。私にとって彼らのように朝早く起きることは困難でした」。これが新しい寺でトシが学んだ最初の教訓であつた。時間がかり、助っ人は誰もいなかったが、彼はあれこれと考えが浮かぶ前に、布巾を飛び出せば早起きができる、ということをついに発見した。いったん、コツがわかると、彼は決してとどまらなかつた。それは彼が終生続けた修行であり、教訓であつた。「鐘が鳴つたら起きること！」

* * *

業は誓願に変わり得る。

Karma can change into a vow.

一九一七年(大正六年)五月十八日、一三歳の誕生日にトシは新入りの僧侶として得度した。彼は戒(律)を授けられ、誓願し正式に、玉潤祖温の弟子となつた。彼はまた、着物の上に着る一組の黒い外衣、すなわち中冑式の長袖の外衣である衣と、水田に似た七

列に細かく縫つた大きな長方形の布で、僧侶の神聖な法衣であるお袈裟と、紐が付いたお袈裟の縮小版であり、お袈裟より略式の、胸当てのように肩から掛けて胸の上に着ける絡子を受け取つた。彼は祥岳俊隆という仏教徒の名前を与えられた。それは瑞兆の山頂という意味の祥岳と、彼の出生の名前である俊隆、優れた出現という意味の名前とが、組み合わされたものである。同僚の生徒たちからは「しゅんりゆうさん」と呼ばれた。祖温は彼を一へぼキユウリと呼ぶようになった。放心癖があり、空想的で、気まぐれな小さな弟子ということで付けられた、個人的なあだ名である。

祖温と共に暮らす生活は過酷なものであつた。冬でさえも、しばしば俊隆が一日中働いた木の床の上で、足袋を履くことは許されなかつた。少年たちの中には、祖温が見ていないときには凍つた床に接触する皮膚の部分を小さくするために、爪先立ちになつて歩く者もいた。祖温はこの少年が蔵雲院に來た理由は、祖温から寺を引き継ぎ、自分の家族に返すためだけではないかと疑つた。彼は師匠の祖学に対し、この小僧を訓練する義務を負つてはいたが、もし彼が來た理由が、そのような野心である限り、彼はよい僧侶には

なれないであらうと思つた。

加えて、祖温は、祖学が彼にとって厳格で非情な師匠であつた、という感情をいまだに抱いていた。祖温は、弟子であつた頃に比べ、円熟してきた——俊隆が愛しかつ忠誠を誓っている——父親、祖学について俊降を囁^{ささや}つた。トシは祖温の言うことをただ聞いている他なすすべはなかつた。彼は少年に対し、彼が若かつた頃、祖学がいかにしばしば彼の頭を叩いたかを語り（これは当時の一般的な弟子への修行法であつた）、そのために彼の頭がばかになつたと文句を言つた。祖温が一度いわずらをしたとき、祖学は彼を寺の門に逆さにして吊り下げたと言つた。

祖温は俊隆を村の高等小学校に通わせだが、適当な着物は与えなかつた。彼の着物は古くぼろぼろであつた。寺の近所に住んでいたある婦人が少年を気の毒に思ひ、端切れから新しい着物を仕立て上げたが、両方の袖は異なる模様になつていた。自分の外見に当惑した彼は、体育の時間でも病氣だと言つて羽織を着ていた。冬でも彼は決して十分に暖まることはなかつた。神奈川の彼の家庭は貧乏で、他の少年たちほどたくさんのものは持つてはいなかつたが、少なくとも母親は彼によい着物を作つてくれたので、このような不面目

な日に遣うことはなかつた。藏雲院はそれほど貧しい寺ではなかつたので、彼の忍耐力を試すという目的以外に、このような目に遭わせる理由はなかつた。

「ただ坐蒲に坐るだけが禅ではない」と言います。禅の師匠の日々の生活、人格や精神そのものが禅である、と。私自身の師匠は言いました、「部屋が埃だらけのたるんだ修行をしているような僧堂は認めない」と。彼は非常に厳格でした。眠るべきときに眠り、床を磨いて清潔に保つ、これが私たちの禅です。すなわち、修行が第一です。そしてその、修行の結果として、教えがあるのです。

不平を漏らし、家に帰すように要求せずに、俊隆は自分の誠実さを行動で示そうとした。日常の修行についての祖温の訓告を心に留め、俊隆は活き活きと全ての活動、特に掃除に力を注いだ。彼は黒ずんだ台所の鍋や、表面を綺麗にすることを誓つた。少年たちは皆台所で働いたが、彼らの中には掃除を怠ける者もいた。道元は料理人に対する指示の中で、台所仕事に自由を見いだすことの重要性を強調した、と祖温は言つ

た。そこで俊隆は、煙にまみれた直火料理による煤すすを洗い落とすことに打ち込んだ。

そのとき私は鍋の汚れを洗い落とすことに、あらゆる種の喜びを感じました。私たちは皆、このような方法で何らかの誓願を立てるべきです。そうすれば、私たちは喜びに満ちた心（ジョイフル・マインド、喜心）、大いなる心（ビッグ・マインド、大心）、親切な心（カインド・マインド、孝心）を見いだせるでしょう。誓願を立てたおかげで、掃除するとき、私たちは全ての人に対し、怒りではなく親切になることがわかるでしょう。これが菩薩の心です。

しばらくして、小俊隆の誠実な努力が大祖温を少し軟化させた。厳しく威圧的で、俊隆と彼の父親に対し批判的であり続けたものの、祖温はこの少年を真剣に受け止め、彼の動機を尊重し始めた。

ハネムーンの期間は終わった。今や祖温は幼な窓以上のものを俊隆に求めた。彼は俊隆が彼の教えの意図することに耳を傾け、狭い観念論を超え、仏法に立脚して、彼と接するように望んだ。

祖温は中国の師祖「葉山」が弟子に対し、彼は哲学者でも学者でもなく、禪の師匠であると強調した、という話をした。「自我を認めるな」と彼は弟子に言い続けた。しかし、彼の真意は、彼の言っていたことは真逆であり、自我を認めよ、ということであった。彼の弟子たちは彼を禪の師匠として受け入れ接するのではなく、何か他のことを彼に期待し異なる役割を果たすことを期待していたのである。

個性ないし人格が、師と弟子との交流こそが、禪の嗣法と眞の法系を成立させるのです。師匠と弟子の関係は私たちにとって極めて重要です。当時私はそれを理解していませんでしたが、師匠から与えられた最初の課題は「葉山」についてのこの物語であった。私は長い間師匠を認めることができませんでした。師匠を信じることは非常に難しいことです。

* * *

私たちは無我の心で修行すべきです。無我とは非常に理解し難いものです。もしあなたが、無我であろうとすれば、

それはすでに自我の心です。

無我の境地は

何もしようとしないときに

なり得るものです。

よい師匠について修行をしていれば、

自ずと自我から

脱していくことができるでしょう。

Our practice should be

based on the idea of selflessness.

Selflessness is very difficult to understand.

If you try to be selfless, that is already a selfish idea.

Selflessness will be there

when you do not try anything.

When you are practicing with a good teacher,

you will naturally be not so selfish.

少年たちが寺の池を掃除し、底から泥を掻き出していた。祖温は池の縁で仕事をしていた。俊隆は下に降りて小さな金魚を捕らえ、その金魚に小さな虫がついている事に気づいた。彼は学校でこの虫について習っていた。彼は魚をかざし、虫を指さし、皆に聞こえるように誇らしげに言った。「これはミジンコだよ！」

「黙れ！」祖温は彼に怒鳴った。

俊隆は祖温がなぜ怒鳴ったのかわからなかったが、

だいお後になつてから、彼は祖温が常日頃、俊隆に自我の兆しを見つけると、すぐに叱りつけることができると、いかに注意深く見守っていたか、を示す例として語っている。

よい実例を示して生徒を励ますのは一種の慈悲です。私が誇らしげに見せびらかしたときに、師匠が私に怒鳴ったのも、また別の慈悲であり親切なのです。

祖温には特別な教えや規範があったわけではなかった。彼の弟子たちは何を、どのようにして行った。祖温は常日頃非常に寡黙であつたので、弟子たちは祖温の振る舞いを見て、ほとんどの事は自分で学ばなければならなかった、と鈴木は言っている。しかし、彼らは祖温がしたことと全く同じ事をするわけにはいかなかった。神経質になり当惑した。鈴木曰く、実際彼らは祖温が叱責する声をだんだん好むようになった、という。それは、祖温から注意を受けたときは、何をすべきかがわかるからである。いかに精神を集中させ、無我の境地で池を掃除すべきかということ以

外には、祖温はどのように法要を行つたらよいかというような、より複雑なことについても何も説明はしなかつた。

少年たちはしばしば祖温と共に檀家の家庭へ法要に出掛けた。どの経を読むのか、どのように法要を進めるのかということは常に變化していた。鐘や木魚の打ち方のニユアンスや、どのようにいつお辞儀をしたらよいか、といったことは、あまりにもさまざまで微妙だったので、彼らはいつも間違つてばかりいた。彼らの前に嚴肅に坐っている家族の面前で、祖温は俊隆が鐘を叩いているのをじろりと見て突然唸るのであつた。「何をしているのだ」。そして俊隆の手から撞木を取り上げ、どのように叩くべきかをやつて見せた。これは決まりの悪いことではあつたが、少なくともこうした方法から教えを受けることはできた。後に鈴木は言つている。この種の学びから、いきなり新しく出た問題にどのように自らを対処させていくかを学び、状況に応じて対応する能力について自信を深めることができた、と。

ある夏の日の夕刻、こうした法要からの帰り道、少年たちはもてなしを受け、満腹のまま、進物の食物を持って、祖温と共に黄昏の道を歩いてゐた。祖温は戸

口で足袋を脱ぎ衣の袖に入れていたが、少年たちは足袋をはいたままであつた。彼らが木の茂っている場所にさしかかつたとき、祖温は少年たちが足袋をはいているから先に行くようにと言つた。この時期は毒蛇のまぢ腹が出る季節であつた。腹は大きな蛇ではないので、足袋はある程度の防御になつた。そこで少年たちは「はい」と返事をして、勇敢な僧侶になつたような気分分て先に立つて進んだ。

彼らが寺に着くと祖温は言つた、「子どもたち、なぜ坐らないのか」。彼らは何かあるとは思つたが、それが何であるかは思い浮かばなかつた。「お前たちが利口でないことはわかつていたが、これほどまでに鈍いとは（知らなかつた）。私が足袋を履いていないのに、なぜお前たちは履いているのか。そんなことくらいは気づいていなければいかん」。少年たちは深く恥じ入つた。彼らは師匠以上の装いをしないことになつてゐた。この微妙で間接的な意思伝達方法が、後に鈴木老師となつた鈴木が「言葉の裏側を聞くことを学ぶ」と呼んだものである。

祖温は寺に立ち寄る客をもてなすために、菓子や美味い物を手元に置いていた。少年たちはいつもひもじい思いをしており、こうした美味しい物をいつもく

すねていた。祖温は菓子を他の場所に隠したが、若い弟子たちはそれをすぐ見つけ出してしまった。あるとき彼は砂糖の壺を台所の高い棚の上に置いた。少年たちはそれを見て何が入っているかを察知した。彼らはテーブルを持ってきて、短い梯子をその上に置いた。一人の少年が梯子に乗り、もう一人の少年がその上に乗り壺を掴んだが、彼が下に着く前にバランスを失い床に激突し、壺を壊してしまった。彼らはきつく叱られた。

彼らは菓子を見つけると、祖温に気づかれないように薄片を切り取った。そして再び戻り、端っこを切り取り、最後にはいずれにせよ祖温に見つかってしまうのだからと、全て取り分けて平らげてしまうのであった。祖温はこのようないたずらで少年たちに腹を立てることはなかったが、もしその内の誰かが、独り占めしたと考えたときには、とても腹を立てた。

あるとき祖温が大きな柿を、熟させようと米びつの中にに入れておいた。彼が取り出そうとして来てみると、柿はなくなっていた。彼は誰が柿を食べたのかと聞いた。俊隆は知らない、と答えた。祖温は食べた者を見つけ出し、きつく叱りつけた——それは、彼が柿を盗ったからではなく、分けて食べなかったからであ

る。俊隆は自分が罪を被らなかつたことを悔やんだ。

鈴木が祖温の下で過ごした修行僧時代のお気に入りの話は、利己主義ではなく差別について、漬物が腐つたという教訓話である。藏雲院では漬物は一年中、特に冬場の新鮮な野菜の少ない時期に食べるために作られていた。キュウリ、人參、茄子、キャベツ、それに大根から作った漬物があった。大根の漬物であるたっさんの「たくあん」が、塩加減が悪く、腐ってしまった。祖温は報告を受けていた。彼は食物の事になると祖学と全く同じであった。彼はそれを捨てようとはしなかつた。「とにかく出さない」と彼は命じた。そんなわけで、食事のたびに腐った大根が出され、漬物は時間と共にさらに悪くなった。彼らはうんざりして、もはやたくあんを食べられなくなったある晩のこと、祖温が眠ってしまったのを見計らい、俊隆と数人の仲間たちとで漬物を庭に持ち出して埋めてしまった。

少年たちはいたずらがうまくいったと思つて喜んだ。しかし数日後の朝食時に、食卓についたとき、祖温が特別な料理を持ってきた——腐った漬物が死から蘇つたのだ！ 俊隆は勇気を振りしぼって最初の一口を噛んだ、それから二口目を。彼は腐つたたくあん

と思わなければ、食べられるということがわかった。彼はこれが無分別的意識についての初めての経験であつたと語つた。

もし私たちが師匠に身を委ねたならば、非常、日常を問わずあらゆる条件の下で、存在できるように精神を統御することに全力を傾注します。

実は漬物の物語には続きがある。少年たちは、少しはましになるかもしれないと思ひ、漬物を煮ることにした。煮たところ、遙かに食べやすくなった。祖温は言つた、「これは何だ。お前たちは麥わつた物を煮込んだな」。それから彼らは皆で煮込んだ腐つた漬物を一緒に食べた。祖温は自分ができないことを弟子たちに要求する事はなかつた。

* * *

ときに師は意地悪な方がよい、
愛着せずに済むからである。

*Sometimes it is better for your teacher to be mean,
so you don't attach to him.*

俊隆が威雲院に來た當時は、八人の少年たちが祖温について學んでいた。一年後にはわずか四人になり、二年目の半ばには残りの四人もまた去つてしまつた。祖温は俊隆にのみ識しかつたわけではなかつた。少年たちは、祖温の威圧的態度や、彼の下で耐えなければならぬ苦難故に一人また一人と去つて行つた。そしてついに俊隆と祖温だけになつた。彼は、一四歳の少年には過剰な責任を負うことになつた。學業、炊事、掃除、檀家の法要、寺での祭式の手伝ひに加え、祖温の世話や接客の仕事があつた。俊隆は友達がいないので寂しかつたが、彼は祖温から個人的に多くの注目を引いた。これは彼の思いどおりに行かないことが多かつた。例えば、彼は跪いて額が床に着くまで頭を下げ、掌を上にして手を伸ばす、五体投地をすることにある種の抵抗を感じていた。祖温が俊隆の抵抗感に気づき、その日からお勤めの終わりに仏陀に三回礼拝する代わりに九回礼拝するように伝えた。

ときには祖温と二人だけであるのが俊隆にとつて好ましい場合もあつた。彼はこれまで以上に庭で仕事することに成り、石工として、かなりの腕前であつた祖温とともに石を動かすことになつた。修善寺へ旅行したとき、ある僧侶が俊隆に鐘樓を指し示し、その土台

の石垣は祖温が若かつた頃築いたものだと言われてきた。この僧侶によると、ある石工の棟梁がこの石垣を点検して、これはアマチュアが築いたものだと云つたという。石垣があまりにも正確に造られていたからである。

祖温と二人きりでいるときに辛いことは、今や二人がどこへ行くにも俊隆が荷物を全部持たなければならぬことである。ある日数キロ離れた近くの谷で法要があつた。祖温は、俊隆に小さなトランクと掛け軸の入つた鞆かぶとを持たせて先に発させた。祖温は人力車に乗るために村に降りていった。俊隆は途中足を休めるために川岸に降りていき、蛙を捕らえては、放して遊んだ。夢中になつてゐるうちに、彼は祖温が人力車に乗り、橋を通りかかるまでとかが経つのを忘れていた。俊隆は祖温がそこを通り過ぎるまで隠れて待ち、それから丘を越える近道に回つた。彼はハーハー、ゼーゼー息を切らしながらやつとの思いで師匠の着く前に目的地に到着した。法要と短い講話が終わつた後で、彼らはたらふくご馳走を食べ、祖温は帰途についた。俊隆は家族からお布施の封筒を受け取つた。掛け軸はそこに置いていくので、帰りの荷物は軽くて済むだろ

うと思つていたが、その家の主婦は彼に西瓜と南瓜の入つた箱を渡した。そして言つた、「今日はとても暑いですが、西瓜でもいかがでしょうか」。彼はお礼を言い、贈り物を担いでとぼとぼと蔵雲院に帰つた。来る日も来る日もこの繰り返しであつた。

「お前が橋の下で遊んでいるのを見たぞ」と、俊隆の方を指を差しながら祖温は言つた。「へばキュウリめ、お前は一生懸命にやつてゐるが、私はお前を気の毒に思う。お前は全くのばか者だ」

俊隆は他の少年たちと同様に祖温の下を去りたかつた。しかし彼は今家に帰るわけにはいかなかつた。実際、彼の両親は彼が帰つてくることを喜んだと思つた。家に帰る選択肢はなかつた。彼は得度後、数回家族の元を訪問した。そして彼の父親は息子がきちんと法衣を着て、礼儀正しく挨拶するのを見て誇らしく思つた。俊隆は不平も漏らさず、戻る話もなかつた。

師匠はいつも私を「へばキュウリめ」と呼びました。私は自分がそれほど鋭敏ではないといふことはよくわきまえていました。私は最後の弟子でしたが、結果的に最初の弟子になりました。といふのも良質なキュウリは皆逃げ去つてしまつた

からです。恐らく彼らは利口過ぎたのでしよう。とにかく、私は逃げ出すほど利口ではなかったの
で捕まつてしまいました。仏教を学ぶうえで、私
の愚鈍さは有利でした。賢い人間が常に有利であ
るとは限らず、愚鈍な人間はときにその愚かさ故
に有利なのです。実際には愚鈍な人間も賢い人間
もいないのです。全ての人は同じです。

「浮気をするなよ、へばキュウリ」。俊隆が古い茶碗
を鑑賞していると、祖温が素晴らしい物にあまり執着
するなと彼に言った。彼は骨董品や工芸品を見る眼が
あつた少年に対し、この隠喩をしばしば使つた。俊隆
は、それはおかしな事だと思つた。寺には女性は住ん
でいなかったからである。しかしそれは祖温の言わん
としてゐることではなかつた。俊隆が美を鑑賞しては
ならないということではなく、それに捕らわれてはな
らないということであつた。祖温の言葉の選択につい
ての皮肉は、祖温の生活に婦人が関わつてゐたという
事実であつた。彼女は寺には住んでいなかったが、し
ばしば寺を訪問した。そして彼女は結婚してゐた。彼
女の名前は「丸七好（まるしちの好）」といつた。
森町の豆腐屋の娘で、藏雲院と関係があつた地元の米

穀商に嫁いでいた。彼女は賢く魅力的であり、自分の
想いを通すために他人に頭を下げるという評判だつ
た。祖温は、彼より年上で病弱な彼女の夫より、遙か
に魅力があり男性的であつた。当時祖温は四一歳で彼
女は二八歳であつた。俊隆は彼女を大変よく知つてい
た。彼女はますます長く寺で過ごすようになり、祖温
がこの少年をこき使う習慣を知つた。人々は祖温と好
が俊隆を養子のように扱うと言つた。彼らは俊隆に伝
言の取り次ぎをさせた。これは実際のところ彼の柄で
はなかつた。彼は米屋に到着してから手紙を自分の机
の上に置き忘れたことに気がついたり、数回手紙を失
くしたりもした。好は非常に怒り、祖温は癩癩を起こ
した。これが彼らの関係を善が知るようになった理
由かもしれない。もちろんこのような小さな共同体で
はどのような秘密でも隠し通すことは難しいことでは
ある。誰も彼らの逢い引きを止めようとはしなかつた
が、一般的には受け入れられなかつた。このことは祖
温が生徒を失う一因ともなつた。

ある日祖温は好への贈り物を持たせて俊隆を米屋に
やつた。そしてそのお返しに好は、食用の春蘭（はるらん）と一緒
に炊き込んだ、特別上質な飯の入つた木の桶を彼に託
して送つた。俊隆は寺に帰る道すがら美味しそうな香

りを嗅がなければならなかったが、味見をしてはいけ
ないと指示されていた。彼は彼らの仲介役を務めるこ
とは好まなかったが、この立場を受け入れ、師匠に対
する奉仕を続けた。森町周辺で彼らを取り巻く状況が
居心地悪くなり始めたときに、新たな事態の進展がこ
の状況を救った。

一九一八年、祖温は曹洞宗の上層部から、焼津の郊
外にある林叟院という名の寺の住職になるよう要請さ
れた。焼津は森町から東京寄りに北東八〇キロにある
海岸の町である。彼は両方の寺の責任者となるので
あるが、蔵雲院の彼の仕事のほとんどは、若い僧侶が
処理することができた。彼が林叟院に送られたのは、
彼を森町から引き離すためだけではない。林叟院はそ
れなりに重要な寺であり、若返りが必要としていた。
寺はこの地域の二百以上の末寺の上部に位置し、約
五〇〇軒の檀家を抱えていた。明治時代には下降線を
たどり、以後決して回復したわけはなかったが、それ
以前は修行で賑わった寺であった。寺は広く、禅堂
(坐禅の本堂)、鐘楼があり、所有する周囲の広い土地か
らは、小作農が年貢米を納めていた。

先代の住職は寺を正しく管理せず、寺の資産を売却

しながら、収支を合わせていた。寺は荒廃していた。
藁葺きの屋根は葺き替えなければならず、全ての構造
物の手入れも必要となっていた。裏手の部屋には狐や
狸が棲みついていた。その障子は何年間も修理され
ないままになっており、多くの檀家も他の寺に移っ
てしまった。林叟院はあらゆる点で立ち直りが必要と
していた、この仕事には長い年月を必要とするであろ
う。祖温は、曹洞宗の長老たちからこの仕事を達成で
きる人物だろう、との評価を得ていた。そしてこの職
が、祖温を森町からも引き離させるのである。

俊隆も彼と一緒に行く予定であった。彼は森町の高
等小学校を終えようとしていた。彼は、焼津から北へ
汽車で、短時間で行くことができる県庁所在地、静岡
にある一番よい中学校に通う予定になっていた。しか
し、ばつが悪いことに、彼は入学試験に落ちてしまっ
たので、祖温は彼に一年間浪人するように言った。林
叟院に滞在しながら、次の試験に備えて勉強するため
だ。

俊隆の助けを得て、祖温は林叟院を見苦しくない状
態に戻し、末寺との関係を改善するための活動を開始
した。檀家も戻り始め、寺は社会的にも精神的にも活
気を取り戻した。祖温は年貢を受けるときには農夫を

睨みつけ、もし寺が正当な年貢を得ていないと感じたときには不平を並べてまでも、寺領の小作農に、米の収穫の適当な分け前を寺に確実に支払わせるようにした。彼はその大きな身体、尊大な態度、そして厳格な作法で周囲に知られていた。林叟院のすぐ下にある坂本村の住人たちは、近隣の人々に対する評判の回復を喜び、祖温に対して、そうした僧侶にふさわしい敬意を払った。

祖温の下へ少年たちを修行に出す家庭も現れ始め、もはや俊隆は師匠と二人だけではなくなつた。祖温の甥、祖光（三郎）もやつて来て、自分の叔父を師匠とした。岡本憲道という名の新弟子もおり、俊隆は彼と親密になつた。好の二人の甥もまた祖温について学び始めた。つまり、彼女の家族は好と祖温の関係を気に掛けていなかったのである。俊隆は今や先蓋格の雲水（雲と水、留まらず、執着しない、すなわち修行者）であつた。祖温は高等教育を受けており、恐らく俊隆の進学について気の毒に思つていたのであろう。彼は少年たちのために不定期的ではあるが、日本史と中国の古典の授業を始めたからである。彼は少年たちに古い漢文を読みみかつ書くことを教えた。これは彼らが寺に通つてく他の教師について仏教経典、漢詩および書道を勉強

する準備に役立った。

毎朝彼らは農家の先まで寺の参道を、あたかも舗装してあるかのごとくきれいに掃除した。彼らは上の林から薪を集め、祖温がそこに木を積める手助けをした。春には、彼らは山腹の濃緑の茶の生け垣から、上部の柔らかい茶の葉を摘んだ。彼らは毎日掃いたり拭いたりして寺を清掃し、庭園と僧侶や檀家の遺骨が葬られている墓場の手入れをした。

ある日俊隆の父親が林叟院に現れ祖温とお茶を共にした。彼は俊隆を病気の母親の見舞いに帰宅させるよう依頼した。母親はひどく彼に会いたがつており、祖学はもし彼女が息子に会うことができないと病気が快復しないのではないかと心配していた。祖学もまた、大袈裟にはしなかつたものの彼に会いたかつたのである。しかし俊隆が父親と共に帰宅してみると、よねはすぐに快復し、「病氣」は単に彼を家に帰すための策略であつたことは明らかであつた。

俊隆の両親は彼が再び家で暮らしたいかどうかを尋ねた。寺院の情報網を通じていろいろなることを聞いていたので、彼らは息子に対する祖温の扱いを心配し、好との関係についても快く思つていなかった。また俊隆が中学の入試に失敗したことに失望していた。祖学

は進学の機会に恵まれなかったため、息子がよい教育を受けることを望んでいた。そのためには森町の学校は適当ではなかった。森町の生徒たちは一般的に上級学校には進学しなかったからである。

俊隆は師匠の元に留まることを希望した。彼が立派な若い僧侶になっていたため、あれこれ議論することは困難であった。彼の態度から、彼が虐待を受けている証拠らしきものは見られず、彼の両親はなお、将来藏雲院を引き継ぐためには、彼が家を離れて修行をすることが最善であると信じていた。彼らは息子俊隆と僧俊隆との感情の板挟みになって悩まされた。彼は両親のために決断を下した。数日間の滞在の後、彼は両親に別れを告げ林叟院に帰った。

祖温は生徒たちがしばらくの間、別の師匠、臨濟禅の師匠について勉強するように手はずを整えた。生徒たちが出発する前に、祖温は簡単な助言を与えた。初心者的心を忘れるな、特定の修行の型にこだわるな。曹洞宗の寺では曹洞の流儀で修行しなさい、臨濟宗の寺では臨濟の流儀で修行しなさい。常に初心者であるように。

彼らは全く異なる型の禅を学んだ。これは「両親が

生まれる以前のお前の本来のありさまほどのようなものか（父母未生以前の本来面目）」といったような質問を提示する、公案と呼ばれる瞑想の教えに辛抱強く集中することによって、突然の啓発である悟りを得ることを強調するものであった。少年たちはこの難問への挑戦に興奮した。彼らは坐禅の間も、そして一日中公案に精神を集中しなければならなかった。そして彼らは公案について、互いに話をすることは許されなかった。俊隆は厳しい臨濟の修行には耐えたが、公案には苦勞した。毎朝毎晩、坐禅の間に師匠を訪ねる（独參の）順番が回ってくると、師匠の前で礼拝し、公案の詩句を朗唱し答えを提示するのである。ある日一人の少年が合格した。次に別の少年が合格し、最後には俊隆を除いた少年たち全員が公案に合格した。彼は慌てた。帰る日になっても、彼はまだ公案に合格していなかった。その日は師匠との独參はなく、ただ修行の修了式だけが行われた。儀式の直前に俊隆は師匠の部屋に駆け込み、大声を上げて公案の答えを提示し教師を満足させようと最後の努力をした。

「よろしい！ よろしい！ お前は合格だ」と師匠は言った。俊隆は満足したが、後になって彼は、実際には公案を理解しておらず、師は単なる親切心から彼を

合格させたにすぎないと信じた。彼は終生公案を讀み、考察を続けたが、彼はこの経験から公案の修行について、不満の感情を抱き続けた。

丸七好の夫が死んだ。彼女は一〇代の息子の世話を家族に任せ、林叟院に移った。彼女は正式に、しかし同時に秘密裡にそうしたのであった——正式には、彼女が尼僧の名前のような響きを持つ新たな名前「春好」を名乗り、彼女が林叟院に居住する間、彼女の身元を引き受ける（保証人の）焼津の家庭に仏弟子として養子縁組みをしたからである。秘密裡とは、彼女はできる限り寺の中に留まり、外部とは付き合わなかったからである。祖温は二人の居住部を僧侶たちに立入り禁止とした。二人は食事を共にし、弟子たちから離れ、夕方には暖かい火鉢を囲んで坐った。彼女は特に友好的であつたわけではなかつたが、彼女の存在は寺の雰囲気改善し、祖温自身も柔軟になつた。食事もまた改善された。

誰もが好のことは知っていたが、彼らは彼女が尼僧なのか、料理人なのか、あるいは祖温の愛人なのかはわからなかつた。彼らがわかつていたことは、祖温が物事を適切に処理する男であり、好の寺院内での住居

も承認を得た伝統的な方法で、慎重に準備されたということである。彼女は林叟院の大黒様として知られていた。

大黒様は七福神の一人である。彼は家庭や寺院で、仏壇にも神壇にも祭られておらず、その祭壇は台所か玄関に置かれる。伝説によると、他の六人の福の神が一〇月に行われる神々の集いに出席するため出雲に行く際、彼だけは家に留まっているという。大黒は恵みを象徴し、米俵に坐って描かれている。江戸時代には仏教の僧侶は結婚しなかつたが、寺院は忙しい所であり、僧侶は多くの場合、多分に世俗的であつた。婦人たちは寺に住み始め、そこで働き、ときに情事に従つた。彼女たちはそもそもそこにいるべき者とは考えられなかつたので、顔を見せなかつた。この種の婦人はしばしば大黒様と呼ばれた。

* * *

私は自分の足と黒い坐蒲しか信用しません。

私の足は常に私の友です。

しっかりと足で立っている限り

私は迷うことはありません。

I don't trust anything but my feet

and my black cushion.

My feet are always my friends.

When I am really standing on my feet I am not hot.

俊隆は列車に坐り居眠りをしていて、一九二一年のことである。彼は一六歳で、濃紺の学校の制服を着ていた。彼の脇にはバックバックが置いてあった。彼はある善良な婦人の夢を見ていた。祖温はときどき「一人の善良な婦人」について語った。年老いた婦人で祖温は年に一回その婦人の家で法要を行った。彼女は息子や家族のための雑用をして終日忙しく働き、そしてお経が始まるや否や直ちに居眠りを始めるのであった。祖温の読経中、彼女は居眠りをしていたものの、適時に鐘を鳴らすことは決して忘れなかった。彼女は自分の個人的な問題に執着しなかったので、決してミスを犯さなかったのだ、と祖温は言った。彼女は眠そうに見えたが、注意は怠らなかつた。僧堂にはこのような話が多くあり、俊隆を勇気づけた。彼自身も目覚まし時計を使わず、どうしたら時間とおりに起床できるかということを学んだ。これは彼にとつては天啓であった。この事から彼は、身体と心とで自己管理することを学んだ。列車が駅に止まると、彼は目を覚まし列車を下りた。

一九一九年俊隆が一五歳のとき、祖学とよねは、祖温との約束を破棄し、息子を林叟院から松岩寺に連れ戻した。このときは祖温も俊隆も同意した。彼の両親は、先行き俊隆が藏雲院を手に入れても、また入れなくても、そのために彼を犠牲にすることはないと考えた。よねは、息子がしばしば不当な扱いを受けている、と不満を抱いていた。祖学はそれほどはつきりとは言わなかったが、彼が見る限り、祖温は俊隆を厄介者であるかのように扱ってきた。三年間で充分であるう。

俊隆は一流校の開成中学の入試に合格し、汽車で通学した。彼は三歳年下の級友たちと共に、森町で勉強した課程のほとんどを繰り返し勉強しなければならなかった。これは当時それほど珍しいことではなかった。田舎では、小学校の課程より上のものは全て高等教育であり、進学した少数の若者たちは可能な限り、それに従った。

開成で授業がないときは、俊隆は父の寺の仕事を手伝い、檀家の家庭で法要を行い、受け取った金封筒を父親に手渡した。家庭で彼は特別扱いを受け、彼はこれを受け入れた。彼は僧侶として、また男性として、こうした処遇に慣れていた。母親は彼に妹たちとは別

の、特別なご馳走を作った。

彼は初めて、僧侶ではない、普通の生活を送っている少年を友達に持った。暑くなると、彼は寺の池で学友たちと涼をとった。彼はボート部に入った。ある日彼の知り合いの少年が、ボートの転覆により溺死した。俊隆がこのショックから立ち直るにはしばらく時間が掛かった。彼は全く泳げなかったのである。

友人たちは寺に立ち寄り、植物を交換し合った。あるとき、彼は非常に大きな木を持ち帰ったので、運ぶのに手伝ってもらわなければならなかった。雪の降る冬の日の放課後は、学校の鞆を持ったまま、寺に入る前に周りの草木の枝や葉に積もった雪を払いのけた。

一〇代の終わりに近づいても俊隆の欠点は変わらなかつた。彼はもともと親切ではあつたが気が短かつた。幸い怒りが爆発するときも鎮静も速やかではあつた。彼は議論を始めるまでは極めて冷静であつたが、始まると癩癪を起こしやすかつた。

俊隆は在家の人々が、寺にお供えとして贈る、高価な品物の砂糖には目がなかつた。俊隆はいつも砂糖の入れてある大きな壺を奪い、砂糖が底をつくくと、水を

入れて汁を飲んだ。母親に禁止されてからは、出来たての砂糖水を作るために砂糖の缶を机の脇に隠した。

しかし俊隆の最も悪名高き弱点は放心癖であつた。彼は教科書と自分の心以外のものは全て失くしてしまふのであつた。誰でも洋傘を失くすが、俊隆の失くす方は記録的なもので、主に汽車の中で失くしていた。あるとき、母親が徹夜して彼にコートを作ってくれた。彼女は彼が革靴を履き、新しいコートを着て、開成に行く汽車に乗るために平塚に向かつて丘を下りて歩いていく姿を眺めた。彼はその晩コートなしで帰宅した。

私には放心癖がありません。生来私は忘れっぽく、随分と努力をしましたが、一向に効果は上がりませんでした。私は数え一二歳で師匠の下に行つてから、努力を始めました。それでも私は非常に忘れっぽかつたのです。しかし着実に努力することにより、物事を自己本位でやる事が避けられるとわかりました。修行や訓練の目的が、単にあなたたちの弱点を矯正する事だけにあるとすれ

*原文には一六歳とあるが、戦前の年齢の数え方により、一七歳が正しい。

ば、恐らくあなたたちの癖を変えることは不可能であると思います。たとえそうだとしても、そうした努力は必要です。なぜならばそうすることに、あなたたちの個性が鍛えられ、自我が抑えられるからです。

六週間の夏休みが始まり、両親は驚いた。俊隆が祖温の下に戻るために、焼津行きの汽車に乗って出発したのである。彼は林叟院と藏雲院で、ときには授業を放つてまで、手伝えるときはいつでも出掛けていくのであった。俊隆は祖温の下で学ぶことを断念するつもりは全くなかったが、厳しい寺の修行から離れて生活することから、新しい視点を持つようになったのである。寺から離れていたことにより、そしてその欠如が、寺での修行生活がいかに素晴らしいものであったかを実感させた。祖温は道元の教えである初心者の心を常に強調していたが、俊隆がこのことを初めて経験したのがこの時期であった。それは彼が初心を失っていたからである。この時期、彼は純粹さにすぎり、禪に執着する一種の誘惑を経験した。彼は新しい自意識の中に仏教を認め始めたのである。

私たちが幼い頃は、たとえ一六、七歳になっても皆無邪気な仏陀でした。しかし禪は無邪気な心にとつて、往々にして危険なものになる可能性があります。そのような心は禪が何かよいものないしは特別なもので、それによって何かを得ることができると思いがちです。こうした態度は災いに導かれやすくなります。無邪気な若者は彼の仏性には無関心で、代わりに無邪気という觀念に執着し、自分自身に問題を作りやすいのです。私たちには無邪気な心ではなく、初心者の心が必要で、初心者の心を失わない限り、私たちは仏教を保ち続けます。もし私たちが不変の天然の心を知っているならば、私たちは初心者の心の無邪気さを信ずることができません。同時に私たちはこのような考え、ないしはかなる觀念であっても、それに執着することによって、地獄に滑り落ちないように用心すべきです。

祖温は、自分たちが特殊な人間であると考えている、俊隆や彼の同僚の僧侶たちに対して彼独自の扱いをした。時折彼は弟子たちに言った。「臭い奴め、自分の下着を洗え！」

学校で俊隆の得意な科目は英語であった。彼は英語に秀でていた。彼はそのひねくれたあだ名にふさわしく、外国のものに常に興味を持っていた。

“cucumber”は日本語でキュウリ（胡瓜）、トルコ伝来の瓜である。彼は英語が非常によくできたので、森町の吉川という医師が、彼の息子の英語の家庭教師を彼に依頼した。俊隆は藏雲院に来た初期の頃から吉川家を知っていた。彼は医師が所有する森を巡回し、異状がないことを報告しに帰ってくるのが常であり、その仕事を楽しんでいた。吉川医師は俊隆の後援者となり、彼に金と好意的な忠告を与えた。俊隆が肋膜炎にかかったとき、医師は彼が快復するまで自分の家に置いた。吉川医師は、俊隆が病気の間は、祖温と共に林叟院に滞在することを望まなかった。それは彼が祖温に従順に仕え、自分を顧みないからであった。俊隆は高熱で咳込みながら帰宅し、昨夜は遅くまで祖温が碁を打つ間中、煙たい火鉢の世話をしたと報告するのであった。

彼が一七歳の初秋の一日、俊隆は朝のうちに藏雲院を発ち、林叟院に行く汽車に乗るために森町の駅に向かって歩いた。わずかの差で汽車に乗り遅れたため、

彼は歩いていくことに決めた。彼は約一二〇キロメートルの全ての道のりを歩き、その夜到着した。俊隆の若い頃はたつぷりと歩いた。この点においては、彼は現代人よりはむしろ彼の先祖と共通するところがあつた。歩くことで、彼の両親、師匠や因縁（カルマ）と同様に彼の人となりが形成された。それでも彼はひと昔前の世代の方が健脚であつたと見ていた。

彼の父親より前の時代は、わずかに貴族、侍、および重要な役人しか馬に乗り駕籠を利用することはできなかった。その他の人は誰でも歩いた。彼らは町中や町の近くに行く場合だけでなく、町から町へ行く場合もそうした。俊隆は歩きに関する伝説を聞いて育つた。年老いた婦人たちが歩いて東京に行き、天皇のために祈りを捧げたとか、僧侶が八〇キロ歩いて山頂に行きお経を読んだ、という話を聞いた。彼は仏陀の弟子、日蓮の物語が好きであつた。目蓮は学者であつたばかりでなく、まるで空を飛んで移動しているかのごとく非常に多くの場所に現れた、ヨーガの歩行者であつた。

俊隆は父親が歩いた話を好んでした。俊隆が林叟院に滞在していたある土曜日、日本の現代史上最も劇的かつ悲惨な出来事が起こつた。九月の初日は伝統的に

凶兆の日であるが、一九二三年九月一日の土曜日に関東大震災が、東京と横浜を壊滅した。その日は暑く、風の強い日であった。これらの都市の建物の半数以上が、地震と地震に引き起こされた火災により、完全に破壊された。一〇万を超す人が死んだ。揺れは平塚でも強かった。祖学は地震が起きたとき風呂に入っていたが、風呂の水が前後にばちやばちと揺れた。奇妙な蝶が彼の周りを舞っていた。彼は俊隆が死んだ暗示だと確信した。間もなく地震の凄まじさが寺に伝わってきた。空は煙で満たされていた。

鈴木家はひどく取り乱した。その朝、俊隆は林叟院を発つて帰宅することになっていた。彼らは、俊隆の

乗った汽車が地震の起こったとき、ちょうど箱根のトンネルの中にいた可能性があるかと推定した。壊れたトンネルは閉鎖された。恐怖が彼らの心中を駆けめぐった。通信と交通は切断されるか、あるいは緊急用として、その使用を制限された。家族は俊隆の到着を待った。彼らは手紙を送り何日間も返事を待った。ついに祖学は歩いて出発した。よねも一緒に来たかったが、体調が思わしくなかった。彼は箱根の山を越え、はるばる焼津、林叟院にやって来て、俊隆が元気でいることを知った。彼は一日を息子と共に過ごし、それから一二〇キロの道のりを歩き、家族によいニュースを知らせに帰った。

進学 1924-1930

CHAPTER 3 Higher Education

間違った取り組み方でも

時間の無駄ではない。

Even a mistaken approach is not a waste of time.

一九二四年四月、鈴木俊隆はほぼ二〇歳になっていた。開成中学の最終学年を飛び級し、彼はこのとき東京にある曹洞宗の大学予備校の新入生として、寄宿舎で生活しながら勉強に励んでいた。年齢の面では、彼はなお後れをとっていた。というのも、始終祖温に奉仕して二つの寺の仕事を手伝っていたからである。しかしこの事が不利になるとは思われなかった。この学校は曹洞宗の大学の付属校であり、当時政府の規定により必要とされていた学位を取るために、日本全国から曹洞宗の僧侶たちが集まっていたからである。

松岩寺は学校から遠くはなかった。ある日曜日、帰

省を終え学校に帰る途中、骨董品の陶磁器を売るよい店が数軒あると聞き、騒々しい港町の一郭を見ようと、俊隆は横浜で汽車を降りた。準軍隊風の学生服を着て、ときどきキャンディーを食べながら、思いつくままぶらぶらと歩いた。一つの店からもう一つの店へ、一つの街路から次の街路へと進み、やがて彼はあらゆる種類の輸入品——衣類、靴、宝石、レコードおよび書籍など——を展示していた店先にやってきた。彼はサンフランシスコの写真が載っていた雑誌を長い間眺め、下の説明文を注意深く読んだ。それから彼は、輸出向けの日本品のたくさん並べられていた舗道のテーブルの傍らを通りかかった。並んでいるものは茶碗、絵画、洋傘、玩具、それにテーブルなど、どれも味わいのないけばけばしいがらくたばかりであった。彼は日本が世界に提供する物はこんな物かとひどく当惑した。これは真の日本的な物ではない、見掛け

倒しの似非日本品にすぎない。

俊隆は眞の日本品と思われる物は何かと考へた。それは手工芸品、家具、掛け軸、陶磁器など、日本文化や伝統を体現しているもので、それらを購入した家庭に調和をもたらすようなものである。そのときちよつとした考へが閃いた。もし自分が外国に行き、日本の最悪の物ではなく最高の物を外国の人たちに持つていくことができたなら素晴らしいのだが——他國の文化に適合できる眞に日本的な物を。これを実現する最善の方法はまず禪を完全に理解し、そのうえで禪を外国に移植することであろう。恐らく、と彼は思った。恐らく私はそれを実現できるだろう。

七月初めのうだるように暑く鬱陶しい日曜日の午後、俊隆は友人の勳藤と荒木の二人とぶらぶらと時間をつぶし、汗をかき団扇をばたばたさせながら、甚を打った。彼はこのとき二〇歳を過ぎた大人——日本の人口の過半数を占める年齢——に達していた。しかし学校では彼らはまだ子どもであり、入学前よりも責任は軽かった。当時は自分の学業に専念していれさえすればよかつた。俊隆は、炊事場の向こうの地下の貯蔵室から西瓜を盗んでこようと提案した。仲間の僧侶た

ちも喜んで賛成した。

俊隆は地下室の電灯をつけ、それから貯蔵室の灯をつけた。彼は中に入って背後のドアを閉めた。低い天井の下には豆腐の桶、漬物の樽、野菜、魚、肉、果物の箱がいっぱい詰まった棚があつた。彼は一番端の壁際にあつた立派な熟れた西瓜を取り上げた。そのとき彼はぞつとして立ちすくんだ。階段を下りる足音が近づいてきたのだ。隠れるところさえなかつた。呼び掛ける声があつた。沈黙。それから刻また一刻、俊隆は暗闇の中で西瓜を抱えていた。彼はしばらく待つてから戸口の方へ歩き始めた。突然左目の上に突き刺さる痛みを感じた。彼はよろめきながら悲鳴を上げ、西瓜を落とし、慌てて身体の平衡を保ち、手を伸ばした。彼は鋭く冷たい鉄と血に触れた。天井からぶら下がっていた鉤に引つかかつてしまったのだ。彼は自力で脱出することができず、もがくたびに状況が悪化させた。ついに呼吸は絶えだえになり、彼は彫像のように痛みに立ちすくみ、身動きもできず、血は制服に滴り落ちた。彼は再び階段を下りてくる足音を聞くまで一時間以上も待った。そして助けを求めた。

彼の逸脱行為に対し叱責する者はなかつた。彼と同様、誰もが彼の左目が見えなくなるのではないかと心

配した。失明はしなかった。鉤は臉を通り眉の上に抜けていた。その晩彼は傷口を縫い、海賊のように包帯を巻いてベッドに横たわり、その日の出来事を思い出していた。痛かったが、何か不思議なことが起こったのだ。後日彼が語ったところによると、このとき彼は重要な覚醒の経験をしたという。彼は血を滴らせてそこに立っていたときに感じた、澄み切った、説明のできない、時間を超越した静穩に立ち戻りたいと思んだ。そのとき彼はそれが偉大な悟りであると思つた。その後彼は、それはただの小さな悟りであり、再現は不可能であることを知つた。昔は昔、今は今である。以後、彼は一生左目の上に粹な小さなアーチ型の傷を持ち続けることになる。

一九二五年一月中旬から一九二六年二月中旬まで、俊隆は静岡市の顕光院で修行をした。祖温が、加藤道順老師の指導の下に、首座しゆざを務めるために彼を送つたのである。顕光院は禅の修行の中心となる、正式な百日安居修行を用意した。この修行の重要な行事の一つは法戦式である。これは大勢の僧侶や教師のいる主な修行道場で首座となるのとは異なつていた。顕光院には加藤老師と数人の新米の僧がいただけで、俊

隆は修行中も学校に通わねばならなかった。

多くの僧侶は、息子を父親の寺の後継者に近づけるためにする簡略化した形式で、数日間自分の寺で儀礼の仕草をするだけであつた。しかし俊隆は完全な一〇〇日間の首座を務めた。九人の年長の僧侶が法戦式にやつて来た。ある者は修行に参加し儀式に弾みをつけるために数日前に到着した。祖学と祖温も、数人の弟子たちと共にその中に加わつていた。

二月一八日、儀式の当日俊隆は彼ら全員の前に歩み寄り、礼拝して竹篋しやくけつを高く掲げ、自分はこの場にふさわしくない、という伝統的な詩を朗唱した。「龍よ、象よ」「我に質問を与えよ」と言い、彼は朗唱を終えた。彼は竹篋で木の床をこつんと衝いた。伝統的な法戦式で、仲間や古參の僧侶から質問を受けるときが来た。返答は古典的なもので、この日の儀礼のために首座があらかじめ記憶したものであつた。しかしタイミング、話し方、身のこなしや音声——全てはこの儀礼がどのようなものになるかを左右するものであつた。この日は彼のための一日であつた。彼が儀礼の出来映えを決めたのである。

その後には仰々しい祝辞が披露された。もはや俊隆は新米の僧侶ではなく、僧侶の社会に新たな若い友人と

して迎え入れられたのである。

* * *

私たちは頭脳だけでなく
温かい心をもつて学ぶべきである。

*We have to study with our warm hearts,
not just with our brain.*

一九二六年四月、二一歳の年に鈴木俊隆は大学予備校を卒業し、曹洞の大学に移った。この大学はちょうど名前を駒澤大学と変更したばかりで、広範の学問を提供する総合大学となっていた。彼はほとんどの時間を勉学に当てていたが、定期的に焼津に遊び、祖温と共に過ごした。それと同時に、東京で彼の周囲に溢れている、広大で魅惑的な世界を無視することはできなかつた。

俊隆は友人たちと共に映画を見、テニスや書を楽しみ、東京湾にボートを漕ぎにいった。彼は中国の占星術を研究したが、自分のことをそれほどたくさん知る必要はないとして、最終的には放棄した。たとえそれが真実だとしても、仏教の修行にはならないと感じたからだ。彼はコーヒーショップに行き、「危険思想」の雰囲気の中で学校に通った。彼は好奇心と人間性が

豊かに発育するちょうどよい時期に、東京で生活したのである。

二〇年代の東京は伝統的なもの、外国のものと実験的なものが不安定に混在していた——そこは、日本が突如として孤立から脱却して以来、古いものと新しいものが互いに激しく引つ張り合う綱引きの舞台であつた。ビジネスマンは洋服を着用し、婦人たちは洋服と伝統的な着物双方を着た。外国人の旅行者はもはや全く珍しくなくなつた。トロリーバス、タクシーや乗用車が人力車の間を走り、コーヒーハウスやパチンコ店が蕎麦屋に隣接していた。芸術や文学が新しい領域に割り込んで来た。時折けばけばしいロンドンやニューヨーク調の衣服を着たモガやモボ（モダンガールとモダンボーイ）が見掛けられた。年老いた人の中にはこの時代をエログロ・ナンセンス（エロティシズム、グロテスク、ナンセンス）の時代と呼ぶ者もあつたが、知識階級のエリートにとっては抑圧的な過去の殻を打ちやぶる新しい時代であつた。

大正天皇は病弱で精神的にも薄弱であつたが、彼の息子、皇太子裕仁は一九二一年以来摂政の位にあり、新しいリベラルの血統と目されていた。彼は英国やフランスに行き、粋な英国の洋服を着こみ、ツイードの

帽子をかぶり写真に収まっていた。彼は生物学者であり、友人のプリンス・オブ・ウエールズと共にゴルフを日本に紹介する手助けをした。

伝統派の者たちは西洋から忍び寄る「危険思想」

——国際主義、社会主義、共同体の生活、平和主義、民主主義、無政府主義、それに婦人の権利でさえも——を恐れた。急進的原理を推進するための組織を結成することは合法的ではなく、警察はできるだけそうした運動を思い止まらせようとした。しかし、過度な統制は民衆の支持を得られなかった。五〇年以上前、東京は江戸として、封建制の閉ざされた日本の首都であった。今や東京は東洋の巨大企業を中心であり、恐らく地球上のいかなる都市よりも大勢の大学生が存在していたのである。

日本はここ数十年間に、中国とロシアに対する戦いで勝利を収め、今や世界的な強国となっていた。中国における帝国主義諸国の間で支配的な役割を演じ、朝鮮と台湾を実質的な植民地とし、第一次世界大戦中はドイツ皇帝を打ち負かすため西欧同盟国を支援した。日本の国家主義は成熟した。日本の、外国に対する急進的な干渉はほとんど支持されず、西欧諸国の目から見てあまり成功したとはいえなかった。

日本の一部の者たちは、一八九五年の三国干渉の屈辱を忘れなかった。日本は中国から勝ち取った所有権と租借権を返還するよう、西欧諸国により強要された。そして明治天皇は国民に対し「耐え難きを耐え」、言われたとおりに実行するよう、と諭した。軍部内では超国家主義者と反動主義者が強い影響力を振るいつづけていた。この頃学校での軍事教練は必修科目になっていた。しかし総理大臣と内閣が優位を保っており、右翼を抑制していた。アメリカのアジア移民の禁止、国際連盟の民族平等原則の承認拒否等、海外での屈辱的な民族政策に直面しても、日本の国際的な役割についての自負心は変わらなかった。ペリー提督の率いる船団が、日本を薊あやから脱出させたときに失われた国民的自信は、おおむね取り戻されていた。

この時代は日本にとって社会的のみならず、仏教の見地からも活気に溢れた時代であった。ほとんどの日本の僧侶は、仏教を彼ら自身の文化や過去のみならずし合わせて見ていた。しかし俊隆は大学で、仏教は普遍的宗教であり、すでに多くのアジアの国々の文化や下位文化に順応していて、僧侶の独占的な所有物ではなく一般（在家の）人々にも理解され得るものになっ

ている、と教えられていた。

駒澤での多くの教授たちは自派の教育について、さらに幅広い聴衆にそれをいかにして提示し得るかについて新しい視点で眺めていた。駒澤大学の学長忽滑谷快天はその頃、在家信者のための仏教に関する本『禅学新論』を出版した。この本は曹洞禅についての説明が簡潔であり、また広く一般に評価されたために物議を醸した。忽滑谷はヨーロッパとアメリカに滞在した経験があり、英語で書いた禅に関する最初の著者な本、『侍の宗教』(The Religion of the Samurai)を書いた。

また駒澤大学で、俊隆はその年に「仏教の倫理」(The Ethics of Buddhism)を英語で出版した立花俊道という名のパーリ語の教授に出会った。和辻哲郎の書いた一般読者向けの、道元の思想についての最初の本「沙門道元」が一九二六年に日本で出版された。実際の禅の修行を日本人に紹介することは非常に困難な仕事であった。まして、仏教の微妙なニュアンスをいかにすれば、アメリカ人やヨーロッパ人に伝えることができるのか、俊隆には想像すらできなかつた。しかし彼は傾聴していた。

自分自身を笑うことができるとき、
そこに悟りがある。

*When you can laugh at yourself,
there is enlightenment.*

大学の寄宿舎で、俊隆は陽が昇る前に起き出し、ゆつたりとした作務衣を身に着け、暗がりの寢室をそとと抜け出した。彼は便所に入った。そこには和式の大仏所と長く連なった小便所が並んでおり、反対側には約六〇、九〇センチおきに蛇口のついた長い洗面台があつた。彼は部屋を横切つて戸棚からバケツとぼろ切れを取り出し、石油ランプの薄明かりの下で清掃を始めた。便所は彼が任んでいた寺の便所とは違い、いつも臭くて汚かつた。当時の日本の公衆便所は管理が行き届いておらず、評判が悪かつた。

駒澤大学の新生活として、俊隆は、級友たちの起床前にこの煩わしい仕事を一手に引き受けたのである。顕光院の首座としての彼の責任の一つは、便所と流しの清掃であつた、そして東京での学業や諸々の活動の中にあつても、自分が僧侶であることを忘れまいとした。「私は真の修行がしたいと望んだ。そして本当の意味での求道心とはどのようなものか知りたと思つた。私は何かよいことをするのは求道心かもしれない

と考えた」

彼にとつて、他の者に見られないことが特に大切であつた。彼は自分のしていることを他人に知られたら、もはやそれは純粹な修行ではない、と確信した。彼は物音に聞き耳を立て、明かりが付けられたかどうかを確認するために、ときどき頭をホールに突き出した。彼は特に、この学校の校長で、この時期、彼が最も大切なお手本としていた忽滑谷先生には見られなくなつた。忽滑谷は、学生といふために、平日は宿舍の個室に泊まり、家族と共に過ごすのは土曜日の晩と日曜日だけであつた。彼は申し分のない謙虚さと威厳を備えていた。訪問者はときどき彼を管理人と見間違えた。彼の存在が、俊隆がこの卑しい仕事を引き受けるに当たり、一層心を奮い立たせた。しかし彼の部屋に灯がつくと、俊隆は慌てて逃げ出すのであつた。当初彼は自分のしていることに満足していたが、次第に自分の意図の純粹性を分析するようになった。彼は悩んだ。なぜ私はこの仕事をしているのだろうか。本当に誰にも気づかれずにやりたいのだろうか。実際は見つかりたいのだろうか。

私は混乱してしました。物事の筋を追そうとし

て、心が常に彷徨っていました。私は自分の求道心の純粹性について、それほど確信はありませんでした。続けるべきか否か、私はこのようなばかげた問題を抱えたくはありませんでしたが、私の性格は非常に頑固であり、物事を簡単に放棄したくはありませんでした。

ある日、心理学の講義で教授が経験反復の不可能さについて話した。「あなたたちはそれが可能だと思ふかもしれないが」と教授は言つた。「しかしそれは單なる考えで、経験について考えることと、経験そのものとは同じではない」。彼は付け加えた。過去の心の働きを捕らえることも、私たちが行った事を知ることでも、たつた今活動している心の働きを知ることですら、不可能である、と。

そこで私は悟りました。ああ(笑う)、なるほど、わかりました(OK)！ 考えることができなない事は忘れなさい、ということだと私は理解しました。自分の心を理解するのが非常に困難であることは疑うべくもありませんでした。私はこのような事を実感したのです。そのとき以来、私は

自分の求道心を確かめようとする試みを捨てました。私は分析することをせずに、それが単によいことであるから実行したのです。他人が私を見ようが見まいが、もはや問題ではありませんでした。

俊隆は、より軽い気持ちで早朝の使所の掃除を続けました。そして大学で教授に従って求道心を学ぶことを続けた。彼のこれまでの禅修行の積み重ねが、彼の耳を啓かせた。彼は道元の言った「悟りの痕跡のない悟りに続く悟り」を得ることが必要である、と実感した。

* * *

禅とは

「あるがままの事物 (things-as-they are)」を受容し、
赴くままに事物を育成することの教えです。

—— 鈴木はしばしば故意に、
複数の主語に対して、単数の動詞を使った。

—— これは私たちの修行の
根本的な目的ですが、

物事があるがままに見るのは
難しいことです。

私は視覚に歪みがある

と言っているのではなく、

あなたたちはあるものを見ると

すぐに知性を働かせ始めます。

知性で対処しようとするど、

それはもはや

見たままのものではなくなってしまうです。

*Zen is the teaching of accepting "things-as-they are"
and of raising things as they go.
[Szaboh often used the phrase "things-as-they are"
on purpose.]*

*This is the fundamental purpose of our practice,
but it is difficult to see things-as-they are.*

*I don't mean that there is a distortion of sight,
but that as soon as you see something,
you already start to intellectualize it.*

*As soon as you intellectualize something,
it is no longer what you saw.*

教育学の授業である教授の講義を聴き、俊隆は後知恵や先見を捨て、瞬間瞬間を直接的に生きるべきだという考えを一層強くした。彼は教授が言ったことが信じられず、自分と友達のリートとを突き合わせて検討したが、内容は同じであった。「形式的な教育はそれが何であるか、何を意味するかを説明する。実際の教育では説明せずに、それが何であれ、あるがまま

にしておくことである」。彼は当初それを受容できなかったが、人は求道心を知ることなしに修行を始めなければならぬということと、「理解しようとする試みに疲れ果てるまで長い、長い時間同じ場所を堂々巡りする」こととの関連を理解するようになった。

何も考えずに物事を行うことは、自分自身を理解するうえで最も重要な点です。あなたたちが自分の心を見たいとか、あるいは自分の心を確かめたいと望んでも、それは揃ええることはできません。しかしあなたたちがただ物事を行い、心が自然のままに活動するとき、これが真の意味で自分の心を持つ方法なのです。

一九二六年八月二一日、林叟院での内輪の儀礼で、鈴木俊隆は祖温から仏法の伝受である嗣法しゆぽうを授けられた。彼は二二歳であった。嗣法では、弟子は師匠の衣を受け取り、法系における地位を与えられる。これは仏陀の心を世代から世代へ引き継ぐことを象徴している。仏陀が仏陀に会う。俊隆はこれが単なる形式であり、仏陀の教えを理解するには、さらに長い道のりが必要であることを承知していた。祖温は、俊隆と彼の

家族が藏雲院の管理をすることを希望していた。そしてこの儀礼は責任の譲渡を正式に許可するものであった。

俊隆は、僧侶の黒い法衣の代わりに、茶色い法衣を着ることができるようになったが、まだ法衣の色は変えなかった。それはおこがましいと思ったのである。そして今や彼は一人前の人間になったのであるが、依然として祖温からは「へぼキュウリ」と呼ばれた。祖温はその後も長きに渡り、彼の人生を管理し続けるのである。

これは祖学にとっても大きな出来事であった。彼は松岩寺の住職を引退し、静岡出身の僧侶にその職を譲り、最終的に妻よねと娘愛子と共に藏雲院に戻り、隠居することになった。祖温は、名目上はなお藏雲院の住職であったが、そこに住み管理したのは俊隆の家族であった。

秋になり、俊隆の運勢は悪い方向に向かった。彼は虚弱体質であり特に呼吸器の病気にかかりやすかった。彼は何週間も絶え間なく咳をし続け、たびたび授業を休んだ。彼の後援者であった古川医師は、当時東京の家で家族と共に暮らしていた。彼は寄宿舎に俊隆

を訪ね、直ちに入院させた。軽症ではあったものの結核であった。しかし結核はいかなる場合であれ、深刻に受け止められた。それは経歴、そして生命の脅威であった。彼は完全な休養と病院での看護を必要とした。幸い、病気は進行しなかった。そしてしばらくして俊隆は退院できるまでに回復した。回復後、彼は寄宿舎を出て吉川医師の家に移り、医者再び授業に出席してもいいというまで、そこに留まった。

一九二六年に、俊隆は首座としての修行を満了し、大学に入学し、祖温から嗣法を受け、そして結核にかかった。彼の人生にとつても、日本の全国民の生活にとつても重大な出来事がこの年の終わりに起きた。一月二五日に病弱の天皇が崩御し、皇太子裕仁が新たな天皇として即位した。帝国の元号はもはや大正一五年ではなく昭和元年——この年は一〇日間に満たなかった——となった。そして、希望の新時代、昭和「開けた平和」の到来を告げた。

* * *

教えはいかなるものであれ、
環境に応じて互いに対立する。

Whatever the teaching may be,

*the teaching confronts each
in accordance with the circumstances.*

一九二七年七月中旬の暑くて鬱陶しい一日、大学二年目の夏休み中のことであつた。俊隆は使いに行き吉川家に帰る途中、ランサム女史の家からあまり遠くないところにいることに気がついた。ノナ・ランサムは英国から来た魅力的な女性で、駒澤大学での彼の英語教師であつた。彼の友人で、彼女の家に住み込んでいた学生仲間の勤藤が、俊隆に彼女の家を指し、彼女は耐えがたい暑い日の午後はいつも冷たいものを食べると言ひ、いつかその家に立ち寄るよう熱心に勧めた。俊隆は暑気から逃げ出したかったので、勇気を奮い起こしランサム女史の家に行った。それは厚い壁で囲まれ、梁と障子の周りに白い漆喰が施してある伝統的な木造家屋で、東京の高級住宅地区、渋谷にあるとても立派な家であつた。

彼は門を入り、これまで外国人の家に行ったことがなかつたので、裏口に行くことにした。日本人は戸を横に開き、玄関から儀礼的な挨拶をして来訪を告げる。英国人はそのようにはしないと、彼を知つていた——彼らはノックをするかベルを鳴らすのである——そこで彼は裏口から扉を開けずに、大きな

声で呼び掛けた。すぐに彼女が現れ、丁重に彼を台所近くの居間に招き入れた。家の内部も立派であった。ホールには椅子と丈の高いテーブルが置いてあり、トルコ絨毯が敷き詰められ、一般の日本の家庭や寺よりも、整然として清潔であった。彼女は飲物はいかが、と聞いた。俊隆は水で結構です、と答えた。彼女は台所に行き、冷えた西瓜を持ってきた。

俊隆はランサム教授が始まって以来、常にクラスで最も優秀な生徒であった。数年間英語を一生懸命に勉強したので、彼は英語を母国語とする人について会話を学ぶ、この貴重な機会を最大限に利用したいと熱望していた。日本ではどの外国語を勉強する場合でも、会話を重要視することはほとんどなかった。開国以来、外国語を勉強する主要な目的は、外国の技術を模倣するための技術書を読むことであった。政治の風向きが右に傾くと、他のどんな関心も非愛国的と見なされた。無論外交官や翻訳家の需要は常にあり、俊隆のように自分の目的を持った学生も、一握りほど存在していた。

西瓜を食べながら、ランサム女史は、俊隆に彼女の

手伝いをしてもらえないだろうか、と尋ねた。彼女は、買ひ物、日本人の来客や個々の学生との意思の疎通に手助けが必要だと説明した。彼女は日本語を全く話さなかつたので、意思の疎通には非常に苦勞していた。俊隆は、彼女の家に住んでいる、勳藤ともう一人の少年は二人とも彼女の英語の生徒ではないか、と如才なく指摘した。彼女は、もう一人の少年は間もなく出ていくので、俊隆がその代わりに入るよう考えてほしいと言った。

俊隆はすぐにランサム女史の手伝いを始めた。八月一日、彼は少年たちのいる部屋に移り、程なくして勳藤と俊隆だけになった。古川医師は彼が出ていくのを残念に思ったが、これは彼にとつて貴重な機会であることを承知していた。彼はこれまでどおり支援を続け、俊隆も同様に彼と連絡を取り合いながら、彼の子どもたちの英語の勉強をみるであらう。しばらくして勳藤も、ランサム女史の下に俊隆だけを残して去っていった。このため彼は自分の学業以外にも、彼女のための翻訳や、種々の個人的な所用のためにも、彼女のたくなつた。間もなく彼は、他の少年たちがなぜここに

*原著では大正一二年とあるが、一五年が正しい。

長くいつかなかつたのか、その理由がわかつた。彼女と一緒に生活するのはたやすいことではなかつた。

彼女はとても厳格かつ頑固で、概して彼女の英國式のやり方を私たちや他の日本人に強要しようとしていました。そして彼女は常に何らかの不満を抱いていました。私がしなければならぬことの大半は、彼女の日本人に対する不平——学校や車の中での出来事——を聞く事でした。彼女はいつも日本について不平を並べていました。私は唯一の聞き手でした。しかし私もまた彼女に多くの愚痴を言いました。

長年祖温に従つて学んでいたので、ランサム女史（の相手をする事）はそれほど困難ではなかつた。俊隆は熱心であつた。彼とランサム女史は、ときどき口論をするものの、親密で息が合つた。最初彼は自分の英語が十分でないと思つたが、彼のコミュニケーション能力は急速に進歩した。特に彼が（日本人の）仲間たちとよりも、遥かに多くの会話を彼女と交わすようになってからは、彼女は活動的な社会生活を送つていたので、彼は（彼女の）通訳だけではなく英國、アメリカ

カ、ヨーロッパや中国から来た外国人とも英語で話をしなければならなかつた。

その当時、男性と女性が一緒に街を歩いているときは、きまつて夫と、夫に従つて歩く妻であつた。ランサム女史と俊隆は、話をしながら、ときには笑いながら、並んで街を歩いた。彼はその秋二三歳になるところで、彼女は四〇歳であつた。俊隆は他の日本人と比べても背が低く、約一五〇センチしかなかつた。ほぼ一八〇センチの背丈のランサム女史は痩せてはいたが、均整がとれており、美しく品位があつた。そして彼女の灰色の碗型の帽子は、彼女の身長を一層高く見せた。彼女の鼻は長く真つすぐで、目は丸く大きく、眉は濃く表情に富んでいた。俊隆は制服、彼女は控えめなドレスを着て、冬には厚いオーバーコートを羽織り、二人は背筋を伸ばして元氣よく歩いた。当初隣人たちは、彼女が新しいハウスボーイを雇つたと言つたが、やがて住み込みの通訳を雇つたと言つた。

彼らが帰宅するときは、ちやうど彼が祖温のためにしたときと同じように、しばしば俊隆が彼女の荷物を運んだ。実際、俊隆とランサム女史との関係は、初期の徒弟時代の祖温との関係に多くの点で類似していた。二人ともわがままで、常軌を逸しており、怒りつ

べく、威厳があった。俊隆の生活は彼らを中心に廻っていた。彼らは彼の望む知識を持っていた。そして彼らの欠点にもかかわらず、俊隆は彼らを愛していた。しかし祖温との相違点もあった。ランサム女史は俊隆を遥かに対等に扱った。彼女は率直で白説に固執したが、彼に自分の気持ちも語らせた。彼女は依然として彼の教師であり、家主であり、雇い主であったので、彼は彼女のいうイギリスの基準になつた敬意をもつて、彼女に接した。しかし彼は祖温に対して、彼女にしたような口答えは決してできなかった。

俊隆は救い難いほど好奇心が旺盛であつたし、ランサム女史は自分の生活については極めてオープンであつた。彼は他の誰のことよりも深く彼女のことを知つた。彼女は九番目の子どもとして、一八八七年一〇月五日に英国のベッドフォードで生まれた。日本に来る前は、中国北部の天津で三年間過ごし、英国租界のグラマースクールで教えていた。彼女はまた個別の家庭教師もした。彼女の生徒の中には中国の大總統、黎元洪の子どもたちや、日本領事であつた吉田茂の子どもたちもいた。ランサム女史にとつてさらなる扉が開き始めたのは、吉田茂によつてであつた。先の中国皇帝溥儀と彼の妻、婉容(ワンジュン)が一九二五

年北京の日本公使館に逃れ、その後天津に脱出したとき、吉田はランサム女史を前皇后の、引き続き先の皇帝の付き添い兼英語教師として手配した。

吉田を通じてランサム女史は一九二七年に来日し、吉田の両親が所有していた家に移つた。そこで彼女は三つの大学で教鞭を執つた。彼女はまた「皇室公認の英語ならびに外国のエチケツトについての先生」であつた。彼女の生徒の中には、近代柔道の創始者であり、皇室ご一家が通学された学校の校長でもあつた、嘉納治五郎カノウチゴロウがいた。

ある日ランサム女史が俊隆に大きな水仙の球根を買つてくるよう依頼した。俊隆が買つてきたものを見て彼女は言つた。「これは小さ過ぎる。大きなものを買つてきなさい」そこで彼は渋谷地区をくまなく探し歩き、数軒の花屋を訪ね、一番大きな球根を買つた。それでもなお彼女は満足しなかつた。彼は腹を立てた。しばらくして、彼は袋を持って帰つてきて彼女に言つた。「とても大きな水仙の球根を買つてきましたよ。これです」それから彼は恐る恐る忍び足で立ち去つた。彼女は袋を開けて臭いを嗅ぐまでは上機嫌であつた。「これは玉葱じゃない！」彼は彼女がひどく玉葱を嫌つていることを知つていた。彼女は大声で叫

びながら、彼を探し始めた。しばらくして、彼は隠れていた場所で突然吹き出してしまったので、彼女は玉葱を持った手を高く持ち上げ、彼の所に迫ってきた。彼は階段を駆け上り、彼女に後を追われつつも、素早く屋上上がり、隠れてしまった。

* * *

親切な一言は
天地をもひっくり返すことができる。

*One kind word can turn over all of
heaven and earth.*

俊隆の授業が早く終わり、ランサム女史が忙しくない日には、彼らはランサム女史宅の居間でハイティーを取った。彼は彼女のイギリス、ベルギー、そしてフランスでの青春時代や勉強について、またベッドフォード・フレール教育大学での教育学の修士課程の勉強について、そしてそこで彼女が進学予備校の校長になったこと、スコットランドのエディンバラ・インスティテュートで中等部校長として過ごした一〇年間について、さらに三七歳で中国に行く決意をしたことについて、知った。

彼女は特に、悲劇的ではあったが愛らしく若き皇后

「ワンジュン」(美しい顔つきとの意)との思い出を懐かしんだ。ワンジュンは、溥儀の二番目の妻よりちょうど一歳年上の一四歳のときに、奇異と背信に満ちた環境の中で、良識の師としてランサム女史にすぎるようになっていたのである。皇后の写真は居間の隅のタンスの上に置かれていた。

俊隆は、自分がほとんど知識のないキリスト教に對する、ランサム女史の取り組み方に好奇心を抱いていた。キリスト教は阿弥陀教に似て、禅の自力とは逆の他力本願の信仰を土台にした宗教であると言われていた。キリスト教徒は、誠実で慈善事業に献身するものとして、日本では一般的に尊敬されていた。東京のイエズス会は日本での最初の大学を設立し、彼らの中には臨済禅に強い興味を持つ者もいた。日本のキリスト教徒は迫害と順風の時代を経験してきたが、中国や韓国におけるような大きな発展は遂げなかった。ランサム女史はカトリックにも仏教にも敬意を払ってはいなかった。

彼女はクエーカー教徒の家庭に生まれた。クエーカー教徒は、神やイエスの彫像や絵画を用いず、誓約のような、国と宗教的権威との結びつきを拒否し、宗

教で一般的に見られるさまざまな形式的なものを使用せずに、真理に対してシンプルかつ真つすぐに取り組むのである。

クエーカー教徒は平和主義者であり、ランサム女史は将校たちの子弟を教えていたが、東洋や西洋における政府の軍隊調の装いを好まなかった。彼女は、中国北部で日々増大する日本軍——表面上は鉄道線路を準備するために進出してきた——の役割を嫌った。彼女は、前皇帝溥儀に対する彼女の影響力を、日本の国益のために利用できるのではないかと、言ったさる政府高官の示唆には特に憤慨した。しかし彼女はこうしたことについてはほとんど話さなかった。こうしたことには超然として、ただできるだけ役に立つように心がけていた。

中国と日本での滞在を経て、ランサム女史は、仏教とは偶像崇拜の宗教であり、歴史と文化をよりよく理解するために一瞥するだけの価値しかないものだと確信していた。彼女は神聖な建物を訪ね、建造物や芸術、庭園や彫刻には大いに魅了されたが、信者が彫像の前で礼拝し供物を捧げるのを見ると、頭を横に振った。彼女のハウスボーイがこうした寺の僧侶であったことは、彼女をいささか当惑させた。これは彼らのあ

いだに不愉快な気持ちのズレを生む原因となった。そうしたときに、彼女の仏像事件が起きた。

日本では、戸外で履く靴は、通常室内に上がる前に正面の扉のすぐ内側に置いてある木製の棚に収納され、そこには室内用のスリッパが置いてある。靴や草履は決して屋内の床に触れることがない。戸外の地面は不潔であり、戸外で履く靴は不潔である。室内の床とスリッパは清潔である。これら二つのものは決して混合されることはない。

その彫像は、床の間と呼ばれる小部屋に置いてあった。床の間はある意味、日本の家の中心といえる。祭壇ではないが、特別な石やアンティーク製の貴重な花瓶に活けた花や、掛け軸を飾るための一隅である。床の間は自然、芸術、そして知恵を表した、家庭内の美的な祭壇である。ランサム女史は床の間に掛け軸を飾らず、花瓶も置いていなかった。その代わりに、石の台座の上に、三〇センチほどの高さの美しい仏像が置いてあった。彼女は俊隆に、この仏陀の坐像は美的かつ感情的な価値故にそこに置いてあるだけで、宗教的な目的は全くない、とはつきり説明した。それは溥儀から彼女への贈り物であった。

ランサム女史は自分の靴も床の間——彫像のすぐ隣

——に置いていた。彼女が仏教徒でないことは問題ないが、これを受け入れるわけにはいかない、と俊隆は内心思つた。彼女が学校から帰宅し、脱いだ靴を仏像のすぐ隣に置くのを見て、彼は困惑した。

ある朝学校に出掛ける前に、俊隆はランサム女史が坐つてクリーム入りの紅茶を飲んで居る間に、静かに人つていった。彼もまた小さな日本の湯呑茶碗に熱い緑茶をついだ。彼は湯呑みを両手で注意深く持ち上げたが、ランサム女史と一緒に坐り、そのお茶を飲まなかつた。その代わりに、湯呑みを目よりも高く捧げ持ち、静かに仏陀の前に置き、合掌して頭を下げた——両手を合せて立礼した——そして入つてきたときと同じように静かに立ち去つた。これが、後日彼が呼んだ、冷たい戦争の始まりであつた。

教週間が過ぎ、毎朝俊隆は仏像にお茶を供えて礼拝した。ランサム女史は、最初はただ彼を眺めていただけであつたが、次第に感興を募らせ、彼をからかい始めた。彼は彼の行動について説明しようとはせず、彼女もまた説明を求めなかつた。彼らは買い物や食事の面では仲よくやつていたが、冷たい戦争は続いた。

ランサム女史は客人に、彼女のハウスボーイが、仏像とその隣に置いてある靴に対して示す、奇妙な振る

舞いについて吹聴した。靴は日本家屋の玄関に置いてあるのと同じように常に整頓されており、彼は場所が許す限り、靴を仏像からできるだけ遠く離して置こう、左端に並べた。「俊隆はとももいたずら好きな子どもなのよ」と彼女は彫像の前に置いてある湯呑み茶碗を指さして言つた。彼女のお客も、彼がどれだけ彼らの話を理解しているかを知らずに、嘲笑の輪に加わつた。しばしば彼は新しく置かれたタバコの吸い殻、燃やしたマッチや、使用済みの爪楊枝が仏陀の手の中にあるのを発見した。彼はそうした物を片付けはしなかつたが、ときには線香も添えてお茶を供え続けた。

その一方で、来たるべきときに備え、彼は熱い戦争——言葉の戦争——の準備をした。彼は手際よく実行する方法を熟慮し、一層精神を集中して、自分の部屋で英語の勉強を続けた。駒澤大学の仏教学の教授の協力を仰ぎ、彼と共に仏教に関する基礎的な専門用語の翻訳に取り組んだ。彼は表を作成し、特に西洋人に対し仏教とは何か、なぜ仏教徒は仏像にお供えをするのか、ということを説明し得る用語を研究した。

最初の三〇〇年ほどの間、仏教は仏陀を物的に表現することはしなかつた。アレキサンダー大王のイン

下侵入後に、カンダラ、今日のアフガニスタンに居残った、ギリシャ彫刻の影響を受けた職人たちが、人間の姿に似せた、最初の仏教徒の聖像として知られているものを造った。この着想は人気を得た。

特定の形式や慣行を正当化せずに仏教を説明する方が容易であるかもしれない。道元は、香を供えることはよい習慣ではあるが、必須のものではない、坐禅だけがこの道に従うために必須のものである、と記している。初期の師匠たちのように、「それは単なる木片にすぎない」と言つて切り捨ててではなく、俊隆は仏像を否定せず、彼の修行の一部として取り入れ、さらにランサム女史に理解させる方法としても使つたのである。彼は話し合いの機会を心待ちにしていたが、白らは行動を起こさなかつた。

ランサム女史と彼女の友人たちは相愛わらず彼をからかい続けたが、彼は無視した。彼女の好奇心が高まり、結局は仏教とは何かを説明するチャンスが来るであろうことが彼にはわかつていた。冷たい戦争が始まり数週間が過ぎたある雨の朝、居間で彼が待ちわびた瞬間が訪れた。その日は、俊隆もランサム女史も授業や（人に会う）約束もなく、雨から心地よく守られる屋根や壁を離れて外出する気もなかつた。彼女は

坐つてお茶を啜りながら、沈黙し、溜息をついて、思案に耽つた。

「ちよつと伺いますがね、俊隆。いつたいあなたはどうしてあの仏像なんかを拜むのか聞かせてちょうだい。あなたは道理をわきまえた若者のようだし、真面目なことはわかつているけれど、一休何があなたをこのような意味のない迷信に駆り立てているのか、私には理解できないの」

そこで彼はなぜ仏像にこのような尊敬の念をもつて接しているかを説明し、釈迦牟尼と仏教の悟りの境地について語つた。このような仏像は、仏法が至るところにあり、私たち自身が仏陀であるということを思い出させてくれるので、仏像に香を供えるとき、私たちは自分の本性、存在する全ての物の本性を認識しているのである、と彼は言つた。私たちが存在物の本性は容易に感知したり記憶したりできるようなものではなく、仏陀は容易に説明できるような神でも人間でもない。仏陀とは何であるかとの確に示すことはできないが、仏教には種々の教えがある。たとえば仏陀の三身についての教えがあり、崇高な筆舌に尽くし難いダルマカーヤ・ブツダ（法身仏）は、どのような特殊の経験をも超越した宗教の第一の原理である。サンボツガ

カーヤ・ブッダ（報身仏）は、歡喜ないしは優美の名状し難い体现であり、修行の成果である。そしてニルマナカーヤ・ブッダ（応身仏）は、菩提樹の下で悟りを開いた歴史上の人物である。彼は女性でも男性でも、誰でも到達できる素晴らしいものを悟ることができた、全ての人たちと同じ人間である。

仏陀のこうした側面は、キリスト教の父なる神、神の御子、精霊といった概念と共通するところがあるかもしれない、と彼は説明した。しかし仏陀のこうした姿を理解すること、すなわち私たち自身を深く知るためには、それをあまり深く考えても役に立たない。仏教徒が瞑想をしたり、経をあげたり、仏像に香や茶を供えるなどの心を込めた修行によって、真理の直接的な洞察を経験するために全身全霊を傾倒する理由である。

ランサム女史は驚いた。これは全く彼女が予期していなかったことであった。彼女は彼の説明に感謝し、彼が英語を自由に使いこなしたことを誉めた。彼女は仏教にそれほどの深みがあり、個人の聖性についての認識があらうとは思ひも及ばなかったと語った。彼女は俊隆の説明だけではなく、彼の沈着な話しぶりにも感心した。

その事があつてから、ランサム女史は俊隆をからかうことはなくなった。彼女は数日間とても静かだった。それからしばらく経つたある日の午後、俊隆が居間に入つてみると、床の間からは靴が消えており、木製の仏像の脇には、立派な花が活けてあつた。彼女は彼に仏教についてもう少し話をしてもらえないだろうか、仏教徒の修行について説明してもらいたい、と依頼した。彼は床の間の手入れの仕方を説明し、二人揃つて外出し、ろうそく、香、香炉と、小さな鐘（お鈴）まで買つて来て、床の間を祭壇に変えた。彼は彼女に坐禅の仕方を教えた。彼女は英語をある程度話すことができる、駒澤の仏教徒の教授と親しくなり、仏教の研究を始めた。俊隆は一層熱意を込めて英語の勉強に励み、これまでの経典に満足した。二人はお互いの宗教の伝統についての知識を自由に交換し合つた。彼らの間にあつた壁は崩れ落ち、彼女はその開かれた場所から歩いてやつて来た。

この仏像事件は、鈴木にとつて、文字どおり彼の人生の進路を変える極めて重要な事件であつた。彼は後日この出来事を、彼の人生の岐路と呼んだ。彼は、ランサム女史の仏教に対する全くの無知、初心（者の心）は障害ではなく、むしろ彼女がより明確に理解するの

に役立った、と理解した。彼は日本の仏教の現状と、多くの僧侶たちの姿勢にかなりうんざりしていることを認め、海外に行く夢をランサム女史に語った。

私は非常に快い気分を味わいました。私は私たちの教えと、私が西欧の人たちが仏教を理解する手助けができる、という考えに自信を深めました。日本の人たちにとって真の意味で仏教を学ぶことは非常に困難でしょう。なぜならば伝統にしばしば誤りがあり、また誤解されてきたからです。いったん誤解して理解してしまうと、それを改めることは難しくなります。しかし仏教について何も知らない人々にとっては、白い紙に絵を描くようなものです。彼らに正しく理解してもらうことは遙かに簡単です。そのときランサム女史と共に得た経験が、私のアメリカ行きにつながったのだと思います。

* * *

刹那刹那に

自分の内部の声を聞くことに専心せよ。

*Moments after moments,
completely devote yourself to
listening to your inner voice.*

蔵雲院にはランサム女史の来訪に備え、特別に購入した西洋式のラタンのベッドと椅子があった。俊隆は彼女を林叟院にも連れて行った。蔵雲院の下の森の村人たちや、林叟院の下の坂木村*の人たちと同様に、この僧侶たちも、このイギリスの婦人を知るようになった。この地方では外国人は明らかに奇異な存在であった。俊隆の名前が出ると、まず彼らの口に上るのは、彼らの関係についてであった。そして二番目が彼の放心癖である。ときには双方の話題が一度に出ることもあった。初めて俊隆がランサム女史を林叟院に連れて行ったとき、彼は彼女の荷物を焼津駅に置き忘れたので、それを取りに行くために商用の馬車で、八キロの道を引き返さなければならなかった。俊隆が馬車から下りると、過去にしばしば見られたように祖温は俊隆に怒鳴った。「この忘れん坊！ 全くどうしようもない奴だ！」

*原書では高草とあるが、坂本村が正しい。

祖温は俊隆をどう扱ったらよいかを心得ていた。彼は、今回は正式に藏雲院を俊隆に引き渡すことで、彼が記憶に止めておかなければならない仕事を山ほど与えた。一九二九年一月二二日、俊隆が二四歳のとき、晋山式にて祖温は俊隆を、第二八代日の藏雲院の住職として任命した。前の晩に祖温の退院の儀礼が行われ、翌日俊隆が晋山式で住職の肩書きを継承した。祖学は、今は祖温のためではなく、自分の息子のために、引き続き寺を運営することになった。長年の努力により、俊隆は父が失った寺を父のために取り戻したのである。これは俊隆の一番の目的ではなかったからこそ可能になったのである。

東京で俊隆は引き続き大学生、そしてランサム女史の付き添いとして、二重生活に浸っていた。彼女の仏教に対する興味は依然として続いていたが、芸術、社交に加え、俊隆と議論を戦わすことなど、彼女の数多い他の楽しみも変わらなかった。それから、桜が満開の四月のある日、彼に寄宿舎へ帰る決断をさせる出来事が起きた。

大使館に行った日に痛切に感じさせられました。私は大使のアシスタントと英語で話をしていました。そして彼を見ていたときに、その考えがふと浮かんだのです。恐らく私はいつかあなたのような人なのでしょう、と。この考えに私は恐れおののきました。もし私がランサム女史と一緒にいたら、私は僧侶にならずに、大使のアシスタントになるのでしょうか。

彼は帰宅してランサム女史に、駒澤大学での最終学年は、ランサム家を出て過ごすことが彼の学業にとつて一番よい選択肢ではないかと話した。ランサム女史は残念に思いながらも承諾した。一九二九年五月三日、俊隆は駒澤の寄宿舎に移った。

ある日俊隆は数人の学生僧侶と共に、ロサンゼルスに出発する鈴木大等オサムという名の僧侶を見送るために横浜港に行った。そこで彼は、日系アメリカ人の寺である禅宗寺の創設者、磯部峰仙ミサト老師の補佐をすることになった。磯部はサンフランシスコにもう一つの寺を建てる計画を持っており、大等は最終的には禅宗寺の責任者になる予定であった。大多数の日本人は、誰

このことは私がランサム女史の仕事で、トルコ

にせよ、特に仏教の僧侶がなぜ日本を離れたいと望んでいるのか理解できなかったが、俊隆と彼の友人たちは熱狂し、大等に挨拶した。この駒澤大学の小さな学生グループにとっては、彼の出発は英雄的なものに感じられた。船が動き出すと、若い僧侶たちは埠頭で喝采し、そして俊隆の目からは涙が流れ落ちた。三〇年後、俊隆と大等の路は再び交叉する——そしてそのときの彼らの役割は全く異なるものではあつたものの、再び記憶されるべきものであつた——。

一九三〇年一月一日、転衣てんいと呼ばれる、俊隆にとって重要な公開儀礼が藏雲院で行われ、祖温から鈴木俊隆への嗣法が認められた。彼はランサム女史に対し、この儀礼は「曹洞宗が住職としての就任と、禅の指導について公に承認するものである」と説明した。香と花で満たされた本堂で、特別な茶色の法衣が、祖温から俊隆に手渡された。参列した僧侶たちにより、長めのお経と短いお経とが入り交じりながら朗唱され、ときどき鐘と太鼓が鳴らされた。

この最後の転衣の儀礼は、俊隆に宗門の信任状を与

えるものであつた。彼を取り巻く社会全体——ランサム女史や吉川医師の家族、学友、諸々の僧侶たちや彼が学んだ教師たち——がこの一大イベントに参列した。翌日、彼は曹洞宗の本寺、永平寺と總持寺で一日づつ名誉任職に就任する儀礼に出席するために、汽車で出発した。これが祖温と俊隆との間に行われる最後の儀礼であつた。彼の父親は、俊隆が学業を終えるまで引き続き住職代理の仕事を続けるであろう。これは俊隆に限っては無期限に続く可能性があつた。というのも彼には別の考えがあつたからである。祖学は年を取ってはいたがまだ健康であり、彼の兄弟弟子で同僚の祖温の弟子、憲道と祖光もときおり林叟院から彼の手伝いにやつて来るのであつた。

一九三〇年四月一日、二五歳の終わりにさしかかっていた俊隆は、駒澤大学の文学部仏教学科、副専攻として英語科を、二番の成績で卒業した。彼の学理指導教官であり校長であつた忽滑谷快天の指導の下に書かれた彼の卒業論文は、道元が「正法眼蔵」の中で師匠に対する服従を強調している、師匠と弟子との関

*原著では禅哲学科とあるが、仏教学科が正しい。

係に、焦点を当てている（これは礼拝得^{らいはいとく}と呼ばれており、この巻の中で這元は、婦人の平等を強く主張している）。この論文の中で俊隆は、哲学としての仏教よりはむしろ忽滑谷の「宗教的体験」の視점에傾斜している。俊隆の論文に影響を与えたもう一人の重要な教授は、衛藤^{へいとう}即^{いそく}応^{おう}であった。彼は著名な『正法眼蔵』の学者で、坐禅と修行とを一体化して研究する、偏見のない取り組み方を強調していた。衛藤は祖温の級友であり、共に丘宗潭について学んでいた。俊隆の多くの教授のように、彼もまた故郷に寺を持つ僧侶であり、忽滑谷と同様に彼も哲学よりは宗教を、体系化よりは直接的な体験を強調していた。

大学卒業後間もなく、俊隆は彼自身が高く評価していた、別の免状を授与された。学部長の立花俊道氏の推薦により、訳すと「高等学生のための英語ならびに倫理の教師」になることができる政府の認定書を受け取ったのである。当時の高等学校は、おおむね現在の短期大学に相当するので、これは尊敬に値し、ほぼ教授の地位に相当するものであった。

俊隆は今や正規の教育を終了し、自分の本と洋服ダンスを駒澤の寄宿舎から藏雲院に移した。しかし彼はそこに腰を落ち着けたくはなかった。彼にはより大き

な考えがあつた。祖温が藏雲院に来たとき、俊隆は話をしたいと打診した。彼はこの出会いに勇気を奮い立たせていた。俊隆はランサム女史との体験と、それが彼にとってどのような意味を持っているかということを説明した。彼はまた横浜港で鈴木大等を見送った話をした。祖温は黙って聞いていた。それから俊隆は核心をついた。仏教を教えるために、彼もまた外国に行きたい、と提案した。場所はどこでも構わなかつた——まあ、アメリカでも。

「駄目だ！」 祖温は答えた。

「ハワイはどうでしょうか」

「駄目だ！」

「北海道は」

日本の北の島は一種の辺境地帯であり、札幌には仏教を知らない大勢の外国人が住んでいた。

「駄目だ！」

俊隆はあまりにも長時間白話を主張し続けた。祖温は激怒した。「ここだ！」彼はテーブルを拳骨で叩きながら怒鳴った。それは衝撃を伴った一言であり、彼の怒りは激しかった。

彼は激怒しました。私は何らかの理由があるの

だるうと理解しました。そして、彼が私を深く愛していることを知っていたので、私は海外に行く

考えを捨てました。私はアメリカに行く考えを完全に諦めたのです。

大本山僧堂 1930-1932

CHAPTER 4

Great Root
Monasteries

一枚の落葉は単なる一枚の葉ではない、それは完全な秋を意味する。

*One falling leaf is not just one leaf
it means the whole autumn.*

鈴木俊隆は駒澤を卒業した後は修行も終え、自由に世界に羽ばたくことができると思っていた。だが彼は結局のところ、自分の寺を持ち、嗣法を受け曹洞宗門によって承認された一住職であった。しかし、小言は多いが言葉の少ない祖温は、さらに修行が待ち受けていることについては明言しなかった——曹洞宗の二つの大本山の一つ、福井県の永平寺での修行である（もう一つは仲奈川県の總持寺）。

俊隆には、開かれた障子の外に立っている杉の大本が縮んだり揺れたりしているように見えた。汗が彼の

顔をつたって流れ落ちた。彼の交差した脚には日過寮で幾度となく襲いかかる痛みに痙攣を起こした。ここの入門式で、彼や他の駆け出しの永平寺の弟子たちは、この寺に入門する価値があることを証明するために、早朝から夜遅くまで、一週間ないしはそれ以上の期間坐禅をしなければならなかった。他の弟子たちは彼より若かったが、この寺に入門した日から数えられる永平寺年齢では、彼らと同じ年齢であった。彼は一九三〇年九月初め、二六歳の年にここに来た。果てしなく続くように感じられた、且過寮の入門式の終わりに、略式の儀礼で俊隆は、全ての僧侶の傍らを通って礼拝しながら歩いた。

且過寮は、結跏趺坐で連続して坐る坐禅である——食事も坐って取り、古參の僧侶たちのほとんど絶え間ない叱責も坐って聞き、眠気を催している僧侶の肩を強打する長く平らな棒の警策も坐って受け、筋肉や心

を襲う苦痛のうねりも坐って待つのである。苦痛の襲う間隔を測るために時計を見ようとしたが、時計は持ち去られていた。苦痛の最中には杉が縮んだり揺れたりする——しかし、それは彼の心が作り出す幻覚である。これらの大木は決して動くことはない。動くのは心である。

永遠の平和の寺、曹洞宗の宝であり、巡礼の目的地、そして声を潜めて語られ、国民や歴代の天皇により尊崇されてきた永平寺は、道元により一三世紀に創建された。広大で、技巧を凝らした建物、果てしない畳の広間、巨大な柱、屋根に覆われた廊下、湾曲した瓦葺き屋根のついた永平寺——この生ける美術館であり、一〇〇〇もの規則（編註 清鬼）を備えた僧侶たちの最終学校が、彼の新しい住処であった。俊隆がこの深い森の中の僧堂で道元の開いた道を歩いている期間は、彼の父母は藏雲院を自由に管理することができた。

一〇〇人以上の修行僧と、三〇人以上の古参の僧侶たちと、曹洞宗で最も尊敬されていた若干の老師たちが早朝、坐禅と動行のために廊下を歩いていった。きらびやかな部屋々々は美的感覚を刺激してくれた——

鐘、どら、鼓や太鼓の響き、低音、中音、高音の澄み切った強い打撃音、先達の教えを大勢の帰依者がリズムミカルに朗唱する読経の声と、倍音が重なり合う反響音、天井や巻物に描かれた絵画、重量感あふれる木に金箔を施した瓔珞、紅幔、飾り紐と金襴。年老いた僧侶たちは最も長い中国の古い偈頌でさえも暗唱できた。そして彼らのほとんどの者は九五段の階段を上って道元の廟に行くことができた。

まず掃除だ、坐禅はそれからだ、と彼らは言った。

私たちは使用する前にその周りにあるものの手入れをしなければならぬ、木を磨け、心を磨け、床を拭け、天地を覆え。——掃除の仕方、歩き方、部屋への入り方、書齋を使用する方法、まず先輩たちに、続いて後輩たちに対する挨拶の仕方、など——彼は何をするにも永平寺流の方法を学ばなければならなかった。彼は、法衣の着脱法や、禅堂の畳の上で布団を畳む方法、歯の磨き方、炊事場での鉢の洗ひ方、茶の湯の先駆けとなった、応量器と呼ばれる、「布で」包んだお椀セットを使って禅堂で食事をする方法を正確に覚えた。無言で歩き、効率的に仕事をしなければならぬ。話し過ぎてはいけぬ、そして穏やかに話さな

ければいけない。坐禅をしているときは、痛みがあつても顔に蚊が止まっても動いてはいけない。何事であれ正しい方法で行わないときは、占參の僧侶たちから違反した者に叱責が飛ぶ。俊隆は、部屋を歩いているときは、彼らの視線が自分に注がれ、頭からつま先まで監視されているように感じた。これは全く新しい経験ではなかった——彼は同じようなことを祖温から経験していた——しかしもはや監視は一人からだけではなかつた。彼は、能楽師あるいは歌舞伎役者の正確さをもって肉体的な修練を行う、より広い劇場で、より大きなチームの一員であつた。それは、抗い難かつたが、やがて当初のいらだちと失敗を繰り返した後に、徐々に環境に調和し、爽快な気分になつた。

眼が覚めるとすぐ、俊隆は自分の布団を畳み、畳の端にある戸棚の下に滑り込ませた。それから着物と法衣を着て、木製の流し台に並んでいる僧侶たちの列に急いで並び、洗面器に七〇パーセントほど水を満たして顔を洗つた。顔を洗い終えると彼は、身体から離して流すのではなく、自分の方に向けて残つた水を空けた。僧侶たちは皆、道元が小川の水を手桶にくみ、残つた水を小川に返した、という故事に倣つて洗面を行つていた。

あなたたちは水を川に返すことは無意味だと考へるかもしれません。このような習慣は、私たちの考への及ばないところでしょう。私たちは川の美しさを感じたとき、本能的にこうした方法を取るのです。それは私たちの本性です。

朝は坐禅と共に始まつた。お袈裟は着用せず、棚の上に安置していた。坐禅は、「お袈裟を着ることは何と素晴らしい機会であろうか」と宣言する四行詩、搭袈裟の偈で終わつた。詠唱の終わりに、僧侶たちは礼拝し、坐つたままお袈裟を被着する。これは仏陀の時代に遡る作法である。それから彼らは身体を左右に揺らし、坐蒲の上で回転し通路に下り立ち、動行を始める合図の鐘が鳴るのを待つた。そして両手を胸の前で組み合わせ、壮大で歴史ある部屋で行われる朝の勤行のために、歩み去つた。

永平寺での生活は、細かいことに気を配る単純なものであつた。数カ月が過ぎると、生活は単調ではあるが、解放的になつてきた——藏雲院や、駒澤や東京での奮闘の複雑さとはかけ離れていた。いったん、俊隆と新しい仲間たちは来る日も来る日も同じ方法で全て

をこなすことに習熟してしまうと、何か新しい楽しみを求めていたずらを始めた。たとえば、彼らの中には扉を乗り越え、下の街へ蕎麦を食べに出掛ける者もいた。ある夜、ほとんどの人が寝静まった頃、俊隆と数人の僧侶が集まり、調理場から何か食べ物をこっそり持ち出そうと考えた。彼らは見つかるリスクを天秤に掛け、断行することにした。そして暗闇に紛れ、貯蔵室に入り、一つの箱を選んだ。箱には大根がたくさん詰まっていた。彼らは何が変わったものが欲しかったので、爪で汚れを掻き落とし、少し食べた。そして、生のままで多く食べられないので、煮ることにした。彼らは大根をバケツに入れ、外に持ち出して火にかけた。煮た後はさらにひどい味がしたが、笑いを押し殺しながら、とにかくがつがつ食した。間もなく辺り一面に煮込み大根の強い臭いが立ち込め、結局彼らは捕まって折檻を受けた。しかし眠気でよろよろの古参の僧侶たちの叱責さえも（古参たちは少しも面白いとは思わなかった）彼らには興味深い経験であった。そして彼らはほろ苦い味を楽しんだ。

永平寺の冬の寒さは、夏の暑さと同様に厳しかった。

びんがけはらばらぞう
カキウキケン
ウツトシヨウジヤウ
* 大般若論 無相福田衣 披垂如来教 広度証業生

た。ここは雪国であり、建物は閉めきられて暗く、ろうそくの火が灯された。唯一利用できる熱源は、道路や屋根から雪をシヨベルで取り除く作業から生まれるカロリーと、彼らの冷えた身体を包む厚めの衣と、公共の部屋に置いてある火鉢だけであった。閉めきった部屋に充満する重苦しいタバコの煙は、弱った俊隆の肺には耐え難かったが、僧侶たちの議論を楽しんだ。法話の中で、彼らは心に何の目的も持たずに修行するように——ひたすら坐り、ひたすら掃除をするように、と指示された。しかし修行の目標は何であろうか。仏性を得るためののか、衆生を救済するためののか、あるいはあるがままの自分になるためののか。

観念は現実とはなり得ませんが、修行は観念から現実への架け橋なのでしょうか。私たちはこのような議論をしていました。しかし道元によると、修行はまさに修行仏であり、橋はまさに橋仏であり、現実はまさに現実仏であり、観念はまさに観念仏です。何の問題も存在しません。あなたたちが、「私は人間である」と言ったとき、それ

はまさに仏の別名——人間仏なのです。

永平寺の眞首で曹洞宗全体の管長は北野元峰きたのげんどう老師という名の年老いた僧侶であつた。俊隆は、彼の気品ある感性和、海外滞在経験から、北野に大変な敬意を抱いていた。北野は長年にわたり韓国の曹洞禪の長を務め、一九二二年に閉山した、ロサンゼルスにある禪寺、禪宗寺の初代住職の一人でもあつた。ある日法話の中で、北野は修行僧たちに喫煙についての話をした。ほとんどの僧侶たちは喫煙をしていた。彼は喫煙するなどは言わずに、タバコについての彼自身の経験詳しく話した。若い頃、彼は愛煙家だつた。あるとき彼は一人で托鉢たくはつに出て、箱根の峠を歩いていた。頂上の霧の中で立ち止まり、岩の上に腰を下ろした。彼はタバコに火をつけ、喫煙がことのほか素晴らしいことに気がついた。そして霧ときれぎれのタバコの煙を通して、下の町を眺めた。彼は湿つた天候のときのタバコを特に好んだ。彼はその瞬間のタバコの味に深く感動したので、彼はそのまま自分の欲望を試してみようと考え、これを最後のタバコとする絶好の機会だと心に決めた。そしてそのとおりになつた。

北野禪師は喫煙を止めましたが、終生喫煙への欲望は持ち続けました。しかし彼は自分の欲望の扱い方を知っていました。あなたたちがこの点に気がつかないとすると、それは非常に愚かなことです。喫煙を止めるのは困難なことでしょう。私は喫煙を止めるべきだと言っているのではありません。しかし、もしあなたたちがこの点をわきまえていれば、たとえそれが困難なことであっても、自分を扱う術うづがわかることでしょう。

北野は俊隆の父より年上であつたが、彼らは名古屋の学校で共に過ごし、一時期共に修行をしていたと祖学は語っていた。彼がこの老人のことを話すとき、祖学の語調に、競争心以上のものが感じられた。北野がこのような重要な僧侶になつたにもかかわらず、祖学は取るに足らぬ地位に留まつていることに對して、彼の父がいかに不満を言っていたかを俊隆は思い出した。それは北野の出自と縁故によるものだと祖学は言つた。しかしながら、北野の佇まいたぐひの中に、俊隆は遥かにそれ以上のものがあることを知つた。

永平寺の眞首としての北野は、曹洞宗門全体の僧侶の祖父であつた。彼は非の打ち所のない謙虚さと優雅

さで振る舞った。彼は痩せており、健康状態は良好ではなかったが、俊隆は彼が礼拝用の座具を敷き、身かがめて額をその上に置く所作、そしてそこから彼が再び立ち上がる所作に魅了された。彼は非常に弱々しかったので、礼拝するたびに、俊隆は彼が立ち上がれないのではないかと思つたが、彼は何回でも立ち上がった。しまいには俊隆は、北野が礼拝するより、それを見ている方が骨が折れることだと実感した。

彼はほとんど死に瀕した病人のように見え、また、彼は喜びを以て立ち上がっていました。実際それは、彼にとって凄まじい努力を要してのことです。それは非常に強く、新鮮な動作でした。それは単に形式的なものではなく、彼は気迫に満ち溢れていました。

彼は卓越した精神と意志の手本であった。年老いた僧侶の中には、ただ単に厳しく形式にうるさいだけの者もいた。そして彼らが導師を務めると、俊隆はうんざりしたが、北野が現れると、部屋に特別な空気が漂うのであった。彼は厳格さと深い優しさを併せ持っていた。

どこへ行こうとも師は見つけられる。

Whenever you go, you will find your teacher.

「そちら側を開けるな」。俊隆は手を止めた。彼は一瞬考え、そして約五―八センチ障子を真ん中に戻した。彼は右側を開けるのが正しい作法だということを知っていた。先輩たちはそのように要求していた。しかし中からの指示は疑うべくもなかった。そこで俊隆は左の障子を開け、お盆を持って立ち上がり、中に入つて年配の僧侶と客人をお茶と菓子でもてなした。次の日の夕方、彼は同じ場所に来て、跪き、左の障子の枠のくぼみに指を掛け、少し開いて彼が来た旨を伝えた。「そちら側を開くな！」と、中から声がした。俊隆は混乱したが、指示に従い右側を開いた。

しばらくの間、俊隆はどちら側を開いたらよいかわからないまま過ごした。彼はそれについて繰り返し考えを巡らせた。些細なことではあるが、永平寺で指導に当たる僧侶が下級者に対して圧力を掛けるやり方は、決まってこのような方法であった。俊隆が説明を求めることは、絶対に許されなかった。彼は自分で理

解する他なかつた。そしてある朝彼は障子に近づき一瞬立ち止まって会話を耳を傾けた。一つは客人の声で右側から聞こえてきた。そこで彼は悟つた。もちろん！右側に客人が坐っていないければ、右側の障子を開くべきである。何と単純で明白なことだろう。自信を持って彼は左側を開いた。それからは、外に並んでいるスリッパの配置を見、内部の声を聞き、影の位置から判断し、どちらの障子を開くべきかを知つた。

あなたたちは私たちの教えが大変厳しいものであると思うかもしれませんが。しかし私たちの教えは常に手近なところにあります——それは容易ではありませんが、気づくのはそれほど困難なことではありません。しかしながら、同時にそれは非常に厳密で繊細です。私たちは環境に応じて行動を調整できるように、十分に繊細な心構えを持つことが必要なのです。

俊隆は、当時曹洞宗の最高の師匠の一人と見られていた、岸沢惟安老師に仕えることになった。この関係は、祖温が手回しした。岸沢は、大本山の眞首・西有^{にしゅう}穆山の弟子で、彼もまた西有の弟子の丘宗潭について

学び、駒澤ならびに修禪寺で祖温と一緒だった。彼はまた祖学の若い頃の知り合いでもあった。彼は六五歳で、俊隆より三九歳年上であり、祖温より一二歳年長であつた。彼は厳格かつ気難しい性格ではあつたが、祖温と異なり、不親切ではなかつた。仏教学者として非常に尊敬を集めていた彼は、洗練された空気を漂わせていた。丘と同様、彼は西有が始めた道元の宗学参究の仕事を継承し、一九一九年には丘と北野の跡を継ぎ、永平寺において道元の『正法眼蔵』の正式な講師となつた。岸沢は俊隆に大きな将来性を認め、絶えず彼に眼を注いだ。岸沢と共にいるときは、俊隆は常時注意を怠らないようにしなければならぬと感じた——何事も疎かにしてはならなかつた。

岸沢には障子で仕切られた二つの部屋があつた。そして俊隆は午前の休憩時間中に彼の部屋を掃除せねばならなかつた。時間があまりなかつたので、できるだけ迅速に仕事をした。岸沢は部屋に入り、両手を後ろに組んで、歩きながら俊隆が見落とした箇所がないか、見回すのであつた。彼は部屋の隅、障子の棧^{かき}や机の下のゴミを点検した。「駄目だ」彼は言うのであつた、二部屋掃除するよりも一部屋だけよくやれ。世

界の一隅に光を当てろ」。

永平寺での勤めは、朝、床の拭き掃除をしたり、嵐に備え寺に補強の支え棒をしたりするときのように元氣よく行われた。ある日雨上がりの後に、俊隆は戸を廊下の端にある戸袋に収納するために、二人の助っ人の僧侶に協力を求めた。重い木製の戸は、紙の障子を雨や風から守る。二人の僧侶が元氣よく五枚の戸を一度に俊隆の所に押していき、彼がそれを戸袋に重ねていた。彼らは夜明けまでにはできるだけ早く戸を開けようとして大騒ぎをしていた。岸沢が出てきて彼らを止めた。彼は俊隆に一人でやるようにと言った。一枚ずつ慌てずに、尊敬の念を込めてしなさい、と。

岸沢に仕えた最初の日に、俊隆は彼に緑茶——湯呑みに四分の三ほどお茶を満たし、今まで習ったとおり淹れた——を出した。「いっぱい注げ！」岸沢は彼に言った。そこで俊隆は湯呑みになみなみとお茶をついだ。岸沢はそれを飲み、味が薄く熱くない、と苦情を言った。彼の要求は全てが通常ではなかった。そこで俊隆は高温の苦いお茶を湯呑みいっぱいについて出したところ、岸沢は満足した。それから岸沢に来客があったとき、俊隆は岸沢の好みに合わせ、特別熱く

て苦いお茶をお盆の上の湯呑みいっぱいについだ。岸沢は彼を押し止めて言った。「お前は何をしているのだ。そんな茶を出してはいかん」。彼は、客人が来たときは、通常のやり方に戻らなければならぬことをわきまえていなければならなかったのだ。機械的な取り組み方は役に立たず、絶えず気を配っていなければならなかった。

俊隆は早朝の坐禅のための岸沢の法衣を整え、お茶の準備をしておかなければならなかった。「遅い！」と彼は言った。そこで彼は振鈴の鳴る二〇分前に起床し、時間前に全てを用意したが、また叱りを受けた。「そんなに早く起きるな、お前は私の睡眠の邪魔をした！それは自分勝手なやり方だ、他の者と同じ時間に起きなさい」

私は真つすぐな棒を飲み込んだように感じました。私はよい生徒になろうと努力することすらできなかつたのです。私はいい案もなく動くこともできませんでした。「ふーむ！」としか言葉がありませんでした。私はいかなる尺度も先入観も持たずに、物事をよりよく理解しなければならなかったのです。それが無私の意味するところです。

この期間に俊隆が岸沢から学んだことの中で、岸沢の継続的な礼拝修行ほど、強い印象を受けたものはない。朝のお勤めの間、修行僧たちは座具を敷いて床に跪き何度も礼拝しながら、釈迦牟尼から有名な一四世紀の師匠、瑩山禪師に至る祖師たちの名前を朗唱した。その後岸沢は自分の部屋に戻りお勤めを続け、自分の師匠に至るまで連綿と続く師匠の名前を朗唱するのであった。彼は朗唱しながら、何回でも礼拝した。ときどき俊隆が岸沢の部屋に入っていくと、ちようど彼が礼拝していることがあった。彼の座具は額の触れるところが擦り切れ、皮膚の脂で黒ずんでいた。西有穆山は岸沢の頑固な性格を削ぐために、礼拝を何回でも続けるように教えた、と岸沢は言った。そして彼は師匠に対する敬意の念から毎日礼拝を続けていたのである。

礼拝することは非常に重要で、最も重要な修行の一つです。礼拝によって私たちは自己中心的な観念を排除することができます。私の師匠の額の皮膚は固くなりました。それは、彼は自分が非常に強情で頑固な人間であることを知って

たので、そのため礼拝に礼拝を重ねたからです。そして彼は常に師匠の叱責の言葉を聞いていた。礼拝を続けました。彼は三二歳で出家得度しました。彼の師匠は常に彼を「最近得度した奴」と呼んでいました。もし私たちが若いときに得度していれば、自我を除くことはより容易でしょう。しかし私たちが非常に頑固で自分勝手な観念を持つている場合は、それを除くことは非常に困難でしょう。彼は得度が遅かったので、常に叱責されました。実際は彼の師匠は、彼を叱責していたのではなく、彼は弟子を非常に愛していました、彼のその頑固な性格故に。

* * *

私たちは
生半可な悟りに
用心しなければなりません。
特に悟りに誇りを持つことに、
用心すべきです。

*We should be very careful of
half-baked enlightenments,
and especially of taking pride in our enlightenment.*

摂心は文字どおり精神の集中であり、一日ないしそれ以上の間連続的に坐禅をすることである。これは禅の修行にとって不可欠な要素であり、修行僧の中には通常の坐禅に加えて、年に一回ないし数回の摂心の修行を続けている者もある。

俊隆は一月一日に始まる七日間の摂心を行った。

これは八日目の朝、仏陀の悟りを祝う儀式で終了した。伝承によると、この悟りは釈迦牟尼が同様の期間、精神を集中し結跏趺坐と没我の修行を行った後、暁の星を見たときに得たという。道元が身心を脱落して、後に師匠の天童如浄から心印を授けられたのは中国において一心不乱に坐禅をしていたときであった。永平寺ではこの週は、寺の行事は最小限に縮小され、ほとんどの修行僧や大勢の老僧たちは朝から夜中まで坐禅を続けた。これは且過寮のような試練ではなかった。短時間歩行する経行きんぎょうと簡単なお勤めが慣例となっている儀礼的な応量器の食事が含まれた。

俊隆は他の摂心に参加したことはあったが、このように大勢が参加し指揮されたものは初めてであった。

三日目に彼は足にひどい痛みを感じたが、五日目までには耐えられるようになった。七日目の摂心が終わるときには、永久に摂心を続けられるような気がし

た。摂心が終わって間もなく彼の永平寺における最初の修行期間は終わったが、俊隆のここでの生活はまだ始まったばかりであった。

この年の春ランサム女史が、在家修行者のための簡易化された修行に参加する目的でやってきた。彼女の存在に対する当初の拒否反応が治まった後、彼女のスタミナと礼儀正しさに感心した修行僧たちに彼女は受け入れられた。俊隆は、ほかに英語を話すことができず者がいなかったもので、当然ながら彼女の担当を任された。そしてこのときもまた、誰もがこの小柄な僧侶と長身の女友達の姿に感銘を受けた。彼女は韓国を訪問したときの写真を持ってきた。韓国では、彼女は俊隆の僧侶仲間の人で、俊隆が彼女の家を出た後、彼女のハウスボーイになった杉岡と一緒に寺を泊まり歩いていたのであった。俊隆は、彼女に自分の剪定した庭の周辺の木々や、彼が手入れをした庭園を見せ、岸沢老師との喫茶にも彼女を連れていった。夏には、俊隆は永平寺を出て一ヵ月間を藏雲院で過ごした。ランサム女史も彼に同行し、大概は近くの可睡斎かすいさいという大きな寺に宿泊した。例によって、彼女が俊隆と一緒に行くところはどこであれ、その人々にとっては西洋

人を見るのは初めての経験であった。そして彼女は強い印象を与えた。

「それはしないで！ それをしてはいけないのよ！」。ランサム女史は、俊隆の妹、愛子が食事の入った椀や皿を注意深く積み重ねて持ってくる、彼女に言った。英国でも永平寺でもこのように食事を運ぶ習慣はなかった。彼女は夕飯に酒を出すことを認めず、そしてよいキリスト教の牧師はタバコも酒も嗜まないと言ひ、祖学の喫煙をたしなめた。愛子はこの尊大な婦人をどう扱ったらよいかわからなかったが、彼女の訪問には慣れた。彼女は外国の婦人は皆このように大胆なのだろうかと思つた。俊隆はランサム女史の意見は尊重したが、彼女が正しいと認めただけではなかった。しかし、彼女との議論には立ち入らなかつた。それは、彼女は間もなく中国に帰ることになっており、感情を高ぶらせるときではなかつたからである。

続けるように、と助言をした。彼は彼女の長く白い絹の布団、ベッドとラタンのソファは彼の寺に残し、彼女の帰りを待っている、と言つた。彼は彼女との別れを非常に寂しく思つた。

彼女は天津に戻つてから、かつて私たちの間で問題になつた、かの仏陀の写真を送つてくれました。彼女はアルコーブのある壁にその仏像を祭り、毎日香を供えていると言つていました。

一期七日間ある撰心の二期目の修行を終え、俊隆は祖温に永平寺での修行を続けたいと伝えた。永平寺に滞在し岸沢に仕えることによつて彼の目は大きく開かれた。彼はさらに修行すべき長い道のあることを実感した。そして道元の創建した偉大な寺で道元の道に従うことが最高の方法であろうと思つた。彼は祖温に、僧侶の修行が実際どのようなものであるかを発見した場所である永平寺に引き続き留まりたい、と語つた。俊隆は特に、彼の坐禅が深みを増したと感じていたので。坐禅は彼の修行の一部となつてはいたが、永平寺におけるほどには強調されてはいなかつた。ここで彼は朝一番に坐り、夜は一番遅くまで坐つた。

祖温は俊隆に言いたいことを言わせた後で、彼が予期しなかつた観点から答えた。「へぼキュウリめ、注意しろよ、さもないとお前は腐つたへぼキュウリになつてしまふぞ。一年で十分だ！ お前を鼻持ちならぬ永平寺の生徒などにはさせない！ すぐ總持寺に行け」。彼は曹洞宗のもう一つの主要な修行寺を持ち出して言つた。またもや彼は祖温に押し潰された。

永平寺に帰る汽車の中で、彼は師匠の言葉を再現してみた。そこで残された時間はわずか二カ月であつた。そしてその二カ月間は、緩やかな夏の日程であつた。物思いに沈み、汽車が山の多い福井に向かつてゆつくりと走行している間、彼は過ぎ去つた年月を思い起こしていた。離れていたことで、その素晴らしさが、一層強められた。永平寺には尊大さの臭みはあつたが、計りしれない価値もあつた。だが彼がそこに滞在している間、永平寺は少しも特殊なものではなかつた。

私たちにとつては、僧堂の生活は私たちの日常生活です。都会から来た人たちは特殊な人たちであり、私たちは、「ああ、変わった人たちが来た」と思つていました。このことを深く感じたの

は僧堂の外部にいた人たちです。修行をしている者たちは実際には何も感じていないのです。これは全てについて言えることだと思ひます。

寺に着くと、俊隆は巨大な二重の門をくぐり、階段を上つて行つた。遠くから、修行僧たちの読経の響きと、大きな木魚を叩く音、どらの深く鳴り響く音が聞こえてきた。彼は杉の香りを嗅いだ。すると、抑えきれない感情がこみ上げてきた。それは単なる永平寺ではなかつた。彼は、彼自身に帰つてきたのだ——存在する全てのもの、説明できない全てのものに。彼は泣き崩れた、そして一涙が私の口、目、鼻から流れ落ちました。

眞の修行は他のものとは比較できないものです。より偉大で、より深いものです。それは非常に偉大であるので、通常の経験とは比較できないのです。

一九三一年九月一七日、俊隆は永平寺から横浜の總持寺——彼が修行を続けるために祖温が用意した寺——に行く汽車に乗つた。彼はその翌日日過寮に入つ

住職 1932-1939

CHAPTER 5

Temple Priest

木が独力で立っているとき、
私たちはその木を仏陀と呼ぶ。

*When a tree stands up by itself,
we call that tree a buddha.*

一九三二年四月の初め、鈴木俊隆は渋谷總持寺を去り、家族の住む蔵雲院に移った。彼は二七歳で正規の修行を終え、幼少期以来初めて、訪問者としてではなく、住職として地方の寺に住むことになった。俊隆の妹とりと愛子は学業を終えたがまだ家で暮らしていた。

彼の母は年来病弱であったので、愛子が彼の身の回りの世話をした。彼女は非常に行き届いていたので、寺の訪問客は彼女を俊隆の妻と勘違いした。彼女は彼や彼の客人に仕え、洗濯をし、朝は彼の衣類を整えた。彼女は彼の法衣を完全な形で揃えておかなければ

ならなかった。それは、彼は洋服や靴は身に着けなかったが、僧侶としては人一倍服装に気を遣っていたからである。彼女の母がかつてそうしたように、愛子も地元の少女たちに裁縫を教え、家庭の裁縫婦になっていた。俊隆は彼女が畳の上に坐り、猫を膝に載せて彼の法衣を縫っているのをしばしば見掛けた。いつも彼女の着物は猫が爪を研ぐ部分がぼろぼろになっていた。

永平寺で俊隆には、洗練されてはいるが渋い法衣の趣味が身に着いた。彼は儀礼用の色彩豊かな法衣を着ることを望まなかった。特に法衣の上に着る派手なお袈裟を嫌った。お袈裟は元來控えめな色を意味するサンスクリット語であり、自分のお袈裟には永平寺の僧侶たちが着ているような黒、藍色と茶色のものを好んだ。お袈裟はインドに起源を持つ、得度るときに着る継ぎ剥ぎ細工の法衣のことである。元來はぼろ布で作

られたもので、僧侶の自発的な貧困を象徴するものであった。道元は天皇からの御下賜の紫の法衣を二回も辞退したことで知られている。周りの人たちからは何か派手なものを期待されているかもしれないが、俊隆は華美な衣装を着て、鐘や太鼓を叩きながら興行を宣伝し町を練り歩く都会から来た役者、チンドン屋の一人のように感じることを嫌った。

俊隆が藏雲院で最初に執り行った葬儀は、裕福で立派な老人のためのものであった。俊隆は自身の哲学を守り、黒の法衣と茶色のお袈裟を着用した。彼は全てが順調に進んだと思っていたが、後になりその家族が彼に腹を立てていることがわかった。「なぜあなたは師匠が着たような美しい衣を着なかつたのか」と寡婦は詰問した。彼は自分のことだけを考え、その家族を辱めたと彼らは思った。今や彼は在家の人々と定期的に接触し、彼のような若年者にしては、地域社会で重要な地位を占めていたのである。彼は調和を醸し出すような態度で振る舞うことが求められた。結局のところ、彼は自身の考える正装に頑なに固執することで、彼らの人生において大切な場面に彼らの気分を害すようなことをするのはよくないと悟った。全く逆説的ではあるが、それは優雅な法衣を大切にすることと同じ

であった。

私たちは物質や衣の外観に執着すべきではないと思います。豪華なものでも結構ですし、見すばらしいものでも結構です。これが私の現在の態度です。しかしその当時は自分が身に着けるものにかかなり固執していました。

祖学は藏雲院での重要な役割を果たし続けていた。

俊隆はしばしば藏雲院を留守にし、林叟院で祖温の手助けをし、二つの大きな著名寺院、可睡斎と大洞院で、祖温が務めていた役割を引き継いでいた。ここで彼の仕事は雲水に講義をすることと坐禅を指導することであった。俊隆は自分の務めに活気ある情熱を注ぎ、永平寺と總持寺で学んだ教えと修行に、ほとんど熱狂的とも言える態度で献身的に取り組んだ。愛子と結婚することになっていた僧侶の内山達三は、俊隆が恐ろしく誠実な僧侶であると思った。それは彼が在家の参禅グループである坐禅会を指導したとき、懇やかな口調で、「私たちは道元の禅修行を守り、そのままの繁栄のために、励んでいかなければなりません」と語ったからである。当時このような調子で話を

する僧侶は珍しかったと内山は語っている。俊隆の話しぶりは、岸沢との継続的な交流により受けた影響が大きかった。

私の師匠の岸沢老師は、誓願、すなわち達成すべき目標を持たなければならぬと常に言っていました。私たちの目標は完璧なものではないとしても、それでも必要です。それは戒律のようなものなのです。たとえそれがほとんど遵守できないようなものであつたとしても、それは必要です。目標あるいは戒律がなければ、私たちはよい仏教徒にはなれません。私たちの道を実現することはできません。

彼は岸沢との関係を、永平寺を去ると同時に終わらせたくなかつた。運よくこの偉大な師匠の居住の寺がその頃、林叟院から五キロほど離れた所にある、さほど大きくはない林叟院の末寺、旭伝院あしたんえんに変わった。一九三二年五月一日、俊隆は祖温の祝福の言葉と共に、岸沢の下を訪れ、引き続き彼について学ぶことを

許可してほしい、とお願ひした。岸沢は了解し、俊隆にとつて二番目の師匠である参学士さんがくし（参禅学道士の略、従者^{*}）となつた。彼は相変わらず祖温の弟子ではあつたが、以後の彼の仏教についての理解はほとんど岸沢に負うものであつた。

岸沢はこの国で最も著名な仏教学の講師の一人となつていた。そして俊隆は道元の独創的な著作、「正法眼蔵」についての彼の講話を聴きに行った。俊隆は個人的指導を受けたり、危機に遭遇したり、修行について重大な転機にさしかかつたときは、旭伝院を訪れ岸沢に相談した。

岸沢は修行の中心となる坐禅を捨て去ることはなかつた。ほとんどの住職は修行期間を終えた後は、毎週ないし毎月行われる坐禅会を除いては坐禅をしなかつた。岸沢は、彼の学人がくじんである俊隆に対し実例を示し、正式な修行を捨てないように、と訓戒を与えた。藏雲院には禅堂はなかつたが、坐禅は禅堂に依存するものではなく、身体一つでよいのである。

森町に住む地方の陶芸家、鈴木静邨しずかむらは俊隆と少女と

*原著には随身とあるが、参学士が正しい。

汽車の切符の話を好んでした。俊隆が自転車に乗ってちやうど森町の駅に着いたとき、その少女が泣いているのが目に留まった。彼女は母親が彼女にキャンデーを買ってくれるお金がないのだと言った。

「泣くんじやない」と彼は言った。「私がキャンデーを買ってあげよう」。彼は少女に好きなものを店で選ばせ代金を払った。切符を買いに行くと、彼はお金が足りないことに気がついた。そこで彼は駅長と交渉して、駅長から焼津の駅に電話をし、切符代を後払いにしてもらうように手配した。俊隆が焼津に着くと、駅長が彼を駅長室で待っていると、従業員が伝えた。駅長は俊隆にお茶を出し、しばらく話をした。最後に駅長が今までこういうことを手配した例はなかったと話したので、俊隆は自分が切符を買わなかったことを思い出した。彼は謝って翌日森町に帰るときに支払うと約束した。翌日彼が帰るとき駅長に会ったが、俊隆がまたもや切符代を払うことを忘れていたので、駅長は呆気にとられた。最後にそつと注意を促すと、ようやく彼は思い出し代金を支払った。やがて焼津や森町の人たちは俊隆の呆れた行動に大笑いをした。陶芸家の静郵は俊隆に言った、「運賃後払いの乗り心地はいかがでしたか」。

俊隆の兄弟弟子の憲道と祖光は、大方の時間は林叟院の責任者という立場にあった。それは、祖温が近隣の静岡の寺で修行の指導をしていたからであった。俊隆がある日の夕方、早い時間に林叟院に着いてみると、憲道と祖光は映画を見に外出していることがわかった。彼は祖温がこうしたことを嫌っており、彼の弟子たちも厳しい師匠に気晴らしをしていることを知られたくないことを知っていた。彼は、祖温だけが置く憲道と祖光が帰ってくると、下駄を見て恐れおののいた。俊隆が障子の蔭で大笑いをする声を聞くまでは。

* * *

物事は常に変化している、
それ故いかなるものも
あなたたち自身のもではありません。

*Things are always changing,
so nothing can be yours.*

僧侶は一九世紀以来結婚していたが、いまだに論議的となっていた。俊隆の両親が結婚した当時は、僧

侶の結婚は合法的であつたものの、彼が松岩寺で生まれた頃は、婦人の寺での宿泊禁止が、依然として曹洞宗の規則の中に含まれていた。俊隆の法系に連なる師匠たち——西有、丘、岸沢——はいずれも結婚していなかつた。祖温は正式には結婚していなかつたが、俊隆は好むが祖温の妻であると考えていた。つまり、俊隆にとっては、彼の父親も師匠も共に結婚していたのである。日本の諺にあるように、「蛙の子は蛙」である。そこで彼が藏雲院に定住した直後に、俊隆の結婚が準備された。選ばれた若い女性は、俊隆と英語に対する関心を分かち合い、ランサム女史が中国に帰る前には、彼女について勉強もしていた。二人はよい組み合わせであるように思われた。

しかし彼らが結婚して間もなく、新妻が結核と診断された。彼女は入院し、六年前に彼が回復したときと同じように、彼女の回復が期待された。しかしときの経過と共に、彼女の病状は改善せず、寺の妻としての義務を果たせないだけでなく、藏雲院では適当な看病もできないことが明らかになった。たとえ回復したとしても、人々は結核にかかることを恐れていたので、

結核にかつたことに偏見がまとわりついていた。深い悲しみの中、俊隆と彼の妻は結婚解消に同意した。彼女は両親の元に戻り、そこで手厚い看護を受けた。彼は彼女の看病をしたいと思つたが義務に縛られていた——まず、僧侶としての義務があり、家庭人としての義務はその次であつた。彼はこの妻のことは滅多に語らなかつた。彼女の名前とその結婚に関する日は忘れられている。

一九三三年の一月、長らく健康を害していた俊隆の父、祖学が永眠した。彼はよき夫、よき父であつた。彼は、長い人生の最後の七年間を、藏雲院で過ごすことを可能にしてくれた自分の息子を誇りに思つていた。彼の遺体は本堂に安置された。俊隆と彼の母が、弔意を表し、焼香に訪れた近隣や檀家の人たちに對して挨拶をした。とりと愛子は客人に坐蒲団を渡し、お茶と食事でもてなした。二九歳で俊隆は家庭の長となり、名実共に寺の責任者となつた。

一九三四年四月末、祖温は副監院の役を引き受けるために永平寺に行つた。彼は寺院の運営管理、そして

*原著には前世紀（一八世紀）とあるが、一九世紀が正しい。

僧侶の修行の双方に携わることになった。永平寺に着いて三日目の昼食後に、彼は「厠かまどに行く」と言つた直後、発作を起こし堂内で倒れた。彼は、福井病院から療養のため林叟院に移されたが、症状は悪化した。一週間後の五月三日、祖温は五七歳で遷化した。

祖温は常に昂然と歩き、相手を見ずに挨拶したが、それでも数百人の在家の人々や僧侶が彼の葬儀に参列した。彼の遺骨は、彼が管理していた藏雲院と林叟院の双方の寺に納められた。俊隆は藏雲院での納骨式を取り仕切つた。祖温の涙の型をした花崗岩かこうがんの新しい墓碑が歴代の住職の列、祖学の墓の隣に据えられた。納骨式の間、般若心経を唱えながら、俊隆は箸で祖温の骨を少し拾い上げ、台座の開口部に入れた。それから竹の柄杓ひしやくを取り上げ、水を墓石に注いだ。彼は祖温のこうした所作を何回見たことであろうか——一八年間、ちようどこで始まり、ちようどこで終わるのである。俊隆は、他の誰よりも、彼の人格形成に多大な影響を及ぼしたこの男についての想い出が山ほどあつた。もう二度と「へばキユウリ」と呼ばれることはないだろう。しかし彼は師匠の死にそれほど心を動かされていなく、ことに気づかずにはいられなかつた。好は葬儀には出なかつた。しばらく彼女は仕事を手

伝つたり花を活けたりして林叟院に滞在していた。一度俊隆の母が訪ねてきたとき、好は二階に上がり隠れてしまつた。それからある日、彼女は祖光に、祖温の法衣を藏雲院の俊隆の元に届けさせた。彼女は林叟院を出て、森町の彼女の家族の元へ帰つた。

ランサム女史と妻との離別、そして父親と師匠の死から、俊隆は、全てのものは変化し人生は苦である、という古いにしへの仏教の教えを、身をもって実感した。彼が感じたのはただ単に彼自身の苦しみと無常だけではなく、他の全てのものの苦しみであり無常であり、そこには何の差異もなかつた。祖温と共にあつた年月と駒澤大学、永平寺、そして總持寺で過ごした歳月を振り返り、彼は自分の犯した二つの大きな過あやまちちに気がつた。一つはもつと熱心に努力すべきであつたということ。彼は修行の機会がいかに貴重なるものであるかを実感せよ、と言つた祖温の度重なる訓戒を思い起こした。祖温の「時間を無駄にするな！」という言葉について、当初彼は、昼夜休みなく修行せよ、という意味があるいは、夜を徹して修行することはできないので、少なくとも夜中は行儀よく振る舞え、という意味かと思つた。後日祖温は説明した。「仏教を理解することは、時間を無駄にしないということだ。もしお前

が仏教を理解しないならば、お前は時間を無駄にしているのだ」。彼が少年だった頃は、それは都合のいい論理にすぎないように思われ、励まされるというよりは、むしろ混乱させられるものであった。彼は今、師匠の言葉を理解し始めていた。たとえそれは師匠の人格ではないにせよ。

もう一つの過ちは、「段階的な禅」の修行、計画的な取り組み方についてであった。

実際私たちが話していることは、悟りと修行と一体であるかということについてです。しかし私の修行は段階的な修行でした。「私は今これだけ理解しているので、来年はもう少し理解するでしょう、次にまた少し」という具合に理解を深めていく」。このような修行はあまり意味をなしません。恐らくあなたたちが段階的な修行を試みたならば、それが誤りであることに気づくでしょう。

彼は自分の修行、生活、受けている教えや学んでいる教訓を有機的に組織化することができないことがわかり始めてきた。彼はこうした全てのことを越くままに任せ、自然に成熟するがままにしておく他なかつ

た。わずかず調整する他なかつた。方法は、常時過去や未来のことを考え、全てのことを識別しようとはせず、瞬間瞬間に全感覚を用いて完全な体験をすることである、ということがほのかに見えてきた。彼が到達しようとしていたものは、「全ては一つであるから、越くままにしておけ」といった何か不明瞭な取り組み方ではなかつた。それは一体性という観点を含みながら、それとは反対のこと、つまり——普遍的な意義といった曖昧な観点ではなく、各瞬間、各事物が區別され、注意深く取り組まれるべきであるという観点も含んでいた。

俊隆が住むために、最初に蔵雲院に帰ってきたとき、俊隆はこの点について祖温と議論をした。俊隆は全てのもは一つであるということとは了解できるが、それぞれが異なつたものでもあるということは了解できない、と説明した。しかし、俊隆の学んだところによると、いずれも真実であると教えられていた。祖温は簡単に言った、「空と実在——いずれかに固執するならば、お前は仏教徒ではない」と。

私たちの毎日の生活が繰り返しであると考えるのは、私たちの生活が非常に習慣的で、非常に強

固に機械的な理解の上に基盤を置いてあるからです。しかし実際はそうではありません。誰も同じことを繰り返すことはできないのです。あなたが何をしようと、次の瞬間にすることは異なっています。私たちが時間を無駄にしてはならないという理由はこれです。

多くのものを失い、状況が著しく変化した現状において、俊隆が自分の思考体系や信条を捨て去り、恒久的に頼るべき人も、ものも、観念もなく、ただ世の中にあつて、一步一步着実に歩いていくことはより容易になつていた。彼には自分の任務と、岸沢、母親、仲間、僧侶たちと若干の友人たち——特に憲道と陶芸家の静郎との関わりがあつた。しかし彼は誰に対しても特別な執着は持たなかつたし、孤独をひどく悲しむこともなかつた。——彼の人生は歩みを続け、祖温の死は次の大きな段階へと彼を導いていくのであつた、多大な苦難へと。

* * *

物事はあなたたちが期待するようには
いかないで、

苦が生ずる。

*Because things don't actually go as you expect,
there is suffering.*

祖温の突然の死は林叟院に空白を生んだ。恐らく祖温はそこで気楽に引退後の生活を送ることができようにと考えていたのだろう。さらに祖光が祖温の持ついた管理能力を備えていると思つたことも手伝い、彼は甥の祖光を住職にしようとしつけていたように見受けられた。祖温が永平寺に滞在している間、誰が彼の代わりに林叟院を運営しているか、ということについて誰にも心配を掛けずに、住職が不在に留まつていることができたであろう。こうした方法で彼は祖光がその地位に就きやすくし、徐々に檀家のコンセンサスを築くことができたであろう。しかし今は住職の決定は檀家の種々の派閥を代表する総代会で評決されることになつた。

義山良演ぎざんりょうえんという名の年老いた僧侶が林叟院を引き

継ついでごうと企てた。彼は、先代の住職である、大庵良潤だいあんりょうじゆんの兄弟弟子であつた。林叟院の運営が傾いたために、曹洞宗宗務庁から祖温と交代するように依頼されたのだ。良演は檀家の間で強い支持を得ており、特にこの地方の僧侶の派閥から支持されていた。最初誰も

彼に反対する者もいなかったもので、彼は林叟院の業務に手を出し始めた。

ところが、良演がこの寺を彼の法系に取り戻そうと考えていることを嫌う檀家が大勢いた。こうした人たちの中には祖光が住職になることを支持する者もいた。しかし彼はまだ東京帝国大学^{*}に在学中で、祖温からの嗣法も受けておらず、年齢的にもかなり若かった。また、ある程度の影響力を持っていた好は彼を好いていなかった。彼女は俊隆が住職になることを望んだ。

私が師匠の寺を引き継ぐ前は、いかなるトラブルも起こしませんでした。私はただ勉強しようとして心がけていました。しかし、師匠の寺を引き継ぐと決意した後は、私はいろいろな問題を、私自身にも他の人たちにも引き起こしました。私の生活には混乱が生じました。多くの混乱が、です。私は、もし彼の寺、林叟院を引き継がなければ、藏雲院に留まらなければならぬだろうということとはわかっていました。その方がより平穩で勉強

もさらにできたでしょうが、私は引き継ぐ決意をしました。それから二年間混乱と戦いが続きました。

俊隆は彼自身の住職就任については雑多な感情を持っていた。一方において、林叟院と連携している二〇〇の末寺には大勢の優れた年配の僧侶がいた。林叟院の住職は彼らに對しいくらも権限も持っていなかったにもかかわらず、時折行われる重要な儀礼の際には、中心的な役割を果たすよう求められていた。その際、彼のどんな些細な立ち居振る舞いの誤りも、その地位の適格性を問われる原因になるのであった。しかし彼はまた、祖温の第一弟子として、祖温が何を望んでいるかを心得ていると思っていた。祖光の就任は時期尚早であるし、他の者たちの野望に利用される可能性もある。そして良演と良演の支援者たちは間違いない林叟院にとってはためにならない、と彼は思った。俊隆は祖温の一六年に及ぶ努力が無に帰するのを見るのは忍びなかった。彼は林叟院が強欲かつ野心的な僧侶の手に落ちる事を食い止めなければならない、と決

^{*}原著には駒澤とあるが、東京帝国大学が正しい。

意した。俊隆は重要な檀家、特に寺の総代会の会長であった甲賀氏との結びつきを強固にする間は目立つこととは避け、辛抱強く進行中の議論に加わった。彼は実際にはいらいらし腹を立てていたが、そうした感情を抑えていた。

一部の者たちは、彼が祖温の高い理想を体現する候補者であると認めていた。その他の者たちは彼がまだ若過ぎると思っていた。彼は三〇歳であり、——祖温が四二歳で住職になるまで——五〇歳以上の者が林叟院の住職になる、という不変の伝統を守っていた。一部の者たちは、彼は適任ではないと思っていた。彼は蔵雲院のような小さな寺には申し分のない、優れた人格の持ち主で、お勤めを取り仕切るのには巧みであるが、林叟院のような大きな寺を運営するタイプの人間ではないというのであった。彼は自分の帽子を見失わないようにすることさえできない人間だ！と。

大小の会合を重ね数ヵ月が過ぎた。甲賀氏は、以前は良演の支持者であったが、今は俊隆に傾いていた。相光は競争から手を引き、別の師匠の弟子となつて、俊隆を応援した。岸沢は慎重に、彼もまた俊隆の方がよいと示唆した。甲賀氏がこうした全ての点を考慮している間に、俊隆は一つの提案をした。彼自身の力量

を証明するために三年の試行期間をもらいたい、もしうまく行かなければ辞任する、というものであった。通常の試行期間は、もしそのようなものがあるとすれば、一〇年であった。俊隆の提案は決定の重みを軽くした。ついに曹洞宗の長老、徹道てつどう春光老師こうくわうが、俊隆の三年間の試行期間を承認する判を押した。総代会も了承した。

これには多大な時間がかかった。総意、というのろまな動物が這い回っている間に、俊隆はすでに林叟院に住み、林叟院と蔵雲院の間を往復しながら仕事を始めていた。彼は承認を得るや否や直ちに、総代会と檀家に対し、もう一つの大きな問題を検討するよう提案した。彼は結婚しようと思っていたのである。

蔵雲院の近くに梅林院ばいりんえんという名の寺があった。その住職は祖温の古い友人であり、俊隆の親しい相談——特に実務的な問題について——相手であった。陶工の静邨と俊隆は当初梅林院で会い、今は足繁く通い暮を打っていた。ある日住職は俊隆に、再婚の潮時であること、そして彼には心当たりがあると話した。俊隆は僧侶としての自信はあるが、家庭人としての能力には自信がないと答えた。しかし俊隆は同意し、彼女

も同意のうえ、二人は会った。村松ちゑは二二歳で、僧侶の娘であった。彼女の父は可睡斎という大きな修行道場の会計係であり、俊隆は藏雲院を引き継いで以来、そこで若い僧侶を教育していた。ちゑは俊隆が結婚から回復したことを知っていた。彼は結婚を思っていたという欠点（汚点）にもかかわらず、彼女が結婚してくれたことに常に感謝していた。

林叟院の檀家の中には僧侶が結婚することを快く思わない者もいた。彼らは、好が大黒様で、非公式で控えめでいる限りは受け入れた。妻ということとは子ども（がいる家庭）を意味するが、寺にはいまだかつて家族が住んだことはなかった。多くの者たちは、ほとんどの僧侶が妻や家族を伴わなかった時代を記憶していた。檀家の一人は、俊隆の家族は寺以外の所に住んだらどうかと提案した。他の一人は自分の家を勧めた。俊隆は、祖温が内縁の好と一緒に寺に住んだ先例ですでに作っており、彼らの考えの方が極端だと思った。しかし好の控えめな役割と妻の役割とは違いがあった。一九三五年二月に俊隆とちゑが結婚したとき、ちゑは林叟院ではなく藏雲院に移り住んだ。その年、亥の年の十一月一日に、彼らの最初の子ども、安子という女の子が生まれた。

林叟院の有力な檀家であった天野源一は、亡くなった先祖の世話人としての役割に加え、仏教を解脱の道として考える数少ない在家の一人であった。ある日林叟院の総代会の役員たちが彼に俊隆の新しい義親（義務的な親）——ゴッドファーザーのような者——になるように依頼した。天野はそのような責任を負うことには気が進まなかったが、何も特別なことをする必要はないと保証されて受諾した。そのような心もとない発端から、生涯続く信頼と友情の關係が始まった。

一九三六年四月二三日、鈴木俊隆は儀礼上、天野源一の家庭に入った。そこを彼の家とし、天野を名親とするための儀礼であった。そのときから、彼の出生の家族歴は消されることはないものの、彼は天野を父と呼び、その家の息子と見なされるのであった。それから彼は正式に林叟院に入り、晋山式を行い、三六代目の住職の地位に就いた。妥協の策として、彼の競争相手であった、遙か年上の良演は、名目上三五代目の住職として記録され、儀礼で彼は引退し、俊隆に寺を引き渡した。

俊隆は二つの寺を持つことになった現在では、可睡斎と大洞院で僧侶たちの指導をするという重要な役目

を辞任した。彼は多忙であつた。林叟院にまつわる権力闘争は、檀家間に多大な軋轢ちんれきを生んだ。俊隆にとつては異常な時期であつた。彼が寺を引き継いだ直後に、八〇家族が他の寺に移つた。彼は彼らを慰留するために何もしなかつた。月例の総代会と檀家総会の席上で、俊隆は彼らを慰留しなかつたことを手厳しく批判された。彼はこれらの家族が逃げ出さないようにするために助力を求めなかつたことは無責任だと非難された。「林叟院がこのようなへまをするようでは、どのようにに協調を取り戻せるというのか。これはお前の責任だ」と彼は言われた。俊隆は焦りと癩癩を懸命に抑える努力をした。議論することは避け、彼は、三年間批判せずに仕事を任せてもらいたい、と彼らに頼み、了承された。

一四七一年^{*}に創建された林叟院には、長い歴史があつた。俊隆にとつてより重要なことは、林叟院が禅堂を持ち、明治時代には多くの僧侶が住んでいた、修行寺であつたという事実であつた。彼は林叟院が過去の栄光の日々に戻り、僧侶も在家の人々も、共に修行ができる寺に発展することを望んだ。彼は、祖温が寺を正常な形に戻し、虚裏の改装を完了させる手助けを

したが、まだやらねばならないことが多く残つていた。

俊隆が先導した指導の最初の三年間に、林叟院の檀家の集まり、建物、庭園はよい状態になつた。かつて林叟院を去つていったほとんどの檀家は戻つてきた。俊隆は、人格と伝統的価値を備えた、親しみやすい、穏やかな僧侶である、との評価を得た。祖温は尊敬されていたが、檀家の人々は、彼がいるときに寺に行くことを恐れた。俊隆が引き継いでからは状況が変わつた。林叟院は地域社会の中心のような場所になり、いろいろなグループが集まつて仏教を研究し、技芸を習い、政治を議論し、隣人の問題を解決し、小さな宴会や祝賀会を開いたりした。

一九三九年、俊隆が住職になつてから三年が過ぎたとき、俊隆は総代会長の古賀の家を訪ねた。お茶を飲みながら、俊隆は彼らとの協定に従い、自分の任期が終わったので辞任したい、と申し出た。「なんの協定だつて」と古賀は言つた。「なんのことだか私にはわからない」。

* * *

痛みに耐えることができる唯一の方法は、

痛むままにしておくことである。

*The only way you can endure your pain
is to let it be painful.*

一九三八年、安子はほぼ二歳半になっていたが、父親は彼女にとってはほとんど他人のようなものであった——彼女には、彼は蔵雲院ではなく彼の住んでいた林叟院の人間であった。彼が蔵雲院にきたとき、彼が呼んでも近づいてこなかったの、彼女を抱き上げることはほとんどなかった。しかし彼が布団に坐って新聞を読んでいると、彼女はそつと彼の後ろに回り、新聞をひたたくろうとして言った。「駄目、これはよねお祖母ちゃんのだ！」

よねは小さな安子にとってはもう一人の母親のようなものであった。彼女はよねお祖母ちゃんが彼女の母親の背中に鍼を打つのをうっとり眺めるのであった。ちゑが夕飯の支度をしている間、よねが家族の着物を繕っている傍らで彼女は坐って遊んでいた。僧侶、隣人、職人、檀家そして俊隆が来てはまた去っていった。管理人は非常勤で働いていた。憲道が俊隆の仕事に補佐することになっていたが、彼もまた他の仕

事でしばしば寺を離れていた。そのため蔵雲院には鈴木家の三人の女性しかいないことが多かった。

一九三八年四月のある日の夕刻、よねは兔の餌を取りに野原に行った。暗くなっても彼女は帰ってこなかった。そこでちゑが彼女を探しに出掛けた。時間が過ぎた。安子は一人ぼっちで寂しくなった。寺の裏山で鼻が鳴く声が聞こえてきたので彼女は恐ろしくなった。そのとき、下の方で母親の泣き叫ぶ声が聞こえた。よねの身体が運び込まれて家庭の仏壇の前に横たえられた。安子は一生懸命によねお祖母さんと呼び覚まそうと努めたが無駄であった。

噂が広がり村人たちが集まってきた。ある者は林叟院にいる俊隆に伝言するために町に行った。四時間経っても彼が到着しないので皆が心配した。とうとう夜半過ぎになってようやく彼が現れた。彼は汽車の中で居眠りし、森町の駅を通り過ぎて山の中まで行ってしまった。噂が広まった。彼は自分の母親が死んだ日に、家族と合流する大切なときに途中で眠り込んでしまった。彼の心は雲の中を彷徨っていたのだ。

*原著には一四九三年とあるが、一四七一年が正しい。

一九三九年、鬼の年に息子が生まれた。俊隆の依頼で、梅林院の住職が彼に名前を付けた——包一ほういち、一を包含するという意味である。その後、同じ年にちゑと子どもたちは森の蔵雲院から焼津に移り、古賀家に滞在した。間もなく俊隆の家族は、林叟院に彼と共に住むことになるが、彼らが寺に入るのには、住職の地位を勝ち取るよりも長い時間を要した。彼らが一緒に持ってきたものは、ランサム女史の布団、ラタンのソファと椅子だけであつた——彼女が中国から戻りここを訪ねてくるかもしれない、という願いと共に持ってきたのである。俊隆は蔵雲院を彼の父親の法系に留めておく責任は保有したままではあつたが、蔵雲院を岡本憲道に譲り、憲道は家族と共に蔵雲院に移つた。憲道は蔵雲院の次の住職を俊隆の弟子に譲ることを約束した——恐らくは憲道自身の息子、昭孝しょうこうに。

俊隆には、他の僧侶たちから修行を依頼され送られてきた、修行僧侶と若干の在家の生徒たちの他は、弟子がいなかつた。彼らは本堂で坐禅をした。林叟院の古い禅堂はいまだに物置であり、ネズミやお化けの部屋であつた。

俊隆は、化け物は信じなかつたが、林叟院の年若い

た番人は、山から来た化け狐が、悟りを開いて僧侶に生まれ変わるために禅堂で坐禅をした、という話をして、少年の頃の彼を恐がらせた。狐が化けるときは、ときに白い閃光が通り過ぎるのが見える、と番人は話した。禅堂の方角からしばしば聞こえる小走りに走る足音に若い俊隆はぞつとした。二〇年経つた今でも、年若い番人は、禅堂の化け物の話をして彼をからかうのであつた。

ある夏の夜、番人が禅堂の真向かいの部屋で坐つてタバコを吸いながら、友人たちと話をしていた。障子の窓や戸は部屋の涼をとるために開け放されていた。禅堂で何か変わったことが起こつているようだ、狐の化け物が戻ってきたのではなかるうか、と俊隆は年寄りたちに言つた。それから彼はそつと本堂を通り抜けて、禅堂の裏に提灯を吊るし、ほのかな光ではつきりとはわからないように、竹竿たけざなの先に付けた白い布を振つた。

「んんーん」と番人は目を細めて禅堂の方角を見つめた。彼は白いものが通り過ぎるのを見て目を丸くし、恐怖に立ちすくんだ。俊隆が戻つてくると、彼がまだ口も利けないほど驚いているのがわかつた。この件以後、番人は俊隆をからかうのを止めた。代わりに、

皆が番人をからかうようになった。俊隆は迷信を追い
払った僧侶だと言われた。

俊隆は別の迷信を追い払うことに、より一層の関心
を抱いていた——アジア征服に精力を傾けている、日
本の超国粋主義的な軍国主義の醜い亡霊である。これ
は昭和維新という理論に基づいている。彼ら曰く、天
皇を日本に君臨する正当な地位に復活させることを目

指しており、日本の他国に対するその優位性は、日本
人がその子孫であるとする太陽の女神、天照大御神に
よって保証されているというものであった。一九三〇
年代は日本の近代史の暗い谷間であると言われてき
た。この一〇年間を通じて、血気盛んな狂信者たちは
一歩後退し二歩前進する一方で、日本における民主主
義や解放政策を押し進め、独立した中国との建設的協
約を推進する進歩派は、次第に地歩を失っていった。

戦時中 1940-1945

CHAPTER 6 Wartime

私たちは自分の性癖を知るべきである。

We should know our tendencies.

一九四〇年、ランサム女史から鈴木俊隆宛てに便りがあり、彼女はもう天津には滞在できなくなつた、と言つてきた。日本軍が支配権を握り、英国人はこの新しい統治者とは反りが合わなかつたので、彼女は英国に帰ることになつた。日本が満州を占領し、一九三二年に溥儀を傀儡の皇帝に仕立てて新政府を樹立して以来、軍は中国の未占領地と東南アジアに目を向けた。

アメリカ、英国およびオランダが日本を撤退させようと排斥同盟を結んだが、彼らは多くの戦線で着々と勝利を収めていった。日本の飛行機が諸都市を爆撃し、朝日新聞は南京における市民の虐殺を報道した。ヨーロッパにおける戦争は激しさを増し、日本は中立的立

場を破り、ドイツと同盟を結ぶのではないかと言われた。政党は死滅し、軍国主義者たちが完全に東京で権力を握つた。学校では、(大日本)帝国の神話やプロバガンダが文学や歴史にとつて代わつた。

このような不安定な政治情勢の中で、俊隆は自分の置かれた社会に対し、可能な限りの援助をしなければならぬと思つた。ほとんどの人々は何が起つていのかを深く考えようとはしなかつたが、彼はより心の開かれた若い人たちと特別親密な関係を持つていた。

戦前から私は戦争に対して強い反感がありましたが、私は当時の日本の立場を正しく理解するため、地域の若者の組織を作りました。私たちは政府から好ましい人たちを招き、私たちの質問に答えてもらうように依頼しました。私が焦点を当

てたのは、戦争を阻止することよりも、日本の立場について、私たち自身について、そして人間性についての一方的な見方を論ずることでした。私は私たちは私たちのグループについて、特に大きな目的を持っていたわけではありませんでした。私はただ友人たちが日本を完全に破滅させてしまおうであろうと思われたナシヨナリズムに巻き込まれてはしなくなかったのです。それは戦争よりも危険なことです。

俊隆は主に一八、九歳の教養のある若者たちに出会った。男性は二〇歳になると軍隊に入ることになっていた。教師、芸術家、知識階級やその他の人たちもやって来て、用心深く話し意見を述べた。ときに俊隆は、日本は破壊をもたらす可能性のある性急な行動を取るのではなく、他国民と友好的に問題を解決するためには努力すべきである、と主張する意見を紙に書き手渡した。控えめかつ抑えた調子で、彼は右翼の不条理にもかかわらず、一般に受け入れられていた寛測や間違った非難に疑問を投げ掛け、偏りのない見方を奨励した。自由主義的政治家や教師は追放されたり暗殺されたりしたが、僧侶は仏教の伝統的な平和主義と弁証法

とで、自分の意見を表明することができた。俊隆は教訓的な態度やイデオロギーを持たなかったことが幸いし、右翼からの批判を免れた。しかし完全に免れたわけではなかった。

町の人々の中には、寺で行われていることを不愉快に思っている者もいた。俊隆はときどき、人々を誤った方向に導いていると批判されたが、彼の自己表現の仕方が曹洞宗の上層部に評価され、彼は愛國的な帝国主義的仏教の新しい組織の長となるよう要請された。彼らがアメリカや英国に対抗する市民の組織化を手伝うために、彼の能力を利用しようとしていると彼は感じた。彼は窮地に陥った。日本は同一国民性の上に建てられた一つの大きな家族のようなもので、私事に拘泥せず、義務に忠実であると考えられていた。辞退すれば非愛国的と見なされるであろう。俊隆は申し出をどのように処理したらよいかを熟考し、行動の方針を決めた。彼は受諾し、彼の後援者たちも満足した。祝賀の晩餐会が開かれ、そしてその翌日彼は辞任した。拒絶することと辞任することの微妙な相違が全てを違ったものにした。彼が林叟院に帰ったとき、彼も寺も面目を失わずに済んだ。

日本は長年に渡り戦時経済を続行し、アジアに新体

制を築く、という実現不可能な計画を遂行するための強力な軍事機構を構築していた。ある者は理性が勝ちを収め、西欧との妥協もあり得るのではないか、という希望を持っていた。別の考えは、東南アジアから撤退し、中国のみを彼らの勢力範囲とする、と主張するものであった。しかしそのとき狂信的な陸軍大臣、東条が総理大臣になり軍が権力を握った。そして暗い谷間は漆黒に変わった。

ある月曜日の朝、林叟院では家族だけが参列するお勤めがあった。仏陀が悟りを開いた日で、禪宗では一年で最も重要な日であった。前日には大きな儀礼が行われ、数百人が出席する法要が開かれたが、実際のお祝いの日は月曜日であった。六歳の安子は家庭の仏壇の釈迦牟尼に赤飯と甘酒を供え、父と母の説経を聞いていた。母親は二歳になる包一を抱いていた。お勤めが終わると、俊隆は、アメリカと英国との戦争が始まった、と話した。

その日は一九四一年一月八日、西欧ではまだ一月七日であった。天皇の名において、彼の完全な了承の下、日本軍は仏陀成道の日の朝、ハワイ、香港、マレーシア、シンガポール、そしてフィリピンを攻撃し

た。何という目を選んでこのような正気を失った愚行を起こしたのか！ 俊隆にとつて、今はお経を読む以外にできることはなかった。

* * *

役に立つ方法は常に同じではない。
それは状況によつて変わってくる。

*The way that helps will not be the same
it changes according to the situation.*

第二次世界大戦中に林叟院を通り過ぎていった大勢の若者の中には、鈴木俊隆と終生変わらぬ交流を持った者もいた。その中の一人が末常泰男である。末常は恥ずかしそうに林叟院の玄関に初めて足を踏み入れた。そして大きな声で「面倒を掛けて申し訳ありません、という意味の——「お邪魔します」と声を掛けた。ちゑが台所から出てきて大切なお客を迎えるように丁重に挨拶し、一団が大きな低い机を囲んで陣取っている、ホールの裏の一室に彼を案内した。彼は静かに坐つて、お茶を出してくれた彼女に軽く頭を下げた。それは一九四三年のことだった。彼は一七歳で、間もなく新入生として静岡高等学校の寮に住むことになつていった。彼は林叟院と、その住職の鈴木さんに

ついでに学校の先輩たちから話を聞いていた。ある者は林叟院での自分の体験や食事について、大いに褒めて話した。当時は十分な食料も手に入らなかったのである。

末常は話を聞いていた。それは興味深く、とても面白かった。その場の人たちは特別に決められたテーマもなく、自由に話し合っていた。スローガンのおうむ返しではない戦争に関する意見、選択肢や、新しい方向性についても率直に語り合っていた——決して扇情的ではないが聞きなれない意見だった。灰色の法衣を着た中年の僧侶が彼の隣に坐っていた。ときどきその僧侶は話の口を挟んだ。一同和気あいあいとしていた。ときどき笑いが起こり、打ち解けた雰囲気であったが、時間が経つにつれ、緊張感と真剣味が増した。彼が最も心を打たれたのは、責任者らしき者が誰もいかなかったことであった。

話し合いが終わり、知人が彼をグループの人たちに紹介した。その僧侶は彼を歓迎し、自分の名前は鈴木だと言った。

「鈴木さんですか。ここはあなたのお寺ですか」と彼は尋ねた。

「そうです」

末常はこの目立たない僧侶がこの有名な寺の住職であることを知り驚いた。彼は単なるグループの一員であるかのように振る舞っていた。他の日本の僧侶たちはそのようにはしなかった。彼らは社会的に高い地位にあり、一般の人は彼らより低い地位にあった。これは確かに珍しいところだ。彼が林叟院に住んでもよいかと尋ねると、俊隆は直ちに了承した。彼は何も払わなくてもよいが、一つだけ条件があった。学校に行く前に毎朝、他の人たちと一緒に坐禅をすることであった。彼は他の四人の少年たちと共に、本堂をはさんで家族の住まいと反対側の一翼に住むことができた。

午前四時四〇分に俊隆は木櫃を取り上げ、厚い木の板の魚板ぎょばんを叩き、少年たちを起こし、顔を洗って坐禅に来るように、と合図した。彼は五時に少年たちと坐禅を始め、五〇分坐った後に、彼らを連れてお勤めに行き、六時に終了した。短い掃除の時間があり、その後で朝食になる。そして少年たちは椿の咲く道を通り過ぎ、駅まで一時間の道を歩いた。汽車は三〇分後に静岡駅に到着し、それから彼らはさらに三〇分学校まで歩いていかねばならなかった。それは大変な労力ではあったが、末常にとってはやり甲斐があった。

末常の同級生であった上月うづきが語っているように、俊

隆は自分の態度や行動で見本を示した。彼は決して彼らを叱ったことはなく、友達のように特別な敬意をもって彼らに接した。彼らが質問すると、彼は簡潔、かつ単純明快に答えた。そこでは多くの語らいがなされた。彼らは皆自らを表現する機会に飢えており、彼は夕方や週末に行われる集まりでの静かな仲介役であつた。そのときは他の人たちも参加して考えや感情——そして食事を、共に分かち合つた。

俊隆が旭伝院に岸沢を訪問するときは、しばしば青年たちの誰かを一緒に連れていつた。彼の師匠（岸沢）はときどき林叟院に立ち寄り、來訪を告げることもなく本堂で坐禅をした。岸沢は、ときおり日曜日の午後林叟院に来て俊隆の生徒たちに道元の『正法眼蔵』、四摂法やその他の経本について講義をした。少年たちにとっては専門的な用語の全てを理解することは困難であつたので、最後には、あなたたちは僧侶になるのではないからこれで十分だ、と言つて講義を終わつた。その後で彼らは揃つて在家信者のための易しい講義を聞きに行った。岸沢はときどき若者たちの前で俊隆を叱ることがあつたが、俊隆は逆らうことなく師匠の言葉を受け入れていた。しかし彼は、この老人の考

えに全て同意していたわけではなかつた。岸沢は日本の国策に対して仏教側から支持していた。彼は戒律についての本を書き、その中で天皇制国家を支持する表現をしている。

一九四二年以来、俊隆の生徒たちの私的な集まりは、林叟院の裏に聳える、段々阜や森林に覆われた山と、下側に位置する村落の名前、高草に因み高草山会と名乗つた。その年、新たに才氣溢れる学生、西中間が林叟院にやつてきた。西中間正雄は活力がみなぎる、生まれながらの指導者でありまとめ役でありながら、陽気で親しみやすい性格であつた。西中間と俊隆は直ちに意気投合した。俊隆に会つたことで西中間の活力の焦点が定まり、そして彼は俊隆のグループにさらなる方向付けをした。西中間は頭腦明晰な学生で、常にクラスでトップを占めていた。俊隆は、彼の科学的な考え方や真理に対するひたむきさを尊敬していた。彼は物事の真相を究めるために向こう見ずなところがあつた。俊隆から数日間続く会合を開く許可を取り付けた。彼はアイディアとカリスマ性に富み、学生の中でもきわだつて齒に衣を着せぬ物言いをする男であつた。恐らく彼は泣く子も黙る特高、東京の秘密

警察の高官を退職した父親に庇護びごされていたのである。
う。

当時の日本には戦争は正しくないと考える人たちが、わずかしきいかなかった。そして彼らのうち、投獄され、職を失うことなしに、どのようにそれについて話せばよいかを心得ていた者はほとんどいなかった。誰も国に対し強い疑問を投げ掛け、批判することはできなかつたが、前向きな提案をする余地はあつた。俊隆が遠回しに反戦と考えられることをしていたのは、太平洋戦争が始まる前のことであつた。一九四三年の今となつては彼のなし得ることはあまりなかつた。彼は戦争に反対せず、政府に反対もせず、降伏も主張せず、日本が悪いとも言わなかつた。彼は日本が戦争に敗れることは望まず、ただ戦争が終わることを望んだ。彼は仏教における彼の信条と平和、そして義務と国に対する献身けんしんの間に置かれ、悩んだ。しかし彼は「慎重にしていれば、もし平和であつたならば、日本は遙かに多くのことを成し遂げることができた」と語ることはできた。政府の公式な政策は、戦争は平和のために行われている、というものであつたから、学生たちは戦争の根本的原因について語ることができ、平和のために生命の危険を犯すこともできた。戦争を

直ちに終結すべきだ、ということとは困難であつただろうが、すでに戦争で非常に多くの者たちが死に、国民は大変困難な生活を強いられていたので、日本が再び強力で健全な国家になることができる道提案することとは、愛国的義務であつた。俊隆は、道德的基盤に立ち、戒を引き合ひに出し、殺戮ころころに反対し戦争終結を仰々しく唱えるようなことは決してしなかつた。

非常に大勢の男たちが戦線に向向している時期に、そうした若者たちが皆林叟院しんそういんに入入りしているのは、異常な光景であつた。周囲の者たちは気がついていたが、そうした少年たちは立派な市民のように見受けられた。彼らは入隊するときに来ると、同僚に別れを告げ、去つていった。一九四一年には全ての日本人男性は身体検査を受けなければならず、仏教僧も含め、全員が徴兵に服す義務があつた。もしこれを拒否すれば投獄された。いったん徴兵されると、再び傭侶としての待遇を受けるのは、彼らが死んだときか家に戻ったときだけであつた。四一歳以上か、もしくは身体検査で不合格になつた男たちは工場に送られるか、田畑で働くために残された。

俊隆は徴兵を免れた。ある者は彼が小さ過ぎたため

だとか、彼が結核の後遺症で絶えず咳をしていたからだといい、他の者たちは彼が風変わりな前衆議院議員の加藤弘造のような影響力のある友人を持っていたからだ、と考えた。俊隆自身は、当局が彼の異常な考え方が軍の志気を損なわせることを恐れ、危険をもたらす恐れのない寺に彼を隔離しておくことにしたためだ、と考えていた。「私の名前には当局によって印がつけられていたのだ」と彼は言った。

神道は体制の中心であり、神官たちは戦意を鼓舞した。多くの(仏教の)僧侶たちも同じような役割を演じた。彼らのほとんどは兵士の葬儀や法事を執り行い、戦死者の冥福を祈り、回向と呼ばれる特別な詠唱——天皇の弥栄と戦勝を祈願するための新たな一節を含む——を唱えていた。林叟院では多くの葬儀が行われた——それらは、しばしば戦地から送り返されてきた兵士の遺骨のための合同葬であった。どの団体も、行事をする過程で当局の何らかの干渉や影響を免れることはできなかった。俊隆は嫌々ながら彼の望む以上の協力をさせられた。彼が逃れられるすべはなかった。日本全体が戦場の一部であり、全ての者は国の存亡のための戦いに貢献する必要に迫られていた。そこにはより過激な選択肢もあった。共産主義者の中には、戦争

(遂行)努力を支持しないために、牢獄に送られた者もいたが、仏教徒はほぼ誰もそのような強い態度は取らなかった。

陸軍の軍人と海軍の技術者たちが林叟院の離れの一翼を占拠し、やがて家族が居住する庫裏の一部まで、彼らの住居として占領した。通信施設が山の上に建設され、町には飛行場が建設されていた。軍は溢れた人員を住まわせるために、広い寺を必要とした。俊隆とちゑは、寺に兵士を住まわせることを嫌った。彼らは下品で、横柄で、粗暴であり、決して手伝おうとはしなかった。彼らが夜遅くまでお祭り騒ぎをするのは、ほとんど聞くに耐えなかった。寺に押しつけられたこれらの客人たちの態度に悩まされながらも、俊隆と彼の生徒たちは黙って耐える他なかった。兵隊たちは寺の食料を持ち出し、わけもなく俊隆やちゑに無駄な時間を取らせた。士官たちは部下を殴った——陸軍は棒を使い、海軍は革帯を使った。彼らの存在によって、ちゑと俊隆は高草山グループの若者たちの評価を一層高めた。兵士の中には、俊隆に助言を求め、一緒に坐禅をする者もいた。彼はそうした者たちを僧侶と同じように丁寧に扱った。彼は兵隊たちが誠実であれば敬意を払うことはやぶさかではなかったが、ほとんどの

者は誠実ではなかった。

当局が韓国の労働者たちを林叟院に住まわせると連絡してきたときは、最も辛かった。これらの人たちは故郷からむりやりに徴用され、今や彼らを捕えた者たちのために、強制的に働かされる男たちであった。韓国人たちは、俊隆が生徒たちの坐禅のために整備していた禪堂に移ってきた。

それから彼らが寺の鐘を船のスクリューに製造するために海軍に献納しなければならぬ日がやってきた。これは俊隆にとつては断腸の思いであった。彼は特にこの古い大鐘を愛していた。その音は焼津の町まで響き渡り、林叟院の魂の一部ともなっていた。しかし全ての金属類は戦争(遂行)努力に必要であった、各家庭では家にあつた金属類を供出し、婦人たちは指輪を供出した。そこで俊隆は指定された日に、檀家の集まりで老人たちが鐘やどらを集める手助けをした。彼らは大きなブロンズの鐘を鐘楼から下ろし、飾り付けをしてロープで材木に縛りつけた。寺の正面で彼は派手な衣を着て、神聖な器物を戦争に送り出す儀礼を行った。男たちは材木を肩に担ぎ行列をつくって、仏陀の贈り物や献納の品を、軍の正式な受付場所に届けるためにドックに向かって立ち去った。俊隆は彼ら

に加わることを断り、一人になるために自分の部屋に帰っていった。

* * *

一面において私たちは皆愚者である。

しかしこのことを実感したとき

私たちは悟りを得る、

そしてそのことにひるまず努力すれば

菩薩になる。

*On one side we are all fools,
but when we realize this we are enlightened,
and when we make efforts in the face of it,
we are bodhisattvas.*

一九四五年初頭まで林叟院はこつた返していた。鈴木家の家族、学生たち、兵士、そして韓国人労働者に加え、東京から、空襲と空襲によって引き起こされる火災を逃れるために疎開してきた、六〇人以上の子どもたちが住んでいた。ちゑと俊隆の妹の「とり」が手伝い、彼らの世話をしていた。とりとその家族六人もまた東京を離れ移ってきていた。愛子は、今は内山愛子となっていたが、台湾に三年間滞在した後、一九四二年に帰国し、浜松の寺で僧侶の夫と子どもた

ちと共に暮らしていた。

空襲を恐れ、義親の天野がときどき馬車で家族と共にやってきて、空襲の目標地点から遠く離れた寺の下の谷間で夜を過ごした。近くの清水市のように、艦砲射撃を受けた都市もあった。焼津の人たちもそれを恐れていたが、砲撃は受けなかった。家を失った難民たちが大勢おり、俊隆とちゑは彼らに寺を開放する努力をする一方、彼らが滞在できる別の場所を見つける手助けもした。鈴木家の家族は、寺の台所に隣接する小さな一室に押し込められた。今は一九四二年に生まれたたおほみという名の女の子と、一九四四年に生まれた乙宥（よゆう）という名の男の子をもうけていた。

食料は底をついてきた。兵士と韓国人労働者たちは自分たちで炊事をし、一般の人たちよりも、食料事情はよかった。国の米の多くは軍隊に回されていた。鈴木家の人々や客人たちは、森の中で食料を漁り、寺の庭で食料を栽培し、命をつないだ。庭の畑は、近隣の杉山家が管理していた、瑞応寺という近くの小さな曹洞宗の寺で収穫したサツマイモからヒントを得て、始めたものであった。ある日瑞応寺から帰ってきた俊隆が、寺の下の土地の一角から石を取り除き始めた。間もなく管理人や村の人たちが手伝いにやってきた。彼

らは肥料を置き、動物が入ってこないように囲いをつくった。決して十分ではなかったが、彼らは、サツマイモ、南瓜やキャベツなどその他のいろいろな野菜を立派に収穫した。

安子と他の子どもたちは、とりやちゑと一緒に山に入り、栗、どんぐりやイナゴを持って帰った。食べられる物は何でもご馳走であった。一日三食という観念はなかった。ほとんどの民間人は、戦地の兵隊ができるだけ多く食べることができるよう、喜んで食事の量を減らした。こうした方法で彼らも戦争を戦ったのである。こうした精神で、ちゑは自分の家族に食べさせる前に、俊隆の生徒たちに食べさせたのであった。

子どもたちは、どんな野生の果物も、戦争（遂行）努力に役立つものであると考えていた。彼らは天皇の神性を信じ、兵士に挨拶をし、戦争が正しいもので、白鬼に勝つための正当な理由を備えていると信じていた。九歳の安子でさえもそのように考え、彼女が学校で吹き込まれたプロバガンダを、両親が否定しようとしても、役に立たなかった。

俊隆は物乞いの鉢を持ち、もはや単なる儀礼上のものではなくなった托鉢——円錐形の笠から目を上げずに、施主のために誑経しながら食料や小銭を受け取る

——に出掛けた。こうして歩きながら、彼は立ち止まり、労働者たちが空襲を避けるための壕を掘るのを手伝い、垣根の周りにキュウリや茄子を植えるのを手伝った。

情勢が厳しさを増すにつれ、高草山グループの人たちから出てくる着想がより大胆になってきた。林豊院に滞在中、西中間はどうしたら日本は軍事から平和的な活動に移行できるかというモデルとして、中国の田舎に平和部隊のようなものを発足させる構想を提案した。俊隆もこの考えには全面的に同意した。西中間は強い縁故を持っており、高木將軍との関係を通して中国に行き、状況を調査した。彼は幻滅し意気消沈して帰国し、どこもかしこも無秩序の状態で、状況は悪化の一途をたどっている、と報告した。そこで彼は日本が戦争に敗れるだろうということを知った。

西中間は俊隆に、中国に行き、蒋介石に直接天皇裕仁と話をしよう説得してほしい、と強く要請した。西中間は東京で高木將軍に会い、高草山グループや、彼が関係している他の交友グループについて話をし、このようなグループは、若い指導者の育成に役立つの

ではないかと提案した。彼はまた、高松宮殿下と面会できるように援助してほしいと依頼した。殿下は平和を望んでいた、日本で最も高い位にあった人物で、その後天皇に対し個人的に降伏をお願いした、と言われていた。これらが俊隆の聞いていた、信じられないほど意欲的な着想であった。彼は若者たちの誠実さと勇氣、戦争を超えて考える意欲に感嘆した。

社会的に恵まれた地位にあった俊隆の友人、加藤弘造は彼に満州へ行くように勧めていた。満州は一〇年以上も日本が占領していた土地である。当時この地は戦争から解放され、新しい未開拓地と考えられていた。弘造は、静岡県から満州の三つの部落への移民についての責任者であった。入植者の立場ではあったが、彼は中国人や満州人を大いに賞賛し、その歴史や詩を学んでいた。

激しい宣伝プロパガンダが至るところに充満し、ほとんどの者が口を閉ざし、目を伏せていた世の中にあっても、弘造は華やかで、齒に衣を着せぬ性格であった。解散させられた衆議院の議員であった彼は、

熱狂的に戦争を支持する人間ではなかったが、国家に對し忠実であり、日本の国策が成功するように自分の本分を尽くしていた。彼は日本が満州によりよい社会を建設していると信じていた。彼は政府と結び付いてはいたが、自分は無政府主義者だと称していた。そして、自然界の秩序をよく理解している、と思っていた。共產主義者に共感していた。

弘造は故郷の町、鳥田での地域集会で問題を引き起こした。日本は戦争に負けると明言したのである。突如秘密警察が集会を解散させ、居残る者は誰であろうと投獄すると脅した。弘造は常に監視され、そのとき以後監視が強化された。

彼は虐げられた者たちの友であった。満州に行った者たちは最も貧しい農民たちであった。彼は開拓者たちのために妻を募った。彼はまた癩^{びん}収容所を定期的に訪れ、日本の不可触民と言われ虐げられた人々、被差別階層についての本を書いた。彼らの話題は事実上タブーであった。

弘造は民衆に食料を与える手助けをすることが、日本に最も貢献する道であると考えた。満州は農業に関してほぼとんど無限の可能性を秘めていた。彼は妻と共に、その土地の玄米食運動に深く関わっていた。彼

らは白米を食べることは、栄養と国の資源の無駄使いであると主張した。もし全ての者が、精米しない玄米を取れば、国民は遥かに少ない米で、よりよい栄養を得ることができであろう。とりわけ加藤夫妻は、酸性よりもアルカリ性の食品をより多く取るべきだと主張する『戦争に勝つ食物』という本の影響を受けていた。俊隆は師匠の祖温から聞いており、この見解についてはよく知っていた。

静岡県が人植した満州の地区には、仏教の寺院と僧侶が不足していた。大勢の人たちが仏教の供養を受けずに死んでいった。弘造によれば、この地は俊隆にとって大きな可能性を持っていた。そこは食料不足もなく、日本全土を覆っていた陰鬱な空気もない、遥かに輝かしい土地であった。日本人は中国人よりも満州人との間に遥かによい、建設的な関係を持っている、と弘造は言った。日本人は、満州が中国より分離すべきである、という多くの満州人の見解に同調していた。弘造は、満州人、日本人そして韓国人の農夫たちの間には、協調の精神があると言っていた。——韓国人もまたそこに入植できたのである。恐らく戦争が終わった後は、満州は独立国になるか、さもなくば無政府主義の村落に分立するであろう、と。

弘造はたびたび俊隆を満州を訪問するよう説得した。俊隆は弘造の提案に興味を持っていたが、彼は焼津にあまりにも多くの責任を負い込み過ぎていた。

楠寛俊吾は、俊隆が弘造を通じて知り合った、満州における重要な行政官であった。主に日本人のうちに關心を寄せていた弘造に比べると、俊吾はより帝国政府の形態に關心を持っていた。しかし弘造にしろ俊隆にしろ、帝政に反対していたわけではなかった。彼らはただ最近の天皇を神格化された人とする、ばかり役割を好まなかつただけであった。三人は多くの点で意見が合った。彼らは玄米食運動や、戦争をいかに終わらせるべきかについて話し合い、共に狂信的行為や、外国人を悪魔視する考えを嫌悪した。俊隆は、ちやうど彼が戦前に公に発表したように、もし日本人が仏教の原理に基づいて行動すれば、このような一面的な考え方にはまるようなことはないであろうと話した。弘造は戦前に、俊隆との討議の場に俊吾を連れていった。そのとき彼は平和的手段によって目標を達成することの重要性を強調していた。彼らはまた旭伝院で会い、一緒に岸沢の講義を聞いた。

ある夜三人の友人たちは弘造の家で坐つて酒を呑み、気ままに話を交わしていた。窓は淡い光が洩れて

爆撃機に町を識別されないように覆いが掛けられ、近くに爆弾が落ちたときにガラスが粉々にならないように、テープが貼られていた。俊吾が、発言には気をつけた方がよい、と冗談まじりに言った。弘造は彼が集めた共産主義の雑誌の束を彼らに見せて大胆に笑つて言った。家の外には秘密警察がいて彼らを守っている。何もう恐れるものはない、と。——彼の息子の太郎は、外で何年もの間、いつも彼らと遊んでいたのである。

* * *

仏性の世界で生きるといふことは、
瞬間瞬間に小さな存在として、
死ぬことである。

*To live in the realm of buddha nature means
to die as a small being
moment after moment.*

加藤太郎は父親と一緒に満州に行くことになった。まだ一二歳で、年齢の割に小柄ではあったが、少年がうるさくせがむので、ついに折れた。父親や、父親の友人たちのように、太郎は大きな構想を好む傾向があった。彼は農業学校に通い、満州で近代的技术を使

い、大規模農業を構築する可能性を調査することを望んでいた。土地は広大で、北海道のように開けていた。彼は旅行に備えて一生懸命に勉強していた。彼が初めてこの大望を打ち明けたとき、俊隆も俊吾もその場に居合わせたのが、三人とも彼の話を真剣に受け止め、今では父親も、彼が生命の危険を冒して日本海を渡ることを許す気になった。しかしちょうど父子が、静岡の駅で急行列車に乗ろうとしていたとき、空襲があった。そして太郎は急いで駅の地下に逃れた。汽車は待つてはいなかった。弘造は少年に向かって叫んだ、「俺は行くぞ」。そして彼を日本に残して出発した。

太郎は林叟院に現れ、失望したことを俊隆に話した。父親は太郎に伝言で、俊隆と一緒に来たかどうかと言ってきた。「行きましょう！」と俊隆は言つて準備を始めた。彼は曹洞宗の宗務庁に接触した。宗務庁では直ちに、軍隊の従軍僧としてではなく開教師として彼を正式に任命した。彼らは一年以上も満州に誰も派遣していなかった。俊隆は関係官庁とも交渉したが、彼らはそれをよい考えだとは認めなかった。彼はとにかく計画を押し進めた。満州は外部日本と呼ばれており、特別な手続きは必要としなかった。切符を手

に入れることの方が困難であったが、弘造のコネで問題がないことがわかった。太郎が移民の名目で二人の切符を半額で入手した。

俊隆が福井の永平寺に滞在した時期を除いて、彼も太郎も、彼らが住んでいた地方を離れたことはなかった。当時は旅行には危険な時代であった。俊隆はわざわざかばかりのものを荷造りし、義親の天野や家族と林叟院に住んでいた生徒たちに別れの挨拶をした。それは無謀で、無責任なことのように見えた。とりわけ、彼の近親の者たちは、彼と再び会えないのではないかと心配した。

一九四五年五月一日に、俊隆と太郎は静岡駅のプラットフォームに立った。彼らは下関に行く汽車に乗ろうとしていた。そこから韓国釜山に行く船に乗る予定であった。太郎の母が見送りにきて、玄米のおにぎりやキュウリの入った弁当を彼らに渡した。汽車は駅に停車していたが、彼らはしばらく待つて爆撃機がどちらの方向に行くのか見極めた。B-29はその日、東に向かったので、乗車は安全であった。彼らはリュックサックを拾い上げて出発した。

下関行きの汽車の車掌は、彼らが船で海峡を横断す

るのには、かなりの危険が伴うだろうと警告した。彼らは数日間旅館に缶詰めになり、米と豆を食べていた。彼らはあまり金を持っていなかったたので、俊隆の大学時代の友人宅に行き、そこで歓待され、米や魚や海草をこ馳走になった——それは、彼らが林豊院で食べていた食事よりも上等であった。その友人がいなければ、そのようなことはできなかっただろう。何日間も間断ない爆撃に曝されながら、彼らは港を探し回った末やつとのことで、一艘の船が出帆するというのを聞きつけた。それは六月の初めであった。輸送船は、日本と大陸との連絡を切断しようとしていたアメリカの潜水艦や航空機にとって重要な標的であった。

しかし輸送船は無事釜山に着き、ここでは爆撃はなかった。彼らは一晩滞在し、映画さえ見た。そして満州行きの夜行列車に乗った。汽車の運行予定は当てにならなかつた。その上彼らは、長距離の乗車許可を得ていなかったたので、一度に一区画の切符しか手に入れることができなかつた。能率的で機敏な若い太郎は舵取りであつた。彼は切符を買い、地図や金を携行し、予定表を検討し、正しい時間に正しい場所に自分たちの全部の荷物と共に着いたかどうか、そして目的の駅に着いたときに、間違ひなく下車したのかどうかを確

かめた。俊隆は安心して彼に任せ、自由に景色を眺め、居眠りすることができた。そして彼は何も紛失せず済んだ。

韓国では、日本語で容易に用事を済ませることができた。いったん満州に入ってから、俊隆は自分の英語が役立つことがわかつた。太郎は農業の研究に使う若干の中国語を日本で覚えていた。汽車が停車したとき、彼らは下車し、農夫と芋や南瓜を物々交換した。数日後かなり遅延して、彼らは満州国——日本人はそう呼んでいた——の新京（現在の吉林省長春市）に着いた。弘造はそこに住んでいたたのである。彼は停車場で待つていた。数日間彼は全ての汽車が着くたびに迎えに出て、心配していた。当時は誰もが目的地に着くとは限らなかつた。

「君たち二人のことをとても心配していたんだ」。彼らが近づくと彼は言った。「どうやつてうまくたどり着くことができたのかね」。

「福岡で焼夷弾の瓦礫の下から這い出てきたんだよ」と俊隆は答えた。

俊隆と太郎は農民たちと一緒に三等車に乗り、びっしりとシラミにたかられた。日本ではシラミはときに

観音様と呼ばれていた。慈悲の菩薩である。そして彼らはシラミを身体から払い落とし、つまみ取りながら、観音様を傷つけては悪いだろう、と冗談を言った。新京で彼らは、それまで我慢できないほど激しく望んでいた風呂に入った。それからさらなる旅行の計画を立てた。弘造は、旅行全体の切符を一度に手に入れることができた。数日後、彼らは満州の都市哈爾濱^{ハルビン}に行った。ハルビンでは、車両も燃料も非常に不足していたので、市長は彼らの旅行のために、消防車を調達しなければならなかった。彼らは、正しくこの町で、日本の軍医の手によつて捕虜の軍人や市民に対し、忌まわしい生体実験が行われていたことには全く気づかず、観光や、諸々の高官との面会などで、楽しいひとときを過ごした。

彼らは故郷の静岡県から入植した三つの集落を訪ねた。一つの集落では、彼らは神道の神宮と一緒に泊まった。その神宮は法要を必要としていた家庭や農園に、俊隆を連れていった。別の部落では、元代議士と一緒に泊まった。法要を必要とする家庭が非常に多かった。俊隆は彼らの家の前に立ち、経を誦んだ。村人たちは外に出てきて少額の紙幣の入った包みや、食料の供物を彼に手渡した。彼らは何度も礼を言

い、彼が歩いていくと敬意を表し、お辞儀をした。

俊隆と加藤父子は、広大な土地や連なる山脈を通過し、他の町や村を訪ねた。行く先々で、彼らは観光を楽しむ、弘造の友人や満州人の市長などの地方の役人や、その属官に面会した。太郎は会合には加わらなかった。彼は外に出て野原で遊び、周囲を眺めていた。しかし彼にはまた農業の実習を試みる十分な機会があった。大農場を経営するという、彼の夢は現実にならなかつた。日本の入植者たちは皆、茶色の法衣を着た俊隆に注目していた。彼らは故郷の静岡はどんな状況になっているかと質問した。食料は十分あるのか、どれだけ破壊されたのか、と。満州には多量の食料があり、この客人のためにしばしば宴会が開かれた。弘造が言っていたように、この地の日本人の間の雰囲気は、日本のムードに比べて樂觀的であった。多くの人たちが、俊隆が留まることを望んだ。

「どう思いますか」と弘造が尋ねた。
「満州に林叟院の末寺を建てたいと思います」と俊隆は答えた。

弘造は諸々の役人や商人たちに、俊隆の寺の用地を探すように依頼した。検討をした後に、ハルビンから北西に約一四五キロ離れた、鉄道沿線の広大な土地に

決定した。彼はそこに俊隆、太郎ならびに満州拓殖公社の技術者を伴っていった。そこには平地、丘、小川と、その上豊かな森も広がっていた。俊隆はすぐにそこが気に入った。それは理想的な環境であった。そこで彼は静岡県から入植した日本人の要望に沿う活動ができるであろうし、彼が師匠から学んだ道を、修行をしたり、教えたりする修行の寺を建てることもできるであろう。彼が会ったこの地の日本人たちは、故郷の日本人たちのように綿密な予定は立てなかつた。彼は新しい出発ができるであろうし、寺は日本人と同様に、満州人にも開放されるであろう。

「この土地には一つ問題があるんだ」と弘造が俊隆に言った。「ここは人里から離れていて、虎がしばしば現れることで知られている」

「虎とは話ができます面白くなりますね」と俊隆は言った。「虎が出て十分な修行ができないというのであれば、私はここでは仕事にならないということになりますね」

決定は下された。弘造が滞延なく手配ができるように、と彼らは急いで新京に帰った。

数週間が過ぎた。一九四五年の七月になり、事態は急変した。沖繩が陥落したのだ。ドイツは五月に降伏

して以来戦争圏外にあり、アメリカ軍は今や太平洋戦線に集中することができた。日本の軍隊は、本土を侵略から防衛するために、アジア全域の占領地から引き揚げていた。ロシアが中立条約を破棄するという噂が流れていた。間もなく彼らは北から押し寄せてくるかもしれないなかつた。突如として日本人はできるだけ早く満州から脱出しようとする努力を始め、満州人は日本人が脱出するのを見て、明らかに氣勢が上がった。薄っぺらな外見は脆くも崩れ落ちた——力以外の何者かが日本人の滞在を可能にしている、という見せ掛けである。弘造は上司から直ちに帰国するように指示された。彼は息子を抱擁し、俊隆に頭を下げ、閩商人たちが使っていたガタガタの飛行機に乗って東京を指して飛び立った。今は俊隆と太郎は寺も農場も忘れてできるだけ速やかに脱出しなければならなかつた。

韓国と日本の間を散発的に運航していた三隻の輸送船の中で、わずかに一隻だけが沈まずに残っていた。毎日俊隆と太郎は汽車の駅に行ったが、いつも船は釜山から入ってこない、と告げられるだけであつた。しかしついにある日切符が手に入った、そして二人は午後三時一五分の汽車でそこを発つた。

ハルピンの停車場で彼らは、釜山からの輸送船が損

傷を受けたと知らされた。俊隆は何かしら方法があるだろうと言った。そしてとにかく旅を続けなければならなかった。二人は海岸に到着し、鶏を韓国に運ぶ一隻の蒸気船を見つけた。間もなく彼と太郎は蒸気船に乗り、南に向かっていた。船の上には大勢の韓国人が乗っており、喜びのムードに溢れていた。彼らはよい席を全て占領し、日本人を周りに押しつけて叫んだ、「お前たちは戦争に負けるんだ！」

蒸気船の旅は韓国北部で終わった。彼らは汽車の駅に行った。掲示板にはこう書いてあった、「切符は発売しない。日本に行く船はない。」

俊隆は心配するな、掲示は当てにはならない、と言った。「私には掲示はこう読めるのだ、(切符は発売しません。日本行きの船はありません)と」、彼はとにかく汽車に乗って行けば何とかなるだろう、と考えた。彼らは日本に行く切符を求めたが、切符は入手できないと言われ、俊隆は海岸に沿って南に行く切符を求めた。「そこは船が捕まえられる所だ」。駅に着くたびに彼らは下車し港に行き、労働者たちと日本に行くことがどんなに危険であるか、船の状態はどうか、どこから船が出る可能性があるか、ということを話し合った。南を指して行きなさい、と彼らは忠告された。つ

いにある小さな駅で車掌が、日本に行く希望の者は下車して「サンロシン」に行くようにと放送した。サンロシンに着くと、波止場にある近くの石工の砦(とりで)に行くようにと言われた。

誰にも船が来るかどうかはわからなかった。船は全部沈められたという噂もあった。アメリカが海を完全に支配していた。ついにある日、巨大な海軍の軍隊輸送船が二隻の巡洋艦に守られて入ってきた。俊隆はこれを見て、頭の中で鐘が鳴り響くかのように、これが、彼らが長く待っていた最後のチャンスだと確信した。俊隆と太郎は軍隊が乗船するのを見つめた。多くの者は負傷しており担架で運ばれていた。日本の民間人の群れが必死になって乗船しようとしていた。

「この船に乗ろう。しばらくここで待っていてくれたまえ」と、俊隆は太郎に言い歩み去った。彼は船長の乗船許可を持って帰ってきた。

夜の帳(と)が下りて船は港を出た。朝の三時に船は遠く岸を離れた所に錨(いかり)を下ろした。空を眺め、波の音を聞きながら、俊隆は道元の危険な中国への旅を思い出した。そして一三世紀に想いを馳せ、道元が生きて日本に如浄の教えをもたらしたのと同じように、彼も生き長らえて仏種を蒔くことができると確信した。

朝が近づいた。彼らは博多港に入港するのは危険だと考えていることがわかった。船は「太西」の外で碇泊した、港が入港するには小さ過ぎたのである。明け方、(軍艦の)ランチ(大型ボート)が彼らを本土に運ぶために送られてきた。俊隆と太郎は、静岡に停車する民間人用の急行列車に乗った。駅の雰囲気は彼らが以前感じていたものとは全く異なっていた——人々は怒りを、そして怯えていた。乗客は、汽車に乗るために窓を叩き壊していた。途中三回空襲を受けたが、汽車は走り続けた。

七月一五日の夜、空襲の最中に、二ヵ月ぶりに彼らは静岡駅に着いた。彼らは一緒に林叟院に行った。ここでは皆、彼らが無事に帰ってきたことを知り、狂喜した。日本では、旅人は旅での土産物を持ち帰るのが習慣となっているが、俊隆は韓国の乾パンを一箱持ち帰り、子どもたちを驚かせた。彼と太郎は身体をこしこし洗い流し、それから熱くて清潔な風呂にゆつくりと浸かった。

弘造は翌日現れた。「これは奇跡だ！ お前たちは帰ってきたんだ！」彼は泣きながら息子と俊隆を抱きかかえて叫んだ。「どうやってうまく帰れたのかね」。

俊隆と太郎は顔を見合わせた。「わからないよ」と

俊隆は答えた。

あなたたちが特殊なもの、頼りにできると考えられる何かに依存する限り、独力で進んでいく十分な強さは持ち得ないでしょう。あなたたちは自分の道を見つけ出すことは不可能です。それ故、まず自分を知りいかなる標識も情報もなしに生きる強さを持たねばなりません——これが最も重要な点です。そこには真実があるとあなたたちは言います。しかしたくさんの真実があり得るのです。問題は、どの道を行くべきか、ということではありません。もし一つの方向に行くことだけ的心がけ、あるいは常に標識に依存するならば、自分自身の道を見つけられないでしょう。最良の方法は、種々の標識を読みとる日を持つことです。私は満州に行ったとき、このような経験をしました。

* * *

あなたたちが

他の何ものかによって

ばかにされたとしても、

打撃はそれほど大きくはないでしょう。
しかし自分自身にばかりにされたときは、
致命的です。

それを癒す薬はありません。

When we are fooled by something else,

the damage will not be so big.

But when you are fooled by yourself, it is fatal.

No more medicine.

アメリカが信じ難いほどの威力を持った爆弾を広島と長崎に投下した。鈴木俊隆は自分が聞いたことを信じられなかった——たった一個の爆弾で全市内が破壊できるような威力のあるものだということを。日本人の中には、いまだに日本は勝利を収める定めになっていると信じる、呪縛をかけられた者たちもいた。また一方ではもし本土侵攻が始まれば、いずれにしても長くは生きられないのだから、このような巨大な爆弾の下に行くのが最良の方法かもしれない、という者もいた。俊隆は恐るべきものは狂信的行為と爆弾であり、アメリカではないと言っていた。最も愚かなことは降伏しないことであろう。もし降伏しなければ、日本の全てが終わる、と彼は考えた。こうした日本のための盲目的な自己犠牲は、特定の指導者たちの誤った観念

の犠牲にすぎない、と彼は言った。

奇跡的にも、西中間とかつての高草山グループの学生たちが政府の総合計画局で働いていた。俊隆は彼らを通じて、首都には米内〔光政〕大將や新総理の鈴木貫太郎のような平和を推進する立派な人たちがいるという暗示を得た。俊隆がよく知っていた、焼津近くの三島に住んでいた山本玄峰（玄峰）老師は、総理大臣や皇族に助言を与えていた。日本は相撲界で例えれば、二番目に高い位の大関であるから、気位を保って負けることができるのだと言つて、彼は降伏を勧めた。

全滅を回避することは決してたやすい任務ではなかった。今は主として、軍首脳部を説得することが肝要であった。ロシアは日本に宣戦を布告し、侵攻途上にあつた。八月一三日には、一五〇〇機の飛行機による東京空襲があつた。一日にはアメリカの飛行機がまたやつて来てピラを大量にばらまいた。ピラにはアメリカは無条件降伏を求めており、そうしなければ天皇の地位の保全や生命さえも保証しないと書いてあつた。全く保証のない平和というものがあり得るのだろうか。本土侵攻があるのだろうか。いったん決断が下されれば、全てのものはその決定に従うであろう。そして八月一五日水曜日に、前例のないニュースが

ラジオ、新聞ならびに宣伝カーで報道された。天皇の言葉、「玉音」が正午に放送され、初めて一般大衆に聞かされるというのである。

正午が近づくと日本中の全てのラジオにスイッチが入れられた。アナウンサーは静かな恭しい調子で、これから放送されるお言葉は、陛下が全国民に聞かせるために録音したものであると言った。後になつて国民は初めて、録音を守り放送できるようにするために、前夜に皇居内で起きた策謀、英雄的行為や、人命の犠牲等について知つたのである。

俊隆とちゑは正坐しておほみと乙宥を彼女の膝に乗せ、包一と安子は彼らの両側に坐つていた。とりと彼女の家族もそこにいた。東京から疎開してきた子どもたちもやつて来た。学生たちは周りにはいになかった。家族の居住していた部屋の障子は開かれ、大勢の兵士や、海軍の軍人たちが開かれた大きな玄関や広間に坐つていた。彼らの中にはいつものように、何物にも誰にも尊敬を示さず、タバコを吸い、お互いに喋つている者さえあった。禪堂にいた朝鮮人たちは、自分たちのラジオを聞いていた。彼らにとつて、よい教育を受けた者でない限り、天皇が使う特殊な言葉を全て理解することは非常に困難であるが、要点を掴むことは

できるであらう。日本全体が静まり返り、放送を待つていた。日本の歴史上かつてないほど全国民が一体化し、胸の張り裂けるような悲しむべき出来事が、今まさに起ころうとしていた。録音は形式的な言葉から始まり、徐々に主題へと移つていった。

「戦況は必ずしも日本にとつて有利には進展してない」。メッセージの意図するところと比べ、途方もなく控えめな表現で暗示した最初の言葉であつた。「敵は新しい最も残酷な爆弾を使用し始めており、その破壊力は誠に計りしれないものであり、多くの罪なき人命を奪つてゐる」。天皇は、日本はボツダム宣言を受諾したと述べた。「もし戦争を続行すれば、日本民族の最終的な崩壊と消滅をもたらすのみならず、人類文明全体を絶滅にも導きかねないものである」。天皇の宣言の感情的な核心は国民の心に深く浸み込んだ。「私たちは汝臣民全ての心の奥底の感情をよく承知している。しかしながら耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで、来たるべき世代のために、偉大な平和の道を切り開くという私たちの決断は、時代と運命の命ずるところである」

天皇の最後の言葉が林叟院のホールにこだましたとき、俊隆も家族も憚らず泣いた。あまりにも多くの感

情、あまりにも大きな損失。とりの夫もちゑの兄弟も、また何人かの俊隆の生徒たち、友人や檀家の息子たちも死んだ。そして今帝國は死滅し、日本は破砕され、灰燼に帰した。他の誰もが涙を流しているのを見て子どもたちも日本の敗戦を泣いた。あまりにも多くの鬨争と苦しみと狂気があつたが、今はそれも終わった。禪堂の韓国人たちから歓声があつた。兵士たちのほとんどの者もまた泣いていたが、中には忍び笑いする者や冷笑的な批判をする者もいた。

俊隆は彼らを見回した。彼らの無知故に、日本全体を狂気と破壊の淵に陥れた軍の代表者たちからは、誠意のかけらも氣遣いもなく、ただ卑しむべき無感覺だけしか見られなかつた。彼は顔を濡らしたまま立ち上がり、重い溜息をつき、彼らを睨み付けた。それから彼の怒りが爆発した。長年蓄積した欲求不満と心内の混乱を吐きだすように金切り声を張り上げ、酒のいっばい入った大きな瓶を掴み、固い壁に投げつけた。彼は手に触れるもの——皿、本、茶碗——を手当たり次第掴み、障子や広間に向かつて投げつけた。子どもたちは悲しげに泣いた。兵隊たちは無言であつた。俊隆は怒りが収まると歩いて外に出た。

熱い太陽が、雲一つない空に燃えていた。そして俊

隆が池を見つめていると、禪堂からは、朝鮮人たちが故国の民謡を歓喜しながら歌う声が聞こえてきた。

島田では、天皇の放送終了後、叔母の家で、加藤太郎が、父親が逆上し刀を空中で振り回しながら、彼が天皇のためにやってきたことが全て無に帰してしまつた、と大声で叫んでいるのを眺めていた。彼の義兄が酒の大瓶を手渡し、今は刀を振り回しているときではない、家に帰って飲んで寝なさい、と言いながら彼を抱きかかえた。

彼は休息を必要としていた。彼が満州へ送った人々は七月から徐々に帰国していた。そして細流は洪水に変わつていた。それは収穫期の初めであり、彼らは自分の家、田畑、家畜、所持品を捨てて立ち去つたのだ。弘造の家は島田駅の真正面にあつた。麻袋をかつき、怒りに満ち失望を抱いた流民たちにとって、彼の家以外には行くところがなかつた。

焼津では大勢の人々がパニック状態になり、家庭、事務所や市庁舎にある書類を焼き払つていた。建物に火を着けようとする者さえあつた。アメリカ人がやって来ようとしていた。市民は自分たちがしたことは全て不利に働くのではないかと恐れた。名簿が作成さ

れ、軍人たちは家から家へと探し歩き、彼らを処刑するであろう。生き残った者のうち、男は奴隷にされ女は強姦されるであろう。沖繩では何百人もの女性たちが、侵略者に立ち向かうよりは、と断崖から飛び降りた。

アメリカ人は長い間、獣か悪魔と呼ばれていたので、一般の人々は恐怖に陥った。会合でも、町中でも、寺でも俊隆は、彼らに平静を保ち心配しないように、と説得した。彼は常に、悪魔と呼ぶべき者は外国人だけではなく、私たちの中にもいると言っていた。彼は、アメリカ人については心配しないようにと話し、人々を勇気づけた。「彼らも私たちと同じ人間ですから、理解し合えるはずですよ」

私は、アメリカやその他の国について実際には何も知りませんが、私は人間の本質を信頼し、どこへ行こうとも人間の本質は同じである、と確信していました。私は講話でも、生徒たちがきたときでも、常にこうした考えを表明していました。私は批判を受けましたが、公には行動して

いませんでした。それはただの私の意見でした。

地方の小学校の運動場には字を刻んだ大きな記念碑——忠魂碑、戦死した兵士の魂の慰霊碑——が建っていた、人々はそれを打ち壊すか埋めてしまいたいと思つた。

俊隆はこれを押し止めた。「なぜそんなことをするのですか。白国のために生命を犠牲にした方々の慰霊碑を建てるのは当然のことではないですか。何も悪いことではありません。彼らは理解するはずですよ。しかし土地の人々は処罰されることを恐れる一方で、もしそれを壊したらアメリカ人が喜ぶだろうと思つた。」

「それでは私の寺に運んでください」と俊隆は彼らに言った。「私が生きている限り守つていきましよう。そしてこの碑に対し、アメリカ人がどんな損害を与えようとも私が全責任を負いましょう」

そこで慰霊碑は林叟院の正面の一画に移され、俊隆はその場で戦死者の法要を行い、その魂を祭つた。そして皆でアメリカ人の到着を待った。

占領下 1945-1952

CHAPTER 7 The Occupation

人の一生を注意深く観察すれば、
信賴するに足る人間になることが
いかに大切であるかということが
わかるであろう。

*When you look at human life carefully,
you will find out how important
it is to become a trustworthy person.*

アメリカの兵士たちがやって来て、彼らが悪魔でないことを証明した。日本軍は白らの手で武装解除することを許可され、日本の民政当局はアメリカ占領軍の総本部、GHQの監視のもと、国民を統括する権限を与えられた。

しかしそこには新たな戦争があった。今の敵は飢餓であった。食料は今までにないほど底を突き、収獲状

況はよくなかった。今は全ての人が苦しんでいるという違いはあったものの、寺の生活は一九世紀の仏教徒に対する迫害、廃仏棄釈の時代と同様に苦しいものであった。ある朝、近所の人が台所を手伝いに林叟院へやって来た。俊隆は畑から野菜を持ってきた。そこにはあらめと汁を作るための味噌はあったが、その婦人は大きな寺の米櫃こくらを開けてみて驚いた。米櫃は空であった。彼女の家でも決してたくさんの米を持っていたわけではなかったが、彼女は急いで坂を駆け下り、自分の持っていた米の半分を取りにいき、それを寺に与えた。間もなく近所の人たちや檀家の人たちが皆、寺が困っていることを聞きつけ、米櫃はいっぱいになった。

家のない者、職のない者、飢えた者たちが道をうろついていた。中には林叟院に行く道を見つけてやって

来る者もいた。俊隆は彼らが来るのを見て、ちゑに言った、「あの人たちの面倒を見てあげなさい」と。彼女は自分たちが持っているものを分けて与えた——飯、サツマイモ、南瓜、キヌウリ——そして彼らに仕事を探し自活するようにと忠告した。ちようどちゑが食料を施していたそのときに、ある老婦人が米の袋を持って山を下りてきて、寺に寄進した。寺の米櫃は独自の生命を持っていたのである。

林叟院に向かつて歩きながら、加藤太郎はイナゴを捕らえて、針と糸で数珠つなぎにした。林叟院で彼はそれを醬油で料理した。彼は満州の夢が碎かれて以米、しばらくの間林叟院に滞在していた。彼はしばらくの間希望を持ち続け、自分の所持品を発送さえした。原爆が落ちたとき荷物は広島に到着していたと彼は推測した。両親は彼が落胆し目標を失っているのを見て、俊隆と一緒に住むように、と彼を送ってきたのである。

太郎は彼の父親の弘造ならば、俊隆のために政府の職を容易に手に入れることができるだろう、と勧めた。そうすれば食料を買い、寺の負債を返済する金を手に入れることができるであろう。しかし俊隆はそん

なことは考えなかった。大勢の僧侶たちが寺や家族を支えるために洋服を着て、手入れた靴を履いて働きに出ていたが、彼はそうしなかった。彼は道元の教えを試していた。道元は言っている。内部からしつかりと支えられていけば、外部の支持はついてくる、と。曹洞宗の寺では毎朝、以下の言葉を含んだ回向文を詠唱している。一寺門の二つの輪が、永遠に円滑に回りますように」。ここでいう寺の二つの輪とは、仏法の輪と経済の輪である。道元は仏法の輪が経済の輪を回転させると言った。つまり、もし寺が破滅したり人々が飢えたりすれば、それは彼らの仏法が劣弱であったからである。

私は道元禪師の世界を初めて知って以来、絶えず私が仏教徒の道を忠実に遵奉していれば生活は維持されるであろう、という私の信念を試してみました。これは食べ物が多分になかった戦争中、特に戦後にあてはまりました。

日本と道元の仮説は、食料を積んだ何隻もの船が港につき、信仰のある者にもない者にも分け隔てなく、アメリカ側が食料を供給したことで、証明された。食

料の中には、奇妙な飲料の粉乳や堅い乾燥した果物もあった。ちゑは子どもたちに「プルーンを食べるときれいになるんだよ」などと言ってこの奇妙な食物を食べるように励ました。

ちゑは一番下の乙宥とよひなという名の男の子を育てていた。彼女は同時に近所の赤子も育てた。一日に数回、乳の出ない母親の所から赤子を連れてくるのは女子の仕事であった。途中で出会った人たちは彼女に、あなたのお母さんは何と素晴らしく心の広い人でしょう、といつも言った。

こうして初期の占領の日々は過ぎ、国民は戦勝国の寛大さに感謝した。人々は逮捕されず、撃ち殺されることもなかった。天皇制や日本政府も保持され、船には大量の食料もあった。そしておおむね軍国主義者たちの虚偽と野蠻的行為が暴露された。正しく世の中の全てがひっくり返された。彼らが数十年にわたりに教えられてきたことは全て真逆になった。

東京では少なくとも五人の高草山グループのメンバーが、新政府で働いていた。西中間正雄はアメリカとの交渉に加わり、日本が占領し、交戦した国に対する賠償を請求されないように、首尾よく妥結することができたと言われている。他の者たちは、正雄の弟の

重雄を含め、経済の企画や国の政策立案に従事していた。

俊隆は仏教を通じてのみならず、一般的な教育によっても傷ついた日本を再活性化させる仕事に深く関わっていた。彼はまだ胸澤大学で手に入れた英語教育と青年に対する倫理指導の免許を持っていた。しかし肅清が進行中で、彼はこうした免許を失い、直接の僧侶の仕事以外のいかなる公職からも肅清される危険を感じていた。この追放は広範囲に及ぶものであった。

全ての指導者、教師ならびに僧侶たちはGHQおよび日本の新しい官庁によって、彼らが言論または文書を通じて戦争、民族主義やファシズムを積極的に支持したかどうか調べられた。一九四五年一〇月三〇日に、教員および教育関係者に対する審査、追放ないし承認に関する命令が、一九四六年一月四日には公職からの不適切な個人の肅清に関する告示が公布された。

戦後は大学の卒業生が不足していたので、僧侶は教師になる必要性があった。しかし彼らはこの検閲にパスしなければならなかった。そしてGHQは無罪が証明されない限り彼らに有罪と見なしていた。神道の神官たちは明らかに標的であり、ほとんどが排除された

が、仏教の僧侶もまた嫌疑をかけられていた。彼らの中には熱烈な軍の支持者だった者もあり、ある者は士官になり、別の者たちは軍国主義的帝国仏教の促進のための講演旅行を行った。全ての宗教組織は、キリスト教界を含め、軍を支持した。曹洞宗も臨済宗も公の方針は、仏教を戦争遂行努力に追従させるものであった。

俊隆はいくつかの理由で攻撃を受ける可能性のあることを承知していた。一点目は寺に軍人や朝鮮の強制労働者を住まわせていたことである。二点目に、太平洋戦争が始まる前に、一日だけ彼が、政府の政策に対する公の支持を促進するための、新しい組織の長となったことである。三点目は、占領下の満州への旅行である。これは日本の帝国主義に加担した、と見なすことができた。一方彼の利点としては、英語を話したり教えたりする者への同情があったことである。彼はその当時の軍隊調の制服は着なかつた。彼が開催した会合もあつたが、彼が戦争の狂気を支持しなかつたことを証明する、たぐさんの書類を林豊院に保管していた。

ある日高草山グループの末常が林豊院に現れ、俊隆がGHQからの質問状に四苦八苦している姿を見た。

末常は英語がよくできたので、二人は一晩中その仕事に取り組んだ。別の折には、俊隆は静岡にあつた日本の官庁に面接に行かなければならなかつた。この面接にも彼は自分の書類を持っていった。

追放は思慮のない魔女狩りにはならなかつた、理性が打ち勝つたようだ。全ての日本人が望む望まざるにかかわらず、戦争遂行に協力した。実際のところ、女性を含め、全ての非戦闘員が夕方の会合に出席し、そこで落下傘部隊が上陸したときにこれを殺したり、海岸で侵入者たちに突撃したりするのに備え、先の尖つた竹槍を持って突撃の訓練をした。GHQの役人は状況が複雑であることを知り、実際の爾清業務のほとんどは、日本の官憲に任せた。彼らはただ声高に主張し、傾倒していた者たちだけを追及した。そして俊隆は間違ひなくその範疇には入らなかつた。しかし一九五二年の夏までの間に、八万三千人以上の人たちが追放された。

私は大戦後追放にはなりませんでしたが、私は軍を支持したという証拠はありませんでした。そして私は、自分の考えを示すたくさんの印刷された書類や、私たちの政策はいかにあるべき

かを示唆する書類や、国はいかなる危険に陥っているかを示す書類を持っていました。ほとんどのものは、アメリカ人には理解することは困難であつたでしょう。私は戦争については、何も言いませんでした。私は、もし日本の立場を明瞭に理解することを怠り、私たちの理解が放送や印刷物だけに基ついて行われるとすれば、日本の真の姿を見失うであろう、と述べました。

私は戦争を引き起こす基本的な考え方に、より多くの懸念を抱きました。これが私が日本の国粋主義者たちを嫌つた理由です。彼らの見方は一方的で、非現実的でした。彼らは他の人たちが何をしていられるかも知らずに非難しました。彼らは途方もない問題を作り出しました。そこで私はこの国、軍隊、政治の世界で、實際何が起つていのかを研究することの必要性を強調しました。

* * *

どこに行こうとも、
柔軟な心構えがあれば
容易に人を助けることができる。

Whenever you go.

*if you have a flexible attitude
you can help people quite easily*

一九四五年一月三十一日、寺は熱心に新年の準備に励む人々で、賑わっていた。とりの家族は東京に帰った。ちよの母、村松きぬが移つてきていた。そして彼女と娘と檀家の婦人たちが、腕によりをかけ、最高のご馳走を作っていた。本堂では、大般若経の一節を詠唱するための写本が集まつた人たちに配布されていた。一晚中餅がつかれ、酒が勧められ、歌が歌われた。

一週間かけて彼らは寺を清掃し、すり切れたものや使わなくなつたものを捨てた——子どもたちが上に乗り飛び跳ねて、修理ができなくなつたランサム女史の椅子、古い新聞紙、雑誌、それに戦争中の忌まわしい書籍等を。

年末は借金を返済する時期であつた。家族は檀家の援助を得て、できるだけのものを返済した。彼らは本堂の須弥壇を飾り、お供えをした。これは長い間やらなかつた新年のお祝いであつた。村人たちはいまだに戦争のショックで意気消沈していたが、俊隆はこの年末年始に元気を回復することは、彼らが再び勇気を取り戻すのに役立つだろうと考えた。

私たちはある点ではばかになって大晦日を楽しみます。これは仏教徒が人生を理解する道に基づいています。私たちは瞬間瞬間に生活を新たにしていっていきべきであり、人生とは何か、人生の道とは何か、などという古い觀念に固執すべきではありません。特に年の暮れには気分を一新し、車さえも完全に清掃すべきです。もし常に古い觀念に固執し、何度も何度も同じことを繰り返すならば、私たちは古い生活の道に閉じ込められてしまします。ある種の興奮やお祭りは、私たちの志気を高めるうえで必要です。

一九四六年に俊隆は、一〇代後半から二〇代前半の若い青年男女の勉強会、高草塾たかくさじゆを作った。それは戦後の新生活運動の一環と見なされていた。地方の町の人たちや、静岡や東京の家庭からも子弟を林叟院に送ってきた。彼らは坐禅をし、お経を読み、俊隆は講話をし、そして討論が行われた。加藤太郎も出席した。俊隆はもはや検閲を受ける必要はなかったが、彼は依然として絶対主義者ではなかった。「これは正しいかもしれないが、間違っているかもしれない」と口癖のように彼は言った。隣に住む一二歳の山村昌生やまむらなかは出席

するには若過ぎたが、戸外の障子の陰に隠れて、わくわくするような新しい意見が交わされているのを聞いた。彼は俊隆が、戦争は大きな誤りであった、私たちは世界に目を開くべきである、と情熱を込めて語っているのを聞いた。

このとき俊隆が語ったことは、国民の風潮やGHQの意向とも合致していた。マッカーサー自身も、戦争は精神的な日覚めによってのみ根絶され得ると語っていた。日本人の多くは、自分たちが追隨してきた道を深く恥じ入り、日本は自衛以外に再び武力に訴えることはしない、と誓った。確かに、それは日本の新憲法にも書かれている。俊隆は、日本は戦争に敗れて以来、国民的な傲慢さが大幅に減少し、自国の文化に内在するある種の矛盾をより多く感じるようになったことに気づいた。多くの人々は、自分たちの方向を見失ったと感じていたが、俊隆はこの新しい謙虚さと不安はよいことだと思つた。今や彼らはより懐疑的で、少なくとも理論的には全ての存在の空虚さを感じていた。彼らは自分たちの伝統が常に変化しており、固定されたものではないと認識するようになった。

ときどき人々は太陽に腹をさらして眠っている

した。そこで私は彼らが太陽に焼かれないように覆いを掛けてやりました。そして彼らは私を見て非常に喜びました。もしあなたたちがこのような気分を味わったならば、極めてたやすく人を助けることができます。何もなくても、素手でも助けることができるのです。

俊隆は人々が心に抱いている苦痛を和らげる最良の方法は、仏法と岸沢の教えを広めることであろうと考えた。一九四七年三月、彼は林叟院に四百人の人々を集めて、在家信者のための授戒会を開いた。そのほとんどは婦人たちであったが、彼らは戒律と法名を授けられ、仏教の原理に従うことに習進した。この催しは、岸沢が主催し講話を行った。そして彼の講話を聞くために、日本の遠方からも大勢の人々が集まってきた。儀礼は一週間続いた——それは、簡略化された撰心のようなものであった。米は十分にはなかったので、大麦を混ぜた。一九三七年以来林叟院を手伝ってきた、近くの瑞応寺の住職の杉山が、炊事の責任者であった。彼とちゑは一緒に仲よく働いた。彼はちゑがまだ少女の頃、彼女の父親の付き添いの僧であった。彼は炊事場で働く人たちに食べる物——底に焦げつい

た飯——を残すために故意に飯を焦げつかせたといいう。さもないと、彼らには何も残されていなかったであらうから。

この儀礼には野扒のいりこうじゆ順じゆんという名の岸沢の弟子も参加していた。彼は俊隆より一〇歳若く、俊隆を非常に尊敬していた。最終日の閉会式の最も重要な場面で、岸沢は進行を中止させ、参列者の面前で俊隆が進行順序を間違えて香を供えたことを叱責した。野扒には、岸沢が俊隆を叱ることを通じて、全員に話し掛けていることがよくわかっていった。彼はできるだけ劇的な方法でそれをやりたかったのである。野扒によると、俊隆は気品ある態度で、グループ全体の代表者としての立場でこれを受け入れ、怒りや当惑の色は少しも見せず、師匠に対し恭しく頭を下げた。この事実は、俊隆と岸沢が立派な師弟関係を保っていること、俊隆がこの役割を果たすのに十分な強さを持つており、岸沢の彼に対する信頼を確認した、と彼は後に語っている。野扒は、静岡県の著名な寺、静居寺じやうきよじで行われた岸沢指導の、もう一つの在家信者の授戒会について語っている。静居寺は林叟院の末寺であったから、俊隆は彼より年長の、より経験豊かな大勢の僧侶を先導する長として、儀礼においてある時点で前に進まなければな

らなかつた。野扨は俊隆の態度、身のこなし方、動き、礼拝、そして座具の扱い方に、感銘を受けた。彼のテンポは寸分の狂いもなかつた。野扨は、このような完璧さは一生かかつても到達できるものではないと思つた。他の僧侶たちは俊隆のこうした所作に必ずしも気づいてはいなかつた。

野扨は、俊隆の内に秘めた深い静寂を認めた。彼はかつて、焼津の訳ですれ違つたときに、この静寂を強烈に感じた。俊隆は野扨に挨拶しただけで、通り過ぎていった。俊隆がプラットフォームに通じる階段を上つていくのを眺めたとき、野扨は彼の平静さと謙虚さとはつきりと感じた。

そのとき交わされた短い挨拶の中に、野扨は親密な触れ合いと能動的な風格を感じた。野扨はちようど道元のいくつかの著作についての本を出版したところであり、急いで俊隆の脇を通り過ぎた。その対照は印象的であつた。彼は俊隆の挨拶の中に、ご苦労様という言葉、彼の著作に対する評価を、お祝いではなく、励ましの気持ちで認めた。野扨は、俊隆がゆつくりと階段を上つてゆくのを眺めながら、驚嘆すべき映像を目に焼きつけた。

祖温はかなり前に、林叟院の禅堂の主要な修復作業を始めたが、ついに「俊隆が引き継いだ」修復が完了し、新しい障子と野の香りのする畳が備えられ、智慧の菩薩である文殊菩薩の彫像も修復後安置された。一九四七年六月三日、寺の威信に関わる儀礼、この新しい禅堂の開所式が、大勢の参列の下に行われた。今や曹洞宗宗務庁は、林叟院を自立した禅堂を所持する寺院として承認した。禅堂の建設費用の支援を曹洞宗宗務庁から受けないという方針は、俊隆の決定であつた。それは、宗務庁からの支援は林叟院側に、財政的およびその他の義務をもたらすからであつた。

当時俊隆には同居している僧侶が二名いた。今は彼らと、在家の生徒たちと月例の坐禅会の人々は、正式な坐禅堂を使うことができるようになったのである。俊隆は、林叟院の禅堂が十分に活用されることを望んだが、彼の坐禅への熱意に対して、継続的な反応は得られなかつた。彼はたとえ開所式の参列者が非常に少なかつたとしても、坐禅には多数の人が参加することこそを望んでいたのである。彼は僧侶としての威信の低下は受け入れることができたが、現実の仏教修行に対する関心の欠如には失望した。

戦後に僧侶の社会的地位は根本的に変化した。寺院は政府により、土地を實質的には無償で強制的に——特に他人が使用していた土地については——売却せられた。林叟院は山上の森林は依然として所有し続けたが、もはや下に住む農民たちの地主ではなくなつた。この事實は、寺院が以前よりも、大幅に檀家の支援に依存せねばならなくなつたことを意味する。民間人による軍の統制と共に、在家によるより厳しい寺の管理の時代がやつて来た。

俊隆は優しい地主であり、農民に厳しかった祖温に比べ、より友好的に農民との関係を維持していた。彼は土地を失つたことは残念に思ったが、僧侶が支持を得るためには、仏の道に従うことだけが必要である、と言つた道元の教えを信じ続けた。仏教は封建制度の最後の名残を表象していたが、GHQと新政府が、それに終止符を打つたのである。その結果、寺院は法人となつた。ほとんど無一物だつた農民たちは、土地を安く買うことができた。それは鬼の首を取つたときと同じように今まで苦しめられてきたものが排除されたのと同じであると思つた。

* * *

決まりきつた道徳の規範や基準はないが、あなたたちが、他人に何かを教えようとするときには、自分自身の中に何か規範を見つけるものだ。

There is no fixed moral code or standard, but you can find yours when you try to teach others.

松野みつは、焼津から四八キロほど離れた県庁所在地、静岡市にあつた戦争未亡人の子どものための寄宿制幼稚園の園長であつた。学校の片側には子どもたちの寄宿舎があり、別の側には母親のための寄宿舎があつた。みつは一二歳の娘はるみと共に子どもの側の一室に住んでいた。彼女は丸顔で、色白の知的で精神的な女性であつた。一九四九年の煮え立つような暑い夏の日、彼女が仕事に戻ろうとしていたとき、思いがけなく旧友が玄関の床に坐り、四〇代半ばの見た目のよい僧侶と一緒に弁当を食べているのを見掛けた。「何をしにきたの、常子さん」。彼女は声を掛けた。「あなたをこのお坊さんに紹介しようと思つてきたの」

「それではこの尊いお坊さんが奥さんを探していらっしやるってわけなの？」

彼女は、通常女性が僧侶に示す敬意もなく、からからって言った。

「いえ、いえ、方丈さんは立派な奥さんをお持ちです」と、常子は腹を抱えて笑いながら、やつとのことと言った。

「そうなの」みつは続けた。「じゃあ、一体私に何を
お望みななの？」

「方丈さんが幼稚園を始めたんだけど、切り盛りしてくれる園長さんが見つからないの。私の父があなたを推薦したので、ここにきたのよ。前もってお知らせしなくてごめんなさいね」

「私は戦争中、何度も子どもたちを防空壕に避難させることで、自分の命を危険に曝したのよ。町全体が焼けてしまったけれど、私たちは生き延びたの。つまり、私はこの難しい時期をやり通してきたというわけなの。あなたは私に立ち退きなさいというの。嫌ですよ。私は一生ここで過ごすことに決めたの」

俊隆は、戦争最後の年に閉鎖され、軍に使用されていた、焼津の仏教系幼稚園を再開する計画を推進していた。その幼稚園は三年間空き家になっており、近所

の人たちが運動場でイモを栽培していた。当初、俊隆は、焼津の仏教徒評議会に、幼稚園を再開するよう要求した。彼らはよい考えだと同意し、彼に面倒を見てもらいたいと依頼してきた。常盤幼稚園という名で、この地域では最も古い幼稚園であった。一九二五年にこの幼稚園を開設した僧侶の青島禪庵はこのとき八〇歳になっており、林叟院の近くの小さな末寺の任職であった。俊隆は以前から彼の幼稚園を知っており、禅庵の仏教教育の哲学に共鳴していた。彼は活動内容よりも心構えに重点を置いていた——厳格ではあるが、穏やかな心構えに。

日本が戦争に敗れ無条件降伏をする前は、日本人々は、自分の道徳律は絶対に正しく単純明快であり、これを遵守している限りいかなる誤りも犯すことはない、と考えていました。不幸にして、この道徳律は明治時代の初めに設定されたものでした。敗戦後、彼らは自分たちの道徳に自信を失い、どうしてよいかわかりませんでした。しかし道徳というものを見つけ出すのは、それほど

* 原著者一九二四年とあるが、一九二五年が正しい。

難しいことではないはず。私は彼らに言いました。「あなたたちは子どもを持っています。子どもをどうして育てたらよいかを考えれば、自分の道徳律が自然にわかってくるでしょう」

俊隆は、禅庵が幼稚園を再開するように励ました。

そして禅庵は年を取り過ぎていて、歩き回る仕事は困難なので、俊隆も協力を約束した。日本中の至るところで、僧侶たちは就学前の子どもたちの施設を開いており、俊隆もこの流れに喜んで加わった。これはいまだに疲弊し、戦争の痛手からの回復途上にあつた地域社会の、再活性化を助ける一つの方法でもあつた。

禅庵は教育について、また幼稚園を再開することについて、俊隆に助言を与えた。俊隆は他の仏教系幼稚園を視察し、仏教教育の雑誌を購読し、義親の天野を含む実業家たちの支援を集め評議会を結成し、林豊院の檀家の子女や彼の若い女子生徒たちの中から、教師を探し求めた。彼は建物の復旧作業を監督し、地方官庁と折衝して免許を取得し、開園を発表した。

一九四九年五月五日の子どもの日に、全ての学級が定員いっぱいの子供を迎え、禅庵が園長となって開園した。

開園後間もなく禅庵が体調を崩した。そこで俊隆は適任の園長を見つける必要に迫られた。静岡在住の俊隆の親友磯部がみつを推薦し、彼の娘常子に連絡を取らせた。しかしみつは、彼の依頼を拒絶した。俊隆は彼女の率直さに打たれ、彼女を諦めないことに決めた。

みつは俊隆が白足袋をはいて下駄をかたかたと鳴らし、黒い竹で編んだ僧侶の笠をかぶり、黒い漆塗りの日傘をさしながら歩道を歩いて、幼稚園に上ってくるのを眺めていた。妙な坊さんがまたやってきた、と彼女は俊隆を眺めながら思った。俊隆が挨拶した後で彼女は言った、「私は引越すことは死ぬことに次いで嫌いです」と。

数日後彼が再び訪ねてきたとき、彼女はその奇妙な、ばたばたした帽子をかぶらないでほしい、魔女の帽子のようで子どもたちが恐がるから、と彼に言った。次に彼が訪問したときは帽子をかぶらずにきたが、彼女は忙し過ぎて会えない、と言った。彼は二、三日おきにやってきた。

ある日彼女は俊隆に言った。「あなたはご存じないでしょうが、私はクリスチャンです。仏教の幼稚園を

私が運営するのは適當ではないでしょう」

「全くの無宗教よりはましですよ」と彼ははつきりと答えた。

「どこかでよい仏教徒の園長さんを見つけなさいよ」と彼女は言った。

別の訪問の際、彼女は言った。「私は焼津には知り合はいないけど、漁師だらけの醜い町だと思いますわ——魚の匂いさえもします。私はそんな所へ行きたいと思つたことなど一度もありません」

「私の寺には漁師はいません。みんな農民や公務員や商売人の匂いがしますよ」

数日ごとに彼は現れ、その都度彼女はあれやこれやと彼に難癖をつけるのであつた。彼は綺麗な色の布に包んだ果物をちぎりに持たせて贈ることさえした。数ヵ月後、度重なる汽車での訪問の末、俊隆はみつに言った。「あなたに焼津で会つてもらいたい人がいるんです。あなたがそこまで嫌っている町に。一度ちよつと行つてみませんか」

翌日俊隆は、彼女の幼稚園でみつに会い、彼女に付き添つて、小沢という名の医師が、家族と共に住んで

いる大きな家に行った。彼は妻と共にみつに挨拶し、お茶をご馳走した。みつは彼らが洗練されていて、上品だと思つた。彼らはインテリであつた。彼の妻はみつも習つたことのある琴を教えていた。彼らの申し出を断るのは難しいのではなからうかと、彼女は心配した。医師は彼女に、この町へ来て幼稚園を引き継いでくれるように、と懇願した。

彼女は静岡での自分の仕事について説明した。「それは磯部に処理させましょう」と、医師は最初に彼女を俊隆に推薦した男の名前を出して言った。「彼は役所に影響力を持っていますよ」。彼女は、この歴史的に著名な幼稚園を運営するには適任ではない、と抗弁した。

彼は鋭い眼差^{まなざ}しで彼女を見つめて言った。「あなたはそれほど素晴らしい才能がなくてもいいのです。あなたはただ姿を見せて、そこに立っているだけでいいのです」。

みつはあたかも稲妻が彼女を直撃し、自惚^{うぬぼ}れと自分が無価値だという感情を、同時に焼き払ってしまったように感じた。「それでは私はそこにいて、何もせず

* 裨庵は開國の翌年、一九五〇年の正月に死去している。

に立っているだけでいいのですね。それだけです。ね——
「はい、そのとおりです。ただそこに立って何もしな
いでいてください」。

「じゃあ、そうしましょう」と彼女は答えた。

みつは今までの仕事の後任者を見つけ、常盤幼稚園
の園長代理として働くために、ほどなくしてやってき
た。そして娘のはるみと共に林叟院に移った。彼女は
寺のお勤めに参加するようになり、間もなく、俊隆は
檀家の人たちの評判がよいことがわかった。彼女はち
ゑを尊敬し、ちゑの母親きぬとも親しくなり、きぬお
祖母さん、と呼んだ。彼女の母親は彼女が一歳のと
きに亡くなり、義母も終戦直後に亡くなっていたの
で、彼女はきぬお祖母さんを新しい母親のように感じ
た。一ヵ月後に、彼女は娘と共に俊隆の友人であった
左官の師匠の家に移った。一九五〇年一月一日、彼女
は常盤幼稚園の新しい役職に就任し、ただそこで立っ
ているよりは遥かに多くの仕事をこなした。

みつは一九一四年四月二三日、静岡で酒井嘉右衛門
ときとの間に生まれた。非常におしゃべりだったので
周囲の人たちは、彼女は母親の口から生まれたのだ、
と冗談を言った。彼女は物語と芝居が好きであった。

彼女の父親は市議を務め、家族は仏教徒——信仰と感

謝を強調する宗派、浄土真宗の信徒——であった。彼
女はメソジスト系の学校に行き、キリスト教に改宗し
た。彼女は母親を早く亡くしたために、頑なな性格に
なったのだと考え、キリスト教が彼女をより温かな性
格に育ててくれるだろう、と思ったのだ。一九三六
年、彼女は自分がそうありたいと望んでいた性格の持
ち主であった、親切な男性、海軍の航空兵松野正晴と
結婚した。結婚してわずか九ヵ月で彼は二人が予想も
しなかった戦争のために、中国に出征しなければなら
なかつた。

彼は南京爆撃に五八回も参加した。彼女は彼に手
紙で伝えた。「中国の人たちも私と同じ人間であるこ
とを忘れないでください。彼らは戦争に行つた夫、父
親、兄弟、息子が無事に帰ることを待っている家族な
のです。だから爆弾を町には落とさないでください。
水田のようなところに落として、蛇を驚かせるだけに
してください」と。正晴は一度も会うことのなかつた
娘を彼女に残し、戦死した。彼女は二人の名前を組み
合わせ、娘をはるみと名付けた。

日曜日を除き毎朝、俊隆は町の中心部に近い常盤幼
稚園まで、自転車のパダルを踏んでやってきた。彼は

教師たちを連れて校舎を巡回し、それから仏像が祭つてある遊戯室に行くのであった。そこで彼は香を供え、教師たちがそれぞれ教本を持って、道元の書から抜粋し現代的に編纂した修証義しゆじうぎを詠唱する指導をした。その後で彼は、若干の励ましの言葉を述べた。その時刻には子どもたちが到着し、ちどろが五歳になった乙宥おつろを連れてやつて来た。

ある日一一歳のとき、俊隆の息子の包一は幼稚園の式に出席し、父親の話を聞いた。

全てのものは仏性を持っていて、全ての生命は大切なものです。私たちは仏陀の子どもたちを養育しています。仏陀の慈悲心をもって彼らを養育しなければなりません。私たちは、ある者は鋭敏で、ある者は愚鈍である、と考へてはなりません。全ての子どもたちを差別なく扱うことによつて、彼らに全ての者は平等である、ということをお知らせすることができのです。私たちは日々の生活を識別する意識だけでなく、私たちの根源的な日をもつて物事を認識すべきです。叡智の眼を

もつて、です——それは、「あるがままに」事物と人を認識し、「あるがままの」世界で、自己の生命を精いつばい生きるための叡智です。

彼女が出勤した最初の日に、俊隆はみつに、彼女の仕事の一部として岸沢の講義に出席するよう要求した。彼女がクリスチャンであることは問題ではない、と彼は言った。彼女は宗教心があるのだから、岸沢の教えも理解できるであろう、と。岸沢は神戸の大学で教鞭を執っていたが、月に一度講話のために自分の寺に帰ってきていた。彼が自分の寺で道元の『正法眼蔵』について講話をするときは、全国各地から僧侶が聞きに集まってきた。在家のために彼が講話をするときは、出席者のほとんどは、六〇代か七〇代であった。みつはちょうど三五歳であった。彼女は正面の列に坐り、注意深く聞いていた。彼はしばしば修証義について話した。彼女は幼稚園で詠唱しているのでこれを理解したいと思つた。彼女は多くは理解できなかつたが、俊隆は心配するな、と言つた。「ただ坐つて耳をそばだてて聞いていなさい」と。

*原書では市役所に勤めていたとあるが、みつ夫人によると、市議だったという。

ある日彼女は岸沢に尋ねた。「私はあなたの講話を聞いた後で寺の門を出るときは爽やかな気持ちになりますが、ここに戻ってくるときは、またすっかり頭がぼやけています。こうした形を繰り返すことはよくないのではありませんか」

岸沢は答えた。「霧の中を歩いた後では、私の衣は容易に乾かない。にわか雨に降られたときは容易に乾く。いづれも結構。私は今なお霧の中を歩いている。今日の私の話はこれで終わりです」

みつは幼稚園の教師たちの坐禅会に参加した。ある日坐禅と俊隆の簡単な講話が終わった後で、彼女は大胆な質問をした。「方丈さん、私はこんな質問をしてはいけないとわかってはいるのですが、坐禅で何が得られるのか教えていただけませんか。私は理由もなく坐禅をしたくはないのです」

実用的な質問は実用的な答えを引き出した。「坐禅の修行は、あなたたちが状況に応じて、最善の方法で即座に対処できるようにしてください」

別の機会にみつは、俊隆に岸沢の講話を理解するのに苦労していると語り、仏教とは一体何かということを数語で言い表すことができるかどうか、と問いただ

した。

「ううーん」。彼はゆっくり息をしながら呟いた。「何事であれ、あるがままを受け入れ、それが最善となるよう助ける事です」。

みつはそうした心構えで幼稚園の教師たちに接するようになった。彼らを批判するのではなく、むしろ褒めることで。間もなく彼らが彼女と家族のように接するのに気づいた。彼女はそのとき自分を仏教徒のようだと思ったが、それを俊隆には話さなかった。

* * *

問題を考察するに当たっては、
自分自身をも

その中に含めなければならない。

*In reflecting on our problems,
we should include ourselves.*

庭石業者が、林叟院の本堂の西側を流れる小川で石を掘り出す仕事をしていて、俊隆は掘り出された大量の石を彼らの手から受け取り、堤防の壁に積み重ねていた。ちぎがやって来て、俊隆に手を緩め休息を取るようにと言った。彼は手で彼女を払いのけた。「気をつけてくださいよ」と彼女は言った。これは彼らが裏

の池に、巨大な石を運んできて据え付けた仕事に比べれば、何でもなかった。その石は据え付けるのに一週間もかかった。村人の誰もが、彼はいささか氣狂いじみていると思つた。石は数トンの重さがあった。ちゑは俊隆がその仕事のために死んでしまふに違いない、と思つたほどである。彼は自分のことよりも蛙のことを心配していたようだった。彼は、十分に時間をかけ、途中で蛙がいけないことを確かめた。彼らは棒、材木、ウインチを使い、肉体労働で額に汗を流し、荒い息遣いをしながら、巧みに梃子を操作し、彼が望んでいた場所に正しく石を据え付けた。そのとき、俊隆は川岸が崩れ落ちるのを防ぐ壁を築くために、鋭い山の岩を適当な場所に配置していた。

安子は彼が働いているのを畏敬の眼で眺めた。衣を着た俊隆と作業衣を着た俊隆とは、非常に対照的であつた。彼の顔の表情もまた、柔和な面と頑強な面があつた。彼が岩を据え付けるために格闘しているときは、身体がより大きく、遅く見えた。ときには——客人と話しているときなど——には、穏やかで女性的に見えることもあつた。彼は痩せていて、女性の背丈しかなかった。彼は二三センチの足袋をはいていた——これは男性のサイズではない——そして彼はサ

ツマイモを好んだ。彼女によればこれは女性の食べ物であつた。しかし大きな石や大きな人々を動かす、猛々しい男性的な面も持っていた。

突然彼がうめき声を上げた。

庭石業者が彼の手を血まみれになつたはちまきで縛り、俊隆を病院に運んだ。彼は指を二つの岩に挟まれ、鋭い岩の角が骨まで届く傷を負つた。それは右手の第四指であつた。医者が傷を縫合した。寺に戻ってくるや否や、俊隆は腕に吊り包帯をし、小川に下り石の仕事に戻つた。ちゑは彼を叱り、中に入るように、と言つた。その指は二度と元どおりにはならなかつた。筋肉と腱が治癒したときに縮んでしまつたので、彼の指は永久に曲がつたままになつてしまつた。そのとき以来彼は、誰の日にもはつきりとわかる曲がつた指で合掌をした。

一九五一年のある日のこと、俊隆は焼津の駅で正午の急行列車を待っていた山田義道（ぎどう）に偶然出会つた。義道は六〇歳代で、林豊院の近くの藤枝市に小さくはない寺を持っていたが、彼はほとんどの時間を曹洞宗宗務庁で過ごし、そこで彼は教化部——曹洞宗の布教化に関する部門の部長を務めていた。俊隆はそのまま

残り、その友人と一緒に、東京まで乗車することにした。彼は常にブラジルやアメリカでどんなことが起きているのか、興味を抱いていた。東京に着くと、俊隆は法要を行うため、静岡に行く途中であったことを忘れていたことに気づき狼狽した。彼は先方の家に電話し、集まった人たちに深くお詫びをし、別の僧侶を直ちに行かせると伝えた。一人の僧侶はすでに目的の家に向かっていると先方から告げられた。俊隆が式をすっぽかしたのはこれが初めてではなかった。そしてそれは、先方に対し、大変失礼な出来事であった。

義親の天野は俊隆の放心癖を面白がった。俊隆は天野が持っていた旅館によく時計を忘れたものである。

彼はそれを取りに戻り、今度は傘を置き忘れて立ち去った。陶工の静郵は俊隆が財布を置き忘れたことに気づいていたが、黙っていた。静郵は彼が森町の駅に着いてそれに気がつくまでずっと彼を歩かせたのであった。ちゑにとつては一層悩みの種であった。彼女は玄関に出て配達夫に挨拶し、思いがけず、俊隆がいつも持ち歩いていた鞆を受け取るのであった。彼はその鞆を持っていないことにさえ気づいていなかったようである。彼らが二人で外出するときは、彼女が俊隆の財布を持ち歩いた。そして彼が一人で出掛けるとき

は、彼女は財布を紐に結び付けた。彼女は時計に彼女の名前を書かせた。彼女は彼の放心癖と非現実的な金銭感覚を補つていかねばならなかった。彼はいくら金が工面できるかも考えずに、寺の鐘を買うのであった。彼はまたしばしば金を失くした。俊隆は彼女の支えがあるからやっつけていけるのだと人々は言った。

* * *

感情的な困難は

蓮を二つに割るのと同じように難しい。

たとえ二つに割ったとしても、

長い糸が出てきて

これを取り除くことは不可能である。

糸はそこに残っている。

しかし知的な困難は、

石を二つに割るように容易である。

後には何も残らない。

Emotional difficulty is as hard

as splitting a lotus in two.

Even though you split in two,

long strings will follow and

you cannot get rid of them.

The strings are still there.

But intellectual difficulty is as easy

as breaking a stone in two.
Nothing is left.

彼の忘却癖はちると同じように俊隆をも悩ませた。そして彼はそれを子どもたちに引き継がせたくなかった。終戦後間もないある寒い日の朝、一年生になっていた包一が、姉が学校に出掛けた後で帰ってきた。俊隆が何をしているのかと尋ねると、包一は本を忘れた、と答えた。俊隆は激怒し包一を抱え上げ、外に連れ出して台所の脇の小さな池に彼を放り込んだ。ちゑが少年を引きずり上げた。彼女が俊隆の前に彼を坐らせたとき、包一は泣きじやくり、びしょ濡れになっていた。包一は泣きながら身震いし謝って言った。「今後一生、忘れ物はしません」と。少なくとも彼はこの経験は決して忘れなかった。

再び、俊隆の双頭の復讐の女神——健忘症とかんしゃく——が目を覚ました。あるとき彼は、包一が、三年生の宿題を怠けているのを見て立腹した。彼は包一に茶碗と箸を渡し外に出し、どこかへ行行ってしまえ、帰ってくるな、と言った。包一は泣いて謝り、寺の周りを数時間歩いたが、扉は閉められ内からは何の

返事もなかった。最後に、かなり遅くなってから母親が少年を中に入れ、俊隆に許してくれるように頼んだ。

日本の仏教には、中国から伝わった二つの伝統が流れ込んでいる——道教と儒教である。仏教と同様、いずれも靈魂や、神という概念に依存していない。道教は柔軟な道である。水が低い方に流れていくような、自然の道である。儒教は倫理、階級社会の道であり、家長的社會秩序に対する従順の道である。俊隆は自分の家族に対してだけは、この儒教の教えを実践していたように思われる。彼は自分の子どもに対し、幼稚園の子どもたちに示したように寛大ではなかった。彼は幼稚園の子どもたちを決して叱らなかつた。家庭では、彼はときおり包一を叩いた。彼の父親の時代のように、頭こそ叩かなかつたが、たびたび叩かれるので、包一は子どもを叩くのは親の意のままだと思つた。

あるとき老僧の禪庵が俊隆と幼稚園について話し合っていたとき、包一は、禪庵が俊隆の言つたことに

*原書では「國際部」とあるが、当時「國際部」はなかつたという。

ついで、厳しく非難するのを聞いたことがあった。禅庵が帰った後で包一が言った。「あの男はお父さんに怒鳴った。あんな奴は死んでしまえばいいのに！」と言いつ終わるや否や、包一は尻を強打され、痛みがなかなか治まらなかつた。包一は、ときどき父親の寝まじい眼差しに恐れをなし、逃げ出したものである。彼は訪問客があると喜んだ。それは、父親は客人がいるときには、子どもを叱らなかつたからである。

俊隆は、安子をもまた他の子どもたち以上によく叱つた。それは彼女が一番年上だったからである。檀家や近所の人たちは彼女に、あなたのお父さんはなんて物静かで優しく親切な方でしょう、といつも言っていた。安子はなぜ彼が家庭ではそれほど違った振る舞いをするのか、不思議に思つた。そしてそれは寺での厳格な修行のせいではないかと思つた。恐らく彼は子どもたちを甘やかさないように、よい父親として当然すべきことだと考えたのであろう。あるいはそれは祖温から受け継いだ暗い面であつたのかもしれない。

俊隆の子どもたちにとって、彼は尊敬すべき人であり、よそよそしい人であり、いつも何かに気を奪われている人であつた。これは彼らにとつては彼の氣質以上に厄介なものであつた。夕方暖かい火鉢を囲んで

坐りながら、彼は子どもたちに何も話さず、注意も払わず、遠くを見つめているように思われた。彼はゆつくりと歩き、思索に我を忘れていた。安子は彼が公人としてよりも、より多く父親であつてほしいと望んだが、宗教に携わる人たちは皆同じようなものだろうと思つた。彼は単なる家庭の人間ではなかつた。彼女は彼が友達のような人間であつてほしいと思つた。彼女を抱き、彼女と遊んでくれる——せめて少しくらいは——ことを望んだ。ある日彼女が一一歳のとき、俊隆は彼女を連れて静岡に行つた。彼女は彼と一緒にいることに慣れていなかつたので、彼と並んで歩くことに困惑した。彼女にとつて、彼はとても偉い人のように思われたので、当惑して彼女は街路の反対側を歩いた。

俊隆はちゑに対し厳しい口調で話したが、彼女は同じ厳しさで応答することはなかつた。彼らは定められた役割と地位とを守つた、古風な関係を保つていた。日本中どこでも男は女よりも高い地位にあると考えられていた。彼らは寺の一族であつたので、この慣習はさらに強かつた。彼は一人で寝る一方、ちゑは子どもたちと一緒に眠つた。古い慣習に従い、彼は彼女の先に立つて町を歩いた。ちゑは不平を言わなかつた。こ

れは彼女のやり方でもあった。彼らは共に苦難を乗り越えてきた、円滑なチームであった。彼は彼女を尊敬し、彼女もまた彼女の母親が示したように、彼を尊敬した。母親は彼を正式な肩書きである、方丈様と呼んでいた。きぬお祖母さんは子どもたちに、お父さんは尊敬できるお坊さんで、他の誰に対してよりも自分に敵しいお方だ、と話していた。子どもたちは友人たちがより一般的な呼び方で自分の父親を、お父さんとか、父さんとか、父ちゃんと呼んでいたのとは異なり、お父様と呼んだ。

ちゑは子どもたちに細心の注意を払った。彼女はあまり腹を立てなかったが、小言を言っている子どもたちにするべき事をきちんとやるように指示した。彼女は献身的で絶えず働き、自分の家族や他人のためにせかせかと仕事をし、ときには機嫌が悪いことも

あったが、子どもたちは彼女と一緒にいるときは安らぎ——特に就寝のときは——を覚えた。そのときは彼女もくつろぎ、優しくなった。幼い二人、甘えん坊の乙宥と神経質なおほみが彼女に寄り添い、包一と安子は自分たちの布団に寝ると、彼女は物語を始めるのであった。ときどき彼女は睡魔に襲われ言葉も不明瞭になった（うれつが回らなかった）。すると安子が、母親の話を引き継ぎ、他の子どもたちが皆、うとうとするまで続けるのであった。安子は童話を話すことが非常に巧みであったので、学校では話し上手との評判が高かった。

ついには安子も眠りにつき、やがて俊隆の書斎の灯も消される。きぬは広い畳の部屋の向かいの自分の部屋で休み、数名の僧侶や在家の生徒たちは本堂の先の遠く離れた一翼にいた。暗闇に包まれた寺が、人間の営みの混迷を離れて夢見るときであった。

家族と死 1952-1956

CHAPTER 8

Family and
Death

ほとんどの問題は

自分自身を知らないために、

自ら作り出しているものである。

Most problems we create

because we don't know ourselves.

一本の小川が、急な山から流れ落ちて林叟院の両側を走り、寺の正面に位置する、色褪せた赤い胸当てで飾られた、古く個性のある姿の羅漢たちが一列に並んで見下ろす地点で合流している。梅雨はまだ三ヵ月先であったが、一九五二年の三月末、岩肌の川底は上流の森や茶畑に覆われた丘陵から、こぼこぼと迸る春の雪融け水で、膨れ上がっていた。石と水の周りを小さな黄色の蝶が踊っていた。

林叟院を取り囲む庭園や森は瑞々しく繁茂した、さまざまな濃淡の緑に溢れ、オレンジ色と黒色の大きな

蜘蛛が張り巡らせた、網のレースで飾られていた。裏庭の苔むした大きな石の周りの池の中では、蛙が百合の下で鳴いていた。丸々と太ったスズメバチが、不規則に広がった古い建物の煤けた木の柱や梁の周りをぶんぶん飛び回り、蕺草葺き屋根の広い軒下では燕が飛び交い、巣を作っていた。正面の軒下には年老いた雑種の犬が眠っていた。

下の排水した水田の泥の中で、女たちや男たちがかがんで稲を植えていた。夜はまだ冷え冷えとしていたが、日中は暖かさが増していた。ときどき、朝の漁獲の香りが、港に停泊している漁船から漂ってきた。焼津の町はざわめいていた。街路は買い物に行く女たち、仕事に行く男たちや、春休みで授業のない子どもたちで溢れていた。それは暗れやかな年の楽しい季節であった。占領は近く終わりを迎え、戦争の傷跡もほとんど忘れ去られ、日本は国民所得や食料の進歩を、

そして近代化を享受しており、再び元氣を取り戻し始めていた。車や自転車は街路に溢れていた。人々は皆働いていた。スモモの木は花を開いていた。

日の出前に俊隆は起床し、坐禪をし、本堂で朝の勤めをした。大坪という名の僧侶が彼に加わっていた。二人が心経を詠唱している間、大坪が木魚を叩いた。読経する俊隆の声は物静かで、ほとんど眩いているか消音しているように聞こえた。起伏のある古い漢語調のお経を読む声が、規則正しいリズムで流れ、大坪の、強度においても調子においても、不規則に上がったりがったりする声と対照的であった。俊隆は何回もお勤めを中止し、大坪の誤った木魚の叩き方を改めさせた——能力不足のせいかな、あるいは頑ななせいかな、彼を矯正することはできなかったようである。須彌壇の背後にある、仏像や位牌の並んでいる薄暗い開山堂でお勤めを終えた後、大坪は正面の中庭を掃除し、俊隆はいつものように、砂利で固められた未舗装の道を、農家まで掃除しながら下っていった。それから竹箒を手にして戻ってきた。

大坪はほぼ三〇歳の年配であった。大坪がここに来たのは俊隆や林豊院と何らかの強い結びつきがあった

からではなく、彼はほかに行くところが無かったからであった。もし彼が自分でやって来たのであれば、旅の僧侶に対する慣例として一晩だけのもてなしで俊隆の務めは果たされたわけであるが、彼は岸沢が送ってきたのである。旭伝院では彼にさせる仕事が無かったし、それに大坪はあまりにも常軌を逸していたので、岸沢の弟子の僧侶たちの手には負えなかったのである。俊隆の抱擁力のある性格は、調子外れの大坪にはより効果的であろうと思われた。俊隆さえも、最初は

大坪をどこか他所にやったらどうかと勧めたが、岸沢の再度の依頼を拒みきれず、渋々この奇妙な僧を引き受けたのである。彼がいなければ誰もがより幸せであったであろう。彼の存在は何かしら人を不安に陥れるものがあつた。

朝七時、換気装置のない台所の薪焚きのかまどから、煙が明け放たれた障子の戸口を通して流れ出し、台所の前の池に泳ぐ赤や金色の鯉の上を漂った。ちよときぬお祖母さんは朝食を並べていた。各人に温かい白い飯に生卵、葱と海苔、一〇センチほどのイワシを添え、納豆と、四角く切った豆腐の入った味噌汁と緑茶である。それは戦争中や戦後の物資の不足していた時期に比べれば、遥かに豊かな食事であった。

女性たちは大きなちゃぶ台に子どもたちと一緒に座った。安子は一七歳で、高等学校の最終学年に入ろうとしていた。包一は一二歳で、父親より背丈が高くなっていった。おほみは一〇歳で、物静かで芸術家肌の少女であった。乙宥は七歳で、ちょうど小学校に入學するところであった。大坪はほかの人たちとはくつろげないので、浴室に通ずる階段で、一人で食事をした。誰もが彼とは十分な距離を置いていた。

俊隆もまた家族から少し離れた自分のちゃぶ台で、一人で食事をした。これは古い家長制の家庭の習慣であった。誰もが静かに食事をした。ときどきちゑが彼にお茶をつぎ、飯のお代わりを勧めた。俊隆は短い言葉か、簡単な身ぶりで答えた。毎日朝食の後で彼は「お早うございます」と言い、家族も同じように答えてお辞儀をした。彼は自分の碗を洗った——他の者は誰も、それに触れることは許されなかった。それから彼はその日の身支度をするために自分の部屋に行き、ちゑは布に包んだ弁当を彼の自転車（わが）の籠（かご）に入れた。彼は「行ってきます」というような挨拶をし、参道を下っていった。ちゑはそれに応えて軽く身体を曲げて別れのお辞儀をした。これが、二人が交わした最後の言葉になった。

子どもたちは間もなくきぬお祖母さんの作ってくれた弁当を持って出掛けた。学校は休みだったので、少女たちは、歩いて三〇分ほどの商店街へ使いに行き、友達に会いにいった。包一と彼の小さな弟は、川に沿った平地に下りていき、近所の少年たちと凧を揚げたり、川に石を投げたりして遊んだ。彼らはあまり外に出て遊ぶことはなかった。今日も父親は彼らが家で勉強することを恐らく望んでいたが、彼は忙しくて子どもたちと関わり合う暇はなかったし、その日は午後遅くまで町にいる予定であった。子どもたちもその日はほとんど外で過ごすことにしていた。彼らは大坪がいるときは、寺の周りにはいたくなかった。

大坪はときどき町に働きに行ったが、その日は寺にいた。前日、彼は杉山の寺、瑞応寺で行われた、ある家庭の法要の手伝いに行った。大坪が最初に着いた頃は、彼がこのような仕事をやり通せるかどうか心許なかった。一九三七年以来、林叟院の手伝いをしてきた杉山はそう語っている。大坪が最初に彼の寺に現れたとき、戸外から誰かが呼ぶ声が聞こえた。彼が外へ出てみると、大坪が地面に額を擦りつけて言った、「どうかよろしくお願いします」。

たとえ彼が異様な行動を取らないときでも、些細な

ところで、彼のひねくれた性格は随所に現れた。杉山の父親の葬儀のときに、俊隆は大坪が飯に味噌汁を掛けたことを注意した。料理を混ぜ合わせることは正しい作法ではなく、特にそれは僧侶にとつては重要なことであった。だが、俊隆は全般的には大坪の奇習に對し、寛大であつた。彼はこの奇妙な僧が、戦時中の民間人の制服を着るのを許した。それは彼を兵隊のように見せた。大坪は戦争中軍隊にいたので、あんなに風変わりになつてしまつたのだらう、と周りの人たちは考えた。彼は戦争で精神的に打撃を受けた坊さんだと思われていた。

彼が林叟院にいてほしいと思う者は誰もいなかった。家族は、辺り一面に彼の暗い陰が漂つてゐることを嫌悪した。ちゑは幾度となく、彼のことを俊隆に話した。彼女は彼にはぞつとすると言つた。子どもたちは特に彼に恐れを抱いた。彼の暗く鋭い眼を恐れ、それを父親に告げた。彼は他人のことをとやかく言つてはいけなうと答え、最後にはただ黙つていなさい、とだけ言つた。彼は、きぬお祖母さんが大坪についての不安を語つたときは、より丁寧に答えた。仕方がないのだ、と彼女に言つた。彼がそのように言うことは、たやすかつた。彼はほとんどの時間外出してゐたのだ

し、一方家族の人たちは大坪と絶えず一緒に過ごさなければならなかつたのだ。ちゑは林叟院の生活面での責任者であつたかもしれないが、最終的な決断を下すのは俊隆であつた。

最初に大坪は、その年の秋に林叟院にやつて来たが、長くは滞在しなかつた。彼はちゑと口論して立ち去つた。彼は自分を置いてくれる寺を求め、二ヵ月ばかり無駄骨を折つた挙げ句、また戻つてきた。俊隆は一言も言わずに、彼の帰りを受け入れた。大坪は裏庭の洗濯物の物干し台の裏で、よくぶらつてゐた。そこで彼は台所や風呂に使う薪を割つた。彼は寺の中ではあまり役に立たなかつたが、恐らくそれが彼の一番よい使い道だつたのだらう。彼は林に入つていき杖を持って帰り斧で割つた。あるいはしやがんでタバコを吸い、燃えさしを小川に投げ込んだ。ちゑが特に激怒したのは、彼が犬の顔にタバコの煙を吹きつけいじめ癖であつた。

一九五二年三月二七日、木曜日、その日林叟院は静かであつた。来客も仕事の予定もなかつた。ちゑと彼女の母親と大坪のほかは誰もいなかった。ちゑときぬお祖母さんは食事の用意をし、畳の部屋を掃除し、布団を下し埃を叩き、配達人に会い、花を摘んで祭壇に

供えなければならなかつた。ちゑは周りの庭園や早春の緑の山裾から注意深く花を選んだ。以前好がそうであつたように、彼女も活け花が得意であり、彼女の美的感覚が、祭壇や玄関にはつきりと表現されていた。

三時少し前に、ちゑは玄関で犬の鳴く声を耳にした。彼女は自分の子どもたちが泣き叫ぶのと同じように、犬の鳴き声には敏感であり、犬がいじめにあつてゐることがよくわかつた。彼女はどうなつてゐるのか見ようと下りていった——恐らく大坪がまた犬をいじめてゐるのであろう。全く許せないことだ。

* * *

私たち人間の宿命は
苦しむことである。

Our human destiny is to have suffering.

前日大坪が手伝つて法要を行った田中家の夫妻が、大坪と鈴木家への進物を持って参道を上つてきた。彼らは、顔とシャツに血が飛び散り、首からはさらに血が滴り落ち、酔っぱらいのように呻うなきながら、よろよろと参道を下りてくる大坪に出会い、少女からず動転した。彼は交番に行くというようなことを口走つてい

た。そのとき、助けを求める、悲しげな泣き声が寺から聞こえてきた。それはきぬお祖母さんが呼ぶ声であつた。

彼らは走つて玄関に行き恐るべき光景を眼にした。ちゑが薪焚きのストーブの傍らに、全身血まみれの状態で、壁に向かつて横たわつていた。きぬお祖母さんは娘の頭に薄いタオルを当て、出血を止めようと空しい努力を続けていた。彼女の隣には、片足を失つた犬の死体が、血の池の中に横たわつており、近くには血まみれの斧が転がつていた。田中は、電話に走つていき、医者を呼んだ。近所の人たちは何事が起こつたのか見ようと慌てて駆け上がつてきた。

曾根という名の僧侶が静岡から汽車に乗つてやつて来た。彼は俊隆と一緒に毎週開いていた英語教室のために、早めに到着していた。彼は自転車飛ばして瑞応寺に行き、杉山に直ちに来るよう、連絡した。下の部落では噂が急速に広まつていた。だが、医者はまだ到着してゐなかつた。

包一と乙宥は川のかたわらで遊んでおり、杉山が大慌てで自転車に乗つて橋を渡つていくのを見た。彼らは杉山が林叟院にしか行かないはずだとわかつていたので、好奇心から後をつけていった。彼らは部落を通

り抜け参道を上り、鐘楼を通り過ぎて、近隣の人々でいっぱいになった中庭に入った。そして家の中に入り、恐るべき光景を目撃した。彼らは母親が外に運び出されるのを見つめた。

安子と妹のおほみが道を歩いていると、近所の人が駆け寄ってきて言った。「あなたのお母さんに恐ろしいことが起こった。急いで帰りなさい」。少女たちが走って帰ってみると、母親が意識不明で横たわり、きぬお祖母さんが看護していた。血は至るところに散らばっていた。彼らは兄弟たちと共にどうすることもできず、動転して立ちすくんでいた。

町の中で俊隆は、飛び交っている噂を聞いた商人に呼び止められた。彼は太急ぎで自転車に乗って林叟院に帰り、車寄せに、警察の車が停まっているのを認めた。それから彼は妻を見て、大声で呻き、彼女の前に跪いた。

大坪は斧でちゑの顔と頭を七回打ったのである。医者は手の施しようがなかった。そして次第に彼女の生命の兆候は薄れていった。俊隆と家族は翌未明に彼女が亡くなるまで、ちゑに付き添っていた。

悲嘆に暮れ、くたくたになって俊隆は、ぐったりと感覚を失っていた子どもたちを、家族の部屋に集め

た。彼は今まで決して彼らに見せたことがないような態度で、謙虚に、穏やかに、悲しみに溢れ、子どもたちに話し掛けた。彼は母親が死んだ事、大坪の手に掛かって死んだ事を話した。そして言った。「お母さんを殺したこの男を憎まないでくれ。むしろこのお父さんを憎みなさい。お母さん、きぬお祖母さんやお前たちが大坪について注意したとき、耳を貸さなかったのだから」と。そして彼は付け加えて言った。「これからはみんな一緒に暮らしていこう」

彼は誰に対しても妻が死んだ責任は自分にある、と言いつづけた。「これは私の落ち度でした」と彼は義親であり親友でもあった天野に言った。「私は頭迷に過ぎました。私は意見を曲げなかった。大変な誤りでした」

末常が林叟院へ表敬訪問にやって来てちゑの死を知った。彼は師匠に会うや否や泣き出した。

「奥さんには私がここに住んでいるとき、とてもよくお世話をしていただきました。食料の少ないときでも十分な食事をいただき、お忙しいときでも洗濯をしていただきました」。俊隆は涙を流してうなずいた。

「私の間違いでした。私は彼女にできないことを要求したのです。私は不可能なことを彼女にやらせようと

したのです」

きぬお祖母さんは、俊隆の告白と誠意に満ちた謝罪の言葉を無言で認めた。彼女は彼に對する恭しい態度を変へることはなかつた。彼女の悲しみは計りしれなかつたが、精神的に甚の強い彼女は、家族のためにこの悲劇を耐へたのであつた。彼女の最初の子どもは幼い頃に川で溺れて死んだ。一人息子は戦争で兵士として死に、今度は最後に残つたちるが、四二歳で僧侶に殺された。きぬお祖母さんが冷静に、寺の内部で子どもたちの養育に当たり、俊隆が外部の仕事をつとめるよう勵ましたので、彼女の強さは家族全員に勇氣を与へた。娘の死を悼み悲しんで過ごすのは、彼女の生き方ではなかつたし、それは娘の人生の名譽を損なうものであつた。

包一は大坪を憎んではいけない、と言つた父親の戒めを深く心に刻んだ。父親の言う事は正しい、と彼は思つた。と同時に彼は、父親を憎むこともできなかつた。包一はむしろこの悲劇は、彼の理解の及ばない家族の運命として見た。

姉の安子は、そうした哲学的に超然とした態度で心の整理はしなかつた。当初、彼女はあまりに混乱し過ぎて、話すことも考えることもできなかつた。最終的

に何が起つたかを実感したとき、母親が殺されたのは父親の失策であると思つた。彼が過失を認めたからといつて、母親は帰ってくるわけではないし、彼女は父親を許すことはできなかつた。彼は以前より温かくはなつたが、彼女が悪い夢を見て母親を呼び求めたとき、彼は以前と変わらぬ厳しい態度で、彼女を激しく叱りつけた。彼は努力をしていたが、ちるの死によつて生み出された心の空白を埋めるのに、最も力になつたのはきぬお祖母さんであつた。一番年上の子どもとしての安子の立場は、より一層重要なものとなつた。彼女は弟や妹たちのために強くなろうと決心した。子どもたちの中で一番泣かなかつたのは彼女であつた。

小さな乙宥は、責任や原因などということとは考えなかつた——彼はただ母親を求めた。そして彼はきぬお祖母さんに泣きすがつた。三番目の子どものおほみは最も傷つきやすく夢見がちで、さらに一層物静かになり、自分の殻に閉じ込められるようになった。

大勢の人たちが弔問のため寺を訪れ、家族を慰め、ちるの善行に感謝した。長年に渡り、彼らは子どもたちに彼らの母親がいかにこの社会で愛慕されていたか、どれほど彼女は社会に貢献したか、そして彼女を失つたことをどれほど彼らは残念に思つているか、を

語った。彼女はいつも自転車の籠に食べ物を入れておき、ひもじい人々に与え、病氣のときも健康なときも、絶えず夫や客人に尽くした。彼女の生涯は、充実に有益なものであった。

大坪は鈴木ち多の殺人について審理されたが、精神異常を理由に無罪となり、精神病院に送られた。

ち多が亡くなった夜、俊隆は自分の布団を子どもたちが寝ている部屋に移した。彼らは押し黙り、苦惱の中に身を寄せ合つて寝た。彼はしばらくの間、子どもたちと同じ部屋に寝た。子どもたちは依然としてきぬお祖母さんに育てられていたが、彼との距離は縮まらなかった。彼は以前より乙宥を抱く回数が増え、そして彼らが言うべきことを一層注意深く聞いた。俊隆の生活は大きく変わった。彼の心は和らぎ、耳を開くようになった。彼は言葉には表さない深い痛みを常に抱いていた。

* * *

私たちの道は

終わりもなく始めもない。

そして私たちは

この道から逃れることはできない。

包一の両親はいつも彼に言った、「勉強しなさい！勉強しなさい！」。しかし彼は遊びたかった。彼は勉強している場所からこっそり抜け出して、下の野原で近所の子どもの遊びに加わるのであった。彼は僧侶ではなく他の何かになりたかったが、当然のことながらそうした選択は許されなかった。

夏になると包一は、数週間僧侶と同様の修行をするために林叟院の本寺、石雲院に送られた。彼はまた冬の頃心のために石雲院へ行った。その師匠は彼に親切で、警策で彼を打つことはなかった。彼は家にいるよりも石雲院で修行する方が好きであった——頭を剃ることを除いては。これは彼を当惑させた。家では、他の少年たちと同じように短く髪を刈るだけであった。

家では父親が毎朝早く彼を呼び起こした。「包一、起きなさい！」。彼は掛け布団にしがみついたが、俊隆はそれを足元まで引き剥がした。ときどき父親は彼を引っ張って坐禅に連れていった。その後で包一はお経を読まなければならないが、その間も眠い眼をこすっていた。彼は僧侶になるという考えを全く好ま

なかつた。

そしてある日、彼は父親と一緒に自転車に乗り、町から帰ってきた。そのとき俊隆が言った。「お前はね、僧侶にはならなくてもよいのだよ」

「何だって。ならなくていいだって」

「いいよ。もしお前が一生懸命勉強して他のものになつても構わない、だが一生懸命勉強しなさい」

この言葉の意味が十分飲み込めなるとき、包一は俊隆が、息子に自分の跡を継がせることだけを考えているのではない、ということがわかつた。だとすれば、彼は一体何になるべきか。死んだ母親の思い出が、将来についての彼の想いを彩つた。寺には仏教に関する簡単な本があつた。そして彼はときどきその表紙に目をやつた。とうとう彼は一冊を取り出して読んだ。次いでもう一冊も、そして自分の人生に思いを巡らせた。

時折俊隆は包一を連れて、岸沢の講義を聞きに行つた。包一は一三歳で、話されていることは理解できなかったが、俊隆が少年の日に丘宗潭の話聞いたときと同じように、偉大な師匠の話を知っているのだ、ということはわかつた。何かが少しずつ剥がれ落ち始めた。ある日岸沢がしばらく包一と一緒にいたとき、彼

に貝殻を見せた。俊隆と野扒は脇に立ち、彼らを二人だけにしておいた。帰るときになつて岸沢が言った、「この貝がほしいか」。包一は「はい」と答え、それをもたらつて家に帰り、特別な場所に吊り下げておいた。

全ての物を投げ捨てたときにのみ、あなたたちは、木当の師を見ることができません。仏教という名前すら、私たちの修行にとつては不浄な点となります。それは教えではありません。師の人格や努力こそが私たちの教えです。

岸沢は愛書家であつた。彼は多くの本を読みかつ書いた。そして彼が旅行をして他の仏教徒に出会つたときには、彼がまだ見たことのないような経本を見せて欲しいと頼んだ。岸沢が晩年に、唯一遺憾に思つたことは、戦前、戦中に君主制軍事国家としての日本を支持したことであつた。岸沢惟安は一九五五年に死んだ。彼は俊隆が話術や思考に磨きをかけ、戒律や坐禅を深める手助けをした——豊かな天賦の才を僧侶のみならず、全ての人と共に享受するために。禪は言葉や文字を超越した道だと言われる。俊隆は、岸沢との体験から、それさえも真理の一面にすぎないと常に考え

ていた。

* * *

誠実な修行とは、

人々に対し誠実な配慮をする

ということを意味している。

私たちの修行は

人間性に基盤を置いているのである。

Sincere practice means

to have sincere concern for people.

Our practice is based on our humanity.

一九五四年の三月、焼津港から出帆した一隻の漁船が、ビキニ環礁で行われたアメリカの水爆実験の大量の放射性降下物に汚染され、放射能症にかかった船員たちを載せて帰港した。そしてその内の一人が半年後に死亡した。乗組員が問題の真相を把握する前に、彼らの獲った魚が市場に出回った。大量の魚が捨てられねばならなかった。日本全体が恐慌状態に陥り、全ての海洋生物が汚染されたという噂が広まった。反米の論調が高まった——これは三度目の原爆投下だと見なされ、ある意味では最初の二発よりもたちが悪いとさえ思われた。というのも、最初の二発は戦争中に落

とされたものだからである。アメリカ人は陳謝せず、不適切行為だとは認めなかった。そのとき俊隆はアメリカ人と地域の人たちとの会合に出席することになった。彼の声は小さかったが、発言の機会を与えられたときには、出席者に気を鎮めるように、と呼び掛けられた。彼はそこら中に湧き上がっていた、(病的)興奮状態や独善性を抑えようとした。彼にとつてはほとんど論調は、混乱した政治ゲームにすぎなかった。

彼がいつもアメリカの側に立っていると見なす者もいたが、アメリカの核実験に反対するデモ行進の呼び掛けがあったとき、彼は参加を表明した。寺の周囲の者たちは、共産主義者に協力することで、信用を失う恐れがあると警告し、彼に行かないよう説得した。日本共産党は衆議院に議席を持つ比較的おとなしい組織で、ビキニ事件を大々的に取り上げた。俊隆は核兵器に反対する者であれば、誰でも喜んで一緒に歩くと答えた。これは政治的信条とは一切関係のないことであつた。それは平和のための、ささやかな声明を発表するよい機会であつたのである。彼ははずばずばものを言う指導者ではなかったが、他の人たちと共に控えめに歩き、自分の正しいと信じることを行つたのである。

寺のすぐ下に住む林叟院の檀家の世話役の一人、山田政司は長年に渡り、注意深く俊隆を見つめてきた。

彼の家は村でも最も古く、かつ最も保守的な家庭であつた。政司は俊隆がこのデモ行進に参加することを批判しなかつた。「彼が平和主義者であることは誰でも知つてゐる」と彼は言った。「その上、特に親米的ではあるが、彼は自分の考えを他人に押しつけるようなことはしない。祖温と同様、俊隆さんは僧侶らしい僧侶である。彼はお経を上手に読み、説教臭くない」

林叟院のすぐ下の小川が湾曲してゐる所で、毎朝俊隆が未舗装の道の清掃を終える地点に、山村という名の檀家が、素朴な草葺きの農家に住んでゐた。若い山村昌生はときどき家の前に出てゐた。俊隆がそこへやつて来て「こんにちは」と彼に挨拶した。それは一九五六年、昌生が二二歳の頃のことであつた。

若者は俊隆と話す機会を熱望してゐた。子ども頃の頃、彼は成長して、俊隆が主宰してゐた青年のための戦後の学習プログラムに参加する日を心待ちにしてゐた。しかしこの学習計画は一九五一年に終了した。それにもかかわらず、彼はこうしたときおりの朝の会話を通じ俊隆から多くのことを学んでゐると思つた。昌

生にとつて、彼のような人はほかにはいなかつた。

昌生が「国際主義」という言葉を初めて聞いたのは俊隆からであつた。俊隆はこの若い友人に、日本人は三〇年代、四〇年代に犯した過ちから学ばなければならぬ、そして世界が冷戦を克服する手助けをしなければならぬ、と語つた。俊隆は一度に多くは語らなかつたが、注意深く言葉を選択し、適宜言葉を付け加えて話した。

「私たちは他国民の慣行や言葉を勉強しなければならぬ」とある日俊隆が言つた。「私たちが世界の平和を達成するためには、地球規模でものを考えなければならぬ、国境によつて制限されてはならない」

ときどき彼は自分の昔の憧れを口にしたり。「国境を跳び越えたい」と。

「なぜですか」

「私は生涯に今している以上のことをしたい。ここで檀家の世話をしてゐる以上のことを」

「どこへ行くんですか」

「外国へ、恐らくアメリカへ」

「そこで何をしたいのですか」

「世界平和のために仏教を教える。もしそれができれば、本望だ」

昌生には俊隆が、自分の家族や仲間の僧侶たちに必ずしも話していない構想を語っているのだ、ということがわかった。大多数の人たちの世界観は狭いものだから。檀家はもちろんのこと彼を信頼し、彼も彼らから信用していたが、彼らは必ずしも彼の夢を知っていたわけではなかった。

* * *

石につまずいて大地に倒れる人は、

自分が倒れた同じ大地を

利用して起き上がるでしょう。

あなたたちは、

自分が倒れる原因となったのだから、

大地が問題だと不平を言います。

大地がなければ倒れることもありませんが、

起き上がることもないのです。

倒れるのも、起き上がるのも、

共に大地によつて与えられた

大きな助けです。

母なる大地があればこそ、

あなたたちは

修行を続けることができるのです。

あなたたちは、

その問題のある大地の禅堂で

修行をしているのです。

問題は、

実はあなたたちの禅堂なのです。

A person who falls on the earth,

stumbling on a stone,

will stand up by means of the same earth

they fell on.

You complain because

you think earth is the problem,

having caused your fall.

Without the earth, you wouldn't fall.

but you wouldn't stand up either.

Falling and standing up are both great aids

given to you by the earth.

Because of mother earth you can continue

your practice.

You are practicing in the zendo of the great earth,

which is the problem.

Problems are actually your zendo.

陶工の静郵の家で、俊隆は衣を脱ぎ畳の上に横にな

*前後関係からして高草塾（一九四六—一九五二）のことと思われる。

り、少量の酒を飲むことさえもあつた。もつとも少し飲むとすぐに眠くなるので、注意せねばならなかつたが。たとえ呑んだとしても、彼は下戸で知られてゐた。静郵が不在のときは、彼の息子に「すみません、私は両親の家にいるような、くつろいだ気分になりませんので」とだけ言つて、枕を掴み白い着物のまま居眠りした。あまり大勢の客は入つてこなかつた。俊隆は自分が本当に好きな陶器を見つけたときは、財布を取り出し、汽車賃だけ残してお金を全部静郵の所に置いていった。彼は決してたくさんの金を持っていたことはなかつたので、ほとんどの場合茶碗や碗の値段を下回る額しか払わなかつた。一度静郵の息子が、俊隆が支払つた皿の代金が不足している、と指摘したとき、静郵は俊隆を普通のお客と考へてはいけな、と厳しくたしなめた。

「お客が全員彼のようだったら素晴らしいのだがな——」と静郵は言つた。「そうだったら、お客に値段を知らせるといふ、ばつが悪いことはしなくて済むのだが。彼を在家の人たちと混同してはいけない」

静郵は俊隆より一〇歳年上であり、俊隆は彼に先輩の僧侶に接するように接した。戦後俊隆は金がなかつたため、静郵の焼き物の会に出席しなかつたとき、静

郵は彼をとがめて言つた。「これはあなたが楽しみみだけのために買うようなものとはわけが違うのだ」と。そこで俊隆は、金があるがなかるうが通い続け、静郵を師の一人と見なしていた。

あるとき静郵が、彼の作品の特徴を示す、深紅の斑点のある美しい大壺を俊隆に見せ、これは売るつもりはない、と言つた。「結構」と俊隆は言つた。「私がいただいていきましよう」と。彼は本当に持つていった。後日静郵と彼の息子が林叟院を訪ねたとき、彼はその壺を入れるために作った木の箱を持つてきた。俊隆は静郵に、壺に名前をつけるとしたらどんな名前にするか、箱に墨で名前を書いてもらいたい、と頼んだ。「雲水強奪の花瓶」と静郵は書いて俊隆を喜ばせた。

戦死した静郵の長男の遺骨がついに海外から到着した。俊隆は準備の手助けをするために葬儀の前日作業衣を着てやつてきた。翌日彼は自分の最も美しい法衣を着て葬儀を取り仕切つた。それは俊隆にとっては重要な意味を持つていたが、全ての人たちに当てはまるものではなかつた。

一三歳のとき以来彼の宿命で、俊隆は他人の家庭

で、数限りない年忌法要を行わなければならなかった。式の後、彼は上等のご馳走を食べ、黒い水引で結ばれ白い封筒に入ったその家のお布施を受け取った。

夜はときどき、友人たちと一緒に蕎麦屋や酒場に立ち寄った。俊隆は焼津ではかなり尊敬され、人気もあったが、彼の生活は、僧侶としての仕事か友人たちとの交際に限られていた。それは彼が理想に燃えた青年の目々に、夢見てきた生活ではなかった。

ほほ毎日俊隆は、朝のお勤めを終えた後、自転車に乗り町に出掛けた。葬式や出席しなければならぬ会合でもない限り、彼はしばしば夕食過ぎまで、ときには就寝の時間を過ぎるまで帰らなかつた。彼は近くの僧侶の修行寺で、ある種の責任を負っていたが、そこでの彼の仕事は儀礼の手伝いをするか、もしくは修行を受ける少年たち——厳しい修行をできるだけ早く済ませてしまいたいと熱望する者たち——が父親の寺を引き継ぐために、親から期待されたことをする修行の手助けをすることであつた。彼はそうした立場に付随する問題——寺の派閥争いに関わることは避け得なかつた。彼は自分の見た禅の現状だけでなく、自身身の立場にもうんざりしていた。彼は住職の中にも、宗門全体の中にもよい友達がいた。しかし彼が情熱を

傾けることができるものは何もなかつた。

彼は息子たちやきぬお祖母さんと一緒に朝食を取り、妻が殺される以前のようによそよそしく厳しくはなかつたが、相愛わらず子どもたちにはあまり顔を見せなかつた。包一は僧侶としての得度を終え、間もなく駒澤大学に行くことになつていた。乙宥はまだ小学校に通つていた。安子は東京の大学にいた。

おほみはもう家にはいなくなつた。母親が死んでから三年ほど経つて、彼女は奇妙な行動を取り始めた。彼女はふさわしくないときに笑い、家から彷徨い出し、見つけられ連れ戻されたりした。彼女は学校に適應できず、万引きで捕まることもあつた。ついに彼女の振る舞いあまりにも不安定になつたので、俊隆は家庭の主治医に相談した。小沢医師は、おほみを治療に出すように勧めた、彼はもはや家庭では彼女の面倒を見切れないと考えたからであつた。一九五七年まで数年間、彼女は施設にいた。ときどき俊隆や兄弟たちが彼女を見舞いに行つた。

当時俊隆は二つの幼稚園の世話をしなければならなかつた。そして、みつが双方の園長であつた。

一九五四年四月に彼は常盤幼稚園の分園を開いた。み

つの宿舎のある真新しい建物の中に、二番目の幼稚園が一般の人たちの多くの要望によつて造られた。彼は毎朝幼稚園の先生たちに挨拶に行くたびに、みつに会つた。

幼稚園でしばらく過ごした後で、俊隆は友人たちを訪ねた。他の仕事がないときは、付き合いで天野のホテルに行き、お茶を飲み、ときには暮を打つた。また、彼は以前彼の寺であつた蔵雲院に行き、憲道や息子の昭孝を訪ねた。昭孝は澁々僧侶になることに決めた。森町を立ち去る前に、彼は必ず静郵の自宅工房に立ち寄つた。俊隆の友人の中には、天野のように、林叟院で仕事上の宴会を開く者もあり、芸者も出席した。俊隆も参席し愉快に過ごしたが、最終的にはこのような生活を彼は望まなかつた。

多くの点で、俊隆は充実した有益な生活を送つていたが、しかしそれは彼の資質を十分に發揮できるものではなかつた。彼がかつて出会い、学んだ多くの偉大な師匠たちの道を実践し、それを教えない限り、彼は

満足できなかつた。彼は先達から受け取つた炬火かざびを後世に引き継ぎ、多くの人たちと共に、より深遠な道に携たづなわることにより、彼らから受けた恩を返さなければならなかつた。彼は自転車に乗つて通り過ぎるとき、行き交う人々が口にする「こんにちは、方丈さん！」

という挨拶の仕方にもいらいらし始めた。(中身を伴わない)見せ掛けの挨拶を交わすことは、本来の世界から逸脱し、無意味なことのように思われた。ちようど彼がランサム女史と一緒に生活していたときと同じように、再び針路を外れ、漂っている自分を認めた。彼は自分が望まなかつた寺の住職になつていた——多くの仕事に忙殺され、惰性で行動し、焼津に張り付けになつて、人生は無為に過ぎていく。

海外に行くという考えを、かつて私は断念しましたが、常に心の中にはありました。断念したと思つていましたが、実際には断念してゐなかつたのです。

序幕 1956-1959

CHAPTER 9 An Opening

人生において、

たとえ大きな困難に遭遇し、

ネパールの大きな山のように

通路がないように見える場合でも、

通り抜ける道はあるものだ。

In your life, if you come to a great difficulty,

like a big mountain in Nepal,

that looks like it has no passageway,

you know there is a way to get through.

ときどき俊隆は曹洞宗宗務庁の友人、山田義道に会った。一九五六年義道は何気なく俊隆に、一年くらいサンフランシスコに行つて、そこにいる僧侶の鳥羽瀬保道の補佐役になる気はないかと尋ねた。彼は俊隆のような年配の僧侶がこの仕事に興味を持つと期待していなかったが、俊隆が長年英語を勉強しアメリカに

興味を持つていることを考えれば、義道がこの問題を持ち出したことは別に不思議ではなかった。彼はアメリカに行く僧侶を見つけ出すことができなかったのがある。それは、この仕事には金も地位も付随しなかったからである。俊隆は補佐役であれ、貧乏であれ気にはしないが、祖温が一九一八年に始めた、大規模な寺の修復事業が完了するまではどこへも行く事は考えられないと答えた。

一九五八年の九月、義道が林叟院に来て、アメリカでの空席を埋めることが依然として難しい、と俊隆に語った。鳥羽瀬はいまだ名目上はその責任者ではあったが、半ば引退した尼僧と、博士論文を準備中のパートタイムの僧侶にサンフランシスコの寺の運営を任せ、六カ月前に帰国した。義道は鳥羽瀬の補佐役として直ちに出發できる人間を求めていた。彼は数名の僧侶を指名さえしたが、いずれも行くことを拒んだ。

サンフランシスコには問題があり、宗務庁としては表面上は帰任してもよいと装ってはいたものの——鳥羽瀬が帰任することを望んでいなかった。従つて誰がこの地位につくとしても、実質的には寺の住職になるはずであつた。

「あなたが行きませんか」。義道は半ば冗談気味に俊隆に言つた。「言つてみれば向こうはゴタゴタですよ。しかしあなただつたらきつと処理することができるとでしょう」

「私が問題を引き起こしたわけではないから、私が改善に失敗したとしても了解はしてくるでしょう」と俊隆は言つた。向こうでは今よりは自由が得られるであろう——彼は確信した。

一カ月後、義道が再び林叟院に立ち寄つた。輝くような秋の葉が山腹や道の両側を覆つていた。それは、そよ風の吹く心地よい日であつた。「アメリカの話はどうなつていますか」。お茶を飲みながら俊隆は彼に聞いた。「もちろんもう誰かを見つけたでしょうけれど」

「いや」と義道は答えた。「向こうの檀家総代の小宮さんから二、三週間おきに、誰かを送るようにとの手紙を受け取つていますよ。私はとても頭が痛いんで

す。彼は数年来同じことを書いてきているんです」

「私が行きましょう」と俊隆は言つた。

「そう、あなたは英語をご存知です。あなただったら完璧です。あなたが行かれないのは実に残念です。もつとも、あなたがいなくなつたら寂しい限りですが」

「私が行きましょう」とまた俊隆が言つた。今回は義道も俊隆の言つたことが了解できた。

彼は心底驚いた。「あなたは本当に行くというんですか。冗談を言っているのではないでしょうね」

「いや、私は真面目に言っているんです。ここ数週間よく考えてみました。私はこの仕事をやれると思えます。林叟院と家族が行かせてくれれば、六カ月以内に出發できます」

「私がアメリカに行つてもお前は大丈夫か」。俊隆は包一と一緒に汽車に乗つていた。包一は駒澤大学の二年生であつた。俊隆は義道に会いに東京に行く途中であつたが、まず長男としばらく一緒に過ごしたかつた。彼は、アメリカ滞在は三年間だろうと言つた。彼が帰るまでに包一は永平寺に行つてゐることである。

包一は父親の決意に影響を与えることはできないとはわかってきたが、とにかく尋ねてくれたことはありがたいと思つた。彼は全く驚いたわけではなかつた。しかし檀家に対する義務はどうなるのだから。

「誰が林叟院の面倒を見るのですか」

「友達が協力してくれると言っている」

「他の寺や幼稚園の仕事はどうするんですか」

「私は五四歳だ、定年より一年若いだけだ。誰か別の人にチャンスを与えるべきだよ」

父親は息子が大学を卒業し、僧堂での修行を終え彼の跡を継ぐ準備ができるまで待つべきだ、と包一は思つた。彼は包一が住職につくまで寺を運営すべきである。そのとき初めて彼は責任を全うしたことになるのである。三年間は長い。しかしそれが俊隆の望むところであれば、止めることはできないと包一にはわかつていた。

「行く必要があるなら行ってください」

「英語を勉強しなさい」と俊隆は言つた。「恐らくお前も来て手伝ってもらうだろうから」

俊隆は安子にはすでに話をしていた。彼女は林叟院に住み、最初の幼稚園で教えていた。彼女には、彼が

アメリカに行く事が終生の望みであることはわかつており、もちろん彼の決意を支持するが、出発前に彼女は結婚したいと言つた。彼は同意した。彼女には意中の男がいた。俊隆は、彼女と対象の男が結婚することに同意できるかどうか、天野に依頼し、お見合いの席を手配してもらおうと答えた。

中学生の乙宥は、主としてきぬお祖母さんに育てられていた。彼は父親が去っていくと考えることは寂しかったが、彼と一緒に行くことは恐ろしかった。彼はどうしてよいのかわからなかつた。彼は父親がまたスズメバチに刺されるといふと思つた。そのとき、俊隆は一週間床についていた。それまでに彼らはそれほど長く一緒に過ごしたことはなかつたのだ。きぬお祖母さんは俊隆に、行く必要があるならどうぞ行つてください、けれども乙宥と一緒に連れていってください、と言つた。彼女は、少年が父親なしで彼女と二人だけで残されるべきではないと考えた。それは彼女には荷が重過ぎた。俊隆は安子が手伝ってくれるだろう、今すぐ乙宥を連れていくことはできないが、恐らく後日妻が来るときには、と言つた。

「妻ですって」。きぬお祖母さんは不意打ちを食らつた。

俊隆は結婚する女性を見つけないなら、と説明した。アメリカの寺は、既婚の僧侶を送るように依頼してきており、義道は要望どおりの僧侶を派遣する、と連絡していた。俊隆は既婚男性としてのビザを申請しているので、結婚する必要があった。彼はきぬお祖母さんに、誰がお嫁さんによいか教えてほしいと頼んだ。

「あなたはみつと結婚するしかないでしょう」と彼女は言った。

「そう、そのとおりです」と彼は答えた。

彼女の名前が出てきたのはこれが最初ではなかった。彼の妻が死んで一年後、ある檀家が彼に、新しい奥さんを見つけたらどうか、と勧めた。そのとき、きぬお祖母さんは可能性があるのはみつだけだ、と言った。噂が広まったが、二人は最終的に話し合いを打ち切るまで決定を引き延ばし続けた。お互いに相手が頑固過ぎたからだ、と言って。

もちろん、それがみつなのだ。

彼らは数年間協力して働いてきたチームであった。そして二人の間には愛情が生まれていた。彼女は彼に負けない強さを持っていたし、彼はまた、彼女の自立心を受け入れる寛容さを持っていた。彼らの風変わり

な点が、お互いによくマッチするように思われ、彼らのいづれも普通の人とは馬が合わないのではないかと思われた。そうした表現は公平ではないであろう。彼らはお互いにとっては完璧であったのだから。

きぬお祖母さんはみつと話をし、みつはためらうことなく承諾した。彼女は自分が希望するかどうかという考えではなく、ただきぬお祖母さんが依頼したので承諾したのだ、と語った。他方、みつは意志の強い女性であり、容易に強制できるような人間ではなかった。俊隆の方は、みつより小柄でさえあったが魅力的な男性であった。

天野は多忙を極めた。檀家の意見は分かれていた。

ある者は俊隆のアメリカ行き計画を支持し、それが彼にとっていかに重要なものであるかということを理解した。他の者たちは、儀式を執り行う僧侶がいさえすれば気に掛けなかった。しかしほとんどの者は反対した。中には絶対反対の者もいた。なぜ彼は私たちを捨ててアメリカに行くのか。彼は妻を殺されたことが、禅宗の情報網を通じ日本全国に知れ渡ったため、恥ずかしく思っただけで日本を去るのだ、という者もいた。焼津では彼が檀家から離れ、社会ずれしているとの批

判を逃れようとしているのだ、という噂もあった。しかし実際のところ、彼は人望があつたし、それに事は原則的な問題であつたから、檀家は俊隆が去ることを望まなかつたのである。「ここは彼がいるべき場所だ！これは彼の義務だ！」と檀家の人たちは會議で述べた。彼は一年に限り行くべきだと思ふ者もいた。天野は、三年はすぐに過ぎるだろうし、彼の仕事を代行するよい僱侶もいると言つて説得した。

気短で年老いた無政府主義者の弘造は、俊隆は帰つてこないだろうと予言した。「あなたたちはどう思ふかね」と彼は言つた。「我が友、方丈さんはアメリカの土にならうとしているのだ！」

今一つの問題があつた。かつて俊隆が一九三六年に住職として承認された後に、突然ちよと結婚しようとしたときと同じように、天野は委員会に俊隆が再婚したいと望んでいることを伝えた。かなりの多くの檀家が俊隆とみつの結婚に強く反対した。しかし一とおりが議論を終えた後で、天野は俊隆の意向に沿うように彼らを説得した。

一二月初めに安子が結婚した。一週間後に、俊隆とみつが内輪の式を挙げて結婚した。彼らは夕方ささやかな祝賀会を開いた。安子の夫は彼女と共に寺に移つ

た。彼らは俊隆が帰国するまで寺に住むことを了承した。きぬお祖母さんが手助けを必要としたからである。

みつは引き続き幼稚園に任んでいた。彼女と俊隆は、必要な渡航準備を除いては、通常の予定通りに仕事を続けた。彼女は、彼と一緒に出発しない予定であつた。彼はまず落ち着いてから、彼女と乙宥を迎える準備をしたいと希望した。彼は実際には彼らのことをあまり考えていなかった。彼は当然うまくいくだろうと考えていた。やるべきことは山ほどあり、出発の日は数ヵ月先に迫つていた。

* * *

遅過ぎると言つてはならない。

Do not say too late.

俊隆は数十年に渡り、林叟院の修復を徐々に進めてきたが、この仕事は特別な努力を払わない限り、永久に続くものであつた。義道からアメリカでの仕事についての申し出があつた後、俊隆はさらに多額の寄付金を募り、天野の助力を得て、委員会から工事を完成するために必要な、十分な資金の充當を得た。

私はたくさんの建物を昔のままに修復しました。それが難しい点でした。この方法は余計に金が掛かり、ある人にとっては見栄えもよくなかった。それで、誰も私に賛成しませんでした。それは氣狂いじみているように見えました。私はやり遂げなければならぬと思っていました。林叟院を再建するには、長い月日を要しました。私は林叟院にいる間は、全ての時間をその仕事に傾注し、建設された当時の建築を絶えず研究し、それが全て再現されるように努力しました。

彼が主張した草葺きの屋根は多額の費用を掛けて修復されたが、耐久性がないことが証明された。毎年それを維持するために、さらに多額の費用が掛かった。梁の上に次回葺くために必要な藁を貯蔵し、屋根の一つの面を五年置きくらいに葺き換えるのであった。しかしここで俊隆は譲歩し、現代の慣行に従い、瓦葺きに変えることに同意した。主な建物は築三〇〇年以上の古い物であった。大きな梁のほとんどは残すことができたが、細部の仕事はもちろん、修理や交換の仕事が多く残されていた。檀家の多くはより現代的な外観

を望んだが、俊隆は最も伝統的で費用の掛かる寺院建築の技術と材料を使うよう主張した。檀家や近所の人たちが仕事を早く完了させるために協力した。俊隆もしばしば現場に行き、彼らと共に重労働に携わった。

建物を修復する目的は単に施設を持つためだけではありません。最も重要な点は、修行を続行し、私たちと責任を共にする後継者を持つことです。重要な点はあなたが期待しないところにあります。

一九五八年春に、主な建物——開山堂、祖師堂と経堂——および鐘樓が最終的に完成した。修復を祝う落慶式が三月と五月に行われた。これは俊隆が四〇年間携わってきた仕事であり、祖温が彼に完成させるように、と残しておいたと思われる仕事であった。祖温は本堂の両翼にある庫裏と禪堂を修復しただけであった。「私はやろうと思えば全部できたのだが」と祖温は俊隆に言った。「しかし弟子たちに何かやることを残しておかなければならない」。そのとき俊隆は彼の言ったことが理解できなかった。なぜ今全部やってしまわないのか。彼は不思議に思った。後日彼は、これ

も祖温が彼に伝えた物の一部であったと悟った。

私がアメリカに行く決意をしたとき、檀家の一人にこう言いました。もし一〇年早く行くことができたならば、私はたくさんの仕事をすることができたであろうと思います。行くのが遅過ぎたのかもしれない。私はほとんど英語を忘れてしまいましたし、たくさんのことをやり遂げることはできないかもしれない、と残念に思いました。しかしそのとき私はこうも思いました。一〇年前私の仏教の理解は十分ではありませんでした。だから私が日本に留まり、師が私に残した仕事を完了させたことはよかつたのかもしれないと。

それは一九五九年五月一日、俊隆の五五回目の誕生日であり、僧侶になってから四二年目のことであつた。包一を傍らに置き、俊隆は蔵雲院の裏手の墓場で、父祖學と師匠の祖温に香を供えた——彼と祖温が、実に厳しくかつ実に親密に生活を共にした寺であつた。私がアメリカに行くことについていかがお考えですか。と彼は師匠に尋ねたことがあつた。祖温の返事は断固たる、ノー！であつた。

二九年の歳月が過ぎた。今の答えはイエスであつた。いかに祖温は正しかつたことか。いかに多くのことを俊隆は学んだことか。祖温が今日の彼を作り、彼を導いたのだ。今彼はそれをありがたく感じていた。祖温は虫の食つた梁をそこに残したまま死んだが、俊隆はそれを偶然の出来事とは思わなかつた。彼は般若心経を読みながら、心は感謝の思いに満たされた。彼の祖温に対する感謝の気持ちは、一〇年以上の年月の経過と共に深まっていった。「父に香を供えるときは悲しみを感じる」と彼は後に言つた。「しかし師匠に香を供えるときは涙が頬をつたつて流れ落ちる」

俊隆と包一は、俊隆の呼ぶところの祖温の妻、丸七好の骨が納められている場所を訪れた。彼らはその場を清掃し、お供えをした。彼女が亡くなってから六年が過ぎていた。彼女が生きていた頃は、俊隆は蔵雲院に行つたときは必ず、包一や他の子どもたちを連れて彼女を訪ねた。彼女は長生きしたので最後にはほとんど眼が見えなかつた。彼らはいつも果物やキャンデーの贈り物を彼女に置いていった。

一方みつは病気に掛かつていた。彼女の精力は衰え、不快な咳をした。数名の医者にかつたが、どこ

が悪いのかわからなかった。彼女は回復するまで、少なくともどこが悪いのか判明するまで、俊隆にアメリカに行つてほしくなかった。彼女は死ぬかもしれないと思つた。俊隆は足繁く彼女を訪ねたが、出発は延期しなかつた。彼女の医学的問題は慢性的なものであつたが、彼女はいまだにそれがどんな病気なのかわからなかつた。しかし俊隆の壮行会の席で、彼女は不満を口には出さなかつた。

俊隆の妹たちと異父兄、嶋が、小沢医師の家族や静郵の家族と共に壮行会に出席した。天野家と加藤家の人たちも出席していた。満州で彼の案内役であり同伴者であつた太郎は、このとき二六歳であつた。「もう一つの冒険を祝して！」と彼は俊隆に乾杯した。

俊隆の同僚の僧侶たちが大勢別れの挨拶にやつて来た。アメリカに行く僧侶を見つけた義道、岸沢の後継者である野扒と丹羽、彼の助手であつた瑞応寺の杉山、蔵雲院からやつて来た岡本憲道、その他大勢参加していたが、誰も彼と立場を入れ替わりたいと思つる者はいなかつた。高草山グループのメンバーが、俊隆の旅の成功を願ひ林叟院にやつて来た。彼らは俊隆と同じように興奮し、この国が狂気の最中であつた時代に先導の灯であり、よき友であつたかつての師匠を誇

りに思つた。

「私たちは暴れ者であつた！」と末常は乾杯して言つた。後ほど彼は、俊隆が本を書くときはいつでもお手伝いしますよ、と念を押した。末常は出版に携わつており、俊隆は手紙でいつかこの点で助力をお願いするかもしれない、と連絡したことがあつた。不幸にも、彼らの中で最も活動的であつた西中間正雄はそこにはいなかつた。戦後彼は真理の探求を続けたが、仏教の修行よりも哲学的な思考により傾いていつた。彼は長い精神的苦悩の末、一九五五年に自殺した。翌日空港へ行く途中、俊隆は正雄の弟、西中間重雄を訪ねた。

五月二一日、焼津の東の空が茜に染まる頃、俊隆は肌寒い朝の冷気の中で池の傍らに立っていた。彼は林叟院での最後のお勤めを終えたところであつた。鯉が暗い水の中を泳ぎ、オタマジャクシが素早く動いた。今は苔に覆われている大きな生ある石よ、さよなら。

蛙たちよ、さよなら。太陽の光線が丘の上の竹藪に射し込んできたので、外気は急速に暖められ茎が膨張し、さまざまの間隔で鋭いピシツという音を放ち、朝の静寂の中に奇妙な別れの歌を奏でた。

車は停車場に向かおうとしていた。俊隆は数個の鞆

を持つてきただけであつた。残りの荷物は先に船便で送つてあつた。彼は僧侶の旅行用の外衣を着、首に絛子を掛け、草履と白い足袋を履いていた。

「アメリカカへは靴を履いて洋服を着ていったほうがよいのではないですか」。安子の夫は半ば冗談で聞いた。「義道さんの話では、他の僧侶たちは、新しい洋服を着て光つた靴を履いていったそうだ。私は古い衣を着て、光つた頭で行きましょう」

彼はきぬお祖母さんに別れの挨拶をし、彼女の手助けに感謝した。彼らはしばらく向き合つて立っていた。「氣をつけてね」と彼女は言つて軽くお辞儀をし、彼らが駅に向かつて走り去るのを見送つた。

その夜、羽田空港には、安子と彼女の夫、包一、乙宥、みつと彼女の娘はるみ、義親の天野、そして高草山会のメンバーたちが、鈴木俊隆に別れの挨拶に来ていた。

「しつかり勉強しなさい。おとなしくして、きぬお祖母さんの言うことを聞くんだよ——きぬお祖母さんは立派な人だよ」。俊隆はゲートで乙宥に言つた。

乗客は機内へ搭乗するように、と呼び掛ける放送が流れた。俊隆と彼の家族や友人たちは、お辞儀をして手を振り、さよなら！ 氣をつけて！ と叫んだ。俊隆は廊下を歩きながら振り向いてガラス戸越しに見上げながらお辞儀をし、手を振り、満面の笑みを浮かべていた。それに応え、全員がお辞儀をし、手を振り続けた。

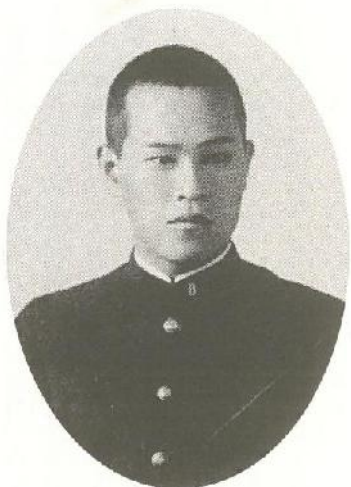
茶色の紙に包んだ大きな平らな荷物、古い寺から新しい寺への贈り物を片手に持ち、もう一方の手に花束を持って振りながら、鈴木は滑走路に待機していた飛行機に近づきながら、笑いかつおどけてみせた。幸福な男は、踊りかつ笑いながらアメリカに発つていった。



鈴木俊隆、14歳。森町高等小学校卒業式にて。
前から2列目、左から6番目（1919年3月）



托鉢姿の俊隆、永平寺にて（1930年頃）



25歳、駒沢大学卒業アルバムより（1930年3月）



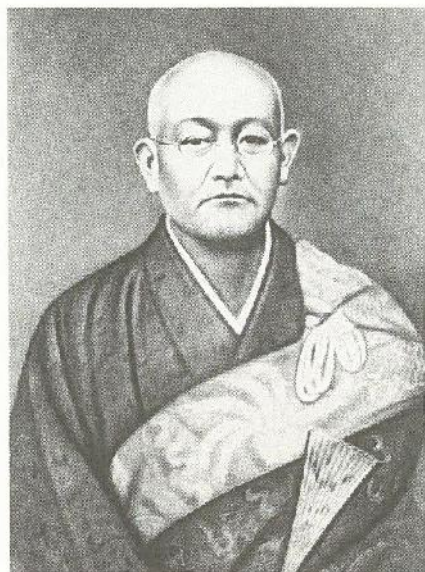
蔵雲院にて。左から右へ：俊隆の父・仏門祖学、俊隆、日野氏（俊隆の妹・とりの夫）、とりと赤ちゃん、寺の管理人、俊隆の母・よね（1930年頃）



俊隆の駒沢大学における英語教師、ノラ・ランサム女史、中国天津にて（1932年頃）



蔵雲院にて。左から右へ：嶋春子（俊隆の異母兄弟・良波の妻）と赤ちゃん、よね、俊隆、俊隆の妹・内山愛子とその赤ちゃん（1935年頃）



俊隆の師匠・玉潤祖温師、53歳（1930年頃）



俊隆の先生・岸沢惟安師（中央の白い僧衣）、85歳（1950年頃）



林叟院での坐禪会の模様。警策を持った俊隆と高草山会メンバー（1945年頃）



船舶のスクリューに鋳造するために供出される林叟院の鐘。
右端下は俊隆とちえ夫人（1945年）



俊隆と女子青年会（1947年頃）



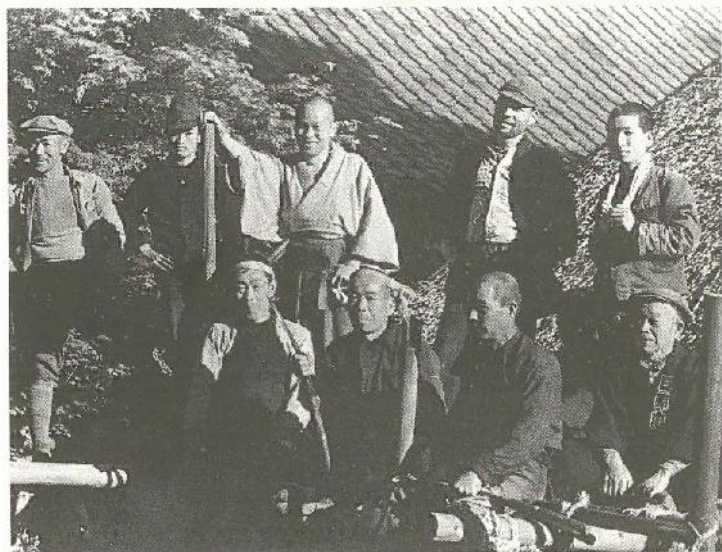
林叟院の後庭の池（1996年）



ちえの母・村松きぬお婆さん（1966年）



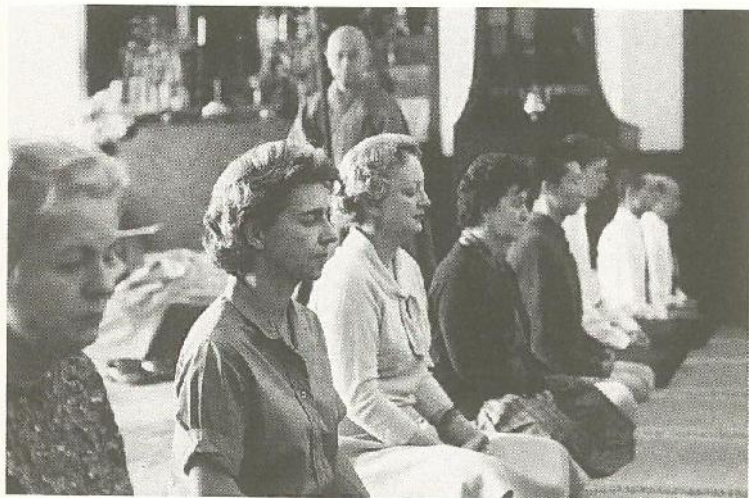
前妻・鈴木ちよ（1950年頃）



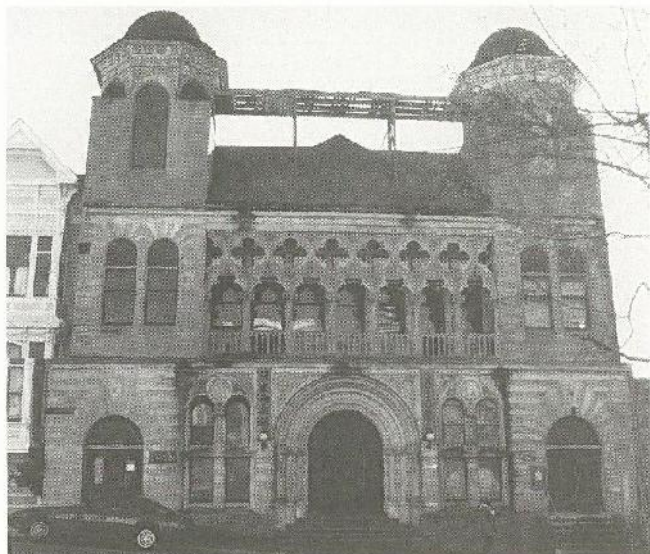
俊隆、寺の作業員たちと林叟院にて（1955年頃）



羽田空港にて、俊隆一家。左から、長女・大石安子と夫・大石巖、息子の乙宥と包一、俊隆、鈴木みつ夫人、みつの娘・松野はるみ（1959年5月21日）



桑港寺禪堂にて、警策を持つ俊隆と参禅者。左から右へ：ジーン・ロス、ベッティ・ワレン、コニー・リュイック、デラ・グエルツ、ビル・クワン、グレアム・ベッチー、ポール・アンダーソン、ボブ・ヘンス（1962年頃）



サンフランシスコはブッシュ・ストリート1881番地の曹洞宗の禅寺・桑港寺（1965年頃）



桑港寺食堂にて参禅者と共に（1961年頃）



俊隆が正式に桑港寺の住職になる儀礼・晋山式にてサンフランシスコの日本人街を歩く一行。左から右へ：不明、前角大山、鈴木俊隆、加藤和光、山田豊林（1962年5月20日）



俊隆の晋山式後に桑港寺前に集う、日本人会、禅センターのメンバーと招待客（1962年5月20日）



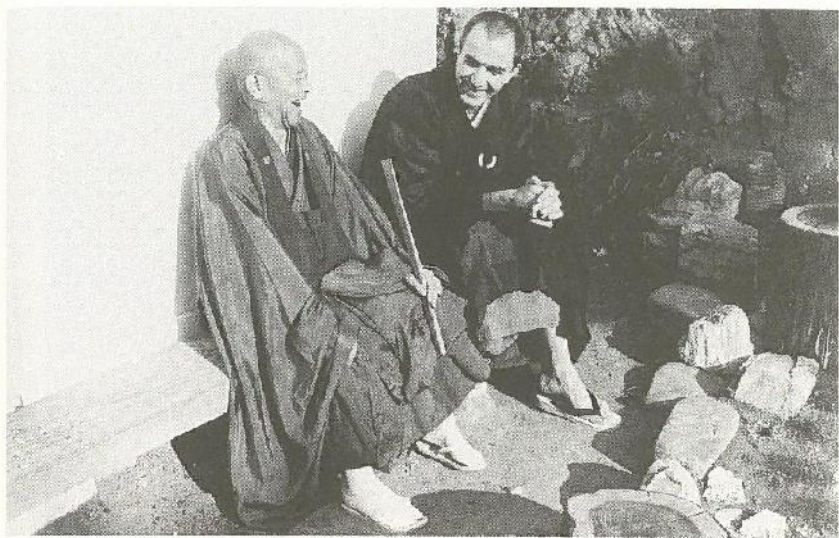
日本への出発を控えた鈴木俊隆夫妻、サンフランシスコ空港にて。左から右へ：バージニアおよびリチャード夫妻、ベッティ・ワレン、コニー・ルエイック、マイクおよびトルーディー・ディクソン夫妻、デラ・グェルツ、ギレス・グエイ、デイヴィッドを抱っこしたポーリン・ベッチー（1963年4月10日）



福井県・永平寺にて。立髪良泉、グレアム・ベッチー、フィリップ・ウィルソン（1964年）



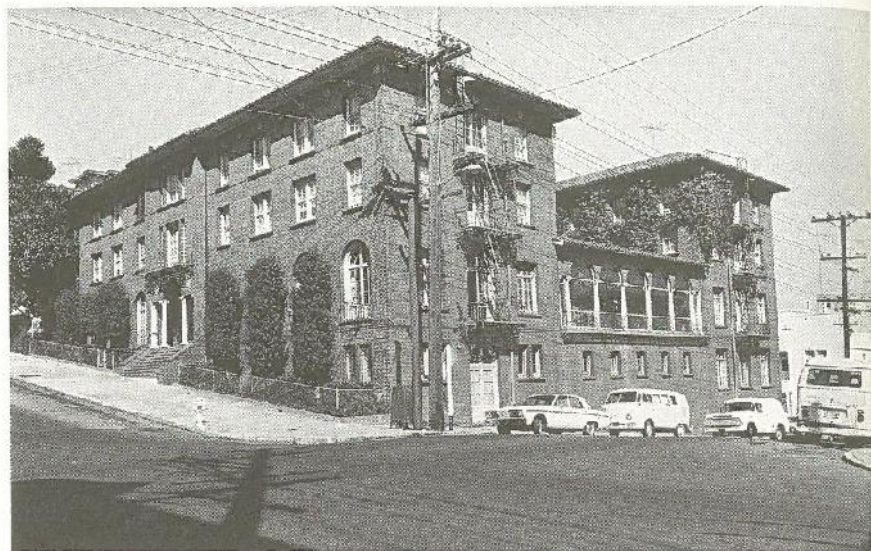
林叟院にて。左から右へ：鈴木俊隆、鈴木包一、1人おいて、グレアム・ベッチー、ポーリン・ベッチー、フィリップ・ウィルソン、クロード・ダレンバーグ（1966年10月）



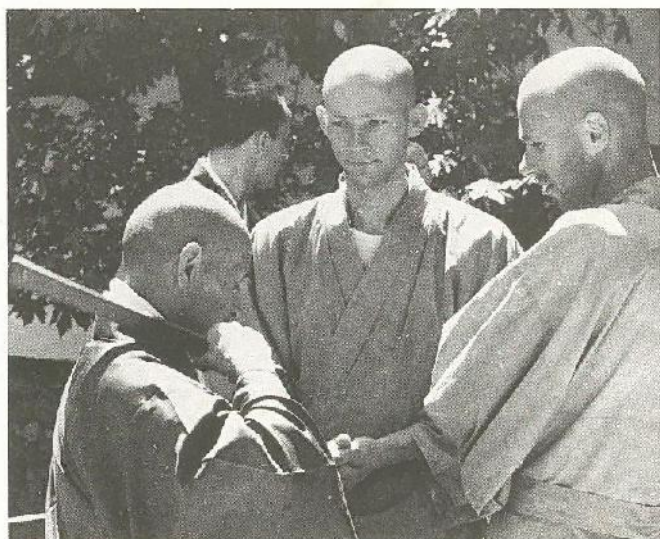
タサハラにて、俊隆とリチャード・バーカー（1968年） Photograph by Tim Buckley



タサハラにて、俊隆とリチャード・バーカー（1967年） Photograph by Tim Buckley



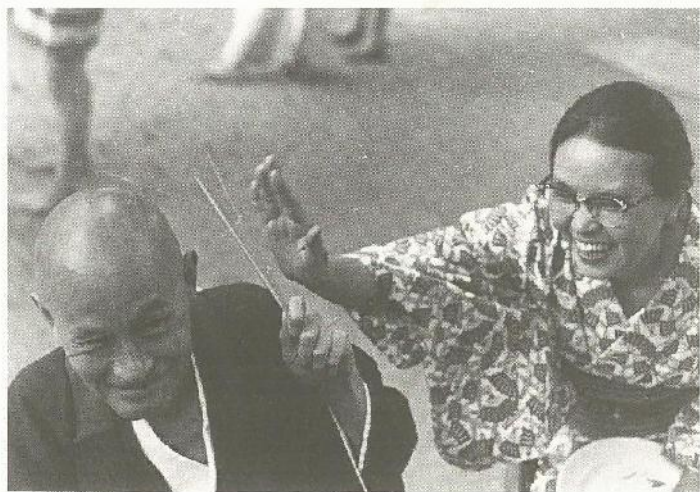
サンフランシスコ禅センターのシティ・センター（1969年頃） Photograph by Robert Boni



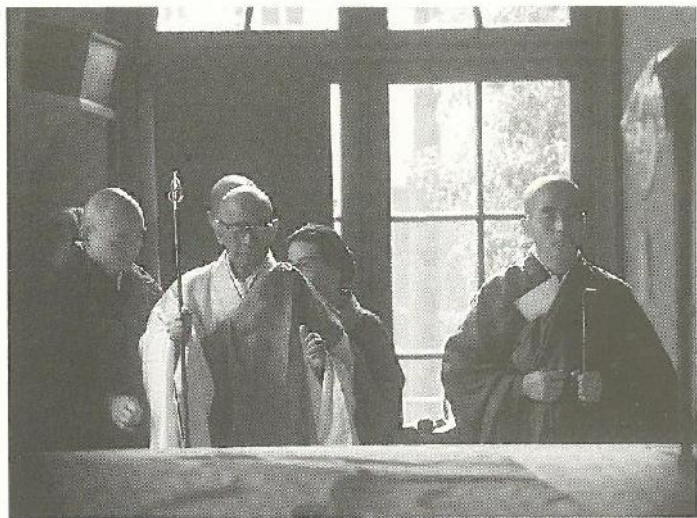
俊隆、タサハラにて。ダン・ウェルチ、ピーター・シュナイダーとともに（1968年頃） Photograph by Tim Buckley



タサハラでの最初の接心にて（1967年夏） Photograph by Minoru Aoki



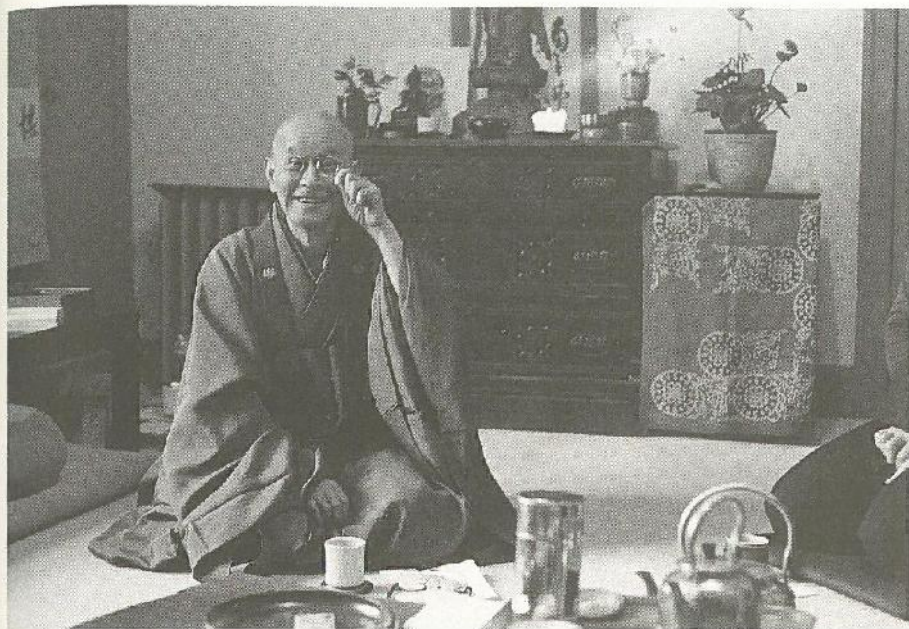
俊隆とみつ夫人（1967年6月21日） Photograph by Meg Gawler



俊隆の遷化13日前に行われた、リチャード・ベーカーの晋山式。左から右へ：
鈴木包一、鈴木俊隆、みつ夫人、片桐大忍（1971年11月21日）



タサハラへの道すがらの尾根から見渡したサンタ・ルチアの間々（1967年）
Photograph by Robert Boni



眼鏡をかけた俊隆（1970年頃） Photograph by Katherine Thanas

写真提供：サンフランシスコ禅センター・アーカイブ
Photographs used by permission of
the San Francisco Zen Center photo archives.

ア
メ
リ
カ
編

Part Two

AMERICA
1959-1971

新たな出発 1959

CHAPTER 10 A New Leaf

私はアメリカに来たとき、
新たな出発をしようと思つた。

*When I came to America
I was determined to turn over a new leaf.*

一九五九年五月二三日、鈴木俊隆がアメリカに着いた日、二人ほどの年老いて地味な服装をした日系アメリカ人が、サンフランシスコの空港のゲートで待ち受けていた。彼らは、アメリカ国内でも数少ない寺の一つで、ベイエリアにある唯一の曹洞宗寺院である、桑港寺そうこうじの六〇軒ほどの檀家を代表していた。彼らとともに、パートタイムの僧侶として、この寺の仕事を代行していた加藤和光かとうわくこうという名の若者がいた。加藤はこの鈴木という人間はどういう種類の人間なのか、この年齢でなぜアメリカにやってくるのか訝しく思った。そこへ鈴木俊隆がやって来た。身体を前に曲げて礼

儀正しいお辞儀をし、丁重に熱意を込めて挨拶した。

彼は慎み深い、明らかに伝統的な僧侶であり、彼からは、西洋的な雰囲気は少しも感じられなかった。彼は威圧的ではなく、中肉で、子どもとそれほど背丈も変わらず、年配の日本人としても小柄であった。そして加藤の心は彼への期待で溢れていた。長らく待っていた鈴木が到着したことを一番喜んだのは加藤であった。加藤は二八歳で、鳥羽瀨保道が日本に帰国して以来一年半の間、桑港寺の責任者となっていた。加藤は一九五二年、二二歳のときに鳥羽瀨の補佐役としてアメリカにやって来た。彼はお寺の若者たちとよりよい意思の疎通を図ることができるようにと英語を勉強するためにサンフランシスコ州立大学に入り、そこで欧米の学界に魅了されて以来、勉強を決して中断することはなかった。活発で、頑固な鳥羽瀨が去ってから、可能な限り長い時間を桑港寺で過ごしたが、今で

は負担が重すぎると感じていた。彼は比較哲学の博士論文の完成のために多忙であった。寺では彼に充分な手当てを支払うことをしなかつたので、彼はときどき自分自身や家族の生計のために、つまらない仕事もしなければならなかつた。それにもかかわらず、桑港寺の勤めはおろそかにできなかつたので、長い間、日曜日のお勤め、葬式その他全ての行事の面倒を見てきた。彼は日系アメリカ人を尊敬してはいたが、彼にとつてその立場は過去の遺物でしかなく、精彩を欠いたものであつた。桑港寺にいることは、——興味のない義務に縛られ——日本にいるのとよく似ていた。彼は大学の刺激的な雰囲気の中で、詩人や芸術家の友達と過ごすことを好んだ。

加藤は鈴木を乗せ、空港からサンフランシスコに向けて車を北に走らせた。この国の宮は鈴木が見る全ての物に明らかに体现されていた——倉庫、新しい郊外の居住区、トラックが列をなす配送センター、かつて沼地であつた埋立地に忽然と出現したキャンドルステイック・パーク競技場の基礎。それから見事な、街の低く白い輪郭が視野に入ってきた。造船所と埠頭に縁どられた湾がちらりと見え、水上には帆船と貨物船が浮かんでいた。

ほとんどの車は大きく、種々の色をしたさまざまなメーカーの車がたくさん走つていた。自転車はほとんど見られなかつた。サンフランシスコは街路が広く、大きなヴィクトリア調の家が連なつていた。至るところに英語の広告や店の看板が並んでいた。

加藤が車を走らせていると、霧が海から町に広がり、太陽の光を覆い隠した。歩道には白人、東洋人、ヒスパニックや黒人たちが歩いてきた。間もなく彼らは、さらに多くの東洋人が歩道を歩き、店先に日本語の看板を掲げ、非常階段に盆栽が置いてある地域を通り過ぎていた。彼らは深いアーチ型の玄関口の前で止まつた。

鈴木は車から降り、奇妙な建物を見上げた——木造の、長らく風雨に曝された、三階建てのムーア風の塔が両側に並び、中央に飾りのついた柱のある、広いバルコニー付きの建物であつた。正面はロマネスク調の細かな装飾に溢れていた。それは古いユダヤ教会（シナゴーク）であり、建築を研究する学生たちにとつては、歴史的に意義ある建造物だと加藤は説明した。建物には三つのアーチ型の入口があり、中央の入口が一番大きかつた。塗装が古びて、意図したベネチアの大大理石の効果を鈍らせ失わせていた。盛時には感

動を与えるものであっただろうが、今はいささか見すばらしく映った。木の額には、「桑港寺、曹洞宗伝導所、一八八一番地 プッシュ通り」と書いてあった。

小さな天井の高いロビーを通り抜けて中に入り、マホガニーの手摺のついた階段を上っていった。そこからは、飾り気のない木製のベンチの他は何もない、暗い薄汚れた廊下を見下ろすことができた。

加藤には、この色褪せた漆喰の壁の古い建物は、鈴木がかつて見たことのあるどの寺にも似ていない、ということがわかっており、明らかにショックの表情を浮かべている鈴木に同情した。そこには畳も、障子も、日本式の木造家具もなく、庭の面影すらなかった。加藤と檀家の人たちは、鈴木の到着に備え寺を清掃したが、外観を誇るには程遠かった。彼らは階段を上り、二重扉を通り、大きな部屋に入った。部屋は、高い背もたれの信徒席に坐り、新任の僧侶に挨拶しようとして構えていた、七〇人ほどの中年と老齢の日系アメリカ人で埋め尽くされていた。

鈴木は加藤の後ろについて、円筒形の紙提灯の下の擦り切れた板張りの床を歩いていった。彼らは、坐蒲や儀式用の道具がばらばらと置かれていた広いステージに上った。鈴木はゆっくりと加藤の後ろに従い、両

側にピラミッド型に積み上げた果物と、花瓶に活けた花と三本の火の灯ったろうそくの置いてある、約六一センチの高さの観音像の前の広い祭壇に立った。それから加藤は、広いブロンズの鐘の前に跪き、両手を合わせ合掌礼拝の合図を待った。鈴木はしばらく間を置いた。部屋は静まり返った。彼は周りの花と同じように、慌てずにゆっくりと立ち上がり、両手を上げた。

深い、豊かな鐘の響きが天井の高い部屋に反響した。三拝した後に、彼と出席者全員とで心経を誦誦した。それから鈴木は振り向き、会衆に向かって掌を合わせ、再び礼拝した——彼の誠実さと温かさを示すとともに、顔の表情、衣の着こなし、両手の所作に彼の威信が現れていた。彼は無事アメリカに着き喜んでいること、彼らが挨拶に来てくれたことに対する感謝を述べた。これらの年老いた日本人たちはいまだに故国の文化に忠実であり、厳肅に答礼した。

鈴木は初めて飛行機に乗り、地球上で最も広い海を渡って来た。彼は新しい仕事に取り組むために、ひと組の義務を残して故国を去り、既知の世界から未知の世界へ、このカビ臭い古い建物と、期待を込め待ち受けていた信徒の下にやって来た。古い生活と新しい生活との中間世界、飛行と到着のユニークな瞑想は終

わった。生活は移り変わった、そして鈴木はいささかのためらいも抵抗もなく、彼の新たな任務を受け入れた。彼は祭壇に供えられた花瓶のように、教会の建物の真ん中にある礼拝堂に心地よく落ち着いた。

寺の長老たちと昼食をとり、日本人街を見回った後で、加藤は地元からの贈り物が入った二つの袋を持ち、鈴木に同伴して礼拝堂の隣の彼の事務所に行った。それから彼は鈴木を伴い狭い階段を上り、事務所の上の二つの清潔な、何の特徴もない部屋に入った。

一つは物置であり、別の部屋はシングルベッドと机が置かれた、小さなベッドルームであった。どちらの部屋も外側に窓はなかった。数十年間、そこには誰も住んでいなかったのである。事務所に戻り、加藤は机の上の上に小さな鉢植えの蘭が置いてあるのに気がついた。「これはどこからやって来たのでしょうか」と加藤が尋ねた。「私が税関をすり抜けて持ち込んだんです」と鈴木が答えた。それは彼がアメリカに来て最初をやったいたずらであった。

その後で、鈴木は新しいお寺の周りを歩き、電灯を付けたり消したりしながら、段ボールの箱、折り畳みの椅子や、机のぎっしり置かれた裏手の部屋を覗き込

み、何列ものベンチや壇が置かれ、裏手に大きなオルガンが据えつけられていた洞穴のような講堂と、両翼に取り付けられていたバルコニーを点検した。彼の居住する一角には水道の配管設備がなかったため、鈴木は事務所に隣接する便所で歯を磨き、習慣となっていた夜の風呂を、深く古い地下室の浴槽で浴びた後で、三つの階段を上って自分の部屋に行き、アメリカでの最初の眠りについた。

次の日の朝、加藤がコートを着てネクタイを締め、法衣を鞆に入れてやって来た。彼の妻が、新しい僧侶のためのおにぎりを絹の風呂敷に包み、幼い娘を連れていた。

彼らは、鈴木が階上の礼拝堂にいるのを見つけた。彼は花を活け換え、薄暗い木の厨子くしの中の位牌を手に取り、湿った布で表面を拭き清めていた。いずれの場合も、彼が何時間も掛けて清掃したように見えた。加藤は勤勉さというこの初期兆候を見て喜んだ。鈴木の前任者であった鳥羽瀬には、多くの長所があったが、寺を清潔に保つことはその中に含まれていなかった。

加藤は鈴木を妻の恵美に紹介した。三歳になる娘の和美は母親の後ろに隠れて新しい僧侶を覗いていた。

それから彼女は紙袋の中に手を伸ばし、林檎を取り出し、鈴木に手渡した。彼が喜んでそれを受け取ると、彼女は再び隠れてしまった。

お寺の人たちが到着し始めた。一〇時一五分前までには大勢の人たちが信徒席に坐っていた。男たちは廊下や事務所でタバコをふかしたり、喋ったり、テーブルの脇に立ったり、緑のビニールの長椅子に腰掛けたりしていた。鈴木は最初の日曜日のお勤めの用意をし、より正式な茶色の法衣に着替えていた。彼は自分の部屋から引き戸式の窓を通して下の仏間を見下ろし、すでに幾人かの人たちがそこにいるのを認めた。

ほどなく鈴木は、新しいお寺の人たちの前に立った。加藤がアメリカでは日曜日の勤行の終わりに、僧侶が説教をするのが慣例だと彼に説明した。彼は喉を清め、彫刻を施した短い笏しやくを持ち両手を合わせ、お辞儀をした。「おはようございます」と彼は穏やかではあるが、よく通る声で言った。「おはようございます」と彼らは答えた。それから彼はアメリカにおける最初の法話を日本語で始めた。

お釈迦様が、二五〇〇年前にインドで最初に布教を始めたときには、森の中に住んでいて、時折

集まってくる人々たちに向かつて説法を行いました。僧侶、尼僧、在家の男女の信者たちです。彼は非常に偉大で、また説教は素晴らしく、諸々の苦難から心を解き放つものであったので、非常に大勢の人たちが聞きにきました。彼が演壇に上がると、僧が木の切り株を槌で叩き弟子のアナンダが言うのでした。「これから仏陀のお話を聞くのであるから、注意深く聞いてもらいたい」。そして仏陀が説教を始めるのでした。説教が終わると僧が再び切り株を叩き、アナンダが言いました。「仏陀の慈悲深いお話は終わった」

加藤は彼の正面にある汚れない鐘台しゆたいの表面を見つめていた。お寺の人たちは無表情で坐っていた。ある者は時計を見た。子どもたちはベンチの上でお尻をもぞもぞさせた。祭壇の裏の台所からは、ときおり食事の用意をする音が聞こえてきた——ポットや蓋のガチャガチャいう音、女たちの話し声、椅子を動かす音、足音、など。鈴木は続けた。

ある日、人々がやって来て、仏陀も到着しました。そして僧が切り株を叩き、アナンダが言

いました。「これから仏陀のお話を聞くのであるから、注意深く聞いてもらいたい」。しかしその日、仏陀はただ坐つたままで、一言も言いませんでした。それから彼は立ち上がりました。

加藤は鈴木の話の注意して聞いていた。彼は激しい抑揚をつけて話す説教僧に共通した、芝居がかつたスタイルでは話さなかつた。鈴木は自分の知識を聴衆に印象付けようとはせず、難解な言葉も使わなかつた。彼は簡素で真つすぐに、ほとんど日常の言葉で話した。

アナンダが言いました。「すみません、お導師、今日はご講話はなさらないのですか」。「ああ、ただ今終わつたところだ」と仏陀は答えて壇から降り立ち去りました。

鈴木はしばらく無言で立っていた。それから彼は笏を持ち、両手を合わせて合掌し、お寺の人たちに感謝を表した。

加藤は微笑んだ。それはよい話であり、非常に短い話であつた。そして軽食と社交により多くの時間をと

ることができた。この新しい僧侶は何と平凡な人であろう、と加藤は思った。だが何と優雅な気品を備えていることだろう。鈴木はよい門出を迎えたのであつた。

* * *

あなたたちは

物事は偶然に起こるといふかもしれないが、私はそうは思わない。

You may say that things happen just by chance, but I don't feel that way.

桑港寺に着いてから数日後に、鈴木最初の西洋人の訪問客が現れた。ルー・マックニールは、二〇歳代前半のアイランド系アメリカ人で、オペラを学んでいた。旅行の間のわずかばかりの会話を除いては、鈴木は長い間英語を使ったことはなかつたが、彼は来客が言っていることを理解し、要点を捉えることができた。彼女の夫は禅の師匠について学ぶために日本に行きたいと望んでいた。彼女は鈴木にこの考えをどう思うか、と尋ねた。彼女は彼の事、そして彼らの結婚について心配していた。鈴木は朝五時四五分に坐禅をしているので、彼女の夫もまずサンフランシスコで坐禅

をしてみたらいいのではないか、と提案した。

ビル・マックニールが数日後にやって来た。一七三センチくらい背丈のハンサムな男性で、整えられたバター色のブロンズの髪が耳を覆っており、快活で元気のよい男であったが、見慣れない仏間の雰囲気がいささか戸惑っていた。自分が鈴木に会ったことは漏らさずに、ルーは、鈴木について若干の説明をした。

ビルは熱心に話に乗ってきた。彼は鈴木にこの寺は禅寺なのかどうか、彼は禅の師匠かと尋ねた。またしても禅という言葉が出てきた。彼は鈴木に、日本に行く計画があると話した。彼は禅と悟りについて何冊かの本を読み、本物に会いに行くことを望んでいた。しかし、彼の前にいるのは果たして本物だろうか。鈴木は前にルーに告げたこと――まずアメリカで禅の修行を経験したらよいのではないかと彼に話した。彼は祭壇から坐蒲を取り出し、通路に置いてどういう具合に坐るかをビルに示した。彼はビルの姿勢を正した、彼の背中の腰のくびれを内側に押し、肩を後ろに引つ張り顎を引かせた。彼はビルの膝を静かに押し下げ、左の掌を右の掌の上に乗せ、両手の親指は、間に紙一枚を持つ程度に軽く触れるようにして置く、という両手の置き方を教えた。両目を半眼に開いたままにし、息

を吸ったり吐いたりすることに注意を向けるように、と話した。次は、両足が容易に組めるように、緩いズボンを着いてくるようにと忠告した。

これはビルが期待していたこととは全く違っていた。禅の本には、僧侶の間で交わされる劇的な問答が多く記載されていた。しかしこの僧侶には、彼が再び会ってみよう、という気を起こさせる何かがあった。魅力の裏に、ビルは威信と謙遜を感じた。次の朝早く、そしてその後毎朝、ビル・マックニールはやって来て、鈴木とともに坐禅をした。

一九五九年には米ソの冷戦はかつてないほどの厳しさを増していた。アイゼンハワーの時代はケネディの時代が始まる前のレームダックの一年半であった。日本はまだ貧しく、アメリカは果てのない豊かさを享受しているかのように見えた。アメリカのキリスト教もユダヤ教も、一般的にはこの社会と物質主義を支持していた。わずかに一部の声が核兵器や、通俗的な文化の麻薬的効果の危険性と、流れ作業の生産による魂の喪失を指摘したにすぎなかったが、こうした声はサンフランシスコのベイエリアに集中していた。

鈴木は、加藤がいうところの「アラン・ワッツの引き起こした禅ブーム」の高まりのさなかに到着した。

彼の初期の生徒たちは、アジアの思想に対する関心が高かったベイエリアの、奔放なサブカルチャーの芸術家や、非改宗主義者やビートニクスの中からやつて来た。彼らは、アジア研究アメリカ学会（アカデミー）やビル・マックニールが学んでいたサンフランシスコ・アート・インスティテュートや、ノースビーチやパークレイのコーヒーハウスで鈴木の本を聞いた。

加藤は、以前のディレクターのアラン・ワッツから、教授会に加わるよう依頼された五〇年代半ばから、ずっとアカデミーに参加してきた。メンバーはインド、中国、カンボジア、タイ、日本そしてチベットから来た著名な教授たちを含んでおり、彼らはヒンドゥー教、仏教、道教、サンスクリットやその他の言語、アジアの芸術や歴史を直に教授していた。

鈴木大拙は日本とアメリカ東海岸の往復旅行の途中、アカデミーで講義をした。高い尊敬を集めていた、前衛派の墨の芸術家であり版画家の長谷川三郎は

アカデミーで書道と茶道を教え、非公式の在留日本人精神療法医（セラピスト）のような存在となっており、ワッツに対し、もう少しのんびりして、彼が「翡翠の泡」と呼んでいた抹茶を嗅ぐようにと勧めた。桑港寺の鈴木の前任者である鳥羽瀨は、アカデミーと桑港寺で書道を教え、生徒たちに親しまれていた。

五〇年代の初期に、詩人のゲイリー・スナイダーと全学生会が、ルース・フラー・佐々木が開いた、公案を使つての臨済禅の公演会に魅了されたのはアジア研究アメリカ学会（アカデミー）でのことであつた。アメリカ禅の女性リーダー格であつた彼女は、彼女の禅の師匠で、ニューヨーク市の第一禪堂の教師であつた佐々木指月と結婚した。彼の死後、彼女は京都に移り、自身の勉学の傍ら、禅を学びたいと希望する外国人の手助けをした。その後彼女は、スナイダーが日本に行き、臨済禅を学びながら、彼女の翻訳チームに協力するための奨学金を得る手助けをした。

三階建てのヴィクトリア風のイースト・ウエスト・ハウスはカリフォルニア通りの桑港寺の近くにあつ

* (Lame duck) 死に体状態を指す政治用語。選挙で当選した議院が登院し、新議院が開かれるまでの期間に、在任中の議会が新たな法案などを審議することは少ないことから用いられている。

た。詩人、芸術家およびアジア研究の学生たちによって計画された、共同体生活の初期段階の試みは、アラン・ワッツと管理者側との哲学的な対立、また彼らが彼の放蕩な生活態度を嫌い、アカデミーを去るようにより要求した後に、開始された。イースト・ウエスト・ハウスは大変人気があったので、一九五八年にはハイフン・ハウスが数ブロック先で発足した。東洋と西洋を繋ぐハイフン（—）、という意味で非公式に名付けられた、大きな灰色の建物であった。詩人のゲイリー・スナイダー、ジョン・カイガー、リユー・ウエルチ、ローレンス・ファアリングゲッティ、フィリップ・ワレンを含む、サンフランシスコのビート界で最も著名な人物の多くがこれらの建物に住んだり、訪れたりした。

ワレンは彼の最初の詩集を出版しようとしていた。彼は禅に熱中し、鈴木が不老帽をかぶって通りを歩いているのを見掛け、鈴木が存在に気づいた。彼はその後、鈴木が執り行った結婚式場で鈴木に会った。ワレンは、彼が爽やかな人物だとの印象を受けたが、当時彼は本物、臨済禅を学ぶために日本に行く途中であった。

誰もが日本に行く計画をしているか、ないしは希望

しているように思われた。ワッツは古い様式の日本の僧堂の流儀を「時代遅れの禅」(“Square Zen”)として批判していた。彼はまた「ビート禅」(“Beat Zen”)をき下ろし、彼が仇名を付けた「禅禅」(“Zen Zen”)なるものを主張した。ワレンは、ビート禅は幻覚であると言ったが、日本の禅が果たして「時代遅れ」であるかどうかを検証せずに、禅禅なるものが存在し得るものかどうか疑問に思っていた。日本に発つ直前に、彼は偶然マックニールと彼の妻と二人の子どもたちに出会った。マックニールは近い将来ワレンに日本で会いましょう、しかし当面は鈴木について学ぶことが気に入っている、鈴木が日本に行く用意ができたと考ええるまでは、鈴木について勉強を続けるつもりであると語った。

間違ひなく桑港寺の新しい僧侶についての噂は広まっていた。マックニールやジョン・カイガーの有名なヒッピーの幾人かは朝の坐禅に参加していた。しかし彼らの大多数にとつて、それは恐ろしく朝の早い時間であるように思われた。

鈴木はこの禅に対する関心に非常に驚いた。日本ではこのような経験をしたことはなかった。彼は活気ある、最先端の知的な環境を楽しんだが、その世界に敢

えて深く立ち入ることはしなかった。彼はただ自分の寺の仕事に気を配った。禪について尋ねられると、彼はいつもこう答えた。「私は朝五時四五分に坐禪をしております。どうぞいらっしやつてください」。それは彼の名刺のようなものであった。特に引きつけるものがあるように見えなかった。しかし坐禪に参加し、彼を知るようになった少数の人たちにとっては、鈴木自身が魅力であった。

* * *

暗闇の中で何かを探そうとすることは、何物かを得ようとする観念に基づいてする、通常の活動とは異なるものである。

*Seeking for something in the dark
is not like usual activities
which is based on an idea of gaining something.*

加藤は、アカデミーの彼の仏教クラスに鈴木を招待した。それはサンフランシスコの流行りのパシフィック・ハイツにある、立派な古いマンションが不規則に広がっている地域にあった。一二人の学生が円形の檻のテーブルに向かって坐っていた。その中には、四〇代の女性、三人がいた。パッティ・ワールン、デラ・

ゲルツとジーン・ロスであった。加藤がクラスの人たちを「鈴木師」に紹介した。鈴木は控えめであり、一方の生徒たちは、彼が禪の師匠であるから間違ひなく悟りを開いていると思つたので——彼らが皆よく読んでいたアラン・ワッツや鈴木大拙の本に書いてあることを——彼に對しはにかんでいた。禪の師匠は、人の生涯を永遠に変えてしまう洞察の閃きひらめきを知り、悟りを開いた者である、と言われていた。その夜、悟りらしいものは見られなかったが、生徒たちと鈴木の間に絶えず微笑が交わされ、彼は静かに愉しげに聞いていた。授業の後半に入り、加藤は鈴木に何か言いたいことがあるか、と尋ねた。「坐禪をしましょう」と彼が答えた。

アメリカで日本人の僧侶たちによって教えられた坐禪は椅子の上で行われたが、鈴木は床に下り壁に對面するように勧めた。そこには坐蒲がなかったから、ぎこちないものであった。鈴木は英語は多少不明瞭なところもあつたが、やがて彼は全員を床に坐らせ、二〇分の間そのまま坐禪を続けた。

別れる前に鈴木は、四と九の付く日（この日は伝統的に、僧堂においては簡略化したスケジュールと個人的な雑用の日である）を除いて、毎朝四〇分間坐禪をしていると彼

らに言った。「もしよろしかったら来て一緒に坐ってください」

ベッティ・ワーレンとデラ・ゲルツはともに、カリフォルニア出身で、三〇年代に大学に行くためにベイエリアにやって来て教師になった。著名な言語学者 S. I. 早川について大学の意味論の講義を受けた後、デラは新しい光に照らして物事を見るようになり、比較宗教学の講義を受け、五〇年代の初めにアカデミーで勉強を始めた。KPEAラジオでアラン・ワッツの講演を聞いた後、ベッティは、アカデミーで禅仏教の講座を受けることに決めた。ベッティ、デラとジーン・ロスは加藤のクラスで出会い、長年彼女たちの精神的な道は同じ方向に進んだ。

この三人の婦人は桑港寺で鈴木について仏教の勉強を続けることに決めた。ジーンはヨーロッパへの旅行を終えてから、二人に合流することにした。三人はともに教師としての鈴木に魅力を感じていた。デラは彼と会った途端に、彼が教えようとすることに関係なく彼と一緒にいたいと思った、と言っている。ベッティも同意した。「彼の態度や眼つきには、彼が何を言おうとも信じられる、と感じさせる何かがあった。彼は

希有な人でした」

ベッティはサウサリートからの道すがら、デラを拾い、二人は桑港寺で他の数人と合流した。坐禅が終わってから、彼らは仏間の祭壇のすぐ裏側にある台所の長い木のテーブルで、鈴木のお茶の招待を受けた。ビルとルー・マックニールも同席した。ルーもまた鈴木と一緒に坐禅を始めた。彼女が最初に来た日に、彼女の夫は、彼女と鈴木がすでに知り合っていたということを知り驚いた。「あなたにトリックを使っただよ」と鈴木は彼に言った。ボブ・ヘンスという名の建築家が毎朝ビルと一緒に坐禅をしていた。ヘンスは愛想のよい、小柄の若禿お若禿の男で、非常に神経過敏であった。ビルと同様、元々彼は、日本の僧堂で禅の勉強をすることについて質問するために桑港寺にやって来て、その準備のために鈴木と一緒に坐禅をしていたのである。ビル・マックニールと同じく、彼はこの男の人柄と、質素な生活様式に惚れ込み、彼とともにする坐禅に魅了された。

来る日も来る日も、これらの少数の者たちは早朝、薄暗い中にやって来た。そして間もなく何人かの常連が坐禅に加わった。往來の車や人々の騒音と柔らかに光るヘッドライトが、規則正しく明滅する信号機の光

に合わせ波状に行き来し、仏間の明滅するろうそくの光とたなびく香煙と溶け合っていた。湾に太陽の光が差す頃、部屋はゆっくりと明るさを増した。ときどき坐禅の前後に、鈴木は坐禅についての短い助言の言葉述べた。ただ坐りなさい、自然に呼吸しなさい、呼吸を数えなさいとか、身体を肚(下腹部)の中心部に保ちなさい、というようなことを。

最初は床に坐る適当な場所がなかったので、彼らは重いベンチを一对当て繋ぎ合わせ、祭壇から壁に沿って縦に二組配列した。互いに向かい合ったベンチは船のような形になった、一つの船には二人か三人ずつ両足を組んで坐る広さがあつた。新米の瞑想者たちはアームレストを乗り越え、自分の家のソファや椅子から持ち出したクッションの上に、ドスンと坐つた。

彼らは壁に向かって坐り、鈴木が祭壇の演壇上にある彼の席から見つめていた。ほのかに照らされた部屋の中で、ベンチの船は暗い大洋に浮かんでいた。胴体や頭を突き出し、ときどき睡魔に襲われ上下に揺れ動く、薄暗い航海の奇妙な荷物を載せて。

坐禅は肉体的に苦しいものであつた。坐禅が終わる頃には、ほとんどの人が足に痛みを覚えた。しかし来る日も来る日も、静かに坐禅をする鈴木の様子が部屋を

自信で満たし、他の人たちに耐えるように、と励ました。

* * *

未来の世代のため、

私たちの子孫のために仕事をすることは大切である。

たとえ人々が

その価値を認識しないとしても、

重要な仕事をするに

誇りを持たねばならない。

*It is important to work for future generations,
for our descendants.
We must be proud to do something,
even though people do not usually know its value.*

大樹・磯部峰仙（ほうせん）は一九三三年にロサンゼルスからサンフランシスコにやつて来た。一九三四年一二月八日、仏陀成道の日に彼は桑港寺を創建した。見捨てられたユダヤ教の寺、シナゴークに彼がつけた名前は単純な意味であつた、「SOKO(桑港)」はサンフランシスコを表し、「JIC」は寺を意味する。鈴木俊隆が若い頃日本で見送つた鈴木大等（だいどう）は、桑港寺の三代目の住

職に就任するために一九四一年、これも一二月八日、
仏陀成道の日——パールハーバーの翌日、ロサンゼルス
の禅宗寺から移ってきた。彼は戦争中の日本人抑留
の年月を含め、戦後の一九四八年まで引き続きこの寺
の不在任職であった。彼とその他の人たちの大変な努
力の結果、この寺を檀家の手で保つことができた。戦
争中はキリスト教の一派が教会として使用したが、ヒ
ンドゥー教の寺院が所有権の証書を引き継ぎ管理し、
彼らの所有権確保の手助けをした。一九四八年、大等
はロサンゼルスに帰り禅宗寺の住職となり、一九五九
年七月九日にそこで死ぬまで北米の曹洞宗の総監を務
めた。そのとき鈴木は、日本の曹洞宗宗務庁で友人
の山田義道から、北米総監に就任し曹洞宗総監部をサ
ンフランシスコに移すよう依頼されたが、彼はこれを
断った。

鈴木は大等の葬儀を取り仕切るためにロサンゼルス
に飛んだ。前角博雄（まづみひろお）という名の若い曹洞宗の僧侶が彼
に加わった。前角は五〇年代の初めからロサンゼルス
の曹洞宗の寺、禅宗寺の住職補佐を務めており、近年
サンフランシスコ州立大学で勉学を続けていた。彼
は、数十年間西洋人に禅を教えてきた臨済禅の先駆者
的な僧侶、千崎如幻（ちさきにょく）について坐禅の修行をし、前角も

またアメリカ居士（こ）禅のグループを作りたと言ってい
た。

これは鈴木がアメリカで執り行った初めての葬儀で
あった。大等はアメリカの土になった。一九二九年、
鈴木が仲間的大学生僧侶のグループとともに横浜の埠
頭で大等を見送ったとき、船が岸を離れる際、鈴木は
彼への喝采に頬を濡らした。いかに彼はそのときアメ
リカで新しい人生を始めたい、と熱望したことである
う。三〇年後の今日、彼はそこにいた。

仏教には大きな樹と同じようにたくさん年輪
があります。私たちの祖先が、二五〇〇年以上に
渡って尽くしてきた努力を尊重するのは、私たち
の伝統です。この寺が創建されたとき、アメリカ
にたくさん僧侶はいませんでした。そして創建
者はこの建物を買うための寄付を集めるのに大変
な苦勞をしました。彼は、原価の一部しか寄付金
を集めることができなかったのです、日本人の檀家
は、毎年毎年ローンを払い続けました。戦争中、
収容所の中にあつてさえ、彼らはローン支払いの
ための資金を集めました。これは重要な努力です
が、仏教の維持と発展のために、私たちの祖先が

インド、中国、そして日本で尽くした努力や献身に比べれば物の数ではありません。私たちはこうした努力を、世代を通じて、永遠に続けていかなければなりません。

* * *

私はアメリカに来たときには、
いかなる着想も計画も
持っていなかった。

When I came to America,

I had no ideas, no particular plans.

徐々に、他の人たちの協力を得て、鈴木は日本の主要な伝統的な形式と修行とをサンフランシスコの禪堂に導入し始めた。

ジョージ・ハギワラは、禪の生徒たちと友好的な関係を保っていた、数少ない檀家の一人であった。彼が日曜日や平日の午後、寺で彼らに挨拶するときは、常に微笑みを浮かべ、歓迎の意を表していた。ハギワラの家族はゴールデンゲート・パークにある有名な日本庭園を設立し、そこを管理して第二次世界大戦までその家に住んでいた。彼は戦争中に資産を失ったが、抑留中に被った恐るべき損失から、いまだ回復途上に

あった大多数の日系アメリカ人に比べれば暮らし向きはよかった。

教会用ベンチの上で坐禅をすることがいかに厄介であるかということを知り、ハギワラは他の檀家と相談して寄付金を集めた。彼らは部屋の内周に敷くために、畳を日本に注文し、礼拝するためのござと丸い坐蒲を作るための黒い布を買った。六週間後に新しい材料が届いた。

毎週土曜日にはベッティとデラが朝食後も居残り、坐蒲を縫い、中にパンヤを詰めた。ビル・マックニールとその他の男たちが床を清掃し、日曜日の日本人会の人たちのお勤めのために、ベンチをバルコニーから戻した。こうして作務の時間を含む土曜日の朝の、時間を延長した、伝統的なスケジュールが始まった。

本堂は外観が大幅に変わり、そのとき以降禪堂と呼ばれるようになった。鈴木は新たに指定された禪堂の外観を守り、生徒たちが坐禅の後で坐蒲を膨らませて丸い形に戻しているかどうか、畳の中心に真っすぐに並べて置いているかどうか、注意深く目を注いだ。ベッティの坐蒲に対する最初の反応は、それが下の畳と同じように固い、と感じたことであった。「次に」と彼女は言った。「先生 (sensei) はすてきな岩を私た

ちに与えて、これが日本の永平寺で彼らが坐っている物だと言おうとしているのです」

鈴木がこのとき慎重に導入したもう一つの行事は読経であった。最初の月が過ぎてから、彼は坐禅の後で毎朝木魚を叩き、高音低音の椀型の鐘を鳴らしながら、般若心経を読経し始めた。その間他の人たちは立って聞いていた。そしてある朝、彼はローマ字でお経を印刷した紙片を出席していた七人に配布した。鈴木が鐘と太鼓を叩き、その間彼らは般若心経を三回読経した。彼らが一生懸命努力していることについて、彼は何も意見を述べなかつたが、それはオーケストラの練習をしているように響いた。間もなく彼らは自分の読経のスタイルを発展させていった。鈴木は祭壇に掲示板を出した。それにはこう書いてあった。「お経は耳を使って読みなさい」

禅堂の雰囲気の中で、特に注目を引いたのは警策であった。これは棒(まじ)と呼ばれるようになった。警策は日本の禅において、不可欠な物で、主として修行者が坐蒲に坐っている間に、眠気を催したときに、目を覚ますために使用された。彼の棒はおよそ六〇センチの長さで、約四センチの幅があり、端にある

取っ手は楕円形でその他の部分は平らであった。坐禅の間、鈴木は自分の正面に棒を縦にして持ち、禅堂を歩き回った。生徒たちが眠そうで、注意が散漫になっているように見えたときは、鈴木は彼らの後ろに立って彼らの右肩に棒の平らな端を置くのであった。彼らは両手を合わせて合掌し頭を左に傾ける。彼は肩甲骨と背骨の間の筋肉を二回叩き、それから左肩を同じ方法で繰り返すのである。それはよく響く音を発し、部屋にいる他の者たちの閉じた目を開かせ、背中を真つすぐにさせた。しかしそれは新参者を除いては、痛みや恐れよりも、むしろ爽快感を与えた。道元がこの棒を使ったという記録はないが、道元の師匠の如浄が中国で彼の修行僧が居眠りをする時、サンダルで彼らの肩を叩いたのである。

教会用のベンチはその週の間は部屋の外に出してあったので、鈴木は坐禅の間、部屋を歩き回った。彼は特に新しく来た者たちに対し、姿勢を直し、ときには「両目を半分開いたままにしてください」というような助言をささやいた。彼は他の細かい点についても強調した。例えば、両手を揃えてどのように正しい位置に保つか、すなわち手の印(ムド)の形を、足の上に置くのではなく、下腹部の位置に楕円形を作っ

て保持し、二本の親指は間にティッシュペーパーの厚みの間隔を保って臍の位置に置くというようなことであつた。彼は通常生徒たちが最初に来た日にはより一層注意を払つた。ハローと挨拶するかのように種々の方法で彼らに触れ——姿勢を真つすぐに直したり、神経質になつたり、固くなつてゐる者には、軽いマッサージをしたりした。しかしほとんどの場合彼は生徒たちに干渉しなかつた、そしてそこには静寂があつた。人々はやつて来て鈴木とともにろうそくの灯の中で黙々と坐禅をし、そしてお経を読み、ときには後に残つてお茶を飲み、それから自分たちの生活に戻つていつた。毎日毎日、毎週毎週こころした修行を継続した人たちは、彼ら自身の中にある種の変化を感じ始めた。鈴木も同じように感じた。彼は自分の人生がいかに過ぎ去つていくか、ということについての挫折感は今ではなかつた。

* * *

あなたたちは
私と言つたことは忘れるべきだが、
言葉の真の意味は

必ずわきまえていなければならぬ。

加藤がときどき翻訳を手伝つたが、鈴木はどうしても必要なとき以外は助けてもらおうとはしなかつた。彼の英語は進歩し始めていた。彼が毎日出席していたアダルト・スクールでのテストの成績があまりにもよかつたので、英語の教師はカンニングをしたと彼を叱つた。

鈴木は勇敢にも水曜日の夜、英語で講話を始めた。それは簡単な一五分から三〇分程度のものであつた。彼は講話の準備に長時間を費やしたが、多くの聴講者たち、特に初めて彼の話を聞きにきた者たちは、彼の英語を理解するのに苦労し頭をかいて立ち去つた。

ある日講話を終え、彼と加藤だけが事務所に残つたとき、鈴木はお袈裟を脱いで折畳み式の椅子に掛け、溜息をついて加藤に言った。「なんて煩わしいことでしょう。何を言おうかと考えなければならぬ」と「そう、日本語でも英語でも」。加藤は彼の机の上にあつた和英辞典を眺めながら言つた——カバーは擦り切れ、角がめくれ上がつていた。

しかし鈴木は努力は報われた。デラは直ちに彼を理解した。彼女にとって彼は、彼女がすでに信じていた

ことを明瞭に言い表していたのである。私たちは探し求めるものを持っている、そしてそれを見いだす方法はただ自分自身になることである、と。

ベッティは彼がいかに多くの矛盾したことを述べているかに気づいた。同じ講話の中で、ときには同じ文の中でさえ、彼は前に言ったことと反対のところへ戻ってくることがあつた。彼は彼女が通常行っている方法とは違った考え方をした。「ある週には、私たちはそれに渾身の努力を傾注しなければならぬと彼は言う」と彼女はデラに語った。「そして次の週には、彼はそれを試みるのは無駄である、諦めなさい、そうすれば答えはやつてくる。試みる必要はない、そしてあなたたちは最大限の努力をしなければならない！」

たとえあなたたちがある答えを期待しても、ときどき私の答えは違った方向へ向かうでしょう。たとえ私の答えがあなたたちの期待したものでないとしても、あなたたちはその方向に従うことができるようにしなければなりません。戸惑つてはいけません。もちろんときには師があなたたちの期待する答えを与えることもあるでしょう。師は常にあなたたちを混乱させようとします。このよ

うにして行ったり来たりして、私たちはお互いに進歩するのです。

加藤にとつて、鈴木を進歩は驚異的であつた。「驚いたことに、彼はあのような静かなゆつくりしたペースで」とある日彼はハギワラに語つた。「鈴木先生は短期間に生徒たちとの意思の疎通を行つたのです。大勢の人たちにとつて、英語を話すときの彼は魅惑的な人間なのです。彼の個性がまた彼らに意思を伝えるのです。彼を興奮させたり怒らせたりするのは何もないのです。彼は親切で穏やかな僧侶ですが、気骨を持っています。彼は禪堂では實際厳しい坐禅をしますが、坐禅が終わつた後は、温かみのある人間なのです。」

加藤は鈴木 of 英語版の、古典的な禪の物語を聞くのが好きであつた——古い中国の偉大な師匠のことや、道元の生涯についての話などである。鈴木が水曜日夜の講話で語つた物語の中に、道元がある夏の暑い日に、僧堂の壁の傍らで茸を干していた、中国の年老いた僧侶に会う物語があつた。「なぜあなたはこの炎天下にここにいますか。なぜ家に入って夕方まで休まないのですか」と道元が尋ねた。「これは今私がし

ていることだ」とその僧侶は答えた。「これは私の仕事でほかの誰の仕事でもない。どうして私が他の場所に行こうと考えましようか」

「ときは今である」鈴木はこの話の後で言った。私たちたちがしていることは今である。他のときは存在しない。これが現実である。私は今ここにいる。あなたたちは今ここにいる。この老僧の出来事は、道元に仏教徒の生活とは何か、現実とは何かということを教えた。それは別の時間でもなく、別の場所でもなく、別の人間でもないのである」

* * *

一本の糸は

それで美しい布を作るまでは

役に立たない。

同様に仏教の個々の宗派は、

全体の宗教生活の一部分として

初めて意義がある。

*A single piece of thread is not useful
until we make a beautiful cloth with it.
So each single school of Buddhism is meaningful
as part of the overall religious life.*

一九五九年秋のある朝の食事の後で、衣をまとった日本の臨済禅の一僧侶が不意に桑港寺に現れた。彼の名は中川宋淵（まがはら）と言った。彼は鈴木俊隆が西洋人と一緒に坐禅をしていると聞き、敬意を表しにやって来たのである。入口で応対した加藤は、彼を二階に案内した。中川は祭壇に香を供え、三人は般若心経を朗唱した。加藤と鈴木は中川の噂は伝え聞いており、臨済宗の僧侶が彼らを訪ねてきたことに感激した。加藤は、異宗派の僧侶たちが親しい交わりを避けていた、日本の派閥的な伝統を嫌っていたが、彼はそれには慣れていた。しかしながらこのときの二人はお互いに心を聞いていた。彼らは西洋人に自分たちの道を伝えたい、という点で共通していたのである。

中川もまた、アメリカでも日本でも西洋人と一緒に坐禅をしており、そうした中で、彼は曹洞宗の異端者原田祖岳（はらたけ）と、原田の後継者で日本人や西洋人の生徒たちに広範に公案を使用した安谷白雲（やすひやく）との関わりを持った。中川はロサンゼルスを数回訪れ、千崎如幻を訪問しともに坐禅をした。千崎は地味で反宗門的な臨済禅を数十年にわたって教えてきた——最初にサンフランシスコのブッシュ通りの彼のアパートで、次いでロサンゼルスで。鈴木は千崎を知っており、彼が在家の

人たちを教えることに専念した点を尊敬し、彼の「浮遊する禪堂」の考えを賞賛した。彼は寺を持つていなかったのである。

二人は素晴らしい対照を示していた——鈴木は背が低く、細く、つつましやかであり、中川は背が高く、太っていて、断定的で、活気に溢れていた。鈴木は静かに読経し、中川は勢いよく読経した。お勤めの後で加藤はろうそくを消し、祭壇の後始末をした。その瞬間、彼は二人の僧侶の間に保たれていた調和が終わるのではないかと懸念した。

中川は祭壇に置いてあつた経本を見たいと言つた。彼はそれを見て突然激昂し、床を足で踏み鳴らして叫んだ、「これは禪ではない！」。彼は本を二つに裂き床に投げ捨てた。加藤はショックで立ちすくんだ。

鈴木は静かにしゃがんで破れた紙片を拾ひ上げた。「ああ、これはある老婦人の法要の際、この地区には代表者のいない他の宗派から、この寺に寄贈された経本です」と彼は言つた。「私たちは全ての土地のものは全て受け入れてゐるのです。私たちは全てのお経を読んでいます。私たちは何でもいただいております」。しばらくの間、中川はなお怒つてゐるよう見えませんが、鈴木は彼の気持ちをほぐした。「お茶を飲みに参

りましょう」

仏教は特殊な教えではない。
私たち人間の道である。

*Buddhism is not any special teaching.
It's our human way.*

九月になり、ジーン・ロスがヨーロッパから帰つてきた。彼女のアカデミーでの級友ベッティとデラはすでに禪堂の中心的存在になつており、以後ジーンが週に三回、彼女のナースの仕事がないときにやつて来て、彼らに加わつた。彼女は水曜日の夜の坐禅と講話に出席するために、パークレイからバスに乗つてやつて来て、その夜を過ごし、木曜日の朝の坐禅に参加した。彼女は再び、土曜日の坐禅と朝食そして作務のためにやつて来て、日曜日には、日本人檀家のための講話に先だつて行われる講話に出席した。

ジーンは、メソジスト教会と密接な絆を持った、デトロイトの中流家庭の出身であつた。一五歳のときに彼女は、アジアについて興味を持つようになり、中国と日本に関する書物を手当たり次第に読み始めた。大学で彼女はキリスト教の研究を進め、仏教に関する書

物を読み始めた。彼女は性格的に鈴木とびつたり合つた。彼女は自主的で洞察力が高く、無意味なことに時間を浪費しなかつた。彼女は体重が重く、床の上で坐蒲に坐ることには苦勞したが、鈴木からの指示であれば苦しい修行の方法も受け入れた。ジーンの志操の堅固さと決意に鈴木は感激した。「坐ることが苦しいけれど、体得するものも深いものだ」と彼は常に話っていた。

デラは幼稚園の彼女のクラスが終わる午後にはいつも、何か役に立つことはないか、と見に立ち寄るのが習慣になつていた。彼女は、鈴木がアラン・ワッツを訪問したり、日系アメリカ人の家庭を訪問したり、彼らの亡くなった先祖の法要を執り行うことができるよう、彼のために運転した。飛行場に行き来客に挨拶したり、新聞社にインタビューに行ったりするために、彼は彼女に電話して運転を依頼した。ある日鈴木は、デラの家に行き彼女の夫に会つた。彼はかなり進行したパーキンソン病に悩まされていた。鈴木は深く同情し、いかにして彼女が夫の世話をし、幼稚園で教え、坐禅をし、そして彼にそれほどまでに尽くすことができるのかと不思議に思つた。

「地球上に實際菩薩がおりましようか」とビル・

マックニールが一度鈴木に尋ねたことがあつた。

「はい、います」と彼は答えた。「デラですよ」

ある日デラは彼を伴い、シアーズ百貨店に行つた。そこで彼は一ダースほどの鉢植えの植物と、九一センチほどの背丈の樹を一鉢買った。彼は樹を表玄関に置き、植物は、禅堂に行き来する人たちが誰しも通る階段の最上段のテーブルの上に置いた。

寺の雰囲気は以前より明るくなり、外観にも気配りがなされた。鈴木が到着した日から始めた清掃や、裝飾や配置替えて、寺はずっと魅力的な場所になつた。彼自身の部屋も、寺の総代会の寄付で備え付けられた窓のお陰で、以前より明るくなつた。土曜日の作務時間も大幅に変わった。少数の人たちでも、禅堂、ホール、階段通路、トイレ、階段そして正面の歩道の清掃、などのたくさんの仕事を一時間で終えることができた。

加藤は日曜日のお勤めの手助けをし、平日は一、二度寺を訪れた。つむじ曲がりの年老いた管理人が、電球を取り替えたり水漏れを塞いだりして、補修の世話をした。生徒たちやお寺の婦人たちがときどき食料を持ってきて、鈴木を夕食に彼らの家に招待した。デラ

はカセロールやクッキーを持ってきた。彼はしばしば日本人街で、昼飯や夕食を取ったが、主に自分の食事や、誰にせよ寺に立ち寄った客に出す食事は、彼自身で調理した。デラの好物は、彼の生姜豆腐であった。

生徒たちや檀家の人たちが暇なときには手伝ったが、鈴木は自分がしなければならぬ雑事全てに不満を募らせていた。彼は加藤に、妻のみつが来て彼と一緒に住むことができたなら、と希望を語った。彼は寺の

仕事をいつも婦人たちに手伝ってもらっていた。彼は手紙を書き、みつに来るよう要求したが、彼女は二つの幼稚園で必要とされており、彼が三年間のアメリカでの任務を終えて帰国するのを待つつもりだ、と言って拒絶してきた。みつはもう病気ではなかった。医者は最終的に甲状腺炎と診断した。そして簡単な手術で彼女の病状を取り除いたが、彼女はいまだに、病気のときに彼女を見捨てた夫に怒っていたのである。

礼拝 1960

CHAPTER 11 Bowling

自己から解放されたときに、
絶对的な自由が得られる。

*When there is freedom from self,
you have absolute freedom.*

ビル・クワンは妻ローラとともにサンフランシスコに住んでいた郵便配達夫であった。彼らは二人ともビート界で重要な役割を演じていた中国系アメリカ人二世であった。彼らには子どもが一人おり、ローラはもう一人の子どもを身ごもっていた。ビルとローラは鳥羽瀬の時代に桑港寺を訪れ、気品ある紳士によって通訳された講話を聞いたことがあった。彼らはそれをあまり理解できず、通訳を介してではなく、鳥羽瀬の言葉で聞くべきだったと思った。

ある日郵便物を配達していたとき、クワンは日系アメリカ人のための新聞で日本語と英語で印刷されてい

た日米タイムズの一ページ目に載っていた桑港寺の記事を見た。それは坐禅の生徒たちとペットの小鳥を飼っていた、新しい僧侶の鈴木師についての記事であった。一人の生徒でビル・マックニールという名の若い芸術家が、ある日寺の事務所で鈴木と会い、彼が絶对的な自由を信じるならば、なぜ小鳥を鳥かごに飼っているのか、と尋ねた。鈴木は真つすぐに鳥かごの所に行き、小さな扉を開けて小鳥を放した。中国では、解放の印として小鳥を放す伝統がある。皮肉にも、その目的で小鳥が寺の前で売られていた。しかしこれは自発的な行為であった。クワンはこの男に会って確かめてみる必要があると思った——彼は偉大な禅の師匠に違いない。

ビル・クワンが桑港寺の二階に上って、禅堂に入り、黒い坐蒲がまるで兵士が一行に並んだように、真つすぐにきちつと並べられているのを見たとき、

そこには彼に語り掛けるものも、鈴木 の価値を示す物も何もなかった。祭壇には、仏像の前にオレンジがうす高く積まれていた。部屋は香の匂いがして、鐘、太鼓、銅鑼、花、背の高い赤漆塗りの椅子、死んだ人の名前を金色の漢字で書いた黒漆塗りの位牌、等の備品でいっぱいになっていた。それはあまりにも、古い中国の寺院に似ていた。迷信、空虚な儀礼、財と先祖のためのお祈りに満ち溢れていた……。「これは確かに小鳥用だ」とクワンはあざ笑いながら思った。これはクワンにとっては自由のように思われなかった。自由とは彼の山羊髭であり、彼の黒いシャツであり、汚れたジーンズであり、そして黒いブーツであった——ブルジョアの身だしなみとグレーのフランネルのスーツからの自由であった。

事務所の扉が開いた。法衣を着た小柄な男が部屋に入ってきて、クワンには気を留めずに、祭壇に花を届け始めた。クワンは忍び笑いをした。「何と野暮ったい」と彼は思った。

ヴァンネスアベニューに向かってパインストリート を歩いていくと、クワンは鎌倉の大仏が瞑想して坐っている写真のついたポスターを無料で提供していた、バザールという名の店を通り過ぎた。彼はそのポス

ターを家に持ち帰り、壁に貼っておいた。そしてローラに、桑港寺に行つて失望した話をした。彼はアラン・ワッツの靈感を与えるようなラジオの講話を好んだが、この鈴木という男の持つてゐるものと言え、儀礼と瞑想のための部屋にすぎないと思つた。クワンはそんな古臭いものには興味はなかつた。彼は解放に興味を抱いており、これ (E) が、ワッツが言うようなものかどうか知りたいと思つた。あれ (E) は、そのようなものではなかつた。クワンは流行の最先端を行く人たちの説に耳を傾けていたが、そうした人たちは誰も瞑想について語つてはいなかつた。しかしクワンは、壁に貼つた仏陀を眺め続けた。それから彼は美術学校でビル・マックニールに会い、マックニールの自信に溢れた活力に魅せられた。マックニールは、鈴木と坐禅をすることがとても素晴らしい事でもあるかのように話した。クワンが家に帰ると、壁に貼つた仏陀は依然として彼を見つめていた。そこで彼はもう一度桑港寺を訪ね、坐禅を試みようと思つた。

彼は早朝薄暗い時分に寺に到着し、マックニールについて仏間に入った。クワンは他の人たちと同じように坐り、合図を待った。誰も彼に何をすべきか話してくれる者はいなかつた。お勤めの後で、マックニール

は彼に台所でお茶を飲むように勧め、そこで彼はクワンを鈴木に紹介した。鈴木はハローという前にしばらくじっとクワンの顔を見つめた。それはクワンにとつては長い時間のように感じられた。なんて奇妙な人間だろう、とクワンは思った。鈴木がお茶を入れていると、寺の猫が彼の足首にじゃれついていた。デラがクワンに先生のことをどんな風に聞いていたか、と尋ねた。彼は新聞の記事に言及し、小鳥はまだこの建物の中にいるのか、それとも飛び去ってしまったのか、と尋ねた。みんなが俯うつむいてしまった。彼は何か悪いことを言ったのだろうか。

「この猫が」と鈴木が静かに言った。

「猫が?」。クワンはそのとき、デラの膝の上で丸くなっていた猫を見つめながら尋ねた。

マックニールがクワンの方にかがんで言った。「猫が小鳥を食べてしまったんだよ」。

「先生はそれをとてもしんんだのです」とデラが同情を込めて言った。

鈴木は無言であった。彼らはそれぞれお茶を飲んだ。

クワンは規則正しく桑港寺に通い始めた。彼とロー

ラは何事にせよ一緒に行動する習慣になっていた。彼女が最初に桑港寺に来たとき、坐禅の間ずっと身動きせずに坐った後での痛みにめまいを覚えた。彼女の夫は、これはしきたりだと彼女に語った。そのとき、彼女は急に立ち上がったため失神して床に倒れた。朝食のときに彼女は生卵を割り、ワンピースの上に落としてしまった。朝食のときに生卵を熱い飯に混ぜる、とそれを固ゆで卵だと思つたのである。

ローラはよい禅の生徒でありよい母でありたいと努力していた。ほとんどの日、彼女はよちよち歩きの子どもと赤子の、二人の男児たちの世話で忙しかったが、日曜日には子どもたちを連れてやって来た。ときどき彼女は友人に手伝ってもらい、坐禅と水曜日の夜の講話を聴きに行くことができた。ある日講話の中で鈴木が、「あなたたちの修行は、家庭においてもできるのです」と話すのを彼女は聞いた。講話の後で、ローラはそのことについて鈴木と話し、自分が子どもたちの世話を十分にしていないことに罪悪感を感じていると語った。「あなたは夫が来るからというだけの理由で、ここに来る必要はありませんよ」と彼は言った。それ以後ローラは、自分が夫の影のような存在だ

と思うことを止め、家庭にいて仏の道に専心した。

ビル・クワンの生活は一八〇度転換した。その一例として、彼のアパートにうず高く積もっていた埃がなくなつた。これは主として、鈴木がある晩夕食に訪れたからである。鈴木が部屋に入つてきてから、彼の法衣が埃と猫の毛にまみれるまでには、さほど時間はかからなかつた。そこで、坐つて話をする代わりに、彼は掃除を始めた。ビルとローラも一緒に働いた。食事は待たなければならなかつた。

ある日鈴木は生徒たちに、清潔できちんとした服装で禅堂に来ることの重要性について語つた。クワンは洗濯したての衣類を着て、山羊髭を剃ることにした。しかし彼は新しい師に批判されたとは思つていなかつた。反対に、彼は鈴木がこれまでに彼を無条件に受け入れてくれた最初の人間であると思つていた。彼は從來就寝する習慣になつていた時間に、痛む足を動かさずに来る日も来る日も進んで坐禅をした。彼は進んで自分の生活を変えた。それは鈴木が——彼が自分を信じている以上に——全面的に彼を信頼していると感じただからである。鈴木を信頼するように求められるよりはむしろ、鈴木が彼に信頼を示していることがわかつた。このことは、たとえそれがどこに向かつていくの

か見えなくても、鈴木に従つていく勇氣をクワンに与えた。

* * *

最も重要なことは自分自身を受け入れ、自分の二本の足で立つことである。

The most important point is to accept yourself and stand on your two feet.

朝の坐禅は挨拶で始まつた。生徒たちは禅堂に入り、壁に向かつて坐蒲の上に坐つた——アーチ型の窓の下で、男性は右側に女性は左側に坐つた。鈴木は祭壇に進み、香を供え、坐具の上で礼拝した。それから彼は警策を持ち、頭を下げて礼拝しながら部屋を一巡した。彼が背後を通り過ぎるとき、生徒たちは両手を合せて合掌した。もし新しく来た人でこの作法を知らない者があれば、彼はかがんでささやいた。

「挨拶だ」

それは日本の修行寺で行われている伝統的な朝の挨拶であつた。

朝のスケジュールは、お勤めが終わり、それぞれが禅堂を去るとき、鈴木に立つたままする挨拶、立礼で終了する。それは参加した人たちが全員に、個人的な接

触の機会を与える毎朝のささやかな儀礼であった。彼は事務所に通ずるドアの内側に立ち、生徒たちは一列に並んで進み、彼の前で止まり礼拝する。彼は礼拝のたびに、それぞれの生徒たちに細心の注意を払った。

ある者は鈴木が彼らを真つすぐにじっと見つめているように感じた。戸口での礼拝は別れであり、挨拶であり、出会いであった。それは日々新たな、親密な出来事であった。

「鈴木先生はいつも私たちを励まし、私たちに感謝しています」とジーン・ロスは言った。一彼に向かって立って礼拝するとき、私は彼が全く公明正大で、いささかの見せかけもないことに気づきます」

檀家の一人であった花屋が、ときどき鈴木の事務所に花を置いていった。ある日彼は坐禅の最中にやって来て、たくさんの花を付けた素晴らしいシンピジュウムの活け花を置いていった。その日生徒たちが列を作って近づくと、鈴木は花に埋まって立っていた。

奇妙なことに、生徒たちは彼がそこにいてもいなくても鈴木に礼拝する習慣がついていた。年若い管理人がときどき長椅子に坐り、日本の新聞を読んだりタバコをふかしたりしていた。ときたま鈴木が不在の折、初めて禪堂に来て坐禅をし、他の人たちと同じよ

うに礼拝して立ち去った生徒たちの中には、ベンチに坐って彼らを見無視していた、だぶだぶのズボンを着きサスペンダーをしていた、その年寄りが、禪の師匠だと思つた者もいた。

* * *

私たちは知的な点よりも
身体的な点を重視する。

We put more emphasis on a physical point rather than on an intellectual one.

フィリップ・ウイリソンは芸術家であった。彼もまた頑健で、首が太く腿のがつしりとしたボディペアーのような男で、スタンフォード大学のフットボールチームのオフENSEのライトタックルとして恐れられていた。競技場では誰も彼の敵として戦いたいと思つた者はいなかった。そこでは彼はまさに悪魔に取りつかれたような男であった。彼はまた繊細な面も持つており、それは絵筆を持ったときに現れていた。フィリップは、フットボールと絵画に卓越した技能を持つていたが、彼を瞑想に興味を抱かせるようになった、平穏で表現し難い精神状態をもたらしたのは、他の芸術家のためのモデルとなったときの経験であった。サンフ

ランシスコ・アート・インスティテュートの静物描写の授業では、誰もが彼の大きな筋骨逞しい身体を描きたいと望んだ。彼の肉体は活方に溢れていたが、モデルになつたとき、彼は自分のエネルギーが荒々しい格闘技のときよりも、より一層静穏の中に収束されていくことに気づいた。彼はそうした精神状態に心地よさを感じた。それは固定的ではなく、流動的で、社会生活の複雑さとは全く無縁であった。

ある日曜日の朝早くチャイナタウンを歩いていき、フィリップは年老いて気狂いじみた目をした酔っぱらいに出会った。彼はその男をA A（アルコール・アディクト）の会合に連れて行き、そのときふと禅寺の講話を聴きに行くことを思いついた。フィリップは桑港寺に行ったことはなかったが、美術学校の生徒たちから噂を聞いたことがあった。彼と、その新しい相棒は坐禅の生徒たちのための講話には遅れたが、檀家のための鈴木^{（鈴木）}の講話には間に合った。日本人以外の見慣れない者は、通常講話が始まる前に退去するよう要求されたが、闘士然としたフィリップと、この悪臭を放つ浮浪者には誰も言葉を掛けなかった。

演壇の小柄な男が、侍のようにフィリップを見た。彼は素晴らしかった。彼は日本語で微笑みながら話し

始めた。フィリップは彼を見つめた途端に時間から解放された境地に入った（これはフィリップにとっては初めての経験ではなかった。彼はケン・ケーシーの初期の LSD の実験に参加していた）。その後で、彼は相棒の方を振り返つて言った。「理由はわからないが、私はこの男が確かに気に入った。彼に何も言おうとは思わないが。彼は話し掛けるには立派すぎる」。突然鈴木がハローと言いながら彼らの前に現れた。年老いた男は言った。「ああ、あなたの講話は素晴らしかった。全てが気に入りました」

フィリップは何も言わなかった。鈴木も何も言わなかった。その年老いた男は鈴木に金を要求した。鈴木は彼が冗談を言っているかのように笑って、言った。「駄目です。あなたはそれでアルコールを買いに行くでしょうから」

翌日フィリップは桑港寺に電話した。鈴木が出たが、フィリップは舌がもつれてうまく話せなくなつてしまった。最後に鈴木が言った。「どうぞ来てください」。フィリップはいろいろと質問の準備をして出掛けたが、鈴木に会った途端にまた言葉が出なくなつた。鈴木が言った。「坐禅ですか」。「はい」とフィリップは何とか返事をする事ができた。「そうです

か、どうぞ来てください」と鈴木は答えた。

次の二カ月の間フィリップは寺で坐禅をしたが、鈴木は彼に話もせず、何の指示も与えず、警策で叩くこともなく、姿勢も直さなかつた。朝のお勤めの後で戸口に立って歩み去る生徒たちに礼拝しながら、鈴木はフィリップが彼の前に立ったときには、側に目を向けただけであつた。

ある朝ベッティがフィリップに言った。「あら、あなたはまだここにいたんですね」。人々がしばらく坐禅をやつてみては、やがて去つていくのは日常のことであつた。しかし引き続きそこに留まっていた人たちはそれぞれ何か得るものがあつた。そこでいかに過ごすべきか、鈴木と行動を共にすることにいかなる可能性があるのか、あるいは鈴木の影響の下で自分たちだけで修行することによつてどのような可能性があるのか、を考えた。フィリップは坐禅を正しくやれるかどうかについて自信はなかつた。それにもかかわらず彼はそこに魅力を感じ、行くのを止めようという考えは起きなかつた。

フィリップは最終的にはそれがどんなものかわかるだろうと思ひながら、初めて水曜日夜の講話に出席した。しかしそれは非常に複雑で難解であつた。そ

れとも非常に単純だつたのだろうか。彼はそれを把握することができなかつた。鈴木は発音はわかりにくいものであつたし、理解の難しい新しい専門用語もとても多かつた。彼の比喩は謎めいてゐた。フィリップは物語の要点は掴んだが、それをどのように解釈したらいいのか、考えが及ばなかつた。鈴木は常に微笑を浮かべ自信に溢れてゐた。「わかりますか」と彼は尋ねた。そしてフィリップはノーと言えなかつた。彼は物語の美しさと混乱と完璧さに驚いた。

フィリップは繰り返し理解しようと努めた。彼は確かにこの男はばかにできないと思つた。競技場で対抗するレフトガードのように、鈴木は絶対的な率直さを要求した。鈴木は彼を試験に失敗した者のようには扱わなかつた。むしろその部屋になかつた者のように扱つたのであつた。こうした態度は何を意味しているのであろうか。立ち去れということであらうか。いや、扉は誰にも開かれてゐる。恐らくこれは人会の儀礼であらう。

彼はこの美しい、刀を持たない侍の心を推し量ることができなかつたので、その試みを諦めた。しかし彼は立ち去らなかつた。彼は鈴木は行動の全てを分析するよりは、むしろ観察し始めた。彼は思つた、恐ら

鈴木が警策を扱う方法を見たら彼の話が理解できるであろう、と。彼は鈴木が決してほかの人たちより急いで先に行くのでもなく遅れることもない歩き方、全身を使つての坐禅の仕方、両手で湯呑み茶碗を取り上げ、雛鳥のようにそれを扱う仕草を眺めた。彼は観察し真似をした。そしてある日フィリップが坐禅の後に事務所の戸口で礼拝すると、鈴木は顔をそむけず真つすぐに彼を見た。フィリップは新たな師とともに勉強する方法を発見した。

物事を心で考えるだけで学ぶ場合、それは非常に浅薄なものになりやすくなります。母鳥が雛鳥に飛ぶ方法を教えるときには、母鳥は雛鳥のように飛ぼうとします。彼女は非常によく飛ぶことができますが、雛鳥の真似をします。母鳥は雛鳥のようになって、雛鳥ができるようなことをするのです。そのようにして雛鳥は飛ぶ方法を学ぶのです。それもまた修行です。

* * *

私たちは善悪、損得の觀念を取り去り、初心者の眞の純真さをもつて

修行すべきです。

We should practice with a beginner's real innocence, devoid of ideas of good or bad, gain or loss.

「誰かが私に美味しい饅頭、私の好物の和菓子を食べました」。これがある日曜日の朝の檀家の人たちの鈴木の話の冒頭であった。五歳の加藤和美は講話の主題を聞いて首をピンと立てた。「それはとても美味しかった。私は甘い物が異常に好きですが、こう思いました、これもまた仏陀の味である、と。仏陀の教えはキャンディーのようです。そこで私はそれをゆつくりと十分に味わつて食べました。あなたたちは仏陀の教えは非常に嚴肅なものであると思うかもしれませんが。しかしそれはまたキャンディーでもあるのです」

加藤は、日本人コミュニテイの人たちに対する鈴木の話、控えめで温かみのある講話——非常にゆつくりと話し、彼のような僧侶と学者を兼ねる者にとつては多少単純ではあつたが——を好ましく思つた。坐禅のグループの生徒たちはインテリだったので、鈴木は彼らにはより高尚な講話をした。彼はそれぞれの役割に満足していたようであつた。

お寺の年を取つた檀家の中には、彼らの寺に、日本人でない人たちがますます大勢やってくるようになって

たのを不快に思っている者が大勢いた。特に若者たちは非常にぶざまでお喋りで、往々にして身だしなみが悪く汚く、またしばしば故意ではなくとも、無作法であった。そして彼らはいつも坐禅について話をしていて、それは遊び道具ではなく、僧堂の僧侶にとつては真剣な修行である。彼らは坐蒲の上で坐禅ができるのだろうか、そして日本人が約一五〇〇年に渡り育んできた仏教を理解できるだろうか。

加藤は彼らの憤りがよくわかった。後隆の中年の西洋の女生徒たちは檀家の人たち、特に若い日系アメリカ人女性たちと親密になっていたが、常に隔たりがあった。これらの日系アメリカ人は、戦争中、強制収容所に入れられた。彼らもまた新しい国で勤勉に働いてきたアメリカ人であったが、いまだに劣等者として見下されていた。彼らは農業に従事し、新しい生活を樹立し、土地を買い、子どもたちがより安易に生活できるようにと金を蓄えた。彼らは自分たちの皮膚の色故に、また出身国故に、ほとんど全てを失ったのだ。戦後彼らは一時間当たり一ドル半の賃金で、白人の家庭の床掃除をした。婦人たちの賃金はさらに安かった。檀家の多くはいまだに労働者であった。

一九五二年、人種差別の意識がまだ強かった頃、加藤はベイエリアにやって来た。彼が妻と結婚したとき、彼らは大学の近くのパークレイにアパートを借りることができなかった。扉が彼らの目の前でパタンと閉められた。「ジャップには貸さない！」と彼らは幾度となく聞かされた。彼らはオー克蘭ドの下町の、アル中患者や売春婦に取り囲まれた場所に住まなければならなかった。差別は、戦後一五年を経た一九六〇年現在では、当時ほど悪くはなかったが、深い憎悪の念が双方に残っていた。

鈴木と同じように、加藤は坐禅の生徒たちがお寺の休日の祭りや、仏陀の誕生日に日本人街を行進する催しに参加すれば、二つのグループはお互いによりよく知り合い、理解し合えるだろう、という希望を持っていた。加藤もハギワラも、こうした求道者たちは、戦争や固定観念を乗り越えることができることがわかってきた。鈴木は子どもたちが将来こうした問題を解決できるのではないかと考えた。マックニールの子どもたちは、日曜学校で日系アメリカ人の子どもたちと一緒に過ごしていた。

彼が到着して間もなく、鈴木は加藤恵美に、日曜学校で教えるよう依頼された。彼女は鈴木が子どもたち

と遊ぶ方法に注目した。彼は大きな愛情と尊敬をもつて子どもたちを扱い、子どもたち皆から非常に愛されていた。和美はいつも鈴木に何か贈り物を持っていくことを望んでいた。それは彼が、非常に温かい人柄だから、だと恵美は言っていた。ベイエリアに珍しく雪が降った二月のある日、和美は雪玉を作つてそれを箱に入れた。彼女は母親とともにバスに乗り、桑港寺に行きその箱を鈴木に渡した。彼は大喜びで箱を開けた。もちろん雪は融けていた。彼女が泣いて説明しようとしたとき、鈴木が言った。「おや、何てきれいな雪玉なんだ」。彼は彼女にデヨコレートを与え、全てがうまく収まった。

* * *

批判する代わりに、
いかにして役立てるかを
考え出すように。

*Instead of criticizing,
find out how to help.*

加藤の家で鈴木を夕食に招待すると、いつも彼はしばらくして、寺に帰った方がよいと言った。彼は新たに来るかもしれない生徒や、質問にやって来る者と会

う機会を失いたくなかったのだ。事務所と台所が、相変わらず鈴木が檀家の人たちや生徒たちと、社交的な会合をする主な場所であった。しかし彼は、日本で過ごした最後の数年間に経験してきたような、社交的な付き合いに関わることのないように注意していた。その当時の社交は、満足感が得られなかった寺の責任から離れる気晴らしになっていた。彼はもう碁は打たなかった。彼はある日ビルの別の側にあつた囲碁クラブに歩いていき、ドアの取っ手に手を伸ばし、しばらく立ち止まり、そのまま引き返して寺に帰った。

桑港寺に立ち寄ると、加藤は冷蔵庫の中にいつも食料品があり、しばしば鈴木の好物のマスクメロンや甘露メロンがある事を知っていた。彼や他の日系アメリカ人や、生徒たちのある者はしばしば無一文であつたが、鈴木は飲食のたかりは気にしていなかつたようである。加藤は人々を無差別に——ふらつとやって来ては際限のない質問を浴びせかける精神障害の放浪者でさえも——受け入れる鈴木のやり方に感心した。

ある日母親が死んだばかりの若い女性が立ち寄つた。すると鈴木は彼女に昼食を作る手伝いを依頼した。彼は午前中ずつと彼女と台所で過ごし、何も言わず、ただ自然に母親の役割を務め、彼女と悲しみを共

にしたのであった。

加藤はいつも、鈴木を当惑させたものは何もなかった、と言っていたが、例外があった。鳥羽瀬の甥がしばしば桑港寺にやって来ては台所を荒らし、タバコを吸い、日本語で喋りまくった。海外に住んでいる者によく見られるように、彼は新しくやって来た国について、不平をこぼしていた。鈴木は了見の狭い、つまり不平を聞くのを好まなかった。ある日鈴木、加藤そして彼らの仲のよい友人たちや檀家の長老ジョージ・ハギワラと一緒に、若い鳥羽瀬が事務所の長椅子に坐り、アメリカについて彼を苛立たせたあらゆることを並べ立てた。突然鈴木が椅子から素早く立ち上がり、鳥羽瀬の顔を矢継ぎ早に五回平手打ちした。加藤とハギワラは肝を潰した。「そら——これがお前のもらい分だ！」と彼は言った。「まだ不平を言おうものなら、さらにお見舞いするぞ！」鳥羽瀬は自尊心を傷つけられた。彼は立ち去って来なくなった。二週間後、鈴木が彼に電話した。「やあ、鳥羽瀬さん、なぜ来ないんだね。ここには食べ物があふれている。あなたが出来なくて寂しいよ」。そこで彼はまたやってくるようになった。

* * *

形式は変わるが、ただ単に人々が心地よさを感じるような、新しい形式に変わるのではない。

道元は言った。

最善の教えは、

人々が否応なしに

従わざるを得ないと感ずるものである、と。

The forms change,

*but not just to new forms
that people are comfortable with.*

*Dogen said that the best teaching makes people
feel like something is being forced on them.*

鈴木俊隆の禅堂は体裁を整えられていった。階上の信徒席のベンチは、毎週禅堂とバルコニーの間を行ったり来たり移動させられたので、破損した。ベットが二〇脚の折り畳み式の椅子を買う金を拠出し、檀家の予算でさらに何脚かを買う費用を補った。従ってベンチは、永久に講堂に運び下ろされたままになった。鈴木は椅子に坐るより坐蒲に坐る方が、欧米の生徒たちには困難だろう、と予想していたが、ジーンのように、難儀していた者でさえも、たいいてい椅子に坐り

たいという要求はしなかった。少数の人たちは、特別な問題を抱えており、老齢のために椅子を使用した。鈴木は、椅子を使用した者が劣っていると感じないよう配慮した。床に坐ることと椅子に坐ることの相違について尋ねられて、鈴木は答えた。「唯一の違いは脚である」

ある日お勤めの後で、鈴木は別の坐禅の時間を新しく設けると発表した——それは午後五時半であった。従つて生徒たちは仕事後に、坐禅に來ることができるようである。朝の坐禅と同様四〇分間行われ、その後、一回に三度の三拜からなる二回の礼拝の間に般若心經を唱える簡単なお勤めが行われた。ある者は朝、ある者は夕方やつて來た。中には鈴木とともに朝晩双方の坐禅に参加する者もあった。間もなく桑港寺での修行は、一日中続く一定のリズムに移行していった。

一九六〇年二月、鈴木と生徒たちは三日間の摂心を行った。彼がアメリカで最初に行った、長期間継続的に行われる坐禅のリトリートであった。彼の日本の坐禅グループは、これほど長期に渡る坐禅をした経験はなかった。生徒たちは早朝から夕方六時まで、土曜日から月曜日まで通して坐る準備をしてやつて來た。

これはこの小さなグループにとつても、それぞれの参加者個人にとつても記念すべき第一歩であった。彼らは通常より一時間早く坐禅を始めた。連続した二回の坐禅の時間があり、その間に経行と呼ばれる歩行の時間があった。鈴木は両手を鳩尾の位置に保ちながら、ゆつくりと歩いて実演して見せた。食事と午後の講話のほかは、一日中連続した坐禅と経行の繰り返しであった。

六ヵ月後、鈴木は初めて、一週間連続の摂心を行った。八人がほとんどの期間参加した。平日の午前中は、できるだけ長く寺に留まり、それから仕事に出掛けた。仕事が終わってから戻つて來て、夜九時まで坐つた。日曜日には、彼らは終日坐禅をした。

鈴木の感情は張りつめていた。生徒たちが身動きすると鈴木が怒鳴つた。ジーンは我慢しきれなくなつた。鈴木は彼女に坐り心地が悪いようならもう少し坐蒲を多く使うようにと勧めたが、何時間も坐つた結果、状況は一向に改善されなかつた。とうとう彼女は立ち上がつて言った。「こんな物はちつとも役に立たないわ!」。彼女は怒りを爆発させてまた腰を下ろして坐つた。しばらくして鈴木は立ち上がり彼女に別の坐蒲を持つていった。

撰心の期間中、全ての生徒たちは独参と呼ばれる鈴木との個人的な面接を行った。彼は階段の一番下にある檀家の事務所で独参を行った。ベッティは独参の順番が回ってきたとき、順番を知らせる鈴木の振鈴が鳴るのを聞くまでホールで坐禅をしていた。彼女は坐蒲を膨らませ、礼拝してゆつくりと事務所に入っていた。部屋には鈴木が坐蒲の上に乗っており、彼の正面の約一メートル先に誰も坐っていない坐蒲が置いてあった。彼の背後には独参のために設けられた小さな祭壇があり、そこにはその部屋のほとんど唯一の照明であつたらうそくが灯されていた。鈴木に教えられた手順に従つて、ベッティは部屋に入るとすぐ礼拝し、続いて鈴木の前で三拝をした。それから彼女は彼に面して坐蒲に坐つた。彼らは坐つたまま、しばらく一緒に息をした。それは極めて親密なものであつた。最初に彼女は、鈴木の間々とした態度に畏怖を感じて落ち着かなかつたが、次第に落ち着いてくつろいだ。彼女は坐禅をしている間に起こる問題について質問し、彼は静かに答えた。鈴木は彼女とのやり取りに満足すると、ベルを鳴らし、ベッティは礼拝して立ち去つた。そして次の人が中に入った。

参加した生徒たちは独参で何が起こつたかを他人に

話さないように言われた。これは個人的な時間であつた。ベッティは鈴木との対話が、儀礼的でないものほど記憶に残つたと思つた。ある日彼女は帰宅しようとして、玄関でコートを着ながら彼に言つた。「呼吸を調えようとすればするほど、うまくいかないのです。早すぎたり遅すぎたりします。正しい呼吸をしようとすることに、心を奪われてしまいます」

「まあ何も考えず、ただ坐りなさい」と彼は無造作に答え、彼女の懸念を払拭させた。

後年、撰心の期間はさらに長くなり、スケジュールも過酷になつたが、ある人たちにとっては彼らの生活の最も重要な行事となつた。この長時間にわたる静寂の中に、彼らのざわめく心が次第に平穩になり、彼らの主体性の意識が変化し、拡張されていくことに気がついた。

この最初の撰心で、ベルは料理を担当した(彼は引き続き上曜日の朝と撰心の期間中この役を務めた)。ベッティがベルを手伝つて朝食の準備をしたが、彼が予定していた食事は、前日の残りの固くなつたご飯に熱湯をかけるだけであることがわかり驚いた。撰心の参加者は台所に来て、長い木製のテーブルの前の椅子に坐つ

た。ベツティは固くなったご飯に熱湯を注ぎながら、感謝の気持ちに胸が詰まり、涙が頬をつたって流れ落ちた。彼女は森羅万象が、彼女の全ての欲求を満たしてくれると信じていることができる、と実感した。

摂心の最終日に、鈴木は講話の中で生徒たちに、修行を積めば積むほど自分を洗練させることができるのだ、と語った。毎日行っている坐禅の生活の中で、ときおり、終日ないし一週間続けて坐禅をし、自分をより厳しい状況に置くことは有意義であった。それは彼らの坐禅を「より美しく」するのに役立った。「しかし急いではいけない」と鈴木は言った。「坐禅をマスターするには長い時間がかかるのだ」

こうした摂心の期間中、鈴木は特に彼の最初のアメリカ人の生徒であったビル・マックニールとボブ・ヘンスには厳しかった。彼らはいまだに本物の坐禅を経験するために日本に行くことを望んでいた。

* * *

礼拝は、

私たちの傲慢と自我の性格を

矯正するために、

非常に重要な修行です。

それは仏陀に対する

完全な帰依を示すためのものではなく、

私たち自身の自己本位の観念を

取り除くのに役立つものです。

Bowing is very important practice for diminishing our arrogance and egoism.

It is not to demonstrate complete surrender to Buddha, but to help get rid of our own selfishness.

鈴木の下にやって来た者たちは敬虔になれる宗教を求めていたわけではなかった。彼らは鈴木に傾倒していたかもしれないが、いまだに彼が三〇年間日本で僧侶として過ごした間に受けたよりも多くの質問を、日々彼に投げ掛けていた。彼らは熱烈に仏教を、禅を、自分自身を、人生を、悟りを、真理を理解することを望んでいた。彼らは全てのものの意味を知りたいと望んでいた。鈴木はすぐには物事を定義しなかった。「もし私が回答を与えれば、あなたたちは理解したと考えるでしょう」と彼は一度ならず語った。なぜ四と九の日は除かれるのか。「それは謎である」と鈴木は答えた。お経の意味は何か。「愛」。なぜ坐禅をするとき、私たちは特別な位置に手を置くのか。「それは秘密である」。なぜあなたは頭を剃るのか。「これは

究極のヘアースタイルだ」。ときには理由や意味を説明したが、それらは往々にしてその都度変わる傾向があった。彼は生徒たちが自分たちで自分自身のペースで物事を学ぶことを望んでいた。

それから礼拝、すなわち三拝の問題があった。大多数の生徒たちはなぜかと理由を質問せずに、床に礼拝する覚悟はできていなかった。ある者は、それは托鉢と同様あまりにも日本的で、アメリカの禅にはふさわしくない和不平を言った。鈴木は日本人街で托鉢をやってみたが断念した。

鈴木は、彼の師匠が、礼拝は禅の中心的な修行である、ということなどをどのように教えたかを話した。礼拝は仏教徒のもので日本人のものではない。日本の世俗の人たちのお辞儀は、上体を上げて頭を下げるのである。仏教徒の礼拝は、両手を合わせてする合掌か、なしいしは合掌で始まり床に膝、頭、肘および両手をついてする三拝のいずれかである。朝のお勤めは三回の三拝で始まり、三拝で終わった。鈴木は、額を下げたとき、伸ばした掌は三回上げて仏陀の脚を持ち上げるのだと説明した。「礼拝は坐禅に次いで重要です」と彼はある日、朝のお勤めの前に言った。「これは仏陀が

仏陀に礼拝することです。もしあなたが仏陀に礼拝できないとすれば、あなたたちは仏陀ではあり得ません。それは尊大というものです。従って今後私たちは、三回礼拝する代わりに九回礼拝することで朝のお勤めを始めましょう。日本では三回で十分ですが、ここアメリカでは、私たちは非常に強情なので、九回礼拝する方がよいでしょう」過去に祖温が鈴木に課したように。

ある者は不満の声を上げた。

「不平を言うてはいけません」と彼は言った。「あなたたちはとにかく、日本人以上に修行することが必要です。あなたたちはそれがなぜ非常に重要であるか理解し難いかもしれませんが、礼拝することでそれが理解できるようになるでしょう。礼拝は非常によい修行であって、坐禅の後に礼拝すると、非常に心地よく感ずるものです」

* * *

人生はまさに大海に向かって出航し、
やがて沈んでいく船に
乗り込むようなものである。

Life is like stepping onto a boat

一九六〇年暮れ、ビル・マックニールとボブ・ヘンスが日本に渡航した。ビル・クワンはマックニールと非常に親密になっていたので、友達が去っていくのを残念に思った。彼がいない桑港寺の禅堂を考えると、

彼は悲しくなった。彼は、最初の生徒たちを見送っている鈴木に傍らに立っていた。それは喜ばしい場面と違ひなかつたが、クワンは何かしっくりこないものを感じた。鈴木は恐ろしく真剣な面持ちであつた。いつもは自信に溢れていたマックニールであつたが、楽しそうには見えなかつた。後に居残る彼の妻と子どもたちにとっては、彼が去っていくのを眺めることは悲しかった。ヘンスは特に神経質になつていた。クワンにはなぜかわからなかつたが、彼らは絞首台に向かう死刑囚のように見えた。恐らく彼らはこれから先、自分たちが置かれる境遇を予感していたのであろう。

それは禅堂にとつては損失であつた。マックニールはグループ切つての活動家であり、カリスマ的な芸術家であり、哲学者であつた。彼は坐禅の噂をノースビーチからイーストウエストハウスにまで広げた。彼は、誰一人彼らは何をし、何のためにしているのかを

知らないときに、大勢の人たちを禅堂に寄せ集めた。彼は一年半の間、鈴木にグループをまとめ上げる手助けをした。そして今や彼は去つていった。彼とヘンスは坐禅の本場、そして未知の世界へと旅立つていった。お別れのパーティーは開かれなかつた。それはほとんど秘密であつた。

鈴木は彼らの出発を他の人たちに知つてほしくなかつた。それは、彼らが日本で禅の修行をすることに ついて、非現実的な考えを抱いていたからである。多くの生徒たちが日本に行くことを希望していたが、鈴木は彼らの用意が整うまでは、彼らの渡航には気が進まなかつた。彼は日本と生徒を交換することを望んでいたが、それは機が熟してからのことであつた。彼はいつもこんなことを言っていた。「最初にここで勉強した方がよいでしょう」。マックニールとヘンスは日本に行く途中で、桑港寺にやつて来たのであり、彼らの渡航の熱意が引き続き持続していたので、鈴木は彼らがまず彼の寺に行き、そこから彼らを訓練することのできる師のいる林叟院の本寺、石雲院に行くように手配をした。鈴木はそれがどのように進展するか予想できなかつたし、生徒たちにも自分たちがどのような環境に置かれるのか想像できないことはわかつてい

だが、彼らの希望に従い、一縷の望みを抱いて彼らを送り出した。

鈴木は台所で、一人で湯呑み茶碗を洗っていた。階下の講堂のステージでは、若い日系アメリカ人の音楽家たちが、毎週水曜日に行っている、恒例の練習を夜遅くまで続けていた。外は雨が降っていた。そして雨垂れの音がドラム、ギターとホーンに伴奏を添えていた。翌日は坐禅、お勤め、清掃、洗濯、買い物、法要があり、午後には訪問客がある。音楽はホールの壁と床に反響していた。間もなく彼は階下に行き、鍵を掛け、風呂に入り、それから大きな人気のないビルの中の、自分の小さな部屋に一人寝るために、階段を上っていくのであった。

日本に行った彼の生徒たちにとって事態はあまり順調に進展していなかった。ルー・マックニールが夫と連絡をとる一方、鈴木は当時永平寺で僧侶となっていた、息子の包一から手紙を受け取った。包一は、彼らが到着したとき、マックニールとヘンスを出迎え、彼らが石雲院に行く準備を手伝い、林叟院で彼らと一緒に過ごした。石雲院で彼らは頭を剃り、法衣と日本語

の戒律を受け取った。住職は鈴木の代行として彼らを僧侶として授戒し、こうして彼らは鈴木の見解に従えば、彼の最初の西洋人の弟子になった。彼らは石雲院には約一ヵ月しかいなかった。そして最終的には寺から追放された。

アメリカ人はすぐに誓いを立てるが、それを遂行する点に関しては頼りにならない、ということも鈴木は学んだ。彼らは戒を受け、日本に行くことを激しく望んでいたが、それが必然的に何を伴うのかまで考えが及ばなかった。マックニールは、比叡山での仏教徒の歩行の修行に興味を抱くようになった。今や彼とヘンスは京都に住み、英語を教えながら、大徳寺境内にあるルース・フラワー・佐々木の寺で臨済宗を学んでいる。彼らは大いに遊び回っていたようである。石雲院を去らなければならなかった理由の一つは、彼らが他の男たちと性的な悪ふざけに関わっていたためであったことが判明した。マックニールは寺で幽霊を見たのでそこを去らなければならなかったと言っていた。

地下の楽団は、お馴染みのメロディーで、鈴木のお

気に入りの曲の一つでもあり、日本で最も愛されている曲の一つ「さくら」を演奏し始めた。それはみつの好みの歌でもあった——甘く、悲しく、単調ではあるが優雅な曲であった。彼らはそれを繰り返し、繰り返し演奏していた。みつは今遠く離れた日本で何をしているだろうか。彼女もまた幼稚園で一人で眠っているだろう。彼女はいまだに彼がアメリカへの出発を延ば

さず、彼女がそこで死ぬのを置き去りにしたと怒っていた。

毎週少年たちのバンドがこの歌を演奏するたびに、彼はみつのことを思った。雨がガラス窓に吹き付けていた。鈴木は台所の固い木の椅子に坐り、講堂の上のバルコニーの方角の暗闇を見つめていると、涙が頬をつたって流れ落ちた。

僧伽 1961-1962

CHAPTER 12
Sangha

もしあなたが

勉強したいと望むならば、

強い、不断の求道心を

持つことが必要である。

If you want to study,

it is necessary to have a strong

conviction, way-seeking mind.

ビル・マックニールは当初のグループを一つにまとめ上げる手助けをし、それに活気を与え、模範を示し、そして約束の地に旅立った。しかし彼は今、禅の国で真の道を見いだそうとする試みが壁に突き当たり、途方に暮れていた。ポブ・ヘンスもまた日本の禅で、恐ろしい経験を重ねていた。マックニールとともに石雲院を追放された後、彼は京都でルース・フラー・佐々木ともうまくやっていたいけないということが

わかった。彼女は彼に対し、あまりにも威圧的であった。

彼らは真の道求めて日本に行った。彼らはポール・レプスの「禅の肉、禅の骨」の中に書かれている悟りの物語と、鈴木大拙によって紹介された理想的な環境を心に描いていた。彼らの出会ったものは障害物競走のコースによく似ていた。越えられない言葉の障壁、彼らが理解できなかつた不断の叱責、儀式的な読経に対する絶対的な嫌悪、長時間の苦しい正座、坐禅の重要性に対する協調の欠如。有意義な滋養になるものはほとんど見当たらなかつた。受け入れ側の寺は外国人に対応する体制は全く整っていなかったし、これらの外国人たちはこのような環境の下で修行を継続していくのに必要とされる、相應の努力を進んでしようとはしなかつた。

それは一九六一年の三月のことであつた。マック

ニールとヘンスがサンフランシスコに帰ってきた。

マックニールは芸術映画を作る予定であった。彼はもう坐禅には来なかったし、僧侶になるとか禅を研究することは望まなかった。彼は芸術家であり、同性愛者である自分の真の姿を発見したと語った。「私は日本の禪の片鱗（かぶら）たりとも欲しくはない」と彼は言った。彼はときおり、鈴木に挨拶するために桑港寺に立ち寄った。またときおり、彼らは日本人街で偶然出会ったりした。ときどき鈴木は生徒を伴い、マックニールと彼の日本人の愛人を彼らのアパートに訪ねた。

ヘンスは桑港寺での坐禅を再開した。そこが彼の禅を勉強したいと望む世界で唯一の場所であり、鈴木は彼が師事したいと望む唯一の禅僧であるということ、彼は実感した。しかし彼は戦争から帰還した負傷兵のように悲しかった。彼は決して自分の法衣を着なかつた。ほとんどの人は、ヘンスとマックニールが得度を受けたことすら知らなかつた。

桑港寺には一二人ほどの常連がいた。そして彼らは年功順に坐つた。ヘンスは今や男性側の正面の席に、ビル・クワンとフィリップ・ウィルソンとともに坐つた。デラ、ベッティ、そしてジーンは、相変わらず三人の忠実な婦人方であり女性側の最前列に坐つた。

そのとき、一九六一年春遅く、二人の新人が桑港寺にやつて来た。彼らは鈴木（鈴木）のグループの性格を変え、彼の人生の針路をも変えることになった。最初の男は二〇代半ばのグレアム・ペッチーという名の英国人であつた。

アラン・ワッツは五月の火曜日の夕方、バークレイ仏教教会で自由奔放な講話を行つていた。その中で彼は禅、道教、精神分析、およびキリスト教神秘主義を縫ぎ接ぎし、幻想的なモザイクを作り上げていた。講義に出席したのはアラン・ワッツと鈴木（鈴木）の同僚である加藤和光、イル・ブライスという名の男と、きちつとした身なりの若い夫妻、グレアムとポーリン・ペッチーであつた。軽食を取つている間に、ブライスはマレーシア、タイ、日本およびアメリカにおける仏教グループの教多くの地位や得度を列挙した名刺を差し出した。

ペッチー夫妻は最近ヨーロッパから到着したばかりであつた。グレアムはすでに化学者としての職を得ており、禅の師匠と仏教修行の共同体である僧伽（僧伽）をベイエリアに見つけることを望んでいた。ブライスはできるだけ早く鈴木先生に会つた方がよいと彼に勧めた。

加藤は名刺を取り出し、裏に鈴木の名前と住所を書いた。

グレアムはイングラントで成長した。彼の父親は、王室を護衛し、彼らの周りで荘厳な儀礼を行うエリート部隊である、王宮の衛兵であった。若い頃から、グレアムは人生とはどういうものかを知りたいと望んでいた。この疑問は彼の宗教的な探求に弾みを与えた。

グレアムはこれを彼の厄介な疑問と呼んだ。彼は最初英国国教会に回答を求めた。そこで満足を得ることができなかった。彼はローマカトリック教会のカルメルに在家信者として入会した。そこで彼は修道士たちが、賞賛すべき謙虚さで彼ら自身の厄介な問題に取り組んでいることを発見したが、彼らと信仰を共にすることができなかった。彼は信仰の本質により近づいたためにローマに行つたが、そこでは迷信と偽善しか見いだすことができなかった。

ローマで彼はポーリンに出会った。若いフランスの芸術家で、彼女の家族が戦争中撃墜された飛行士を助けた感動的な話をした。ポーリンの母親は、アメリカ市民で神智学者であった。グレアムは彼女のパリの蔵

書の中にヒンドゥー教、仏教、そして禅僧の瞑想である坐禅を発見した。ポーリンは一〇代の少女の頃、鈴木大拙とクリシュナムルティに会ったことがあった。間もなくグレアムとポーリンは結婚し、彼女の母親がくれた大きな仏像を持ってサンフランシスコに向かった。グレアムは当初から、僧侶が何を考えているか、ということよりも、彼らが何をしたのかを理解しようと心がけていた。彼はパナマ運河を渡つて一九六一年五月始めに北カリフォルニアに到着した貨物船上で、一カ月間椅子の上で坐禅を試みた。到着してわずか一週間後に、彼は禅の師匠に、と望んでいた男に会いに出掛けた。

グレアムは、面会の約束を取りつけるために電話をかけた。鈴木は、夕方六時に坐禅をしにきたらどうか、と勧めた。グレアムは、指定された時間にやつて来て階上上がり、掲示された予定表を見て、その日の夕方の坐禅は五時半に始まったことを知り、残念に思った。彼は寺への初めての訪問に遅刻することをひどく嫌った。彼は遅刻しないように厳しく躰られてい

*原著に神智学者とあるが、神智学者が正しい。

ただが、師匠自身が彼に間違つた時間を指定したのである——ばつの悪い状況であつた。

事務所のドアが開いていたので、彼は中に入つて待つた。街路の騒音と事務所の静けさの間にあつて、一人椅子に坐りながら、彼は隣の部屋から聞こえてくる物音に一心に耳を傾けた——重い息遣い、しばらくすると静かな足音、そしてそのとき、ぼーん！ ぼーん！ 何という驚きだ！ 誰かが何かを落としたに違いない。再び彼はその音を聞いた。何が起つてゐるのだろうか。続いて鐘が鳴り、読経の声が聞こえ、そしてどんとどんと叩く音が聞こえた。彼はネクタイを直し、プレスのきいた白いカフスを伸ばした。

とうとう禅堂のドアが開き、鈴木俊隆が入つてきた。グレアムは立ち上がったが、鈴木は彼に注意を払う様子はなかつた。彼はドアの傍らに立つて出ていく生徒たちそれぞれに向かつて礼拝した。グレアムは彼らの服装を見て驚いた。カルメル会の修道士の制服の本綿の外衣、ないしはロンドン仏教会のストツに糊付けしたカラーと礼服とは異なり、ゆっくりと列を作つて鈴木の前で立ち止まり、礼拝して出ていく一〇人ほどの瞑想者たちの服装は、青いジーンズとスウェットシャツであつた。しかし、鈴木は綺麗な茶色の法衣を

着てきちんとした身なりをしていた。彼は賢そうな顔つきをしており、そこには厳しさとともに優しさがにじみ出ていた。

他の者がみんな立ち去つた後で、鈴木はグレアムとともに坐り、お茶を出して三〇分ほど彼と話をした。鈴木は彼に坐禅をする方法を知つてゐるか尋ねた。グレアムは、椅子で坐禅をした経験があると答えた。

鈴木はそれに対し、骨の上で坐禅をした方がよいと言つた。できますか。グレアムは、わからないけどやってみましょう、と答えた。その最初の日に、彼は三〇分間両脚を組み、上体を真っすぐ伸ばし、王宮の衛兵のように、じつと動かずに坐り続けた。彼は今まで一度にそれほど長く坐つた経験はなかつた。ロンドン仏教会のクリスマス・ハンフリーズは、適当な修行を積むことなしに、あるいは経験者の指導なしに一〇分以上の瞑想を続けることは危険である、と警告していた。

「あなたは坐り方が非常によい」と鈴木が彼に言った。「全く問題ありませんね」。この言葉にグレアムは喜んだ。それから鈴木が尋ねた、「明日朝五時四五分に来ることができますか」。

「私は結婚してゐるんです」。グレアムは驚いて答え

た。結婚して勤めていたのだ。彼は一日の仕事を控え、寺に行くためにそんなに早い時刻に起きるなどとは想像もできなかった。彼が考え込んでいる間に、鈴木は追加のお茶を勧めた。グレアムは、辞去すべき時間に追加のお茶を勧める日本の慣習を心得ていた。彼は暇を乞い、さよならを告げた。

最初の反応に戸惑ったにもかかわらず、グレアムは翌日の朝行くことに決めた。坐禅について鈴木が説明したことは、彼には完全に納得できた。彼のすべきことは、壁に向かい、自分の呼吸を追っていくことだけであった——信じるものも、頼るものもなく、ただこの素晴らしい威厳のある小男の指導に従い、彼自身の厄介な問題を解決することだけであった。

グレアムはその最初の晩、抑えきれない喜びに満たされて帰宅し、ポーリンに彼の出会った幸運について語った。彼は即座に、全生涯を坐禅に捧げることを誓った。グレアムは毎朝、毎晩、日曜ごとに桑港寺に行つて参禅するとともに、全ての講話を聴きに出掛けた。彼は決して迷わなかった。また彼は質問もしなかつた。彼は鈴木に対して日本の模範的な生徒のようであった。彼はグレアムが坐蒲の上で身体を揺り動かして壁に向かって坐る前に、通路で足の裏をブラシで払

う草が好きであった。

仏陀は人々が偉大であった故に偉大でした。人々の心構えができていなければ、彼らにとって仏陀は存在しないでしょう。私はあなたたち全てが偉大な先生になることは期待しませんが、私たちがどちらがよくてどちらがよくないか、ということを識別する日を持たなければなりません。このような心は修行によつて得られるでしょう。

一九六一年に東海岸からやつて来た二番目の吉兆の男は、リチャード・ペーカーという名の活動的な二五歳の移住者であった。ハーヴァード大学、続いてグリニッチレッジ、ノース・ビーチで東西の哲学、芸術、そして詩を研究したことにより、彼は非凡な人たちに接触する機会を得たが、いまだに彼が尊敬し信頼できる模範的な人物に出会う機会がなかった。しかし彼が友人とともにサンフランシスコのポーク・ストリートにある、フィールズ・メタフィジカル書店に行つた晩、状況が一変した。リチャードと彼の友人はそのとき、日本食レストランを出て、侍映画を見に行く途中であった。店の中でふざけて、リチャードは、

侍が刀を振り回す真似をして大声を上げた。店長のジョージ・フィールズが笑つて彼に、鈴木俊隆の講話を聴きに桑港寺に行くべきだと言つた。

「あなたは鈴木先生に会うべきだよ」とフィールズは言つた。「彼は禪のもう一つの宗派の師匠だ。彼は素晴らしい人物だ」。フィールズが「禪のもう一つの宗派」とは、その当時英語で書かれていたほとんど全ての本が焦点を当てていた、臨済宗に対する曹洞宗を指していたのである。

桑港寺の禅堂で金属製の折り畳み式椅子に坐りながら、リチャードは鈴木に釘付けになつた。それはあらかも偉大な中国の師匠が、彼がかつて読んだ本の中から生身で現れたようであつた。リチャードを畏敬させたのは彼が語つたことよりは、むしろ彼の話すことと人間性が統合されていたことであつた。ここに古典的な意味における深い思想の持ち主がいる。彼は思考の限界を知っており、思考を超えた目標に向かつて闘争しているのだ。

その後リチャードは、アラン・ワッツとセンザリー・アウニアネスを教えたドイツの婦人シャーロット・セルバーが開催したセミナーに出席した。リチャードはすでにワッツとは面識があり、特にセル

バーに会うことを楽しみにしていた。セルバーが町を去つた後、彼は再び鈴木を求めた。リチャードは鈴木の話に数回出席したが、そのとき初めて彼は鈴木の下りに共同体（コミュニティ）のようなものが存在していることに気づいた。彼は確かにこの師匠に興味を抱いてはいたが、彼自身は坐禅をしようとは思つていなかった。

その後、鈴木大拙の本に目を通していたとき（彼は坐禅についてはほとんど言及しなかつたある文章がリチャードの心を捉えた。「あなたたちが坐禅の修行には向かないと考えるのは一種の虚栄である」。彼は直ちに坐禅を始めようと決意した。「私の心がさまよつたのを停止させるために」

リチャード・ベーカーの母親は詩を書き、父親はハーヴァード大学で教鞭を取つていた教授であり、後に彼が高校に通つていた頃はピッツバーグ大学で教えていた。彼らは裕福ではなかつたが、毎年夏は、メイン州にある母方の祖母の家で過ごした。リチャードの生誕の地であり、彼はここに彼自身のルーツがあると思つていた。彼は常に一匹狼であり、読書家であつた。ハーヴァードで彼は「アウトサイダー」とも「エール・ダルコ」とも呼ばれていた。大学四年目の年に、

彼は神学者のポール・ティリッヒ、東洋史学者のジョン・K・フェアバンク、および現駐日大使であるライシャワーの講義に出席した。教授たちの立派な資質にもかかわらず、リチャードは学んだことに満足が得られなかった。卒業を間近に控えて彼は大学を中退し、二四歳までニューヨーク市に住んだ。それから彼は一九六〇年の秋、ポケットに三五ドルを携え、サンフランシスコ行きのバスに乗って、西に向かった。最初の日に彼は詩人ローレンス・ファースティングेटティのシテールライト書店を見つけ、間もなくノースビーチの文学および芸術サークルの中に浸った。彼はアパートに移り、書籍販売会社に職を得、そして何か有意義なものを求め続けた。彼は近くのチャイナタウンで、禅の師匠に会うことを夢見ていた。九カ月後、彼は中国人ではなく日本人の師匠に出会ったのである。

リチャードが規則的に坐禅を始めて間もなく、彼はグレアム・ペッチーが典型的な優等生であることを認めた。グレアムは、それ相應の努力をすれば生徒たちは鈴木のような人間になることができ、彼が知っている

ことを知り得るし、禅の師匠になる事ができると考えていた。グレアムが専心した方法は一〇〇パーセント、リチャードが信じていたものと同じであった。

二人は直ちに親友になった。リチャードとグレアムは二人とも背が高く、痩せていて、よい教育を受け、真面目であったが、相違点もあった。グレアムは坐禅に伴う肉体的な厳しさに対して、遥かに容易に耐えることができた。彼は四〇分間の坐禅の間中、結跏趺坐の姿勢で背を伸ばし、身動きせずに坐り通すことができた。坐禅の時間は実際にはそれよりも長かった。それは、坐禅の時間が始まる前には坐っていないなければならないからである。リチャードにとつて坐禅は苦痛であり、心地よいものではなかった。長い間、彼は半跏趺坐でも坐ることができなかった。彼は自分の坐禅の姿勢を称し「半百合」と呼んでいた——数枚のクツシヨンの上に乗り、膝の下にはさらに数枚のクツシヨンを敷いていた。彼はしばしば動かずにいられたが、自分に目標を課した。例えば坐禅の途中で、鈴木が警策を持ち一周し終えるまでは動かさないでいる、など。

*原書に前駐日大使とあるが、在任は一九六一年からである。

「グレアムは自分の生活を坐禪に適應させ、禪堂での修行に専心した。リチャードは坐禪を彼の生活に取り入れ、世界を彼の僧堂とした。彼は運転中も呼吸に注意を払い、歩行中は脚に注意を集中し、仏教の書物を貪欲に読み漁った。鈴木は、グレアムは坐禪の姿勢に努力を傾注し、リチャードは禪の理念に集中していると語った。

禪センターに来て間もなく、リチャードは芸術学校の学生であつたヴァージニア・ブラケットに巡り合った。一九六二年五月に鈴木は彼らを結婚させた。ペーカー夫妻とペッチー夫妻は親密で、彼らの生活は多くの点で類似していたが、多くの場合ペッチー夫妻が一步先を行っていた。彼らはともにフォルクスワーゲンを運転し、待映画を観に行き、アパートに畳を敷き、間もなく子どもが生まれようとしていた。

ある日グレアムとリチャードが車の後部の座席に坐り、鈴木が前の座席に坐っていた。リチャードが前かがみになって質問した、「鈴木先生、あなたは私たちが仏教を理解することができるとお考えでしょうか」
「できますよ、あなたたちが修行をすれば、あなたたちが修行の方法を知っていさえすれば」と振り向き、リチャードの目を見ながら答えた。

その瞬間、リチャードは彼の全生涯を通じて禪を修行することになるであろうと悟った。

* * *

もしあなたが坐禪の修行を志すならば、よい友達を持つことが必要です。
そうすれば自然により修行ができます。

*If you want to practice zazen,
it is necessary to have good friends.
Then naturally you will have good practice.*

鈴木の娘安子と彼女の弟包一は、横浜埠頭から静かに離れていくモンタナ丸を見つめていた。船上には、アメリカに出発するみつと乙宥が乗っていた。乙宥は激しく泣き、デッキから手を振り別れの挨拶をした。

桑港寺の檀家で鈴木の親友であつたジョージ・ハギワラは、一九六〇年の暮れに行動を開始した。ハギワラは日本の親戚を訪問しようとしており、鈴木に説得され、みつにアメリカに来るよう依頼するために、特別に焼津に足を延ばした。彼は、鈴木が当初予定したより長く滞在することを希望している、と彼女に伝えた。非常に多くの人たちが、彼について学ぶためにやってくるので、三年間だけでは彼の使命を果た

せない、と彼は思っていた。彼は彼女の助力を必要としていたのだ。

きぬお祖母さんもまた、俊隆は全てのことを自分一人でやり繰りして二年間海外で過ごしてきたのだからと言ひ、みつに出発するよう促した。それは重要な仕事であり、彼女は彼の成功を願っていた。みつはプレッシャーに根負けし、プライドを抑え、出発することに同意した。

きぬお祖母さんは鈴木の一若い息子も一緒に連れていくように、と主張した。乙宥は一七歳で、ほぼ高等学校を終えており、彼女にはもはや彼の責任を負うのは重荷であった。乙宥は長い間帰国はできないだろうということがわかっていたので、姉のおほみに別れを告げるため、精神病院を訪ねた。彼女はすでに六年間そこで過ごしていた。恐らくそこは彼女の永遠の住処となるであろう。彼はこの数年間に、数回しか訪ねたことはなかった。そして彼女は彼に会えたことを喜んだ。彼女はひどく体重が増えていた。

いったんみつが出発に同意すると、鈴木は彼女に手紙を書いた。「お前のために一番上等なマツトレスの

付いたベッドを買った。またお前にアメリカ製のアイロン台と、特別高級な新しいアイロンも買った。これらはアイロンを掛けるために待ち受けている。お前に買ったのはこれだけだ。多くはないがね。だがお前が乙宥と一緒に到着するのを心待ちにしている。乙宥にもとても会いたいと思っっているよ——

一九六一一年六月一日、みつと乙宥はサンフランシスコの四一番埠頭で鈴木と積家の数人の仲間たちに迎えられた。鈴木が最初に到着したときと同じように、みつと乙宥は彼らの住居の粗末なことにショックを受けた。部屋は清潔ではあったが、やつと寝るだけの広さしかなかった。乙宥は両親の部屋に通じる階段の踊り場の、向かい側の屋根裏部屋に寝た。鈴木はみつの新しいベッドを彼のベッドの隣に押し込んだ。後日彼女はある生徒に、彼が六カ月間彼女を彼のベッドに招待しなかった、と告白している。これは彼が他の婦人たちの親切な行為に心を動かされていたためであろうと彼女は思った。

みつの気を変えさせたのは、きぬお祖母さんやハギ

*みつ夫人によると、ジョージ・ハギワラではなく上田氏であるとのこと。

ワラの説得だけではなかった。最近の手紙の中で、鈴木は彼女に、女生徒たちがいかに彼を親切にもてなすかということを書いてきた。彼は、親しい女生徒たちからではないが、言い寄られたことがあるとほのめかした。もし彼女がそこにいれば、彼女たちに抵抗することはより容易であろう、と彼は書いていた。ある一人の婦人がビルの中に隠れ、彼が鍵を掛けた後で彼に接近した。彼女が立ち去ろうとしないので、最後には古參の生徒を呼んで助けてもらわなければならなかった。

アリスという名の非常に役に立つ女性がいた。彼女はときどき鈴木のために料理をし、人參ジュース等の健康食を探るように勧めた。彼女は彼の歯が悪いことに気づき、寄付を集めて義歯を入れるために彼を歯医者に連れていった。彼女は彼の服を洗濯をし、彼に股引きを買った。彼はそれが気に入って寝るときにも着用し、寒いときには衣の下にも着た。彼女は、あまり坐禅はしなかったが、台所に居座り、鈴木や彼の生徒たちとお茶を飲みながらこう言った。「先生、どうか禅について教えてください、私は一生懸命に理解しようとして努力しているのです」。みつが到着した途端に、アリスはいなくなり、別の導師を探しにインドに行っ

た。

檀家と坐禅の生徒たちは、新しく来た鈴木家のメンバーを歓迎した。彼らは贈り物を渡し、町を案内した。桑港寺の檀家の一夫妻、勝山家では鈴木一家を火曜日の夕食に招待した。そして間もなくこれは習慣となった。鈴木は妻と息子を連れてミマツに行った。彼がしばしば行っていた、床の高い木造りの間仕切りのある、安く古風な日本料理店である。桑港寺の三人の檀家がこの店を所有していた。彼は二人を美術工芸品店の本阿弥と和菓子店に連れていき、甘い饅頭を食べ、緑茶を飲んだ。ジョージ・ハギワラは、彼ら三人を日本庭園に連れていった。みつと乙宥にとっては、日本の別の都市に行ったような感じであった。

乙宥は痛ましいほどはにかみ屋で、途方に暮れていた。彼はアメリカで高校を卒業する気にはなれず、無理に学校に行かせないでほしいとせがんだ。職を得ることができるかもしれない、と彼は言った。彼は日本の学校でも決してよい成績ではなかったし、英語は全くわからなかった。父親は、彼にいずれわかるようになるだろうと言った。彼にとって最悪なことは、もう一度三年生にならなければならないことであった。鈴

木は寺の檀家だけに限定せず、日本人と日系アメリカ人双方の一〇代後半の少年たちのグループを組織した。二五名ほどの少年たちが毎週一度集まった。乙宥には数人の友達ができた。数カ月後、彼は桑港寺が来客のために確保していた、街路を隔てた向かい側にあつた小さなアパートに移った。

もしあなたが一緒に生活していれば、お互いに話をする必要はありません。お互いに理解し合えるでしょう。

みつと俊隆は今まで一緒に住んだことはなかったが、彼らは急速に共同生活に馴染んだ。彼女の責任は、彼女によると、第一に夫の世話をすること、次いで檀家、坐禅の生徒たち、そして建物の面倒をみることであつた。彼女は彼と同じように勤勉であつた。到着した翌朝、食後に夫が古いろそくを新しいいろそくに溶かし込んでいる間に、彼女は漬物を作つた。彼女は料理をし、掃除をし、洗濯をし、接客をし、婦人たちのグループに会つた。仕事以外にも、彼女は夫の生徒たちとともに坐禅をし、台所のドアに隣接する女性側の正面の席に坐つた。彼女は桑港寺に活気を与え

た。寺では、以前よりも多くの会話が交わされるようになった。そして彼女は彼にとって御しやすい人間ではなかった。彼らは古い友人同志であり、彼らが育つた伝統的な文化からすれば、彼は彼女を全く対等の相手として扱つた、ということができる。ときどき生徒たちは彼らが口論するのを聞いた——それは、師匠の新たな一面であつた！

みつはすんなりと桑港寺での新しい生活に入つていった。彼女は桑港寺での生活は、日本での彼女の仕事とよく似ていると言つていた。ここでは日本人はもちろん白人までいるという違いはあるが、日本でも、学校にはいつも訪ねてくる人やうろついている人たちがいた。彼女は直ちに英語を覚え始めた——ちやうど生活に必要なだけ。彼女の外向的な性格をもつてすれば、日本よりも、サンフランシスコで寺の奥さんとしての役割に入つていく方が容易であつたであろう。

誰もがみつを「Ozumi (奥さん)」と呼ぶようになった、これは「ミセス」という意味で、家庭の妻に対する伝統的な呼び名である。多くの人たちはそれが彼女の名前だと思つた。奥さんは坐禅の生徒たちと親しくなつたが、特にベッティ、デラ、そしてジーンと仲よしになつた。しかし彼女は若者たちの多くが往々にし

てだらしない服装をし、汚い足をしていることは嫌った。

「不平を言つてはいけない」と鈴木は彼女に言った。

「彼らはいい禅の生徒たちだから、お前は彼らを尊敬しなければいけない。実際のところ、お前は彼らの足を洗つてやるべきだよ」

奥さんは彼の言葉を真面目に受け止め、湿ったタオルを丁寧に畳み、禅堂の出入口に置くようにした。彼女は彼らが畳に上がる前にどのように足を拭いたらよいかを教えた。

「足を綺麗にしなさい、足を綺麗にしなさい」と彼女は甘い、音楽的な声でいうのであった。

生徒たちは彼女の要求を直ちに受け入れ、足は綺麗になった。

* * *

徐々に私たちは

僧伽の感触を創り出した。

More and more we created a feeling of sangha.

一九六一年春、土曜日の午後の会合の席で、鈴木俊隆は坐禅の生徒たちで非営利的な法人を組織するよう

提案した。そうすれば彼らからの拠出金は所得税を免除され得るのである。鈴木は桑港寺の資金を、個人的な用途に使わないよう細心の注意を払っており、同様に彼は、日本人会と坐禅会、という二つのお寺の財源を混同しないように注意していた。例えば、彼は坐禅の生徒たちが禅堂の使用に対し、日本人会に借用料を支払うよう主張した。彼は個人的に金を受け取ることには気が進まなかつたので、会計係を置いて金を取り扱わせるよう望んだ。二年間、共に修行を重ねた後、組織化のときを迎えたのである。

ロサンゼルスの禅宗寺の新しい住職で、当時アメリカにおける曹洞宗の名目上の長であった山田（やまの）霊林（れいりん）総監はこのグループの法人化に同意し、日本の名前をつけるよう勧めた。ヘンスは、日本の名前は英語を話す生徒たちにはふさわしくないといい、禅センターという名前を提案した。全員この名前が気に入った。彼らはこの名前をやたらと口にした——禅の中心地、中心地における禅、禅に集中せよ。

一九六一年八月、ボブ・ヘンスが最初の会長に選ばれ、禅センターの法人化の事に着手した。ある土曜日のこと、彼は会合のために桑港寺にやって来て、書類全部を彼のブリーフケースに入れ、階下の事務所の

机の上に置いた。一人の少年が通りかかり、ドアの開いていた部屋に入り、ブリーフケースを掴んでファイルモア・ストリートの方向に走り去った。ヘンスは彼を捕まえることができなかった。書類の写しは用意していなかった。

その間ずっとヘンスは、桑港寺での修行を続けるべきかどうか自問しながら、激しい苦しみを経験していた。ある日、彼はフィリップのアパートでフィリップ・ウィルソンに彼の心情を吐露した。鈴木は彼が僧侶になることを望んでいるが、彼は建築家としての仕事を捨てることも、在家信者としての生活を捨てることもできないと彼に語った。東と西は所詮相容れない、と言ったユングの説が、得られる限りでは彼らの考えに最も近いものである、と彼は言った。「もう、修行はやっていけない」と彼は言った。数日後、ヘンスは精神障害を起こし、入院しなければならなかった。彼にとつてはもちろん、グループにとつても危機であった。

会議が開かれ、グレアム・ペッチャーがここに来てわずか二ヵ月しか経っていなかったにもかかわらず、会長に選出された。古参の中で最も率直に発言するジーン・ロスは、誰の目にもヘンスの後継者として妥当だ

と思われたが、彼女は禅を学ぶために近々日本に行く計画を立てていた。彼女はグレアムを会長に指名した。彼は有能であり、充分期待に添い得ると認められた。六週間後、彼は法人化の申請書をカリフォルニア州務長官に提出した。

一部の者たちは新しい法人の地位について不安を感じていた。フィリップは、細かいことは心配せずにただ坐禅をすべきだ、と言った。たとえ彼らが桑港寺を失ったとしても、ガレージで坐禅をすることもできるのである。鈴木は社会の慣例的な方法で仕事をする公に認められた団体を持つことを望んだ。宗教は多分に非慣例的(型破り)ではあるが、彼は明確に規定された組織には実質的な利点があると考えていた。彼は若い生徒たちの、反体制的な態度には与しなかった。健全な団体は強固な社会の構成要素であると彼は信じ、グループが個性を失うことを恐れる必要はないと信じていた。彼らが何をしようとする問題が存在するのであるが、彼らが坐禅に専念し、彼らの仏性を信じるならば問題は無い、大丈夫だと彼は言った。

鈴木自身がよい財務の管理者というわけではなかった。みつが到着して間もなく、檀家の会計係が、彼女の夫は、給料の支払小切手を現金化しようとしなかつ

た、と彼女に告げた。最初に会計係は、小切手が何かを説明しなければならなかった。彼女はすぐに飲み込めた。しばらく探したところ、「奥さん」は小切手を探し当てた。事務所の本の間から落ちてきたのである。それ以後、小切手は彼女に手渡されるようになった。彼は何によつて生活してきたのだろうか、と彼女は不思議に思った。

夫の非実用性を示す別の例を見て、奥さんは、食料や雑貨類の買物物は、彼女がするよう主張した。彼はときおり、帰宅の途中マーケットに立ち寄り、野菜、特に好物のサツマイモを買った。問題は彼が最も古くて、萎れて傷んだ野菜を選ぶことであつた。彼女は、一体全体どうしてこんな物に金を払うことができるのか、と彼を詰問した。彼は（それら野菜に対して）気の毒に思った、と答えるのであつた。彼女は街路で、彼が配達用のトラックから落ちた白菜を拾い上げるのさえも目撃した——それは彼の父親の影響であつた。

奥さんが来てから、鈴木の間はますます貴重なものになつた。彼は以前のように、映画や夕食で外出できなくなつた。もつともお勤めの後の楽しい朝のお茶の時間は続いていたし、人々が挨拶に来たり、質問に立ち寄ったりはしたが、奥さんは生徒たちと親密にな

り、一緒に過ごすことを楽しんでいたが、彼女はいつも夫に日本に帰ることを勧めていた。彼女は、彼は滞在するには身体が弱すぎるし、病氣にかかりやすいと思つていた。

鈴木が日本に帰る可能性について話をすると、いつも生徒たちは神経質になつた。彼の三年間の任期は翌年の春に満了するのである。生徒たちは、彼と共に過ごすことは素晴らしいと思つたが、それがいつ終わるのかわからなかつたので、一抹の不安を抱いていた。彼らは、それが続く限りはそれを享受し、最大限に活用し、可能な限りのことを学び取ろう、という熱意を共有していた。不確実性の中にあつて、彼らが共に行つてゐることは、非常に有意義であり有益である、という確信を持つていた。

ときたま鈴木俊隆は、生徒たちが陥つてゐる型にはまった生活から抜け出し、自らを、自己満足という止まり木から払い落とし、非現実的な生活から抜け出して不確実性の活動の舞台に戻り、そこで彼が言うところの「初心者の修行」に立ち返ることができるようになる、過激な行動を取つた。ある朝、坐禅と修行の中で彼らが努力して得た、全体的にも個人的にも醸成された調和に浸り、彼らの自信が頂点に達していたとき、

鈴木は合掌し、坐蒲に坐っていた生徒たちの背後を
通って部屋を歩き回りながら、朝の挨拶をした。彼は
祭壇に向かい礼拝し、いつものように部屋に面した演
壇上の彼の席に戻った。途中で彼は立ち上がり、数人
の姿勢を直し、眠そうなビル・クワンの両肩を二回ず
つ叩いた——彼が毎日しているのと全く同じように。

彼は自分の席に戻り再び坐禅を始めた。そのとき突
然、鈴木の小さな身体から怒ったライオンが吠えるよ
うな唸り声が放たれた。

「あなたたちは坐禅をしていると思っている！あなた
たちは坐禅をしているのではない！時間を無駄にして
いるのだ！」彼は坐蒲から跳び上がり、通路に舞い降
りて、各人の両肩を二回ずつ四回強打し、稲妻のよう
に素早く、衣を翻して走り、禪堂に旋風を巻き起こし
た。それから彼は無言で自分の席に戻り、啞然として
坐禅をしていた者たちの部屋全体に衝撃を与えた。

お勤めを終え、生徒たちがそれぞれ部屋を出る際
に、ドアの傍らで鈴木に礼拝したときには、彼らは若
干自信を失っていた。彼は生徒たちを真つすぐに見つ
めたが、怒りの気配はなく、全てが普段と変わらな
いように見えた。自己満足とプライドは粉々に打ち砕か
れた。警策をこのように使用することを連策といい、

日本の禅の伝統的な修行の一形態である。鈴木はこの
連策をとくとき行つた。しばしば一言も発せずに。

私たちの教えは非常に優れています——非常
に、非常に優れていると思えます。しかしもし私
たちが傲慢で自信過剰に陥れば、私たちは道に迷
うでしょう。そこには全く教えも、仏教もありま
せん。従って私たちが心の平靜の中に人生の喜び
を見いだし、それが何であるかを知らず、何事
も識別しないときに、私たちの心は非常に偉大で
広大になります。そのとき私たちの心は全てのもの
に対して開かれています。この境地に到達する
ためには、私たちは、自信過剰という傲慢から、
自己中心的なものから、常に何物かを期待する未
熟な、幼稚な心から解放されなければなりません。
私たちの心は、何物かを知る前に、知るため
の十分な大きさを持たねばなりません。何物かを
得る前に、私たちは感謝しなければなりません。
何物もなくとも、私たちは幸せでなければなりま
せん。悟りを得る前に、私たちは自分の道を修行
することを喜びとしなければなりません——さも
ないと、私たちは真の意味で何物をも得ることは

できないのです。

* * *

最初に浮かんだ考えが
一番よい考えである。

First thought, best thought.

ヘンスは神経障害を起こして以後、旧に復すること
はなかつた。ある日彼は桑港寺に立ち寄り、師に二年
半の暇乞いをした。彼はある建築会社で働くためにシ
カゴに行く予定であつた。鈴木はヘンスの挫折感には
同情したが、彼を引き留める言葉を掛けても無駄だと
わかつていたので、最初に彼を迎えたときと同じよう
に丁寧に彼を見送つた。

ヘンスは郵送先名簿を作成するよう提案した。生徒
たちの中には、鈴木が桑港寺で行つた禪の教えについ
ての講話を入手したい、と希望する者もあつた。こ
うして会報を発行する構想が生まれた。フィリップ・
ウィルソンと彼の小柄な学者の妻J. J. が最初の会報
の草案を書いたが、何と名付けたらよいかと愚案し
た。禅センター会報を始め、さまざまな名前が提案さ
れた。

「私が名前を付けましょう」と鈴木は言つて階上に上
がっていった。二〇分後、彼は一枚の紙を持って下り
てきた。紙には「ウィンドベル (Wind Bell) (風鈴)」と
いう文字と風鈴の絵が、黒い墨と毛筆を使って書かれ
ていた。絵の下には道元の詩「風鈴」の翻訳が書いて
あつた。

フィリップとJ. J. は謄写版で印刷しようとした
が、出来上がった物は印刷が薄すぎた。鈴木は仕事着
のパンツとアンダーシャツ姿で彼らの仕事に加わつ
た。彼はインクをたっぷりと気前よく使つた。彼は興
奮した。これが彼のグループの最初に印刷された情報
紙となるのだ。彼はへまをしてインクを自分自身にも
床にもこぼしてしまつた。間もなく彼の両腕と上体は
すっかり紫色になつてしまつたが、彼は誇らしげにイ
ンクの滴り落ちた最初の印刷物を手に取つた。

「私は慎重すぎたようだわ」とJ. J. は彼らが清掃し
終えたときに言つた。

翌日は一九六一年一月二日、土曜日であつた。生
徒たちは新しく印刷されインクの滲んだ「ウィンドベ
ル」を輪になつて立ち読みし、ポケットに突っ込ん
だ。中には大学の掲示板やコーヒーハウスの壁に貼る

ために東で持っていく者もいた。「一体何のために私たちに新聞が必要なんだ」とグレアムは怪訝に思った。リチャードは肩をすくめた。「禪に興味を持っている人たちはサンフランシスコに禅センターがあり、ほぼ二年半の間、鈴木俊隆老師の指導の下に活動していることを知って喜ぶであろう」とグレアムは読んだ。

「老師」という尊称は、リチャードの友人でジート詩人たちの先端的な編集者の一人で、新しい禅センター評議会の会長になったドン・アレンの提案によるものであった。彼は日本に行った経験があり、それは日本で禪の師匠を呼ぶ尊称であると言った。

一九六二年一月に発行された二号目の「ウインドベル」はフィリップ・カプロウの桑港寺訪問について紹介した。カプロウは、「抜隊」という名の昔の日本の師匠についての講話を行った。その後でカプロウは生徒たちに、彼が日本で九年間、原田祖岳老師と原田の後継者、安谷白雲老師の下で学んだことについて話した。彼らは臨済宗の指導者たちのように公案を使った曹洞宗の異端者であった。カプロウの妻も彼とともに質問に答えた。日本で彼らは多くの摂心に参加し坐禅

をし、寒い日も暑い日も夜を徹して困難な坐禅の修行を積み、公案に精神を集中し、見性けんじやう（悟りの経験）を得るために、情熱を傾けて励んだ。原田は亡くなっていったが、安谷はまだ健在であった。鈴木は話に魅了されていた生徒たちの間に坐って聞いていた。それは彼について修行することは非常に違っているように感じられた。中にはすぐにでも日本に行きたいと望む者もいた。恐らく安谷について修行することで悟りを得られるに違いない。鈴木の方法はゆっくりし過ぎていようように感じられた。

次の土曜日の講話で、鈴木は二つの伝統的な宗派の禪の取り組み方の違いを強調した。「私たちの方法は一度に一歩進み、一度に一呼吸し、利得を考えない修行である」

次の年には「ウインドベル」は毎月発行され、分量も少しずつ増加した。このようにして、鈴木の話の記録が始まった。彼は英語をより気軽に話すことができるようになっており、同時に彼の教えを印刷物で利用できるようにする技術を備えた人たちがいたのである。

リチャードやその他の生徒たちがいつも私の講話を書き留め、それについていろいろな質問をしてきました。私が変則的な英語で述べたことは、私が言いたかったこととはかなり違っていたので、私はある程度書き直さなければなりませんでした。「ウィンドベル」には実際の講話ではなく、私の変則的な英語が、リチャードや他の人たちによって訂正されたものが記載されていました。

リチャード・ペーカーは鈴木の話についての彼の覚え書きを通読し、教えが凝縮した箇所を見つけたし、そのテキストを鈴木とともに検討したうえで、「ウィンドベル」に掲載するため、グラムに提出した。

もしあなたが「私は坐禅をしている」と考えるならば、それは誤解です。仏陀が坐禅をしているのであり、あなたたちがしているのではありません。もしあなたが「私は坐禅をしている」と考えるならば、多くの困難が起こるでしょう。もしあなたが「仏陀が坐禅をしている」と考えるならば、困難は起こりません。あなたた

ちの坐禅が苦痛の多いものであり、間違った觀念に満ちていたとしても、それはなお仏陀の活動です。仏陀の活動から逃れる道はありません。このようにして、あなたたちは自分自身を受け入れ、自分自身に、すなわち仏陀に、すなわち坐禅に専心せねばなりません。あなたたちがあなたたち自身になるとき、坐禅は坐禅になり、禅は禅になるのです。

* * *

小鳥たちのように私はやって来た、
私の足下には道はない。
黄金の鎖で閉ざされた扉は自ら開く。

*Like the birds I came,
No road under my feet.
A golden-chained gate unlocks itself.*

鈴木俊隆は赤い衣を着て、黄色の錦のお袈裟を掛け、先の尖った帽子をかぶり、飾り立てていた。手には白い牛の毛の払子ハシを持っていた。彼は桑港寺の戸口で詩を朗唱し、初めて入るかのように厳かに桑港寺に入った。それは一九六二年五月二〇日、彼がアメリカに来てちょうど三年日が満了する三日前であった。彼

は当初の予定に従い、日本に帰国するのではなかった。彼は晋山式で桑港寺の住職に就任しようとしていた。

階下の講堂には、寺の檀家だけではなく、全日系アメリカ人社会の賓客数百人の年配の日系人たちが、スーツにネクタイを締め、日曜日に着る最高の盛装をして、彼の入場を坐って待っていた。彼らの中に混じって、ほとんどの者は後部の座席に坐り、色とりどりの服装をした六〇人ほどの、主に若いアメリカ人がいた。高くあるいは低く鳴り渡る鐘の響きと、バルコニーでリチャード・ペーカーが打ち鳴らす太鼓の轟音のさなかに、鈴木は階上に赴き、禅堂と食堂の祭壇に進み、香を供え、詩を朗唱した。間もなく鐘の音が近づき、招かれた僧侶たち、お寺の役人たち、双方のグループの子どもたちが、手に花を持って講堂に入ってきた。彼らに続き、鈴木が花嫁のようにすると軽やかに通路を進み、儀礼のために飾り付けられた、華麗な祭壇に上った。彼は線香を供え、別の詩を朗唱した。彼の隣には儀礼を司るためにロサンゼルスから来た山田総監が立っていた。

私がこの一本の線香を取り上げた後も、それはな

おそこにある。

なおそこにあるながら持ち上げることは難しい。

今私はそれを仏陀に供え、無手でそれを燃やす、

この寺の開祖、継承した代々の祖師および

我が師玉潤祖温大和尚の慈悲心に返礼しつつ

祖温大和尚

それから鈴木は須彌壇に上り祭壇の脇の漆塗りの椅子に坐った。ついに彼は桑港寺の住職となり、正式に寺の印を受け取ったのである。それは彼にとっては、藏雲院と林叟院に続いている、三度目の住職就任であった。彼は引き続き、三年間留まることを誓願した。これに関し、故郷の焼津の者たちは快く思わなかった。彼らはなぜ鈴木が帰ってこないのか、理解に苦しんだ。もし彼らがレセプションでの寄せ集めの西洋人の生徒たちを見たら、彼らはなぜ鈴木がそのような連中のために、無駄に時間を費やすのかと疑ったであろう。しかしこれらの生徒たちは翌朝も、またその次の朝も坐禅にやっけて来るのであった。

* * *

あなたたちは

オーブンで焼かれるパンのようなものです。

You are like loaves of bread cooking in the oven.

鈴木にはまだ、具体的な計画はなかったが、彼は仏法の種をアメリカに植えつけ、日本との相互に有益な交流を發展させたい、という強い願望を持っていた。

一九六二年三月、ジーン・ロスが日本に出発する前に彼女の送別のパーティーが開かれた。ジーンは、永平寺に行く彼の二番目の生徒であった——最初の生徒はノナ・ランサムである。ジーンはかなり以前から、彼女が「本物の坐禅」と呼んでいた場所へ行く決心をしていた。彼は彼女が独自の流儀で永平寺に挑戦するであろうということがわかっていた。マックニールとヘ

ジーンは彼らよりは立派にやり遂げるであろうと確信していた。彼女はうぶな理想主義者ではなかった。彼女は現実的な平抱強さを持っており、鈴木は彼女の地味で誠実な態度が、彼女を受け入れる人たちに安心感を与えるであろう、と信じていた。彼女は今、一週間に三日しか桑港寺に通ってこなかったが、週末の振心を何回も耐え抜いており、一九六一年八月の一週間続いた撰心の入門式にも合格していた。このような粘り

強さはまがいものではあり得なかった。

五月に、「ウインドベル」は永平寺からの彼女の最初の手紙を掲載した。彼女は僧侶たちとともに働き、かつ修行を続けていた。彼女は自分の個室を持ち、他の者たちがやって来る三時三〇分より前に洗面を済ませるために、朝の三時に起床した。彼女は毎日数時間読経することも、道元の靈廟（れいびやう）に行くのに、毎日九五段の階段を上ることも不平を言わなかった。彼女はカルチャー・ショックに耐え、言葉の障壁にもかかわらず大勢の友人を作った。

「地方から出てきたこれらの僧侶たちは普通の男たちであり、聖人ではない。彼らの顔には多くの規律によって鍛え上げられた高度の個性が現れている」と彼女は書いていた。その後、さらに強く胸を刺すような言葉が綴られていた。「私に関して言えば、永平寺の地に立って、初めて自分が大地に根ざしているという感じを持った。私は仏性を人間のみならず全ての生あるものに認めるようになった。こうした広がりがあるものの圧力を和らげてくれた」

* * *

坐禅の修行は

神秘的な素晴らしいものを得るために
行うものではありません。

坐禅は澄み切った心をもたらすために
行うものです

——輝かしい秋の空のように

澄み切った心に。

The practice of zazen is not for gaining

a mystical something.

Zazen is for allowing a clear mind.

—— as clear as a bright autumn sky.

一九六二年八月、鈴木と生徒たちは恒例となつてい
た、一週間に渡る摂心の三回日を行った。これはいつ
もより朝早く始まり、夜は遅く終了し、そして七日間
を通して、朝から夜まで続けられた最初の摂心であつ
た。鈴木は山田総監を摂心の指導のために招待し、彼
は最終の五日間摂心に参加するためにロサンゼルスか
らやって来た。山田はインドの偉大な聖者、ナーガ
ルジュナと禅の始祖である、菩提達磨についての講話
をし、個人的な面談である独参を行った。鈴木は鐘を
鳴らし、全てが円滑に行われるように手はずを整え、
全期間坐禅をし、不動の信念をもって生徒たちを励ま
した。生徒たちは脚や背中痛み、倦怠と不安に耐え

た。三〇人の人たちが少なくとも摂心のある期間坐禅
をし、その中の半数以上の人たちが全ての行事に参加
した。

ポーリン・ベッチーは今まで独参で鈴木に重要なこ
とは何も話したことはなかった。彼女は、森の中で木が
倒れ、その音を誰も聞かなかった場合、それは音がし
たのでしょうか、というような理論的な質問をした。
「それは問題ではない」と彼は答えた。

ポーリンは摂心で坐禅をした。脚の痛みはすっかり
彼女を参らせた。模範的な男の妻であることは、容易
なことではなかった。グレアムは鈴木が突然予期しな
いで行う特別長い坐禅の時間でさえも、決して動かな
かった。これに反し、ポーリンはただ悲鳴を上げない
でその日を過ごすことだけ心をかけていた。彼女は部
屋の真ん中に坐っていたので、彼女の正面には壁では
なく通路があつた。彼女が特別苦しくなった瞬間に、
鈴木が自分の正面に歩いてくるのが見えた。彼の足か
何かが彼女に当たった。彼女は彼がゆっくりと歩み去
るその両足をじつと見つめた。そのとき、静寂が彼女
に訪れた。やがて痛みは去っていった。もはや痛みは
問題にならなくなった。心の中の騒々しさは去つた。
経行のために立ち上がり、彼女は仲間の生徒たちを初

めて見るかのように部屋を見回した。そして彼らが皆いかに世俗のつまらぬ雑事に捕らわれているか、を実感した。彼女は部屋の全ての者たちに愛情を感じた。彼女は鈴木を眺め、彼が迷妄の領域ではなく、苦惱から解放された領域で、生徒たちと結ばれていることを感じた。

そのすぐ後で彼女は独参で彼に面会した。床に坐り三回礼拝した後で、彼に向かい坐蒲に坐った。しばらく呼吸を整えた後で、彼女は、永遠の悟りの暗示を得たと確信した経験について彼に語った。「素晴らしい」と彼は答えた。「あなたは深い坐禅の境地に到達したのだ」

撰心の最終日に行われた在家信者の授戒式で、鈴木について一年以上修行した生徒たちは、戒律と法名を授けられた。山田は一五枚の絡子を持ってきた。これはちょうど必要な枚数だった。桑港寺にやって来た順番に一人一人進み出て、布製の絡子と祖師の法系を記載した系譜を受け取った——系譜は、上質の和紙に、仏陀にまで遡る祖師たちの名前を記載したもので、折り畳んで鈴木が筆で表書した上質の和紙の封筒に入れていた。ベツティとデラは系譜の一行目に記載されていた(ジーンは日本にいた)。グラムとリチャード

は最終行であった。彼らはちょうど一年前にやって来たのであった。

その日は鈴木にとって快い一日であった。それは西歐において、彼が経験した仏教を確立するための努力のさらなる小さな一歩であった。儀礼は日本語で執り行われた。これは生徒たちには理解できなかったが、鈴木は彼らが「教えられた生活を続けるといふ誓願をする」ことだと説明した。彼は生徒たちの新しい法名の意味を説明した。デラは引き続きデラと呼ばれるが、彼女はまた今は、禪道貞純大姉(Marjorie Dagen)という長い名前で、それは「禅の道、信仰、純化された自然」を意味する文字で構成されている、と彼は説明した。得度の前にデラは鈴木に、彼女がルーテル教から受けた教育は捨てないと告げた。「私はクリスチャンの仏教徒になるだろうと思う」と彼女は言った。「それは構わない」と鈴木は答えた。

鈴木は焼津の彼の寺で行われた授戒式に岸沢とともに参列したときと同様に、後部の席に坐った。彼は年上の山田に上席を譲った。それが適切であったからである。彼は総監であった。こうして、アメリカには真面目な生徒たちがいるという噂が日本に伝わった。彼は義務的ではあったが手助けとなった山田の支持に感

謝した。生徒たちにとってほかの僧侶に会い、話を聞くことは有益であった。「いろいろな教師から教示を得ることは大変喜ばしいことです」と彼は言った。

「私たちにはさらに多くの教師が必要なのです」

摂心の期間中に、一通の手紙が州務長官から届いた。禅センターの非営利的な地位を正式に認める、というものであった。彼らはその年ずでにおおよそ五〇〇〇ドルの寄金を得ており、五〇〇ドル以上貯蓄していた。この金は建築資金に当ててる予定であった。授戒と法人組織は鈴木にとって重要なものではあったが、彼は自分の教えを確立するために、本当に必要なものは何かということの説明をした。

あなたたちが坐禅を修行する方法を知らなければ、誰もあなたたちの手助けをすることはできません。大雨は根が出ていなければ、小さな種を洗い流してしまうでしょう。あなたたちは根のない胡麻のようであってはなりません。さもなければ、あなたたちの修行は洗い流されてしまうでしょう。しかしもしあなたが本当によい根を持っていれば、大雨は大いにあなたたちの助けになるでしょう。

生徒たちの中には、なぜ組織や授戒式が必要なのかと質問した、フィリップと同じように感じていた者もいた。「それはカトリック教会のようなものだ」と鈴木は言った。彼の考えがいかに真実に近かったかということに、彼はほとんど気づいていなかった。曹洞宗は日本では階級制度と儀礼で溢れている。しかし個々の寺や僧侶の自主性を考慮し、意思決定についての檀家の役割が増大していることを考えれば、バプティスト教会の方がより似ていると言えるかもしれない。

鈴木は、こうしたことが、日本ではどのように行われているかを彼らに示さねばならない、と言った。なぜならそれは彼が知っていることだからである、と。彼は禅センターを自分が満足できる方法で設立せねばならなかった。性急に行ってはうまいかない。いつの日か、生徒たちは彼ら独自の仏教の形態を作り上げるであろう。「仏教をアメリカに伝えることはそれほど単純ではない。あなたたちはいつか自分独自の道を確立することができるでしょう。しかしまず私の道を勉強しなさい。あまり急ぎ過ぎてはいけません。それはフットボールをパスするようなわけにはいかないのです」

旅 1963-1964

CHAPTER 13 Journeys

私は日本で学ぶことができなかった
多くのことをアメリカで学びました。

あなたたちも

アメリカで学ぶことができない

多くのことを、

私たちから学ぶであろうと思います。

こうしてごまかしのない

率直な方法で修行を続けるならば、

私たちの努力は

大きな成果をもたらすでしょう。

I have studied many things in America

that I could study in Japan,

and I think that you will study many things from us

that you could not study in America.

*In this way our effort will bring some result,
if we keep our straightforward way in practice.*

一九六三年四月、鈴木は講話を含めた日曜日の寺の責任を加藤に委ね、三ヵ月間日本に帰国した。彼がアメリカに渡ってからほぼ四年が過ぎていた。故国の日本では、彼の子どもたちは直ちに、彼に変化が起こったことを認めることができた。彼は以前より遙かにくつろぎ、親しみやすくなっていた。彼らはアメリカが彼に与えた影響を好ましく思った。包一は数年間永平寺に滞在していたが、父と圃法の式を執り行うために、永平寺から会いにやってくる。彼は自分の部屋がすっかり清掃され、整頓されていることに気づいた。「誰がしたんですか」と彼は尋ねた。「私がしたのさ」と父親が答えた。以前だったら彼は包一を叱りつけ、自分で掃除をさせたであろう。

安子は二つの幼稚園の運営に当たっており、古くから勤めていた大勢の教師たちは、彼女の父親が帰ってきて、かつて母鳥のように慈しんできた幼稚園を訪問

することを楽しみにしていた。彼は精神病院におほみを訪ねた。彼は曹洞宗宗務庁で旧友の義道に会い、アメリカ人の生徒たちを永平寺に送る計画について話し、また、アメリカに来て彼の手助けをしてくれる僧侶はいないかと尋ねた。彼は、戦時中から親しかった高草山グループの学生たちと会って、アメリカで得た生徒たちの誠実さと献身的な態度を彼らに語った。

彼が指示すれば断崖から飛び降りる生徒たちもいると語った。——もちろん、彼らは飛び降りる前になぜかという質問はするだろうが。鈴木は、英語は、微妙な情緒的な違いを示す能力には欠けるところはあるが、日本語よりもより直接的で、教えを説くには容易であることがわかった、と話した。ときおりアメリカの日系人のお寺で説教をしているとき、何かを理解させるために英語で話したいと思うことさえあると彼は語った。

彼は檀家の人たちにアメリカでの仕事について説明したが、ほとんどの人たちは彼がなぜ引き揚げてこないのか理解できなかった。しかし、天野は理解した。「加藤弘造が言ったことは正しかった」と彼は言った。「あなたはアメリカの土になろうとしているのだ」

ジーン・ロスが僧衣を持って林豊院にやって来た。

かつて可睡斎の住職だった頃、鈴木が補佐したことがある永平寺の貫主、^{高階}老師が彼自身の弟子としてではなく、鈴木の弟子として彼女に授戒した。彼が授戒の儀礼を執り行ったので、彼女は禅堂で他の僧侶たちと一緒に坐禅をすることができた。彼らは、それが彼女を男性に転換するための儀礼と見なしていたようだ、とジーンは語った。

彼女は女性として僧侶たちと常時共に修行することはいまだ許されなかったが、許される限りにおいて、恐らく関連のあることは全て試みたであろう。彼女は自分の権利には固執し続けた——例えば、頭を剃ることは拒否した。しかし彼女は堅実かつ明敏な女性で、僧侶たちの尊敬を集めた。

ジーンは日本人の教師たちと心の通った交流をした。「事実、彼らはアメリカの私の友人たちや家族さえも及ばぬほど私をよく知っているように思われる。なぜなら永平寺にはそのような活力に溢れた生活があるからだ」

彼女はまた總持寺を訪ね、藤本隣道師の寺に滞在して彼について坐禅を学んだ。藤本は、鈴木の友人でケンブリッジ仏教協会を創設したエルシー・ミッチェルの師であった。藤本とミッチェルは彼の書いた小冊

子、「禪の道」を英訳して出版した。この本は当時アメリカにおいて、増永靈鳳の「禪に対する曹洞の取り組み方」(Solo Approach to Zen)以外で、唯一入手できる曹洞禪に関する本であった。禪センターの者たちは誰しもこの本を読んだ。鈴木はこの旅行の途中、藤本も訪ねた。彼は鈴木が交流を続けていた数少ない友人の一人であった。

藤本と坐禅をしていたとき、ジーンは彼女と周りの全てのものとの境界が取り除かれた経験をした。彼女は完全に圧倒され、話すことができなかつた。数日後、藤本は、彼女に坐禅中に経験したことについての報告書を書かせた。「あなたの仏性を示していただきありがとうございます」と彼は別れる際、彼女に言った。

ジーンと鈴木は、彼女が出会った者で、アメリカに招聘するのにふさわしいと思われる僧侶たちについて話し合った。永平寺で彼女の師であった立髪良泉老師は西洋人に対してオープンであり、また曹洞宗宗務庁の国際課に片桐大忍かたがひがおり、彼女の手助けをしてくれた。彼はある程度英語を話し、アメリカに行くことに興味を持っていた。一九六三年七月三日、鈴木とジーンは空路サンフランシスコに帰った。そして六日に彼らの帰国を祝うパーティーが開かれた。

小さな心 (スモール・マインド) の中
大きい心 (ビッグ・マインド) の中に
正しい場所を見つけたときに、
安らぎがあります。

*When small mind finds its correct place in big mind,
there is peace.*

朝鮮戦争が休戦してから一〇年後、アメリカは東南アジアにおけるもう一つの紛争に突入していくように思われた。鈴木は平和に対する誓いを放棄したわけではなかつたが、彼はアメリカにおいて、平和について滅多に発言しなかつた。その必要性もあまりなかつた。彼の生徒たちも、禪センターを取り巻く地域社会も——とりわけUCバークレイの大学院で、アジア研究に取り組んでいたリチャード・ペーカーは——一般的には平和主義者で、世界の情勢をよく認識していた。しかし一九六三年に起こったある特殊な事件が、鈴木と彼の生徒たちを強く揺り動かした。

一九六三年の七月、ベトナムの仏教僧クアン・ドックが、彼の地においてエスカレートする戦争に抗議し

焼身自殺した。彼の死はベトナムにおける抗争の恐怖を照らし出した。七月二八日にクアン・ドックの追悼式が桑港寺で行われた。「ウインドベル」は報じている。「ベトナムの一学生が私たち信徒に呼び掛けた。

禅センターのメンバーからアメリカ政府に対し、南ベトナムにおける仏教徒のさらなる迫害を阻止する行動をとるよう要請する手紙を送る予定である」。その僧侶が坐禅をし、燃え、倒れ、それからまた炎の中で起き上がり、真つすぐに坐り直し、最後に倒れるイメージを誰も忘れることはできなかった。

一〇月に、永平寺の眞首高階瓊仙（まづせ）が平和のための世界一周旅行の一環としてサンフランシスコに来了。彼は乙宥のアパートで、鈴木が日本から持ってきたランサム女史の絹の布団に寝た。桑港寺で高階老師は世界平和を祈願する法要を行った。鈴木は今世界平和が曹洞宗の議題になったことを知り喜んだ。しかし、三〇年代、四〇年代に彼らがあればど熱烈に軍国主義を支持しなかったのであれば、なおさらよかったのだが、と彼は言った。

鈴木は世界平和を支持する生徒たちがいることを嬉

しく思ったが、彼らが日本人会の人たちと仲よくやっ
ていくよう、またときと場合によって、お互いの間で
もうまくやっていってほしい、と望んだ。彼の最も熱
心な二人の生徒、ビル・クワンとリチャード・ペー
カーが、彼の日本滞在中に仲違いをした。ビルは静い
を処理できず、桑港寺に来なくなった。彼はミルヴァ
レーに移り、そこで毎朝坐禅をした。いったん鈴木が
帰ってきてからは、ビルは土曜日と瞑心に来るようにな
った。

* * *

肉体的苦痛には限界がありますが、
精神的苦痛には限界がありません。

*There is a limit to physical pain,
but there is no limit to mental pain.*

八月とともに七日間の摂心がやってきた。一日中坐
禅をすることは、誰にとっても忍耐力の試験のようであ
った。その上不確実性という困難が加わった。鈴木
はときおり摂心の間、坐禅の時間を延長した。坐禅の
時間は通常鐘と鐘の間の四〇分と決まっていた。坐禅

* 原著では終戦となっているが、一九五三年より現在まで休戦状態が続いている。

の間に行われ、ゆつくりと歩く経行といわれる歩行の時間は一〇分であった。鈴木は早朝の、坐禅—経行—坐禅を九〇分間動かずに坐り続けるように変更して振心を始めた。ある者は巧みに順応した。呼吸を調べ、呼吸を数え、赴くままに任せ、苦悶はしなかった。他の者たちは苦痛に喘いだ。

鈴木は振心の講話の中で、鐘を心待ちにするな——ひたすら坐りなさい、と生徒たちに話した。振心の間生徒たちは必ず痛みを経験する。それは主に脚の痛みであるが、ある者は背中に痛みを感じる。特別長い坐禅は特別の苦痛を伴う。ほとんど全ての日本の禅仏教徒の重要な修行の一つは、肉体的な苦痛とともに静かに坐ることを学ぶことである。「あなたたちは苦痛を歓迎しなければならぬ」と鈴木は言った。「苦痛とともに坐りなさい。痛みはあなたたちの師である」生徒たちの多くは独参で痛みについての経験を彼に語った——肉体的な痛みを超越すること、痛みはまだ残っていても苦痛とは感じなくなる、あるいは、感電したような気分になり至福すら感じる、といったようなことについて。彼らが肉体的な苦痛だと思っていたものが、実は精神的な苦痛であったということを実感した、もしくは苦痛に身を任せれば、肉体的な苦痛も

精神的な苦痛も同時に去っていく、ということについて。ある人たちは通常四日目までには脚の痛みにも慣れてくるのであった。鈴木はいつも、三日目が最も辛い目だと言い、彼も坐禅中には痛みを経験しているのだ、と生徒たちに思い出させた。

八月の摂心期間中の異常に暑い日、鈴木は、午後の坐禅を始める合図の鐘を鳴らした——二〇人の人たちが身体を真つすぐに伸ばして坐り、息を吸い、息を吐いていた。彼は立ち上がり、警策を持って歩き回り、背中の曲がついている者に対しては静かに押して真つすぐに直し、ある者には肩を所定の動作（警策を片方の肩に置き、彼らが合掌するのを待つ）によって警策で叩いた。彼は坐蒲の横に警策を戻し、坐禅をせずに禅堂を出て事務所に向かった。それから坐禅の終了予定の時間の約一〇分後に、彼は静かに禅堂に戻ってきた。誰もが足音を聞き逃さなかった。そして誰しも、彼が坐禅の終了を告げる鐘を鳴らすことを待ち望まないわけにはいかなかった。しかし足音はホールの出口に向かった。彼は部屋から出た。彼が階段を下りる足音が聞こえてきた。正面のドアが開いてまた閉じた。生徒たちはそのまま坐り続けた。ブッシュストリートでは車が

信号機に合わせ波状に坂を上っていった。事務所の時計はときを知らせて鳴った。管理人がバルコニーを歩き回り、台所に入って、水を流す音がした。彼らは坐り続けた。グレアムは鈴木が彼らのことを忘れてしまったのではないかと心配した。他の人たちは脚がちぎれ落ちてしまうのではないかと心配した。

一時間後、鈴木のかな規則正しい足音が階段を上ってきた。生徒たちは死にそうだと思った。ほとんどの者は一度ならず何度か動かすにはいられなかった。荒い息を吐いている者もいた。彼は部屋に入った。彼は予定を印刷した紙を混ぜたり、重ねたりしていた。予定を確認していたのである。間違ひなく彼はすぐに鐘を鳴らし、坐禅は終了するはずであった。そのとき、禅センター史上、最大の失望の一つに数えられる瞬間がやってきた。鈴木はドアから出て自分の部屋に上って行ってしまった。最後に彼は戻ってきて、さらに多くの紙をばたばたさせ、自分の坐蒲に坐り、さらに途轍もなく長く感じられた時間が経ち、やっと撞木を取り上げ、小さなブロンズの鐘を鳴らした。一同は安堵の笑いを爆発させた。二時間半が経っていた。生徒たちは脚を伸ばして擦りながら、声を殺してうめいた。

それは私の先生が私にしたことです。恐らくときどきは忘れていたかも知れませんが、私はそれほど気の毒には思いませんでした（笑う）。私は時計を見て考えました、ああ、少し長すぎたが、もう一時間延ばしても問題はないだろう、と。

* * *

あなたたちが何ものかを求めている限り、

眞実の影を理解するだけで、

眞実そのものを理解することはできない。

*As long as you seek for something,
you will get the shadow of reality and not reality itself.*

一九六三年八月のある日の夕刻、鈴木俊隆はグレアム・ペッチャーを僧侶として得度した。これはアメリカで鈴木が行った初の僧侶の授戒であり、それまでに行った彼の二番目の授戒であった——最初に授戒したのは息子の包一である。彼はグレアムに、「徳に溢れている」という意味の徳潤とくじゆんという法名を与えた。グレアムは、永平寺の秋期の修行に参加するため九月一四日、日本に発つ予定になっていた。彼は僧侶たちとともに坐禅をし、食事を取り、宿泊するために授戒を受

ける必要があったのである。

夜の一〇時に、グレアムは薄明かりの灯された禅堂の祭壇で、鈴木の前に跪いた。彼の妻、ポーリンと奥さんだけがそこに立ち会っていた。式は長くはかからなかった。グレアムには何が起こっているのかさえもわからなかった。鈴木は何も説明しなかった。グレアムは衣を受け取らなかつたし、頭も剃られなかつた。鈴木はただ剃刀を彼の頭の上で揺り動かして、日本語で読経した。ポーリンにはそれが秘密の儀式のように思われた。それは公表されなかつたが、彼女にはその理由がわかっていた。他の生徒たちが授戒や永平寺に行くことを要求していたからである——彼らは衣を着て、異国の地に行くことを切望していた。グレアムは鈴木に対し、また仏教に対し献身的であり、グループのため、日本で修行を経験すべく、派遣されることになったのである。彼は将来、鈴木の法系に連なる指導者になるように養成されていたのである。

グレアムと加藤の送別会が九月九日に行われた。グレアムは三カ月間日本に行く予定であったが、加藤と彼の家族は、ロサンゼルスに移ることになっていた。

彼はロサンゼルスの日本人街にある禅宗寺で、山田総

監の非常勤補佐役を務めることになっていた。山田は英語を話すことができなかつたので、通訳として彼の助力が必要だとし、たびたび彼に要求した。加藤はUCバークレイでの教職を辞任し、カリフォルニア州立大学の教授の職に就いた。彼はベイエリアに滞在した一一年の間に、アメリカと桑港寺において、禅が劇的な変遷を遂げてきたことを目撃してきた。確かに彼はそれに積極的に関与してきた。鈴木は彼が日本人会およびアメリカ人生徒たちに対し、尽くしてくれたことに感謝した。「彼は私がこの国に来たとき、私のために全てのドアを開き、非常に多くの人たちを紹介してくれた。加藤博士がいなければ、どのような状況になつていたかわからない」と彼は言った。一恐らく私はいまだにここで、一人で坐っていたでしょう」

ポーリンは、常に鈴木の世界では万事がうまく運んでいると思っていた。しかしグレアムを飛行場で見送つたとき、彼女は突然不安に襲われた。グレアムは特別の準備も指示もなく、未知の世界に行こうとしていた。そして鈴木はいささかの懸念も示していなかつた。

一カ月が過ぎ、グレアムからの手紙で判断する限

り、唯一役に立つ準備は、日本の寺に生まれることであるかのように思われた。グレアムに内緒で、ポリーンは定期的に鈴木を訪ね、グレアムが永平寺で書いた手紙を読んだ。頭に毛のなくなった夫の写真を見て彼女は動揺したが、さらに気がかりなのは彼が経験していた厳しい時間のことであった。包一が最善を尽くし、グレアムの世話をしてきた——彼は永平寺の近くの福井の駅でグレアムを出迎え、彼の衣を買うために店に連れて行った。彼は厳しい入門式の旦過寮たんがうきょうでグレアムの世話をした——一週間食後の休憩時間以外は、終日坐禅をした。グレアムは旦過寮では別に問題はなかった。坐禅は永平寺での彼にとって問題ではなかった。

ジーンと同様、グレアムは直ちに、禅堂における僧侶たちの修行の長であった頑丈で友好的な立髪によって心を温められた。しかし包一も立髪も、その他の全ての問題に対処する十分な手助けをすることはできなかった。彼は数世紀も前の世界に放り込まれたように感じた。彼にはジーンよりも多くの厳しい要求が課せられた。ジーンは個室を持ち、四〇代後半の女性として、より多くの活動の余地を与えられていた。

グレアムは十分な食事もなく、食事を取る時間もな

いと書いてきた——彼は僧侶たちのスピードについていけなかった。彼らは全てを非常に敏速に行った。僧たちは禅堂で、坐禅をした同じ場所で食べ、そして眠った。約一八三センチの身長の身長のグレアムは、彼が寝た約一八〇センチの畳に合わせるには、身長が高すぎた。彼の頭は神聖な食卓の上にもで延びた。僧侶たちはこれを無礼だと言った。彼は脚を切らなければいけないのかと反問した。

グレアムは、彼がローマで経験したと同じような幻滅を永平寺で味わった。若い僧侶たちは肉の缶詰を持っていた。ほとんど全員が休憩時間中に、強いタバコのピースを吸っていた。彼には多くの僧侶たちが、傲慢で、無思慮で、偽善的であるように思われた。多くの儀礼や義務的な仕事があったが、鈴木の教えの中心であった坐禅は、あまり重視されなかった。ある僧はつまらぬ言い間違いを捕らえ、本気で彼を困らせようとした。彼は栄養不良になり、二回入院した。彼は家族を恋しがり、言葉の障壁は気が遠くなるほどであった。それは新兵の訓練所のようにであった——精神的な鍛錬ではなく、肉体的な困難だけが多かった。概して言えば、彼は自分を正気に保つことだけを心がけていた。

鈴木はボーリンに、夫が経験している風邪や飢えや失望は修行中の新参の僧侶にとつては普通のことである、と夫に手紙を書くように勧めた。禅堂にいるときと同様に、鈴木の状態は同情的ではあったが厳しいものであった。鈴木もまたグレアムに激励の手紙を書いた。一九六三年一〇月二二日付けで彼は次の手紙を書いている。

親愛なる徳潤様

あなたの健康が思わしくないと聞き、お気の毒に思っております。しかしそれは心配することではありません。というのも、永平寺の僧堂に入つた者の多くは病気にかかり、福井の病院に入院するからです。そして退院後は皆、以前より元氣になつています。実際のところ、三カ月という期間には充分ではありません。それは最初の一カ月が無為に過ぎてしまうからです。どうか気持ちのうえでは、一〇年間そこに留まって、僧堂の生活に慣れるつもりでやってください。しかしあなたの生活様式と日本人の生活様式との違いは大変大きいので、あなたが日本の様式に合わせることは難しいかもしれません。どうかリラククスしてできる

だけのことをやってください。たとえあなたが信心を済まさないで帰国したとしても、日本に行かなければできなかった多くの貴重な経験をしたのだと私は思います。まず、あなたが永平寺に行く決心をしたときに示した誠実さは、最も賞賛すべきものです。そして私はあなたの夫人ボーリンがあなたの渡航そして勉学を理解し、支援したことを非常に嬉しく思っております。

私は監院の佐藤師にあなたによい助言をしていただくよう手紙を書きましたので、あなたが困ったときはどうしたらよいか彼に尋ねてください。彼は最も親切で思いやりのある人間です。

仏教を研究することは、私たちの終生の仕事です。あなたが煩つている出来事をあまり気に掛けないでください。それがよいことか悪いことかは誰にもわからないのです。私はあなたがあなたにとつて最も大切なことを学ぶであろうと思つています。

あなたの夫人はいささかも落胆しておりません。

敬具

鈴木俊隆

追伸、もし私の息子に頼み事があれば、遠慮なく申し付けてください。

鈴木は、グレアムが一二月に行われる永平寺での一週間に渡る辛い摂心をやり遂げることができるとどうか、疑問に思っていたが、坐禅をすることと文化の違いには事実上関係はないので、グレアムがベストを尽くすことができるよい機会であった。彼は全期間動かずに結跏趺坐で坐り通した。それは彼にとって、彼が永平寺について抱いた全般的な幻滅感を清算し、彼の挫折感を和らげる素晴らしい経験であった。摂心についての手紙は、ポーリンと鈴木に、ついにグレアムが永平寺で安らぎを見いだしたことを確信させた。

グレアムは一二月中旬サンフランシスコに帰った。鈴木は、ポーリンからすでに諸々の事情をよく知らされていたことを隠すために、彼が日本での経験を否定的に語るのを聞いてショックを受けたように見せた。彼はグレアムに在家信者のように修行を続けるよう、また法衣は摂心の期間以外には禅堂で着ないように、と告げた。結局彼は化学者としての規則的な仕事に戻るようになった。グレアムには、鈴木が禅センター

を、彼が永平寺で経験したような極端な祭式主義や形式的な行為に移行することを躊躇しているのがわかった。以前にも増して、彼は師の憤まじさと寛大さに感謝した。鈴木は、グレアムとジーンに日本で禅を学んだ経験について、水曜日之夜講話をしてもらいたいと言った。「否定的な経験ではなく」と彼は言った。「よい点だけを」。彼は決して不平を好まなかったし、生徒たちを落胆させたくなかった。

グレアムは今では新参の僧侶になっていた。鈴木は多少彼には厳しくなった。ある土曜日の朝、グレアムが一日半の摂心の開始時刻に遅れてきた。朝食後、鈴木は事務所で彼を叱りつけて言った。「僧侶は遅刻しないものだ！ あなたは僧侶ではない！ あなたにお袈裟をつける資格はない！」。グレアムは屈辱を感じ、お袈裟を脱ぎ始めた。「あなたは何をしているのだ」と鈴木は言った。「誰もあなたにお袈裟を脱ぎという権利はないのだ」

* * *

私たちにとっての公案は
何千とありますが、

ただ坐禅をすることは

全ての公案をも包含するものです。

これは悟り、解放、解脱、涅槃その他
どのように表現しても、

これらに到達する直接的な道なのです。

*There may be thousands of hours for us
and just to sit includes them all.*

*This is the direct way to enlightenment, liberation,
renunciation, nirvana, or whatever you say*

鈴木は緑なし眼鏡を掛け、何時間も本を読んだり原稿を書いたりした（彼は眼鏡をなくさないように身体に縛り付けていた）。

「方丈さん」と奥さんが言った。「あなたはなぜそんなに一生懸命に講話の準備をしているの。雨が降っているわよ、昨晩は雨が降って二人しか米なかったじゃないの。今夜一〇人も来たらと願っているわ」

「一人だろうと一〇人だろうと変わらないさ！」と彼は怒鳴った。

「そうですか、それじゃあ、もう心配はしないわ」

二、三年の間、鈴木は臨済宗と密接に関係する、

禅の公案の主要な収集書の一つである、ブルー・クリフ・レコード（『碧巖録』）についての講話を行ってきた。通常水曜日に行われたこれらの講話は、彼が日曜日に行っている、より砕けた講話に比べ、一部の生徒たちにとっては難解なものであった。碧巖録には百の公案が収録されており、彼はこれらの公案を一つ一つ採り上げていった。「ウインドベル」はそうした講話のいくつかを抜粋して掲載し、鈴木はそれに自分で書いた注釈を付け加えた。

碧巖録からの本則第四六

禅センターの師匠、鈴木老師による注釈

挙す！鏡清が僧侶に尋ねた。「戸外の音は何か」。僧侶が答えた。「雨垂れの音でございます」。鏡清は言った。「全て知覚あるものは、自己の觀念および外部世界の觀念によって主観的ないし客観的に惑わされる」

——注釈 鏡清は、主観的な世界における客観的な雨垂れの音に捕らわれていないと考えていた、その僧侶の本質を見抜いたのである。

僧侶は尋ねた。「貴僧はいかがでしようか」。鏡清は答えた。「拙僧はおおむね自己に惑わされてはいない」

——注釈 鏡清はただ雨垂れの音を聞いていただけである。そこには雨垂れ以外何物もない。

僧侶は尋ねた。「貴僧がおおむね自己に惑わされることはないと言われたのはどのような意味でしようか」その僧侶は、鏡清がなぜ自己に惑わされていないと断言しないのか、意識の中ではつきりと雨垂れの音を聞いていると言わないのか、理解できないのである。

鏡清は言った。「客観的な世界から離脱することとは困難ではないが、あらゆる状況に適應する真実を充分に表現することは困難である」

(ここで鈴木自身の手で以下のことが記されている)

その僧侶に三〇の割打を与えよ！

あらゆる状況に適應する真実を十分に表現することは困難である！

自己の上に自己を定着すべし。

Search the Self in the Self

片桐大忍は、スクーターに跨り、衣の裾と袖を風になびかせながら、桑港寺への道を騒々しい音を立てて走っていた。彼は風の中でしっかりとハンドルを握り、歯をむいて笑った。鈴木はついに補佐役を迎え入れたのである——永平寺で修行を受けた僧侶で、しきりにアメリカに行きたがっていたことをジーン・ロスが認めた僧侶である。今はそこに新しい光った頭をして、オリブ色の肌の、黒と茶色の衣を着た、親しみのある、勤勉な仏弟子が坐禅の生徒たちや檀家の人たちに奉仕していた。

片桐は、元々ロサンゼルスで禅宗寺の手助けをさせるために山田総監が呼び寄せたのである。山田は片桐に、彼の下にいる日本人僧侶の育成計画や、英語を話す檀家や客人の世話に関し、彼の手助けをさせようとしたのである。禅宗寺は桑港寺より遥かに大きく資金も豊富であり、山田の下には、前角やパートタイムの加藤を含めて、彼を補佐する数人の僧侶がいた。片桐

はとりあえず加藤の家族とともに滞在した。彼はそこの人たちを気に入っていたが、寺の環境には我慢できなかった。彼にとつて、禅宗寺は日本の寺よりもさらに古風で閉鎖的でさえあった。彼は欧米人や、彼と一緒に修行をすることのできる人たちとの接触がなかったので、事実上サンフランシスコに逃亡し、そこでイル・ブライスの折衷派仏教センターに滞在した。一週間後、ブライスは彼を伴って鈴木に会い、鈴木は山田総監と交渉し、片桐を正式に桑港寺に移転させる手はずを整えた。これが、鈴木が補佐の僧侶をついに獲得した経緯である。

片桐は二階の事務所に机を与えられ、遠い将来手に入れる予定の日本人の新しい寺の建設資金を集める手助けをするよう依頼された。瞬く間に日系アメリカ人に気に入られた彼は、日系人グループのゆつたりした形式張らないやり方が気に入った。しかし鈴木と同じように、彼が最も興味を持ったのは坐禅グループであった。間もなく彼は、毎日遅れてくる人たちや、摂心の期間中禅堂に入りきらない人たちのために禅堂を改装し、バルコニーの坐禅の席を拡張する仕事に加わった。大勢の生徒たちが、手のすいている時間にと

の仕事を手伝った。フィリップは床を磨き、ベッティとデラは壁を塗装した。片桐も加わって熱心に、ときにはいささか不器用に働いた。彼は鈴木や熱心な生徒たちと一緒に過ごすことでとても気持ちちが和らいだ。

片桐は、日本に戻った妻や息子が近くにいないことを寂しく思ったが、孤独ではなかった。彼が最初に得た友人は、鈴木が一番古い生徒の一人で、数ブロック先に母親と一緒に住んでいた、ポール・アレクサンダーという名の男であった。彼は片桐が望む限りいつまでも無償で彼の住居に住むように、と誘った。通常は物静かではにかみ屋のポールであったが、片桐には心を開くことができる気がした。片桐はどのようにしてポールが一九六〇年に禅の師匠と禅寺を求め、サンフランシスコにやって来たか、どのようにして彼は六カ月間、誰にも尋ねずに町を歩いて探し回り、ある日偶然桑港寺の傍らを通り過ぎたのか、ということを知った。そのとき、ポールは檀家に対する布施として、演壇の裏に据え付けられていた由緒あるオルガンを修復していた。彼らが売ることができるようになるためである。毎朝、朝食を済ませた後で、彼は片桐を乗せてスクーターを運転してやって来た。ポールとともに住み始めてから一カ月後、片桐は寺の向かい側

にあったアパートの、乙宥の部屋の隣の小さな一室に移った。乙宥はシティーカレッジに在学していた。彼と片桐は、英語に依存しなければならぬ社会で生活することの難しさを、お互いに同情し合った。

片桐は食事の心配をする必要はなかった。彼はしばしば夕食の招待を受け、桑港寺はいつでも彼が食事に来ることを歓迎していた。ペッチー夫妻は早速彼の世話を始めた。夫妻の所に移ってきたポーリンの母が、彼に観音像をくれた。萩原家は彼に家具を与えた。イル・プライスは彼の様子を見に立ち寄った。「サンフランシスコに来て、ブッシュストリートで暮らすことは何と気が休まることだろう」と彼は言った。「この人たちはみんなすぐ親切なんだ」

鈴木はと言えば、彼は直ちに片桐が誠実な僧侶であることを見抜き、最高の尊敬をもって彼を遇した。主としてそれは、鈴木が大量の仕事を彼に与え、彼の裁量に任せていたことに現れていた。彼らはお互いあまり話はしなかつたが、無言の修行という素養と知識を共有していた。

生徒たちは新しい僧侶を、片桐師ないしは片桐先生と呼んだ。掃き掃除、拭き掃除、歩いて店に行くことなど、彼は自分のすることは何事にせよ、熱意を込め

て行った。そして彼は禪堂にいるとき以外は、誰に対しても温かい無邪気な微笑を浮かべていた。禪堂にいるときは、彼の顔は決然とした真剣味を帯び、ほとんど睨み付けているように見えた。

片桐家は別宗派の仏教、浄土真宗を信仰していたが、彼は戦争中麻酔を使用せずに腹部の手術を受けたことを含め、諸々の経験から、また日本降伏後における人生の意義についての喪失感から、曹洞宗そして坐禪に惹かれた。彼は禪センターの生徒たちと同じように禪に転向したのである。彼は苦悩していたので、何らかの安らぎを見つきたいと願い、また彼自身のことや全ての存在物についてよりよく理解したいと望んだからである。

戦後、彼は師匠に会い得度し、永平寺に行った。そして且過寮で覚醒の経験を得て、ますます坐禪への意欲を掻き立てられた。永平寺で彼は、師家として名高い橋本（悪光）老師に仕え、触発された。片桐は、彼の師匠、林大潮の寺であった、永平寺近くの海岸沿いの小さな寺、泰蔵院を任されていたが、ほとんどの時間は宗務庁のある東京永平寺で過ごし、欧米人や客人を扱う仕事をしていった。

片桐は直ちに禅センターに溶け込んだ。お寺の僧侶としての務めをこなすとともに、彼は全ての坐禅の期間中、熱心に坐禅をし、鈴木を補佐してお勤めをし、摺心を勤め、警策を持つて歩き、坐禅の指導をした。鈴木は、彼が逸材であることを承知していた。この外国の地で社会的地位のない貧困の中で生活し、人生の活力を黙々と坐禅に注ぎ、取るに足らぬ仕事をし、埃っぽい老朽化した建物を掃除する、曹洞宗の僧侶が一体何人いるであろう。片桐はいささか日本の水に合わなかったもので、禅を教えるためにブラジルかアメリカに行くことを、長い間望んでいた。彼は三六歳のとき、自分の身の上に何が起ころうかも知らずにアメリカにやって来た。鈴木と同様に、彼は道元の道を修行し、教えたいと願っていた。

ある日片桐は、事務所でタバコに火をつけた。鈴木は窓際に行き戸を開いた。片桐はタバコの火を消し、その後間もなく禁煙した——彼にとっては苦しい経験であった。しかし、ここは鈴木の場合であったので、片桐は彼の先導に従った。

片桐にはある程度英語の知識があったが、桑港寺での生徒たちからの質問や話が殺到してきたので、彼は

英語の集中講義を受けることにした。彼は鈴木より二〇歳若かったので、より付き合ひやすかったのである。彼は鈴木が以前通い、そしていまだにときおり訪れる、パシフィック・ハイツの小さな学校で英語を勉強し始めた。ポーリンや他の人たちがときどき個人的に指導した。

初期のインド仏教では公に話をすることは五つの恐怖の一つと言われた。ある日鈴木が何気なく片桐に、次の水曜日の晩、英語で講話をしてもらいたいと言った。鈴木は素早く学び取り、何事も上手にやり遂げていたように見えた（若い頃のヘビキニウリとは対照的である）。片桐はこれとは反対であった。彼は全て新しい仕事には苦勞して取り組み、カタツムリのようなゆっくりしたペースで覚えた。彼は熱心に一生懸命に取り組んだが、何事も容易にはいかなかった——特に英語については。彼は気の毒なほど不安に駆られ、日夜初めて講話の準備に励んだ。その水曜日の夜、鈴木は奥さんを連れて彼の講話を聴きに現れ、さらに彼を恐怖に陥れた。鈴木が彼を紹介した。生徒たちの中には講話だけ聴きにきた者もあり、彼が誰であるかを知らない者もいたからである。

片桐は、自ら翻訳した道元の独特な禅用語を使い、

情熱を込めて講話を行った。彼は三〇分間講話を続けた。一同は坐って注意深く聞き入った。講話が終わり、彼は鈴木と一緒に部屋を出ていった。ついに鈴木は真の意味で、補佐役を得たのである。片桐は彼の到着が鈴木にとつて、いかに大きな意味を持っているか、あるいは先行き彼にどのような事が待ち受けているのか、考えが及ばなかった。興奮に満ちたときが眼前に広がっていたのである。多くの学び、仕事、奮闘、変革、そして多くの講話が。最初の問題は片付いたが、数週間後には次の問題がやってくるのである。

講話の後でお茶を飲みながら、生徒たちは彼に講話に対してのお礼を述べ、彼の英語を褒めた。彼は謙虚に彼らの賞賛の言葉を交わした。彼は自分の話したことを誰も理解していなかったことには気づいていなかった。

* * *

人間の本性は私たちの修行を励まし、

私たちの修行は

人間の本性の完全な発現を

手助けをするのである。

このようにお互いに助け合い、

お互いに励まし合いながら、
私たちの修行は

どんどん進んでいくのです。

Human nature encourages our practice

and our practice will help our full

expression of human nature.

So helping each other, encouraging each other,

our practice will go on and on.

桑港寺から坂を上ってゆくとすぐ近くに、アメリカにおける浄土真宗の本部、BCA、アメリカ仏教協会があった。BCAは桑港寺より遥かに大きく、裕福なお寺を持っていた。鈴木は、彼らの僧侶の長であった花山（勝友）総長、そして奥さんの茶の湯の師であった、彼の妻と親しくなった。彼女はまた日本における書道教師の免許承認の審査員であった。終生日本文化を学ぼうえでの忠告を得るために、鈴木は彼女の生徒になった。一九六四年初頭のある日の午後、書道の授業の後で、鈴木はこの寺の仏教書店に立ち寄った。恐らくこの書店は日本語と英語の両方で書かれた本を置く、アメリカにおける唯一の仏教の専門書店であった。カウンターの後ろには二三歳の浄土真宗の僧侶、小杭好臣（おぐらこうじ）がいた。鈴木はしばらくその店に留まり、彼

と会話を交わした。

小杭は気落ちしていた。彼は一九六二年暮れ、B C Aで働いたために京都からやって来て以来、ずっとアメリカに滞在していた。最初彼はロサンゼルスに行き、日系アメリカ人のための法要や葬儀を行っていたが、その主席の僧侶と口論をし、意気消沈して逃げ出した。サンフランシスコの総長が彼を引き取り、書店を運営させた。小杭は仏教を充分理解しておらず、人々の質問にも答えられなかった。実のところ彼は自分が仏教の指導者にはなれないと思っていた。彼は伝統と儀式がなじがらめになっていると感じていた。しかし鈴木には、英語を覚えることができなと言っただけで、この問題については話さなかった。白人たちがこの店に入ってきたが、彼は充分に意思を伝えることができなかつた。彼は日本に帰りたいたいと考えていた。鈴木は、小杭の内心の欲求不満と自信喪失を感じ取った。

「私の所に坐禅をしにきませんか」と彼は言った。「あなたのためになるかもしれませんが」

浄土真宗の僧侶は坐禅の修行はしない。それは、個人の努力は何の役にも立たない、と主張する彼らの教義に反しているからだ。浄土真宗は、禅の「自力本

願」に対し、「他力本願」の宗教だと言われている。彼らの最も重要な修行は、彼らは基本的にすでに救われているという理解の下に、阿弥陀仏の名前を唱えることである。鈴木は浄土真宗が好きで、ときどき講話の中でそれに言及していた。

小杭は鈴木が正真正銘の思いやりのある人間だと見て取った。日本で通常見られる、異宗派間の強固な障壁を乗り越えることは、彼にとってそれほど大きな問題ではなかつた。彼の父親の最大の親友は、臨済宗の僧侶であつた。彼らは村で一緒に托鉢に行った。そして彼は自分の息子をしばらくの間友人の寺に送り、そこに住まわせた。小杭は総長に話をし、総長は彼が鈴木と一緒に坐禅の修行をすることを許可した。

間もなく小杭は、桑港寺の禅堂だけでなく台所にもしばしば現れ、鈴木や奥さんと、午後の休憩時間にお茶を飲んだり、夕食に加わったりするようになった。

彼は片桐やデラなどの生徒たちとも友達になった。彼は禅センターに坐禅をしにくる人たちの資質が多様なことに感心した。鈴木に会う前の彼の生活は、極めて陰鬱なものであつたが、今はある種の喜びがあつた。

「ここには面白いことがたくさん起こっている」と彼は片桐に語った。

あるとき若い女性がテニスコートのネットで作った約五センチ角の編み目の服を着て禅堂に現れた。網は入念に仕立てられ、彼女の身体に非常によく合っていた。ただ問題は、基本的には彼女は裸であったことである。彼女は時間前に余裕を持って禅堂に入っていた。鈴木と片桐と小杭は事務所の入口に立ち、彼女が坐蒲の上で身体を曝し真剣に坐っているのを眺めた。

鈴木は片桐に尋ねた。「どうしたらよいだろうか」

片桐は頭を掻いて言った。「さあ、わかりませんよ」
鈴木が小杭を見て言った。「行って彼女と話をしてくれたまえ」

そこで小杭は中に入っていく、彼女に、先生が「坐禅に來ている他の人たちのことを考え、もう少し服を着てもらいたい」と言っていると告げた。

「でも、これが私の一番よい服ですの」と彼女はがっかりして言った。

「帰って別の服を着てから戻ってきてください」と小杭は彼女に言った。

彼女が立ち去った後で、彼らは我慢しきれず、腹を抱えて笑った。

* * *

宗教活動を管理しようとするならば、
ますます基本的な道を失う。

*The more we attempt to manage religious activity,
the more we lose our fundamental way.*

ある土曜日のこと、掃除の時間の終了後、フィリップとグレアムと一緒に禅堂の真ん中で立っていた。鈴木が歩いてきて、茶目っ気があり熱心なフィリップと、洋服を着るために生まれてきたような几帳面で姿勢のよいグレアムの間に立った。鈴木はグレアムを指さして言った。「あなたは全く僧侶そのものだよ」。

そしてもう一方の手でフィリップを指さして言った。「あなたはまるで豚だ」。それから彼は指さしている方向を逆にした、そこで彼の二人の帰依者は叩かれでもしたように、呆然として苦笑いを浮かべて立っていた。

フィリップは鈴木に、日本人はなぜティーカップをすぐに壊れてしまうような薄さで、デリケートに作るのでしょうかと尋ねた。鈴木が答えて言った。「それはティーカップがデリケートすぎるのではなく、あなたが取り扱い方を知らないからだ。あなたは環境に順応しなければならぬのだ、その逆ではない」。彼がしばしばこの点を強調することに気づいたポーリンは

それを穏やかな方法と呼んだ。

一九六四年三月末、奥さんとフィリップの送別会が開かれた。彼らは日本に出発することになっていた。

彼女は数ヶ月間の訪問に、彼は一年間永平寺に滞在するために、鈴木は彼の雄牛を陶磁器店に送り込もうとしていた。しかし彼はまず僧侶にならなければならなかった。僧侶でなければ永平寺の禅堂で修行をすることはできないのである。フィリップと彼の妻J. J. が鈴木の仕事所で坐っていた。

「ここで待っていてください。私は向こうで儀礼を行ってきますから」と言い、彼は一人で禅堂に入ってしまった。

彼が祭壇に向かつて歩いていき、鐘を叩いて読経する声が聞こえてきた。彼は戻り、フィリップの髪を少しつまみ上げ、もう一方の手をV字型にして缺^{かみ}で髪を切る真似をした。彼は机の所へ行き、袋に手を伸ばし一握りのキャンデーを取り出し、彼らの前のテーブルの上にばら撒いた。それから彼らはお茶を飲み、僧侶としてのフィリップの新しい身分を祝った。

フィリップの出発が間近に迫ったある日のこと、彼は鈴木がいつもの晴れやかな様子とは異なり、ひどく

取り乱していることに気づいた。

鈴木はフィリップに古い茶色の鞆を渡して言った。

「これはもう要らなくなった古い衣だ。これを私の代わりに林叟院に持っていき、返してもらいたい」

「大丈夫ですか、鈴木老師」とフィリップが尋ねた。

「ああ、ああ。彼は苦惱の溜息をついた。「私の娘のおほみが……彼女が自殺したのだ」

鈴木の息子の包一が林叟院から電話をしてきた。永平寺で、包一は姉の安子からすぐに帰ってくるように、という連絡を受けた。彼の妹のおほみ、鈴木の三番目の子ども——母親が殺された衝撃からついに回復することのなかった敏感で芸術家肌の彼女は、九年間滞在していた精神病院で首を吊って自殺したのである。鈴木は日本に行かなかつた。桑港寺で葬儀をすることもなく、祭壇に位牌を置くこともしなかつた。彼が乙宥に姉が死んだと話したのは、何か月も経った後のことであつた。

* * *

「訓練される」という言葉は

私たちの修行にとつて適当な言葉ではない。修行は大いなる心（ビッグ・マインド）をもって

いたのは、年を取った男が一人だけであった。あなたは日本に行つて、こうした師を訪ねなさい。彼らは私より遙かに理解が深い。あなたが本当に仏教の意味を知りたいと望むならば、日本に行き、この中の誰かについて学ぶべきだ」

日本に戻れだつて？ 恐ろしいことだ。グレアムは前回はかろうじて生きのびたが、それはわずか三ヶ月の間だけである。しかし一方では、彼は前回の訪問以來彼につきまといつていた挫折感を拭い去りたい、という希望もあつた。今は当時よりも理解が深まつていることは事実であつた。彼は日本語も少し勉強し、当時よりは用意ができていた。

少なくとも、今私が日本に戻れば仲間もいる、とグレアムは考えた。グレアムとフィリップには、際立つた相違点があるにもかかわらず、仲よくやつていた。彼らはしばしば一緒にキャンプに行き、侍映画を見に行つた。

鈴木は片桐についてグレアムに尋ねた。彼を引き続き留めて置くべきかどうか、決断しなければならぬ時期にきていた。もし彼を留めておくとすれば、彼の家族を呼び寄せなければならない。日本人会は、非常

に貧しかった。禅センターは、彼の生活の保証をする気持ちがあるのだろうか。グレアムはそう思った。

鈴木はポーリンに、グレアムが一年間日本に行くことについての意見を求めた。彼女が言うには、彼らには二人の子どもがおり、彼女としては置き去りにされたくはない、と。それが日本では一般的な慣行だとしても、グレアムが家族を連れずに行くことには絶対反対である、と。すぐに、家族揃つて日本に行くことで意見がまとまつた。グレアムは永平寺に、ポーリンと子どもたちと母親は京都に。彼女はパリとローマに住んだ経験があり、日本でもそれに匹敵する大都市に住むことを希望した。

「それでは、家族揃つて日本に行こう」とグレアムは言つた。

「ではこれで決まりだ」と鈴木は言つた。「片桐をアメリカに留めることにする」

その瞬間は、あたかも鈴木が一針一針ゆつくりと、数枚の布切れを縫い合わせ、一枚の布を作っているようなものであつた。グレアムが先生の教えの背景についての感覚を学び取り、彼にとつても西洋にとつても有意義な禅や日本文化の重要な側面を学び取るであろうということは一種の賭けであり、まさに信頼の問題

であった。禅センターは経験を積んだ僧侶を必要としていた。そして鈴木はグレアムがより強靱になり、より実り多い状態で帰ってくることを期待し、彼の果樹園の中の、一番真つすぐに伴びていた樹を一時的に移植したのである。

グレアムが出発する前に、鈴木は彼が日本で訪ねるように、と推奨した六人の禅の老師たちの名前を伝えた。片桐の二番日の師匠の橋本、広く人々から尊崇を集めていた京都は安泰寺の「宿なし」澤木興道、京都近郊の宇治にある道元が最初に開いた寺、興聖寺の「植本勝道」住職とともに、藤本もその表に名を連ねていた。彼らは皆、西有穆山、丘宗潭の系譜に属する僧侶であった。

一九六五年八月九日、グレアムとポーリンは、子どもたちとともに東京に着いた。彼らがまばゆい電灯のきらめく銀座の商店街を歩きながら、グレアムがポーリンに向かって叫んだ。「私たちは何ということをしたんだ！」それは長崎に原爆が投下された日であった。

* * *

あなたたちが

「ちよつと待つてくたさい」というときは、
自分自身の業に縛られています。

あなたたちが

「はい、やりましょう」というときは、
業から解放されているのです。

*When you say "Wait a moment,"
you are bound by your own karma;
when you say "Yes I will," you are free.*

浄土真宗僧侶の小杭は、桑港寺で坐禅を続け、鈴木との奇妙な関係を発展させた。彼らは友人同士のようであった。鈴木が、年配の礼儀正しい檀家の人たちや、儀礼的に一定の距離を保っていた禅の生徒たちに対し、あまり見せなかつた側面を小杭は垣間見た。桑港寺の講堂で侍映画が上映されたときは、鈴木はバルコニーで一緒に鑑賞しよう小杭を誘った。ときどき彼らは大声を上げて笑うので、奥さんが出てきて、階下でお金を払って鑑賞しているお客さまの邪魔にならないよう静かになさい、と彼らに注意した。

小杭は鈴木が持ち物について奇妙な関わり方をすることに気がついた。鈴木は、自分の物はほとんど持っておらず、ほとんど何も欲しがらなかつたように見えた。彼は自分の持っている物は全て彼が必要とする間

だけ世間から借用しているのだ、と言っていた。彼の眼鏡でさえも「疲れて年老いた目」のために、しばらくの間借用できることを感謝する、と言っていた。ときどき彼は所有権についても無造作に扱うことがあった。ある生徒が歩道で二〇ドル札を拾ったがどうしたらよいか、と鈴木に尋ねた。「出してご覧、私がもらっておこう」と鈴木は言い、彼女の手からそれを取り上げた。ときおり、彼は祭壇に供えられた食料品をこっそり持ち出し、それを小杭に与えた。一度、彼が醤油の大瓶をこっそり取り出し、内緒で小杭に渡すのを、奥さんが見つけたことがあった。奥さんは、それを返すよう、彼に要求した。少なくともお盆が済むまで返しておくように。さもないとお供えした人が気づいて気分を害するだろうから、と。それはまだ彼が持ち出すべきものではなかったのである。

奥さんは彼女の夫は決して欲張りではないが、立派な古い陶磁器については別だと言った。小杭はそれを実感することができた。

あるとき、奥さんの友人である関野夫人が鈴木夫妻と小杭を夕食に招待したことがあった。関野夫人と奥さんが台所に入ったところで、鈴木が袖に手を入れて香炉を取り出した。それは韓国の焼き物で、半透明の

薄い緑色の青磁の釉薬が掛かっていた。彼はそれを本棚の上に置いた。小杭に質問されて彼はこう説明した。「この焼き物はとても素晴らしかったので、私は借用せざるを得なかった。もう十分堪能したので、返すときがきたのだ」*

小杭は片桐とも親しくなり、三人の僧侶はしばしば揃って日系アメリカ人社会の行事に出掛けていった。片桐の妻智江が彼らの小さな男の子、蜻彦を連れついに渡航してきた。そして彼らはお寺のネズミのように貧しかった。独身の小杭は妻帯者の片桐よりも、鈴木よりも収入が多かった。彼はそのことについて彼らからかうのが好きであった。メモリアルデーの当日、サンフランシスコ南部のコルマ地区の墓地で、ベイエリアの全日系アメリカ人のための法要が行われた。法要の後で、小杭が片桐に、浄土真宗が財政的にいかに手厚く自宗の僧侶の面倒を見ているかという話をした。片桐がふざけて言った。「ああ、私も浄土真宗の僧侶になっていたらなあ」。すると小杭が言った。「私が最初から禅宗の僧侶になっていたらなあ」と。そして近くに立っていた鈴木を振り向いて尋ねた。「私は禅宗の僧侶になれますか」

鈴木が首を振って答えた。「それはとても難しい」

そこで小杭が言った。「片桐さんは浄土真宗の僧侶になりたいそうですよ」

「それも大変難しい」

「それでは恐らく私たちは僧侶になるべきではなかったのかもしれない」

「それもまた大変難しい」と鈴木が答え、三人は爆笑した。

小杭は相変わらず英語の能力が乏しいことに落胆し、いつも日本に帰ることを考えていた。アメリカ人と意思の疎通を凶れないのならば、なぜアメリカに滞在するのか、と彼は考えた。鈴木はこの点に気づき、ある日小杭にその夜の講話を必ず聴きにくるように、と勧めた。ほとんどの話は理解できないだろうと思いつながら、小杭は後ろの席に坐った。

鈴木が事務所から出てきて、読経が始まった、それから彼は礼拝して言った。*“Good evening (今晚は)”*。まあ、これだけはわかった、と小杭は思った。そして

注意深く次の言葉を待った。鈴木は最初何も言わずに聴衆の前を、前後にゆっくりと落ち着いて歩き始めた。それから彼は、自分に語り掛けるかのように、日本語で静かに話し始めた。彼は *“What can I say (何を話そうか)”* というようなことを呟きながら、準備を整えた。小杭は緊張して見つめた。鈴木は溜息をついて聴衆を眺めた。*“Today はじやな、Today はじやな”*。おやおや、彼は英語と日本語を(こちゃまぜ)にして話している、と小杭は思った。*“Today is やじばり Today”*。彼はさらに歩き回った。*“Today is not yesterday (今日は昨日ではない)”*。それから彼は再び端から端までゆっくりと歩きながら言った。*“Today is not tomorrow (今日は明日ではない)”*。正面の席に坐っていた長髪の若い男の前で立ち止まり、彼はその男の肩をつかまえ揺すって言った。*“Today is just today (Do you understand (今日はまさに今日である—わかりますか))”*。鈴木はその男を放し、温かい笑みを浮かべて言った。*“Today is absolutely today. Not yesterday and not tomorrow. (今日はやはり今日である。昨日でもなく明日でもない)”*。彼は少し

*みつ夫人によれば、この香炉は本阿弥のショウウインドウにあったもので、鈴木老師が毎日のように眺めているので、本阿弥の主人が、それはど気に入ったものならとくれた品物だとのこと。十分堪能したので返却したのである。

聴衆を見回して言った。"That's all (これで終わります)。"

小杭は他の人たちと一緒に立ち上ることさえできなかつた。鈴木は彼だけのために講話をしたのだと思つた。何を私は失望してゐたのだろうか、と思つた。英語の語彙が不足してゐるからだろうか、自信がなかつたからだろうか、仏教についての知識が十分でないからだろうか。"Today is absolutely Today, Today is not yesterday, Today is not tomorrow."⁹⁰ わずか教語にすぎない。私は中学、高校、大学を通して英語を勉強してきた——私はあれよりは単語をたくさん知っている。彼が意欲を失つたのは仏法の知識が不足

してゐるからではなく、英語の語彙が不足してゐるからでもなく、彼の心の中の何か不足してゐたからだ——精神を集中し勇氣を持つことが。小杭の行き詰まつたような生活は急旋回した。彼はアメリカに留まり、いかにしてアメリカ人に仏教を教えるか、を研究しようと思つた。巨大な感謝の思いが、彼の身体中に波のように満ち溢れた。彼は立ち上がり、歩いて自分のアパートに歸つた。目的意識を感じつつ、軽やかな楽しい気分だ。

定着 1965-1966

CHAPTER 14

Taking Root

仏教を新しい国に定着させることは
木を石の上に置いて

根づくのを待つようなものである。

*Establishing Buddhism in a new country
is like planting a plant
to a stone and waiting for it to take root*

一九六五年夏の朝三時四五分、グレイのフォルクス
ワーゲンが走ってきて桑港寺の正面の街灯の下に停
まった。鈴木俊隆が歩道に現れると、トニ・ヨハンセ
ンが車から出てきて彼のためにドアを開いた。彼らは
ロスアルトスの禅堂に向かうところであった。

これまで一年以上の間、鈴木は傘下の三つの禅堂を
定期的に訪問していた——ゴールデンゲートブリッジ
を越えて北に行ったミルヴァアレー、ベイブリッジを横
切って東に行ったパークレイと、半島の南にあるロス

アルトスであった。多くの日本寺の僧侶と同様に、鈴
木は定期的に巡回する計画に従っていた。日本では、
彼が家庭や他の寺を訪問するのは通常法要や葬式のた
めであった。アメリカでも同様に、日系人の家庭を訪
れることはあったが、より頻繁にブッシュストリート
から車に乗って出掛けるときは、坐禅と講話をするた
めであった。

ちょうど五時前にロスアルトスに到着すると、トニ
と鈴木は、人々が並んで壁に向かい、坐蒲の上で黙々
と坐っている、快適な郊外の住宅の居間に入っていっ
た。それは、一〇代の娘四人とともにそこに住んでい
た中年の女性、マリアン・ダービーの所有する家であ
った。マリアンは一九六五年の二月にレッドウツ
ドシティーにあった鈴木と半島グループの人たちと一
緒に坐禅を始めた。間もなく、朝と夕方の会合がロス
アルトスの彼女の広い居間で開かれるようになった。

一九六六年の夏に彼女の車庫が一七席を持つ禅堂に改装された。マリアンはそれに、一七文字の俳句に因んで俳句禅堂 (Haiku Zendo) という名前をつけた。

ロスアルトス禅堂のメンバーは円熟していた。常連の中には大勢の家庭の主婦や、芸術家や学生数名、退職した船長と、IBMの社員がいた。マリアンの家の雰囲気は六〇年代初期の桑港寺に似ていた。熱心な生徒たちが朝の日課を終えた後で居残り、ゆったり朝食を取り、議論に花を咲かせていた。

ある日講話が終わった後で、一人の生徒がカーペットの上の坐蒲に坐りながら尋ねた。「地獄とは何でしょうか」

「地獄とは英語で声高に読まねばならぬことです」と鈴木は答えた。笑い声が収まった後でも、その生徒は質問に固執した。そこで鈴木は言った。「地獄とは処罰ではなく訓練です」。別の機会にコーヒーを飲みながら一人の婦人が、坐禅と主婦の務めを両立させるのは難しい、——梯子を上ろうとしているような感じがする、一歩上がるたびに二歩下ってしまうような感じがする、と言った。「梯子のことは忘れなさい」と鈴木は言った。「禅では全てのものはこの地面の上にあるのだ」

トニ・ヨハンセンは、LSDの幻覚中に経験した、永遠の現在を理解できる師を一生懸命探し求めている。彼女は再度LSDを服用することは望まなかったが、彼女の潜在意識を呼び覚ます、自然の方法を求めている。彼女が訪ねたどの僧侶も牧師も、彼女の要求を理解しなかった。彼女が新しいことを試してみるたびに、出る結論は「これではない」ということであった。日曜学校の先生が彼女に鈴木の話をした。彼女が行ってみると、二人ほどの人たちが、堅苦しい格好で壁に向かい坐っていた。彼女は「これではない」と思ったが、そのまま留まり坐禅をした。鈴木が入ってきた。そして彼が挨拶のお辞儀をしながら歩いてきたとき、彼女は背後に彼の気配を感じた。彼女は彼が誰であり、何が起ころうとしているのかわからなかったが、そこに何かがあると感じた。坐禅の後で彼女は彼を見て思った。「そう、これだわ」。彼の目だけを見つめていると、彼が彼女の方を真っすぐに見た。そのとき彼女は思った。「この人は今まで会った誰よりもよく私が知りたいと思っていたことを知っている。彼は私が知りたいと望んでいることを全て理解している」

トニの夫のトニーもまた俳句禅堂に関わりを持つよ

うになつた。間もなく彼らはサンフランシスコに移つたが、鈴木木の運転手としてしばしばロスアルトスにやつて来た。数年間勉強した後、トニはなお鈴木木を完全に信頼し、彼が彼女を受け入れ、彼女を信頼していると感じていた。彼女は一度などロスアルトスに行く途中で彼にこんな告白さえした。彼に対する途轍もなく強い愛情を感じたので当惑してしまつたと。

「心配は要らない」と彼は言つた。一あなたは師について抱く感情を抑える必要はありません。それで結構です。私は二人の守るべき規律は十分身につけています」

彼女はそのことを自分の日記に書いた。それは鈴木木が毎週読んで意見を述べる日記であつた。しばしば「家族の修行」と言われていることについての質問が出た。その週の彼女の日記に鈴木木はこう書いた。「どれが間違つた愛なのか、どれが真の愛なのか誰にもわかりません。私を、そしてあなた自身を信じなさい。そして私たち四人揃つて一緒に夕食を囲みましよう。

その前に——まず私の離實に聞いてみなければなりません！」（奥さんは寅年生まれであつた。「彼は辰年です」とみつは言つていた。「二人が戦うときは、彼は高い雲の中にいて、私は地上で唸り声を上げているのです」）

空はあなたたちが

何も見ることができない庭園である。
それは全ての母である。

*Emptiness is the garden where you can't see anything.
It is the mother of all.*

一度トニとトニーが鈴木夫妻をヨセミテに連れていった。鈴木木の数少ない休暇であつた。鈴木木は車が山に向かつて走っている間、法衣の袖を風に靡かせながら、フォルクスワーゲンのサンルーフを開けて立っていた。彼らは大きな滝、ヨセミテフォールを訪れた。滝の下に立つて、鈴木木は岩から岩へと跳び移り、突然彼は巨大な岩の上に立つていた。誰も彼がどのようにしてそこに上つたのかわからなかつた。それには奥さんもぎよつとした。次の木曜日朝ロスアルトスの禪堂で、彼はヨセミテでの経験を語つた。

最も高さのある滝で、水が山の頂上から投げ落とされたカーテンのように落ちてくるのが見えました。水は私が期待したほどには早く落ちず、ゆっくりと落ちてくるのでした。そして水はま

とまつて落ちてきました。私は、一滴一滴の水にとつては、あのように高い山の頂上から底まで落ちていくことは大変苦勞が多いであろうと思ひました。私たちの人生もまたこのようなものであらうと思ひました。私たちは生涯において、辛い経験を数多くします。しかし同時に私は思ひました。水は元來別々に別れていたわけではありませぬ。それは一つの全体の水です。そこで私たちは言ひます。「空から全てが生ずる」と。一つの全体の水、すなわち一つの全体の心は空です。この認識に到達したとき、私たちは人生の眞の意義を知るのです。この認識に到達したとき、私たちは花の美しさ——人生の美しさ、を見る事ができるのです。この眞実に目覚めるまでは、私たちが見るもの全ては迷妄にすぎませぬ。

鈴木はアメリカに来て桑港寺に移るまでは、庭園のない所に住んだことはなかつた。彼は緑の樹木を渴望するようになった。しかし市街から離れた地区に禅堂ができたことにより、彼は定期的に樹木や庭園のある近隣地域を訪れるようになった。彼は、特にロスアルトスでは生徒の家を訪れ、ときどき花壇に直接行つて

雑草を抜いたり、ふざけて芝生の上に寝転がったり、樹に登ったりして、家主を驚かせた。最初彼がロスアルトスのある婦人の家の裏庭に入つていったときは、木に架けたロープのブランコの所に真つ先に行き、岩に上り、法衣を翻しながらブランコに乗つた。

* * *

もしあなたたちが

仏教を学びたいと思ふならば、

心を清めておかねばなりません。

いかなる偏見も持つてはなりません。

あなたたちが以前に学んだことは

全て忘れ去るべきです。

If you want to study Buddhism,

you have to clear your mind.

You should not have any prejudice.

You should forget all you have learned before.

一九六六年までに鈴木俊隆は何百人もの人たちの生活に、重要な役割を果たしてきた。ある者はすぐに通り過ぎていき、ある者は彼に傾倒する生徒になり、そしてその中間に大勢の者たちがいた。長期に渡る(教えを受けている)生徒たち数名は、將來アメリカで鈴木

の系譜を引き継ぎ、独立した教師になる可能性を持った人たちと考えられていた。その中でも、リチャード・ペーカーは群を抜いていた。一九六六年にはリチャードが鈴木の下に来てから約五年が経過していたが、彼の鈴木への傾倒と彼の教えを探索する意欲はいささかも褪せなかった。鈴木はグループの将来の方向性に関し、彼の助力をますます広範に認め、決定権を与えるようになった。リチャードは禅センターの会長であり「ウィンドベル」の編集者であった。そして彼はより一層集中して学べるリトリート・センターを創建するための、適当な土地を市外に物色していた。当時日本に滞在していたグレアムやフィリップとともに、リチャードは禅堂の男性側の正面の坐蒲に坐った。そして鈴木は、たとえ彼がいなくても彼の席には誰も坐らせなかった。

リチャードは曹洞宗の僧侶の会合に出席するために、鈴木に同行してロサンゼルスに行った。帰途、彼が尋ねた。「鈴木老師、ロサンゼルスで私は大勢の人たちからあなたの弟子かどうかという質問を受けました。私はあなたの弟子だと言ってよろしいのでしょうか」

「そうだ、あなたは私の弟子だと言ってよろしい」

師と弟子の間に起こったことは全て、言葉による場合もよらない場合も、リチャードにとって、あるいは鈴木にとっても注目すべき大切な事柄であった。ある日リチャードが坐禅の前に、禅堂の壁に掛かっていた絵を真つすぐに直した。坐禅中に鈴木が立ち上がって絵の所に歩いていき、曲がった位置に戻し自分の席に坐った。

遡って一九六二年、鈴木は晋山式の直前に、リチャードはひどい自転車事故に遭い、前腕に重傷を負った。両腕はギブスで固定された。彼は晋山式で大きな立て太鼓を叩くように依頼され数週間練習に励んでいた。彼は事故の後もかなりの努力をし練習を続けた。最も困難なところは早打ちであった。しかしリチャードはどんなに痛みが辛く、どんなに不可能と思われても儀礼の間は太鼓を打ち続けよう、と固く決意した。彼は激しい痛みに耐えて練習を続け、儀礼の当口は、太鼓を叩き、立派に勤めを果たした。鈴木は彼がそのような努力をしたことを誇りに思った。

それから一年ほど後に、リチャードは自分では原因不明の、激しい精神的な苦しみを経験した。その原因は、彼がある協会に対し約束したと考えていたこと

にある、と思ひ至つた。ある夜彼は激しい苦惱に思ひ余り、深夜、桑港寺の外の街路に立つた。彼は鈴木を起こして助けを求めようと考へたが、思ひ止まり帰途についた。それからしばらく経つたある日、坐禅の後で鈴木にお辞儀をする順番が回つてきたとき、彼はドアの傍らの坐蒲の上に、彼が鈴木の前山式に渾身の力を注いで叩いたその太鼓の撥が置いてあるのが目についた。撥は通常禅堂の外に太鼓と一緒に保管されていたので、明らかにそこは保管場所ではなかつた。リチャードは深く感動して勇気づけられて鈴木にお辞儀をして通りすぎた。次の数週間の間彼の心は晴れ、嵐は過ぎ去つた。

リチャードは辛抱強く頑張り通した。一私の質問に対する鈴木への答えはさまざまであつた。ときにはそつけないく肘鉄を喰わせ、ときには断定的に明確に答へた。それはいかに質問するかということについての勉強であつた。私はしばしば彼の答へを通常の意味での答へとして受け止めることはできなかつた。つまり私は、彼の答へをときには箔はくとして、鏡として、エネルギーの変化として、ヒントとして受け入れた。ときどき彼は答へを自分の身体で示して見せた。もし私が呼吸について尋ねるとすると、彼は今までしていた呼吸

の方法を変えて見せたかもしれない」

「私は日本に行つて勉強し、修行をすべきだとお考へてしようか。私は日本の僧堂の生活を知る必要があるとお考へてしようか」と、リチャードが尋ねた。

「デイツク、あなたが行くような所はないよ」と鈴木は答へた。

「私がした方がよいとお考へることはございませぬか」

「すべきことは何も無い。あなたは好きなことをしたらいのだから。ただあなた自身であり続けなさい」

クロード・ダレンバーグは、彼の育つたオランダ改革派教会に忠実な、宗教的華美や儀礼を嫌う物静かで誠実な男であつた。彼は一九四九年にシカゴでアラン・ワッツの講話を聞いて以来、仏教の研究を続けてきた。クロードは五〇年代の初めにサンフランシスコにやつて来た。アメリカン・アカデミーのアジア研究部門で、鈴木大拙、加藤和光、ゲイリー・スナイダーや、大勢のアジアの学者やピート世代の、詩人や哲学者に会つた。ジャック・ケルアックの「ダルマ・パムズ」の中のバッド・ディーフェンドルフの人物像はクロードをモデルにしていた。ロサンゼルスで彼は因習打破を唱へた臨済宗の僧侶・千崎如幻について学

び、鈴木が到着する数年前には、桑港寺で鳥羽瀬について勉強するグループに入っていた。一当時は、一〇分間坐禅をすることは巨大な山に登るのと同じくらい意欲をそそるものであった。なぜなら私たちに関する限り、坐禅は全く未知の分野であったからである。今や、新しい人たちにとっては、坐禅は樹を切り倒すのと同じくらい容易である」

鈴木がアメリカに來た当初の数年間、クロードは京都に滞在していた。帰国後間もなくクロードは、鈴木が禅センターのクエーカー教的な簡明さに惹かれ、直ちに彼の生徒になり、信任の厚い相談相手となった。このときクロードはほぼ三〇歳で、投資と経営についての知識をある程度備えており、五〇年代に設立されたイースト・ウエスト・ハウスの創設者でもあった。鈴木は彼を実務的で成熟した人間と見て、彼に将来の構想について、特に禅の修行者の共同体の発展、すなわち僧伽について、できるならば桑港寺の近くに家を手に入れ、そこで何人かの生徒たちが一緒に生活するようにしたい、という構想を話した。それは鈴木がアメリカに來た当初からときおり考えていた構想であった。鈴木はまた、勉強のためのしっかりした計画を作りたいという彼の希望や、学校を造る計画について

も、クロードに話をした。

クロードは日本人の寺を高く評価し、仏教に関して彼らから学び得ることがたくさんあると考えた。そして、二つのお寺——彼らは協議していかなかったが——の間にある種の連携を持たせたい、という鈴木の考えに共鳴した。日系アメリカ人のお寺は、そのとき入手しようとしていたすぐ近くの土地に、新しい寺を建てる計画を進めていた。鈴木は彼らがそこに移転すれば、桑港寺をアメリカの仏教の要求を満たすように改装できるだろうと考えた。その中には、仏教の学校と居住区を作ることができるとある。日本からもう一人僧侶を派遣してもらうことができれば、彼は双方を管理することができる。恐らく二つのグループは少し離れていた方がより容易に共存できるのではなからうか。

桑港寺で毎週開かれる研究集会で、クロードは鈴木が仏教を各人の置かれた背景や文化の範囲内で理解すべきだ、と強調していることに気づいた。ある晩、東と西の融合について書かれた本が話題になった。鈴木はいつものように手を頭の後ろに組み、何も言わずに坐って聞いていた。議論は東と西の特性の比較に向かい、西が劣勢になった。

一人の生徒が言った。「東洋は二元論ではなく、自然との調和を日指している。一方西洋は二元的で物質主義的であり、自然を征服し、これを利用することを日指している」

「その通りだ」ともう一人が言った。「東洋は直観的であり統合的である、一方西洋は合理的で分離的である」

会話がこのような調子で続いていたとき、鈴木は明らかに背立って声を上げて言った。「もしあなたたちがよい仏教徒になりたいなら」と彼は言った。「まずどうしたらよいクリスチャンになれるかを勉強しなければならぬ」。そして彼は立ち上がり、部屋を出て行った。

メル・ウァイツマンは一九六四年にフィリップ・ウィルソンから鈴木の話聞いて以来桑港寺の常連になっていた。メルは三〇代半ばの芸術家でフルート奏者であり、糊口を凌ぐためにタクシーを運転していた。彼は物腰の柔らかな、おおらかな性格で人に好かれた。

彼が最初に桑港寺で坐禅をしたとき、メルは自分でも四〇分の間まるまる坐り通したことが信じられな

かった。事実、彼は経行の後で、生徒たちが皆再び腰を下ろし坐蒲に坐り、坐禅を続けるのを見てショックを受けた。坐禅をしている間に、鈴木が彼の後ろに来てメルの手をムドラの形（印相）をとるよう指導した。

彼はメルの中を真つすぐに伸ばし、視線を壁のどの位置に置いたらよいかを教えた。鈴木が祭壇に向かつて歩み去ったとき、メルは生活を変えた。禅の用語では、最初の悟りの経験は修行の決心（発心）をしたときに起こると言っている。それは最初の転換点である。「これはまさにそれに該当する」とメルは思った。

ある女性が鈴木に、他の人たちがあなたは彼らの心を読むことができると言っているのを聞いたことがある、と言った。それは本当かどうかと尋ねられ、彼は「否」と答えた。次の数回の講話の中で、彼はそのような能力を持っていることについて否定した。メルは、もし奇跡や異常な力を求めるならば、この先生を見誤るだろうと言った。「師の魔術は普遍さということである」と彼は言った。

ある日鈴木、片桐、メル、クロードとサイラス・ホードリーという生徒が桑港寺から街路を隔てた向かい側のアパートを見つめていた。サイラスはちょうど

そのアパートの一室に移ったばかりであった。その台所には、食料と食器があった。彼らはそこで朝食を食べることに決めた。家具がなかったので、鈴木がテーブルクロスのように床に新聞紙を広げた。カップとボウルが並べられ、間もなく彼らは食事を取りお茶を飲んだ。メルは、先生が新聞紙だけで何も無い部屋を食堂に変えてしまったことに感心し、他の人たちとともに黙って食事をした。

メルは注意深く鈴木を見つめ、彼が言葉と同じくらい身体で教えていることに気づいた。鈴木は、メルに活動的で軽快なガンジーを連想させた。彼はどのようなにして立ち、歩き、呼吸をし、椅子に坐るかということを、手本を示し教えた。鈴木のリズムと動作は、音楽家のメルに深い感銘を与えた。「彼はその瞬間の行動に完全に没入する感覚を身につけている。椅子に近づき、彼は無造作に坐るのではなく——彼は真実、それと触れ合うのである。彼は何物であれ遭遇する事物と調和し、融合するのである。彼はバランスを崩していいないので楽にくつろいでいる。それ故彼は伸び伸びと歩き、坐るときは平衡を保っている。彼は急がなければならないときでも決して慌てない。彼は何をやるにも時間を掛ける。それはちょうどよいタイミ

ングである。彼の坐り方はちょうどよいタイミングで行われている」

サイラス・ホードリーは、古風で趣のあるコネティカットの町から来たエール大学の卒業生で、宇宙船と呼ばれていた初期のヘイト・アシユベリーの生活共同体でペヨーテの研究をしていた。彼はまた自営の輸出入の事業を経営しており、ときどき商用でアジアに旅行した。彼は一九六四年のエイプリルフルの日に友達と一緒に桑港寺を訪れた。鈴木に会う前に、彼は自分たちのサークルに溢れている言葉や思想を超えるような立派なものが仏教に存在するとは考えられない、と言っていた。しかし彼が鈴木に会った途端に、その考えは変わった。サイラスは自分が生活の基盤としてきた真理よりも偉大な真理を、鈴木は体得していると思った。彼を引きつけたのは身体性であった。彼が研究した心理学や哲学では、全て身体から始めると言った者に出会ったことはなかった——身体と呼吸に注意を払うことで、サイラスはすでに修練を積んだ真面目な人物であり、桑港寺で一日に一回もしくは二回坐禅をするのに格別な困難はなかった。

かつて禪の修行を経験したことのある人たちが、徐々に大勢桑港寺に現れるようになった。その中の一人にボブ・ハルパーンがいた。豊かな茶色の髪を肩まで垂らした、情熱的な若者であった。ボブは、細々した置物や、本、石、植物が散乱している鈴木事務所に彼に向かい合つて坐つていた。棚の上の大きな、古風な時計がときを告げて鳴つた。鈴木は三匹の猿の彫像のブロンズの頭を軽く叩いた。猿は手で目、耳、口を覆つていた。「これは私のお気に入りですよ」と言つて彼はくすつと笑い、それぞれの猿の真似をしながら話した。「悪いものは見ない、悪いことは聞かない、悪いことは話さない」。それから彼は続けて言つた。「どんなご用件ですか」

ボブはロサンゼルスで臨済宗の教師、佐々木承周（ササキノリシウ）老師について一年間坐禅をしたと言つた。彼はミルヴァレーで前角の通訳によつて安谷老師が指導した摺心を終えたところであつた。安谷は、臨済風の公案を用い、見性を得るために摺心に鋭意精進し、公案ないしは坐禅に専心することを強調した、曹洞宗の僧侶であつた。安谷は西海岸で摺心を行い、信奉者たちを引きつけた。これは坐禅、公案とともに安谷流の禪について多大の紙面を割いたフィリップ・カプロウの新

著、「禪の三本の柱」(The Three Pillars of Zen)の成功に負うところが大きであつた。摺心に参加者たちが鈴木のことを話していたので、ボブは桑港寺に立ち寄つたのである。「ここではどのような修行をしているのですか」と彼ははにかみながらも何か言わなければならぬと思ひ尋ねた。

鈴木は桑港寺でのスケジュールを説明した——日々の坐禅、一月置きに行われる週末の摺心と八月の七日間の摺心について。彼はボブに、ある生徒たち、特にリチャード・ペーカーは、地方に修行の場所を見つけないと考へていると語つた。「私は現在市内で行われている方法で全く支障はないと思つている。みんなここで非常に立派に修行をしているが、もし彼らがそうした方がいいのなら、私もそうするつもりだ。彼らは男性も女性も一緒に修行をする場所を希望している」と鈴木は彼に説明した。「私たちは日本ではそうした方法は取つていないが、ここはアメリカなのだ」ボブは鈴木が話している間、じつと彼を見つめた。彼は安谷とは対照的であるように思われた。安谷は氣性が激しく、摺心の間しばしば大声を上げて怒鳴つた。鈴木の方が若かつたが、落ち着きがあり、平凡で、安谷と比較して弱々しくさえ見えた。彼は侍のよ

うなどら声ではなく、優しい声で穏やかに話した。彼は事務所の椅子の背にもたれかかり、両手を頭の後ろに組み、女性のように脚を組んでいた。ポブは、彼はよい男だが本物の禅の師ではあり得ないと思った。

後日、アメリカ在住の曹洞宗の日本人僧侶の会合に出席するために、ロサンゼルスに行った鈴木は、前角から夕食の招待を受けた。ポブもそこに居合わせた。彼は自分の商売であったサンセットストリップにあったサトリ書店を売り払って、前角と一緒に住み、彼の居間に新しいセンターを設立する手伝いをしていた。

ポブは背をぴんと伸ばして坐り、沈黙を守り、よい印象を与えようと努めていた。前角は米、肉、野菜の料理をご馳走したが、ポブは決して肉を食べないように注意していた。彼は熱心な菜食主義者であり、菜食主義は動物を殺さないという点でも、心の平安を促すためにも、仏教の教えの重要な部分であると考えていた。鈴木は次第にこうした考え方に関心を示してきた。

「ああ、あなたは、肉は食べないのですか」と鈴木が彼に尋ねた。

「ときどき肉は食べます」とポブは答えた。

「私は、ときどき米を食べます」と鈴木が言った。

この一見取るに足らないと思われるやり取りが次第にポブの心に食い入った。鈴木は直ちに彼が最も執着している点を見抜き、そこを突いた。しかしこれが最後ではなかった。

* * *

東の間の人生に

私たちは永遠の生命の喜びを
見いだすことができる。

*In the awareness of life
we can find the joy of eternal life.*

グラム・ペッチーと彼の家族が日本に滞在を始めてから、ほぼ一年が過ぎた。彼は再び永平寺で苦境に耐えなければならなかった。そして今回は以前滞在したときよりは立派に勤めることができた。もっとも移転の際、大きなステーマー・トランクを持ち上げようとして激しく背中を痛めたため、かなりの間休息しなければならなかった。彼は最終的に、丘宗潭が二〇世紀の初頭に創建した、京都の僧侶育成の小さな寺、安泰寺での修行の方が彼の好みに合っていることがわかった。この寺は、丘の弟子で広く尊敬を集めていた

老年の僧、「ホームレス（宿なし）」澤木興道の寺となっていた。彼の修行は多くの時間を坐禅に当て、儀礼はほとんど行わず、警策を使わず、鈴木懸念が手ぬるいと思われるほど曹洞宗に対する厳しい批判をしていた。澤木はグレアムの厄介な疑問を解決するのに役立つとして、鈴木が推奨した六人の師匠の中の一人であった。

グレアムは六人の師匠全部を見つけ出そうと努力した。二人はすでに他界しており、その他の者は弟子を取るには年を取りすぎているか、ないしは病弱であった（その中には鈴木が最も親密にしていた藤本も含まれていた）。

グレアムは安泰寺で死の床についていたが、年老いた澤木興道に会えたことを光榮に思った。

グレアムは安泰寺で澤木の弟子、内山老師について坐禅を始めた。彼は内山に非常に親しみを感じた。安泰寺では定期的に坐禅ができるほかの禅寺と比べ坐禅の比重が大きく、機構は遥かに簡素であった。彼は直ちに居を構えて、家族とともに住み、規則正しく寺に通った。鈴木が推薦した六人の師匠の表は、結局役に立った。グレアムはついに彼のためになる師匠と修行の場所を見つけることができたのである。

一九六五年十二月に澤木が八五歳で亡くなったと

き、グレアムは彼に敬意を表す追悼の四九日間の撰心に参加した。撰心は通常最長で七日間続けられるが、グレアムはこの偉大な坐禅者に敬意を表し四九日間、日の出前から日没後まで坐禅をした。

数人の医者がグレアムに、椎間板がずれているからできるだけ伏せて寝るようにと勧めた。手術も考慮された。しかし彼はコルセットを着けただけで撰心を始めた。経行の時間が来たとき、彼は立ち上がり、他の人たちと一緒にゆっくりと正確な足取りで歩いた。医者たちが言ったこととは反対に、撰心の間に彼の背骨は自然に矯正され痛みもなくなった。彼の心は徐々に穏やかになり澄み切った。来る日も来る日も坐禅を続けていく中で、グレアムは文化の相違、言葉の障壁、懷疑、とりわけ彼の厄介な疑問を忘れ去った。彼は完全に坐禅に没頭した。彼の意識は広く開かれた。彼は虫が床を這っている音を聞くことができた。彼の経験は何週間も続き、かつ広がっていった。それはただただ美しく、禅の旅の極致であり、不安からの解放であった。彼は鈴木と共に過ぎた歳月と、安泰寺を見つけたことへの感謝の気持ちで満たされた。

アメリカのような忙しい国では
坐禅にある程度の時間を
割く必要があります。

私たちは人生にゆとりを持つべきです。
そして仏教とキリスト教双方の伝統を
尊重すべきです。

In a busy country like America

there must be some time to spare for zazen.

We should have more composure in our life,

*and we should respect our traditions,
both Buddhist and Christian.*

サンフランシスコから南へ向かいカリフォルニアの
海岸沿いのモンテレー郡に行き、アロヨセコの方角に
向かってカーメル・ヴァレー・ロードをドライブして
いくと、緩やかな丘陵地と曲がった樅の木や牧草地
の間を走っている、この曲がりくねった自動車道路の
中ほどに、牧場が見掛けられる勾配にさしかかる。周
りを取り囲む樹木は、宿り木やサルオガセモドキに覆
われている。そしてそこに「タサハラ (Cassiana)」と
書かれた標識の立っている道がある。この道を五キロ
ほど行くと、道は舗装されていない埃っぽい小道に変
わり、樹木の生い茂った山岳地帯の中を蛇行し、標高
一五二〇メートルのチューー山の尾根まで上り、再び

四〇〇メートルまで下っていく。この二・五キロの未
舗装の道路の終点にタサハラの温泉がある。

この土地に居住するインディアンの中でも、特に
エッセレン・インディアンに、その治療の効能のある
泉質が、一〇〇〇年以上も前から知られていたこの熱
い硫黄泉は、一九世紀の半ばに探検家たちによって発
見された。中国人労働者の助けを得て、この温泉に到
達する狭い道路は非常な苦勞の末、急な山岳地帯を
掘削して作られた。一八六〇年代以降タサハラはモン
テレー郡で最も人里離れた、手付かずのリゾート地と
なった。

先日(四月七日)、私は新しいリトリートの用地
を見に、モンテレー近くのタサハラ温泉に行きま
した。もし温泉も一緒に買うことができれば、こ
の土地は、私たちの僧堂には信じ難いほどよい所
です。私は活禅さん(フリリップ)への手紙にもこ
のことを書きました。

鈴木木のグレアム・ベッチー宛の手紙より

長い間、辛抱強く地方のリトリート用地を探し続け
た末、鈴木俊隆は、彼が求めていたもの——タサハラ

を見つけた。彼のグループが、次の一步を踏み出すことを可能にするのに十分に成熟し、空間、時間、存在、生命、そして死について、従来一般に考えられていた多くの前提に挑戦する教えを、このようにして支援するだけの好奇心と、オープンな心がアメリカに生まれたときに、ふさわしい場所に巡り合ったのである。

さまざまな人たちが、この数年間この古いリゾート地について、鈴木とリチャードにたびたび話を持ってきた。サンフランシスコの歴史家、マーゴット・パターソン・ドスは鈴木に、ここはリトリートの地として考えられる唯一の土地であると語った。グレアムとフィリップが一九六一年にキャンプに来たとき、偶然この土地に行き当たった。グレアムの勧めでリチャードとヴァージニア・ペーカー夫妻が同じこの土地で、キャンプをした。彼らも同様に、一群の色あせた白い木造キャンピンと、若干の木と石で造った頑丈な建物、大きな水泳用のプール、そして大きな淀みのある温泉と蒸し風呂に辿り着いた。リチャードは素晴らしい眩惑された。しかし一九六六年春、リチャードが鈴木をそこに連れていくまでは機は熟さなかった。

タサハラは、サンフランシスコから車で四時間から五時間の距離にあり、ビッグ・サーから内陸に入った、ロスバドレス国有林の中にある。最初にここを見学していく途中で、鈴木はこの場所は遠すぎると考え始めた。彼はもつと近い所——恐らくサンタクルス山中を想像していたのであろう。しかし息を呑むような素晴らしい景色の中、無舗装の険しい道を一時間あまり車に乗りタサハラに着いたとき、彼はすぐさまこの場所に惚れ込んだ。タサハラはこの上なく隔絶され、比類のないほど美しい所である。細い小川に縁取られた谷が、木々の生い茂った荒々しい原野の中をえぐって通り、尾根から見渡すことができる滝が流れ落ちていた。

彼らは午後の半ばを過ぎた頃そこを離れた。尾根の道が比較的平になった所に着いたとき、鈴木がリチャードに言った。「ここで車を止めてくれ給え」彼は車を下り、道路上で飛び上がり踊った。「これはすごい！中国のようだ！」と彼は言った。それから彼は踊りながら道を下っていった——興奮し、軽い足どりで、身体を揺らしながら——リチャードは後に従ってゆつくりと運転していった。鈴木を抑えきれない喜びを目にし、リチャードはこの土地を手に入れるために

必要なことは何でもしなければならぬ、と心に決めた。

ベックとロスコーの二組の夫妻がタサハラを所有していた。ポブとアンナ・ベックはロスコー夫妻の株を買い取る手続きを進めており、まだタサハラを手放す意思はなかった。ポブ・ベックはリチャードに、禅センターのリトリート用地として売つてもよいと言つて、近くの馬牧場（ホース・パスチャー）と呼んでいた未開発の約七三万平方メートル（約二万坪）の土地を見せた。鈴木はリチャードとともに馬牧場を歩いて見ていった。そこは美しくはあったが、彼が心に描いていたのはタサハラであった。鈴木は、将来のためにタサハラに常時日を注ぎながら、取りあえず馬牧場を買うという計画に賛成した。

生徒たちは行動に移った。リチャードが先頭に立つて、一夜にして一五万ドルの資金を集める運動を作り上げた。市内にある禅センター全体の前年度の予算はちょうど八〇〇〇ドルであった。リチャードはUCパークレイの会議調整の職を辞任した。鈴木は彼がこの土地を手に入れるという誓約と、この計画に取り組むうえで示された明らかに優れた手腕に驚いたが、実

際にそれが成功するかどうかについては疑問を持っていた。禅センターは、今まで会費以外に生徒たちに要求したことはなかった。生徒たちは皆、この計画に熱中し、できるだけの援助をした。クワン夫妻は募金のパーティーを開催し、募金のための美術品販売会を開く計画をした。

リチャードには禅センター外部に大勢の知人がおり、彼らの興味をそそる方法を知っていた。彼は鈴木が彼の道を確立するための人里離れた、自然の環境を準備するためにエンジンを高速回転に切り替えた。パンフレットが作られ、さらに多くの募金の催しが計画された。初期段階で熱烈な支援を寄せた人たちの中には、仏教をよく知っていた多くの哲学者や文筆家があった。例えばアラン・ワッツ、ゲイリー・スナイダー、ヒューストン・スミス、ナンシー・ウィルソン・ロス、ポール・ワインパール、アレン・ギンズバーグ、ジョセフ・キャンベル、そして近くのエサレン協会のマイケル・マーフィーといった人たちである。

リチャードが足繁く訪れることで、桑港寺の雰囲気はますます活気づいた。大勢の生徒たち、特に新しくやって来た生徒たちで、彼を同期とは見ていない後輩者たちは、彼と一緒に働くことを楽しみにした。し

かし一方において、生徒としての彼の鈴木に対する親密さと、募金活動やタサハラ計画についての、彼の支配的な立場は、一部の生徒たちに暗い影を与え、古参の生徒たちにある種の怒りと嫉妬を起こさせがちであった。

リチャードは弁解がましい態度は取らなかつた。彼はむしろ自分こそが実際に修行をしている唯一の生徒であり、実際に鈴木がサンフランシスコで効果を挙げるようにさせている唯一の人間である、と思つてゐるような印象を与えた。彼は他の生徒たちは事務的、あるいは社交的な水準で、老師に対する愛着の水準で鈴木に接しているにすぎないと見ており、グレアムを除く他の生徒たちは、根本的に修行に取り組むために自らの執着を敢えて突き破ろうとしていない、と断言してゐた。他の生徒たちはこのような彼の発言を聞いて激怒したが、鈴木は彼に対し反ばくはしなかつた。これは、鈴木がリチャードだけを支持したということではなかつたが——誰もそのようには思つてゐなかつた——リチャードがリーダーとして、グループを引つ張つていく方向については信用してゐた。とりわけ彼は、他の生徒たちが彼と彼の僧伽とともに修行をする機会を作ることを、リチャードが真剣に取り組ん

でゐる、と認めてゐた。

彼の他にも、鈴木の最も親密な古参の生徒たちの中には、将来指導者になるために修行に専念し、その可能性を秘め、その希望を持つてゐると鈴木が考へてゐた生徒たちがいた。こうした人たちの中で最も卓越してゐたのは日本に滞在中のグレアムとフィリップであり、ミルヴァレーのドル・クワン、ジーン・ロスであつた。その他にもメル・ウアイツマン（鈴木は彼にパークレイ禪堂を引き継ぐよう要請した）、クロード、サイラス、そして俳句禪堂のマリアンがいた。

奥さんは違つた考へを持つてゐた。鈴木は、彼の寺を自分の息子に引き渡すために日本に行く計画をしてゐたが、彼女は彼がそのまま日本に留まりそこで引退することを望んでゐた。彼はアメリカに来てやるべきことはやり遂げた、と彼女は言つた。それにこれ以上続けるほど健康ではない、と。彼は絶えず咳をしており、インフルエンザにかかりやすかつた。もし彼が長生きをしたいと思ふならば、休息すべきである。しかし彼は彼女の意見を無視した。鈴木からすれば、全てはまだ始まつたばかりであつた。

「こうした誠実なアメリカ人たちが私に決意させた」と鈴木は友人の小杭師に語つた。「私は彼らのために

アメリカに留まるつもりだ。彼らのために私はアメリカの土になろう」

* * *

真の宗教は

効用を求めることでは得られません。

それは物質的な意味で

何かを得ようとする方法です。

精神的な事柄に役立つ方法は、

全くこれと異なります。

精神的なことを語ることにすら、

実際には精神的ではなく、

一種の代替物に他ならないのです。

*The religion cannot be obtained by seeking
for some good;*

that is the way to attain something in a material sense;

The way to work on spiritual things is quite different;

*Even to talk about spiritual things
is not actually spiritual*

but a kind of substitute.

鈴木俊隆は永平寺の山門をくぐり、巨大な杉の木の下の階段を上っていった。彼の傍らには頭を剃り、黒い衣を着た背の高いグレラムが従っていた。彼らは賓

客として役寮（瑞雲閣）に滞在していたのである。修行僧として二度の苦しい修行期間（割中期間）をこの寺で経験したグレラムにとって、客の立場でここを訪れることは愉快な選択肢であった。彼は、新しくやって来たアメリカ人の生徒が、巨大な法堂で苦しい正坐をしながら読経している姿を眺め、彼の苦しみに同情した。

彼らは、儀礼と僧侶の修行の多くを管轄する維那の立髪を訪ねた。かつて彼は僧堂の相撲のチャンピオンであった。鈴木と同年代で、一九六六年現在六二歳であった。鈴木はジョン、グレラムやフィリップが永平寺に滞在している間、彼らに示してくれた親切に對し感謝を述べた。立髪は丁寧に應對し、鈴木がアメリカでやっていることに興味を示していたが、グレラムには立髪が鈴木を自分より劣った者で、寺の一任職にすぎず、僧堂を始める資格はないと見ていることがわかった。

次いで彼らは、貫主で曹洞宗全体の管長であった、年配の熊沢泰禪老師に面会した。彼らはアンティークの茶碗で最高品質の緑茶を静かに啜った。熊沢はグレラムに、アメリカに帰国して戻る寺があるのかどうかと尋ねた。鈴木は彼に募金のパンフレットを手渡し

た。それには表紙に「禪マウンテン・センター」と書いてあった。広げるとポスターの大きさになり、その半分は馬牧場とその周辺の美しい景色の写真で埋められていた——ライプオークの木の間にある巨石、雲の中に浮かぶ山々、石に縁取られて木陰に映える小川の淀み。

「禪心寺という名前はいかがでしようか」と鈴木が尋ねた。彼は、真面目な若い僧侶が手助けに来てくれれば助かるが、と暗に希望をほのめかした。

グレアムには、熊沢が鈴木の違いに直接答えたかどうかはわからなかった。彼はしわがれた声で何か言っただけであったが、グレアムは彼らの低い地位を考慮すれば、丁寧に迎えられるといえると思った。鈴木も満足したように見えた。

グレアムと鈴木は福井駅のプラットホームに立っていた。彼らは酒と笑い声の絶えない、陽気な夕食のもてなしを受けた。そして二人は最終列車に乗り遅れた。次の列車は翌朝の午前五時半であった。鈴木は寒さをしのぐために、法衣の内側に新聞紙を入れて腹の上に巻き、坐って居眠りをした。グレアムは寒さの中を歩き回った。

別の方角に向かう最終列車を待つていた酔っぱらいが、グレアムの足音に苛立ち、彼に歩くのを止めて坐っている、と言った。彼は衣を着たグレアムの異様な姿を見えますます腹を立てた。「俺たち日本人は」で始まる取りとめのない言葉を喚きながら空手打ちでグレアムに突つかかかってきた。もし他の男たちが来てこの男を取り押さえなかつたら、グレアムは自分で防衛しなければならなかつたであろう。幸い、酔っぱらいの汽車は間もなくやって来た。鈴木とグレアムは、再び二人だけで寒さの中に取り残された。鈴木は口論の間中、ただ坐っていただけで、グレアムに自分一人で対処させた。

グレアムとポーリンは、鈴木が彼らに見せた募金のパンフレットを見て驚いた。そのような目覚ましい発展を必要とする巨額の資金、印象的な文章と目も眩むばかりの描写で埋め尽くされた、専門的で本格的な仕様に。そしてこのパンフレットが二万人の人たちに配布されようとしているのだ！ 禪センターではいまだかつて数百人以上の人たちに何かを郵送したことはなかった。本当にリチャードはこの仕事をやってのけることができるのであろうか。鈴木は何という賭けをし

ようとしてゐるのであろう。もし失敗すれば、彼は日本の同僚たちの面前で恥をかくことになる。彼は何と
いう信頼を生徒たちに示してゐるのだらう！

鈴木は自分の故国で、アメリカの僧堂に対しての支持を集めようと努力してゐた。彼は一年ないし一定の修行期間、修行を指導できる「優秀な僧侶」を連れていくことを考えてゐた。彼はグレラムが師事してゐた内山そして丹羽、野扒、横井を心に描いてゐた——彼らは皆、岸沢の後継者であつた。しかし日本では、彼が完成を目指してゐた計画に対する評価は得られなかつた。そして彼は経験を積んだ僧侶の誰からも、アメリカに行くという確約を得ることはできなかつた。鈴木も彼の野心的な計画も周囲に戸惑いを与えてゐたのだ。鈴木が駒澤に彼を訪ねた後で、鈴木についてどう思うかと尋ねられ、横井はこう答へた。「日本の立場からすると、彼は典型的な田舎の一僧侶にすぎない」と。

それは一九六六年の一〇月のことであつた。鈴木は八月二五日以来引き続き日本に滞在してゐた。奥さんはアメリカに残り、桑港寺の仕事を管理してゐた、片桐の手助けをしてゐた。鈴木とともに林叟院にいたのはベッチー夫妻と、永平寺に滞在してゐたフィリップ

プ、さらに鈴木の依頼で渡航したクロードであつた。彼はこれらの生徒たちを彼の家族、友人、同僚、檀家そして、寺を訪れた高草山グループの古い生徒たちに紹介した。

フィリップは永平寺で九カ月間過ごしたところであつた。彼の直情径行的な態度は彼を人気者にした。大きな分厚い手をしたフィリップのような男は日本では、まして永平寺では想像もできなかった。彼はひどい脚の痛み、特に長い間正坐したときの痛みに耐えてきた。永平寺では、肉体労働、睡眠、坐禅以外は全て正坐して行われる。彼は夜明け前から夜九時まで坐り通す日過察に耐えた。彼は半迦趺坐しかできなかった。たので、二週間坐禅をさせられたと彼は言つてゐた。フィリップは永平寺で比較的立派にやり遂げた。というのも彼は、気難しくはあつたが傲慢ではなく、愛される人柄であつたからである。彼は環境に順応するようになつた、という鈴木は忠告を守つた。立髪はフィリップが永平寺を去ることにひどく立腹し、別れの挨拶に部屋から出てこなかつた。「少なくとも一年間は滞在しなさい」と彼は言つた。

日本では、皆正坐をするように育てられてゐる。フィリップは、正坐は臍にも骨にも悪い影響を与え

る、と抗弁した。彼は立髪の読経の授業中二時間連続して、脚が火のように熱くなるまで坐り続けた。彼は永平寺に行った最初の日に、地藏院と呼ばれる一室で一時間もそのように坐らされた。それはフットボーよりも辛く、彼の生涯で最も苦しい経験であった。

しかし彼は永平寺の入門式に耐えることができた。

そのとき彼は林叟院で、裏庭の池の泡立った水に太い脚を腿まで入れ、鈴木が棒を使って滑り込ませた苔むした重い石を並び換えていた。一九六三年鈴木はフィリップをカリフォルニア州のヘイワードに派遣し、日本人の庭師の下で盆栽と石について勉強させた。彼は六カ月の間ほとんど毎日そこに通い庭師とともに働いた。このとき、彼は初めて鈴木と一緒に働いた。

フィリップは鈴木に尋ねた。「私は本当に僧侶でしょうか」。永平寺の僧侶たちは彼に得度の模様を尋ね、彼は正式な儀礼を行っていないから、得度は本物ではないと言った。彼は僧侶の物乞いである托鉢を行ったことはなかった。彼は日本に来るまで頭を剃ったこともなく、衣を授けられたこともなかった。

「もし私が僧侶だと信じないなら、私を中に入れなくてくれ」とフィリップは訝る僧侶たちに言った。彼ら

は彼を中に入れはしたが、適切な形式で得度しない限り、僧侶ではないと言いつづけた。「そのことについては鈴木老師と話をしてくれ」と彼は答えた。

「で、私は僧侶でしょうか、それとも僧侶ではないのでしょうか」

「物事は心の赴くところに行く」と鈴木は答えた。

「もしあなたが僧侶だと思えば、あなたは僧侶だ。もしあなたがそう思わなければ、あなたは僧侶ではない」

手のすいていたときに、鈴木はフィリップを白室に呼び、法衣の正式な畳み方を教えた。彼は衣を広げて置き、平行の二本の竹竿を使い、前後に折り畳み、パシ生地のように完全な四角形にした。フィリップは鈴木が彼に託して林叟院に返却した古い衣のことを思い出した。船の中で彼は、貧しい日系ブラジル人の農夫たちと一緒に寝た。三等寝台の傍らに衣を置いた。彼は片手に茶色の鞆を持ち、もう一方の手に小さなスニーカーを持ち税関に入った。税関の役人はその鞆に好奇心を抱いた。「ああ、これは鈴木老師が私に下さった古い衣です」と彼は答えた。役人は衣の中から五〇〇年を経た、古い達磨大師の彫像を見つけ出した。

「どうしてこれを手に入れたのか」と彼は訝って尋ねた。

「わかりません」

「これをどうするつもりか」

「林叟院に持っていきます。これは林叟院のものだと思います」

少しずつ、鈴木は林叟院からアメリカに持ってきた仏教関係の品物を返却していた。彼はそれらの代替品が手に入るまで借用していただけであつた。それは内密であつた。

クロードとポーリンは、グレアムとフィリップが毛のない頭で、黒い法衣を身に着け、水田の縁を、藁草履を履いて、注意深く歩いていく姿を眺めていた。彼らは鈴木に従い、ある家庭へ法要に行く途中であつた。この場の極端な形式主義がクロードの宗教的な好みに合わなかつた。

「その通りです」とポーリンはクロードの意見に賛同した。「日本の仏教は、アメリカで鈴木先生から教わっている簡素化された様式に比べ、かなり面倒です」。彼女は一年間日本に滞在しこうした事例をたくさん目撃してきた。「日本には木の中に飢えた化け物

や魂がおり、一五〇〇年の因習がそれに絡みついているのです」

鈴木の生徒たちは彼の古い友人たちにも会つた——義親の天野、陶工の鈴木静郎、そして高草山グループの存命者たちであつた。クロードは、息子の包一しか僧侶の弟子がいなかつたことに驚いた。次々と絶え間なく客人が訪ねてきた。彼らは同僚や友人、彼が始めた幼稚園の教師、在家の生徒たち、檀家、村人たちであつた。

毎日、鈴木と弟子たちは林叟院の外に出て、掃除をし、草を除き、窓を拭いた。村人たちが見に来て手伝つた。彼らは近く行われる大切な儀礼に備え、寺の準備をしていた——鈴木は林叟院の住職引退と、包一の住職就任であつた。包一も彼らとともに働き、姉の安子も屋内の掃除をし、きぬお祖母さんと一緒に食事の準備をした。彼女は安子の母方の祖母であり、いまだにこの寺の女家長であつた。きぬお祖母さんは暖かい炬燵に坐り、脚をテーブルに掛けた毛布の下に入れ眺め、ときどき注意を与えた。ときおり彼女は細い磁器製のキセルを取り出し、一摘みのタバコをふかした。

全ての準備が終わったところへ、ものすごい台風が襲ってきた。台風は屋根の瓦を吹き飛ばし、大きな枝を折り、壁を突き破り、再びそこから中がめちやくちやになつてしまった。グレアムは手伝おうとして、玄関口に叩きつけられ気を失った。林叟院の広範な支持グループとともに、彼らは大切な儀礼に間に合うように寺を元通りに修復した。

ペッチー夫妻は林叟院の玄関の外で、鈴木と彼の家族に別れの挨拶をしていた。彼らはグレアムの両親に孫たちを会わせるために、英国に向かうところであつた。グレアムにとって、鈴木と別れることには一抹の不安があつた。鈴木の状態はすこぶる曖昧で、将来については何も言わなかつた。彼はなぜグレアムの帰米の予定を問い合わせなかつたのだろう。あるいは彼に新しい僧堂における何らかの役割をなぜ提示しなかつたのだろうか。

鎌倉で、グレアムとポーリンはフィリップ・カプロウを訪ねた。彼は安谷について数年間学んでいた。カプロウは彼らが一年間日本に滞在しながら彼を訪ねなかつたことに激怒した。時間の無駄だ！ 曹洞宗の指導者たちは誰も悟りを開いてはいない——鈴木も、内

山も、永平寺の誰一人として悟りを開いてはいない。彼らは彼の師である安谷老師について学ぶべきであつた、とカプロウは言つた。「私はそうした悟りを開いていない師匠たちについて学んだことを、非常に幸せに思っています」とグレアムは答えた。四年前、カプロウ家が禅センターを訪れた際、素晴らしい時間を共にしたカプロウとこのような言葉を交わさなければならなかつたことは、失望であつた。

ペッチー夫妻はシベリヤ横断鉄道でヨーロッパに行くために暖かい衣類は何も持たずに、船でロシアに向かつた。——実際は、彼らは着ているもの以外は何も持っていなかつたのである。彼らの鞆は全て横浜埠頭への積替えの際、紛失してしまつた。ポーリンは買い物に行き、子どもたちに質素なミッキーマウスのブルーのジーンズと暖かいドナルドダックのブーツを買つた。彼女は夏のドレスを着て、グレアムはスーツを着ていた。これが、彼らがモスクワに到着するまで着ていた衣類であり、寒さを防ぐために新聞紙を身体に巻きつけていた。幸いグレアムが現金と書類を全部手提げ鞆に入れて持っていた。彼らが海に出て間もなく、あるロシアの婦人たちが、菜食主義のグレアムに無理にボルシチとソーセージを食べさせた。彼は新し

い世界に入ろうとしていた。そして彼にはその変化に対応する準備ができていた。日本の仏教は極度に骨の折れる代物であった。

一〇月二三日、鈴木俊隆は公式の巡礼の装束——黒い法衣を着て、丸い竹網笠をかぶり、下肢と前腕に白い木綿のゲートルを巻いた姿——に身を固め、大きな杉の木立の間を歩いていった。それは鈴木のお別れのよき日であった。彼は退院式で住職を引退し、包一は晋山式で父親の役割を継承した。

クロードは彼らがこの儀式の首座を務める役を、近縁の者に依頼しなければならぬことに気がついた。

彼にはこの役目を務めることができる実の生徒もしくは僧侶がなげないのか、と不思議に思った。弟子を持たない禅の師匠とは一体どういう師匠なのだろうか。ますます鈴木が平凡な曹洞宗の禅僧であるように思われてきた。曹洞宗の僧侶は、二〇〇〇〇人はいらぬであろう。あなたたちは一体仏教をどういう方法で学ぶのか、と彼は疑問に思った。最も優れた師匠を見つけるのか、それとも近くににいる僧侶が一番よい師匠なのか。鈴木はそのどちらであろうか。

さらにまた一つ、イメージを打ち壊すような形式的な行事が行われた。鈴木は今回の旅行で、林叟院を包

一に譲り渡しただけでなく、岡本昭孝への嗣法しほを行った。昭孝は鈴木について学んだことはなく、彼の見弟子であった、岡本憲道の弟子であり息子であった。嗣法は鈴木と岡本憲道との間に結ばれた古い約束に基づいて行われたものである。彼について学んだことのないこの二人の僧侶が日本における彼の唯一の法の継承者であった。

「あなたについて学んだ僧侶の生徒はいないのですか」とクロードは後で尋ねた。「いや、いない。私は日本では弟子を取ったことはなかった」と鈴木は答えた。

「私の父はそれほど偉大な人間ではないと思う者もあるのだ」と包一は、鈴木を崇拜する西洋の門弟たちに苛つきながら言った。「彼は私にこの寺を引き渡すまで、ここに留まるべきでした。彼は職場を放棄したと知っている人もいます。もし彼が留まっていれば、私は彼について学ぶことができたでしょう」。鈴木は他の師匠の方が包一のためにはよいであろうと考えたが、包一にはアメリカに来て彼の手助けをすることを考えてもらいたい、とも言った。父親の要求に従い、包一はその準備をしようとした。彼は好きな武術の剣

道を学ぶことを止め、家庭教師につき、嫌いな英語の勉強をした。これは包一にとつては大変苦痛であつたので、父親は手紙で英語の勉強を止めて、剣道の勉強に戻つてもよいとの許可を与えた。包一はまた、父親のように、檀家を見捨てることで、林叟院の檀家の人たちの反感を買うことを望まなかつた。さらに包一は、アメリカには全く魅力を感じていなかった。もし父親が林叟院を放棄していなければ、彼はいまだに永平寺に留まつてゐることができたであろう、と彼はフィリップに語つた。

包一にとつて、永平寺は苦しい場所ではなかつたと知り、フィリップは驚いた。その上包一は坐禪を好きでさえなかつたのだ。彼は道元の靈廟、承陽殿じやうやうでんの責任者として三年間永平寺で過ごした。今や彼は、林叟院を運営し、結婚し、家庭を持ち、檀家や末寺全体の世話をしなければならぬ——そして彼の責任には当然寺の派閥争いも付随してくる。

こんな台所でどうして結婚などできますか、と彼は父親に言つた。それは非常に狭く、薪を焚く炉のようになかまどがついており、調理に手間が掛かりすぎておよそ近代的というにはほど遠かつた。僧侶は高価なものを欲しがるような魅惑的な女性を求めるべきではな

い、と鈴木は言つた。こんな台所では誰もお嫁に来ないでしよう、と包一は答えた。鈴木は義親の天野や裕福な檀家たちに、息子が家庭を持つことができるように、台所を改装してほしいと依頼した。そしてそれはすぐに実行された。

鈴木がアメリカに帰るときが来た。彼は日本に帰国してなすべきことはやり終えた。林叟院を発つ前に、彼はクロードを例の神秘的な簡略化した得度式で、僧侶として得度した。そして彼に林叟院を西洋人も日本人も一緒に修行ができる寺にする第一歩として、寺に留まるように依頼した。彼はまたフィリップに東海岸に行き、彼と親密な関係を持つてゐるパーモントの禪グループの手助けをするよう依頼した。鈴木は近年、ニューヨーク、マサチューセツツ、ヴァーモントなどの東海岸の都市に数回旅行をしており、そこには多くの生徒や支持者がいたのだ。

彼は林叟院と藏雲院の裏にある、家族の遺骨を納めた場所を訪れた。彼は墓を清掃し、師匠の玉潤祖温、父親の仏門祖学、母のよね、二番目の妻ちよ、祖温の愛人好、そして二年前に自ら首を吊り自殺した、娘のおほみに深い悲しみを以て香を供えた。鈴木は家庭人

としては誇るべきものはなかった。この旅行で、彼はこれらの亡くなった最愛の人たちに対し、彼の最大の贈り物と唯一の償いを持参した——それは西洋人の弟子たちと、彼の仏種を広め、彼が生きかつ呼吸した二つの文化の間に仏陀の道を受粉させる希望であった。

* * *

通常私たちの精神は、
私たちがあつたものに執着、

あるいは集中しているときに、
非常によく活動していると考えます。

しかし実際には、

私たちの精神が連続的なものである、
と誤解しているために起こる

大きな誤りを犯しているのです。

私たちの精神は、

決して連続的ではありません。

それは連続的とか、

非連続的ということ以上のものです。

*Usually we think our mind is something very small
when we attach to or concentrate on something.
But actually we are already making
a big mistake because we*

*misunderstand our mind as something
which is continuous.
Our mind is non continuous at all.
It is more than continuous or discontinuous.*

鈴木が一九六六年一月にサンフランシスコに帰ってきたとき、彼は状況が著しく変わっていることに気がついた。本格的な文化の爆発が起こっていたのである。以前より長髪の若者が増えていた。サンフランシスコ・クロニクル紙のコラムニスト、ハープ・カーンは彼らに「ヒッピー」という仇名をつけた。募金運動により広まった評判は一層人々を坐禅に引きつけた。そして彼らの多くはビーズを身に着け、色彩豊かな、だらしのない服装をしていた。

私(デイウィッド)は新参者の一人で、テキサスからやって来た薄汚い、話好きの二一歳の男であった。一九六四年に大学を中退した後、その年の春と夏をミシシッピ州とアメリカ中西部で、市民運動や左翼の学生グループに関わって過ごした。その後一年間はメキシコで暮らした。一九六六年の冬に私はサンフランシスコにやって来た。数カ月間私はマリファナでハイになり、さまよい歩き、カーニバルのようなヒッピーのお祭り騒ぎを楽しんだ。数回私はLSDを摂取し、

友人の手引きで無言の瞑想をした。こうした経験の末、私はドラッグを捨て指導者を探し、瞑想を学ぼうと決意した。最初私が禅センターに行ったとき、鈴木は日本にいた。私は片桐とそこで坐禅をしていた人たちに心安さを感じた。坐禅と禅についてほとんど聞いたことがなかったうえ、誰からも特別な勧誘を受けたわけではなかったが、それにもかかわらず、一年間、毎朝午前と午後の二回の坐禅に参加する決意をした。

それからある日、鈴木が帰ってきた。最初の出会いは、坐禅の後で彼にお辞儀をしたときであった。私は心中にいろいろな考えが駆け巡り、ほとんど彼を見ることができなかつた。その直後、私はホールでサンダルを履いていた。部屋から出ていく人々の群れの背後に、事務所の中の鈴木の様が見えた。しかし、なお私の心は波立っていた。彼は振り向き、私の目を見て微笑んだ。そのときほんの一瞬全てが停止したように感じ、私は彼を見た。その後で、サイラスが私たちを紹介した。私の心は再び駆け回り始めた。私はそれについて何も覚えていないが、私の先生になつたばかりの男と直接触れ合ったその最初の瞬間の思い出が、スナップショットとして、今でも目に浮かぶ。鈴木が生徒たちとの絆を築き、目に見えない道に私たちを導い

た方法は、何にも増して小さな、一見重要でないように思われる、言葉によらない方法であった。私たちはほとんど全く自分たち独自のやり方でやっていたのであった。

鈴木が日本から帰つたとき、ほとんどの生徒たちは彼を鈴木老師と呼んでいた。アラン・ワッツは馬牧場を買う寄付金を一通の手紙とともに送ってきた。その手紙の中で鈴木「師 (teacher)」と呼ぶのを止めるよう提案した。ワッツは師というのは適当な肩書きではなく、いづれにしても生徒たちはこの呼称を間違つて使用しているのだと言つた。彼はまた「先生」と呼ぶことにも反対した。生徒たちは「鈴木老師」と呼ぶべきで「先生」は片桐のような補佐役に対して使うべきだ、と言つた。

リチャードやその他生徒たち数名は、長年彼を「老師」と呼んできたが、禅センターの人たちはそれまで鈴木をどう呼んだらよいか決めかねていた。その当時の「ウインドベル」の中で鈴木俊隆を参照すると、鈴木師ないし鈴木尊師 (Reverend Suzuki)、鈴木先生、先生、鈴木俊隆老師、鈴木老師、師匠鈴木、そして桑港寺の師匠と呼んでいる。

ワッツの提案は、彼が臨済宗に精通していたことに起因するものであった。臨済宗では「老師」という肩書きは実際「禪の師匠」に近い意味を持っている。曹洞宗では、「老師」は僧侶が自分より年配の僧侶を呼ぶときの尊称として使われている。

鈴木は生徒たちになぜ彼を老師と呼ぶのかと尋ねた。彼らがアラン・ワッツの手紙の話をすると、彼は腹を抱えて笑いだした。古くからの生徒たちが、会議の席で彼にそのことを話した。彼は反対したが、片桐と話し合った結果、最終的に譲歩した。そしてそれ以後彼は鈴木老師と呼ばれるようになった。

募金のパンフレットに対する反響は絶大であった。金が全米の至るところから入ってきた。鈴木が望んでいたように、土壇場で、ベックは未開発の馬牧場の二倍の値段の三〇万ドルでタサハラ・スプリングフィールド（温泉）を売ることに同意した。理事会は直ちにリチャードが、馬牧場のために集めた金二万二〇〇〇ドルを、移転準備の整っていたタサハラで購入に振り分けることを承認した。最初の支払いは一二月に行われた。しかしこの額の二倍に上る次の支払いの期限

が、数ヵ月後に迫っていた。二回日のパンフレットは、八万人の人たちに送られた。数ヵ月前までは、禅センターは、仏教の小さな秘儀的なグループや学者、芸術家にしか知られていなかった。今は、よかれ悪しかれ、広く知られるようになった。

非常に大勢の人たちが募金活動の援助に携わった。数多くの慈善興行や「ゼネフィット」*が、グレートフル・デッド、ビッグ・ブラザー・アンド・ホールディングカンパニー、クイックシルバー・メッセンジャー・サービスによってチエット・ヘルムス・アヴァロン舞踏場で行われた。アリ・アクバル・カーンは演奏会を開いた。シャルロット・セルバートとチャールズ・ブルックスはボディ・マインド・アウェアネス・ワークショップの開催を申し出た。アラン・ワッツは講演を行った。ゲイリー・スナイダーとその他大勢の詩人、芸術家、音楽家たちが時間、朗読、演技そして作品の寄付をした。鈴木は禅の催しに姿を現し、喝采している群衆に向かって手を振った。

大勢の人たちが余暇の時間を全てを、募金活動、事

*「ゼネフィット」(Zenefit)とは、Zen (禅) と Benefit (慈善) を合わせた造語。禅の慈善イベント。

務所での手伝い、タサハラでの準備に費やした。禅センターの会計係のサイラス・ホードリーは膨大に膨れ上がったグループの支出を賄うために、金を調達し無利子のローンを交渉した。禅センターにできるだけ支払い能力を持たせることを望み、彼はタサハラを引き続き夏のリゾート地として運営する案を強く支持した。来客の季節と夏の修行期間についての計画が作成された。予約の受付、食料品の購入、生徒たちの入会契約が始まった。

鈴木は、郵送されてきた大量の小切手、禅堂に満ち溢れバルコニーにまで坐っている坐禅の人たち、彼の講話を聞くために膨れ上がった聴衆を見て驚いた。

リチャードは鈴木を伴って東海岸に行き、講話をし、禅グループやキャンプリッジ仏教協会のエルシー・ミッチェル等の友人たちを訪ね、寄付をしてくれる可能性のある人たちに会った。鈴木はリチャードの健康について懸念した。どのようにして彼は活発に活動を続けることができたのであろうか。しかしリチャードは健康で元気に満ち溢れていた。

このような活動の中にあってもなお、鈴木は坐禅に専心し、寺を清潔に保ち、この興奮で盛り上がった事業のために目的を見失うことは決してなかった。事務

所の低い机に向って坐蒲に坐り、午後の時間をまるまる使い、鈴木は二番目のパンフレットの表紙に載せるための、不完全な円を自分が満足するまで、一筆一筆墨で描き続けた。

やらねばならぬ仕事如山積みになっているのを見て、鈴木は古参の弟子たちに手助けしてもらふ必要性を痛感した。ジーンはすでに帰国して活動していた。クロードは林叟院から戻っており、フィリップはバーモントの禅グループの手伝いには行かなかった。彼はまた英国にいるグレアムに手紙を書き、彼が日本で成し遂げた業績を賞賛し、永平寺でも安泰寺でも彼を高く評価している、と述べた。このとき鈴木は彼が帰ってくることを望んでいた。

「私は帰ってきて、サンフランシスコが全く変わり、以前よりも活動的になっていることに気がつきました。ここはすてきで暖かい。どうかあなたの義母様にここに戻ってくるよう伝えてください。」

彼はグレアムに、日本にいる僧侶の知野弘文（のらふみ）に手紙を書き、彼らが以前話し合った通り、アメリカに来て手助けすることを確認するよう依頼した。「私たちは今直ちにこの計画に専念しなければならぬと思います。なぜなら私たちはアメリカでも日本でも全国にこ

の計画を発表しているからです。英国でも一部の人は
ちはすでにこの計画を知っています。特に、もし私た
ちが失敗すれば、日本の人たちはもはや私たちを信用
しなくなるでしょう。私にとつてタサハラ計画は、最
大の関心事です。私はあなたができるだけ早くサンフ
ランシスコに帰ってくるよう希望しています」

鈴木はさらに最初のパンフレットから一文を引用
し、その意図をグレアムに転用し、彼にアピールし
た。

カーメル峡谷の近くの未開の地に禪の僧堂を設
立することは、アメリカの宗教史における重要な
出来事である。あなたがこの精神修養のための共
同体設立という最も古い歴史を持った企画に参加
されることを強く要望します。あなたの支持が
あつてこそ、この事業は可能となるのです。

ポール・リー

カリフォルニア大学哲学科教授、サンタクルス

グレアムはすぐに戻ることはできなかつた。彼はア
パートを一年契約で借りており、職も持っていた。な
ぜ鈴木は二人が日本にいたときに、彼に言わなかつ
たのだろうか。そうすれば彼は、英国の訪問を一カ月
間に切り上げることができただろうに。グレアムは現
在、禪堂を持っており、そこには数名の人たちが来
て、彼とともに坐禅をしていた。中川宋淵なかが そうどんの弟子が彼
を手伝っていた。つまり彼は少なくとも一年はその英
国の禪堂に滞在しなければならなかつた。鈴木は失望
した。彼は再びグレアムに手紙を書いた。「どうかあ
なたの奥さん、子どもさんたちと義母さんによろしく
お伝えください。ポーリンの描いた林叟院の右庭の絵
は、誠に真に迫っており、私はその絵を寢室に掛けて
います」。彼は昔の友人を訪ねるように、名前と住所
を知らせた。「私が駒澤大学に在学当時の古い英語の
先生、ノナ・ランサム女士」

タサハラ 1967-1968

CHAPTER 15
Tassajara

仏教の最終目標は

正しい人間の生活をもちたらすことである。

教え、教師、衆生、

仏教や仏陀を得るためではない。

しかしもしあなたたちが

修行することなしに

そのような生活を

得ることができると考えるなら、

それは大きな誤りである。

*The goal of Buddhism is to bring
about right human life.*

not to have the teaching or teachers,

or sentient beings, or Buddhism,

or Buddha. But if you think

that without any training

you can have that kind of life,

that is a big mistake.

禅心寺、禅マウンテンセンターとしてのタサハラの開所式は一九六七年、うだるような暑さの七月三日に行われた。開所式には桑港寺の檀家、鈴木之古くからの生徒たちや友人たち、そして一九六五年に山田に代わってロサンゼルスLos Angelesの禪宗寺を引き継いだ鷺見ササキ総監というにこやかな笑みをたたえた年配の僧侶等、一五〇人以上が出席した。前角同様、加藤和光も最初の一カ月の間、修行を先導するために、ロサンゼルスからやって来た。加藤は風景の美しさで大勢の生徒たちに驚いた。すでにかなりの数の生徒たちは質素な灰色の衣をまとっており、男性生徒の中には師に倣い、頭を剃っている者もいた。

日本であつたら、数日間続けられたと思われる儀礼は、カリフォルニアでは一時間あまり行われただけであった。それは大きな喜びに満ちた日であり、高い期待に胸を弾ませた日であり、そしてメンバー一同に

とって感謝を全員で分かち合う日であった。確かに鈴木木にとっても重要な日——彼の人生におけるマイルストーンであった。

知野弘文は、ロスアルトスの禅堂の僧侶となるために、日本からやって来た。しかし当面はタサハラで必要とされる人物であった。彼は親しみやすく、ゆっくりだが英語がうまく、キニューピッドのようなふくよかな顔をしていた。さらに彼は、永平寺の生活や儀礼の詳細を心得ており、生徒たちの禅の友となり、鈴木木の特ニカルな相談相手にもなると期待されていた。禅センターは、日本の曹洞宗とは公式な提携関係にはなかったもので、この西半球の先駆的な仏教僧堂の開設を公式に承認するために、曹洞宗の宗務庁から出席する者はなかった。しかし彼らは、弘文に託し気前のいい贈り物、太鼓と若干の儀礼用の器具——口の大きな椀型の鐘と、巨大で中空の、一本の木から作られ片側に龍を彫った木魚——を送った。木魚とは、読経中に拍子をとるために、先に布を巻いた木槌で叩くものである。それは木の魚を意味するが、むしろカタツムリに似ている。

前の晩、リチャード・ペーカーは正式な儀礼により、僧侶としての得度を受けた。初めて鈴木木は、個人

的で極端に簡略化された儀礼によらない、僧侶としての得度を行ったのである。リチャードは、家族、仲間、生徒たちや、大勢の親しい同僚たちの前で、濃い墨染めの衣を着て汗をかき、ばつが悪そうに見えた。鈴木木は彼の前に立ち読経し、厳かにシダで彼に水を振り掛けた。鈴木木はリチャードに「禪達妙融ヂェンダツミョウジュウ（禪を洞察し、神秘的に融解する）」という法名を与えた。彼はまた、焼けつくような暑い季節に始まった、タサハラの修行期間中の首座に任命された。通常は新たに得度を受けた僧侶が首座となるには数年を要したが、鈴木木はリチャードがすでに二回の入門式の間の勤めを果たしたと見なした。鈴木木はまた最初の首座の選択に当たり先任順位を無視した。ジョン、フィリップ、そしてクロードも儀礼に参加しており、三人共リチャードより数年早く僧侶としての戒律を受けていた。

リチャードは多忙な男で、予定が山積みであった。彼は依然として禅センターの会長であり、「ウインドベル」の編集長であり、そして今は首座でもあった。毎朝毎晩、坐禅の修行に取り組み、禅センターを今日の形に持ってきた大勢の人たちにとっては、リチャードはグループに溶け込まない、忙しいアウトサイダーのように思われた。すでにセンターにやって来て、相

当の期間を過ごし、将来の展望を持っていた人たちは彼の活動を評価し、他の人たちがこの機会を得るために、彼がある種の犠牲を払っていることを理解していた。しかしタサハラに滞在していた生徒たちの半数以上は比較的新しい人たちであった。しばらくタサハラに滞在していると、時間の経過は速度を緩め、全世界はその谷間のサイズに収縮されていくようであった。

開所式の当日は全員の心が一つになった。鈴木は講話を行い、その中で彼は、全員がいかにリチャードに負うところが大きいか、ということを明確に説明した。「私は禅達リチャード・ペーカーが、アメリカに仏教を打ち立てるために尽くした全ての業績に心から感謝しております」と述べた。このときを境に、リチャードは単なるオーガナイザーとしてのみでなく、筆頭の弟子として、タサハラの舞台裏から表舞台に躍り出た。

リチャードと鈴木は、タサハラでの生徒たちの生活のあらゆる面について検討を加えていた。リチャードは絶えず自分の考えを鈴木に話し、タサハラをどのよきな場所にすべきかという決定に大きな影響を与え

た。鈴木は彼の意見と考えを尊重し、しばしば彼の意見に従ったように思われる。彼はもちろん、クロード、サイラス、ビル、ジンやメルなど、他の生徒たちにも相談した。しかし大勢の人たちがこの口を実現するために懸命に働いてきた中であって、タサハラ設立におけるリチャードの役割は共同創立者に近いものであった。彼は禅センター、そしてタサハラについての定義付けをしたが、全ては鈴木を通して行った。二人は協力して活動するチームとなった。

生徒たちがタサハラに行く前に、鈴木とリチャードは、タサハラを男性も女性も共に住み、共に修行する僧堂にすることを考えていた。一部では男性と女性はそれぞれに分かれ、修行期間を設けるという話もあったが、あまり進展しなかった。大勢の鈴木と女性たちは、夫婦で一緒に修行をしており、彼の最も強力な生徒たちの中には女性もいた。リチャードは、少なくとも夏の間は妻と娘と一緒にタサハラで過ごしたい、と言っていた。彼はまた、男女共通の場としない限り、タサハラの購入資金を集めることは困難であっただろうと考えた。鈴木は僧堂の環境の中で、女性とともに活動した経験はなかったが、彼は積極的にそれを試みようとした。「女性なくしてタサハラはない」とリ

チャードはこれを要約した。そして鈴木は二五〇〇年の長い伝統を捨て去った。

鈴木は五日から七日間の且過寮を行いたいと考えたが、リチャードは三日間連続して坐禅をすれば、入会した八〇人前後の生徒たちの入門式としては充分であろうと考えた。彼らの中には今まで一度も坐禅をした経験のない者もいた。鈴木は彼の意見に従った。彼は英語で読経することには疑問を持っていたが、リチャードは一部だけでも、直ちに英語で読経を始めるべきだと主張した。二人は展鉢偈^{えんぱつげ}を翻訳し、昼食の間に英語で読経することで合意した。これは修行期間中に取るほとんどの食事と同じように、禅堂で坐蒲に坐りながら取るもので、坐禅の延長である。

リチャードの得度式で、鈴木は彼に仏教徒の倫理の指針である戒律を与えた。鈴木が戒律を読み、リチャードがそれを遵守することを誓約した。殺生、窃盗、五感の誤用、他人を見下すこと、教えを誹謗することを禁ずること、などである。鈴木は講話の中で、戒律について多少の話をしたことはあるが、一九六二年に行った一五人の在家信者の授戒会以来、その日初めて公に戒律についての講話を行った。戒律は、インドや中国の僧侶たちがこだわる規制として、いつも縁

遠いもののように考えられてきた。一九六二年の在家信者の得度のときと同じように、儀礼は日本語で行われた。リチャードは、それは翻訳されるのかどうかと尋ね、遵守できないことは誓願したくないと言った。

「ただイエスと言いなさい」と鈴木は答えた。

* * *

最も重要な点は

計画に従って共に行うことである。

The most important point is to follow the schedule and to do things together.

午前四時三〇分、早朝の薄暗い冷気の中で、一人の生徒が香を供え、タサハラ石造りの禅堂の祭壇から振鈴を持ち出し、起床を知らせる鈴を鳴らしながら各部屋を走り回った。ガラス製の石油ランプが部屋々に灯され、生徒たちは顔を洗い、歯を磨き、衣ないしはゆつたりした衣服を身にまとった。禅堂の正面には漢字の書いてある厚い板が掛かっていた。灰色の衣を着た女性が撞木を取り上げ、「板」と呼ばれる厚板を一分ごとに一度叩いた。その音は谷全体に響き渡り、全員に朝の坐禅のために禅堂に集まるよう呼び掛けた。生徒たちは禅堂での活動時の手のかたち、叉手と

呼ばれる、両手を胸のすぐ下で組むポーズで黙々と歩いた。

一五分後に鈴木が入ってくる時には、生徒たちは背筋を真つすぐに伸ばし、顎を引き、目を半眼に開いて坐蒲に、一部の者たちは椅子に坐っていないければならない。鈴木は祭壇に香を供え、自分の坐蒲に坐り、衣の裾を交差した脚の下に押し込み、身体を左右に揺らしながら次第に振幅を小さくして静止する。鈴木と弘文は背中合わせに坐り、その他の者は皆、木や石の壁に向かって坐った。禅堂の後部に置かれた新しい大きな太鼓が、室外に吊るされた新しい鐘に呼応して叩かれ、深い豊かな響きを生み出した。一〇分後にはタサハラの小川の響きか、ときおり台所でポットの触れ合う音か、誰かが咳払いする声しか聞こえなくなった。このとき彼ら全員が調和に包まれていた——鈴木、リチャード、フィリップ、ビル、サイラス、大勢の古参の生徒たちと、大勢の新しい生徒たちが、呼吸を追い、呼吸を数え、頼るものもなく信ずるものもなくひたすら坐り、見つめ、ある者は眠気を催し、ある者は心をざわめかせ、ある者はすでに脚の痛みを感じながら、急いではいけない。ただ坐禅をしなさい、そうすれば強迫観念も消え、感情に支配されることもな

くなるであろう。山が歳月とともに風や雨に曝されてなだらかになるように。

四〇分後に小さな鐘が鳴り、一〇分間の経行が始まった。鈴木は歩き回って生徒たちを観察し、悪いところを直し、拳を生徒たちの両くるぶしの間に入れ、両足はどれだけの間隔を保つたらよいかを示し、お互いが均等の距離を置いて歩くよう指導した。

午前中はもう一回坐禅の時間があり、それから桑港寺と同じような朝のお勤め——九回の礼拝で始まり、その後で古い漢語調の日本語で心経を三回読経する——が行われる。参加者全員が心経を覚えていた。ときおり鳴らす鐘とリズムカルな木魚を叩く音と共に、気分は高揚し、全員を一つの合唱、多重音階の、躍動的な調和と活力に溢れた、進音楽的な体験へと導いていった。タサハラでは全てのこと、アメリカ生活の他のいかなるあり方と比較しても風変わりであったが、新参の者たちにとって最も珍しいと思われるものは応量器による食事であった。応量器とは布で包んだ食器である。曹洞宗の応量器の使い方は単純ではあるが優雅な儀礼であり、読経し、包みをほどき、器と用具を並べ、食事後に洗い清める——これら全てを坐蒲に坐ったまま行うのである。タサハラでの応量器の

食事は積極的な、集中的な坐禅の一つの形式であり、おおよそ一時間近くを要した。実際に食事をする時間はその半分以下である。給仕の者たちが部屋に入ってくる合図の板が鳴らされ、礼拝し大きな壺から杓子で食物を取り出す。食事の終わりに、給仕人が湯を持ってきて、食器を洗い綺麗に拭きとる。洗った水はバケツに集められ、後ほど庭に撒かれる。食器を包み、最後の読経の後で生徒たちは坐蒲を膨らませて立ち上がる。小さな鐘が三回鳴らされるたびに全員が鈴木に礼拝する。その後で彼は出ていき、弘文とリチャードが後に続く。もう一度鐘が鳴ると、生徒たちは又手してゆつくりと歩き、禅堂で三時間過ごした後の昼の光の中に出て行った。

食事の後の短い休憩時間が終わると学習の時間となり、それから朝の作務が始まる。作務はうだるような暑さの中で終わった。一一時までには彼らは禅堂に戻り、サウナのように蒸し暑い部屋に戻り坐禅をし、簡単なお勤めの後で昼食を取る。午後の作務時間が終わるとお茶の時間となり、楽しい入浴の時間、夕方のお勤め、夕食、その後二時間の坐禅ないしは夕方の講話、と続く。一日が終わると、ほとんどの生徒たちは横になると同時に眠りについた——おおよそ九時半頃で

ある。一日のうち、七時間ほどが禅堂で過ごされた。四と九の日はほとんどの務めから解放され、その日は朝と夕方それぞれ一回ずつ坐禅の時間があるだけであった。朝食と夕食の間、生徒たちは睡眠を取った。ハイキング、洗濯、読書、雑談をしたりして過ごすことができた。

これがタサハラの生活をなしていたスケジュールであった。それは手ごわいもので、真剣な意図がない限りやり通すことは困難である。軍隊の経験を持った者たちは苛酷さはないが、新兵訓練所のようにだと言った。しかし体力のない者でも頑丈な者と同様に訓練を実行することができた。鈴木は予定の全てを実行し、朝から晩まで、来る日も来る日も、音調とテンポを設定し、慌てず、伸び伸びと、自然のままに振る舞った。

毎年、新しい生徒たちがタサハラに来て最初に出会う先生は、この予定表であった。「ただ予定表に従って行動しなさい」と彼らは到着したときに指示された。それで十分であった。彼らは必ずしも仲よくやっていたわけではないが、それにもかかわらずお互いに支え合い、尊敬し合い、来る日も来る日も予定に従って修行を続けたのである。それは山に登り、ジャング

ルの中を徒渉し、砂漠を横断するようなものであった。何時間も動かさずに辛抱強く待ち続ける狩人のようであった。それは痛みを感じ、ときにはえも言われぬ深い喜びの感覚を抱き、坐り続けることであった。生徒たちの心の中に、不安、混乱、恐れ、喜び、忍び笑いが湧き起こってくる。彼らが予定に従いともに修行し、カリフォルニアの原野で道元の道を打ち立てる第一歩を踏み出したとき、やがて、さまざまな鈴木生徒たちの心と意識の中に清澄と満足の瞬間が訪れ始めた。

* * *

庭の片隅にただで十分である。

Just as he sits in the corner of the garden is enough.

八月のタサハラは乾燥して暑かった。澄んだ空気が、太陽の光に蒸された鈴懸の葉の匂いと、台所の竈から流れてくる新鮮なパンの香りを運んできた。タサハラ川の水位は低く下がっていたが、なおゴボゴボと音を立てて流れ、トンボや、亀や黄昏どきに日の周りをぶんぶん飛び回るノーシーウムス(ヌカカ)と呼ばれる小さな蠅の住処となっていた。午前一一時、鈴木

はだぶだぶの黒い僧侶の作務衣を着て、フィリップとともに鉄の棒を使って大きな石を動かしていた。

彼を取り巻くタサハラは独特のリズムを奏でていた。発電機は低い音を立て、作業場ではテーパーソーがビューと唸り声を上げていた。使い古した一九五三年型のシボレーのピックアップトラックはツーバイフォーの建材を買いに、グラスホッパーフラットに向かって凸凹道を飛び跳ねながら走り、料理人は野菜を切りパンの生地をこね、禅堂の担当者はランブに石油を注ぎ、芯を切った。ジーンズや黒い衣を着た生徒たちは、埃っぽい道を歩いて小屋の傍らを通り過ぎながら、鈴木が新しい庭を作るのを眺めた。彼が庭で作務をするのは久しぶりのことであった。

気を散らすこともなく、汗をかき、蠅も気にせず、鈴木は黙々と、着実にそして明らかに満足感を抱きながら働いた。彼は何をするにしても、完璧に、全身全霊を込めて取り組んだ。かつて彼は言ったことがあった。「虎は全力でネズミを捕らえる」。鈴木にとって、タサハラの自分の庭で働くことは無上の喜びであった。生徒たちの中にあり、ただ黙々と身体を動かして、土に触れ、そこから生じてくるものに親しむことで。

私は、ほとんどの者が仏教をすでに与えられているものであるかのように学んでいると思いません。私たちがしなければならぬことは、食料品を冷蔵庫に入れるように、仏教の教えを保存することであると考えています。私たちは仏教を学ぶことは、冷蔵庫から食料品を取り出すことであると思つています。必要とするときはいつでもそこにあるのです。そうではなく、むしろ禪を学ぶ者は農地から、庭からいかに食物を生産すべきかに力を注ぐべきでしょう。大地に力を注ぐべきです。何も無い庭を眺めたとき、何も見えなくても、種を育みさえすればそこに芽生えてくるのです。仏教の喜びとは、庭の手入れをする喜びなのです。

ルイズ・プライヤーは初めての鈴木に付添人であつた。教えを請う先任者がいなかったため、彼女はこの仕事が多様なものであるかを自分で考え出さなければならなかつた。彼女は、彼が自分の居室を簡素で控えめな色で整えたやり方が気に入つた。全てのものはふさわしい場所に置かれていた。置かれているものは素晴らしい空間を保つていた。新しいものは何一つ

なく、居室のために特別に買ったものもなかった。彼女が新しい仕事についた最初の日の朝、鈴木は庭で働いた後で戸口の上がり段で足を洗つた。ドアのすぐ内側に立つていたルイズが彼にタオルを手渡した。そして下に降りて行つて彼の片方のつま先を掴んだ。彼は笑つて言つた。「それは仏陀の力の一つだよ」

「何ですつて」

「他人が必要とすることを知つてそれを与えることだ」

別の折にルイズが彼に言つた。「私は他の人たちと比べて不適格だと思ひます。私は仏教についてほとんど何も読んでいないのです」

「ああ、それは修行に来るには最もよい状態だよ」と鈴木は答へた。

ルイズは彼が浴室に向かつて歩いていく姿が好きであつた。彼は決して急がなかつた。途中で人に会うと、立ち止まり、相手の顔を真つすぐに見て礼拝した。ルイズは彼が会う人によつてどのように顔が変わるかを眺めた。ときおり彼は流れに沿つたアーチ型の橋の上に立ち、長い間下を見つめていた。

彼女は難儀な場面での彼を見たことがあつた。あるとき、彼女が彼を棄せ、サンフランシスコからタサハ

ラに向かつて運転していたとき、彼が車を道の片側に寄せて駐車するよう依頼した。彼は車を降りて道端で放尿した。ルイズは、彼がカーメル峡谷の書店を併設した喫茶店、サンダーバードで二杯目のコーヒーを飲むべきではなかった、と大きな声で言った。彼女が車の脇に脚を伸ばした途端、小さな岩がツツジや、マドローニヤや、オークの間を通り抜け急な斜面を転げ落ちるような音を聞いた。「おお！」と鈴木が叫んだ。「私のティーフが」。ルイズが行つて見ると、彼が入れ歯を落としたことがわかった。彼は浮浪者のごとく、哀れにも滑稽にも見えた。鈴木は土手を駆け降り、衣をすっかり泥だらけにしてしまった。二人は探しに探したが歯を見つけることはできなかった。タサハラに着くと、彼は車を自分のキャビンに直行させ、代わりの入れ歯がサンフランシスコから届くまで誰にも会おうとはしなかった。

* * *

私たちの規則は温かく、

思いやりのある心に基盤を置いています。

規則に文字どおりに従うことは

それほど重要ではありません。

*Our rules are based on a warm, kind mind.
It is not so important to follow the rules literally.*

タサハラが始まるまでは、規則はそれほど重要視されていなかった。戒律が市内での日々の生活にどのように活かされるべきかと考えを巡らせていた者がいたとしても、生徒たちがともに行っていた主な修行は坐禅であり、鈴木は常に坐禅は全ての戒律を包含していると強調していた。坐禅中前かがみになっていき、彼が警策で肩を押ししたとしても、彼と口論をする余地のないことは、テニスのコーチが、ラケットの正しいグリップを指示した場合と同じである。しかしタサハラは禅堂の外で問題は待ち伏せをしていた。特に男性も女性も僧堂という環境の中でもとくに近接して生活し活動していたからである。規則は重要性を増した。しかしながら、このように厳しい生活環境の中にあっても、鈴木のとった方法はおおらかなものであった。彼は規則を最小限に抑え、問題が起こったときだけ新しい規則を提言するにとどめた。

一九六七年四月、公式なオープニング前に、一部の者たちが最初の修行期間に備え、タサハラで準備を進めていた。鈴木はサンフランシスコからやって来て、

一週間若い勤勉な若者たちと行動を共にした。彼は予定に従い、早朝坐禅をし、日中は石材工事、掃き掃除、拭き掃除等の肉体労働をした。夜は講話をし、質疑応答が行われた。多くの議論を交わし、四六時中生活をとりにする新しい共同体の必要とする多くの問題を処理せねばならなかった。

ボブ・ハルパーンは鈴木最初の講話が終わると矢継ぎ早に質問した。ボブはこの二、三年間ロサンゼルスからやって来て桑港寺で行われた八月の撰心に参加していた。そしてこのとき彼はタサハラにいた。ボブは常に模範的な生徒になろうと努力し、何事も正しく行おうと狂信的に勤め、その過程で失敗を繰り返していた。鈴木は彼の熱心さと茶目っ気の故に、彼には甘かった。

ボブは日本の僧堂のようにたたくさんの規則を設けることは、タサハラにとってはよくないのではないかと尋ねた。例えば、生徒たちは修行の時間外に入浴し、そこでは多くの会話が交わされた。アメーバーが分化するように部屋は分裂した。真剣にうなずき合ったり、怒りを発散したりした。

*入れ歯が落ちてテイス（歯）の発音が変わった。

「そう、規則は重要である」と鈴木は答えた。「もし規則があればあなたたちはそれに従うべきだ。たとえ規則がなくても、必ずしも規則を作る必要はない」。

ちよつと間を置いて彼は言った。「ウン……そう……規則……結構だ……ある程度の規則は必要だ」。それから彼は目を輝かせて辺りを見回し部屋の隅に目を止めた。「ああ、あそここの箒を見給え。穂先を下にして立ててある。箒にとってはよくない。穂先が曲がってうまく使えなくなるか長持ちしない。箒は取っ手を下にして立てて置いた方がよい。これはよい規則だ」

その晩私はその場に居合わせた。そしてこれがタサハラ最初の規則であるといつも思い出している。

翌日の晩、講話の中で鈴木は入浴についての話をした。彼は生徒たちの若い自由な気持ちをよく理解できるし、浴場ではお互いが大変くつろいでいることを知って喜んでいと言った。一方、禅の僧堂においては、浴場は禅堂と洗面所と並んで三つの沈黙を守るべき場所の一つであると彼は言った。浴場の雰囲気は、お互いに挨拶を交わし、お茶やコーヒーを飲む中庭のようではなく、禅堂のようでなければならない。僧堂

においては、浴場は坐禅の場として禅堂に次いで重要な修行の場所であり、浴場においては沈黙を守り、男と女が別々に入浴することによって心を乱さないようにすることが、最善の方法であると彼は言った。その当時、男女は裸で混浴しており、ほとんどの生徒たちはそれが自然でよいことだと考えていた。彼はこの習慣を止めさせようとした。浴場には二つの深みのある大きな浴槽がある、と彼は指摘した。従って私たちは予定を変更することなく、男性は一方の浴槽で、女性はこの浴槽で入浴することができるのだと言った。

講話後にたくさんの質問が出た。日本の家族は公衆浴場で一緒に入浴しないのか。これは罪の意識にさいなまれた、アメリカの清教徒主義を支持する考えではないか。鈴木は、日本では男性と女性と一緒に入浴することは稀であり、日本人は肉体に関しては極めて慎み深いのだ、と説明した。彼は溜息をついてこうつけ加えた。彼らは日本人ではないのだから、あれやこれやと議論を戦わす必要はない、と。「とにかく、これが私たちにとって最善の方法である——日本であるとかアメリカであるとか、あれはよいとか悪いとかには関係ない。これは私たちの規則であり私たちはこれを実行すべきである」

ほとんどの者たちは彼の言ったことを了解したが、一部の者たちはさらに議論を続けた。禅センターが購入する前からタサハラに滞在し、引き続き滞在を認められていた二組の夫婦が、この新しい入浴の規則を一つの理由として去っていった。

数日後、男たちが厳しいその日の作務を終え、男性の浴槽に静かに浸っていたとき、小柄で裸の、ほとんど毛のない鈴木が、日本人が通常やっている、ここでは誰も真似をしない仕草——洗面用のタオルを陰部に当てる——で、熱い硫黄泉の深みにゆっくりと入ってきた。ボブがそこにいて、ハッキリと聞きとれるほどの深い呼吸をし、明らかに沈黙を守り、真つすぐに前を見つめ、先生の期待通りに、浴場で黙想をしている様を先生に示していた。鈴木はにじり寄り、無造作に彼の所に行つて言った。「おー、熱い湯だ。とても熱いと思わないかね」。ボブはどうしてよいかわからなかった。

私たちはあまりに親密になりすぎるとお互いのためになりません。お互いに助け合うことができないのです。従つて私たちにはある程度の距離が必要で、師と弟子との間にある程度の

距離を与えるものです。この距離があるために、生徒は自分の行動にある程度の自由を得、師は生徒をどのようにして手助けできるかを知るので、あなたがゲームをするとき、近づきすぎるとゲームをすることはできません。お互いの間にある程度の距離がある場合に初めて、何かをすることができるとです。

鈴木は天国と地獄の違いについて、中国の古い民話の話をした。地獄では皆非常に短い腕をしている。彼らは豪華な食物がたくさん並んでいるテーブルの周りに坐り、非常に長い箸を使って食べようとしますが、箸が長すぎ、腕が短すぎるために食物を口に入れることはできない。彼らは苦労して食べようとしますが成功しない。天国でも皆短い腕をしているが、テーブル全体でお互いに食べさせ合うので、楽しく過ごすことができるのである。

地獄の者たちは、食欲と利己主義に駆られ、常により多くのものを欲しがり、わけもわからず悪い習慣を繰り返すだけである、と彼は話した。そこで、習慣に縛られた生き物がどうしたらよいかと迷ったときに、この中国の民話の天国の人たちのように、いかにした

ら自然に行動することができようか。まず、と彼は言った。「私たちは迷妄の中にあつて私たちの修行を確立しなければならぬ」。これを達成する方法は、私たちの先達であり、尊敬できる人たちから受け継いだ規則を持つことである。彼はそれを竹の筒に蛇を入れることになぞらえた。彼は幼少の頃から生涯を通じて、このように矯正しなければならぬ多くのことを経験し、生徒たちが想像できないほど多くの困難に遭遇し、これを克服する努力を重ねてきたのである。

私が今話したいと思うことは、いかにしてあなたたちの気持ちを修行に向かわせるかということ。初心者にとって、厳しい規律、ある程度の規則による監視は不可欠です。硬直した規則は、私たちの目指すものではありませんが、もしあなたが絶対的な自由を得たいと望むならば、偏った二元的な思考から解放されるために、ある種の力、ある種の規律が必要。従って、私たちの修行は二元性の領域の中で、すなわち規則から始まるのです。それは、私たちがしなくてはならないこと、してはならないことの規則です。

いつものように生徒たちはなぜかと尋ねた。鈴木は、日本では誰もなぜかと質問することすら考えない、と答えた。彼は生徒たちの誠実で正直な点は評価したが、物事をあまり深く考えすぎると修行を確立させるのは難しくなる、と注意した。彼は不合理なこと是一切要求してないので、ほとんどの疑問はとぎが経てば自然に解決するものだと言った。フィリップは永平寺での格言を彼らに披露した。「最初の五年間はノーと言いな」。鈴木はしばしば言った。「ただそれをやりなさい！」

規則について、鈴木はときに寛大さを強調し、ときに厳格さを強調した。

私たちの道を修行するに当たって、全てのことを忘れて日々の生活の中に自己を見いだすよう努力しなければなりません。これが私たちが厳格でなければならず、厳格な規則を必要とする所以です。私たち人間の性質は、非常にずるいのです。厳格な道によらない限り、こちらに行ったりあちらに行ったりするでしょう。

当時のカウンターカルチャー的な信条は「心の赴くところに従え」ということであり、漠然としてはいたが、情熱的に抱いていた愛や自由の意識がみなぎっていた。大勢の鈴木は生徒たちはヒッピーの波に乗り、禅センターにやって来て、アメリカの中産階級の諸々の習俗を拒絶した。他の者たちは市民的不服従により政府の権威に反抗したり、あるいはサイケデリックスを使用した。彼らは社会の束縛をかなぐり捨て、解放を求めた。彼らは決して協調することのない、個人主義者と変人との全くの混濁であったが、鈴木のためではないにしろ、この規律のある生活を遵守した。今や彼らは暗い中に起床し、結跏趺坐あるいは半跏趺坐で坐禅をし、古の耳慣れない言葉とともに読経し、衣を着て、黙々と食事をし、肉体労働に励み、彼らがかつて拒絶した生活よりも遙かに規制された生活に従うためにあらゆる努力を傾けた。

この種の規則は必要です。なぜならあなたたちが修行を始めるか、宗教的な生活の必要性を実感する前に、あるいはあなたたちが神聖なものを崇拜する前に、必要性という領域に縛られ、環境に

完全に支配されているからです。あなたたちが美しいものを見たときは、できるだけ永くそこに留まろうとします。それに飽きたときには別の所にっこうとします。あなたたちはそれが自由であると考えられるかもしれませんが、それは自由ではありません。環境の虜になっているのです。それが全てです。少しも自由ではないのです！そのような生活は単なる物質的な浅薄なものにすぎないのです。

生徒たちのある者は、他の者たちよりも容易に規律に馴染むことができた。そしてある者たちは自分自身のこと以上に仲間の生徒たちが規則に固執することを心配した。ある者はより規律の少ないことを望み、ある者はより多くの規律を求めた。より多くの規律を求めた者たちはしばしばそれを遵守するために苦労した。ヒッピーの共同社会に一年間生活した経験を持ったある女性は、この綱引きをナチス対ジブシーと呼んだが、もちろんそれ以上に種々の色合いがあった。それにもかかわらず全ては円滑に機能していた。それは、鈴木がその間について仲裁し、方向を示し、彼らが固執していた立場を払いのけたからである。彼が示し

た道は予期した方向とはしばしば異なっていた。そして短い時間の間でさえも、彼は予期しなかったさらに別の方向を指し示していることがあった。彼は、重要なことは規則の精神に従うことであり、書かれた文字ではないとしばしば強調した。彼はまた、生徒たちは基本的には自分をしていることをわきまえており、彼らの進歩は彼らの努力次第であると言っていた。

規則の範囲内で、ある規制を破ってみる試みも必要です。ときどきそのようなことをやってみるべきです。そうすればあなたたちは自分のどこが間違っているかに気づくでしょう。

朝食後、作務の時間が始まる前に、鈴木老師の部屋で開かれる朝参あさまゐりと呼ばれる朝の茶会があった。その席で鈴木は古参の弟子や僧堂の幹部たちと会った。彼らはまず祭壇の前で揃って三拝をする。それから全員でおはようの挨拶をしながら、生徒たちは鈴木に礼拝し、彼は生徒たちに礼拝する。鈴木の下着が茶の準備をしている間、彼らは黙って畳の上で正座をしている。しばらくお茶を啜り、スナックを食べた後で鈴木が何か話をした。彼は朝の読経の出来映えについて

意見を述べ合い、季節の変化について話をし、彼の話が終わった後で他の者たちは自由に話し合った。それから毎日の僧堂の仕事——食事、予定の変更、次の儀礼、あるいは急に起こった特別な問題など——が話し合われた。ある者が許可を得ずにタサハラを去ったとか、あるいは禅堂に入るときの細かい点、など寺院の作法について鈴木が説明することもあった。それは幹部たちにとって、その日の最高の時間であった。それは、彼らが鈴木とともに和やかな雰囲気の中で三〇分間かそれ以上の時間を過ごせるからである。

夏の来客シーズン中の食堂の責任者として、私(デヴィッド)は通常朝の茶会に出席していた。ある朝私は寝坊をした。坐禅、お勤め、朝食に間に合わず、前夜お客と一緒に夜更かしたため、不快な表情をして、アルコールの悪臭を発散していた。私が寝過ぎたのはこれが初めてではなかった。お茶の席で、幹部の一人が私を見て腹を立てた。鈴木が話を始めた途端、それを契機として、その幹部は声高に話し始めた。

「鈴木老師、あなたは僧堂の規則に著しく違反した生徒をどのようにお考えですか」。彼が誰のことを言っているのかは明らかであった。

鈴木はお茶を一啜りして言った。「うん」彼はときどき間を置いたためにこのような声を出した。それから彼は言った。「誰しも懸命に努力しています。この修行はそんなに容易なものではありません」

「はい、しかし老師、目に余ります。いつも規則を破っているの誰の目にも明らかです」

「隠しておくよりは見えた方がいいでしょう」

「はい、しかしこの男は規則を守るべきではないでしょうか」

「もちろんです。しかしあなたたちもときに規則を破ったとしても、規則の精神には従うでしょう」

他の者たちは注意深く聞いていた。私は目を伏せていた。そして私をときどき辟易させたのは、誰かに指摘されたことよりは、自分の頭痛のせいであったように思う。衰れた男は自分の思惑が外れても、なおも続けて抗議した。「はい、しかし老師、規則も、精神も共に守ることはできないのでしょうか」

「もちろん」と鈴木は暗れやかに言った。「それが一番よいことです」

* * *

「殺生するな」はすでに死んだ戒律です。

「すみません」か、
実際に生きて働いている戒律である。

*Don't kill is a dead precept.
"Leave me" is an actual working precept.*

鈴木が戒律について講話をしていた。三番目の戒律にさしかかったときに、彼は言った。

不倫を犯すな（笑）。これは愛着を意味していいますね、極度の愛着を。この戒律は特殊な物事に對する愛着を特に強調しています。しかし、これは異性に對して執着してはいけないという意味ではありません（さらに笑いが起こる）。

一般的に、性は生徒たちの生活の中で、彼らが禪に関わる以前ほどには大きな問題ではなかった。鈴木の意味図するところは、タサハラの手定表である修行に専念することであった。その他のことに費やす時間も精力も、ほとんど残されていなかった。ほとんど全員が予定表に従って行動することで疲れ切っていたので、一〇時に火災監視人が就寝の合図の板木を鳴らしながら巡回する前に、眠りについた。しかししばしば一人か二人の生徒は遅くまで起きていて読書をしたり、

こつそりと風呂に入ったり、台所から食料を盗み出したり、あるいは他の生徒の寝袋に潜り込んだりした。

市内のセンターでは性の話題がより興味を惹いていた。一人の生徒が禪センターに来る前に、フリーラブの世界に関わっていた。禪センターに来てしばらく経った後、彼は禁欲生活を決意し頭を剃った。「完全な理解を得るためにはセックスをする必要があるのでしょうか」と彼は鈴木に尋ねた。

「あなたはセックスをしすぎない方がよいと思う」と鈴木は言っただけの間を置いた。「しかし少なすぎてもいけないだろう」と付け加え、爆笑を巻き起こした。

別の日にある生徒が質問した。「老師、私は性の欲望が非常に強いのです。坐禅をするときますます強くなります。私は修行に専心しようと努力しておりますので、禁欲しようと考えています。私はこのように自制すべきでしょうか」

「セックスは歯を磨くようなものです」と鈴木は答えた。「やってよいことではありませんが、一日中することとはよくありません」

鈴木が質問はないかと尋ねたところ、ピースの紐をたくさん身にまとった少女が手を挙げた。「鈴木老師、セックスとは何でしょうか」

「いったんあなたがセックスと言えば、全てのものがセックスになる」

彼は自分が理解できない文化的な相違があると感じ、生徒たちとこの問題を話題にすることはおおむね避けていた。ときおり彼は従来見掛けてきた僧堂の流儀が向こう見ずに六〇年代の性的関心に走りそうなきはこれを制御した。

「あなたは得度する予定だから、五年間はガールフレンドを持たない方がよい」と鈴木はタサハラの彼のキャビンで私に言った。

「えっ、老師、それはできません。私はもうここにガールフレンドがいるんです！ ご存知なかつたんですか」

「まさか」と彼は言つて目を逸らせた。

坐禅は好きですか。玄米は好きですか。

私は後者の方がよい質問だと思います。坐禅はトウ・マッチ (too much) です。玄米はほどよい

と思います。しかし、実際には大きな違いはありません。

共同生活の常として、タサハラではしばしば食事についての口論が絶えなかつた。ローフードを取る者に主張する者もあり、何でも食べることを主張する者もいたが、最も狂信的と思われたのは玄米の素晴らしさを強調する者たちであつた。彼らは禪と関わりを持つていた日本の菜食主義運動、マクロビオティックの影響を受けていた。それはしばしば禪マクロビオティック食事もと呼ばれていた。禪センターにやつて来た者たちの中には、玄米と大豆製品を食べることは禪に不可欠であるという考えを持った者もいた。しかし他の者たちは、これは禪とは全く関係がないと主張した。

鈴木はマクロビオティックを受け入れる訳でもなく、拒否するわけでもなかつた。「ある点では禪と共通している面もある」と彼はかつてマクロビオティックを拒否するよう求められて答えた。しかし一般的には、彼は食事についての狂信的な態度は好まなかつた。「私たちは出されたものを食べるのだ」。マクロビオティック食運動は、彼の古い友人の加藤弘造夫妻が

戦争中に熱狂的に推進した玄米食運動を思い出させた。タサハラでは大量の玄米が食事に供されており、鈴木はタサハラの記事は穀物を基本とし、あまり複雑に調理しないよう望んだ——しかし彼はイデオロギーが食事として提供されることは望まなかった。

鈴木はしかし、タサハラの記事には悩まされた。彼はタサハラに来て瘦せた。そしてそれはタサハラの記事が彼にはよくないからだという者もあった。彼はずっと白米を食べ続けてきており、義歯のせいで玄米やその他いろいろの食物を咀嚼するのに困難が伴った。エド・ブラウンは炊事場の長であり、鈴木が食べられない料理があったときにはエドは彼に別のものを用意した。しかし彼はいつも他の者たちと同じものを食べたいと望んでいた。ある日鈴木は歯を壊したので、彼のために軟らかい食事が出された。一擦り潰したバナナを出されることがいかに屈辱的かあなたには思いもよらないだろう」と彼はエドに言った。

エドは禅センターがこのリゾート地を買う前の年の夏から引き続きタサハラの記事で働いていた。そしてシエフからたくさんの料理を習った——特に絶賛を得たタサハラの記事の大きなパンの作り方を。エド

は定期的に鈴木に会って、食事や彼の部署におけるいざこざや、感情の問題や禅の修行について相談した。

ある日エドはひどく取り乱して鈴木の所にやって来て、彼の調理法について自分の意見を頑強に主張する人たちに悩まされていると訴えた——塩を入れるな、もっと塩を入れる、砂糖は要らない、もっと砂糖を使え、乳製品は使わない、もっとチーズを使えと言った類である。中にはもし彼らの嗜好に配慮しなければ、彼らは彼らに毒を盛ったことになる」と責める者もあった。鈴木はエドに彼は料理長だから自分で決めるべきだと答えた。さらに強く助言を求められ、鈴木は彼に言った。「米を洗うときは、米を洗いなさい、人参を切るときは、人参を切りなさい、スープをかき混ぜるときは、スープをかき混ぜなさい」

鈴木は元来菜食主義者であり、タサハラでの生徒の食事には肉や魚は入れないようにと主張したが、僧堂の外での食事については一切固執しなかった。彼の妻は桑港寺ではしばしば少量の肉と魚を彼のために調理していた。タサハラの記事は菜食主義の料理であったが、鈴木は生徒たちに対し、私たちは生きるために殺生しなければならぬのであり、肉を食べないからと言って道徳的に優れていると考えてはならないと注意

を与えた。「あなたたちは野菜も殺さなければならぬのです」と彼は言った。彼はしばしば、仏教はいかなるものにも、特に食物に耽溺することのないようにと強調するために食事を例に使った。

鈴木は、石を並び換えていたときに、またも指を押し潰した。今回はタサハラで壁の基礎を造っていたときであった。指は膨れ上がって紫色になった。ポプ・ハルパーンは彼を乗せカーメルに向かって車を走らせた。最初の数マイルの間は背筋を真つすぐに伸ばして坐り話をしないように特別の努力をしていたが、やがて彼は鈴木に仏教と菜食主義についての質問を始めた。鈴木はすぐに肩尻りを始めた。

指は折れてはいなかった。医師は爪に穴をあけて圧力を弱め、包帯を巻き、手を高く上げているようにと言った。

カーメルのブティックの横を通り過ぎたとき、鈴木がポプに言った。「食事をしよう、私は腹が空いた」。

ポプは菜食主義の食事ができるレストランを探し始めた。「ここで食べよう」と鈴木は言つて、「しかし、しかし……」とポプがぼそぼそ言っている間に、小さなハンバーガーの店に入つていった。

ポプは恐る恐るメニューを調べた。

「あなたは長い間肉を食べていないのではないかね」と鈴木が彼に言った。

「はい、老師、二年間食べていません。動物性の食事は全然。酪農品も卵も」

「それは結構」と鈴木が言つた。そのときウエイトレスが近寄つてきた。「あなたが先に注文し給え」

「私はグリルドチーズサンドイッチを注文します」。それはメニューの中で彼が注文できる一番よい料理であった。

「ハンバーガーをください」と鈴木が言つた。「肉をダブルにして」

料理が到着して二人は一口頬張つた。「どうかね」と鈴木が聞いた。

「まあまあです」

「私はこれは嫌いだ」「交換しよう」と鈴木が言つた。

彼はポプのサンドイッチを取り上げダブルミートハンバーガーと交換した。「うーん旨い。これは旨い。私はグリルドチーズが好きだ」

* * *

私たちの修行は

あなたたちをどこかよりよい所へ

連れていくものではありません。

ただこの場所に留まり、

特によくならうとも

特によく仏教を理解しようとはせず、

他の人たちと共に

予定に従って修行をしなさい。

最も重要なことは

いかなる陶酔にも関心を持たないことです。

いかなる陶酔も求めてはならないのです。

Our practice will not take you away

to somewhere better.

Just stay here and follow the schedule with others,

not trying to be too good or to understand

Buddhism too well.

The most important point is not to go on any trips.

Don't go on any trips.

タサハラは建築家ポール・デイスコーがキャビンを移動させていた。これは僧堂にてんやわんやの騒ぎを引き起こした飛び入りの仕事であった。生徒たちは興奮し、仕事に没頭した。学習の時間は中止された。昼食は非公式なものとなったので、衣に着替える必要はなかった。鈴木は精力的にこの仕事に打ち込んだ。トラック、ジャッキ、チェーン、ロープ、プリー、

板、そして二輪のトレーラーが用意されていた。この仕事を遂行するためには多くの人手が必要であった。

そして仕事の進行中には楽しいドラマがあった。

気力と、汗と、興奮が最高潮に達していたとき、鈴木とボブはキャビンが橋の上をゆっくりと移動して

くのを眺めていた。誰よりも喜んでこれを眺めていたのは鈴木であった。彼はボブの方を振り向いた。「私

は仕事に陶酔することが好きだ」と彼は額を拭いながら言った。「食事に陶酔するのは嫌いだ、仕事に陶

酔することは好きだ」

「彼女は真面目すぎる」と鈴木は暗にもう一人の生徒を指して私に囁いた。私たちは中央の砂岩の階段の傍らの、大きなオークの古木の根本に立っていた。私はそれをどのように理解したらよいのかわからなかった。私は彼が彼女のことについて話していると思

った。私は彼が彼女のことについて話していると思

ったが、実際には私のことを話しているのではない

かと、不安な気持ちになった。私は自分をもう少し

真面目にならなければいけないふざけ者だと思っ

たので、彼がなぜあのようなことを言うのかと不審に

思った。

鈴木はしばしば間接的な方法をとった。講話の中

で

で

で

で

で

で

で、たとえあなたたちを大勢の面前で叱責しても気を悪くしないようにと言った。なぜならその叱責は聞く準備のできていない他の者を意図していることもあり得るからである。「たとえ私があなたたちを警策で叩いても、それは私があなたたちを信用しているからである。あなたたちがよい生徒だからである。ときにそれはあなたたちのためであり、ときにはあなたたちの隣に坐っている者のためである」

ある夜、私は夕食後予告なしに鈴木のカヤビンに行き、中に入るように勧められた。当時、適度ということをわきまえなかつた私は、禁欲と放縱の生活を交互に繰り返していた。私は罪悪感を感じていた。私は炊事場でつまみ食い止められないと彼に告げた。私は夜中にとまどき炊事場に忍び込み、お客用のデザートを残りを食べ、ハーフアンドハーフを飲んだ。

鈴木は共謀者であるかのように机の下に手を伸ばした。「ほら、ジュリービンを食べないか」と彼は言った。

鈴木は針路の変更の困難なことや、習慣の根強さ、思想や信条の習慣性、妄想の力について充分に顧慮していた。彼は、生徒たちが迷い混乱することのないように、よい習慣を発展させることの重要性、あまり欲

張らないことの重要性を常に教えていた——これは戒律を遵守することへの呼び掛けであった。「最善の努力をしなさい」と彼は言った。しかし一方において、私たちは修行の範囲内でリラクセスしていれば、自然に戒律に従うようになるのだからと言ひ、あまり厳しすぎる努力はしないようにと注意した。

坐禅においても同様であった。一生懸命にやりなさい、しかしあまり厳しすぎてもいけない。思考は感情よりも扱いやすいが取り組み方は同じである。「坐禅をするときはあなたたちの正面の扉も背後の扉も開いたままにしておきなさい。いろいろな考えを来たり去ったりさせておきなさい。しかし彼らにお茶をサーブスしてはいけない」

ある日鈴木が私に土を手押し車に乗せて運んでくるよう要求したので、私は浴場の先の道を通って次々と土を運んだ。私たちは規則通りに黙って働きながら、彼の庭にその上で小さな山を造った。仕事をしている間に、私は禅について彼に質問した。彼は一言も答えずに、ただ仕事を続けた。やがて、作務時間の終了と入浴時間の開始を知らせるベルが鳴り、彼は私にお茶を勧めた。彼のカヤビンの外でお茶を飲みながら彼は

言った。「ねえ、あなた、私は教えることはあまり好きではないのだ。私は講話をしなくてもよければいいとさえ思っている。私はただ皆さんと一緒に坐禅をし、入浴し、簡素な食事を取り、そして作務をするのが好きなのだ。それで十分だ」

「恐らく私は非常に煙たい石油ランプでしょう（石油ランプが禪堂の照明に使われていた）。私が何か話し始めると、それはすでに煙たい石油ランプになっっています。講話をする限り、私はよいとか悪いという見地から説明しなければならぬでしょう、「これはよい修行である、あれは間違っている、これが坐禅を修行する方法である」というように。これはあなたたちに調理法を与えるようなものである。それはうまく機能しません。あなたたちは調理法を食することはできないのです。」

* * *

道元が言ったように、人々は真実でないことを好み、真実であることを嫌う。

As Dogen says,

*people like what is not true
and they don't like what is true.*

修行期間は最初の一回目は夏だったが、その後は、タサハラでは九〇日間ずつ、年二回の伝統的な修行パターンに落ち着いた。一回目は初秋に始まり、次は冬に始まった。フィリップが一九六八年二月に始まった二回目の修行期間の首座を務めた。鈴木はその冬ひどいインフルエンザにかかり、長い間、桑港寺の病床で過ごした。四月末のある日、鈴木は生徒たちに加わってホース・パスチャーに徒歩でピクニックに行った。私が自分で書いた「菩薩の赤ちゃんになりたい」という歌を歌い、彼が踊った。その日は特別楽しい一日であった。しかしながらその晩の彼の講話の間にムードは一変した。

タサハラは厳しい生活に極度に反発していた生徒がいた。彼は衣の下にダウンジャケットを着こみ、毛の靴下と手袋をして寒さを防ぎ、食事の間のひもじさを凌ぐために大量のキャンデー棒を部屋に隠していた。鈴木の話が終わった後で、この生徒が耐乏生活について質問した。仏教は中庸であるから、もし私たちが自らに対して厳しすぎるとすれば、私たちは道を外していることになるのではないか、私たちはこの日

本のくだらないことを全てやらなければならぬのだからか、私たちはもつと睡眠を取るべきではないか」

「あなたが疲れたときは、あなたの自我が疲れているのだ」と鈴木は言った。彼は生徒たちがあまり自分に厳しすぎてもいけないということには同意したが、禅は困難なものであり無知は深いものだと書いた。この暖かい衣服にくるまった男は、鈴木が怒り出すまで鈴木の本の答えに疑問を投げ続けた。そこでとうとう彼は爆發した——全ての者に対して。

「意気地なし！ あなたたちは意気地なしだ！ あなたたちは皆意気地なしだ！ 甘い薬ばかり欲しがらる！ 甘い薬は決して取ろうとしない！ 意気地なしめ！」

鈴木は禅堂の床に飛び降りて、さらに大声で叫びながら、教師用の短い警策でその生徒を叩き始めた。彼の警策は弾力のあるダウンジャケットには効き目がなく、枕を叩くような音を立てたので彼はますます怒り狂った。それから彼は歩き回り、全ての生徒の肩を二回ずつ叩いた。そして自分の坐蒲に戻ってからも激昂し話し続けた。

「あなたたちは真実を求めると言う。しかし誰一人として真実を求めてはいない！もし私が真実を語れば、私は一人ここに取り残されて坐りながら、あなたたち

が車で走り去る音を聞いているだろう！」

それから鈴木は穏やかになった。しばらく坐って沈黙を続け、そして溜息を吐いた。

「あなたたちの気持ちはわかる。あなたたちは、痛みは悪いことだと考え、苦しみは悪いと考えている。あなたたちは私たちの道は苦しみを克服していくことであると考えているが、苦しみには際限がない。私が若かった頃は、人々が受ける全ての苦しみは非常に悪いことだと思つた。しかし今はそれほど悪いとは思っていない。今は、苦しみは避けられないものだと思つている。苦しみは美しいとさえ思えるのだ。あなたたちはもつと苦しまねばならない」

それは理解し難い点であり、快い一日の恐ろしく憂鬱な幕切れであった。長く厳しい修行の後で、生徒たちは教えを受け入れることを拒否した、と告げられたのである。翌日の朝、朝食の後で鈴木は穏やかに話し、平静を失つたことを詫言した。しかし彼は自分の言つたことは撤回しなかつた。

* * *

日本では師は他の師、
特に他宗派の師が

自分の寺に来て講話をすることを嫌います。自分の生徒たちを

混乱させることを嫌がるとともに、妬むからです。

私も同様でした。

しかしここはアメリカですので、

私たちは新しい道を

学ぼうとしています。

In Japan,

a teacher doesn't like for other teachers,

especially from other sects, to come speak in his temple.

He doesn't want to confuse his students and is jealous.

I was the same.

But this is American,

so we are learning a new way.

小さなアメリカの禅の世界に、大きな出来事がその年の夏、一九六八年に起こった。禅の師匠の長老たちの一行がタサハラに来たのである。それぞれが極めて異なったスタイルを持ったこの僧侶たちの会合には、タサハラ原野の新鮮な香りと魔力が大いに役に立った。生徒たちは来訪予定の六人の教師の中に、中川宋淵老師と安谷白雲老師がいることを突如知り、興奮した。中川は、一九五九年桑港寺に鈴木を訪問し

たとき、非禅宗の経本を劇的な仕事で引き裂いた僧侶であった。彼らは、一九五八年にロサンゼルスで亡くなった千崎如幻の遺骨をタサハラで散布するために持ってきたのである。その中には、安谷白雲師の息子の量寿、ニューヨークの禅学協会の嶋野榮道師、ロサンゼルス禅センターの前角博雄師、ホノルルのダイアモンドサンガの設立者であるロバート・エイトケン師、そして千崎如幻によって創設されたロサンゼルス菩薩会の会長である、チャールズ・グーディン師などもいた。

六人の教師はいずれも自分の生徒たちに公案を使って教えており、積極性に欠ける曹洞宗の鈴木のみならず批判的な者もあり、曹洞禅は、眠っているような取種のないものだと言っていた。しかし今回は千崎如幻をアメリカ仏教の初祖として認め、鈴木のみならずばかりの僧堂参入を認める異宗派協調の三日間であった。中川の弟子でニューヨーク禅学協会の嶋野榮道は気前よく、タサハラをアメリカの禅仏教の腹、重心だと言った。

タサハラに来ていた生徒たちの何人かは、以前ないしは現在でも、来訪した教師たちの一人ないし数人について学んだ生徒たちであった。安谷は日本から来て

六年間アメリカで振心を行ってきた。彼は精力的な男で、警策を遠慮なく使い、しばしば大声を上げて次のような説教をした、一あなたたちは何のために無駄に時間を浪費しているのか！ 死ね！ 死ね！ 死なずに禪堂を去るな！」

鈴木は客人たちを浴室からスチームバスへ、それから小川の水を岩でせき止めた、小さなダムのある温水プールに案内した。彼らは暖炉の部屋に集まり、談話を交わし書道を楽しみ、作品を交換し合った。

禪堂では講演が行われた。禪堂の端に備えられた一方の壁から、別の壁に渡る一段高い演壇に、来訪の教師たちが鈴木、弘文、そしてリチャードとともに並んで坐った。年老いて、目が窪み、腰の曲がった安谷は、活気に溢れた声で話した。曹洞宗が公案による修行を放棄したことを叱責し、日本の寺院制度は禪の首に掛けられた重りである、と言った。古代の中国の根本に帰ることだけが、禪を救う道である、と彼は宣言した。これは彼ら全員が賛同した点であった。

中川は、祭壇の演壇上をもつたいぶつて前後に歩き、精力的な講話をした。講話は次々と続けられたが、誰も気にはしなかった——それはすごい馳走のようなものだったから。質疑応答が行われた。レ

ス・ケイはアメリカで仏教を確立するための最善の方法は何かと質問した。全員がこれに答えた。安谷、中川（両者の話は前角が通訳した）、嶋野が答え、それから鈴木（両者の話は前角が通訳した）、嶋野が答え、それから鈴木（両者の話は前角が通訳した）、「私には何も言うことはありません」と彼は言つて立ち上がり、傍らのドアから立ち去った。全員が喜んで喚声を上げ、会は終了した。

その夜の講話で鈴木は、安谷と中川がタサハラにやつて来て、生徒たちの心に彼が長年描き続けてきた龍に目を描いた、と言った。「私にとっては彼らから学ぶべき点が多々ある。以前、私は墮濟という言葉を聞くと、いつも多少の不安を感じたものであった。それは、私が臨濟宗に対して疎外感を持っていたからである。今はその言葉を聞くと、満たされた感じがする」（安谷は曹洞宗であったが、臨濟宗と同様に公案を使っていた。）

生徒全員が出席した儀礼の中で、鈴木は中川から千崎の遺骨の一部を受け取り、タサハラ祭壇に供えた。その朝、その夏唯一の雨が降り、人々が禪堂から早朝の陽光の中に歩み出たとき、二重の虹が彼らを迎えた。二週間後、鈴木、弘文そして若干の生徒たちが尾根に登り、千崎の遺骨を風の中になら撒いた。

教師たちが来訪した最終日の朝、全員が坐禅をし

た。ボブは警策を持ち、口をへの字に曲げて侍のよう
な顔で睨みつけ、かつての師であった前角や安谷に
彼が軟弱になつていないこと、曹洞宗は眠ってはいな
い、ということを示そうとした。彼は居眠りしていた
生徒の前に立ち止まり、幅広いの警策を彼女の肩に置
き、両肩を叩いた。彼らは互いに会釈を交わし、彼は

歩み去つた。栗色のリノリユームの通路をゆつくりと
歩きながら、彼は目を上げ石油ランプの光の中に、壇
上の歴史的な役割を演じた、仏法の伝達者たちを眺め
た。鈴木、安谷、中川、嶋野、前角、(ハワイから来た)
エイトケン、リチャード、弘文。皆、コックリして寝
息を立てていた。

市内 1968-1969

CHAPTER 16 The City

円になりたいと思うなら、
まず四角にならなければならない。

*If you want to be a circle,
you must first be a square.*

サンフランシスコに戻ると、全ては活発であった。鈴木生徒たちは常に桑港寺の禅堂、台所、事務所に積極的に姿を見せていた。禅センターの常勤の秘書を務めていたイヴォンヌ・ランドは、片桐と共同で事務所を使用していた。イヴォンヌはスタンフォード大学の卒業生であった。彼女は数年前に織物のクラスでヴァージニア・ペーカーと出会い、ペーカー夫妻と親しくなった。禅センターで働く前は、彼女は私立学校で数学を教えており、結婚し二人の子どもをもうけた。彼女は植物と動物を愛し、生まれつき人の手助けをすることが好きな、三〇歳の有能かつ明敏な女性

であった。彼女は、鈴木が言うところの、古参の生徒たちの一人であった。鈴木俊隆は生徒たちが桑港寺にやってくる時期によってそのように呼んでいた。鈴木に会うや否や、イヴォンヌは彼の周りにいるというこゝとだけで満足し、わずかばかりの手当てで、禅センターの秘書の仕事喜んで引き受けた。僧堂の誕生に当たり、その場に居合わせたことに彼女は感激した。イヴォンヌは事実上、一夜にして理事会のメンバーになったのである。

リチャードは事務所に来て冗談を振りまき、イヴォンヌから最新の情報を得てから、タサハラに向かつて出発した。クロードは、坐禅の生徒たちが共同生活をし、食事を取っていた、街路を隔てた向かい側の賃貸の五棟のアパートの管理をしていた。新米の者たちは、そのほとんどが二〇歳代であったが、禅を学ぶために桑港寺の階段を上っていった。こうした全ての活

動が、これら鈴木の下に集まった坐禪の生徒たちと、数の上で凌駕^{よぎ}していた日系アメリカ人の檀家との亀裂を深めた。

ヒッピー時代のあなたたちの生活はとても変わっています。それは仏教徒の生活とよく似ていると思います。これが、あなたたちが仏教を好む理由かもしれません。しかしもしあなたたちが仏教徒になれば、あなたたちの生活はより大きく変化するでしょう——普通のヒッピーではなく、超ヒッピーになるでしょう。あなたたちの生活様式は、仏教徒のように見えますが、十分ではありません。あなたたちが自分の修行の弱点から目をそむけることなく、厳格な修行を積めば、最終的によい修行をすることができるようでしょう。次第にあなたたちは、禪の師匠たちの言ったことを理解し、彼らの生活を評価するようになるでしょう。

大勢のヒッピーやさまざまな種類の若者たちが、サンフランシスコの街頭にも桑港寺の禪堂にも現れた。禪センターの生活は、彼らの大多数の者にとってあまりにも形式張っており、規律が厳しすぎた。そこで

は、教義上の論争が絶えなかった。当時の風潮は精神的なものとは何か、禪とは何か、という考えが充満したものであった。その言葉は魅惑的で、³¹ "That's very New" (まさに禪そのものだ) のように自由に使われた。

人々は禪を自分たちの望むものには何にでも当てはめた。「サンフランシスコ・オラクル」というサイケデリックの雑誌は、禪センターの般若心経のチャントイングのカードに、寝そべって交差する裸の女性の飾りを付けて印刷した。禪は現行の、最も格好のよいものであると思われていた。禪センターは、しばしばこのような考えに対する解毒剤——沈黙、静寂、坐禪の厳しき、集団で誦経するほとんど軍隊式とも思われる歯切れのよさ、掃き清められた建物の中での規律ある雰囲気、そして古参の生徒たちの控えめな服装と短く刈った頭髮によって——として機能した。

「おい、あなたたちは堅苦しいぞ」とパチュリ香油の匂いを漂わせた長髪の、色鮮やかな衣類を着た大学中退の若者は言った。一本当の禪は街頭にあり、踊り、陶酔しているのだ。とにかく、あなたたちの先生は悟ることなどできない。奴は頭を剃っている。ということとは「私は頭を剃ろうとしている」という意識を持たなければならぬ。つまりは彼の心は澄み切っていない

いということだ」

ある生徒が先頭に立ち、ヘイト・アシユベリーに禅堂を造る運動を始めた。彼はストレイト劇場の中にある、予定していた場所を片桐に見せた。片桐はヒッピーには慣れてしたが、この場所はまさに彼らの活動の中心にあった。彼は鈴木に、ここでは禪を学ぼうと必要な規律を守ることが不可能であろうと告げた。

生徒たちは一九六五年以来、サイケデリックスについてしばしば片桐と鈴木に話をし続けていた。二人の間では、鈴木がこの問題をより真剣に取り上げた。過去数年間に彼の下にやって来た生徒たちの多くは、サイケデリックスが仏教に対する関心と呼び覚ました、と信じていた。彼はリチャード・ペーカーが、サンフランシスコのカリフォルニア大学の公開講座で、アメリカにおける最初の重要なLSD会議を企画したことを知っていた。ヘイト・アシユベリーの禅堂の計画を推進していたその生徒が、鈴木にLSDを試してみよう強く勧めたので、ついに鈴木はその生徒から当時から非合法法ではなかった、LSDのカプセルを受け取った。一週間後、彼はそれをトイレに流すことに決めた。その地区の最も大きなアングラ紙の記者がタサハラで鈴木取材した。彼はLSDについて五分間話

をした後、鈴木の立場を見極めることを諦めた。彼が知り得たことは、鈴木がLSDをいかなる点でも役立つとは考えていない、ということであると云った。

スタンフォード大学のある教授が鈴木に、大勢の大学生たちが常時マリファナを吸っており、LSDを使っていると語った。彼らにとって実験をするという点では役に立つかもしれないが、彼らの勉強の妨げになっている。この問題について鈴木はどう対処しているか、と尋ねた。「いや、何もしていません」と鈴木は答えた。「私はただ彼らに坐禅の仕方を教えるだけです。彼らはそうした麻薬のことはすぐに忘れてしまします」

鈴木はときどき生徒たちに幻覚症状があるときは寺に來てほしくないと云っていた。サイケデリックスに關わってきた、あるカップルの結婚式の席で、彼はこう云った。「私たちの道はある種の深い経験を追求することではない。私たちはただあるがままの自分を認めるものである。私たちは、薬物は使わない。薬物に頼ることは浅薄な考えである」。しかしながら、概して彼は薬物やアルコールに関して、あまり心配していないかったように思われる。彼は生徒たちの中に、より有害な愛着があることを認めていた。彼がアルコー

ルや薬物などの使用や配布を禁止している戒律について語るとき、しばしば驚くべき解釈をすることがあった。「これは仏教を売ってはいけないということがである」。すなわち、「これは他人に薬物を与えようとしてはいけない、仏教の優れた教えを自慢してはいけないということである。酒だけでなく、精神的な教えもまた人を酔わせるものである」

アレン・ギンズバーグはビートの代表詩人として、またヒッピー運動の英雄として認められてきた。彼は早い頃、アカデミーや日本人街で数回鈴木に会ったことがあり、後にはリチャードが企画したパークレイの詩に関する大きな集まりの席で会った。一九六三年、ギンズバーグはアジアへ、長旅に出掛け、旅行中にヒンドゥー教と仏教についての調査をした。京都で彼はルース・フラリー・佐々木の寺を訪ね、大徳寺の境内にあった小田老師の寺で、古くからの親友ゲイリー・スナイダーとともに六週間坐禅をした。彼はこの初めての坐禅の経験を大変喜んだとともに、彼とケルアックが数年前に、西洋での最初の禅堂の一つである、マリオンカウンティの、スナイダーの馬牧場庵（ホース・バスター・ハーミテージ）を訪問したとき、彼らに坐禅を

紹介しなかったことについてスナイダーにいささか不満を抱いた。アメリカに帰国して間もない一九六三年の秋、ギンズバーグは数回桑港寺で瞑想した。それは彼にとつては多少堅苦しいものであった。彼は瞑想中にシンバルを叩いたり、気ままに誦経したり、ヒンドゥー教の歌（「マントラ」）を歌うことを好んだからだが、彼は常に禅センターの修行を褒め、人々にときどき禅センターを訪ねるように勧めた。

一九六七年一月一日、ギンズバーグと鈴木は再び面会した。一部の生徒たちが鈴木をゴールデンゲート・パーク内のヒューマン・ビー・インに連れて行った。ここには大勢のヒッピーや、仲間の旅行者や風変わりな連中が集まり、お祭り騒ぎをして踊り、酔っぱらい、日差しを楽しんでいた。例によって、奥さんは休息をとった方がよいと言って、彼を引き留めようとしたが、その日は予定のない土曜日の午後で、一部の生徒たちが彼に行こうとせがんだので、彼はそれに従った。鈴木はステージに迎えられ、そこでギンズバーグ、ティモシー・リアリー、ゲイリー・スナイダー、そして詩人のマイケル・マクルーアらと一緒に席についた。一人の若い女性が彼に、杖の先に色とりどりの色彩が施された、六角形の宗教的シンボルの付

いた「神様の眼」を手渡した。これはアメリカ・インディアンに起源を持つと言われているらしい。しばらくして彼はそれを他の者に手渡し、別の人から花を受け取った。彼は花を持ってそこに坐り、花売りの子どもたちを眺め、音楽を聞き、理想主義的な演説を聞いて楽しんだ。クリアー・ライト・アシッドの工場主のオウズリーが落下傘で降下したときにも彼はそこにいた。しばらくして鈴木は暇乞いをし、家に帰った。ゲイリー・スナイダーがギンズバーグに、鈴木が来たことは若者たちの熱気には享樂主義とばかり騒ぎ以上のものがあるということを確認したもので意義があった、と語った。

一九六八年春、ギンズバーグは桑港寺にやって来て、鈴木への翻訳した「ハートストロラ（心経）」を、公衆の前で歌いたので使用させてもらいたいと依頼した。「私は翻訳されたもの全部に日を通してみました」とギンズバーグは言った。「そしてあなたの訳したものが最も興味深いものでした。あなたのものは非常に簡明です」。彼はそのスタイルを「電報文体」と呼んだ。鈴木はそれを翻訳とすら考えていなかった。ギンズバーグは、坐禪の生徒たちが桑港寺で漢文体の日本語でお経を唱えるために使っていた、お経を書い

た紙片を彼に見せた。それにはローマ字の音節と、漢字と、その下に英語で語句の基本的な意味が記してあった。鈴木は心経を英語で読経する考えを持ったことはなかった。ギンズバーグはそれを記録し作曲した。彼は鈴木の前で自分の作った曲を歌い、これを公衆の前で歌ってもよいかと尋ねた。「もちろんです」と鈴木は熱を込めて答えた。「どうぞおやりください。あなたは正しいスピリットをお持ちです」

新しくやって来たある熱心な生徒が鈴木老師に、彼の近くにいたいので寺の中に移り住みたいと言ってきた。「それは結構なことだが」と鈴木は答えた。「それでは他の生徒たちが嫉むでしょうから、朝の坐禪の前に寺に来て一緒に掃除をしませんか」

翌朝彼は四時一五分に鈴木の前に来て、生徒たちが坐禪のために到着し始める四時四五分まで、二人で禅堂、ホールと便所を掃除した。二人は掃除機をかけ、モップで拭き、塵を払った。

ある朝、掃除の途中で鈴木が中座した。突然ノックをする音が聞こえ、続いて日本語で呼ぶ声が聞こえた。鈴木は彼の事務所の脇の洗面所で、残っていた歯を磨いていた。彼は騒音が何か確かめようと階段の所

に行つた。彼とその生徒はますます激しさを増す音と、叫び声の出所を突き止めようとした。鈴木が地下室のドアを開けた。

そこには奥さんが激怒して彼に向かって金切り声を上げていた。彼女は一晚中鍵を掛けられ、閉め出されていたのである。前の晩夫人たちのクラブの会合が開かれ、彼らは立ち去る前に見回りをし完全に戸締まりをした。鈴木が上で本を読んでいる間に彼女は風呂に入っていた。最後に彼女が戻っていないことに気づかずに彼は眠りについた。彼はいつもの通り夜中に小用に起きたにもかかわらず、彼女がベッドにいないことにも、戸口に彼女のサンダルのなかつたことにも気づかなかつた。彼女はマシガンのように矢継ぎ早に彼に怒鳴り立てた。

鈴木はこの真相を知つて笑い出した。あまりに激しく笑つたので歯磨きの泡が口から着物に飛び散つた。新参の生徒はその場から逃げ出した。

* * *

思考の世界は

通常の二元的な心の世界である。

純粹な意識、すなわち気づきの世界は

仏心の世界である。

思考の世界における現象は私たちの知性によつて

絶えず命名され分類される。

気づきの世界は

分類したり命名したりはしない、

ただ反映するだけである。

純粹な意識の世界は

このように思考の世界における

対立するものを包含する。

The world of thinking is

that of our ordinary dualistic mind.

The world of pure consciousness or awareness is

that of Buddha-mind.

Phenomena in the world of thinking are

categorically being

named or labeled by our minds.

The world of awareness does not label or name

it; only reflects. The world of pure consciousness

thus includes the opposite in the world of thinking.

アラン・ワッツ、リチャード・デ・マルティーン、

そしてエーリッヒ・フロムは、とりわけ頻繁に禅と精神分析について書いている。精神分析学者や精神科医の中には、坐禅やその他の形式による瞑想に興味を持

つ者もあつた。これは自分たちの患者の役に立つのだからか、瞑想とは何をする事なのか、意識について学ぶことがどう役立つのだろうか。ラングレイ・ポーター大学のジョー・カミヤマ博士は瞑想者についての実験を行っていた。禅センターの一部の生徒たちは、瞑想したときに彼らの脳波がどのように変化するかを知るための、脳波計の実験に協力するようになった。

多くの生徒たちの脳波は、心の平静の状態を示すシータ波を伴うアルファ波の状態を長く持続した。リチャード・ペーカーとエサレン研究所の彼の友人マイケル・マーフィーは、ヨーガや禅の師匠の瞑想に特徴的なシータ波を長時間放出した。鈴木と片桐も装置を取り付けたが、すぐに眠ってしまった。

鈴木はかつて会ったことのある分析学者たちから得た情報に基づき、西洋の心理学や精神療法のある側面については尊重していたが、それを理解したとは言わなかつたし、それを禅と比較しようとはしなかつた。彼は、仏教は修養の方便ではないことを明確にし、彼独自の仏教心理学や心の分析学を明らかにし、身体、心そして意志について述べている。

禅を学ぶ方法は、常に自己に気づき、自己に注意深くかつ誠実でなければならぬ、ということ。気づきとは、禅に關することを含めて物事を読み取るとき、心がいかなる觀念にも捕らわれてはならないということ。心は開かれていなければなりません。同様に景色や音に対しても、心の自己への気づきが失われたり惑わされたりしてはなりません。言い替えれば、自分の行っていること、進行していることについて、常に気づいているということ。です。

アーサー・ダイクマンという名の精神科医兼学者が、五〇年代の初め、森の中で、毎日一人で瞑想を始めたところ、生活が一変するほどの大きな経験をした。この経験は、彼を長年にわたる瞑想を取り入れた臨床的な実験へと導いた。彼はその結果に驚いた。全員大学生であつたが、対象者の多くがわずか一五分間坐り、青い花瓶を見つめるだけで顕著な意識の変化を経験したのである。こうしたことを生涯続ける人たちに一体どんなことが起こるのであろうか。優れた瞑想の教師を見つけようと、彼は東海岸の同僚たちによって推薦された鈴木俊隆に会うためにサンフランシスコ

にやつて来た。

ダイクマンはテープレコーダーを持ってきたが、鈴木は使用を断つた。彼は鈴木に彼の研究について説明し、意識をよりよく理解したいと語った。鈴木は彼にロサンゼルスのある安谷の所に行き、摂心に参加し坐禅をするように勧めた。摂心が何かも知らずに、ダイクマンはロサンゼルスに行き、数週間後に戻ってきた。彼は鈴木が彼をロサンゼルスに行くように勧めたのは、偶然日程がよかつたせいなのか、あるいは彼を試したいといういたづらっぽい考えからなのか、それとも彼を見殺しにするためだったのか、理解できなかった。

彼は変性意識状態の驚くべき経験をした。あるときは、彼の頭が消えてなくなつてしまったように感じ、夜中に彼は、何者かがブロックを打ち壊しているように思い目を覚ました。隣の寝袋の男が睡眠中に軽く唇で音を立てただけであった。安谷について公案を勉強し得た経験に感銘を受ける一方、ダイクマンは引き続き鈴木を探し求めた。「彼のいるところに私は行きたいのだ」と彼は妻のエッタに言った。「正気のあるところだ」。彼らはその夏タサハラに行った。彼らは非常に活発な自分たちの娘がそこに馴染めないのではないかと心配したが、問題はなかった。彼らは、

娘を鈴木の話にも連れていった。そしてエッタは子どもがなぜ静かになつて眠つてしまうのか不思議に思つた。

鈴木はときどき講話の中でダイクマンの難問に直接答えるかのように話すこともあつたが、ダイクマンにとつて鈴木の言葉よりも重要と思われたのは、彼の態度、世界観、そしてその透明性であつた。

彼が禅センターで見聞きした経験から判断し、鈴木は坐禅の間に生じる特殊な精神状態により興奮させられることはない、ということがわかつた。講話の後で、個人的な三〇日間の摂心から帰つてきたばかりの一人の生徒が鈴木に、彼が到達した心の状態をどのようにして維持すべきか、と尋ねた。

「呼吸に集中しなさい、そうすればそのような心は消え去るでしょう」と鈴木は答えた。

別の講話の中で鈴木は言った。「もしあなたが自分の坐禅に満足できないとすれば、それはあなたたちが何か効用を得たい、という観念を持つているからである」と。次の機会にダイクマンが鈴木と話をしたとき、彼は自分の経験の中により明らかなもの、躍動的なもの、本質的な価値——言葉では規定できない何か——があるように思う、禅を覗き見たような気がす

る、と語った。「その通りかもしれない」と鈴木は答えた。しかしやがてダイクマンは失望した。彼はこのような高揚した心の状態を経験したものの、それはすぐに去っていった。これは一体何の役に立つだろうか。

鈴木は笑って答えた。「その通りです、何の役にも立ちません。こうした心の状態は訪れてはまた去っていきます。しかしもしあなたが坐禪を継続すれば、その底に大切なものがあるということがわかります」

「そうした大切なものを得ることはできないでしょう。なぜならそれを得ようとすれば、それは逃げ去ってしまうからです」とダイクマンは言った。

「その通りです」と鈴木は答えた。

ダイクマンは引き続き鈴木に会いに西海岸にやって来た。ほとんどの者たちと同様に、彼が訪ねてきた理由は、彼が滞在した理由と同じではなかった。彼は意識についてよりよく知りたいと思ひ、最初にやって来たときに鈴木が言ったことを思い出した。「私は意識については何も知りません。私は生徒たちに、どのようにして小鳥がさえずるのを聞いたらよいか、ということをお教えようとしているだけです」

禪の真の経験はエクスタシーや、神秘的な精神状態のようなものではなく、深い喜び、喜び以上のものです。あなたたちはこの真の経験を心の状態の変化によって得ることができましょう。しかし心の状態の変化というのは、厳密に言えば悟りではありません。悟りはそれ以上のものです。悟りは心の状態の変化と共に生じますが、それ以上のものです。私たちの経験するものは喜びであり、すなわち神秘的な経験ですが、その後には続いて重要なことが起こります。この続けて起こる重要なことが真の悟りです。従って悟りは意識の見地から、常に経験されるものと考えてはなりません。

* * *

戦争は常に存在するであろうが、私たちは常にこれに反対する努力をせねばならない。

*There will always be war,
but we must always work to oppose it.*

一九六八年の夏が過ぎ去ろうとしていたある日のこと、鈴木老師と私（デイヴィッド）はパークレイのかり

フォルニア大学の学生組合の正面で、坐ってホットドッグを食べていた。私たちの眼前には、色彩豊かな街の風景が展開していた——あらゆる人種の学生たち、運動選手やヒッピー、教授、ビジネスに携わる男女、歌い踊るハーレクリシユナ教の信者たち、バックパックを背負った者やブリーフ・ケースを持った者、スーツを着た者やサロン姿の者、大勢の長髪の者たち。鈴木はぼろを着た、革命的な若者たちの直中でくつろいでいた。そして若者たちも彼に対しては快い反応を示した。袖の垂れ下がった茶色の衣を着た彼は、支配階層に属さない味方だとすぐに判別できたので、人々は彼の前を通り過ぎながら微笑み、うなずき、ときには会釈した。

この日の朝早く、彼が朝のスケジュールに参加し、講話をするのに間に合うように、私は夜明け前の薄暗い中を、鈴木を車に乗せ、パークレイの禪堂に向かった。今はメル・ウアイツマンがそこに住み、責任者になっていた。私たちは午前半ばまで輪になり、坐って話をした。その後鈴木は依頼で、私は彼を伴い、テレグラファベニューに行き、書店を訪れ近くを散策した。

そこにはサイエントロジーを推奨し、ベトナムの戦

争に反対するパンフレットを手渡している者たちがいた。速くから拡声器の音が反響しながら近づき、車の屋根に取り付けたラウドスピーカーから、大声でメッセージをがなり立てていた。彼らは、「人種差別主義者、帝国主義者、戦争屋のアメリカ政府を、何が何でも打倒せよ」と呼び掛けていた。

「あなたはこれをどうお考えですか、老師」と私は尋ねた。「ほとんどの人たちは注意さえ払っていない。あなたは大変な国に来たものですね」

鈴木は何も言わずにじっと考えていた。

私は鈴木に、私が知っているほとんどの若者たちがどのようにして徴兵を逃れているかを説明した。ある者はホモ・セクシャル（同性愛者）を、ある者は狂気を装って。リチャードや私を含め、大勢の鈴木生徒たちが徴兵を逃れるために策略を用いていた。

「老師、あなたが日本にいらつしやったとき、戦争に反対されたと伺っております。それは本当でしょうか」と私は彼に尋ねた。

「そう、ある意味では。しかし大したことはできなかった。私たちは根本的な原因を見つめようと努力した」

「大勢の僧侶たちが同じような行動をとったのでしょ

うか」

「いや、戦争が終わるまではそうはしなかった。戦後は全員がそうした」

「当時はどんな状態だったのですか」

「日本はずっと奇妙な考えに呪縛されていた。大変な混乱状態だった」

「あなたはどのようにして乗り切ったのでしょうか。なぜ逮捕を免れたのですか」

「私は政府には反対しなかった。私はただ自分の考えを表明しただけだ——例えば、もし平和であったならば、国も政府もより強くなるだろう、というように。そして私は他の人たちには軽率な思い上がりを慎むように勧めた」

「あなたがそうした考えを印刷したと聞いています」

「そうだ、戦争前に——しかし私が書いたものをあなたが見ても理解できないだろう。それはあまり直接的には書いてない。当時はあなたのここでの立場とは異なっていた」。彼は溜息をついた。「説明するのはとても難しい。あなたが理解するには非常に多くの背景について話さなければならぬからだ」

大勢の禅の生徒たちが良心的兵役拒否者としての立

場を申請した。ある者は代替えの義務としてタサハラ
の消防署で働いていた。その結果、二人のFBIの諜
報員が、ある日桑港寺に現れ、鈴木を尋問した。彼
は、通常クエーカー教徒やキリスト教の平和主義者の
ように、明快な言葉で戦争と平和について語ることは
しなかったが、仏教は闘争よりも和解を求めており、
基本的に平和主義者であるから、僧侶は兵士にならな
い方がよいと語った。

皮肉にも、日本では仏教は決して平和主義者であつ
たことはなく、全ての仏教徒は政府の戦争遂行を支持
した。ベトナム戦争についてどう思うかと質問され、
彼は無造作に次のように答えて彼らを驚かせた。「あ
あ、そのことです。私にはベトナムにいる息子が一人
おります。彼は理髪師で、米軍の整備士です。彼は志
願したのです。私の妻は彼のことを心配しています
が、私は、彼は兵役に就かずに、他のことをすべき
だったと思っています」。彼は乙宥から受けとつたば
かりの手紙を彼らに見せた。諜報員はとうとう彼の立
場を知ろうとする試みを諦めた。諜報員は引き続
き良心的兵役拒否者を支持し、彼らの受け入れ場所と
なった。

鈴木は全ての問題点を適確に把握することは不可能

であったが、もし生徒たちが物事を短絡的に捉え、一方に偏ったとき、特に彼らが不注意に仏教を混乱に陥れるような行動をとった場合には、彼らを支持しなかつた。彼は生徒たちが自らの行動に責任を持ち、善行を行うことを口実にして自己を直視することを避けたり、修行の代替的な行為としたりしないように勧めた。鈴木は、かつて日本で経験したような仏教の教えを、貪欲、憎しみ、愚かさを利用して歪曲することを嫌つたのと同じように、仏教の名前を崇高な目的のために軽率に利用することを嫌つた。もし生徒たちの動機が純粋なものであれば、彼はこれを支持した。

「老師、私の修行は人々を助けることだと考えることはできないでしょうか」とある女性が講話の後で質問した。「援助を必要とする人は非常に大勢おりますし、すべきことはたくさんあります。私には坐禪をしたり、タサハラに行つたりする時間的な余裕は、あまりないのです」

「人を助けるということは大変難しいことです」と鈴木は答えた。「あなたは助けていると思つても、実際には彼らを傷つけているかもしれないのです」

彼は戦争の兆候を非難するよりは、むしろ戦争の根本的な原因に働き掛け、平和を創り出す生活様式を確立することに興味を抱いていた。因縁について彼は次のように語っている。

あなたたちは愚かしくも業（カルマ）を無視しようとするかもしれませんが、その試みは決してうまくはいきません。そして業に強引に方向かうならば、戦争よりもさらに悪い破壊をもたらすでしょう。私たちは実際に日々の行動によって戦争を創り出しているのです。あなたたちは怒りのムードで平和について語りますが、その怒りのムードで、実際には戦争を創り出しているのです。うへえ！それが戦争だ！私たちは承知すべきです。仏法の眼を見開き、永遠に互いに助け合うべきです。

五〇年代の半ばに鈴木は若い隣人の山村に、平和と国際主義を教えるためにアメリカに行くことを熱望している旨を語っている。しかし彼のアメリカ人の生徒たちはすでに政治意識を持つており、一部の者は活動していた。そして彼は明らかに平和運動に同情的で

あった。

一九六〇年、バートン・ストーンという名の生徒がサンフランシスコからモスクワまでの一年がかりの平和行進に参加する決意をしたとき、鈴木は熱烈に支持した。一九六四年に、バートンからの手紙に答え、鈴木は刑務所に彼を二回訪問した。彼は太平洋での原爆実験を妨害した罪で、一年の刑に服していたのである。後日、バートンが出獄して桑港寺に鈴木を訪ねたとき、奥さんは彼女の夫が他の仏教僧とともにデモ行進している写真を載せた、日本の新聞の切り抜きを彼に見せた。それには横断幕と大勢の群衆が写っていた。彼女はこのデモは、太平洋での原爆実験に反対する行進だったと説明した。

鈴木はリチャード・ベーカーや他の禅の生徒たちとともに、一九六八年秋に行われた大きなデモに参加し、マーケット街を平和的なムードで戦争に反対を示すために歩いた。彼がデモに参加する決意をしたのは、その数時間前に生徒たちと取り交わした、熱のこもった対話に影響されたためかもしれない。

鈴木がタサハラから町に帰ってきた。市内の生徒たちは彼を待ちこがれていたため、桑港寺で行われた土

曜日の講話には、大勢が出席し熱心に話を聞いた。鈴木について二年ほど学んできたジョン・スタイナーという名の若者が正面に近いごぎに坐っていた。ジョンは二年前、カリフォルニア大学バークレイ校で行われた、当時の戦争に反対する抗議運動に参加したことがあった。そして講話に出席していた大勢の生徒たちと同様に、その日のデモ行進に参加する予定であった。生と死、平和と恐怖、無力感と希望の思いが錯綜して心が激しく揺れ動いていた。

講話の後で、鈴木が質問はないかと尋ねた。

ある女性が尋ねた、「戦争とは何でしょうか」。

鈴木は「ごぎ」を指さした。それはおおよそ九一×一八三センチで坐蒲二枚分ほどの大きさであった。彼は、ごぎにはときどき茜草の列に波状の皺ができるが、生徒たちは坐った後で、手でこの皺を押して延ばすと言った。この動作は、皺が端にある場合にはうまくいくが、二人の間に皺があった場合にはスムーズに延ばせない、皺は片方に移動するだけである。このことに気づかず、人々はときどきこうした皺をお互いに押したり押し返したりする。一これが戦争の原因である。業は小さなことから始まり、次第に加速する。あなたたちはこうした小さな困難をいかに取り扱うべき

かを知らなければならぬ」

「後方に坐っていた男がいらしなから大きな声で叫んだ。「あちらで戦争が行われているときに、なぜここで会合など開いているのか」

鈴木はこの男が言ったことを理解できなかった。

ジョンがこの若者の質問をゆつくりと明瞭に繰り返した。「彼はこう言ったのです、へ老師、向こうで戦争が行われているのにどうしてここで会合など開いているのですか」と。鈴木はにつこり笑った。ジョンも笑った。

そのとき、猫が獲物に飛びかかるような素早い動作で、鈴木は演壇から飛び降りてジョンの後ろに行き警策を彼の肩に当て、大声で叫んだ。「合掌」。彼は「このばか者ども！ ばか者ども！ あなたたちは時間間を無駄に空費しているのだ！」と叫びながらジョンを何度も何度も叩き始めた。彼はジョンが前かがみになって床に倒れるまで叩き続けた。「空想家！ 空想家！ あなたたちは何を空想しているのか」

彼は演壇に戻りすっかり肝を潰していた聴衆の方を向いた。ほとんどの者たちは今まで彼が大声を上げるのを聞いたことがなかった。ほとんど聞きとれないほど低い声で、「私は怒っているのではない」と誰も信

じられないようなことを言ったとき、いつもは日焼けして見えた彼の顔は蒼白に見えた。彼は一息ついて続けた。「自分のことさえできないような者に、どうして大事を遂行できると期待し得ようか」

講話が終わって、誰もがすっかり静かになった。ポプ・ハルバーンがジョンの所に来て言った。「老師はあなたに合掌せよと言った。老師が叩いたとき、あなたは合掌していなかった」

警策で打たれることは処罰ではない。これは意思伝達の独特の形式であり、警策を受けるときには礼拝するのの一つのしきたりである。合掌することは敬意を示し、肩と警策と手の一体性を表し、警策を受けるのに最善の体勢を取らせる意味がある。鈴木が合掌するように、と叫んだにもかかわらず、ジョンは動転のあまり、この意思疎通の場において彼のすべきことをしなかつたのである。

ジョンは鈴木の仕事所に行き、合掌しなかつたことを詫びた。鈴木はそれに答え、荒々しく振る舞ったことを優しくジョンに詫びた。ジョンは鈴木から何も期待してはいなかつた。彼は先生が彼を啓発しようとして行動したにすぎないということがわかつていた。

「私があのように興奮したわけは……」と鈴木は次第に言葉を弱めながら言った。「戦争中私が日本で経験したことを思い出したからだ。古い欲求不満が蘇ったのだ」。ジョンは先生の眼に微かな苦痛の色を見た。それから鈴木はジョンにとつては見慣れない仕事で彼の肩に手を置いた。鈴木 of 衣の広い袖口から弛んだ皮膚が細い腕から垂れ下がっているのが見えた。ジョンは鈴木 of 年齢と腕さに心打たれ、先生の思いやりと苦悩を感じ取ることができた。

* * *

釈迦牟尼仏陀が生涯に与えられた教えは、それぞれ of 弟子たちの特殊な性格や、そのときどきの特殊な環境に配慮してなされたものです。それぞれの状況に応じた、特別の対処法が必要です。状況によつては、仏陀の与えた教えとは異なつた教えもあつて然るべきです。この点に照らしてみれば、あらゆる可能性のある状況にも、

個々の人間の性格にも適用できるような、絶対的な教えを説明し、伝達することがどうしてできるのでしよう。

The teaching given by Shakyamuni Buddha during his lifetime was accommodated to each disciple's particular temperament, and to each occasion's particular circumstances. For each case there should be a special remedy. According to circumstances, there should even be teaching other than those which were given by Buddha. In light of this, how it is possible to interpret and pass down an essential teaching that can be applied to every possible occasion and individual temperament.

鈴木がアメリカに來た当初の六年間は、彼も彼の主な生徒たちも彼の講話を記録するという考えには反対していた。彼が語つたことはそのときに応じ、周りに居合わせた人たちに応じてなされたものであつた。彼は自分の教えを成文化してはおらず、日々、その場その場に対応して生徒たちとともに修行を続けてきたのである。しかしながら、一九六五年、マリアン・ダービーが新しく生徒となつたとき、鈴木 of 許可を得て自分のルール式のテープレコーダーを使い、ロスアルト

スでの講話を記録し始めた。彼女はまた彼の許可を得てそれを筆写し、写本を一般に利用できるようにした。その後間もなく、サンフランシスコでも同様の試みを始めた。

一九六六年夏、マリアンの両親が訪ねてきた。彼らはこの禅の師匠を調べ、マリアンが彼女の家庭や、孫たちの生活に持ち込んだのはどのような人物かを知りたいと思った。彼らは鈴木に会い、大いに満足した。マリアンの父親は彼をよりよく知りたいと考え、彼をサンフランシスコまで車で送った。彼が鈴木に、生涯の個人的な希望は何か、と尋ねたところ、鈴木は「本を書きたいと思っている」と答えた。父親が彼女にこのことを伝えたので、マリアンはこれをまともに受け止め、鈴木に彼の朝の講話を取りまとめて本にしてもよいかと尋ねた。彼は喜んで承諾した。そこで毎週木曜日の朝生徒たちが立ち去った後で、彼女は自分で編集した記録を彼に読んで聞かせた。マリアンは、コーヒーとシナモンの芳香が静かに漂う部屋で、パチパチと音を立てている暖炉の正面の彼女のソファアの上で、衣の裾を脚の下に押し込んで両足を組んで坐っている鈴木の仕事が好きであった。

仏教を学ぶ目的は仏教そのものを学ぶことではなく、自分自身を学ぶことです。そのために私たちは教えを持つているのです。しかし教えは私たち自身ではありません。私たち自身についてのあらゆる種の説明です。教えを学ぶ理由は、自身を知るためです。そのために、私たちは決して教えにも、師にも、執着しないのです。師に会った瞬間に師から離れ、独立すべきです。あなたたちが独立するために、師を必要とするのです。このようにして、あなたたちは自分自身を学ぶのです。自分自身のために師を持つのであり、師のための師ではありません。

「そんなことを言ったかな」。彼はしばしばこのように発言した。

マリアンは鈴木に、彼女が本を作る計画に、リチャードが反対していると告げた。リチャードは、彼女が生徒としてはまだ新しく、未熟すぎると考えていたのである。鈴木は彼女に、原稿をリチャードに渡し、彼がそれを編集できるようにしたらどうかと勧め

た。一九六七年三月、マリアンは完成した原稿をリチャードに渡し、これに彼女は「初心者の心」という表題を付けた。マリアンに多大なプラスチックシオンを起こさせたのは、彼が原稿に目を通すのに数カ月を要したことである。その年の秋、彼は原稿を読み終え、これは本にしてもよい素材であると同意した——手を加えさえすれば。マリアンはこの計画から手を引いた。リチャードはこの仕事を引き受けるには忙しすぎたので、編集経験のあるピーター・シュナイダーという名の生徒にこの仕事を勧めた。ピーターはタサハラ管理者としての仕事で手いっぱいだったので、この仕事を断った。

一九六八年春、リチャードは親友のトルーディー・デイクソンにこの原稿を渡した。彼女はリチャードと同じように「ウインドベル」に載せるための鈴木本の講話を編集していた。トルーディーは一人の幼児を抱え、その上乳癌ががの手術を受け、健康に恵まれなかったにもかかわらず、この仕事を引き受けた。彼女は完全にこの仕事に没頭し、元のテープを聞き、丹念に素材の一語一語、考えの一つ一つを検討しこれを体系化し、しばしばリチャードと打ち合わせ、ときには直接鈴木とも話し合った。

ちょうどこの頃、禅の一生徒がブッシュストリーートのリチャードの下にやって来て、リチャードが日本に行くという噂を聞いたと言った。リチャードはこのことで、鈴木が考えていた、リチャードが関わる次の計画を知ったのである。彼はすぐに桑港寺に行き鈴木に真意を尋ねた。鈴木には彼を日本に送る諸々の理由があった。彼はリチャードに日本の環境の下で禅の修行を経験し、併せて日本の文化の味わいを知ってもらいたいと答えた。彼はリチャードが永平寺に行きさまざまなよい教師について勉強し、茶の湯を学び、能の舞台も見ることが望んだ。鈴木はこのとき公にはしなかったが、彼は他日リチャードが教師として、また恐らくは禅センターの堂頭として、彼の後継者となるために必要な準備の一環であると考えていたのである。

さらに鈴木は、リチャードを過大な責任から解放し、他の生徒たちにも運営のチャンスを与えたい、とも言った。リチャードは卓越しており、頭の回転が速いので、彼のいるところでは他の生徒たちがリーダーシップを発揮することは困難であった。サイラスらの一部の生徒たちは、リチャードとあまり大きな摩擦を起し、競争することなしに、運営に当たるチャンス

を得ることができらるであらう。また鈴木はもう一つの理由を隠さなかった。「私には彼を統御できないからです」と彼は言った。「彼に大きな問題を与えようとしているのです。私は彼を大海に投げ込もうとしているのです」。鈴木がリチャードを日本に送る最も驚嘆すべき理由は、彼の終生の目標であった、日本仏教を改革することであった。彼は新鮮な取り組み方をして、故国の禪の化石を打ち壊すことを願った。いつものように、彼は自分の構想、すなわち古い教団に起こるだろう大きな変革をどのように見ているか、という点については、決して十分な説明をすることはなかった。

何百人という人々がリチャードの送別会に出席した。ルー・ハリソンの中国音楽のアンサンブルが演奏し、メル・ウアイツマンのリコーダーの三重奏がそれに続き、その後、リズム・アンド・ブルースバンドの演奏に合わせ、ダンスが行われた。リチャードとヴァージニアはしばらく立って、鈴木と奥さんと話をしていた。生徒たちと同じように踊る真似をし、おどけた後で、鈴木夫妻は早めに帰途についた。

出席した多くの人々は、リチャードに恩があった。リチャードは彼らをタサハラに送り込み、あるいは兵

役を免れるように取り計らい、外国の生徒たちのアメリカ滞在を助け、生徒たちが職を得る手助けをし、実際に必要なときには鈴木が直接彼らに会うように手配した。彼は至るところに姿を見せていたが、今彼は去ろうとしていた。生徒たちは、彼のいなくなった禅センターはどのようなものかと訝った。

一九六八年一〇月二三日、リチャードは妻ヴァージニアと娘サリーとともに日本に向かって出帆した。彼は自分で編集に手を加え、鈴木とともに校訂した *Man's Mind, Beginner's Mind* の完成した原稿をたずさえていた。彼は日本で出版社を探そうとしていた。そして船が先生の母国に向かっていく間に船上で序文を書いた。

トルーディー・ディクソンは夫のマイクに付き添われ、一九六二年に初めて桑港寺を訪れた。鈴木の話話を聞いた時分は、UCバークレイの大学院で哲学を勉強中で、ハイデッガーとヴァイトゲンシュタインを専攻していた。マイクはサンフランシスコ美術学校の学生であった。彼らは遅く着いたので、禅堂の後部に立っていた。その晩鈴木は一風変わった思考の分野を取り上げた。彼は禅の修行を哲学の研究と比較した——人

生の意味について考察し詮索することと、全身全霊をもつて真理を表現することの違いを。彼はかつて日本に哲学者の親友がいたと語った。最終的に彼は自分の知的探求に満足せず自殺してしまつた。この講話のまさにその瞬間に、鈴木はじつとトルーデーを見つめた。彼女は数歩後ずさりした。トルーデーはこの経験を中心からぬぐい去ることができなかった。彼女とマイクは、継続的に講話を聞きにやつて来て、間もなく鈴木について修行を始める決意をした。やがて彼らは親密な弟子になつた。

Zen Mind, Beginner's Mind の中で、トルーデーは鈴木への教えの心髄を表現することに全力を傾注した。彼女は原稿をリチャードに手渡した後で、ミルヴァレーの自宅で静養に専念し、迫りくる死に立ち向かつた。彼女は表面では陽気に振る舞っていたが、内心は恐怖で満ちていた。それを彼女は精神分析医に打ち明けていた。手術の後、彼女の肺は体液が充満し、呼吸ができなくなつた。彼女は全精力を傾け呼吸するために苦闘し、ついに思考も言語も恐怖も超越し、彼女の言うところの呼吸闘争三昧の境地に到達した。苦しい五日間の回復期間を経た後、マイクが鈴木と奥さんを彼女の見舞いに連れてきた。彼女は二人に会い、初め

て日の出を見たような気持ちがあつたと語つた。

彼女はタサハラに行き断食をした。そこで彼女は生と死、健康と病氣、恐怖と勇気を包含する力強い、喜びに満ちた経験をした。彼女はついには戦うことを止め、鈴木が説明したように「敵と和解することにした」と語つた。死の瀬戸際にあつてトルーデーは生まれ変わった。彼女の精神分析医は、次に訪れたとき彼女は別人——恐れもなく暗れやかな女性——のように見えた、と語つた。彼女の夫や、看護の人たち、友人たちにとって、彼女は大きな鼓舞となつた。「私自身、私の肉体は、子どものシャボン玉の中に捕らえられた空の虹のような現象の中に溶け込んでいくのだ」と彼女は書いている。

ある日、ビル・クワンのミルヴァレーの禪堂で坐禪を終えた後で、ベッティ・ワレンはトルーデーの見舞いに行つた。彼女はトルーデーに何かしてあげることがあれば、と望みながらやつて来た。だがトルーデーが自分の病氣を「この祝福された癌」が、と言つた一言で、ベッティの哀れみの気持ちは消え去つた。

鈴木は月曜日ごとに、ビルの坐禅グループでの講話を終えた後、トルーデーを自宅に見舞つた。ある日

こうした見舞いの後で、彼はポブ・ハルパーンとともに車に戻ってきた。鈴木は眼は深くんでいた。「今ここに本当の禪の師匠がいる」とトルーデーのことを語り、座席に身を沈めた。

七月一日、トルーデーの兄が車で彼女をタサハラに連れて行った。彼らは一杯の小川の清水を鈴木と分け合って飲み、戸外の月の光の中で眠った。そして翌日病院に帰った。二、三日後彼女はタサハラに戻り、禅堂で鈴木や生徒たちとともに伏せたまま坐禅をした。八日に彼女と鈴木はサンフランシスコに帰った。

一九六九年七月九日に、マイクが桑港寺の鈴木に電話し、トルーデーが病院でたつた今死んだと伝えた。鈴木にとつて訃報はあまりにも早すぎた。鈴木は電話口で泣き崩れ、マイクを当惑させた——鈴木は動じないだろうと彼は思っていたのだ。鈴木は病院にやつて来た。そしてそのときには落ち着きを取り戻していた。

二日後の葬儀で鈴木はいつになく感情的になっていた。彼は泣いて言った。「私はこのような偉大な弟子を持つとは思わなかった。恐らく今後も決してないであろう」。恒例により、葬儀の際に鈴木老師は亡くなった生徒を授戒し戒律を与えた。それから彼は故人

に対する讃辞を述べた。

行き給え、弟子よ。あなたは今生においてあなたの修行を完成し、純正な温かい心、純粹にして汚れない仏陀の心を得、そして私たちの僧伽に加わった。あなたが今生においてかつまた前世において成し遂げた全ての行為は仏陀の心に照らして意義深いものとなった。それはあなた自身の内部であな自身のもので極めて明瞭に認められている。あなたの完全な修行の故に、あなたの精神はあなたの肉体的な病気を避かに超越して、看護師のように充分にあなたの病気の看護をしたのだ。

喜びの心を持つ者は、運命に安んじている。逆境にあつてさえも明るい光を見るであろう。安らかなときも苦難のときも、どんな状況にあつても仏陀の存在を認めるであろう。苦痛に満ちたときでさえも喜びを覚え歡喜するのだ。私たちにとつて、仏陀の心のこの喜びを持つ者全てにとつて、生と死の世界は涅槃の世界である。

慈悲の心は親の愛情の心である。両親は常に子どもの成長と幸せを願い、自分の境遇を顧みな

い。私たちの経典は述べている、「仏陀の心は偉大な慈悲の心である」と。

その寛大な心は山のように大きく海のように広い。寛大な心を持った者には偏りが無い。常に中道を歩いていく。物事の極端に偏った見解には決して執着することはない。寛大な心は公正かつ無偏に働くものである。

今やあなたは仏陀の心を得て真の仏陀の弟子となられた。しかしながら、ここで私は真の力を表明する……。

それから鈴木は洞窟のような講堂全体に反響する、長く、力強い嘆きの叫び声を上げた。

* * *

何かを成そうとすると、失敗する、なぜなら千の手の中から一つだけに集中するからである。

九九九の手を失うのだ。

やろうとする前に、

もうそれを手にしているのだ。

When you try to do something

*you lose it, because you are concentrated
on one out of one thousand hands.
You lose 999 hands.
Before you try, you have it.*

一九六九年の春、桑港寺の檀家総代会から何の予告もなしに突然一通の要求書が届いた。それは、私たち檀家を選ぶか、彼ら西洋人を選ぶ、という要求である。鈴木は二つのグループがともに成長し、協調して共存する方法を学ぶように望んだが、双方の隔絶は深まるばかりであった。もはや生徒たちはクロード、ベッティやデラ等の古参の者以外はお寺の祭りにも招待されなくなつた。鈴木はなお、友好関係の回復は可能であると考えていたが、檀家側の決意は固かつた。彼らはもはや二股を掛けた僧侶は望んでいなかった。

彼らには鈴木に留まつてほしいという希望はあつたものの、それ以上に専属の僧侶を望んでいた。彼らが計画していた新しい寺は、長年建設されないままになつていた——それ故、彼らは禅堂をこれ以上禅センターに貸したくはなかつた。生徒たちの数は増えすぎた。禅センターは大きくなりすぎて忙しくなり、日本人会は完全に影が薄くなつた。お寺の人たちの中には生徒たちの誠実さを尊敬する者もあつたが、多くの人

たちは自分たちの寺の中でさえも気安さを感じられなくなっていた。誰にも笑顔を見せたことのない、一部の生徒たちから恐れられていた年老いた管理人は、生徒たちに対する支持を最も率直に表明していた人物であった。鈴木は親友ジョージ・ハギワラは当時檀家の代表であり、鈴木を支持していたが、彼には双方の協調は、見込みがないことがわかっていった。

「問題の八〇パーセントは長髪と異常な服装にある」と鈴木は言った。若い日本の檀家の人たちは比較的ものわかりがよかつたが、桑港寺を運営していたのは年配者たちであった。日系アメリカ人の一世たちは、明治時代の仏教徒の取り組み方をしていて、と彼は言った。彼らは西洋の先進性は評価していたが、いまだに祖先の霊を供養することに専念する神道のような、民族主義的な仏教にすがりついていた。私は「禅の純粹な道」を伝えるためにアメリカに來たのだと鈴木は言った。

川尻ルミの家族は桑港寺の檀家であつたが、彼女はその年大学の新聞に「桑港寺と禅センター」という一文を書いた。鈴木は彼女に語っている。私は禅センターの生徒たちに仏教の原理を教えているが、一方日本人会に対する意図は彼らの「混乱した仏教について

の理解と、自分たちの見解や生活様式に対する強い執着」のばかばかしさを指摘することだ、と。この記事は彼の人気を高めることにはならなかつた。彼は檀家に対しては、かつて故国の林叟院で彼の檀家の人々に對してよりも厳しかつた。鈴木はさらに、日本人会に對する最大の希望は「一般的に言つて日曜学校と若者たちだ」と語つた。青年たちは彼を好ましくは思つたが、禅に對する熱意は希薄であつた。日本国内で見られたように、彼らは、禅は年寄りと先祖たちのためのものだと考へていた。彼は純粹な禅を捨てなかつたので、檀家は彼を捨てた。

總代会の席上で、鈴木は自分を弁護することは何一つ発言しなかつた。

比較的新しい檀家で、寺にはあまり顔を見せなかつた一人の男が、日本人会の代表になることに意欲を示していた。鈴木はこの男が状況を理解せず口を差し挟んでいると考へ、彼に再考を促した。これに對してこの男は先頭に立つて鈴木を追い出す動議を提出し、事態を重大な局面に追い込んだ。鈴木は、彼が去ることを希望している人たちの意見に従う方がよからうと言ひ、話し合ひを断念した。彼は最終的に三下り半を突きつけられた、と弟子のピーター・シュナイダーに打

ち明けた。

片桐は桑港寺に留まれるよう申し出たが、もし禅センターの生徒たちとともに活動を続けるつもりなら、植家としては彼を必要としないと云われ、鈴木とともに辞任した。奥さんは取り乱したが、ジョージ・ハギワラはこれが一番よい方法だから心配することはないと彼女に言った。

ある晩坐禅の後でボブは口実を設けて居残り、鈴木と話をした。鈴木はボブにお茶を注ぎ、曹洞宗宗務庁の古くからの彼の支持者であり、彼をアメリカに送り込んだ男で、彼のやっていることに理解を示していると思われる数少ない一人である山田義道に手紙を書くのに苦労していると打ち明けた。彼は辞表を送りたいと思ったが、何を書いてよいかわからなかったのである。

ボブは鈴木に今すぐ義道に電話するように勧めた。それは鈴木にとっては意外な思いつきであった。彼は義道に連絡を取り、数分間彼と話をした、そして彼の了解を得た。その後には彼は特製の饅頭を取り出しボブの好きなだけ与えた。

* * *

私たちは原初の禅の道に従うべきである、これはタサハラや市内で行っている修行を凌駕するものである。

We should follow the original way of Zen, which goes beyond Tassara practice or city practice.

会員の総会の席で、禅センターは諸々の問題を抱えることになったとしても、独自の場所を探すべきであるという決定をした。鈴木はクロードとサイラスに禅センターが入居する建物を探すように指示した。それは、彼らは実業界や資産関係の仕事に従事していたからであった。鈴木は間もなく桑港寺の住職を辞任し、生徒たちや弟子たちとともに修行に専念することになった。やがてクロードとサイラスは適当な場所を見つけてきた。

サンフランシスコのウエスタン・アディッシヨン区内の、ページストリートとラグーナストリートが交差する一郭に、端麗な三階建ての赤煉瓦のビルが建っていた。この建物はユダヤ人女性たちのための住居でエマニエルと呼ばれていた。一九六九年の夏、この建物が売りに出された。クロードとサイラスと鈴木は階

段を上り、二本の柱の間を通って、頑丈で上部に厚い半透明のガラスのはめてある二重の扉に向かって歩いていった。年配の婦人が、彼らを中心に招き入れた。天井の高い通路はベンチの備え付けられた広いホールに通じていた。シャンデリアと燭台には電灯は灯されていかなかったが、間接光が中庭から窓越しに射し込んでいた。通路の左側には事務所があり、右側にはアーチ型の二重の窓の付いた大きな部屋があった。建物は豪華で、広々としていて、頑丈であった。

「これを手に入れよう」と鈴木は言って周りを見回した。

次に彼らがページストリートのビルを訪れたときには、五〇人の他の生徒たちが、住まいとなる予定の建物を見るためにいった。彼ら全員が一五プロックを一緒に歩いていった。建物は完璧で、改造しなくてもそのまま使うことができる状態であった。地階には大きな食堂と巨大な会議室があり、すぐに禅堂として使うことができる。誰もが細部まで行き届いた品質のよさに感銘を受けた——埋め込まれた木製のキャビネットや備品、鉄細工の製品に加えて屋上の歩廊からの眺めが素晴らしかった。この優雅なビルは、ハースト城やその他カリフォルニアで絶賛を得た、多くの建

物を設計したジュリア・モーガンによって設計されたものであった。

マリアン・ダービーとゼロックスの創設者でタサハラ購入の際、個人で最高額を寄付したチェスター・カールソンが頭金を提供した。そして東京銀行は寛大な条件の融資を提示した。最初の月から支払いを開始し、毎月の返済額は妥当な入居者の家賃収入と会費で決済できた。

一九六九年一月一日、生徒たちは鈴木と奥さんがわずかばかりの所持品を、待機していた車に運ぶの手伝った。そして二人は住み慣れた家に別れを告げた。彼はそこに一〇年半の間住んでいたのである。正式な退院式は後日行われる予定であったが、この日彼は桑港寺の祭壇に香を供え、歩道から建物に向かってお辞儀をし、それから車に乗って立ち去った。奥さんは噺り泣いていた。彼女は肘鉄を喰ったように感じたからである。彼らは桑港寺と檀家のために満足のいく運営をしようとして一生懸命努力してきたのである。

ページストリートの建物は七五人まで収容できる居住スペースと、大きな共同浴場があり、また二階のスイートルームには三つの部屋とバスルームがあった。

鈴木夫妻の住居としては申し分なかった。桑港寺の向かい側のアパートに住んでいた生徒たちのほとんどはここに移ってきた。ついに鈴木は、アメリカに来た当初から口にしていたとおり、サンフランシスコに居住施設のあるセクターを手に入れたのである。やるべきことがたくさんあった——壘と鐘を購入し、祭壇を作り、壁を塗らなければならなかった（特に、禅堂の壁には砂羅索の図柄が描いてあった）。ハギワラは個人的に本堂の儀礼に使う用具を提供した。

午後五時に鈴木は、火のついた線香を高く掲げた一人の生徒を後ろに従えて、広い中央の階段をゆっくりと降りていった。台所と本堂と地下の禅堂の簡素な祭壇に線香を供えた後で、鈴木と生徒たちはともに坐禅をした。移転の間一時も修行を休むことはなかった。最も大切なことが第一に優先されたのだ。

私たちの修行は仏陀の裝飾であると言います。たとえ仏教がどんなものかを知らない生徒たちでも、美しい法堂にやってくると、自然と深い感動を覚えます。しかしながら本来、禅の仏教徒にとっては、法堂の眞の裝飾は、そこで修行する人たちです。私たちの一人一人が美しい花であり、

またそうでなければなりません。そして私たちの修行において、一人一人が人々を導く仏陀にならなければなりません。

一九七〇年一月、新しい禅堂が正式に発足し、マハーボーディサットヴァ（大菩薩）禅堂と名付けられた。一階には入口の扉の近くに、白壁のアーチ型の窓の付いた本堂があり、内部に一生徒の造った美しい楓の祭壇が備え付けられていた。部屋の内側の縁には、もともとあった赤いタイル張りの通路を除き、部屋には一面に畳が敷き詰められた。今は百人以上の生徒たちがページストリートとラグーナストリートの近くに住み、その他の人々はベイエリア辺りから坐禅や訪問のために車でやって来た。一日に四回の坐禅、三回のお勤めと、食堂で二回の食事が行われた。生徒全員が炊事、皿洗い、ピルの清掃に参加した。生徒たちのための図書室、洗濯室、そして店舗が設置されていた。クロードはこのような快適な環境に恵まれ、面食らうほどであったと語った。

古参の生徒たちは、新参の生徒たちがより容易に私たちの道を修行できるように彼らを指導すべ

きである。しかしこうした方法がある、ああした方法がある、と言って教えるのではなく、こうすべきだとか、ああしてはいけない、ということ、自ら行動で示すべきである。そしてこの建物の中で私たちの日常生活は——坐禅の修行の延長であり——隣人との良好な関係を保つことも含まれます。ある者には美しい鼻があるかもしれないが、それを上、下あべこべに付けてはいけません。

よい隣人として修行するために、僧伽の者たちは、毎日歩道を清掃し、木を植えた。ブッシュエストラートでは、生徒たちは信号無視をしてはならないと指示された。隣組が結成されたが、鈴木は禅センターからは、一人あるいは二人だけ出席し、会議では主に聞くだけにするように、と勧めた。

生徒たちの多くは理想主義の持ち主で、大学を卒業した若く自由主義的で世間知らずの社会改良主義者であったが、今や彼ら自身がサンフランシスコで最も危険な地域の一つに数えられていた地区に隣接し、圧倒的に黒人の多い隣人たちの中で、いかに生活すべきかを学ばなければならないことに気がついた。日本人街

もファイルモアの近くにあってここよりは安全であり、あまり自立たなかったが、彼らにある種の支持を与えていた。この新しい界限では強盗事件が頻発し、殺人事件さえもあった。新しいビル斜向かいに缶詰や、タバコ、酒類を売っている雑貨店があった。中国人の店主は店を襲った強盗に殺され、彼の妻はその後二人の強盗を射殺した。この一件は、禅センターが近くに移動して間もなくのことであった。

ページストリートにおける修行は、貧しい人たちが、公民権を奪われた隣人たち——金もなく、白衛手段も持たず、これといった力もないこれらの人たちに提供できるものは何一つなかった。どうしたら役に立つかを考え出すことすら困難であった。隣人たちの中には、こうした新しい住人のために駐車が困難になったと苦情を言う者もいた。彼らは、この界限の貧しい人たちの問題には無関心な金持ちで、自分のことだけに夢中になっているヒッピーだと呼ばれた。

間もなく僧伽の人たちはビルの扉に鍵を掛けなければならぬことがわかった。近所の子どもたちは、禪の人たちはおめでたい人間だとすぐに気がついた。彼らは勝手気ままにビルの中をうろついた。いろいろなものが盗まれた。ある日、一〇代の屈強な三人の黒人

が開いていたドアから入ってきて、親切な人種差別のないリベラリストとして振る舞おうと努めていた、新参の生徒たち数人に対し、厚かましい態度でからかった。鈴木が衣を着て、教師用の短い警策を手にして近づいてきた。

「オイ、衣を着たおっさん。お前は空手を知っているかい。戦うか」とティーンエージャーの一人が迫った。鈴木目がぎらぎらと光った。そして真つすぐに彼らの所に歩いていった——小柄で、威嚇的ではないが、しかし気合いがこもっていた。「棒は何のためだ」と一番大きな男が聞いた。

「あなたを叩くためだ」と言つて鈴木は彼の肩を叩いた。それから彼は少年たちを正面の入り口に連れていった。その間彼らは笑いながら彼と言い争つていった。

* * *

私がアメリカに來たそもその動機は
単にアメリカに

禪を布教することだけではなく、

日本の禪を再活性化させることであつた。

彼らは眠っている。

*My original motivation in coming here was not only
to propagate Zen in America,
but also to revitalize Zen in Japan.
They are sleeping.*

ピーター・シュナイダーと鈴木が数枚の紙の上に身をかがめていた。最初の紙の一行目に「鈴木俊隆、履歴書」と大きな字で書いてあつた。弘文に手伝つてもらい、鈴木は渋々とピーターの要求に応じ、対外的に必要な彼の業績についての年譜を作成した。同時に渋々ながら彼の過去についての取材をピーターに許可した。禅センターの歴史家であつたピーターは、「ウィンドベル」の編集に当たつており、いつの日か鈴木についての本を書くかと考えていた。

履歴書は全く無味乾燥な文書であつた。公立学校、駒澤大学、永平寺、そして總持寺時代のことがそれぞれ一行か二行ずつ書いてあつた。藏雲院と林叟院で彼が過ごした年月と、その他諸々の寺で彼が占めていた役職が列記してあつた。同時に、彼が取得した免許証にも言及していた——倫理と英語を教える免許証である。こうしたことはピーターにとっては耳新しいことばかりだったので、彼は鈴木にいろいろと質問をした。鈴木はあまり関心がなかつた。彼の考えはあちら

こちらにさまよい、必ずしも明瞭に表現せず、日付や細部についての誤りは気にしていなかった。

ピーターは先生がいつ禅のマスターになったかを推測しようと努めた。取材中に一〇回もそれについて尋ねた。鈴木は履歴書を指さしながら、「ここだ、いや恐らくそこだろう」と言っては前の話題に戻ったりした。日本では修行を完了した僧侶は誰でも彼の弟子に對しては師匠と見なされる。アメリカで一般的に呼称されている「Zen master (禅のマスター)」に相当する日本語は存在しないのである。日本では「老師」という肩書きは形式的なもので、よい教師は世評によるか、あるいは個人的な経験によって知られるのである。

鈴木の過去の生活についての記憶に、多くの欠落があったことはよく知られている。彼は自分の家族については滅多に語らなかつた。二度目と三度目の結婚が林叟院の一部の檀家によっていかに反對されたかを語ったとき、彼はそれを最初と二度目の結婚と言っていた。彼は何らかの役に立つと考えない限り自分の過去については語ろうとしなかつた。それは重要ではない、個人的なこと、ときにはばつの悪いことであつたのだ。

鈴木が最も好んで話したのはノナ・ランサムのことであつた。ピーターが彼女について尋ねたとき、鈴木は笑つて言つた。「正直に言うると、彼女は私の古い、古いガールフレンドだつた」。彼女は、彼が西洋人に教えることについての自信を与えた、と語っている。彼女はすでに亡くなっており、それを彼は悲しんだ。彼は過去数年間、彼女の手紙に對して返事を書かなかつたことを悔やんでいた。

私は彼女に手紙を書かなくても問題はないだろうと考えていましたが、それは誤りでした。彼女は昨年亡くなりました。私は彼女を大いに信頼し、彼女もまた私を非常に信頼していたので、私が彼女に手紙を書こうが書くまいが、大した違いはないだろうと考えていました。しかし今ではそれが正しかつたかどうか私にはわかりません。彼女が生きている限りは、それでよかつたのかも知れません。今私は彼女に手紙を書かなかつたことを、いささか悔やんでいます。

鈴木が林叟院の住職になるために争つたことについて長々と語つた後で、ピーターはこの題材の利用につ

いて尋ねた。

ピーター「老師、あなたは生徒たちがこの出来事の全容を知ることに興味を持っているとお考えでしょうか、それともあなたの伝記はできるだけ簡潔にした方がよいとお考えでしょうか」

鈴木「恐らくそうだろうと思う。しかし大した意味はないが。私は、生徒たちが背後で何が起こっていたのかを理解しなければ、彼らを混乱させるだけではないかと危惧している」

ピーター「私はあなたの経歴の中からどれを記事にしたらよいかを決定しようとしているところです。この出来事は、生徒たちにとっては興味深いものですが、また恐らく……」

鈴木「いや！ 恐らく生徒以外の者にとっても興味深いものであろう。というのも、このような経緯があったからこそ私はアメリカに来る決心をしたからだ。だが、この出来事には興味深いものは何もないのだ。これは単なる記録であり、混乱を与えるだけだ。私は日本での生活では闘争に明け暮れた。幸い私はおおむねいつもどうやって問題を処理したらよいかを理解していたのだが、闘争はさらに困難を作り出すだけであっ

た。私は非常に気短で腹を立てやすい人間だったので、いつも我慢できずに争いを始めた。いったん争いを始めると、私は辛抱強くせねばならなかった。さもないと争いに負けるし、争いが永遠に続くことになるからだ。私はいつも争いには勝ったが、これが最善の方法ではない。譲歩したほうがよいのだ。(間)アメリカの生活について実状がもつと早くわかっていたら、とつくに日本に別れを告げていただろう。このようにね(手を振ってさよならの仕事をする)」

忍耐についての質問に答えるに当たり、鈴木はいささか気短になり、彼の過去を考察すること自体に不満を示した。

鈴木「こうしたことを全て語るのは大変な仕事だ。私は興味はないよ。私は過去の生活についての正確な記録は持っていないし、持とうとも思わない」

ピーター「『ウインドベル』にあなたについての記事を書くことは全く意味のないことでしょうか」

鈴木「こういった類のことかね」

ピーター「経歴とか、伝記と言ったようなもので、あまり詳しくはありませんが、重要なことだけです。本

ではなく、恐らく四ページか五ページのものでしょうか。この考えは間違っているでしょうか」

鈴木「四ページか五ページ！」

ピーター「どれくらいが適当と思われるですか。一ページですか。半ページですか。それとも一段落でしょうか。一行でしょうか。次のことだけを述べたあなたの伝記はいかがでしょうか。へ私はこの種のこととは重要

と考えていないし、記録も持っていない、伝記終わり。これについていかがお考えでしょうか」

鈴木「そのような質問について師匠から返事をもらったことはない。私はいずれにも関心を持っていない。私の生涯がそのように考察されるとしたら、全ては失われるでしょう」

1と多 1969-1970

CHAPTER 17 One and Many

私たちの修行の目的の一つは

老年期を楽しむことである。

しかし自分を欺いてはいけない。

真摯な修行のみが役に立つ。

Our purpose of our practice is to enjoy our old age.

But we can't fool ourselves.

Only sincere practice will work.

一九六九年四月末のある日、春期の修行期間が終わり、そろそろ観光客を迎える季節が始まるうとしていた。タサハラで、鈴木俊隆は何人かの生徒たちとともに川下に歩いていき、昼の弁当を食べ、暑い昼下がりに水浴びを楽しもうとしていた。タサハラの小川の水位はかなり高く、ある場所では倒れた鈴懸すずかけの幹の上を渡って横切らねばならなかった。彼らは馬牧場へ通じる小道の基点で小川に注ぎ込む細流を横切るために、

石の上を跳んで渡った。それから彼らが狭間と呼んでいた、水に侵食された花崗岩の通路にさしかかった。そこで彼らは迂る水際の流れに研ぎすまされた岩棚の上に腰を下ろし、持参したチーズサンドイッチ、クッキーや林檎を食べ、岸に下りて小川の水を手ですくって飲んだ。

いったん観光シーズンが始まると、なだらかな岩の斜面やプールにはいつも五、六人ほどの裸の人たちがたむろしていた。狭間で素っ裸で水浴することは規則で禁止されていたが、ほとんどの生徒たちは、男女が入り混じった大きなグループで入浴するとき以外は、この規則を無視した。その日は全員が水着を着けていた。食事の後で、鈴木を除いて全員が山間の冷たい水に飛び込んだ。彼は生徒たちが、深いプールに向かって流れ落ちる滝の上を自由に滑って下りていくのを眺めていた。ダン・ウェルチが滝に隣接する湿った斜面

に下りて行き、結跏趺坐をした。他の生徒たちもそれに倣って坐った。鈴木は直射日光の当たった反対側の岸に適当な坐る場所を見つけ、生徒たちが楽しく遊んでいた深い淀みを横切つてそこに行こうとした。彼は水に入った。流れは速かった。急流は彼を渦巻いた淵に押し流し、瞬く間に滝を下つた深い水の中に運んだ。それから彼は沈んでいった——真つすぐ下へと。彼は泳げなかつたのだ。

彼は腕を伸ばしたが、誰も彼が沈んだことに気づきもせず、想像もしなかつた。彼は歩いて出ようと考へたが、脚を底に着けることができなかつた。彼は澄んだ水底にザリガニや鱒と一縮に自分が沈んでいることがわかつた。彼は水の中で動いている生徒たちの脚を見上げた。脚は掴むには遠すぎた。彼はぎよつとして、水を飲み始めた。

上では誰かが「老師はどこにいる」と尋ねた。彼らはすぐさま鈴木を引つ張り上げた。彼は咳をし水を吐き出して、ぜいぜいと喘いだ。

鈴木は元氣を取り戻し、一・六キロほどの道のりを上流に向かつて歩き、タサハラに帰つた。その晩の講話で、彼はその日起こつたことに言及し、呼吸できなかったことで、自分がいかに深く生命と空氣に執着し

ているかということがわかつたと語つた。この一件で彼の修行と禪の理解が、いかに貧弱であるかということとを思い知らされたのだ。彼は「偉大なこと」に専心するために、さらに一層真剣かつ勤勉な努力をしなければならなかつた。

彼が溺れかけた日から数週間経つた、六五歳の誕生日に、桑港寺で行われた講話の中で、鈴木は生徒たちに、彼と共にさらなる真摯な修行に専念するようにと訴へた。彼は無事年齢を重ねたことを喜ぶ一方で、今までの修行の未熟な点を残念に思うと述べた。あるいは真理を探求するために去つていった方が、全てのの人たちにとってベターかもしれないと言つた。ときどき彼はほとんど思い焦がれるように、自分に教えを授けることができる者がいる、という情報があれば、インドでも、タイでも、ビルマ（現ミャンマー）でもどこへでも行きたいと言つた。

彼は教師として大きな責任を感じており、このように大勢の生徒たちとどのように関わっていくべきかについて、いつも考へていると言つていた。風邪のためベッドで静養している間にこうしたこと熟考し、結論に達した。「私たちはより単純な修行に専念した方

がベターではないか。最も単純な修行は呼吸を数えることであると思う」

坐禅中に起こる問題がどのようなものであれ——痛み、心の乱れ、睡魔、恐怖心、あるいは魅惑的な幻想——生徒たちは、一から一〇まで何回も何回も呼吸を数え、鈴木と共に坐禅をするのであった。「私たちは公案や只管打坐をするほど熟達した生徒ではない。(只管打坐とはただひたすら坐禅をするという道元の言葉である)。

私たちには初心者の修行がより必要である」。鈴木はまた次のような忠告を与えた。「呼吸を数えることにより、日々の生活に十分な注意を払っていないときには容易にそれに気づくだろう。私は修行中に多くの困難を感じているので、あなたたちもまたよい坐禅をするためには非常な苦勞があるだろうと思う」

* * *

悟りは完全な業ではない。

Enlightenment is not a complete remedy.

奥さんがサンフランシスコからタサハラにやって来た。彼女は夫のキャビンと隣り合わせの、畳と障子の備え付けられた一室のみのキャビンに滞在した。そこ

で彼女は茶の湯を嗜んだ。鈴木は講話の中で彼女についての話をした。彼女は、彼が妻に対してあまりにも内向的で思いやりのないのはよくないと常に教えようとしている、と話した。彼はアメリカの言いまわしを引用して言った。「彼女と一緒に暮らせないが、彼女なしでは暮らせない」(“Can't live with her, can't live without her.”)と。

春の修行期間中に行われた講話の中で、鈴木は奥さんが飛躍的な進歩を遂げたと言明した。ある生徒は、彼女が永遠の、完全な、広大無辺な心象を得たと考え、他の生徒たちは彼女が天啓を得たのではないかと考えた。

「本当に」と彼は言った。「彼女は悟りを得たのだ。私はそんなことが起ころうとは考えてもみなかった」と笑いながら説明した。彼女の悟りは、彼女が桑港寺の檀家の葬式を行う僧侶を見つけたことができなかつたために得られたのだ、と彼は言った。鈴木はいつも葬式を行うために、タサハラを離れなければならなかった。檀家の多くが、他に僧侶がいるにもかかわらず、彼に葬式を行ってもらうことを希望した。葬式は、日本の在家信者にとっては、禅宗の僧侶のすべき最も重要な仕事である。

タサハラから桑港寺に向かう途中で、鈴木は車を運転していた生徒、ジェーン・ランクに幾度となく停車させた。彼女は彼が葬式を行わなければならないことを知らず、彼は葬式のことはすっかり忘れていた。彼らは海岸に行き、多くの店に立ち寄り、いつになくのんびりと過ごした。一方、奥さんの方は血眼になって代わりの僧侶を探した。片桐はロスアルトスにいた。弘文は日本に行っていた。彼女は責任感が非常に強いので、実際にノイローゼになってしまった。やがて彼女は、たとえ僧侶がいなくても世界は回り続けるだろうと悟った。瞬時にして彼女は諦めて、あるがままに、ただベストを尽くすことだけを考えた。ドカーン。何かが起こったのである。

鈴木は悟りについてあまりいろいろな話をする、生徒たちはその言葉の意味について固定観念を抱きやすく、それが最終目標であるかのような妄想に取りつかれるというをよくわきまえていた。生徒たちは悟りについてときどき話したが、互いに了解された定義はなかった。ほとんどの生徒たちは鈴木が悟っていると思っていたが、彼はそのような言わなかつた。質問されると、通常彼はそれを否定した。しかし

彼が得たものはどのようなものであれ、生徒たちは同じものを得ることを望み、彼が知っていることは何でも知りたいと思った。クロードのように、生徒たちの中には鈴木は悟りを開いてはいないし、彼自身長年にわたってはつきりとそのように明言しているという者もいた。マイク・デイクソンは、彼は明らかに悟っていると言った。例えば禅センターが始まって間もない時分、二回目の悟りを経験した後、ときたまそれについて話し始めたことがあったと指摘した。しかしおおむねそうした話は回避された。鈴木は悟りを最終的に安住できる境地だとして、推奨することはしなかつた。

生徒たちの中には、鈴木について学んでも悟りは得られないと考え、あるいは彼と十分に接触できないと思ひ、他の教師について学ぶために去っていく者もいた。すなわち安谷、中川、ロサンゼルス在住の臨済宗の師匠佐々木、ロサンゼルスの前角、ロッチェスターのカプロウ、ハワイのエイトケン等の教師であった。これらの教師たちはいずれも坐禅とともに公案を用い、生徒たちと個人的に頻繁に面談し、生徒たちに見性つまり悟りの経験を得るようにと明瞭に激励していた。禅センターでは多くの場合、生徒たちは独参で年

に一度しか鈴木に会う機会がなかったのである。安谷の摂心の場では、見性を得た生徒たちは公に承認が行われた。禅センターは悟りに関しては不十分で、事実、他の教師たちの精力的なやり方に比べ、いささか活気に乏しいように思われた。

鈴木は、悟りは制御できるようなものではない、と言っていた。彼はほとんどの僧侶は悟りを経験していないが、在家信者の中には経験した者もあると言っていた。彼は、仏教徒としての修行を経験したことがないにもかかわらず悟りを得た林叟院の近くの農夫についての話をした。かつて彼は生徒たちの中で、恐らく一〇人に一人程度しか悟りを経験できないだろうが、実際には悟りには必要ではない、と言ったことがあった。たとえ生徒たちが、気がついていないとしても、修行すること自体が悟りだからである。しかし実際に彼の生徒たちにその経験が訪れたのではあるが。

カナダから来た大工のケン・ソーヤーは二年ほど前から禅センターに滞在していた。サンフランシスコでの摂心の期間中に、午後の坐禅をしていたとき、彼は驚くべき広大な世界に自分が溶け込んでいくのを体験した。そのとき彼は誰にも明かさなかったが、後にタ

サハラでの独参の際、この経験を鈴木に話した。「そうだ、それは悟りだと言ってよい」と鈴木は言った。彼らは鈴木のカムフラージュでしばらく向き合っていた。「それであなたの修行はどんな具合に進展しているのかね」

その夏タサハラで、ある日ケンは鈴木のために線香を持って坐禅に行く途中であった。鈴木は橋を渡った。そしてケンは緑色の線香を高く掲げ、よい匂いのする薄煙を棚引かせながら彼の後に従った。鈴木は橋の縁に立ち、下の小川を眺めていた。周期的に板木を叩く音が静寂を破った——三回目の音が、そして最後の音が聞こえた。鈴木が小川を見下ろしていたとき、ケンは彼が水と木と空気に混じり合い、消えていくのを見た。一瞬の後、彼らは未舗装の丸石を敷いた道を下り、禅堂に向かって歩いてきた。ケンには何事が起こったのかわからなかった。それは彼に起こったことだろうか、それとも鈴木が起こったことだろうか、それとも二人が起こったのだろうか。しかし彼には一つわかったことがある。鈴木は修行の道は高い境地を手に入れるのではなく、一瞬一瞬の人生をあるがままに受け入れ、一歩一歩着実に進んでいくことであると。そこで彼は、それを意に介せずそのまま歩き続けた。

もし悟りを得れば、全宇宙が全宇宙に真理を告げるのです。

* * *

もしあなたがたたちの修行が
私たち全ての者を

包含するものでないとしたら、
それは真の修行とは言えない。

*If your practice doesn't include every one of us,
it is not true practice.*

爆撃機がハノイを空襲していた。オハイオ州ケン
州立大学では四人の学生がニクソンのカンボジア侵攻
に抗議し射殺された。核弾頭を装備した最初のMIR
Vが地下サイロに配備された。それは地球の日（ア
スター）の始まった年のことであった。レーガンがカ
リフォルニア州知事の二期目の選挙を戦っており、サ
ルバドール・アレンデがチリ大統領の選挙運動を展開
中であった。アレクサンダー・ソルジェニーツインが
ノーベル文学賞を受賞した。「パットン大戦車軍団」
がアカデミー賞の作品賞を獲得した。バートランド・
ラッセルが死んだ。

一九七〇年五月のタサハラでは、こうしたニュース
は全て遠い所の出来事のように思われた。永平寺で
ジーン、グレアムやフィリップを庇護してきた立髪老
師が、春期の修行の指導のためにタサハラに来了。彼
は夏の間いったん日本に帰国したが、秋期の修行の指
導に戻ってくる予定であった。立髪がタサハラに滞在
中、鈴木はページストリートのセンターに専念してい
たが、今はタサハラの地に戻ってきた。このとき、尾
根に残っていた冬の豪雪の名残雪は解けていた。

ローマ法王が、聖職者の独身生活はローマカトリッ
ク教会の根本的な教えであると宣言したその年、鈴木
はタサハラで、女性も男性も一緒に修行をすることに
成功したことを確認した。生徒たちのほとんどは独身
者であったが、若干の結婚したカップルや、少数の未
婚のカップル、そして大勢の子どもたちがいた。「ア
ジアの伝統的な」仏教界ではいまだかつてこのような
光景を目にしたことはなかった。鈴木の下りに集まっ
たかつてのアジア文化研究の学生たち、長髪の、個人
主義的な求道者たちのさまざまな異質なグループが、
当初の予定より遥かに緊密な協力の下に、仲よく禅の
修行と研究を進めることができていたのである。

鈴木はもはやタサハラを「生まれたばかりの僧堂」

とは呼ばなくなつた。五月一日から九月の労働の日（レイバースデー）の週末まで、客人を迎えるタサハラの習慣は続けられていた。来客たちはタサハラの静かで効率のよい運営を絶賛し、料理を大いに褒めそやした。毎年夏は、肉や魚の料理は控えられていたが、仏教の僧堂で肉や魚を出すのは不適切だという、立髪的主張に従い、料理は全て菜食主義になつた。彼は客人も理解するだろうと言つたが、それは正しかつた——食事は以前よりよくなつた。片桐と同様、立髪は僧侶でない者は頭を剃る必要はなく、髪を短く刈るだけでよいと言つた。その結果、客人にとつて彼らは多少普通の人間らしく見えた。

立髪は、読経と儀礼を教えるために非常に多くの時間を費やしたので、来客シーズン中は、建物に関する仕事の遅れを取り戻すのに忙しかつた。ほとんどの生徒たちが来客の世話に当たる一方で、大工の一回は意欲的な石と梁で造る調理場と、隣接する入り口通路と図書室の完成に取り掛かつていた。鈴木のカヤビンは、住職用の新しい、より頑丈なカヤビンの石の基礎を据え付けるために移動された。大工たちがカヤビンを動かしたとき、石を動かす仕事で疲れ果てた鈴木とメルがカヤビンの床でうたた寝をしていたのに氣

づき、しばらく仕事を中断しなければならなかつた。

その夏、『サンシード（太陽の種子）』という導師についての映画の一部がタサハラで撮影され、鈴木はカメラの前立ち、ヨーヨーを演じた。シャーロット・セルバーとチャールズ・ブルックスが食堂で二回目のセンサリー・アウェアネスの研究ワークショップを開いた。スターリング・バンネルという名の精神療法医兼博物学者がこの地の地学史の講義をし、タサハラはカリフォルニアの三つの主要な生態学的な地域が境を接する地点であると語つた。ロバート・ブライが自作の詩を読んだ。

鈴木は頻繁に夜の講話を行った。坐蒲に坐つた熱心な生徒たちが、正面の畳の部屋から年を経て黒ずんだリノリウムの敷いてある通路までぎつしりと並んだ。小刻みに鳴らす小さな鐘の合図で短い読経が行われ、その後が続く小休止が、静まり返つた禅堂に、小川の響きや、蛙、コオロギの鳴き声や、お客が傍らの道を歩く音を増幅させた。

彼は、立髪が朝のお勤めに加えた千年前の古い禅の詩、参同契さんどうけいについての講話を行った。このようなきざまな方法で鈴木は立髪が制定した新しい形式を認

め、それらにさらに生命と妥当性を与えた。彼はかつて、岸沢が長年にわたり行った参同契についての講話に出席したことがあった。今や彼はその聖典に光を当てる仕事に従事していた（彼は多の見地から語るか、個の見地からか、あるいは色の見地とよからか空の見地から語るかによって、「それらがあるがままの物事」ないしは「それがあるがままの物事」という風に句を使い分けていた）。

通常、私たちは「それらがあるがままの事物を観察する」とか、あるいはより正確には「それがあるがままの……」というけれども、実際には私たちは「あるがままの事物」を観察しているのではない。というのは、私たちは「ここに友達がいる、あそこに山がある、あそこに月がある」と考えるからである。それは二元的な観察の仕方であって、実際には仏教者の観察の方法ではない。私たちは私たち自身のままに内部に山を、あるいはサンフランシスコを、あるいは月を見いだすのである。これが私たちの理解、いわゆる、大いなる心（ビッグ・マインド）である。

鈴木は参同契が中国でいかにして書かれたかを説明し、当時一般に流布されていた誤解を明らかにし、争

いを続けていた各宗派の対話を促進するためであったと語った。タサハラには、鈴木と立髪たてかみのそれぞれ全く異なった取り組み方が並列していたので、生徒たちは両者を包含する心の余裕が必要であった。

その夏私（デイヴィッド）は鈴木について参同契を学び、彼が講義中に指摘できるようにするために、毎日昔の詩の中から漢字を黒板に書き出して講義の準備をした。ある日彼に、この準備のために私はしばしば夜通し勉強し、ときには起床のベルが巡回する頃ようやく就寝するような状況なので、朝食が済むまで起きられないことがあると告げた。これは予定通りに、他の人たち全員と共に、定められた時間通りに全ての勤めを実行しなければならぬ、と彼が常々言っていたことと完全に相反するものであった。彼はうなずいて曲がった彼の教鞭きょうべんを取り上げた。「頑張りなさい」と彼は言った。「みんなはあなたが気違いじみて思うだろうが、続けてやりなさい。それは大変よいことなのだ」

デイアンヌ・ゴールドシュニャーグは食堂で働いており、彼女の温かみのある朗らかな性格故にお客のお気

に入りであった。彼女はプロンクスの古風なユダヤ人居住区の出身であった。冒険好きな自由の気性に富んだ六〇年代の子どもであった彼女は、ベトナム戦争に抗議して逮捕され、アラブ諸国で彼女のユダヤの血統をごまかし、中近東をヒッチハイクなどした。彼女は一九六八年に初めてタサハラに來た。彼女と親友のマーガレットは教科書に書いてあるような模範的な生徒の生徒ではなかった。彼らは計画に忠実に従い他の生徒たちと同様一生懸命に働いたが、いつもいたずらをしたり、くすくす笑ったり、歌を歌ったりして嚴肅な静寂を破った。一度鈴木と共に独參をしている最中にディアンヌは衣の袖に手を入れて、三本足の、日に星のある空想の動物の絵を取り出した。彼らは絵の上にかがみ込んで、二人の小さな子どものように絵について話し合っていた。ときどき彼はディアンヌとマーガレットを部屋に呼び、彼女たちにキャンディーを与えて言った。「あなたたちにはキャンディーは要らない。必要なのは塩だ。あなたたちには塩をやらなければいけないのだ。あなたたちにとって私はよい教師ではない。私はあなたたちを生徒としてよりは孫娘のように扱ひ過ぎる」

ある日、一群の生徒たちと共に小川の傍らを歩いて

いたとき、鈴木はディアンヌとマーガレットが素っ裸で水浴びしているのに出会った。ディアンヌは大声で呼び掛けた。その日は非常に暑く小川は涼しそうだったので飛び込むほかなかったのだと言った。鈴木は彼らに指を振って言った。「忘れてはいけないよ、あなたたちは二匹の魚だ、一匹ではなく」

その日の後刻、サンフランシスコに出発する直前に、鈴木は彼のキャビンで二人の幹部と最後の打ち合わせをしていた。そのときドアをノックする音がした。それはディアンヌであった。彼女は、マーガレットと共に綺麗な石を見つけ、浴場の彼の更衣室に置いたので、彼が発する前に石を見て気に入ったかどうか教えてほしいと言った。二人の幹部は明らかに気分を害し、今はそんな時間はない、と言った。鈴木は二人の幹部に門の所で待っているようにと言ひ、ディアンヌと共に石を見に出でいった。彼女は彼と共に庭で働いた経験があり、石を見るよい目を持っていた。彼女が狭い部屋の片隅に置いた石は、丈が高く四角張っていて石英の白い波型があった。鈴木は「おー」と言つて近づいて子細に点検し、これを手元に置いてもよいかと尋ねた。二人は大勢の生徒たちが見送るため

に待つていた門口に一緒に歩いていった。マーガレットが別れを告げるために走ってきた。「忘れてはいけないよ——あなたたちは二匹の魚で、一匹ではない」といふことを」と言い、彼は車に乗った。

* * *

あなたが石になるとき、

それが私たちの坐禅の修行である。

*When you become a stone,
that is our zazen practice.*

いつも通り、鈴木老師はその夏も長時間、彼の庭で草木や石を相手に作業をした。生涯を通じて、彼は石について非常に多くのことを学んできた——バランスの取れる箇所やバランスが崩れる箇所について。彼は石の中には生きているものもあれば死んでいるものもあると言っていた。ある日、鈴木と付き添いのアラン・マローウが鈴木の庭で大きな石を回転させようとしていた。アランは一九三センチの長身で筋骨逞しい男であったが、二人は長い鉄の棒の助けを借りてもその石を動かすことができなかつた。とうとう鈴木はアランに風呂に行くようにと言った。風呂は毎日の作業を終えた後で入る習慣になつていた。アランは風呂

に行き、三〇分後に戻つてきて石が置き換えられているのを見て驚いた。彼は鈴木のキャビンの入り口で、大声で呼んだが返事がなかつたのでドアを開けた。中では鈴木が眠つていた。トイレの端に吐いた跡があつた。アランはそれをきれいに掃除して立ち去つた。鈴木は三日間ベッドに寝たままであつた。

もう一人の生徒ステイブ・ティプトンが、夏の暑さの中で考えられる最も苛酷な仕事に取り掛かつていた。浴場の近くの新しいトイレの浄化槽を設置する適当な場所は一ヶ所しかなく、その場所にはタサハラ特有の巨大な花崗岩の石が埋まつていた。狭い場所で仲間が入り込む余地がなかつたので、ステイブは一人で作業をしていた。毎日、風呂の後で、鈴木は立ち止まり、仕事の進捗状況を眺めた。ステイブは約二一三センチの石の周りに、幅九〇センチ、深さ約一八三センチの溝を掘つた。彼はドリルで石に穴をあけ、その穴に鑿くわを仕込み大槌で打ち込んで石を割ろうとしていた。一週間掛けて、彼はわずかに数個の破片を得ただけであつた。

とうとう鈴木が言葉を掛けた。「あなたはその石を割ろうとしているのかね」

「そうです」とステイブが答えた。「何かよいお考えがありますか」

鈴木は衣の袖を後ろに縛りながらステイブにそこを退くように合図し、その石に飛び乗った。彼は注意深く石を眺め、手で叩いてにやりと笑った。彼はステイブを呼び戻し、石の表面を指さして言った。

「こことこことここだ」ステイブは鈴木が指示した場所に穴を明け、鑿を打ち込んだ。石は粉々に割れて簡単にウインチで運び出すことができた。

その夏は鈴木の人生における最高の時期であった——早朝から起き出し、作務に精を出した活気と調和に満ちた時期であった。タサハラは心地よく、市内のセンターも快かった。鈴木は健康でたくましく、彼の夢は確実に彼の目前に開けているように見えた。

* * *

曹洞禅の禅義はただの二語である、
何必（何を必ずしも）。

*The secret of Soto Zen is just two words:
not always so.*

「何必」(“Not always so”)という言葉は、鈴木俊隆の教えから決して離れ去ることはなかった。彼は「恐ら

く」と前置きして話し始めることが多かったが、彼は決して自信がなかったわけではないようである。彼がこのように話すときは、強く根ざした信念の下に発言していたように思われる。彼は絶対的なものについて話し、それを謎めいた言葉で表現した。「私たちにとって絶対的なものは何もないが、何物も絶対的でないとき、それは絶対である」

彼は仏陀の教えについて、それは流動的で生きたものだと言った。「種々の環境に適應するためには、教えは無限の形態を取って然るべきである」

彼は悟りについて語ったが、こう言った。「悟りは何もあなたが到達する特殊な段階ではない」

何必 (Not always so)。日本語では二字ですが、英語では三語になります。これは私たちの教えの奥義です。もしあなたが、言葉や規則に捕らわれず、おびただしい先入観にも捕らわれることなく、物事をこのように理解すれば、あなたたちは実際に素晴らしいことを行うことができます。そしてそれを行うに当たって、古の師匠から引き継がれたこの教えを適用できます。これを適用すれば大いに役に立つのです。

それは把握できない。誠実な修行と坐禅によつてのみ理解され得るということは一種の逆説である、と彼は言った。彼の話の要点は、彼が知っている真実を伝えることではなく、諸々の障害から心を解き放つことにより、矛盾するものをも包含できるようにするためであった。

鈴木は、固定化された理解にすがりつくことが、仏教の教師たちにはしばしば見られる欠点であると考えていた。しかし、道元にはそのような欠点はなかった。

通常、禅の師匠はあなたたちにこう言うでしょう。「悟りを得るために坐禅をしなさい。悟りを得れば全ての束縛から解放され、へあるがままの事物」を認識するであろう」と。しかし私たちの方法は常にそうとは限らないのです。禅の師匠が言っていることはもちろん正しいのですが、道元禅師が私たちに語っていることは、いかにランプの炎を大きくしたり小さくしたりして調節すべきかということでした。道元禅師の坐禅の要点は、石油ランプやろうそくのように、完全燃焼し瞬間瞬間を生きるということです。

「仏教は諸刃の剣である」と鈴木はいわずらっぱい笑みを浮かべ、手首を返し、刀を振る真似をしながら言った。「行つては来て、行つては来る。ときに私はこちらの側で打ち、ときには別の側で打つ」。しばしば彼は真理の二面性について話したが、何が二面性であるかを理解することは容易ではなかった。それは単なる単一性と二面性ではなく、「単一性の二面性であり、二面性の単一性」である。彼は、誰も真理の全体を語ることはできない、なぜなら何を話そうとも、話すことによつて別の一面が常に作り出されるからである。そしてもし生徒たちが独力でそれを理解できないとすれば、彼らが執着する面を剣によつて切り離すことによつて理解するようになるであろう、と言った。

全ての物事は一つの観点からだけではなく、両面を理解すべきです。私たちは、一方の側だけから物事を理解する者のことを担板漢と呼びます。これは「板を肩に載せて運ぶ男」という意味です。彼は大きな板を肩に担いで運んでいるので、別の側を見ることができないのです。

彼はしばしば、「ただ坐り続けなさい」と言った。非常に頻繁に。坐ることで、眞実と考えられているものの拘束を緩めることができるからである。しかしそのとき、坐るとか坐禅をするという觀念が坐禅をする者を拘束することがあるだろう。坐禅は彼が教えた最も重要なことではあつたが、それがあまりにも特殊なものになつた場合は、彼は足元をすくつた。坐禅の間を長くするように要求する者があれば、彼は、スケジュールは現在のままでよいと答えるのであつた。脚の痛みを訴える者があれば、彼はもつと坐りなさい、と言つた。

「何必」でさえも不変のものではなかつた。それはすがりつくべき公式ではなかつた。

「何も質問はない」とある生徒が言つた。「なぜなら答えないからです。あなたが何を言おうとも常に不変ではないのです。だから私はただ坐るだけです」鈴木は頭を振つた。

「違いますか」とその生徒が尋ねた。「しかしあなたは言いました……」

「私が言つたときは、それは正しかつた。あなたが言つたときは、それは間違つていた」

もし鈴木 of 教えにもう一つの面が常にあるとすれば、「何必」の他の面とは何であろうか。その答えを求めるとは、肩から板を下ろさなければならぬ。い。

ほとんど全ての人は大きな板を背負つています。つまり彼らはもう一つの面を見ることはできません。彼らは自分たちが平凡な心を持つた人間にすぎないと考えていますが、板を取り払つたらば、彼らは理解するでしょう。「ああ、私もまた仏陀なのだ。どうして私は仏陀でありかつ平凡な心の持ち主であり得るのか。これは素晴らしいことだ！」と。これが悟りです。

鈴木はサンフランシスコに來た当初から、第一の原理と第二の原理についての話をしていた。彼は第一の原理には多くの名前があると言つた。すなわち仏性、空、実在、眞理、道、絶対、神である。第二の原理は第一の原理について語つてゐることで第一の原理を實現するための方法である——規則、教え、道徳、形式がこれである。こうしたものは全て人、時、場所に従つて変わってくる——そしてそれらは常に同じで

はない。鈴木は、仏教について語ることは真理ではない、慈悲心であり、巧みな手段、励ましであると言った。「特別な教えとか方法があるのではなく、全てのものの仏性は同じであり、私たちが見いだすものは同じである」

第一の原理は仏陀ないしは他の人たちが考え出したものではない。鈴木は、森の中で行われた仏陀の説教について語った。そこで仏陀は「第一の原理、最高の法則を宣言した」。彼は付け加えて言った。「しかし、もしあなたがたが仏陀の宣言したものが最高の法則であると考えるとしたら、それは正しくない。最高の法則は彼が説教を始める以前から存在していたのだ」

仏教は第一の原理ではなく、第一の原理を理解し、それを表現する方法であると鈴木は教えた。仏陀の教えは「純粹にして形式のない形式」における第一の原理としてのみ考えることができる。

もしあなたがたが、第一の原理についての先人観を持っているとすれば、そうした考えは倒錯したものです。そして第一の原理をあらゆる状況に応じ、一律に適用できるものとして追求する限

り、あなたたちは倒錯した考えを持つことになり、ます。そのような考えは必要ではありません。仏陀の偉大な光は常時、万物から輝き出ているので、す。

第一の原理は、通常の意味での識別や認識の仕方、すなわち相対的な真理を認識する方法を超越しているものだ、と常に鈴木老師は明言していた。

菩提達磨は、「私は知らない」と言いました。「私は知らない」というのは第一の原理です。わかりますか。第一の原理は、善い、悪いとか、正しい、正しくないという範疇では認識はできません。なぜならそれは正否いずれでもあるからです。

かつて鈴木は禅堂の生徒たちを二組に分けたことがあった、右側の者は第一の原理について質問をし、左側の者は第二の原理について質問することにした。もし間違った原理について質問した場合、その者は別の側に移動せねばならなかった。生徒たちは第一の原理についての理解を披瀝しようとして努力して有意義な時間

を過ぎてしたが、実際には誰一人として別の側に移動する者はなかった。最後には言うべきことは何も無いように思われた。

* * *

あるときは私が師となり

あなたたちが生徒となる、

あるときはあなたが師となり

私が生徒となる。

Sometimes I'm the teacher and you're the student,

and sometimes you're the teacher and I'm the student.

鈴木の一部屋の外で、洗練された日本語で「お邪魔します」という声があった。鈴木はドアを開いて「ああ」と喜びの溜息をついた。とうとう彼の古参の生徒、グレーム・ペッチーがタサハラに到着したのだ。グレームは部屋に入った。それから鈴木がポットから急須に湯を注ぎながら、二人は話を始めた。グレームは鈴木にアメリカの僧堂の驚異的な成功と、サンフランシスコで新しく手に入れた素晴らしいビルについて祝辞を述べた。

それは一九七〇年六月のことであった。彼らは一九六六年の秋、ペッチー夫妻がイギリスに帰る前

に、林叟院で会って以来の再会であった。その後グレームは彼独自の道を歩み続けていた。彼はポーリンとともに一年後、日本に戻った。一九六七年、鈴木は再び彼を禅センターへ帰ってこさせようとしたが、彼の連絡は遅すぎた。グレームは、日本で英語学校を始めるために、彼を雇った会社との二年間の契約を破棄することを鈴木が望むならば、アメリカに行つてもよい、と返事をしてきた。グレームが英国で受け取った鈴木からの最後の通信は、電報で簡単に次のように書いてあった。「あなたが日本に行く計画に同意します」

グレームは東京で生活し二年以上その学校の運営に当たってきた。彼は京都の内山との関係は続けていたが、今彼の生活は実業家そのものであった。その夜、グレームは禅堂で桑港寺での過ぎし日のことや、日本で禅を学んだことについての講演を行った。最も古い少数の生徒たちしか彼に会ったことはなかった。他の者たちにとっては、ほとんど伝説的となっていた、鈴木が直接得度した最初の西洋人で、禅センターを初めて法人組織にした人物であり、リチャードの古い兄弟弟子である人物に会って話を聞くことは思いがけない喜びであった。生徒たちはなぜ彼がセンターから離れて生活しているのか、そして彼が帰ってくる可能性が

あるのかどうか疑問に思った。

翌日グレアムと鈴木はランサム女史について話し合った。一九六七年、グレアムは鈴木への勧めに従って英国で彼女を訪ね、その後彼は毎週のように彼女を訪問するようになった。ポーリンと子どもたちも彼女に会った。ランサム女史は、背が高く、痩せていて、優雅で肩まで垂らした長い髪が、キャサリン・ヘップバーンを思い出させた、とポーリンは言った。黒いスーツを優雅に着こなした、グレアムの端正な姿をランサム女史がからかう仕草をポーリンは好きであった。彼は頭を剃っている点を除けば、モルモン教の宣教師にそっくりだ、と彼女は言った。ランサムはタサハラに資金集めのパンフレットを見て、彼女のかつての英語の生徒の業績を聞き驚いていた。「あの小柄な僧侶が国を離れ、アメリカで僧堂を開いたですって」と彼女はグレアムに言った。「私にはとても信じられない」。グレアムは彼女を訪問するたびに、彼女が二〇年代の終わりにあの小柄な僧侶と過ごした頃の新しい話を聞いた。彼女は仏像についての話をし、その経験によって彼女がどのように仏教を尊重するようになったかを話した。その仏像は壊れてすでに失われていた。

鈴木に宛てた手紙の中で、グレアムはランサム女史の伝言と、彼の禅堂、そして家族についての近況を知らせてきた。一九六七年秋、鈴木は東海岸への旅行ついでに、英国に行き、ペッチー夫妻とランサム女史を訪問する計画を立てたが、彼はタサハラの実務に忙殺されたため、最終段階で計画を取りやめた。それには彼ら全員が失望した。ランサム女史は、彼女のかつてのハウスボーイ兼通訳で、仏教の師であった男に手紙を書いた。鈴木は、禅センターの秘書であったイヴォンヌを通じて返事を出した。これにランサムは憤慨し、グレアムも賛同した。彼女は怒って手紙を書き、鈴木に自分で手紙を書くようにと言ってきた。彼女は彼の英語がいかに拙劣で下手くそな字でも気に掛けない、と言った。彼は葉書で便りをしてもよかったが、再び秘書を通じて手紙を書くわけには行かなかった。鈴木は彼女の手紙に対し、返事を書くのを止めた。それはランサム女史の機嫌を大いに損なったが、グレアムもまた失望した。

彼女は老齢になり、ますます敬虔なクエーカー教徒となり、定期的にその地の友愛ホールの会合に出掛けた。彼女は日本での経験によってではなく、中国の最後の皇帝、溥儀および彼の妻ワンジュンとの関係故に

英国では名を知られていた。彼女は薄儀とワンジュンについてBBCのインタビュウを受け、新聞紙上にも彼女の記事が載ったことがあった。一九六九年、八二歳で彼女は肺気腫のため亡くなった。若い皇妃の写真握りしめながら安らかに逝った。

グレアムはランサム女史が鈴木に渡してほしいと望んでいた品物を持ってきた。一九三〇年彼女が藏雲院の庭で彼を写した一六ミリの映画のフィルムと、彼女の生まれ故郷のサマーセットで見つけた特殊な土で焼いた暗褐色の湯呑み茶碗であった。茶碗に添えられた一枚のカードには、彼女の挨拶の言葉と、彼に手紙を書いてほしいという依頼が書いてあった。鈴木はそのカードを額に押し当て丁寧に低い机の上に置いた。彼はその茶碗を両手で取上げ、茶の湯の儀礼でするように、注意深く鑑賞した。

「少し教えていただけませんか」とグレアムは熱心に聞いた。「ランサム女史はあなたが二人についていろいろと私に話をしてくれました。二人がいかに親密であったかということ。そして彼女はいつもあなたのことを、愛情を込めて話していました。一体なぜあなたは秘書を通じて彼女に手紙を書くようなことをしたのですか。そしてその後全く彼女に手紙を書くこと

を止めてしまったのでしょうか。なぜ彼女の手紙に返事を書かなかったのでしょうか。英国の基準からすれば、そうしたことはとても失礼に当たるのです。特に彼女のような年齢と階層の婦人に対しては。私には理解できません」

「私が返事を出さなかった理由は」と鈴木は答えた。「彼女が私たちの過去について質問し、日付を調べようとしたからだ。私が彼女と知り合った頃の彼女の生活について、彼女が本を書こうとしているのではないかと危惧したからだ」

グレアムは非常に驚いた。彼女は中国における体験すら書いたことがなかったのだ！

グレアムは作務の約束をしていると言つて辞去した。彼は作務衣に着替えて、溝を掘っていた仲間に加わった。およそ三〇分後、鈴木付き添いがグレアムの所に来て、鈴木がもう一度彼に会いたがっている、と伝えた。グレアムはこの仕事をする約束をしているので、作務を続ける、と返事をした。二人は再びランサム女史の話をすることはなかった。

* * *

私たちは空の世界から

手紙を受け取るわけではありませんが、
草花を見るとき、

小石が竹を打つ響きを聞くとき、

それがすなわち

空の世界からの手紙なのです。

We get no letters from the world of emptiness,

but when you see the plants flower,

when you hear the sound of bamboo hit

by the small zans,

that is a letter from the world of emptiness.

一九七〇年夏のある朝、船便がページストリートに届いた。鈴木俊隆によって書かれた *Zen Mind, Beginner's Mind* の入った数個の箱であった。これは広く知られているエド・ブラウンの「タサハラ料理読本」に続き、禅センターから出版された二番目の本であった。生徒たちは正面のホールの周りに集まってきて本を手にとった。グレーのカバーには鈴木がタサハラの彼のキャビンで、ユカの葉を筆にして書いた白と黒の書が載せられていた。それは日本語で如来、サンスクリット語でタターガタ (*Tathagata*) という意味の文字で、「このようにして来る」という意味の、古くから伝わっている仏陀の一〇の名前の一つであった。赤い文字で印刷された表題と著者の名前の間には、「禅

の瞑想と修行に関する非公式の談話」 (*Informal Talks on Zen Meditation and Practice*) という副題が載せられていた。

それは短い章からなるわずか一三四ページの薄いハードカバーの本であった。各々の章はテキストから引用された文章で始まっていた。「初心者の心」という表題の付いた序文には「初心者の心には多くの可能性があるが、熟達者にはそれが乏しい」という引用が付けられていた。

この本が仏教界やその他の世界に大きな衝撃を与えることになるうとは誰も想像しなかった。友人たちや家族に送ることのできる老師の講話についての小冊子が出来上がったことは素晴らしいことであった。「ウィンドベル」は通常一つしか講話を載せておらず、稀にしか発行されなかった。

鈴木と奥さんが階下に下りてきて、一握りの生徒たちに加わった。彼はおどけた驚きの仕草で本を眺めた。奥さんはカバーの背に印刷されていた鈴木の前部から肩にかけての白黒のクローズアップの写真を腹を立てた。彼が頭と顔を剃る少し前にタサハラで撮った写真であった(僧堂では、五日に一回、四と九の日に剃った)。彼はまっ黒な日本の作務衣を着て、表情豊かな顔には射るような澄んだ眼差しと、微かな心地よい

微笑を浮かべ、両側にブックエンドのような皺がある黒い目と、暗示を与えるかのように軽く吊り上がった眉が収まっていた。

「日本ではこんな写真は絶対使わないでしょう」と彼女は言った。「なぜ方丈さんの一番よい衣を着た、立派な公式の写真を使わないの」。生徒たちが彼女をからかったので、彼女は諦めた。

ある生徒が鈴木に、本の中ほどにある文章の載っていない二ページを見せた。彼の古い生徒のマイク・デイクソンの描いた小さな蠅が右側に印刷されている以外は空白になっていた。生徒たちは、マリアン・ダービー、リチャード・ペーカー、そしてトルーディー・デイクソンの努力によって完成した、彼の教えを反映した本を見ていた鈴木を、一人残して立ち去った。

しばらくして彼は私の隣に来てくすくす笑った。「よい本だ」と彼は人差し指で表紙を叩きながら言った。「私が書いたのではないが、よい本のように思う」後に彼は言った。「私は生徒たちの理解がどのようなものかを知るために *Zen Mind, Beginner's Mind* を読んだ」

仏教は

温かい手から温かい手へと
伝えられる。

*Buddhism is transmitted from
warm hand to warm hand.*

「あなたたちによい知らせがある」と鈴木は太腿を叩きながら言った。それは一九六九年秋、ページストリートへ移る前のことであった。ボブ・ハルパーンと私はその日の午後、桑港寺に行き、鈴木の仕事所に迎えられた。彼はインフルエンザで休んでおり、生徒たちは長い間彼に会っていないかった。鈴木は続けて言った。「リチャードの嗣法を行うために日本に行こうと思う」

鈴木はこの上なく上機嫌のように見えた。私たちは衝撃を受けて立ちすくんだ。「鈴木老師」。ボブはしばらく考えた後で言った。「もしあなたがリチャード・ペーカーに嗣法をお与えになれば、生徒たちは皆、あなたは気が狂ったのではないかと思うでしょう」

「いやいや」と鈴木は別に慌てる様子もなく言った。「これはよいことだ。あなたたちが喜ぶべきことだ。」

彼が日本から帰ってきた時は、あなたたちはアメリカ人の教師を持つことになるのだ」

アメリカ人の教師だって？ 私たちはアメリカ人の教師などは欲しいと思わない。日本人の教師が欲しいのだ、主として鈴木であるが。日本の僧侶は自分の行動をわきまえており、自分の役割に安んじているように見える、そして禅僧のあるべき姿をしている。アメリカ人のちよつとした適ちや欠点は目につきやすい。ボブも私もリチャードは好きだし、彼が旺盛なエネルギーの持ち主で、センターに活気を与えていると思うと同時に、鈴木を完全に信頼していた。しかしボブはこの決定に関しては、センター内の調整が難しいことがわかっていたので、今後予測される事態について鈴木に警告した。ボブはセンターの人たちの感情をよく承知していたのである。

その日遅く、私は街頭で弘文に偶然出会ったので、この話をした。弘文はホラー映画の俳優のように両手を前に上げて後ずさりした。「駄目、駄目、リチャードでは駄目だ！ 間違いだ！ フィリップならいいだろう！ フィリップなら！」

ボブと私は、桑港寺の向かい側にあったセンターの彼のアパートに行った。ディアンヌが立ち寄ったの

で、彼女に鈴木が嗣法をリチャードに与える計画をしていることを話した。「まさか」。彼女は驚いて息を呑んだ。「リチャードはとても傲慢で堅苦しい男だわ。私には、彼は鈴木を生徒としての精神に最も欠けている人間だと思われます」

「リチャードが優れた禅の師匠になるだろうと考えているのは誰だと思いませんか？」とボブが言った。

ディアンヌは彼を見つめて言った。「わからないわ。一体誰なの」
「鈴木老師だよ」

嗣法は得度の最終段階である。嗣法で僧侶は釈迦牟尼仏陀によって始められた仏法の系列内で自立した教師となることを師匠により認定されるのである。リチャードはそれを印のない心の伝達と呼んだ。当時、禅センターの者たちは、いまだかつて西洋人が日本の禅の伝統に基づき嗣法を受けたという例を知らなかった。直接観察する実例がなかったため、鈴木を生徒たちは彼らが読んだ仏教の本に述べてあるように、「心から心に伝える」理想的な意味での嗣法を想定しがちであった。嗣法は教師の免状を取得するのと同じようなものだ、と言ったクロードの言葉には、誰も注意を

私わなかった。鈴木は講話の中で言ったことがある。

「嗣法は何も特別なことではない」とか「実際、伝達すべきことは何も無い」と。いつものように、彼は生徒たちがすがりつくような定義を設定するよりは、彼らの仮定を打ち壊すことに、より多くの時間を費やした。長年彼が嗣法について語ってきた矛盾点にもかかわらず、鈴木はまたアメリカに来て以来「嗣法の禅」としての彼の道について語り、師匠と弟子の關係の重要性を強調してきた。

今夜の私の講話は非常に短いものです。特に非常に長いすてきな廻のご馳走の後では。私たちの嗣法は長い長い年月を経過しています。私たちの嗣法は特別の廻です。道元禪師は言っています、「仏性を実現したときは、あなたたちは師である。」と。あなたたちは師匠の師でもあり、そしてまた釈迦牟尼仏陀の師にもなり得るでしょう。

嗣法は「何も特別のものではない」のかもしれないが、鈴木にとってそれは不可欠のものであり、仏陀の道を伝える彼の修行の核心であった。彼は彼と責任を分かち合う後継者を常に探していると語っていた。

私が鈴木を乗せ、タサハラへ向かつて車を運転していたとき、彼は生徒たちを布教のために外部に派遣する計画を私に話したことがあった。「あなたはテキサスに行くことも可能だ。他の者たちは東海岸、ポートランド、アメリカ全土に、あるいはアメリカ国外にも行かせよう」。私は彼に、テキサスに行つて禪のグループを作ることに興味はないと答えた。私は、自分は今全く無価値な人間で、そうした活動をする資格があると考えたことはなかった。私は大勢の生徒たちがそうした活動の準備ができていようか疑問に思つた。鈴木は、それには時間がかかるであろうが、ある時点では難鳥のように、用意ができていようがいまいが巢から放り出して教師にするのだ、と言つた。私は驚き、しばらく沈黙していた。それから私は尋ねた、「あなたは弟子たちが完全にあなたの教えを理解する前に嗣法を与えるということでしょうか。」「その通りだ」と彼は答えた。

「では老師、お尋ねしますが」と私は続けた。「今までにあなたの教えを完全に理解した生徒が*ありましたか」

「あつた」

「何人ですか」

「一人だ」

「男ですか、女ですか」

「男だ」

「それはアメリカ人ですか」

「いや」

「日本人ですか」

「そうだ」

「その男はどうしたんですか」

「死んだ」。その後、いつものように鈴木は眠ってしまつた。

アメリカ人の生徒たちは、嗣法を受けて黄色や茶色の衣を着た日本の僧侶たちを、半ば天界の存在であるかのように扱った。弘文が到着するや否や、鈴木 of 生徒たちが最大限の敬意を払い、仏法について質問したとき、生徒たちの態度にリチャードは苛立った。鈴木 of 生徒たちの多くは、弘文よりも長期間仏教を学んでいるのだとリチャードは指摘した。

一九六七年に行われたリチャードの得度から一九七〇年の秋までに、鈴木は九人の生徒を僧侶とし

て得度した。パークレイ禅センターの会長メル・ウアイツマンは一九六九年に得度した。ビル・クワンとサイラス・ホードリーは一九七〇年の初めに衣を授けられた。サイラスは自分で経営していた輸入の商売を放棄して常時禅センターで活動することになった。ピーター・シュナイダーとダン・ウエルチは共に一九七〇年に誓願（得度）し、建築業者のポール・デイスコーとレブ・アンダーソンはその年遅くセンターにやって来た。レブは連中の中では最も新しいメンバーであったが、並々ならぬ努力を傾注して、鈴木の教えに専心した。鈴木はまた一九七〇年の初めに若い夫妻が日本の僧堂で学ぶため、渡航する前に得度した——ロンとジョイス・ブラウニング夫妻である。そして一九七一年の正月には、長い間IBMに勤務していたレス・ケイという名の男をロスアルトスの禅堂で得度する予定であった。

ボブと私は、僧侶としての得度について鈴木と議論を交わしていた六人ほどの生徒たちの中にいた。ある日市内のセンターで、彼はボブと私を彼の畳の部屋に呼んで私たち二人を一緒に得度したいと言った。それ

は私たちにはいささか唐突に感じられた。私たちは二人とも自分の欲望を制御することを学び得たとは言えなかつたからである。私たちは間違ひなく鈴木が抱えていた問題児の部類に属していた。私たちは、彼の在家の生徒たちの中には、新しい生徒たちにとってより優れた手本となり、共同体の指導者にふさわしい者が大勢いると考えていた。しかし私たちは抗弁はしなかつた。私たちは姿勢を正して真剣な面持ちで坐っていた。私はもし発言すれば、彼は自分の考えが間違っていたことに気づくだろうと思つて、ただ黙つてうなずいていた。(彼は言つた、「あなたたちが口を開くまでは、誰も彼も悟りを開いているように見える」と。)

「私たちは坐禅の理解を深めるために、夜は余計に坐禅をすべきだとお考えでしょうか」とボブが尋ねた。「あなたたち二人にとって最も重要な点は」と鈴木は言つた。「坐禅を余計にすることではなく、忍耐心を育むことだ。私も同じ問題を抱えていた」。それから彼は笑いながら言つた。「忍耐心を養うには忍耐が必要だ」。彼は左の肩を上げて柔らかな調子で言つた。「大事な点は喧嘩をしないことだ」。その後で、奥さんを部屋に呼んで、笑つて私たちをからかいながら、衣の寸法を取つた。

そのときまでに、リチャードより以前に得度した最初の六人の僧侶たちは、禅センターを去つていったか、あるいはその周辺にいた。鈴木が最初に授戒したと考えていた二人の弟子ビル・マックニールとボブ・ヘンスの動静を知る者はほとんどいなかった。ジョン・ロスはカーメルに住み、小さな坐禅のグループが彼女のアパートで集まつていた(これらの最初の三人は鈴木の子として日本で他の僧侶によつて授戒された)。グレーム・ベッチーはなお日本に留まつており、疎遠になつてしまつたように思われた。フィリップ・ウィルソンは、一九六九年にセンターがページストリートに移転する前に、妻と共に北部のサンタロザに移つた。彼は新しい人たちと上下関係が気に入らなかつたうえに、彼の出番もなかつたように感じた。クロード・ダレンバーグは市内のセンターでの修行に参加してきたが、新しく、大きく膨れ上がった禅センターには不満であつた。彼は鈴木がかつてイーストウエスト・ハウスのように、一〇人くらいの生徒たちが共同で生活できる、大きな家を手に入れる計画を話していた頃のことを思い出していた。クロードは、鈴木が禅センターは基本的に在家信者の修行を維持すると

いった約束を裏切ったと感じていた。

一九七〇年の夏までに、六人の僧侶——リチャード、フィリップ、クロード、ジョン、サイラス、そしてメル——がタサハラで首座に任命された。その後間もなく、ピーター、ビル、そしてダンが彼らに続いた。タサハラと市内のセンターにますます大勢のアメリカ人僧侶が出現したことにより、雰囲気が大きく変わった。生徒たちは——主にタサハラが開所してからやって来た生徒たち——は僧侶としての得度を受けるべきかどうかに思いを巡らせた。古参の生徒たちでいまだにセンターにやって来ていた人たちの大半は、彼らが進めてきた在家信者の修行に満足していた。

在家信者の修行と得度が無視されていたわけではなかった。一九七〇年八月末、三六人の生徒が一九六二年以来初めて行われた授戒会で戒律を授けられた。鈴木は、多くの生徒たちが得度を受けて間もなく修行を止めてしまったことに失望し、授戒を行うことをこれまで長い間延期してきたと語った。二、三の生徒たちは絡子を返却さえもした。鈴木は一九七〇年に授戒した生徒たちの誓願を信頼していた。彼ら全員がその後少なくとも三年間は修行を続けた。

鈴木および彼の僧伽の人たちはアメリカにおいて在家信者となり、あるいは僧侶となることかどのようない意義を持つているかを自分たち自身で解明し定義付けしようとしていた。彼らはそうした生活によって、先輩たちから学びながら、それがどのような意味を持っているかを考え、それがいかなる意味であるにせよ良心に浮かんだことを表明した。彼らはどのような用語を使ったらよいかわからなかった。一修道僧「Meditation」という言葉は禁欲的すぎ、「僧侶」という言葉は進みすぎているように思われた。しばしば両方の言葉が使われたが、恐らく僧侶という語は嗣法を受けた者か、ないしは少なくとも首座を務めた者に対して使う方がより適切であろうと思われた。新しく得度を受けた者を「見習い僧 (Novice)」と呼ぶように提案されたが、これは人氣がなかった。

鈴木は、僧侶になることは決して在家信者より優れているわけではないと強調した。それは単なる役割の相違であると言った。それでは僧侶と在家信者との間の相違とは一体何であるうか。ジョンを除き、いずれの僧侶も結婚しているかあるいは異性ととの交渉を持っていた。鈴木はメルに一年間ガールフレンドを持たないようにと要求したが、その年の暮れ、彼はそれが失

敗であったことを偶然知った、とメルに伝えた。タサハラでも市内のセンターでも、ほとんどの生徒たちは、僧侶であれ在家信者であれ、早朝に起床し、坐禅をし、読経し、仏典を学び、作務に励み、準僧堂の生活をしていった。しかし、市内のセンターでは生徒たちはより自由であり、私的な生活もあり、一緒に外出することもあった。多くの生徒たちは親密に交際した。

ある者は外部に仕事を持っていた。数回講話の中で鈴木は言った。「私たちは僧侶でもなく、在家信者でもない、その中間的な存在である」。ある種の新しいものが、禅センターで創り出されたのだ。彼はセンターが独自の方向に進むことを快く認めた。

ある日メルが鈴木に尋ねた。「僧侶になるといふことはどのようなことでしょうか」

「わからない」と鈴木が答えたので、メルは自分で考え出さなければならなかった。

ほとんど一年にわたり鈴木は、日本でリチャードに嗣法を与えるという彼の決意を生徒たちに言い続けてきた。そして少しずつ彼らの反応が返ってきたが、そのほとんどは否定的なものであった。彼はサイラスにどう思うか、と尋ねた。サイラスは、恐らくリチャードはこの社会にはスマートすぎるのではないかと答

えた。「他の者たちはスマートさに欠けているのだらう」と鈴木は言った。タサハラでの会合で彼はとうとう、センターはこの問題に関しては鈴木に一任すべきだと伝えた。

「わかりました、老師、それでは嗣法とはどういう意味でしょうか」。一九六九年のその日彼がボブと私にその計画を話したとき、私は桑港寺の彼の事務所へ質問した。「リチャード・ペーカーが完全に悟りを開き、彼の心が仏陀の心と同じになったということでしょうか。彼の理解は完全なものでしょうか」

「いや、いや、そうではない」と彼は答えた。「あまり大げさに考えなくてくれ。彼は仏教をよく理解しているということだ。よく理解していると同時に完全に帰依しているということだ」

* * *

禅の修行は私たちの真の心、
思考では理解できない心に
到達するためにある。

この心は通常の努力では
意識して知ることはできない。

独特の努力が必要である。
この努力が坐禅である。

Zen practice is to get to our True Mind.

The mind not accessible to thinking

This mind cannot be consciously known by

ordinary efforts.

An unusual effort is necessary.

This effort is zazen.

鈴木は一九七〇年八月、四カ月間滞在する予定で日本に発った。リチャードの嗣法を行い、家族や、古い友人たちを訪ねる目的の他に、彼は生徒たちを修行に送ることが出来る場所を探したいと考えていた。

奥さんは、彼女や桑港寺の檀家の友人たちと共に、九州へ陶磁器の窯元を訪ねて歩く旅行に参加できるように一カ月早く出発することを彼に納得させた。彼女は繰り返し九州に行くこと、そして弟子と一緒に連れて行かないようにと依頼せねばならなかった。彼女はこれが彼ら夫妻の真の意味での生涯一度きりの休暇になるだろう、ということがわかっていた。出発直前になって、彼は病気にかかり、彼女に一人で出発するようにと言った。これに対し、彼女は休息以外何もする必要はないと言い、彼に懇願した。こうして彼らは一緒に出発した。

日本の古い習慣に従い、奥さんは彼の荷物と彼女の荷物の双方を選び、彼はハンカチの他は何も持たなかった。初秋の暑く鬱陶しい中を、彼らは町から町へ、窯元から窯元へと訪ね歩いた。彼はできる限り元氣を出して頑張った。夜、彼女は彼にマッサージし、鍼を打った。彼は体調を崩し、旅に出て二週間目には同行の者たちが観光に出掛けている間、彼女は彼と共にホテルに留まった。旅を終え林叟院に帰り着き、やっと彼は回復した。

グラムが林叟院にかつての師を訪ねてきた。鈴木は生徒たちを修行に送ることのできる場所を日本で探すことについて彼に相談した。野扒の健康状態は思わしくなく、これ以上生徒を受け入れる状況にはなかった。その他の修行の寺を訪ねたが、鈴木はいずれも彼の生徒たちにはふさわしくないと結論を出した。永平寺は明らかに大きすぎるうえ、複雑な伝統に抑圧されていた。リチャードは永平寺に滞在したが、それに耐えられなかった。彼は永平寺に留まることは全く時間の無駄である——素晴らしい所ではあるが、外国人が禅を学ぶのには向かないと言った。どちらかといえば、日本人の僧侶たちが、僧侶の技能を学ぶための

学校であった。京都で、リチャードは一年間安泰寺に滞在し、内山興正の下で修行をした。その後臨濟宗の小堀南嶺宗柏ゴボリエノケノウラハクについて大徳寺で坐禪をした。鈴木はリチャードの選択に必ずしも満足したわけではなく、公案を学ばせるために生徒たちを送りたいとは思わなかったが、リチャードには自分で修行の方法を決めさせた。

「あなたは是非とも安泰寺をご覧になる必要があると思います」とグレアムは鈴木に言った。坐禪のみの修行、という方法を、グレアムは気に入っていた。そして住職の内山も気に入っていた。彼は鈴木と同様に、ヒエラルキーを容認しようとせず、日本の禪の現状を嘲笑した。グレアムはタサハラを訪問した際経験した、増大し続ける形式主義に不快を感じ、安泰寺のやり方が多少とも鈴木に影響を与え、彼がサンフランシスコで共に修行をした初期の頃の手法に立ち戻ることを望んだ。

彼らは京都に行き、内山に面会した。その日の午後、鈴木は内山の日本人の弟子たちに日本語で簡単な講話を行った。夜には内山の吹米人の弟子たちに会い、三時間の活発な質疑応答を行った。英語で行われた討論に参加した日本人の弟子たちは、鈴木が英語で

話すのを聞き、初めてなぜ彼が大勢の生徒を持っているのか理解できたと言った。日本語での彼の話は退屈そのものであった。

林叟院でリチャード・ペーカーは、本堂から一番離れた畳の部屋に坐っていた。彼は筆を使って鈴木の方法に連なる僧侶たちの名前を漢字で注意深く写していた。これは彼ら二人の間で数週間にわたって行われる室内の儀礼、誦法の一部であった。鈴木は本堂の別の側において、古い友人たちや檀家の人々と面会していた。そこにはほとんど絶え間なく来客があった。

リチャードは修行期間の終わる前に永平寺を去った。彼はそこの修行の中身のない空虚さにうんざりしていた。修行のほとんどは住職の資格を得ることを目的としていた。彼は毎日訪れる大勢の在家信者や、何台ものバスでやって来る旅行客のために演出された修行を嫌悪した。グレアムが経験したように、リチャードを困らせようとやっきになっている特定の僧侶さえもいた。鈴木は彼に修行期間を完全に勤めさせようとした。彼はグレアムにどうしたらよいかと尋ねた。グレアムは彼自身が永平寺で並はずれた苦しみを味わったので、リチャードの気持ちはよく理解できたが、リ

チャードには引き続き留まるように話した方がよいと答えた。リチャードは頑なであった。鈴木は譲歩したが、彼は永平寺のことよりもリチャードのことが一層気がかりだったので、彼の決意を受け入れた。

林叟院でリチャードは、鈴木が客人たちと会ってばかりいて、彼を無視し、裏の部屋で一人ぼっちにしておいたので、欲求不満になった。とうとうリチャードは家族の居室に行き、鈴木が彼と過ごす時間がないのなら、妻や娘のいる京都に帰る、と告げた。鈴木がより多くの時間を彼と共に過ごすようにしたので、リチャードは引き続き留まった。そして一九七〇年一月八日、仏陀成道の日に師匠から弟子への嗣法の儀礼が完了した。

アメリカに帰る前に、鈴木は東京の宗務庁を訪れ、リチャードや他の弟子の僧侶たちを、曹洞宗門に登録しようとして努力した。彼は一九六六年にも同様の試みをしたが成功しなかった。鈴木は一匹狼であり過ぎたし、彼の弟子たちは規定された修行に従わなかった。日本の僧侶たちは通常うわべだけの儀式や資格だけで登録されたが、彼や彼の蛮力な弟子たちに対しては

寛大ではなかった。

リチャードは鈴木が弟子たちを登録しようと努力していることには気づいていなかった。彼は鈴木が禅センターは日本の曹洞宗とはいかなる公的な関係も持つべきではない、友好的な関係に止めておくべきだ、と言っていたことを記憶していた。例えば、嗣法を受けた後で、日本では瑞世と言われる儀礼があり、そこで僧侶は曹洞宗門から嗣法の承認を受ける。この儀礼で僧侶は永平寺と總持寺の「一日住職」に任命され、牛毛の払子を持ち歩く。鈴木はリチャードに「だがあなたはワシントンのホワイトハウスに行つて、払子でお払いをすべきだと思ふ」と言った。

焼津に滞在中、鈴木は家庭医を訪ねた。鈴木は、自分分は元氣だと言っていたが、小沢医師は彼の肝臓は弱つていると言った。

この話を聞いて奥さんは、「それご覧なさい。あなたは禅センターをリチャードに引き継いでここに残りなさいよ。私はサンフランシスコに行つてあなたの所持品を持って帰り、あなたの看護をします」と言った。

「いや」と彼は答えた。「もう帰るときが来た。私は新年をページストリートで生徒たちと一緒に祝いたい」

運転手 1971

CHAPTER 18
The Driver

いかにしたら

坐禪の修行ができるのであろうか。

あなたたちが自分自身を受容し、

自分がここに存在するということを

真に認識して初めて可能となるのである。

あなたたちは

自分自身から逃れることはできない。

「私はここにいます」ということは

究極的真相である。

How can you practice zazen Only

when you accept yourself and

when you really know you exist here

You cannot escape from yourself.

This is the ultimate fact, that "I am here."

日本から帰ってしばらくの間、鈴木俊隆は比較的良
好な健康状態を保ち、ページストリートで生徒たちと

の生活を楽しんだ。彼は坐禪をし、お勤めの導師を務
め、頻繁に食堂で僧伽の住人たちと共に食事を取り、
独参やお茶の時間に大勢の生徒たちと個人的に面談し
た。

彼の僧伽と、なお日本に留まっていたリチャードに
全幅の信頼を寄せる一方で、鈴木は諸々の欠陥や障害
が内在していることについて無知であったわけではな
い。講話の中で、鈴木は仏教にすぎりつくことを戒
め、宗教は麻薬になり得る——仏教から離れて自分自
身に立ち返りなさいと教えた。彼は一九七〇年、日本
への旅行中に見た教団に内在する衰退を思い出した。

「昔ながらの古い宗教はいらぬ」と言い、生徒たち
には常に注意を怠らないように、と力説した。彼の見
た危険の一つは「集団の中で自己を見失う」ことで
あった。僧伽の長所を褒める一方で、彼は生徒たちが
羊のようにならないようにと警告した。先に鈴木が京

都を訪問した際、内山は、齒に衣を着せなかつた師匠の禪木と同様、日本の「群衆心理」と「集団的麻痺状態」への傾向を罵倒した。ペーシストリートでの講話の中で、鈴木はこの主題について彼独自の、行つたり来たりする自己撞着的な手法で話をした。

私たちは禅センターにおいて、どのようにして道元の修行を発展させることができるかを承知しています。私たちの修行は個人的な修行ですが、同時にまた集団的な修行でもあります。隠者のような修行であると同時に、現代社会の中でも修行することが出来ます。これが道元の修行の特徴です。これが真の意味で、自己の上に自己を定着させるということなのです。あなたたちはこの現代社会にあっても、瞬間瞬間の新鮮な経験を失つてはなりません。私たちは捕らわれてはなりません。自分自身の内部の新鮮な生命力を認識しなければなりません。

私たちの修行で最も重要な点は、ひたすら予定に従って、共に行動することです。ここでまた、あなたたちはそれを集団的な修行ではないかと言うかもしれません、そうではありません。集団

的な修行とは全く異なっています。それは一種のアートのようなものです。戦争中、私たちが坐禅をしていたとき、日本の軍国主義的な風潮に心酔していた若者たちが私に、お経の中にこう書いてあると言いました。「生と死を理解することが私たちの修行の主眼である」と彼らは言っていました。「そのお経については何もわからないけれども、私は安んじて前線で死ぬことが出来る」と。

これが集団的な修行です。ラッパ、銃、ときの声に鼓舞されて死ぬことは容易です。でもそのような修行は私たちの修行ではありません。私たちはまず人々と共に修行をします。しかし終着点は山、木、石と——この世界、この宇宙の全てのもの——共に修行し、この大きな宇宙の中で、この大きな世界の中で自己を見いだすことなのです。

鈴木は一九七一年二月に市内のセンターで行われた摂心の指導をした。彼が講話を行ったときには本堂は聴講者で溢れた。二月二十七日の土曜日に行われた彼の講話は、大勢の生徒たちに空しさを後に残した。彼らは後にこれを「運転手の講話」と呼んだ。

彼は、私たちが修行する理由は完全な悟りを得るためである、と切り出した。問題は錯覚である——私たちは物事を明確に見る目を持っていないのである。

「当然のことながらあなたたちはいかにして真理を見つけようかと迷い、行くべき道を明瞭に示す地図を得ようとする。あなたたちがどの方向に行くべきかを示す地図、すなわち方向を指導する教師を必要とする理由はここにある」

彼は師についてどのように学ぶべきか、自分の、ひいては師の時間を無駄にしないようにするにはどうしたらよいかを語った。「師が急いで行くときはあなたたちも急いで行きなさい、彼がゆっくり行くときはあなたたちもゆっくり行きなさい。あなたたちの師はあなたたちの運転手のようなものである」。生徒たちはコーヒーショップの前で停車してほしいと運転手に要求するかもしれない。それは構わないが、そのときその辺を散策したいと思うかもしれない、と彼は言った。

こうしたやり方ではあなたたちは運転手を失ってしまふかもしれません。なぜなら時間がかかりすぎるからです。もし師が非常に年老いていれ

ば、彼は死ぬでしょう。その場合、町に到着するために、当然ながら別の運転手を見つけなければなりません。あなたたちには有利な点があります。なぜならあなたたちはすでにここまでやって来たからです。しかしつまりは、あなたたちはその運転手を失ったことを残念に思うでしょう。運転手がいなくなると、あなたたちは大いに彼を懐かしむでしょう。そしてここにもあなたたちには別の利点があります。運転手を懐かしんで、今度は時間を無駄にしないように努力するだろうからです。あなたたちは「ここで停車しよう」と言うて運転手を邪魔することはしなくなるでしょう。特に、あなたたちは町までどれほど遠いのかわからないのだから、当然今回は運転手を邪魔しないでしよう。

鈴木が講話の中でこのような手法を用いることは異常であった。彼は教師に接するにはどうしたらよいか、他の教師 (someone else) と接するにはどうすべきかについて忠告を与えようとしたのである。彼は愛すべき自分の乗客たちと、後からやって来る運転手について心配していたのである。彼は自分の健康状態が悪化

していることを懸念していたのだ。

三月一二日、鈴木はポートランドに飛び、禅センターと提携していたグループを訪ねた。奥さんは彼の健康を心配し、レブ・アンダーソンに同行を依頼した。レブは一九六八年、少年時代の最良の友、ボブ・ハルパーンを訪ねて、桑港寺の正面に灰色のキャデラックの霊柩車を乗り付けて以来、鈴木について学んできた。レブはかつてゴールデングローブの重量級のチャンピオンとなったボクサーであり、ミネソタ大学で心理学、哲学、数学を学んだ。それから鈴木に会い、着実に粘り強く修行を続け、彼の親密な弟子になった。彼はちょうど二年後に僧侶としての得度を受けた。この短い期間に、レブはほとんどどの生徒たちよりも多くの仏典を読んだ。彼は熱狂的な修行者で、ときには終夜一人で坐禅を続けた。彼は鈴木的身辺にいることを望んでいたが、人一倍修行に専念し、不断の努力を重ねてきたので、自然と鈴木の身邊にいることができた。

鈴木はポートランドに着いた最初の夜、講話を行った。翌日の朝遅く、レブが警策を持って巡回していたとき、鈴木が坐蒲の上で身体を折り曲げているのが目

に入った。レブが近寄ると鈴木が言った。「恐ろしく痛むんだ」。彼は直ちに宿泊していた家に連れ戻された。翌朝になっても彼の病状は回復せず、苦い胆汁を吐き出した。鈴木は我慢し飛行機でサンフランシスコへの帰途についた。空港にはイヴォンヌと奥さんが車椅子を持って彼を出迎えた。彼はほとんど歩くことができなかつたにもかかわらず、「いや、私は禅の師匠だ」と言い、頑なに無表情でこれを断つた。

ページストリートに戻り、鈴木が衣を脱ぎ捨て、床に落としたままにしておいたとき、常に師匠の所作を眺め真似していたレブの前では決してしたことの無いその所作を見て、レブは鈴木の状態がひどく悪いことを知った。

病院に行く車に乗るために、鈴木は車まで運んでもらわなければならなかつた。医師は直ちに胆嚢が原因であることを発見し、間もなく手術が行われた。

* * *

仏教を理解するためには、

直接的な経験、直接的な修行が必要で

す。こうした修行をしたいと望むならば、
いかなることが起ころうとも

対応できるように、

極めて率直で

オープンでなければなりません。

To understand Buddhism,

direct experience, direct practice is necessary.

If you want to do it,

you have to be very straightforward and open,

ready for anything that might happen to you.

一九七一年の冬、ディアンヌ・ゴールドシユラーグはページストリートの自宅に帰ってきて、午後はほとんど毎日のように泣いていた。彼女はチャイナタウンにあった保険会社のカフェテリアでの仕事に不満があった。そこで彼女はタサハラに帰る資金を蓄えるために働いていたのである。独参で鈴木はディアンヌに、テーブルを片付けるときは、それが自分の友達であるかのように話し掛け、片付けることがいかに楽しいか、いかに彼らが気持ちよく過ごすことを望んでいるか、ということを語り掛けなさい、と勧めた。テーブルごとにそのように語り掛けることは状況改善に役立つことがディアンヌにはわかった。しかし彼女は依然として泣いていた。彼女の部屋は鈴木の部屋の上にあった。ある日坐禅の直前に彼女は部屋で激しく泣いた。禅堂で鈴木は警策を持って巡回し、ディアンヌの

所に来て警策を彼女の肩に静かに置いたが、彼女を叩かなかつた。彼はただ彼女の肩に警策を乗せたまま長い間立っていた。

ある日ディアンヌは、ただ一つのことを心に決め、早めに仕事を切り上げた。彼女は、マウントシオン病院に鈴木を訪ねようとしていた。そこで鈴木は手術後の療養を●っていたのである。奥さんは、生徒たちには誰も彼を見舞ってはいけなと言ったが、それはフェアーではないとディアンヌは思った。彼女は彼を見舞う義務があり、かつ一ダイムの借りもあった。

前年の夏、彼女が尿管の腫瘍を取り除く手術をしたとき、鈴木がモンテレイの病院に彼女を見舞ったことがあった。奥さんも同行した。ディアンヌに挨拶し、すぐに回復するようにと話した後で、奥さんは夫と生徒だけを残して窓際に行き、決して長居しないようにと念を押した。ディアンヌは何も言わず、ただ彼を見つめていた。彼は身体をかがめて言った。「一ダイム上げるからあなたの傷を見せてくれないか」
今回は彼が入院していたので、彼女は彼を元気づけたいと思った。

彼女が彼の病室の入口に着いたとき、ちようと日本人たちが立ち去るところであった。奥さんが厳しい

日付きで彼女を見た。

鈴木が奥さんに言った。「彼女にここへ来てもらいたいのだ。あなたは席を外してくれないか」

ディアンヌは鈴木老師のベッドに近づき、気分はいいかがと尋ねた後で、彼が彼女の傷を一ダймで見たいことを思い出させた。彼女は一ダйм持ってきたので彼の傷を見たいと言った。彼は傷を見せた。傷は真新しく赤く、糸がまだ残っていた。彼女がどのような薬物治療をしているのかと尋ねたところ、彼は何もしていないと答えた。彼は日中は眠らないように努力していたので、夜は痛みがあつても眠ることができた。彼女は彼の足指をマッサージュし、友達のマールガレットが彼のために作った詩を渡し、自分で描いた色とりどりの色彩を施した空想的な動物の風変わりな小さな絵を見せた。彼は彼女の描いた動物を不思議そうに眺めた。二人はしばらくはかかげた話をして過ごした後で、彼女はお辞儀をして彼を一人残して立ち去った。

真の禪を学ぶ方法は言葉で表現できるようなものではない。自らの心を聞き、全てを捨て去らねばなりません。そして修行中、心に浮かんだことは何事であれ、あなたたちが考えてそれが

よいことであれ悪いことであれ、試してみるべきです。これが学びの基本的な態度です。よいことであれ悪いことであれ、それを絵に描く子どものようにでなければなりません。ときには理にかなわないことを行うことも必要です。もしこのように行動することが困難ならば、あなたたちは実際に坐禅の修行をする準備ができていないのです。

* * *

いかにして諸々の問題に直面して自己を失わないでいるか、ということが私たちの修行である。

How soon to be lost in our problems is our practice.

鈴木は手術後数週間、病院に留まっていた。医師は、胆嚢摘出後は往々にして健康体に戻り、従来の活力を回復することがあるものだと語った。つまり彼もインフルエンザにかかり体力を消耗した、一九六九年と一九七〇年の冬以前の、良好な健康状態に戻ることができるといふ希望を抱かせた。しかし入院中に、彼は再度大きなショックに見舞われることになった。

医師が鈴木夫妻と話をするためにやって来た。定期的な生体検査で、胆嚢が癌に罹^かつていたことがわかったのだ。胆嚢の癌は極めて稀なケースであったので、この結果には医師も驚いた。医師には癌が広がる前に悪いところは全て取り除いたという自信があった。周りの組織はピンク色で健康そうに見えたのであまり心配する必要はないと言った。しかしなお、これは不安をかき立てるニュースではあった。鈴木は自分が望んでいたように今後一〇年間生きられないかもしれないという不安を持った——彼は彼自身のためではなく、生徒たちのために恐れたのである。癌については内密にされた。生徒たちを動揺させる必要はなかったからである。

数日後、奥さんが夫の元に郵便と伝言を持ってきた。回復を祈るといふ葉書や手紙に混じり、片桐からの手紙があった、それには近日中に辞任したいということが書いてあった。これは全く予期しなかった衝撃であり、鈴木を極度に悲しませた。

鈴木は、禅センターが大きくならず、片桐の手助けをもつても、効率よく運営できなくなっていることを心配していた。片桐はセンターにとって欠く

ことのできない教師であり、彼が来てからの七年間に彼の存在はますます重要なものになっていった。鈴木にとつて、片桐が周りにいてくれる事ほど大切なことはなかった。しかし片桐は、鈴木が彼に充分な活動の余地を与えず、評価もしていないと誤解していた。

片桐はタサハラにいて立髪^{たてかみ}の通訳をし、補佐をしていたが、彼はそれを毛嫌いしていた。彼にとつて、立髪は彼が嫌っていた日本の禅の全てを代表していた。片桐は、この老人が傲慢で人を見下しており、儀礼に捕らわれ過ぎていると感じていた。彼は永久二軍の境遇から抜け出すことを望んでいた。彼は鈴木を敬愛していたが、恐らく文化的な相違によつて目を曇らされていたせいだが、鈴木をあたかも完全無欠な師匠のように見なしていた生徒たちと、常時共に生活し活動することは、彼にとつていささか困難に感じられた。鈴木は、自分は住職を退き少数の生徒たちと親しく活動し、リチャードが住職となり、片桐は専任の仏教の教師となるという構想を話していた。しかし片桐は自分独自のグループを持つことを望んでいた。

鈴木はベッドから離れることができなかった。彼はひどい無力感を抱いた。そして片桐の差し迫った辞任を前にしてますますその感を募らせた。奥さんはそれ

が彼にとつていかに大きな打撃であるかがわかつていたので、この知らせだけでも彼を死に追いやりかねないとい心配した。

ページストリートに戻ってから、鈴木は誰もが望んでいたようには元氣を取り戻せなかった。四月中はほとんどベッドで静養した。五月になつてようやくベッドから起き出した。ある晩彼は講話を行い、定例の質疑応答の時間に食堂に赴き、生徒たちに気分はよいと言ひ、衣を開き、傷を見せたりした。

鈴木が一番年下の息子の乙宥がベトナムから帰つてきていた。二、三年間、鬱病と回復を繰り返した後、日本航空に勤務した。戦没将兵記念日に、彼はページストリートで父親と奥さんを拾ひ、コルマの墓地で行われた慰霊祭に連れていった。そこで鈴木は片桐を見つげ、群衆の端に立ち言葉を交わした。鈴木は、彼が禅センターを去つた後の予定について尋ねた。片桐は何も考えていない、と答えた。鈴木はこの答えに驚いた。彼も奥さんも片桐はほかのグループを指導するために招かれているものだと思つていた。「どうか行かないでくれ」と彼は頼んだが、片桐は何も答えなかった。

数日後、片桐はタサハラに来て退去する準備を始めた。鈴木はサンフランシスコからタサハラに行こうとしていた。片桐は鈴木への付き添いの、デンマークから来た大工兼航海士のニールス・ホームに、鈴木はまだサンフランシスコを発つていないのかと尋ねた。ニールスは、鈴木はまだ出発していないと請け合つた。彼は偽つていたのである。鈴木はニールスに電話をして、彼が到着するまで片桐をタサハラに引き留めておくようにと指示した。片桐は鈴木に会いたくなかつた。タサハラで彼と話をすることは、コルマで群衆の中で話をするのとはわけが違ふからである。

突然鈴木が彼の前に現れた。片桐はニールスを見て、一杯食わされた、と気がついた。鈴木の小さなキャビンでニールスはお茶を入れ、二人の教師が今まで見たことのない所作で応対するのを眺めた。彼らはお互いに深く頭を下げてお辞儀をし、正坐し、儀礼的な恭しさと、リズム、口調で、格式張つた丁寧な日本語で話し合つた。それはニールスにとっては全く見慣れない光景であつたが、彼には鈴木が上位者としての立場を明確に示していることがわかつた。片桐はしばらくの間留まり、来るべき理事会に出席することを承諾した。

理事会の席上で立髪についての話が出た。彼は過去三回の修行期間指導に当たっており、次期についても指導のための招待を受けていた。立髪については異論があった。一部の生徒たちは彼を歓迎し、他の生徒たちはあえて異を唱えず黙認したが、数名の生徒たちは不満を抱きセンターを去った。彼はタサハラをできる限りコミュニケーションから永平寺を手本とした僧堂式に変えるように指導した。

立髪はタサハラを自分のものであるかのように扱った。彼はいまだに鈴木を、僧堂を運営するための修行を受けていない一介の住職に過ぎないと見ていた。彼からすると、鈴木はそのような資格を具えていないが、彼自身は永平寺で一三年間修行僧の作法や儀礼ぎよについての指導に当たってきており、当然ふさわしい、というものであった。リチャードが一僧侶として出席していた永平寺での会合で、立髪は彼の同僚や出席していた僧侶たちに向かい、アメリカでの彼の僧堂についての自慢話をした。当初立髪をアメリカに招待したリチャードは、彼が話し終わるまで黙って聞いていた。それから彼は立ち上がり、立髪が禅センターの客員教師として来てくれた好意に対して感謝の意を述べ

た。

鈴木は日本に滞在中のリチャードに対し、そもそもリチャードが立髪をタサハラに招待したことは感心できない、とはっきりと伝えた。しかし他の生徒たちには苦情を洩らさなかった。立髪には確かに長所もあったので、鈴木は引き続き彼を招聘した。立髪は、一座に基礎的なステップと歌や踊りのルールを教える振付師のようなものであった。鈴木をそうした仕事から解放し、彼が生徒たちとともに細部にわたり、最も重要な精神について取り組む余裕を与えた。立髪は多少儀礼を強調しすぎる傾向があるかもしれないが、「あなたたちが注意深く立髪老師の修行を見つめ、心を開き重要なことを学び取るならば、彼の影響は有意義であろう」と鈴木は言った。「もしあなたが実利的な考えで彼を見るならば、あなたたちが学ぶのは禅の技であり、真の禅ではない」。それはあまりよいことではない。

鈴木はタサハラを日本にはどこにも存在しない、驚くべきものに進化させた。しかし立髪はこうした構想を必ずしも評価しなかった。立髪が無造作に、鈴木の禅は弱い、と発言したときには、しばしば彼のために通訳をしたダン・ウェルチを当惑させた。鈴木は自分

の知っていることを教えただけだと語った。すなわちそれが坐禅である。同様に、立髪は彼の知っていること、すなわち永平寺の僧堂の形式を教えたのである。鈴木は立髪の影響を完全に喜んだわけではなかったが、彼の中にひそむ滑稽さは、生徒たちが解決しなければならぬ多少の混乱や疑問は気に掛けなかった。

鈴木は明らかに片桐が留まることを望んでいた。その年の五月に開かれた理事会の席で、議題は二つの問題に収束された。鈴木は理事会の力を利用し、片桐に引き続き留まり手助けしてもらいたい、と依頼した。彼はいつになく多介にかつ明瞭に意見を述べた。片桐は抵抗していた。続いて理事会のメンバー全員が一人、いずれも生徒たちであったが、片桐に対し、彼がセンターにとつていかに重要な存在であるか、生徒たちがいかに深く彼を愛しており、鈴木と共に指導に当たる教師として留まってほしいと熱望しているかという趣旨を述べた。それは誠心誠意、涙ながらの懇願であった。

そのとき鈴木は彼の切り札を持ち出した。彼は片桐に秋の修行期間の指導をしてもらいたいと依頼し、立髪は招待しないつもりだと言った——これは立髪に対する大変な非礼であり、間違ひなく禅センターと彼と

の関係を終結させるものであった。片桐は、これに対し異議を申し出て言った。「わかりました、やりましょう。ただし、もしあなたがタサハラに来て私の手助けをしてくれるのが条件ですが」。鈴木は了承した。こうして突如片桐は留まり、立髪は去っていくことになった。

同じ頃日本で、グレアムが立髪を訪問した。彼は立髪がタサハラに及ぼした影響を嫌っていたが、それは秘めていた。立髪はグレアムに、タサハラで隠居する計画をしていると語り、彼がタサハラで得度した侍者の写真を見せた——それは魅力的な若い女性であった。彼らが非常に親密であることは明らかであった。彼は旅行の都度、たくさんの所持品を持っていき、タサハラに残してきた、と語った。近い将来彼は出発し、ときおり妻や、日本の彼の寺を譲り渡す予定の息子に会いにくる以外は帰ってこないだろう。しかしこうした計画は実現しなかった。間もなく立髪は招待を撤回するという手紙を受け取るであろう。それは間違ひなく強靱な彼の心臓を引き裂くであろう。

立髪が初めてアメリカに到着したとき、鈴木は数名の生徒たちとともに飛行場で彼を出迎えた。彼が旅行用の衣を着て、自信に溢れふんり返って飛行機から

下りてくるのを眺めたとき、鈴木が言った。「彼がここでどれほど苦勞することになるか、私には見えていない」

* * *

私たちの修行の方法は、

瞬間瞬間に

自己の行動を見つめることである。

*Our way is to see what we are doing,
moment after moment.*

日本で禅を学ぼうと試みた彼の生徒たちのほとんどが遭遇した悲惨な結果にもかかわらず、鈴木はさらに可能性を探求し続けた。ポール・デイスコーは妻と息子を連れて日本に行き、極めて順調に禅と寺院建築の勉強を続けていた。鈴木はもう一組の夫妻を、彼らが日本に出発する前に得度した。また、禅センターのある女性は、日本の寺で非常に恐ろしい目にあつたので、仏教を全面的に否定し、カツラを買ってロサンゼルスに移った。

鈴木はレブに日本に行くよう勧めたので、彼はその準備のために日本語を勉強していた。アンジー・ラニヤンという名の生徒がその秋に得度を受ける予定で

あつた。鈴木は彼女を日本の尼寺に送ることを考えていた。鈴木はダン・ウエルチにも日本に行くことを勧めていた。レブもアンジーもダンも鈴木に傾倒しており、他の教師について学ぶことは望んでいなかった。特に鈴木がどれだけ長く生存しているかも定かでないだったので、なおさら望まなかった。しかし彼らは先生の要求に添うように準備を進めた。

他の生徒たちは私(デイヴィッド)も含めて、鈴木と論争することをはばからなかった者たちは、日本に行く考えを拒否した。少なくとも当分の間は。先に日本に行った人たちの事例から判断して、日本で曹洞禅を学ぶことは極めて困難のように思われた。わずかに異端者の内山や安谷だけが西洋人の信奉者たちを魅了していた。しかし鈴木は弟子たちを失う危険を冒してまでも生徒たちの交流を図り、知識と理解を伝達する道を確認する、という彼の従来からの構想を積極的に推進しようとしているように思われた。彼は、禅や日本文化を学ぶうえで、アメリカで彼や日本人の彼の補佐の人たちが教えることができる以上のものが日本にはあるから、交流は必要であると考えていたようである。

イヴォンヌ・ランドはこれ以上大勢の女性を日本に

送ることに反対して鈴木と論争した。鈴木は、彼自身が師として女性の僧侶を教えることには自信がない。女性の教師の方が女性をよりよく理解できるだろうと言った。アンジーは鈴木と議論はしなかったが、鈴木と同じように彼女を理解できる者に巡り合えると思つたことはない、と言つた。イヴォンヌは彼に、日本は女性が修行するにはよい場所ではない。なぜなら日本では女性は二流の市民だからだと言つた。彼女はもし彼が自説に固執するようなら、彼が考えを变えるまで彼の前で畳の上に横になり、足で蹴つて悲鳴を上げてやると友達に語つた。最終的には、レブもアンジーもダンも日本には行かなかつた。しかし他の者たちは後日、日本に行き、ときの経過とともに生徒たちの往来はより実りあるものとなつた。

これより前、ルイズ・プライヤーが、鈴木、奥さん、そして芳村良元という名の補佐役の僧侶が、彼女の夫ダン・ウエルチの将来について話し合っている席に居合わせたことがあつた。ダンはかつて中川について臨済宗の修行をした経験から、日本語を上手に話すことができる僧侶であり、日本に行き二年間寺で生活することになつてゐた。話し合いはあたかも彼女がそ

こにいないかのように進んでいった。

「私はどうなるんですか」と彼女が尋ねた。

芳村がルイズは日本人ではないので、僧侶の妻としては重荷になるから日本には行かれないのだと説明した。彼女は夫が日本で勉強している間、一年ないし二年間アメリカに残っているべきだと言つた。

ルイズは怒り出した。「あなたたちはみんな、男性は女性より偉いと考へている。僧侶は在家信者より偉いと思つている。日本人はアメリカ人より偉いと思つているのです。しかし私は永遠に女性であり、在家信者であり、アメリカ人であつて、このとおりここにいるのです」

皆黙つてしまつた。鈴木は彼女の方を振り向いて言つた。「あなたが今言つたことは、菩薩の道の精神です」

* * *

あなたたちの低い基準で

師を判断することはできません。

You cannot judge a teacher by your low standards.

一九七〇年の初め、鈴木俊隆は、アメリカに到着

したばかりのチベットの教師チヨギヤム・トゥルンパ・リンポチエの書いた『活動中の瞑想 (Meditation in Action)』というタイトルの本を読んでいた。鈴木のある生徒がトゥルンパの講話を聞いて彼に面会し、帰って来て鈴木に彼のことを熱のこもった調子で話した。ある晩ページストリートで夕食後生徒たちと一緒に坐っていたとき、突然鈴木が言った。「優れた人がやって来る。彼が来た後では、恐らく禅センターには私以外、誰一人としてここには残っていないだろう」と言つて笑つた。誰も彼が何を話しているのか想像できなかつた。彼はトゥルンパについて話していたのである。

一九七〇年の六月、トゥルンパと鈴木はタサハラで会つた。そして彼らはたちまち強く結ばれた。トゥルンパと、非常に若い英国人の妻と、数人の彼の生徒たちは、到着した夜、遅い夕食を取つた。食事が終わったところへ、鈴木が入つてきてトゥルンパの向かい側に腰を下ろした。二人はじつと見つめ合い、ゆっくりと長い間を置いて話し合つた。

鈴木はトゥルンパに次の夜禅堂で生徒たちに講話をしてほしいと依頼した。トゥルンパはほろ酔い機嫌で歩いていき、演壇の端に坐つて足をぶらぶら動かして

いた。しかし彼は極めて明晰な講話を行った。ある者たちは、鈴木の講話と同じように、彼は仏法について語つているだけでなく、彼の講話そのものが仏法であるかのような品格を感じた。その後で鈴木はトゥルンパに、彼がサンフランシスコに滞在中にページストリートに来て講話をするよう依頼し、トゥルンパはそれに応じた。鈴木が他の教師とこのような関係を持つたことはかつてなかつた。彼らは教師たる者の孤独について語り合つた。トゥルンパは鈴木を彼の新しい精神的な父親と呼び、鈴木は彼を「あなたは私の息子のようなだ」と言つた。

鈴木がトゥルンパとこのような関係を持つたことは一部の生徒たちを当惑させた。恐らくトゥルンパは才気に溢れ、聞く者に靈感を与えるような弁説家で、大勢の弟子たちから愛される教師ではあつたが、一方で彼は女生徒たちと関係を持つ、とてつもない大酒飲みであつたからであろう。

一九七一年五月のある日の午後、トゥルンパが予告なしにページストリートに立ち寄つた。彼は新しく生まれた息子を鈴木に祝福してもらうために連れてきたのである。鈴木はまだ手術から十分回復していなかったが、瀟洒な黄色の衣を着て、丈の高い帽子を被り、

チベット人にふさわしい装束で、本堂で簡単な儀礼を行った。その後で二人は中庭に行き一緒にお茶を飲んだ。

その後、大勢の鈴木生徒たちがトゥルンパについて学ぶようになった。一部の者たちは、ボブ・ハルパーンを含め、トゥルンパが大半の時間を過ごしていたボルダーに行つた。他の者たちは禅センターに留まり、彼が町にやって来たとき、サンフランシスコのトゥルンパの所に行つた。鈴木はこうした動きに満足し、一部の生徒たちにはトゥルンパの所に行つて学ぶようにと勧めさせた。彼はトゥルンパと手紙や、彼の所に入入りしていた生徒たちを通じて交信した。鈴木は、生徒たちとの交流を図り、仏教大学を設立し、図書室にあるテープや講義の記録を共有し、トゥルンパが言っていた「精神的に極端な」生徒たちと共に修行するセンターを設立するというトゥルンパの構想に興味を示した。

トゥルンパの活動の舞台は新しく活気に満ちたものであった。彼は鈴木よりも若くて精力的であった。鈴木はトゥルンパの放縦な生活のために、彼が自分の道を確立するまで生き長らえることができないのではないかと懸念していた。鈴木自身の生活様式が簡素で

あったと同程度に、トゥルンパの生活は問題の多いものであったにもかかわらず、鈴木は彼の生きざま故に彼を拒否することはせず、愛情と寛容をもつて彼に接した。一九七一年七月、鈴木は講話の中でトゥルンパについて述べている。

空は際限もなく始めもないので、私たちは空を信ずることができません。そうではないですか。これは非常に重要なことです。私はあなたたちをからかっているわけではありません！ いいですか。もしあなたたちがこの事実を本当に理解すれば、涙が流れるでしょう。あなたたちは仏教徒であることに本当に喜びを感じるでしょう。もしあなたが一生懸命努力を重ねれば、この点がいかに重要であるかがわかります。こうした苦しい努力を可能にする道は、何ものか、あなたたちの知らない何ものかに支えられるということですよ。私たちは人間ですから、こうした感覚を持たなければなりません。あなたたちは、この町の中で、この建物の中で、このコミュニティの中でそれを感じなければなりません。従つて、コミュニティがどのようなものであれ、この種の精神的な

支えが必要ですが。私がトゥルンパ・リンポチエを尊敬する理由はこの点です。彼は私たちを支えている。あなたたちは、私が水を飲むように、彼が酒を飲むので彼を批判するかもしれないが、それは些細な問題です。彼はあなたたちを完全に信頼しています。彼が本当の意味であなただちを支えていれば、彼が何をしようとも、あなたたちが彼を批判することはないということを心得ています。そして彼はあなたたちが何を言おうとも気に掛けません。つまり、それは重要なことではないのですよ。ある特定の宗教や修行の形態に捕らわれることのない、このような大きな精神が人類には必要です。

* * *

あなたたちの行っていることは、
全て正しく、
間違っていることは何もない、
しかしなお
不断の努力を積み重ねなければならない。

*Everything you do is right,
nothing you do is wrong.*

一九七一年六月、市内で行われた摂心の期間中に、鈴木は胆囊手術後初めての公の席で講話を行った。

この最初の講話で鈴木老師は、「私たちの修行はひたすら坐禅をすることである」と言った。彼は物事を言う通常のやり方は、何ものかを得ることを期待して行う、と説明した。この観点からすれば、もし生徒たちが日々坐禅に専念すれば、精神的、肉体的な健康はもちろん、彼らの修行も促進されるだろうということである。「しかし、こうした考え方は修行についての十分な理解とは言えない。私たちはまた、目標は一年ないし二年先にあるのではなく、現在この時点にあるのだという理解の下に坐禅をするのである」と。さらにこの講話の中で、彼は真の修行は科学的真理の探求以上の意味があると語った。真理の客観的な面を無視するのではなく、それはまた主観的なものでなければならぬ。仏陀の全ての教えはあなたたちのためのものであり、あなたたちが味わうことのできる大切なものである。信じるものではなく、発見し体験すべきものである。

経験することなく真理を概念的に受け入れることは、食べることでできない紙に描いた菓子のようなものです。それには味がないので、あなたたちは直ちに捨ててしまおうでしょう。なぜならたとえ七日間坐禅をしても何の意味もないからです。しかし私たちの真の坐禅はそのようなものではあり得ません。もし禅がそのようなものであれば、とつづく昔にこの世から消え失せていたはずで、す。禅は真理のほかの一面を持っているので、なお生き続けているのです。

私たち一人一人が真理を感じ取り、真理を正しく認識し、真理を受け入れ、真理に従う心構えができた場合にのみ、それは機能するのです。真理を研究するために、真理の外に身を置く場合は、重大なことが起こった場合にどう対処したらよいかわからないでしょう。

あなたたちは本当の龍の話を知っているでしょうか。昔中国に龍を非常に好きな男がいました。彼は友達に龍の話をし、龍を描き、いろいろな龍の彫刻を買い集めました。そこで一匹の龍が独り言を言いました。「もし私のような本物の龍が彼を訪ねたら、きっと彼は大喜びをするだろう」。

ある日、本物の龍がこっそりと彼の部屋に忍び込みました。その男はどうしてよいかわかりませんでした。わー！ と叫びましたが、彼は逃げ出すことができませんでした。彼は立ち上がることもできませんでした。わー！ と叫ぶだけで。長い間、長い間、私たちはこの男のようでした。私たちの態度はこのようであってはなりません。私たちは単なる龍の愛好家であってはなりません。私たちは常に龍自身でなければならぬのです。そうすれば私たちはいかなる龍をも恐れることはないのです。

摂心の最終日に、鈴木は二年前タサハラの小川の狭間で溺れかかったときのことを思い出し、それが彼にとって極めて重大な経験であったことを打ち明けた。

そのとき私は、本気にならない限り決してよい修行はできないということを実感しました。そのとき以来、私の修行は格段に進歩しました。今は自分の修行に自信を持っています。それは実に興味深い経験でした。私は美しい少女たちに囲まれていました。それは私に仏陀が悪鬼に打ち勝った

ことを思い起こさせました。彼らは邪悪な鬼ではなく、美しい少女たちでした。しかしたとえ私が死に瀕してもその美しい少女たちは助けてはくれないでしょう。今、私はまさに死のうとしています、水ではなく、病氣のために。ですから私たちは鬼とでも、美しい少女たちとでも坐禪をするこゝとができるのです。私が死のうとしていないときは、蛇でさえも私を傷つけようとはしないでしょう。彼らは私と一緒にいることを楽しみにし、私も彼らと一緒にいることを大変楽しく思うでしょう。こうした状況の下で、全てのものは私たちと共にあり、私たちは全てのものと共にいることに楽しみを感じるのです。困難や苛酷さ、不安を感じることもなく、通常このように感じることは困難です。なぜなら私たちは常に、将来何かを得ることを期待する利得の観念を抱いているからです。最も重要なことは、自分自身を正視し、自分自身になるということです。そうすれば自然にあなたたちは物事があるがままに見、受け入れることができる。そのときこそあなたたちは完全な叡知を持つのです。

鈴木が無造作に死について考えを述べたことは、生徒たちを不安にさせた。彼は手術から回復したように思われ、頻繁に生徒たちとの接触を重ねていたが、彼の笑いの中にはなお一抹の不安と弱々しさが感じられた。その六月の講話の中で、彼は日本における仏教の衰退を語り、しばらく間を置いて強い口調で述べた。「しかし、いいかね、全ての物事は死に臨んで最善の教えを与えるのだ」

* * *

庭園は決して完成することはない。

A garden is never finished.

タサハラで、奥さんが夫とともに俳句を詠んで夕方まで過ごしていた。それは滅多にない二人でともに過ごすひとときであった。彼女は彼のキャピンの隣の日本式キャビンに滞在し、生徒たちに茶の湯を教えている。彼女は、アメリカ滞在中に俳句と茶の湯を始めた。—— いずれも夫の勧めによって。「これは今までに夫が私に与えてくれた唯一のものです」と彼女は言った。

川沿いに

茶花たぎねて

露の道

一九七一年夏、タサハラにて。方丈と私は八月いっぱいタサハラに滞在。夜な夜な法話あり。血と汗あり。方丈とともに俳句を詠む。

(鈴木みづつ作、「寺暮るる」より)

鈴木はその夏、終始精力的に活動した。彼は予定の行事を全てこなした——坐禪、お勤め、無言で取る度量器の朝食、独参での生徒たちとの面談、ほぼ毎晩行われた講話。彼は午前と午後、一人ないし二人の生徒とともに庭に出て働いた。彼は講話の準備のために、坐蒲に坐り、何を話そうかとあれこれ題材を見つけてよく長時間を過ごすようなことはなかった。その代わり、午睡後の一番暑い時間と、夕食後に、八月末サンフランシスコで在家信者の授戒を受ける予定の五五人の生徒たちのために、絡子の白い裏地に筆と墨で文字を書いた。各々の絡子にはお袈裟の偈(塔袈裟の偈)と、日付と、朱肉の印を押した彼の署名と、彼が生徒たちのために選んだ四文字の法名を書いた。奥さんは

彼にもう少し休息を取らせようとしたが、あまり効果はなかった。

一人で作業をしながら、鈴木は庭で大きな石に向かって腰を曲げ、石の向きを少し変えようとしていた。一方で、彼の付き添いのニールスは橋の傍らに立ち、禅堂の脇の道路を見下ろしていた。突然ニールスが口笛を吹いた——奥さんが風呂から帰ってきた、という合図であった。そしてニールスは鈴木に代わって石と格闘し、片や鈴木は日陰に行き、彼のキャビンの傍らのベンチに坐り、監督するふりをした。彼女は疑いの目で彼らを見た。翌日彼女は風呂へ行く前にこっそりと庭に回り、彼がニールスと一緒に働いている現場を捕らえた。

「方丈さん！」と彼女は日本語で大声を上げた。「八月の暑い日中に、自分の背丈よりも高いスコップを持ってこんな庭に出て働くなんて！ あなたは自分の命を縮めているのよ！」

「私が命を縮めないで、生徒たちは育たないのだ」

「それじゃあ、おやりなさい。勝手に命を縮めればいいわ！」彼女は手を振りながら叱りつけた。

「そんなに大騒ぎをするな！」と彼は自分の仕事に戻りながら言った。

奥さんが慌てたのには理由があった。彼がまだ手術から回復していないことを彼女は知っていたし、彼にもそれはわかっていた。彼の尿は茶色をしており、彼の日本式の下着も同じ色になっていた。彼女はすぐに下着を洗ったので、彼のキャビンの掃除担当のマギー・クレスはそれを見ていなかった。しかし彼女は彼の汗を吸い込んで衣のような色になった下着をマギーに見せ、それを絞りながら、「ご覧、彼は血の汗を流しているのよ。彼はもう少し休まなくちゃ駄目よ」とマギーが彼をコントロールできるかのように言った。

ある朝の茶の席で、鈴木は古参の生徒たちとメニューについて議論をしていた。彼は料理長の依頼で、日本の太い麵、うどんの作り方を実演する約束をした。やがて彼は一同の生徒たちに小麦の粉と水を混ぜ、生地を延ばす仕事をさせた。その間、涼しいそよ風が網戸越しに部屋に入ってきた。

ある者は長い鈴懸の木の作業台の上で小麦粉を生地にする仕事をし、他の者たちはタイル張りの床に置いてあったパンのこね台の上でこね、片や鈴木はさらに粉を追加していた。この混雑のさなかに奥さんがやつ

て来て、二人は日本語でお互いにかみかみ怒鳴り合った。そして最後に彼は笑いながら、怯ま^{ひび}ず台所から彼女を追い出してしまった。さらに大勢の生徒たちが仕事に加わった。ある者は昼食の準備をし、ある者は客人のパンを作り、別の者は片隅でポットを洗い、他の者はティーやコーヒーのカップを手渡していた。鈴木は新しくやって来た者たちに仕事をさせるために、さらに粉と水を追加する仕事を続けていた。

「タサハラを運営しているのは誰だ」。一人の幹部が尋ねた。「今は来客のシーズン中だ」

「あなたがやり給え」と鈴木が笑って答えた。

数時間後、生地を薄く延ばして細く線状に切っていたとき、奥さんがおんおん怒って戻ってきた。彼女が無理やり彼をドアから連れ出したとき、鈴木は手を振りさよならの合図をしたので、皆が笑った。当初二人の古参の生徒たち用として作り始めた食事が、二杯目三杯目のお代わりを含め二晩続き、最終的には六〇人分の夕食となった。

「なぜあなたはいつも私に話をしないの」。ある晩奥さんが怒って言った。「あなたはいつも何を考えているの」

「アメリカの仏教についてだ」と彼は答えた。「なぜあなたはよその亭主たちのように、私を愛していると言えないの」

彼は彼女を見つめた。「ハニー、ハニー、ハニー」と彼は言った。

「もうたくさんだわ」と彼女は言つて自分のキャビンに帰つていった。

イヴォンヌが、診療の予約をしていたサンフランシスコの医師の所へ鈴木を車で連れていくためにタサハラに來た。奥さんも同行した。このときイヴォンヌは禅センターの理事長を務めていたので、彼にジョン・ロスが最近、理事長を辞任した旨を伝えた。ジョンにとつて、禅センターは大きくなりすぎ、画一的になつており、彼女の小さなカメル禅堂に対する十分な支持を得ていないと感じていた。しかし彼女が理事長を辞任した主な理由はリチャードにあった。彼は日本に滞在していたにもかかわらず、なおも不在中の禅センターを動かしているように思われた。ジョンは常りにリチャードの精力と知性を賞賛してきた。事実、一九六五年に彼をセンターの理事長に指名したのは彼女であつた。しかし彼女には全てが重荷になりすぎて

いた。鈴木はうなずいただけで、多くは語らなかつた。

彼はイヴォンヌに、彼女の子どもたちはどうしているかと尋ねた。彼は自分の家族について語り、遺憾の旨を表明した。「私は常に僧侶であることを重視してきた。私は結婚しない方がよかつたのかもしれない。私は家庭にとつては駄目な男であつた。悪い父親であり悪い夫であつた」

「全くその通り、とつても悪い夫です」と奥さんが言つた。「素晴らしい僧侶ですが、悪い夫です」。彼女はしばしばこうした話し方をした。

子連れの人たちが「家族修行」にタサハラに來ていた。ポーリン・ペッチーは、グレムと三人の子どもたちとともにその夏をここで過ごした。鈴木の高い生徒のビート詩人、ダイアン・ディブリマは四人の子どもたちとともに一カ月間ここで暮らした。トニーとトニ・ヨハンセン夫妻は二人の子どもを連れ、下手の納屋で小さなサマースタールを開いた。片桐の手助けを得て、子どもたちの授戒が準備された。二人の子どもたちが両親とともに自分たちの絡子を縫い、鈴木が、あなたたちは仏陀のよい子どもたちだよ、と言っ

て在家信者の授戒会を行った。

アラン・ワッツが妻のジェーノを伴って、その夏初めてタサハラに來た。彼は、生徒たちを鈴木木の所に送ったり、サンフランシスコのアジア研究領域の同僚たちを彼に紹介したりして、当初から大いに鈴木を援助してきた。タサハラ購入当時の禪センターの主な施主の何人かは、ワッツや彼の東海岸地区の縁故を通じて紹介された者たちであった。ワッツは儀礼的な行事は好きであったが、規律や、坐禪や英国の寄宿学校の堅苦しさを思い出させる諸制度を軽蔑した。彼は大勢の人々に禪を紹介し、その時代の人々の心を開かせる手助けをしたが、鈴木が同席しただけで彼は落ち着きを失った。

ワッツは大酒飲みであった。彼はその夏タサハラにドライブしてきた長い道中酒を飲まずにやって來た。鈴木はその夜、彼とジェーノと共に小川を見下ろす一〇〇年を経た古い石造りの部屋の裏手のペランダに坐っていた。鈴木に付き添い、ニールスも同席した。日頃は自信に溢れ、真つすぐにマイクに歩いて行けないようなときでも、ラジオの生放送で明快な長広舌を即席でやってのけることができるワッツであったが、

このときは冷静さを失い、神経質に喋り立てた。鈴木は恐ろしく静かであったが、そのためにワッツはますます饒舌になった。ジェーノもまた静かにしていた。

ワッツは「素晴らしい水」を飲むためにしばしば席を立ち、その都度ますます強いアルコールの匂いを発散させながら戻ってきた。ニールスは黙っていられなくなり、ワッツと話を始め、鈴木とジェーノが黙って坐っていた一時間の間べらべらと喋りまくった。

翌日ニールスが庭で鈴木の手伝いをしていたとき、ワッツが橋の上で、幻惑され聞き入っていた客人に向かって、「全てを包含するもの」について彼の見解を説明しているのが聞こえてきた。彼は落ち着きを取り戻し、トーガを着て杖を持ち、胸を張って立っていた。ニールスは、昨夜は大変悪い生徒でしたと言つて、お喋りしすぎたことを詫びた。

「いやいや、あなたは、昨夜は大変よい生徒だった。ありがとう」と鈴木は答えた。

「ところで、私たちは実態がわかるまでは彼は深遠な思想家だと思っていました」とニールスが言った。

「あなたはアラン・ワッツについて全く的外している！」。鈴木は突然強い調子で怒った。「あなたは彼がここにやって來たことを評価しなければならぬ。彼

は偉大な菩薩だ」

ある日タサハラの菜園を歩いていたとき、鈴木は一人の生徒が石に腰を下ろし、近くに生えていた向日葵を眺めているのを認めた。彼は近づいて彼女の傍らに坐った。

「何をしているのかね」

「向日葵と一緒に黙想しているのです」と彼女は答えた。「向日葵は太陽と一緒に回転しているのです」

鈴木は長い間彼女と一緒に坐っていた。その夜、鈴木は菜園に行った話をした。

あなたたちは空を理解しない限り、修行をしているとは言えません。しかしもしあなたたちが空という觀念に固執するならば、あなたたちはまだ仏ではないのです。向日葵の前に坐つて、一腕の太陽、向日葵を眺めている人がいました。そこで私も同じようにしてみました。それは素晴らしいことでした。私は向日葵の中に全宇宙を感じました。それは私の体験でした。向日葵の瞑想。素晴らしい自信が湧き上がりました。花の中に全宇宙を見ることができるようです。もしあなたたちが「お

お、それは現実には存在しない向日葵だ」というのであれば（笑う）、それは私たちの坐禪の修行ではありません。

* * *

あなたたちは

自然さということにこだわりすぎる。

自然さにこだわると、

もはや自然ではなくなる。

You stick to naturalness too much.

When you stick to it,

it is not natural any more.

私は鈴木と一緒に彼のキャビンでお茶を飲んでいました。そして彼の後ろに掛かっていた掛け軸の意味を尋ねた。

「空中の石だ」

「空中の石ですって」

「そうだ。これは師匠の岸沢老師が私にくださったものだ。これは余計な問題を作り出すなという意味だ。すでに抱えている問題だけで十分だということだ」

「馬の上の馬に乗ることはできないというような意味でしょうか」と私は鈴木がしばしば口にしていた別の

諺を引き合いに出して尋ねた。これは問題を馬にたとえているのである。一匹の馬に乗ることはできるが、馬の上にいる馬には乗ることはできないという意味である。これは彼がいろいろの方法で強調していた点であった——問題を複雑にさせなければ処理することができるという意味である。

「そうだ。同じことだ」と鈴木は答えた。

「ああ、何か大切なことがわかりました」と私は興奮して言った。

鈴木は笑って言った。「何か変わったことでもあったのかね」

「はい、私は今まで何も理解していませんでした」

「何を理解していないのかね」

「あなたが昨晚講話の中で話しておられたことです——理、第一の原理です。いつでもあなたが第一の原理について話をされるとき、私は諦めてしまいます。

私には理解できないことのように思われるのです」

「いや、いや、いや」と彼は怪我をした子どもを慰める母親のように言った。「あなたを落胆させようとしているのではない。あなたは理解できるよ。完全に理解できる。あなたが理解しようとしている方法は、サンフランシスコに行くために南に向かっているような

ものだ」

鈴木はその夏タサハラでほとんど毎晩のように講話を行った。今までになかったほど頻繁に。八月一七日、タサハラを出発する前の晩、彼は生徒たちに対してしばしば繰り返し返してきた重要な問題について語った——第一の原理と第二の原理について。

彼は第一と、第二の原理を混同しないようにと注意を促した。彼は多くの生徒たちが彼の話していることを理解していないことに気づいていた。問題は物事の両面、空と色とを同時に語ることはできないということであった。彼は特に規則に関連してこうした両面を混同しないようにと強調した。

二つの完全に異なる観点があります。第一の観点は全ての人、全てのもものは仏性を持っており、大きなものもなく小さなものもないということですから。私たちがこのように語るときは、第一の原理に基づいて私たちの本性について語っているのです。全てのもものは仏性を備えている、終わり。これに続く考えはありません。それ故とか、しかしと言ってはなりません。これが第一の原理です。

もう一つの観点は、規則について、実際の修行について、第二の原理について強調することです。

修行は第一の原理を直接的に体験する方法です。

しかし私たちがこの点について語るとき、両面を一度に表現することはできません。

私たちは常に笑っています。たとえ私たちの修行の道が厳しいものであっても、それは第二の原理であり、私たちのためになるものであることがわかっています。たとえあなたたちの師が怒っていても、あなたたちはあまり深刻に取ってはならないのです（笑う）。あなたたちにはそれが第二の原理であり、第一の原理ではないということがわかっていきます。つまり、私が規則について話すべきは笑って話をするので、あなたたちはあまり深刻にそれを受け取る必要はないのです（笑う）。

「あなたはまた、第一の原理について話をされましたが、私にはまだそれが何であるかわかりません」と私は鈴木に言った。

「私にはわかりませんが、というのは第一の原理だ」と鈴木が答えた。

* * *

これが本当の道だという
特別の道は存在しない。

There is no special path which is true.

一九六六年四月、鈴木俊隆がリチャードとともに曲がりくねった埃っぽい道を初めてタサハラに旅してきてから、五年以上の歳月が過ぎていた。その間、彼は小川の石や山腹の草木に特別の親しみを感じてきた。

彼は自然の織りなす情景に歓喜した。ホッグバックの小道に足を止め、谷を隔て、滝を眺め、清澄な荒野の空気を吸い、大きな鉱水の淀みに浸った。鈴木は彼の秘められた楽園の風景、音、そして香りを満喫したが、しかし彼がそこに留まったのは、彼の道を確認するために、彼と行動を共にし、彼を助ける人たちがいたからにはほかならなかった。

タサハラは彼が愛した全てのものを象徴していた。小鳥のさえずりに耳を傾け、岩を動かし、仏教の友と坐禅をし、その坐禅を至るところに無限に広げる場所であった。タサハラは鈴木が得た褒美であり、同時にまた彼が与えた贈り物でもあった。彼が到着したり出

発したりするとき、いつでも生徒たちは手を休めて近寄り路傍に立ち、停車したり発車するたびに合掌してお辞儀をし、彼はそれに応えて彼らにお辞儀を返すのであった。そうしたときに、鈴木心がいかにタサハラに深く植え付けられているかがわかるのであった。

マギーが鈴木に鞭に荷物を詰めていた。彼は昼食前に出発するはずであったが、朝のお茶を済ませた後で彼のしたことは庭での作業だけであった。マギーは外に出て、これを詰めたらよいのかあれを詰めたらよいのかと、何度も彼に尋ねた。お茶は要りませんか、と尋ねたが彼は返事をせず、顔さえ上げなかった。彼はただ石をあちこちに動かしたり、若干の樹木を移し変えたりしていた。彼は自分の希望する形の庭を造るために作務をし、前の晩彼が講話の中で繰り返し話していたように、これが最後だという意識で仕事を進めていた。とうとう彼は手を止めた。彼は立ち上がってしばらく眺めていた。少なくとも今のところ、彼の仕事は終わった。

イヴォンヌが鈴木を迎えにサンフランシスコから車でやって来た。彼女は、奥さんの荷物を持って帰るた

めに奥さんを伴ってきた。ニールズとマギーが、最後に残されたわずかばかりのものを荷造りするために、鈴木と彼のキャビンに入っていた。鈴木は作務衣の紐をほどいて畳の上に脱ぎ捨てた。柔らかな光の中で、彼は白い下着姿で部屋の中ん中に立った。疲れ切って、ほとんど動くことさえできなかった。突然、彼は病気で弱々しく、皮膚の色は黄ばんで見えた。ちやうどその瞬間、彼は精根尽き果ててしまったかのように見えた。彼はほとんど自分で着物を着ることもできなかった。彼はニールズとともにゆっくりと歩いて風呂場に行き、それから禅堂に行き香を供えた。いつも彼が到着し、出発するときにしたように。

タサハラの子レクターであるダンがイヴォンヌのヴォルヴォを小さな橋の上に移動させ、荷物を後部に積んだ。一〇人ほどの生徒たちが黙って周りに立っていた。鈴木は禅堂から戻り彼らに微笑んだ。彼は非常に弱々しく見えた。奥さんが彼を支えて後ろの座席に彼を乗せた。同時にダンと彼の妻のルイズと、アンジー・ラニャンも乗り込んだ。マギーは車の傍らに立って泣いていた。彼は頭を下げ続け、居並ぶ者は皆それに応えて頭を下げた。開いた窓から彼は微かな声で、去るのは残念だがすぐに戻ってきたと言った。

生徒たちは、「はい、すぐに帰ってきてください」と答えた。イヴォンヌはまだ微笑みを浮かべていた鈴木を乗せて発車した。ヴォルヴォはゆっくりと小川に架かった木の橋を渡り、高い庭園の下と、石造りの調理場と禅堂の上の狭い真つすぐな道を通り、作業場と金

網の張つてある廃品置場を通過して未舗装の道を曲がり、守衛所の屋根の下を走り抜け、埃の渦巻く中を凸凹道へと入っていった。タサハラは背後に姿を消した。

最後の季節、秋 1971

CHAPTER 19

Final Season:
Autumn

波を駆れ、波に乗れ。

Drive the waves, ride the waves.

その日タサハラを殆ち尾根に着いたとき、鈴木老師はイヴォンヌに車を止めるように頼んだ。海岸沿いの山々、広大な青い空、そして太平洋の水平線上の一筋の線、眺望はまさに壮大であった。全員が車から下りて歩いた。彼らの眼下にはタサハラの小川に水を注ぐごつごつした分水嶺が連なっていた。鈴木は昼食を取って休息した後で、多少元氣を取り戻した。ここは彼が初めてタサハラを眺めた後に、歓喜して踊った場所であった。

彼らはサンホアン・パウチスタの近くにあったリトリート・センターで再び車を止めた。ここでは中川宋淵の一週間の摂心が数時間後に終わろうとしていた。

タサハラの一行為は、最終の坐禅と摂心終了の儀礼に参加した。このセンターで、中川は濃い緑色の抹茶を点てタサハラから来た客人たちや摂心に参加した一部の者たちに振る舞った。通常の作法とは異なり、一碗のお茶を二人で分け合って飲んだ。最初の碗が鈴木夫妻に回された。彼らはお茶を飲んだ後で、中川がエルサレムの土で焼いた茶碗を褒めた。彼はそこに禅堂を建設したのである。

翌日、鈴木は気分が優れなかったにもかかわらず、市内のセンターで土曜日の講話を行った。彼は中川を訪問したことについての話をした。

彼（中川老師）の摂心の終わりに、私たちは恐らく三〇回以上も礼拝したでしょう、さまざまな仏陀の名前を唱えながら。彼は特別の名前で唱えま

した、日光の仏陀、月光の仏陀、死海の仏陀、よい修行（善行）の仏陀、と。さまざまな仏陀が現れ、礼拝に礼拝を重ねました。こうしたことは私たちの理解を超えたものなのです。彼がそれら全ての仏陀に礼拝したとき、彼が礼拝した仏陀は彼自身の理解を超えたものでした。何度も何度も彼はそれを繰り返しました。

その後で彼は自分で焼いた茶碗の抹茶でもてなしてくれました。彼が何を行っていたのか私には知り得ず、彼もまた意識していませんでした。彼は非常に楽しそうに見えましたが、その楽しみは私たち普通の人間が持つ楽しみとは全く異なるものです。私たちの修行はそのレベルにまで到達しなければならず、そこには人間の問題も、仏陀の問題も、何もありません。お茶を飲むのも、菓子を食べるのも、一つの場所から他の場所に旅をするのも、彼の修行です。彼には人を助けるという意識はありません。彼が行っていることは人のためになつていますが、彼自身は人のためになるという意識はないのです。

それから鈴木俊隆は、ランサム女史から贈られた

カップに注いだ水を啜り、公の場での最後の講話を次のように締めくくった。

私たち人間の問題を解決することが、仏教の修行の全てではありません。私たちが仏陀の旅をするのにどれほど長い年月を要するかは計りしれません。私たちにはいろいろな旅があります。仕事の旅、宇宙の旅、しなければならぬいろいろな旅が。仏陀の旅は非常に長い旅です。これが仏教です。ありがとうございます。

* * *

一瞬の間に事物を観察する

——それが非二元性である。

*To observe things in a flash
— that is non-duality.*

サイラスがその夏、鈴木のためへの希望により講話を行った。九月初め、鈴木はサイラスに來訪するよう依頼した。二人が鈴木に住まいの畳の部屋で坐つて話をしていたとき、鈴木は仏教徒のロザリオ、摩尼珠を指でいじっていた。それは大きな白檀の数珠で、それぞれの珠には頭蓋骨が彫つてあつた。サイラスは頭蓋

骨と鈴木を眺め、ひどく不安を感じた。

鈴木 of 病状はかなり重かった。彼の皮膚は黄色になつていた、医者は肝炎だと言つた。奥さんがイヴォンヌに手伝ってもらい看病をしていた。イヴォンヌはまた、禅センターの出来事を絶えず彼に伝えていた。彼らは感染を避けるために細心の注意を払い、習慣となつていた、彼と食事を分け合うことは避けていた。ときおり坐禅に参加する以外に彼が公の場で行つた最後の行事は、八月末に五五人の生徒たちのために行つた在家信者の授戒会であつた。彼は九月に行われた四人の新しい僧侶のための彼自身の得度式にさえ出席できなかつた。この頃は鈴木 of 要望で生徒たちから片桐老師と呼ばれていた片桐が、修行の指導をしていたタサハラから急遽やつて来て彼の代わりに儀礼を取り仕切つた。エド・ブラウンが列の先頭に並び、次いで私(デイヴィッド)、続いて一九六七年以来、鈴木について学んできたリニュー・リッチモンドと、アンジー・ラニヤンが並んだ。

鈴木が儀礼に参加しなかつたことは私たちの注目を集めた。それは厳肅な儀礼であつた。式が終わつてから私たちは揃つて彼の住まいに挨拶に行き、彼のベッドの傍らに立つた。彼は生涯において最も楽しい日で

あるかのように振る舞つた。彼の部屋を去つた後で、私はビルの屋上に上がり、鉢植えの木の間を歩き、サンフランシスコの町を見下ろし、そして泣いた。

九月の末、山山龍法という名の若い僧侶が日本からやつて来た。奥さんはお茶を飲みながら、彼が指圧療法(ツボを押さえるマッサージ)と鍼の知識を持つていふことを聞き出した。彼女は試しに自分を治療させたところ、試験は合格であつた。彼はタサハラに直行する予定になつてしたが、今は市内で必要とされていた。毎日午後、彼は二、三時間鈴木 of 治療に當つた。

龍法は分厚い眼鏡を掛けた、熱心で、うぶな若い僧侶であり、到着早々アメリカの風変わりな禅の経験を貪欲に吸収し始めた。彼はほんのわずかしが英語がわからなかつたので、生徒たちとの会話には多大な時間を要した。

「龍法さん、あなたがもしアメリカに住み続け、アメリカで成功したかったら、真面目でなければ駄目です。あなたが真面目でなければ、誰も相手にしません」。鈴木はベッドに坐つて日本語でこの新しい僧侶に話した。奥さんも同じ話をした。「ただ真面目にしなさい、そうすれば何も心配することはありません」

真面目は通常、serious (真剣な) と訳されているが、

この場合は「誠実な」、「熱心な」、という意味を含んでいる。日本では、ありきたりの真面目さで僧侶として容易に過ごしていけるということを龍法は知っていた。そこには何百年という長い伝統と、曖昧さという隠れ蓑があった。しかしアメリカでは生徒たちは率直で、全てがあからさまであった。彼は自然食を取り、女性も男性も平等の立場で一緒に生活する、禅センターの共同社会的な姿を愛した。鈴木の中でさえも気ままに彼と言ひ争いをした。生徒たちは龍法の中に、他の日本の僧侶に見られるような、彼らが賞賛する資質があることを知った。日本の僧侶にとつては理想的な場所だと彼は思った。彼らは私たちから学ぶことができ、私たちは彼らから学ぶことができる。

龍法は、鈴木がときに気短になることがあることに気づいた。一度龍法が仏像について何気なく、ただの木片に過ぎないと言ったことがあった。鈴木はそのような軽薄なことを言わないように、と彼に怒鳴り、仏像について真の意味がわかるまで口を閉じていなさいと言った。そのとき、怒りは速やかにやって来たのと同じように、速やかに去っていった。ああ、と龍法は思った。彼は子どものように無垢で正直なのだ。

「それでは、あなたは私たちの黄色い教師を訪ねていらっしやったのですね」とイヴォンヌが言ったとき、初めてアルバート・スタンカードは鈴木が病であることを知った。

「黄色いだって」

「はい、彼は肝炎です」

アルバート・スタンカード博士はペンシルバニア大学の精神医学部の学部長であった。一九七一年九月に、彼はスタンフォード病院に異動して一年間働くことになった。主として彼は過去に学んだことのある鈴木木の近辺に居ることを望んだからである。アメリカにおける禅の修行者の先輩格の一人であったスタンカードは、一九四六年東京で、戦争犯罪で裁かれた日本人の収監者たちの医者として勤務していた頃、禅の勉強を始めた。彼らの中の一人が彼に鈴木大拙の話をした。彼はこの偉大な学者に会い、続いて彼の生徒となり、ときに彼の医師として接した。スタンカードは中川、安谷を始め、三浦一舟いっしゅうを含むその他の教師たちにもついて学んだことがある。彼は一九六七年に桑港寺で、初めて鈴木俊隆に会った。そのとき鈴木は彼にその夜の講話を依頼し、彼を当惑させた。

鈴木は寝室に入ったとき、鈴木が身体を掻いている

のが、スタンカードの目に留まった。冷たいものが彼の背筋を走った。彼は二つのタイプの黄疸があることを知っていた——一つは伝染性(肝炎)であり、もう一つは閉塞性のものである。胆汁の流出が妨げられることではかゆみが起こる。最も一般的な閉塞性のもは痛である。彼は恐怖を感じたが、そのときは何も言わなかった。彼はただ鈴木 of 医者と相談してもよいだろうかとだけ尋ねた。

* * *

もしこの世に生まれてこなければ、死ぬ必要はないのだ。

この世に生まれてきたということは、死ぬということだ、

消えてなくなるといふことだ(笑)。

*If you were not born in this world,
there would be no need to die.
To be born in this world is to die,
to disappear, vanishing!*

一九七一年一〇月一〇日に、鈴木俊隆はバイエリアの弟子たちを呼び集めた。彼らは衣を着用するようにと指示された。一〇時に彼らは住まいに入り、看護の

者たちに加わって彼のベッドの周りに集まった——龍法は床に坐っており、ドアの傍らにいた奥さんは疲れているように見えた。イヴォンヌはベッドの脇で事務所のカセットレコーダーを気にして、鈴木とともに大騒ぎをしていた。メルはパークレイから、ビルはミルヴァレーからともに車でやって来た。また、このビルに住んでいたサイラス、レブ、リユーそしてアンジーも同席した。クローードはサンフランシスコの自宅からやって来た。誰もが無言であった。何かしら緊迫した予感がした。

鈴木はベッドに坐り、枕で身体を支えていた。彼は衰弱して痩せ、皮膚は黒ずんだ黄色をしていたが、気力は充実していた。彼は温かい微笑みを浮かべ、これほど大勢の最も親密な生徒たちに会えたことを喜んだ。彼はこの六週間ほどほとんど彼らに会っていなかった。彼らは微笑みを返し、ベッドの周りに半円形に並んで立っていた。ページストリートの路上には車が往来し、窓の外のゴムの木には小鳥がさえずっていた。

鈴木は喉の調子を整えてテープレコーダーのスイッチを入れた。それから彼は生徒たちが恐れていたことを静かに話し始めた。

あなたたちも知っての通り、主治医は私が肝炎だと考えていましたが、病状があまりにも長い間変わらなかったで、肝炎ではなく、恐らく癌ではないかと考えました。そこで私は三日前に再びマウントシオン病院に行き、精密検査を受けました。そして医師たちは私の病気について議論を交わしました。一昨日主治医が来て、「あなたは癌だ」と言いました。そして正確に病状を説明してくれました。従って私は今あなたたちに報告する次第です。

鈴木は早速生徒たちを安心させ、このニュースを肯定的な方向に転換させるように話を向けた。彼は、癌は大した問題ではないかのように話し、肝炎ではなく癌だということがわかり大いに安堵した、と付け加えた。それは、今は好きなものは何でも食べたり飲んだりでき、感染の心配をせずに安心して誰とでも食事を共にすることができるからである。

私自身は自分勝手なことによい気分ですが、その一方で、あなたたちにはとても気の毒だ

と思います。しかし仏陀は全てのことには目を掛けられると思うので、私はあまり心配しないことにしました。私がどれだけ長く生きられるかはわかりません。実際には誰にもわからないのです。

私は医者に尋ねました、「二年ですか」と。「最大限で」と彼は答えました。これについては私にも確信はありません。つまり、私はあなたたちに準備することを望みたい。もしそれ以上長く生きられれば、もちろん私にとっても、あなたたちにとってもより喜ばしいことです。私は、あと一年は確実に生きられるように思うのです。私はそれほど落胆もしていないし、衰弱しているわけでもありません。こういうわけで私が無精をしてもあなたたちに許してもらいたいと願うだけです。私は非常に悪い例を示すことになるでしょうが（笑う）。その代わりあなたたちはよい例を示さなければいけない。いいですか。私があなたたちにももらいたいと思うのはこれだけです——そのときのために備えてほしいということだけです。ほとんどのことはあなたたちの間で決定しているのですが、もし必要ならば私もあなたたちの論議に加わってもよいでしょう。肉体的には、私はすぐ

に疲れてしまうのです。どうもありがとうございます。

不意に彼は最年長のクロードの方を振り向いた。

彼は一九六三年に初めて会って以来クロードの助言を高く評価してきた。「クロード、私がいなくなっても、あなたにはここに残ってもらいたいです。よいかね、お願いするよ」。クロードは追いつめられ、残りましょう、と約束した。「ありがとう」と鈴木は言い、続けて彼は、より大きな仏教界における彼らの僱侶としての役割と責任について強調した。「あなたたちは私がやって来たことと全く同じことをしなければならぬと考える必要はないのだ。あなたは私たちの道を、皆が希望する方向に自由に発展させればよいのだ。それが菩薩の考えだ」

言い終わると、彼は身をかがめてマイクに近づいた。彼は用意されていたテープに向かい、リチャード・ペーカーに話し掛けた。例の鈴木を抑揚で話し掛けた。あなたは今や帰国してこの責任を引き受けなければならぬ、と。リチャードが日本に滞在している間、二人は常にイヴォンヌの手を介して交信を続けてきた。その年の春以来、リチャードが秋もしくは冬には帰国し、鈴木の実任の一部を引き継ぐよう議論が交

わされてきた。リチャードはこの考えには抵抗してきただけ——彼はまだその準備ができていない、と感じていたのだ。今や鈴木は彼に強く要求した。

しばらく弟子たちに冗談を言った後で、鈴木はテープを巻き戻し再生した。クロードと言葉を交わした箇所、彼は注意深く聞き機械を止めた。そしてクロードがテープの中で、留まりましょう、と言ったことに喜びを表した。彼の答えはほとんど聞き取れなかったけれども。鈴木は意気消沈していた弟子たちに向かい、お辞儀をした。そして弟子たちも彼に返礼し、この悲しむべきニュースをセンター全員に伝えようと、目に涙を浮かべて外に出た。

前の日に、イヴォンヌが鈴木を迎えに病院に行ったとき、鈴木は病院の室内着を着てベッドの端に坐り、両足をぶらぶらさせていた。奥さんはホールで見舞いの客人に別れの挨拶をしていた。ちょうどそのとき看護婦が彼の昼食を持ってきた。彼はベッドを軽く叩いてイヴォンヌに来るように、と合図をした。彼女には何か重大なことが起こったということがわかった。彼はゆっくりと言葉を繋いだ。「癌なんだ」と大きく口を開けて笑いながら言った。彼女は戸惑った。

癌と笑いとは馴染まないからである。彼女が彼の横に坐ると、彼は食事の乗った盆を引き寄せた。「私は癌だ。ということとはまた一緒に食事ができるということだ」。彼は皿から料理をフォークに取って彼女に食べさせた。イヴォンヌは彼を抱いて泣いた。

「この癌は私の友達だ、そして私の修行がこの病気の看護をするのだ」と彼は言った。

最初に鈴木が癌であることに気づいたスタンカード博士は、彼に最も進んでいたスタンフォードの癌科に行くように勧めたが、鈴木は反対して言った。

「この医者は私の主治医だから、彼を尊重しなくてはならない。他の医者に診てもらうのは適切ではないだろう」。スタンカードはアメリカでは事情が違うのだと説得したが、鈴木は断固として譲らなかつた。さらにスタンフォードの同僚に相談した結果、スタンカードは、鈴木は正しい決定をしたとの結論を得た。彼の癌の型は治療の効果を期待できない種類のものではあつた。癌はすでに拡散しており、放射線や薬物治療は彼の病状を悪化させるだけであつた。

「あなたとは今まで教えについてたびたび話し合いましたね」と鈴木はスタンカードに言った。「ここにい

る非常に大勢の若者たちが死ぬことを恐れているのです。私は彼らに死を恐れる必要はないのだということを見せてやる事ができるのです。これは素晴らしい教育の機会なのです」

「私としてはあなたにもつと違った教えを与えてほしいと思つています」とスタンカードは答えた。

「はい、私は死にたいとは思つておりません。私が死ぬときにはどのようなのか私にはわかりません。

どのようなになるのかは誰にもわからないのです。しかし私が死ぬときもお、私は仏陀でありましょう。苦悶に喘いでいる仏陀かもしれませんし、至福に溢れた仏陀かもしれません。死とはどんなものかを知りながら死んでいくのです」

* * *

どこに行こうとも師は見つけられる、
見る目があり聞く耳がある限り。

*Whenever you go you will find your teachers,
as long as you have the eyes to see and the ears to hear.*

龍法は毎日鈴木の手指圧を続けた。彼は肝臓に関連する鈴木の手背中のツボに集中して指圧を行った。足や腕部や腕にも指圧を行った。鈴木は衰弱していたが、注

意力は旺盛であった。龍法が指斥中に注意が散漫になると、鈴木はすかさず気を入れてやるようにと注意した。

鈴木を見舞いにきた者たち——弟子たち、生徒たち、友人、学者、芸術家、教師、僧侶、桑港寺の日本人の檀家たちや、他の仏教の教師たち——は龍法に關心を寄せた。見舞いに訪れた者の中には、一九五九年以来の鈴木の知己でロサンゼルスLos Angelesの禅センターの教師であった前角や、ロサンゼルスLos Angelesの禅宗寺の鷺見総監がいた。中川の弟子で、ニューヨークの禅学協会の教師・嶋野榮道もある日表敬訪問に立ち寄った。

ボブ・ハルパーンも見舞いに来た。彼はボルダーでチベットの教師トゥルンパについて学んでいた。鈴木鈴木のベッドの横のテーブルの上にはボブが送ってきた大きな絵が置いてあった。文章を書く代わりに、彼はトゥルンパの祭壇の絵を描いた。それには中央に仏陀がおり、左側にトゥルンパのチベットの導師が、右側に鈴木老師が描かれていた。数日後にトゥルンパがやって来た。鈴木は彼に、アメリカにおける仏教の将来について楽観的な話をした。トゥルンパは鈴木鈴木のベッドの傍らで一時間以上彼の手を握ったまま坐っていた。

ほとんど毎日古くからの親しい人たちが鈴木鈴木の部屋を訪れ、三〇分ほどを過ごした——ベッティ、デラ、ジーン、マイク・ディクソンらが。鈴木はフィリップにできるだけ頻繁に訪問してほしいと依頼したので、彼は二、三日置きにサンタロザから車を運転してやって来た。奥さんはフィリップに、彼が来たときはいつでも部屋に入ってもらうようにという鈴木鈴木の伝言を伝えた。フィリップはもし入れなければドアを破るつもりだと答えた。

グレアムが東京から手紙を寄せ、見舞いの言葉とともに、一二月の末、ミルヴァレーMilvaleにいるポーリンと子どもたちを訪問する際、できるだけ早い機会に見舞いに行きたいと言ってきた。彼は自分で始めた英語学校の仕事に掛かりきりで、それまで手を離すことができなかつたのである。

龍法はアラン・ワッツとジェーノジェーノが表敬訪問に現れたとき、傍らに立って耳を傾けていた。彼らが何を話しているのかは理解できなかつたが、鈴木鈴木の体調を考考えれば、それは陽気な面会であつた。ワッツは頗る頗る機嫌がよかつた。ジェーノジェーノが夫をからかい、鈴木鈴木があまりに激しく笑つたので、龍法は彼がその場で死んでしまふのではないかと心配した。

ルイズが新しく生まれ娘を連れてやって来た。

娘は鈴木が最後に揮毫した小さな絡子をつけていた。

小さな子どもの名はジョハンナといった。鈴木は畳の部屋に置いてあったちやぶ台に腰を下ろしていた。彼の正面には擦り切れたポケットサイズの辞書が置いてあった、彼が日本から持ってきたもので、タサハラと市内のセンターを往復する際持ち歩いたものであった。彼はそれを取り上げて言った。「これは私より長生きするだろう」

鈴木は瘡にかかったことは非常に残念だと語った。

「弟子たちがかまどから出る準備ができる前に、私がかまどに入っていたころとしていたのだ」。ルイズは彼が悲しんでいる様子を見て驚いた。というのも彼女は禪の師匠はそのような感情を持つてはいないだろうと考えていたからである。

鈴木はビル・クワンに対しては反対のことを言った。私が自分のクッキーをかまどの中に入れてたころ、立派に焼き上がった出てきた、そして今度は私がある中に這って入ろうとしている」と。彼はいろいろなときにいろいろなことを言っていたが、明らかに彼

は弟子たちのことを考え、彼が死ぬ前に弟子たちのために何をすべきかを考えていた。

リチャード・ペーカーが帰ってくるようになった。

彼が新しく住職に就任するための儀礼の準備が進められていた。ページストリートとタサハラはその話で騒然としていた。そんなことがどうしてあり得ようか。

彼は嗣法を受けはしたが、鈴木の役割を引き受けることなどどうしてできようか。片桐ではどうであろうか。他の僧侶たちでは、ビル・クワンではどうだろうか。彼は鈴木が来た当初から学んでおり、ミルヴァレーに禪堂を持っている。講話を行ったサイラスではどうだろうか。カームルヴァレーのジーン、パークレイのメル、あるいはその他の弟子たちではどうだろうか。

鈴木は、死ぬ前に若干の生徒たちに嗣法を与えたいとクロードに語った。特にビル・クワンの嗣法の儀式を済ませねばならぬと力を込めて言った。しかし、まだ他にも対象者がいた。彼は六人から二人の弟子たちに嗣法を与えたいと考えていた。彼は野扒老師に依頼し、彼を日本から呼び寄せ、嗣法の準備のために数カ月間生徒たちと行動を共にしてもらうことを希望していた。クロードが、リチャードの嗣法とこの者

たちの嗣法とはどのように違ふのかと尋ねたところ、鈴木は、「リチャードの嗣法と同じだ——変わりはない」と答えた。

クロードは若干の人々に相談したが、彼らは皆、鈴木は病が重いので嗣法を行うことは不可能だ、という意見で一致した。奥さんもまた夫の計画に反対した。野扒は特別の食事が必要であり、彼女は二人の世話をしなければならなくなり、負担が重すぎた。鈴木は嗣法をどれほど切実に望んでいるかを説明したが、奥さんはリチャードに任せなさい、と答えた。彼は帰国することに成っており、鈴木の希望を実行することができるのである。彼女とクロードは意見が一致した。二人が鈴木に彼らの考えを伝えたところ、鈴木は断念して再び口にする事はなかった——リチャードにさえも。

鈴木は奥さんに対し、彼が晋山式でリチャードに権限を委譲した後、日本に帰るようにと要求した。彼は家族と離れて再得度することを望んでいると言った。彼女は鈴木が残された時間を生徒たちと共に過ごし、できるだけ彼らの身近にいて、彼らに世話をしてもらいたいと望んでいることがわかっていった。鈴木は片桐がくれた澤木興道の書いた本を読んだ。片桐の二

番目の師匠、橋本恵光がこの本の序文を書いていた。

この本は、僧侶は禁欲を実行し、婦人とともに生活すべきではないと強調していた。奥さんにとってそれはあまり現実には即しているとは思われなかった。

彼女は答えて言った。「もしあなたの病気が回復したら、あなたの希望どおりにしましょう。しかしあなたをこのままの状態にしていくわけには参りません。あなたのために誰がお粥や日本食を作ってくれますか。あなたにはウイंकするだけであなたの要求がわかる人が必要なのです」

彼女はすぐ包一に手紙を書いた。折り返し彼から返事が来て、彼女に是非とも夫の元に留まってくれたいと強く依頼し、もしそれができなければ看病のために家族の誰かを送らなければならない、と言ってきた。包一は同じ趣旨の手紙を父親に送った。そこで鈴木はまたその考えを諦めた。一つ一つ彼は希望を放棄しなければならなかった。

鈴木は、階段を下りて地下室に行く体力があるときには、ときおり坐禅に行った。坐禅の後で彼は自力で階段を上って部屋に戻ることができなかった。彼は自力で戻りたいと思ったができなかった。ときどきレズとピーターが腕で椅子を作り、彼はその上に乗って楽

しんだ。彼はそれに興じた。彼はこのように生徒たちに快く依存した。もはや彼の生活は彼の意のままにはならなくなっていた。

* * *

禪は全ての存在物が、

他の全てのもので共にする修行である

——星、月、太陽、山、川、生物、

無生物全てと。

ときには足の痛みが坐禅をする。

ときには私たちの眠気を催した心が、

黒い坐蒲の上で、

椅子の上で、

ベッドの中でさえ坐禅をする。

Zen is the practice of all existence with everything else

—— stars, moon, sun, mountains, rivers,
animate and inanimate beings.

Sometimes the pain in our legs practices zazen.

Sometimes our sleepy mind

practices zazen on a black cushion,

on a chair, or even in bed.

リチャード・ペーカーがヴァージニアとサリーを伴って帰国した。到着後直ちに彼は鈴木に会いにいっ

た。間もなく鈴木老師は、禪センターとセンターにやつて来る生徒たち全ての世話をする、膨大な責任を彼に譲り渡すことになっていった。彼は堂頭に就任する予定であった。鈴木は「あなたに責任を負ってもらうことについては済まないと思っている」と目に涙を浮かべて言った。

「どうしてあなたのような鋭い人が、私のような難しい人間との結婚を選んだのでしょうか」と奥さんが尋ねた。

「お前がばかばかしいほど正直だからだ」と彼は答えた。

「あなたが死んだら私は何をしたらよいのでしょうか」と彼女が尋ねた。

「ここに残りなさい、帰る必要はない」と彼は答えた。彼女が居残れば誰もが喜ぶだろう。彼女は一〇年間アメリカで過ごしたので、林叟院の生活に順応するのは困難だろう、と彼は言った。しかしどうしたら彼女は禪センターの役に立つことができるのだろう。彼女は知りたいと思った。

「お前は生徒たちに公正に振る舞っている。自然にうまくいくだろう」

「私は尼になるべきでしょう」

「うん、それが一番よいことだろう」

「私は尼さんになるのには年を取りすぎています。来世には僧侶になるかもしれません」

それを聞いて彼は笑い出し、咳きこみ始めた。奥さんが彼をうつ伏せして背中を叩き、やっと咳が治まった。「あなたは運がいいわ。最期の瞬間まで世話をしてくれる人がいるんだから」と彼女はからかうように言った。

鈴木は片手を上げ弱々しく合掌をした。そのとき彼は大きな音を立てて放屁した。「これはお前へのお返しだ」と彼は言った。

* * *

涅槃とは

一つのことを

終わりまで見届けることである。

Nirvana is seeing one thing through to the end.

父親がいつ死ぬかわからない状態にあることを知り、鈴木の子の安子と息子の包一が、義親の天野と共に告別のため、初めてアメリカにやって来た。彼らは

父親がひどい黄疸にかかり、衰弱しているのを見てショックを受けた。彼らはベッドの傍らで、どうしてよいかわからず、丁寧な言葉を二言三言掛けただけで立っていた。しかし鈴木は以前よりオープンで気楽な話しかけようになった。奥さんは狭苦しい台所で麵を作っていた。そのとき顔なじみのフライリッブが訪ねてきた。

ページストリートで、そしてその後タサハラで、子どもたちは鈴木がアメリカに滞在した一二年間に成し遂げた仕事を驚きの目で眺めた。安子と包一にとって、自分たちの父親が大勢の弟子たちの仏法の師匠となり、彼の講話を載せた本がよく売れているということは、想像すらできなかった。彼が全ての生徒たちから老師と呼ばれていることに感動し、彼の講話に対するアメリカの人たちの熱烈な賞賛を聞き驚いた。「母はいつも彼の問題は、仏教についての説教をする方法を知らず、十分に自分を表現しないことだ、と言っていた」と包一は語った。父親は彼らに仏教についてほとんど語ることがなかったため、彼が仏教について特別優れた見解を持っているとは考えさえもなかった。しかし彼の努力の証が彼らの目の前に展開してい

た。

安子、包一そして義親の天野は、片桐が導師を務めたビル・クワンの法戦式に合うようにタサハラに着いた。アメリカ人の生徒たちが一人一人合掌し首座に、仏法と人生について質問した。包一は信じられない思いで眺め、日からは涙がこぼれた——彼らは儀礼を真剣に、伸び伸びと、かつ正しい作法で行っていた。

私は死の床にある師匠を見舞うためにタサハラからやって来た。入口でリチャードが応対に出た。私は彼とはすでにタサハラで一緒に過ごしたことがあるので、お互いに簡単な挨拶を交わしただけであった。「老師にお目にかかるには今がちょうどよい時間だ」と彼は言った。私をよく知っていたので、リチャードは制限時間をきっぱりと告げた。「鈴木老師が是非にと引き留めない限り五分以上いらないように」

「わかった、約束する」と私は答えた。

私は衣を着て彼の部屋に行った。奥さんが寢室に迎え入れベッドの横の椅子に案内した。鈴木は私を見上げて微笑んだ。お互いにお辞儀を交わした。彼はひどく悪いように見えた。彼は苦勞して起き上がり私の近

くのベッドの端に坐った。それから彼が喜びを表すときにもいつもする仕草で太股を叩いた。私はただ暗い気持ちで坐っていた。「気分はよい」と彼は言った。「私はそれほど深刻には感じていない」。この言葉は私が望んでいた全てであった。「結構ですね」と私は氣を取り直して言った。

彼はタサハラで何をしているか、と私に尋ねた。私はダイレクターをしていると答えた。彼は感じいったようにうなずいた。それから彼は私にちよつとした忠告をした。僧侶として私は二つの特性を持つべきであると聞いた。一次的なものと二次的なものを。私の一次的な特性は、客人の世話をすることである。これはタサハラが開所して以来、私が携わってきた仕事であった。二次的なものは恐らく学識であろう。彼の言わんとしていたことは、私が何をすべきかということではなかった。彼は禅センターの古參の生徒たちは私も含め、それぞれの任務については十分に理解していることと信じていた。彼にとって、私が何をするかということとはあまり問題ではない。私に必要なことは、永い年月にわたる活動の中で、真の人間性を發揮し、トラブルから離れている努力を続けることであると考えていたように思う。

私は彼が自分を心に掛けてくれたことに感動した。彼は衰弱し切つてここにいる、にもかかわらず、全ての関心を自分以外のものに向けていた。私を勇気づけ、最後まで自己を信じさせようとしていた。

予定の時間を過ぎたので、私はお暇しなければならぬと言つた。「いやいや、もう少しいなさい」と彼は言つた。私はリチャードが言つたことを思い出し、また鈴木は横になつて休んだ方がよいと思つたので、立ち上がつて頭を下げた。そのとき彼は言つた。「あなたが行つてしまふと寂しくなる。あなたがいてくれれば嬉しいのだ」。「わかりました」と私は答えた。彼は私に彼の家族に会つたか、と尋ねた。私は、「はい、会いました。タサハラを案内しました」と答えた。そこで彼は家族を呼び入れ、そこで私たちは三〇分ほど会話を交わした。とても愉快に話が弾んだので、鈴木がまさに死のうとしており、これが最後の面会になるだろうということをすっかり忘れていた。私は彼にさよならを言つたことすら思い出せない。

「私はこの手で生涯にいろいろなことをしてきた」と鈴木は包一に言つた。「この手でアメリカに来てこんなことをしようとは想像もしなかつた。今は私の仕事

もほぼ終わった。日本に帰つてそこで死ねたらよいが、と思つている」

「私と一緒に日本に帰りたと思ひますか」と包一が尋ねた。

「もし必要なら這つてでも行くよ」と父親は答えた。

包一は父親がそのように話すのを聞いて驚いた。彼がアメリカに渡り三年目が経過後、彼は決して日本には帰らないだろうと思つて来た。上の二人の子どもと天野に会つて望郷の思いが呼び覚まされたに違いない。法要は一週間後に控えていた。儀礼が終わり次第鈴木と一緒に連れて帰ることはできる。包一は奥さん、安子、そして天野に相談した。奥さんの助けを得て鈴木は主治医と話したところ、医者は、鈴木は帰国できると答えた。包一は帰つて父親に話した。

「師匠、医師はあなたが私たちと一緒に帰国してもよいと言つていました」

鈴木は包一を見上げて笑つた。「私が絶対ここを離れないことくらいはわかつているはずだ。お前たちは冗談を笑つて受けることもできないのか」

「あなたは私たちが望んでいたとおりのことをおっしゃいました」と包一は答えた。

「そうだ。もちろん私はアメリカの土になるよ」

安子はアメリカに来て新鮮な目で父親を眺めた。彼
は自分の不幸を肯定的に解釈し、予想していたよりは
長生きできたと言った。彼の師匠の祖温は五五
歳で亡くなったが、彼はこのとき六七歳になってい
た。余分に生きた一二年間は彼がアメリカで過ごし
た年月であった。(鈴木はときとき年代について間違えた——
祖温は実際には五七歳で死んだのである)彼は痩せて、優し
くなり、彼女に心を聞いていた。彼女は今までこれほ
ど彼を身近に感じたことはなかった。そして彼が日本
を去って以来、彼にあまり会う機会がなかったことを
残念に思った。彼女はようやく母親の死に関して彼を
許すことができた。そして彼のアメリカにおける業績
は、母の死に対する償いであるばかりでなく、ある意
味、それに動機付けられたのだと思った。

彼女が小学校五年生の頃、父親に伴われて静岡市に
行ったとき、彼と一緒にいる所を他人に見られたくな
くて道の反対側を歩いたことを思い出していた。今
は、彼女は当時のような心の隔たりは感じなかった。
「子どもたちと両親との絆は決して失われることはな
い」と彼は言った。

義親の天野はすでに旅行の目的を果たしたと思っ
た。彼は鈴木に会い、彼の寺を見、彼の生徒たちに
会った。彼には鈴木がまさに死のうとしていることが
わかった。「私はもう帰国した方がよい」と彼は言っ
た。彼もまた腸に癌ができており、障害があった。彼
は旧友のように死に瀕していたわけでもなくそれほど
病状が重いわけでもなかったが、彼にとって滞在は楽
ではなかった。しかし鈴木はリチャードの晋山式を彼
に見てほしいと望んだ。

「お父さん」と鈴木は天野に言った。「私には僧侶と
してしなければならぬ、もう一つの大事な仕事が残
っておりません。どうかそれを見て帰り、林叟院で檀
家の人たちに報告してください。林叟院を去って、こ
こに来てからやったことを彼らに話してください」
「お父さん、どうか方丈の希望を叶えてあげてくださ
い」と奥さんも頼んだ。

ようやく天野は引き続き留まることを承諾した。

鈴木は日ごとに話すことが困難になっていったが、
何とか話すことができた。特に奥さんとは、他の人
ほど苦勞せずに意思を通ずることができた。「私はリ
チャードに権限を譲り渡したら、即座に禅センターに

口を挟むのはやめるつもりだ。センターを荒廃させるか、させないかは全く彼次第だ」と鈴木は妻に話した。彼はまた彼女にもリチャードにも、もう日本の僧侶が禅センターの教師として来てもらいたいとは思っていない、と告げた。「今後は、彼らは生徒として来るべきだ」

* * *

最も重要な点は私たちの道を継続し、
よい後継者を持つことである。

*The most important point is to continue our way
and to have a good successor.*

一月二二日、日曜日、午前一〇時。禅センターのホールと中庭は、静かに話をしながら待っている人たちで溢れていた。彼らはリチャード・ペーカーが禅センターの堂頭に就任するための晋山式にやって来たのである。玄関の広間と廊下には椅子が何列にも並べられていた。儀式が行われる本堂は、五〇〇人の賓客を収容するには狭すぎた。中国人、チベット人およびさまざまな宗派の日本人僧侶たちが弟子を従えて出席していた。アメリカにおける鈴木先生の重要な役割を演じた人たちの多くがそこにいた。加藤和光と加藤

恵美、小杭師、ジョージ・ハギワラ、桑港寺の大勢の日本人檀家の人々が。ビル・マックニールは革のジャケットを着て片隅に立っていた。古いビート時代の詩人や芸術家たちが正面のドアから入ってきた。過去一二年間に深い関わりを持った非常に大勢の人たち、彼らの間に糸のように織りなされた多くの物語、鈴木が仏の門に導き入れ、あるいは人生の転機に際し彼の影響を受けた多くの者たちが。

階下の鐘が一分ごとに鳴らされ、集まった人たちに静粛を呼び掛けた。参列者はそれぞれの場所で辛抱強く坐ったり立ったりして待っていた。彼らは行列が片桐のアパートから出て街路を上り、会場のビルに入り、所々の祭壇に向かっている音を聞くことができた。ホールに響き渡る低い法鼓の音、それぞれ二分の一音符の高低差のある引磬のチーンチーンと鳴る高音の響きとカチンと鳴る戒尺の音が儀礼とともに移動していた。行列が二階の鈴木部屋の前で止まり、リチャードが香を供えて言った。「私はどのようにして来たのかわからないが、あなたの心の導きにより常にここにいるのです」

片桐、弘文、および鈴木のお参りの弟子の僧侶たち数名がリチャードとともに、静まり返った本堂に向かっ

て階段を下りてきた。リチャードは、輝くような色彩の鳳凰の飛翔している模様のついた青と金色の衣を着ていた。これは鈴木が今日の法要のために彼に与えたものであった。手には儀礼用の馬の毛の払子を持っていた。

継続的に鳴り響く低音の背筋を凍らすような響きと、カーンカーンと鳴る鐘の音が参列者を驚かせ注意を引き、会場はすっかり静まり返った。鈴木はアラン・ワッツがくれた杖を突いて歩いていた。杖の先端には鈴のついたブロンズの飾りがあった。彼の両側には包一と奥さんが付き添っていた。二人は彼に手を貸して階段を下り、通路に沿って着席したり、立ったりしていた列席者の前を通り過ぎ、本堂の二重の扉に向かった。一步一步、歩くごとに、あたかもアメリカの地に仏法を植え続けるかのように、杖で床を打ち鳴らした。黄色の衣の上に、赤褐色のお袈裟をまとい、彼はそこに立っていた。全ての目が彼の上に注がれた。多くの人たちは病んだ彼をそのときまで目にしていなかったし、目にしていた人たちも彼の風情に圧倒された。彼はどす黒く、弱々しく、そして縮んで見えた。だが彼が本堂に入り、特別にしつらえた晋山式の祭壇に向かったとき、彼の並外れた努力と威厳とが輝

き渡った。

錦に覆われた祭壇に近づき、なおも両側から支えられ、彼はゆつくりと衣の袖から座具を取り出した。力を結集し、それを適当な位置に広げ、床に坐り礼拝し、そして彼の強い意志の底から力を引き出すかのようになり、やつのことで静かに、力強く起き上がった。かつて年若いて脆弱な北野老師が永平寺で礼拝から起き上がり、若い鈴木を驚かせ感動させたときのように。包一が彼を助け祭壇の右側の坐蒲団を敷いた儀礼用の椅子に坐らせた。彼は坐り、目だけは坐禅のときのように半眼に開き、真つすぐに正面を見ていた。

参列者は、リチャード・ペーカーが入場してきたとき、はっと息を呑んだ。般若心経が読経された後で、リチャードは晋山式の祭壇の前に立って古典的な様式で宣言した。「過去幾度となく上つたこの須彌壇は、むぢだん遍く菩提曼陀羅「冥冥の仏浄土」である。今、我が本師およびここに居並ぶ皆様の助力を得て、十方三世に遍き心印の壇上に上る。ゆめ疑いあることなかれ」

彼は香を仏陀に、諸菩薩に、諸々の祖師たちに、トルーディー・ディクソンに、片桐老師に、そして「私自身の明敏にして慈悲深い師匠、鈴木俊隆大和尚」に供えた。鈴木に対し、鈴木自身が一九六三年に桑港寺

で行われた晋山式で述べた詩を引用して次のように詠んだ。

私が長年所持してきたこの一片の香を

今、私は無手で

師であり、友である鈴木俊隆大和尚に捧げる、

これらの寺の創立者である大和尚に。

あなたが達成した業績は計りしれない。

あなたとともに仏陀の穩やかな雨の中を歩いている

とき

私たちの衣はしとど濡れそぼつけれども、

蓮の葉の上には

一滴の露さえとどまらない。

リチャードは祭壇の前の赤い漆塗りの椅子に坐つた。片桐が鈴木に代わり大きな声ではつきりと叫んだ。「龍象よ！ 仏陀の首座の位を確保するこの者を承認されよ！」

その後でリチャードが、彼が任職としての最初の講話と呼ぶことができる言葉を述べた。「言うべきことは何も無い」

引き続いて問答が行われた、儀礼化されてはいたが

即席の質問が提示され、これに対してリチャードが迅速にかつ劇的に返答した。電報が読み上げられ、公式の祝辞が述べられ、式は終わった。

鈴木は助けられながら祭壇に向かい、もう一度ゆくりとした骨の折れる三拝をし、終わるとほとんど独力で起き上がった。それから彼は式場を去るために通路を下り始めた。開かれた玄関口に行く途中で、彼は立ち止まった。彼の僧伽の者たち、弟子、生徒たち、かつての生徒たち、信奉者たち、古い友人たち、来訪の教師たち、米室の人々が集まっていたその中ほどで。そこは全くの沈黙が支配していた。彼は左を振り向き、決然とした態度で持っていた杖を両手で数回振り回した。杖の先端についていた鈴がじゃらじゃらと音を立てた。彼は右を向いて再び杖を振り回し、再び鈴の音が鳴り響いた。それは最後の努力の響きであった。彼の愛と自由の響きであった。

涙と啜り泣きの声が至るところから湧き上がった。心臓が張り裂けたのだ。全てのものが彼の面前で停止した。大きな限りない共感の中で——街路上で車の鳴らす警笛、鳩のクークーという鳴き声、部屋の中で啜り泣く声、そして深い静けさ。時間は停止した。彼がアメリカに到着したその日から始まった一瞬一瞬の時

間が、今彼が介抱され、杖で床を打ち鳴らしながら会場を去っていく現在も続いていたのである。彼は、両手を合わせてありがとうと言ひ、さよならと言ひ、言葉にならない言葉を語り掛ける者たちで満ち溢れた部屋を後にして去っていった。

法要の後で、鈴木は弟子たちと面会した。二〇人ほどの者が彼の居間の畳の上に坐っていた。なすべきことは終わった。彼は、パージストリート、そしてタサハラ禅センターを禅達リチャード・ペーカーに引き渡した。リチャードは立派な衣を着て頭を真つすぐに伸ばし、目を伏せ、受け継いだ重い責任を全身に背負ひ、鈴木の際に坐っていた。鈴木は彼の方を振り向きうなずいて微笑んだ。部屋は静まり返っていた。微かな声で鈴木は居並んだ者たち全てと、リチャードにありがとうと言った。それから片桐の方を向いてうなずき、再び氣息えんえんとした声で「あなたにしていただいた全てのことに感謝します。私は大変ありがとうございました。思っています」と感謝の言葉を述べた。そのとき、突然ほえるような声が起こった。それは片桐であった。彼は鈴木の所に這い寄り、泣き叫びながら言った。「死なないでください」。嘸り泣きながら彼は弱々し

い鈴木の身体を抱きかかえた、鈴木は柔らかなすれた声で言った。「大丈夫、大丈夫」

片桐は鈴木に別れの挨拶をして、修行期間の最後の数週間を過ごすためにタサハラへの帰途に着いた。彼は悲しみのうちに、そして彼の立場についてある種の満たされない気持ちを抱いて去った。七年間彼は鈴木に仕えた——厳しい仕事、低い手当て、年中休むことなく。片桐は信頼できる人間であり、不断の堅実な修行を続けてきた。彼は多くの生徒たちから、鈴木と同等の教師と見られてきた。鈴木と片桐はお互いに感情を抑え、長年言葉をあまり交わすこともなく過ごした。リチャードの晋山式の後開かれた弟子たちとの会合のときまで、鈴木は口頭で彼に感謝の気持ちを表明したことはなかった。

鈴木はなお、センターを去るといふ片桐の意図に悩まされていた。彼は片桐がセンター全体の上席の教師として留まることを望んでいた。「恐らく片桐は協力してくれるだろう」と、彼は就寝の際、奥さんに話していた。

片桐だけが、鈴木を思い悩ませた人間ではなかった。やり残した仕事に彼の心を重くした。ピルであ

り、サイラスであった。彼は自分の弟子たちの面倒を見たいと思った。鈴木のみならず、まず問題が起こるのを待ち、そつと突き、辛抱強く待ち、決して慌てず手際よく行動することであった。彼はいかに速やかに病魔が彼を征服するか予想できなかった。弟子たちの中には動揺する者もあった。このまさに死のうとしている男について、勉強に専念することをしばらく延期し断念する者もあった。彼は最後の指示を残さないのであるうか。

これまでに鈴木のみならず、指示は実際的なことについてではなく、尊厳を保つて死ぬことについてのものがあった。生徒たちにとっては、愛する師の肉体的な衰えを見ることは悲劇ではあったが、同時にまた彼の沈着さを目の当たりにし、精神的に決して衰えることのない様を見るのは素晴らしいことであった。

息子の包一が日本に帰る前に彼と最後に会ったとき、鈴木は包一に折り入って頼んだ。「私に代わってビル・クワンの面倒を見てやってくれないか。間違はなくビルに嗣法を与えてやってほしいのだ。お前は私に代わってやることができる」

鈴木は包一にどんな方法であれ自分の弟子たちの援助をしてもらいたいと希望していたが、包一は父親が

リチャードの邪魔をしないことを望んでいることも承知していた。「禅センターのことはリチャードに任せなさい」と彼は何回となく言っていた。包一はまた指導者は補佐役を必要とすることも承知していた。そして父親もそのことはよく認識していた。リチャードは、片桐やクロードのような彼の先輩たちや、ビルやサイラスのような同僚の助力を必要とするであろう。たとえ彼らと意見が一致しなくても、彼はそうした人たちと共に活動し、彼らを尊重しなければならぬ。鈴木は彼らの間にライバル意識があることは承知していたが、それが協力関係に発展することを期待していた。「すべきことはした」と彼は息子に言った。「今私にできることは希望することだけだ」

彼がリチャードやほかの弟子たちに寄せた信頼、そして諸々の問題についての彼の忍耐と容認とを併せ考えれば、鈴木の希望は彼の生徒たちが想像したよりは遥かに多くの可能性を含んでいたように思われる。もし一緒に行動できない者があれば、別々に行動してもよいであろう。たとえ意見の対立が厳しくても、ときが対立を和らげてくれるだろう。最終的には、生徒たちが誠実でありさえすれば、それでよいのだ。彼は死んでいこうとするその目で生徒たちを眺め、かつて立

髪が飛行機で着いたときと同じように考えたかもしれない。「あなたたちは今後どれほど苦しまなければならぬか、考えも及ばないのだ」と。

天野が別れの挨拶に彼のベッドにやつて来た。「私は自分の務めは全てやり終えました」と鈴木は言った。「どうか檀家の人たちに詳しく話してください」

「はい」と天野は確約して答えた。

鈴木は天野に頭蓋骨の形をした珠のついた彼の摩尼珠を与えた。彼は奥さんに指示し、安子に掛け軸を、包一には彼が儀礼に使用したブロンズの鈴のついた杖を与えた。杖の先端につけた鈴は、彼が林叟院に返却したいと望んでいた最後の品物であった。これらは一九五九年に、彼が日本を発つ際に借用してきたものであった。

「では、今から帰ります」と天野が言った。

「わかりました。さよなら、お父さん。お気をつけて」と鈴木は静かに答えた。包一はどうして二人がいつもと変わらぬ何気ない態度で別れの挨拶を交わすことができるのだろうか、と信じられない気持ちであった。

離陸前の飛行機の中で安子は泣いていた。彼女は飛

行機を下りて父親と一緒に留まりたいと思った。包一は彼女に言った。これから日本に帰って天野とともに、父親がこの一二年間にアメリカで何をしてきたか、何を生み出し何を残していったかを、檀家の人たちに説明しなければならぬ、と。檀家の人たちはなぜ彼が去っていったかを誰も本当に理解していなかった。今は天野も、安子も、そして包一もその理由がよくわかった。そして他の人たちに彼の業績を誇りに思うべきだと語ることができた。

* * *

古の菩薩たちは

失敗、貧困、死を恐れず、

その中に喜びを見いだした

——つましい仕事をするにも。

*The ancient buddhists were not afraid of
but found joy in failure, poverty, and death
and in doing small things.*

病院用ベッドが、中庭を見下ろす二階の部屋に置かれた。そこで鈴木は建物の、ときには陽光の中でリズム感を持つことができた。本堂はすぐ下にあった。朝のお勤めの間、彼は窓や開いた扉を通して流れてくる

読経の声や、太鼓、鐘の響きに耳を傾けた。奥さんが彼の顔を洗い、その後で彼は一杯のオレンジジュースを飲んだ——これが彼のお勤めであった。彼は衰弱してベッドから離れられなくなっていた。

龍法は、指圧をするとき、鈴木顔をみて途方に暮れた。夢うつつで変わりやすく、日本人のように見えないと彼は言った。彼は間違ひなく、いつ死んでもおかしくない状態であると、奥さんも医者も言っていた。彼の皮膚は黒ずみ、ほとんど茶色のお嬰婆と同じような色をしていた。しかし龍法にとつて、彼の眼光は威力があった。

イヴォンヌが毎日やつて来て、奥さんが料理をし、洗濯し、掃除をする間彼に付き添っていた。彼らは交代で看護に当たり、背中、脚、腕——彼の指示する所はどこであれマッサージをした。イヴォンヌが彼のベッドの傍らに坐っていると、瘦せこけた腕が敷布から現れ上に伸びる。彼女がしばらくそれを擦ると、彼は腕を引つ込めて敷布の下に入れる。しばらくするともう一方の腕が現れるのであった。彼女と奥さんがマッサージをし床ズレを起こさないように彼の身体をときどき動かした。彼は決して不平を言わず、彼の受けた心遣いに感謝していた。

テーブルの上には鎮痛剤が一瓶置いてあった。彼は胆囊の手術後と同様、鎮痛剤を拒んだ。彼は一度医者の指示で鎮痛剤を服用したことがあったが、服用後に起こる精神状態を嫌い、イヴォンヌに言つて片付けさせた。しかし、彼はリチャードには、ときおり拷問を受けているように感じると語つた。

ある日鈴木がイヴォンヌに近寄るようにと言つた。彼女が近づくと、彼は彼女を情侶として得度しなかつたことを詫びた。再び、彼は女性を訓練する自信がなかつたのでと言つた。「私はあなたの修行に対する真剣さを認識していなかつた」。

鈴木はイヴォンヌにサイラスの動静を尋ねた。そして彼がすでにバンクーバーの近くのポートランドとクアドラ島に摂心の指導に出掛けたと聞いて心を痛めた。サイラスは別れの挨拶にきたが、そのとき鈴木は眠っていた。彼は鈴木に近くでしばらく坐つていたが、やがて去つていった。サイラスはリチャードと意見が合はず、会員はリチャードを新しい住職として認めるか否かについて意思表示をする機会を与えられるべきであつたと言つて、論争した。しかしほとんどの生徒たちは鈴木を思いどおりにすることを希望した。

理事会のメンバーは全て生徒たちであり、サイラスの民主的かつ法に則った提案を容認できなかった。彼はリチャードが帰国して以来、あまり鈴木に会うことはなかった。このとき鈴木はサイラスのことを思いやっていた。

法要から一週間も経たないうちに、鈴木はほとんど完全に話をしなくなつた。続いて食事もしなくなつた。彼の身体は柔らかく、弱く、痩せて八歳の子どもの大きさになつてしまつた。もともと子どものような体格ではあつたが、大きな石を動かす強力な力とエネルギーを持つていた。今は黒ずんだ、死にかけた子どももの身体であつた。奥さんは龍法にもうわざわざ来なくてもよいと伝えた。奥さんかイヴォンヌのいずれかが付き添つていた。彼らはなお軽く彼のマッサージを続けたが、イヴォンヌにはただ一緒に呼吸をしているだけのように思われた。彼女はもう何もすることはないように思つた。彼を一人だけにし、彼の近くにおいて、たまに依頼があればそれに応えるだけであつた。二人は彼の顔を拭いた。彼が水を飲まなくなつてからは、布巾で彼の唇と口を湿らせた。

リチャードは毎日やつて来た。ときどき彼は奥さんに手伝つてもらい、鈴木と話をした。もう彼はほとんど聞くことができなくなつてゐる、と彼女は言つた。

「どこであなたにお会いしましょうか」とリチャードがベッドの足元に立つて合掌しながら尋ねた。合掌した鈴木の手が敷布から現れた。それから、人差し指を伸ばして空中に円を画き、円に向かつて礼拝し、手を敷布の下に戻した。リチャードは礼拝を返した。

* * *

私たちがこの世にゐるといふことは、
いづれ消滅するといふことを意味する。

That we are here means we will vanish.

一二月三日の夕刻、鈴木は中庭を見下ろす病室のベッドから彼の住まいの自分のベッドに移された。「明日」と彼は奥さんにしやがれ声で囁いた。「サイラスのことでリチャードに話をしなければならぬ」奥さんは畳の部屋に入つて布団を敷いた。初めて彼女はパジャマを着ないで、洋服を着たまま疲れ切つて横になつて眠つた。

鈴木の子の乙宥が数日前から来ており、鈴木は臨

終までいると言っていた。彼は死期の近いことを知っていたのである。彼は小さな部屋の中で父親のベッドの向かい側にあつた奥さんのベッドに寝た。夜中の二時頃、乙宥が奥さんを揺り起こした。「お母さん！お母さん！お父さんが風呂を浴びたいと言っています」

「駄目、駄目、駄目」と言つて彼女は部屋に入つていき、夫に眠りにつくように言つた。彼は繰り返して風呂に入りた、と言つた。身体への負担のことを考えると奥さんは不安になつた。彼は長い間、風呂に入つていなかったのである。

「大丈夫だ」と彼は言つた。

乙宥は言い争いをしようとはしなかつた。彼には乍寄りが最後まで我を張り通すだろうということがわかつていた。奥さんは浴室に行き、浴槽に湯を入れ始めた。乙宥がゆっくりと彼を浴室に運んで浴槽に入れた。鈴木は空気を求めて喘ぎ始め、呼吸が早くなつた。「もう駄目だ」と彼は短い呼吸の合間に言つた。

「落ち着いて、落ち着いて」と乙宥は彼を抱えながら耳元で宥めるように言つた。「ゆっくり息をして、ゆっくり息をして」乙宥は音を立ててゆっくりと呼吸した。そして父親の呼吸も、二人が同じゆっくりし

た速度で呼吸するまでに落ち着いた。

鈴木はデラがくれた香りのよい棒状の石鹸を所望した。彼は今まで香料の人った石鹸を使ったことはなかつたが、彼はその石鹸を取り上げゆっくりと、ふっくらした泡を作つた。そして二人で手伝い、彼の身体全体を洗つた。それから彼は長い間くつろいで風呂に浸かつていた。

その後で、鈴木はベッドに横たわり溜息を吐いた。ゆっくりと微かな声で言つた。「ああ、なんてよい気分だ」と顔に微かな喜びの表情を浮かべて言つた。

「朝になつても私を起こさないでくれ」

「喉が乾いているんじゃないの」と奥さんが言つた。

「オレンジジュースかアイスクリームはいかが」

「オレンジジュース」。彼はオレンジジュースを少し飲んで、目を閉じて眠りについた。

奥さんは自分の布団に戻り、乙宥は父親の隣のベッドに横になつた。ほどなく四時になつた。彼は起床の鈴の鳴るのを聞いた——生徒たちに起きて坐禅に行くようにと知らせる振鈴が広間を通り抜けた。その日は普通の坐禅の日とは違い——二月四日は、仏陀の悟りの日である二月八日に終わる五日間の摺心の初日であつた——一〇〇人以上の人々が熱心に参加してい

た。乙宥は生徒たちが注意深くドアを開閉する音や、広間の向かいの浴室で水が流れる音を聞いていた。それから木製の板を叩く鋭い音が聞こえてきた。それは新しい住職の禪達ペーカー老師（鈴木が彼をそう呼ぶようにと言った）が諸々の祭壇に香を供えにいくところであると告げていた。最後の祭壇は禅堂内にあり、彼はそこで瞑心を開始し、最初の坐禅の時間が始まるのである。

鐘の響きが遠くの禅堂から微かに聞こえてきた。乙宥は父親が微かに動く気配を感じた。鈴木の手が伸び彼の腕を掴んだ。

「ペーカーを呼べ」と微かな囁きが聞こえた。

乙宥はベッドから跳び出して畳の部屋に走って行った。

「お母さん！ お父さんの容態がおかしい！ ペーカーを呼べと言っている！」

ものも言わずに奥さんは跳ね起き、禅堂に駆け下りて行った。

奥さんが側面のドアを開けたとき、ちょうどリチャードが坐蒲に坐り衣を直しているところであった。リユーが彼女に一番近いところに坐っていた。

「禪達を呼んで！」と彼女は大急ぎで囁いた。

リチャードは大股で禅堂の戸口に歩いていき、それから階段を駆け上がって鈴木の部屋に行った。奥さんと乙宥は、鈴木とリチャードの二人だけを残して部屋を出た。彼はいまだ意識があった。そして生涯の最後の力を振り絞って、かろうじて手を最愛の弟子の方に伸ばした。ベッドの脇で、半ば坐り、半ば跪きながら、リチャードは彼の手を握り、額を彼の額に押し当てた。二人はそのままの状態ではばらくじっとしていた。そのとき、リチャードは、彼にとって最も親愛なその男が彼の手をすり抜け、生命が解き放たれていくのを感じた。ゆっくりと鈴木俊隆老師は消えていった——それはあまりに穏やかであったので、リチャードは彼がいつ死んだのか、正確に感じる事ができなかった。彼にはただその事実が起こったことだけがわかった。

リチャードは鈴木の手を離れた。彼はしばらく待つてから、脈を探った。それから彼は部屋を出て奥さんと乙宥の所に行った。リチャードは胸に手を当てた。二人に日本語で、「鈴木老師の生涯は終わりました」と言ったとき、彼の声はしゃがれていた。

結び

Epilogue:
1998.12.4

生徒「老師、ここで何をなさっているのですか」

鈴木「特に何も」

*Student: Rashi, What are you doing here?
Sensei: Nothing special.*

鈴木俊隆が遷化して二七年を経た今日、彼の生徒たちとその教え子たちは、彼がアメリカにもたらした教えと修行を継続し、彼の影響は多方面に広がっている。禅仏教は今やアメリカ文化の一部として確立され、私は地方の店でも坐蒲を買うことができる。

私の冷蔵庫の中の豆乳の容器の表面には、*Zen Mind, Beginner's Mind* から引用された句が印刷されている。

鈴木^の遺産は諸々の坐禅グループにも、いずれのグループにもあまり関係を持たないかあるいは全く関係を持たない禅の修行者たちの家庭にも、そして「絶対的な価値や真理、原理など存在しないという立場をとる」非絶対

主義者で、自分を仏教徒とは考えていない、偏見のない取り組み方をしている大勢の西洋人の中にも見いだすことができる。彼の写真は、アメリカ中至るところで祭壇や整理ダンスの上に置かれているが、鈴木俊隆を崇拜の対象とする教団は存在しない。むしろ、新生の文化に幾筋かの重要な糸を加えた——この東の間の儂い世に、謙遜と尊厳をもって生きる道、不完全さに対して寛容さをもって生きる道を教えたこの男に感謝しているのだ。彼は特別人の記憶に残ることを望んではいなかったが、彼が蒔いた修行の種は根を下ろし、私たちが自己を発見することを常に鼓舞し続けているのである。

鈴木老師は仏教徒の農園を始めたいと望んでいたが、彼が他界した後、サンフランシスコ禅センターは、サンフランシスコのすぐ北にある農園を手に入れた。一九九五年四月のある日、私はマリン郡にあるグ

リーングルチ農園のゲストハウスで、ロサンゼルス禅センターの創始者、前角大山老師と一緒に坐っていた。前角は鈴木に関する逸話や物語は何一つ私に話さなかつたし、歴史的な分析をすることも拒んだ。しかしそのとき彼が語った言葉を私は忘れることはできない。「誰も過去を語ることはできない」と前角は言った。「重要なことは過去に遡って何が起き、何が起こらなかつたか、というのではない。現実には、私たちの前に展開していること、つまり私たち全員が合会を開き、大勢の人が講話や坐禅に集まってくる大きな納屋の禅堂と会議場のある、この素晴らしい農場こそが重要なのだ。市内にはページストリートがあり、郊外にはタサハラもある。非常に大勢の人たちが、アメリカ全土で、いやヨーロッパでさえも坐禅をしている。彼がアメリカに来たときはこうしたものは何もなかつた。彼が来る前に大勢の僧侶たちがアメリカに来た。今世紀以前にも、禅のあらゆる宗派の僧侶たちが来ている。理由はよくわからないが、彼が来るまでは誰も継続することをやらなかつた。彼が来た後では、非常に多くのことが起こつた。この点が、私が最も彼を評価する点である」

一九七二年の春、鈴木みつは夫の納骨式のためタサ

ハラに行つた。彼女は夫の草履を履いていた。彼がもう一度タサハラに戻りたいと言つていたからであつた。「彼の生徒たちの涙が乾くまでは」日本に帰らないと決心し、彼女はその後二二年間もアメリカに滞在し、市内のセンターに住んで、俳句を詠み、茶の湯を教えた。一九九三年秋に、彼女は帰国し、林叟院からそれほど遠くない静岡市在住の娘、松野はるみと一緒に住んでいる。

鈴木俊隆は日本ではあまり広く知られていないし、曹洞宗門によつて重要な教師として認められてもいない。しかし彼は高草山グループのメンバーたちにはよく記憶され敬愛されている。その中にはいまだに接触を保ち、ときどき林叟院に鈴木包一を訪ねる者もいる。このグループの若者たちはその後大工、農夫、芸術家、公務員、政治家、実業家、出版業者になつた。すでに一部の者は、他界した。ほとんどの者たちは、今は引退している。その中の一人、末常氏は鈴木俊隆がまだ存命中にサンフランシスコの禅センターを訪問した。こうした人々は僧侶ではなかつたが、特に戦争中の苦しい体験を分かち合つた深い絆故に、鈴木が日本国内で最も親愛の情を抱き、記憶に留めていた生徒

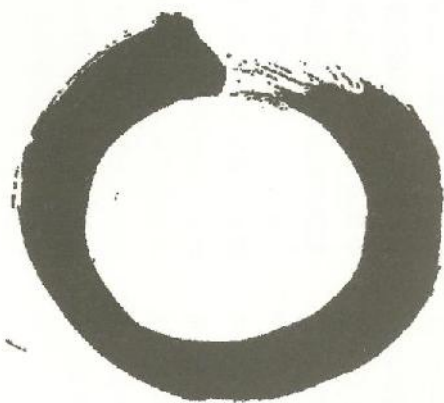
たちである。

大蔵省(当時)の印刷局長官であつた上月重雄は一九七四年、日本の主要な経済新聞である日経に一文を寄せている。この文章は「心のホームタウン」、文字どおり「心のふるさと」という表題が付いている。

その一部にこう書いてある。「サンフランシスコに行き、若いアメリカ人の心を開き、彼らの心の故郷を作つた男がいた。アメリカで彼は黙々と坐禪をし、自然のままに行動し、日々の生活の重要性を伝えた。私たちの方丈さんがその人である。愛らしい椿の咲く高草山麓の林叟院は、私たちの心の故郷である。そこで私たちは彼とともに坐禪をし、若い方丈さんが読経する、うっとりするような声を聞いたものである。彼は説教をしたり、これをしなさいと私たちに言つたり

することはなかった。彼は行動の人であり、生活の人であつた。戦争中の非常な混乱の時代に、方丈さんから輝き出る銀色の光が、若者たちの心を挿らえた。彼は寺の檀家たちの面倒を見るだけでは満足できなかつた、そこで彼はアメリカに行つた」

夫の死後、鈴木みつは天田保正に手紙を書き、彼はその手紙を自分の手紙に添えグループの人々に送つた。天田は全員に代わつて弔辞を述べた。「私たちがあなたに申し上げたいことは、俊隆さん、あなたは私たちの師であり、兄であり、友人であつたということです。あなたは私たちに人間性について教え、慈悲について教えてくれました。私たちは深甚の敬意をもつてあなたに申し上げます。よくやつてくださいました、方丈さん！よくやつてくださいました！」



鈴木俊隆と北アメリカの禅 サンフランシスコ禅センターをめぐる

石井清純（駒澤大学仏教学部教授・禅研究所所長）

世界のZenのイメージ

「Zen」という言葉は、欧米では日本人が考える以上に頻繁に用いられているといわれます。そして、北米の大学の多くが、禅（zen）に関する講座を開設しているのを見るにつけ、その思考形態への興味も単なるブームではなく、恒常的な評価を得ているように思われるのです。近年では、英語の辞書にもそのまま立項されるようになりました。たとえばケンブリッジ英英辞書には、「zen」の項目があり、^{*}形容詞として「relaxed and not worrying about things that you cannot change」と、安定した状態を示すものと定義され、類語として「calm and relaxed」が挙

げられています。名詞としての用法は、「a form of Buddhism, originally developed in Japan, that emphasizes that religious knowledge is achieved through emptying the mind of thoughts and giving attention to only one thing, rather than by reading religious writings」とあって、日本発祥の仏教思想の一派として捉えられています。^{*}

この「zen」とは、もちろん「禅」の音読みです。ただ、同じ漢字でも、中国語では「chán」、韓国語では「seon」と表記するので、それらの項目は、英英辞典には見えません。つまり、上記の辞書の定義からしても、禅はzenと読まれ、日本的な思考を代表する言葉として受け入れられているということになるのです。そしてそれは、精神的に「calm（落ち着いた）」「和らいだ（calm）」ものであると同時に、思索的に

「smart (知的)」で「cool (素敵)」なものと評価されています。

そのような傾向を受けてか、このところ「zen」という言葉を商品イメージに使う例が日に付くようになってきました。

二〇一五年に発売されたシトロエン社の小型車C3にSpecial Zen Selectionという特別仕様車が発表されました。イメージビデオを見ると、「コンパクトでシンプル、それでいて落ち着いた空間」を表現しようとしているように見えます。

その他、ASUS社からも、ノートパソコンや携帯電話に、「zen」を冠したシリーズが発売されています。こちらのキャッチコピーは、「シンプルで優美なデザイン」と「直感的な使いやすさ」を謳っています。この会社は、台湾に本社を持ちます。つまり、「禅」という漢字を証票とするのであれば、その読み

は「chán」であり、それに随うべきであるはずなのですが、それをあえて「zen」としているのは、世界的なアピール効果を狙っているのものと考えて良いでしょう。このように、日本の禅は「zen」として、世界の人々に対する存在感を増してきています。

北米禅の立役者——二人のスズキ

これは、種々の複合的要因によってもたらされたものですが、そのきっかけを作り、そこから現地の状況に的確に対応をした、二人の「鈴木」姓を持つ日本人が大きな役割を果たしています。そのひとり、よく知られる鈴木大拙だいせつです。そしてもうひとりが、本書の主役となった鈴木俊隆しゅんりゅうなのです。

このお二人の経歴について、北米へ日本の禅が広まっていった歴史を概観しながら見ていくことにいた

- * 1 たとえば、スタンフォード大学では、二〇一八—一九冬学期にExploring Zen Buddhism、イェール大学でも、二〇一八年秋学期にZen Buddhismという講座が開設されている。
- * 2 <https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/zen>
- * 3 オックスフォード英英辞典にも「zen」が立項され、名詞として「西感と瞑想を重んじる大乘仏教の一派」<https://en.oxforddictionaries.com/definition/zen>と定義されている。
- * 4 現在YoutubeのAmuroMoti VS チャンネル<https://www.youtube.com/watch?v=G6cK3dMqIB8>、2019/1/5)に登録されている。

しましう。

日本の仏教が、明確に世界に紹介されたのは、一九八三年にシカゴで開催された万国宗教者会議 (World Congress of Religions) でした。この会議は、初めて東西の宗教者が一堂に会して対話を行った会議とされていますが、日本から参加した四人の仏教者の中から、積宗演が代表となり、「仏教伝通概論 (英題: Law of Cause and Effect as Taught by Buddha)」と題した講演を行いました。その原稿の英訳を担当したのが、他ならぬ鈴木大拙だったので。

積宗演は、安政六年 (一八六〇) に福井県若狭で生まれ、一二歳で出家、妙心寺・建仁寺を経て、明治十一年 (一八七八) より鎌倉円覚寺において修行し、今北洪川より印可 (修行の完成の証明) を得ました。修行中に慶應義塾大学において福沢諭吉より英語と洋学を学び、明治二〇年 (一八八七) の卒業後、スリランカおよび東アジア諸国に遊学しています。明治二五年 (一八九二)、三四歳で臨済宗円覚寺派官長に就任、先の万国宗教者会議の出席はその翌年のことでした。

鈴木大拙は、明治三年 (一八七〇) に石川県金沢市に生まれ、明治二十一年 (一八八八) に第四高等中学校木科 (現: 金沢大学) に入学したものの中途退学してしまい

ます。二一歳で上京し、帝国大学 (現: 東京大学) 哲学科選科で学ぶかたわらで、鎌倉円覚寺で参禅、その縁で、積宗演の万国宗教者会議の講演原稿の英訳に携わり、会議の翌年、明治二十七年 (一八九四) に、宗演より「大拙」の号を賜っています。

選科修了後に渡米し、一年間にわたりオープン・コート社のポール・ゲーラスのもとで仏典や漢籍の英訳・編集に携わりました。帰国して学習院大学で英語教師を務めながら、昭和十三年 (一九三八) に『禅と日本文化』(初版タイトル: *Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture*、北川桃雄訳、岩波新書、一九四〇年) を出版しました。この書は、その後の一九七〇年に、*Zen and Japanese Culture* (邦訳なし) と名前を変え、大幅に改訂増補されて再版されました。そして、世界各国の言葉に翻訳され、日本の禅と文化を学ぶ人たちの基本書として重視されているのです。

大拙は、この書において、日本文化の底流に禅の思想が存在するという基礎概念をもとに、日本に禅宗が成立した中世以降の茶道、能楽、あるいは日本庭園などのそれぞれについて、禅の立場から思想的な意義付けを行っています。

その影響力はあまりにも大きく、この書によって鈴

本大拙の名は、Daisetz Teitaro Suzuki (D. I. Suzuki) として、欧米社会に定着しました。現在でも、日本思想、あるいは歴史の研究を行う研究者は、多かれ少なかれこの影響下にあるといえます。

さらに大拙は、昭和二五年(一九五〇)に八〇歳で再渡米し、イェール大学やコロンビア大学等で講演を行いました。当時の米ソ対立の激化によって、多くの人々が宗教的な思考に興味を持ち、それが東洋思想にも向けられていたことも相まって、この講義は大きな反響を呼んだのです。これが第一次禅ブームです。これによって北米に生まれた禅を「ビート禅」と呼ぶのですが、それは、反アメリカ精神を「禅」を媒体に、文学や芸術で表現しようとする、政治的動機の強いものだったといえます。この活動を担った人々を「ビートニク」と呼びますが、その代表は、詩人のアレン・ギンズバーグ、ゲイリー・スナイダー、小説家のウィリアム・バロウズ、ジャックケルアック等が挙げられます。その生活ぶりはケルアックの *The Dharma Bums* (一九五七年刊、邦訳は『デ・ダルマ・バムズ』講談社学術文庫、中井義幸訳、二〇〇七年) に詳細に記されているところです。また、曹洞宗では、一九一三(大正二)年に、忽滑谷快天(後の駒澤大学総長)が、*The Religion of the Samurai* (サ

ムライの宗教) というタイトルで、中国・日本の禅を紹介しています。大拙も *Zen and Japanese Culture* (『禅と日本文化』) に「禅と武士道」という一章を設けて紹介しています。たしかに、鎌倉時代に禅を積極的に受け入れたのは武士階級ではあり、そこを強調することは海外の人々に禅を紹介する第一歩としては効果的だったとは思われます。しかし、どうもこの一点のみが、その後独り歩きしてしまったという面も否定できないのです。それでも、これをきっかけに、仏教学の分野においても、禅を研究する思潮が生まれてきたということはできるでしょう。

その後、思想的興味だけでなく、坐禅の実践を望む現地の人々が増加します。時あたかもベトナム反戦運動が起こり、伝統や慣習からの脱却を目指す、ヒッピーと呼ばれる集団が形成され、彼らが禅の実践を取り入れるようになりました。彼らは政治的な批判というよりも、むしろ自らの気ままに自由な生き方の確立のために、禅だけでなく、インドの瞑想やネイティブアメリカンの儀礼など、各種の宗教行事を組み合わせることで、新しく、自分たちの自由な世界を構築しようとしていました。そこには薬物使用による神秘体験も含まれていました。このような中で実践されてい

たのが、一九六〇年代の禅ということになりました。

因みに、日本では、この「ビート」と「ヒッピー」をひとつとして捉える傾向が強いのですが、北米では、明確に違う物として捉えられています。その混同の原因は、どうも、先のケルアック著『ザ・ダルマ・バムズ』の最初の邦訳のタイトルが、「禅ヒッピー」(太陽選書二二、大場社、小原宏忠訳、一九七三年)であったことに由来しているように思えてなりません。

日本の禅は、このようなくつつかの、ささやかな誤解と共に、太平洋を挟んで展開してきているということになるのです。

「小さなスズキ」の禅センターの建設＊

禅が、カウンターカルチャーの担い手たちの間に広まっていったのですが、それは当然、日本で実践されていた禅とは、かなり違ったかたちになっていました。それは、ヒッピーたちのような禅を受け入れる動機にも起因していましたが、さらに指導者も少なく、正式な施設も存在していなかったことも大きな要因でした。鈴木大拙は、僧侶ではなかったこともあり、禅を思想哲学として説き広めることが活動の中心とな

り、参学の師である釈宗演が渡米し坐禅指導をする際の通訳等を行ったものの、具体的な実践についての活動には積極的ではなかったようです。

そのような中、北米に住む日本人のための寺院の運営に当たるために、日本から派遣された僧侶の中から、現地の人々の要求に応え、坐禅を実践するための場を作ってあげようと活動する人々が現れてきました。

一九二〇年代にはすでに日本から北米本土に僧侶が派遣されていましたが、その一人である臨済宗の佐々木指月が、一九三〇年にニューヨークに米国第一禅堂 (The First Zen Institute of America) を開きました。これが、北米の人々のための禅の実践道場の嚆矢とされています。

また、一九〇五年に北米に渡った臨済宗の千崎如幻も、ロサンゼルスに東漸禅窟とうぜんぜんくわを開設しています。鈴木大拙が釈宗演に参禅していたことを加えれば、北米に禅を定着させるための基盤造りは、これら臨済宗の人々によつて行われたということができそうです。

しかし、その後のアメリカの坐禅修行の展開には、アメリカ西海岸、ロサンゼルス禅宗寺やサンフランシスコ桑港寺を守りながら、現地の人々に坐禅を地道に指

導し続けた曹洞宗の僧侶が大きく寄与していきます。

その代表が、当時、サンフランシスコの桑港寺に赴任した鈴木俊隆だったのです。

鈴木俊隆は、一九〇四年に神奈川で生まれました。

父の鈴木祖学も僧籍を持っていましたが、その弟子とはならず、兄弟子の法を嗣ぎました。つまり、肉親の父が法の上での祖父（師翁）となつて居るのです。その後、駒澤大学仏教学部を卒業して、永平寺・總持寺の両本山での安居修行を経て、藏雲院そして林叟院の住職となつたのですが、五五歳となつた一九五九年、林叟院を弟弟子の鈴木祖光に任せて渡米、桑港寺の住職となりました。

桑港寺は、ロサンゼルスLos Angelesの禅宗寺と並んで、米国在住の日系の人々のために曹洞宗が建立した寺院です。その主な役割は、現地在住の日本人や日系人のための法事や葬儀、季節の行事を行うことでした。その中で、定例の坐禅会や、「正法眼蔵」の読書会等も盛り込まれていて、そこに現地の人々が参加しています。筆者が、カリフォルニアに滞在していた二〇〇〇年当時のことですが、同じお寺で開催されている行事でも、日本の伝統行事や法事等に参加されるのはほとんどが日本から来られた方々です。一方で、坐禅会や読

書会への参加者は、ほとんどがヨーロッパ系アメリカ人でした。つまり、一つの日本寺院、日本人や日系人のメンバー（北アメリカの寺院にはお墓がありませんので、「檀家」ではなくメンバー登録制度を採っています）には、「伝統行事や地域の寄り合いの場所として位置付けられ、現地の参禅者たちには、自らの精神性や仏教への知識を高める学びの場所として用いられる」という、双方向の要請が存在していたのです。

一つは、日系の人々のコミュニティの中心として、日本の伝統文化や儀礼を担う機能として、花まつり（降誕会）や成道会といった仏教行事、あるいは、餅つきや豆まきなど、日本でも寺院が担う季節の行事などが中心です。餅つきの白は、戦前の「桑港寺婦人会」と書かれた金盥かみだらいをコンクリートで固めたものです。当時は、日本の白など手に入れようもなく、苦肉の策だったのでしよう。しかし、使い勝手がよく、今でも毎年使われています。

このような伝統行事だけでなく、桑港寺では、七五三の祈祷も実施しています。一般に七五三は神社で行われる行事ですが、ベイエリアにはお官がないため、地域の方々の要望もあつて実施することになったとのことです。実は、曹洞宗の法式には七五三の祈祷

儀礼はありません。そこでご住職がいろいろ工夫され、子どもたちの成長を祈る新しい儀礼を作られたのだそうです。私が伺ったときは、本堂に入り切らないほどの人気で、二週に分けて行っていました。これなど、まさしく日本の「伝統」を求める方々への対応ということになるでしょう。

その一方で、『正法眼蔵』の講読会も実施されています。餅つきと同じ多目的ホールで開催されていますが、参加者は全てヨーロッパ系アメリカ人の方々。同じように坐禅会も開催されていますが、このような禅の勉強会や実践には、邦人はほとんどおらず、現地の方々が多く集まって、同じお寺とは思えない雰囲気です。

このような、集まる方々の違いは、大括りにすれば、寺院の行事に「日本」を求めているか「禅」を求めているかの違いということができるのではないのでしょうか。そしてこの違いが、鈴木俊隆師による、現地の人々のための新たな施設、禅センターの建設へとつながっていったものといえるでしょう。

一九六〇年代当時に、これと同じ状況があったかどうかはわかりません。しかし、寺院のメンバーではない人々の参禅に対する強い要望が、鈴木大拙の活動、

第一次禅ブームからの流れで存在していたことは、想像に難くありません。鈴木俊隆師は、そのような状況下にあつて、正式な坐禅堂における実践方法もわからずにいる現地の人々に対し、サンフランシスコ市内に、それまでの在米仏教寺院とは違うシステムを持った修行道場を創設しました。それが一九六二年に設立された発心寺 (Beginners Mind Temple) です。鈴木俊隆は、そこで薬物使用などを一切禁止、道元禅師の只管打坐の実践を指導していったのです。

サンフランシスコ禅センターの設立

発心寺の設立によって、多くの人々が坐禅に取り組む環境ができあがりました。ただ、鈴木俊隆は、この一カ所に留まらず、さらにその組織を発展させていきます。それが現在、三カ所の施設を持つ「サンフランシスコ禅センター」となっています。

その三カ所の施設とは、サンフランシスコ市内の発心寺、カール・ヴァレー山中にあるタサハラ禅心寺、そしてサウサリートの蒼龍寺そうりゆうじとなっています。

最初に開設され、サンフランシスコ禅センターの中心となっているのは発心寺です。市内にあるため「シ

「ティー・センター」とも呼ばれています。

その様子は、名前は「寺」ですが、日本のお寺とは随分異なっています。禅センターでは、僧侶と在家者が一緒に生活しています。在家の住人は、仕事を持っていて、朝の坐禅が終わると仕事に出掛けていくので

す。日曜日の公開講座や坐禅会も盛んに行われています。公開講座では「正法眼蔵」の講読などが行われ、大学の哲学科の学生等、外部の方々も加わって活発な議論が行われています。また、日曜日の坐禅会は、坐禅堂ではなく、初心者向けに広間で行われており、そこにも数十名の方々が集まって熱心に指導を受けています。そこに日系人はほとんどいないという、桑港寺の坐禅会と同じ傾向が見られるのは興味深いことでした。

サンフランシスコだけでなく、禅センターでは、おおむねこのように、出家者と在家者が一緒に生活をし、それに外来の参禅者が加わって活動しています。

鈴木俊隆は、さらに一九六七年（昭和四二）に、都会の喧騒から離れて静かに修行することの可能なタサハラ

禅センター禅心寺（Zen Mind Temple）を、カリフォルニア州のカーメル・ヴァレー山中に建設しました。今も残るフィルムには、法衣をまとって自ら石を運ぶ俊隆師の姿が映し出されています。後にステイプ・ジョブズの師となる乙川（知野）弘文は、このセンターで修行者を指導するために日本から招聘されました。

禅心寺は、四輪駆動車が推奨されるほどの山道を登った場所に位置しています。その静寂の中で、参禅者は修行に打ち込むのですが、運営費は、その地が温泉地であることから、夏場に温泉保養地として観光客を招聘し、さらにそこで供される精進料理のレシピ本を数多く出版・販売することによって賄われています。それによって、冬場には安居修行に専心するという、独特な運営形態が採られているのです。

以上の二カ所が、鈴木俊隆自らの手によって開設されました。残る蒼龍寺は、鈴木俊隆没後の一九七二年に、後継者のリチャード・ペーカー妙融によって建設されました。この禅センターは、僧堂・雲堂・客殿・茶室といった伽藍がらんに加え、無農薬農園「グリーンガルチ農園」を併設しており、その収穫によって運営を

*5 詳細はサンフランシスコ禅センターのホームページ（<http://sinc.org/>）を参照。

行っています。

サンフランシスコからゴールデンゲートブリッジを渡った場所にあり、週末には、市内から多くの人が来訪し、野菜を買い、散策をするという癒しのスポットにもなっています。野菜販売だけでなく、無農薬農法そのものの研修も実施し、収益を上げています。

これは、リチャード・ペーカーの作り上げた方式で、これによって、葬儀や法事による収入のない北米の禅センターは、安定した運営が可能となりました。

さらに、この農園で収穫した野菜をタサハラのレシピで調理して提供するベジタリアンレストラン「グリーンズ・レストラン」をサンフランシスコ市内に開店し、人気を博しています。日本的な「禅寺」のイメージとはかけ離れてはいますが、出家者と在家者が共同で事業を行いながら、坐禅修行を実践する地盤を作っていくのが、葬儀や法事を行わない北米の禅センターの活動の基本的なカタチ、ということができるといえます。

このように、ペーカーが考案した運営形態は大きな成功を収めました。これによって、アメリカの禅センターの運営方式が確立したともいえるほどの大きな功績といえるのですが、残念ながら、一九八三年には禅

センターを迫られることになりました。ペーカーが、権力を独占し、スキャンダルが発覚したことがその理由でした。この出来事によって、サンフランシスコ禅センターは一時混乱しましたが、片桐師が暫定の住職となり、乙川師も呼び戻されることによって事態は収束に向かいました。最終的には、運営委員会を設立し、さらに住職（代表）を二人にすることによって権力の集中を未然に防ぐという、これも独自の運営方式を確立し、現在の安定した運営に至っています。

Zen Mind, Beginner's Mind の刊行

坐禅を実践する道場を作ったところで、鈴木師は、坐禅の理念と作法についての著述も刊行しました。それが *Zen Mind, Beginner's Mind* (一九七〇年刊) です。この書は、世界数十カ国語に翻訳され刊行されています。日本でも三回邦訳され、それぞれに「初心・禅心：坐禅のすすめ」(松輪徳意訳、白馬書房、一九七九年)、「禅へのいざない」(紀野一義訳、PHP研究所、一九八八年)および「禅マインド ビギナーズ・マインド」(松永太郎訳、サンガ、二〇一〇年)というタイトルで翻訳出版されています。鈴木大拙の *Zen and Japanese Culture* が禅の哲学的思

索的把握のためのバイブルとなったとすれば、こちらは、実践者の世界的実践マニユアルとなったということができるとしよう。冒頭で述べた、「禅」を「Zen」と日本語読みで発音するという傾向も、実にこの二つの著述が、全世界に広まったことが大きな要因となっていると考えて間違いないと思われます。

さて、その内容ですが、著者が、駒澤大学で澤木流の坐禅を学び、さらに永平寺・總持寺の西大本山で安居を経験していることにより、その作法解説は、極めて基本に忠実なものとなっています。さらに、坐禅中の心の置き方についても、伝統的な「非思量の坐禅」に則った解説が為されています。このように、基本に忠実なマニユアルが、標準として受け入れられたことは、日本の禅にとつて極めて喜ぶべきことでした。特にそれが、先にも触れたように、坐禅の心境と薬物使用による神秘体験とを同一視するヒッピーの禅受容が行われていた時代に、明確な「只管打坐」の主張がなされたことは、禅の基本形を保持する意味で極めて重

要だったといえます。

しかし、その功績は、鈴木大拙に比べて、日本ではほとんど知られていませんでした。それは、ご本人が、大拙に氣を遣つてご自身を「小さなスズキ」と表現したりする、性格の奥ゆかしさに由来してゐるかも知れませんが、実は、その活動が、当時、全面的に称賛されつつなされたものではなかったことも要因のひとつであると思われまふ。

渡米に際しては、任職をしていた林叟院を弟子に託しました。ご子息の鈴木包一師は、当時まだ学生でう。このような状況は、タサハラに招聘された乙川弘文にもあつたと聞きます。渡米後の桑港寺でも、日系メンパー以外の参禅者を受け入れたことについて軋轢あやなみが生じました。さらに発心寺において坐禅指導あやなみすることも、お寺を蔑ろあやなみにするものと捉えられた時期があつたことは、本書においても語られているところかと思ひます。これらの「寺院住職としての評価」が、

* 6 この出来事に ついては、Shoes Outside the Door: Desire, Devotion, and Excess at San Francisco Zen Center. Michael Downing, Counterpoint, 11001 が出版されている。

* 7 乙川弘文の伝記については、柳田由紀子「ステイプ・ジョブズが愛した禅僧」乙川弘文評伝①～②(『Koobal』集英社、二〇一二年春号～二〇一二年秋号)に詳しい。

鈴木大拙との知名度の違いの要因の一つになっていると考えられるのです。

それでも彼は、自らの信念を貫きました。それが結果として、実践面で世界中の禪を志す人々に多大な影響を与えたのです。よって、その功績は、鈴木大拙と並び称せられるべきものなのです。これが、北米禪の紹介に当たって、必ずこのお二人を並べ、「二人のスキ」とさせていただいている所以です。

ヨーロッパの禪

鈴木師がタサハラに修行道場を創設した同じ一九六七年、弟子丸泰仙が、単身フランスに渡り、パリのガレージで禪の布教を開始します。「Push the floor with your knees and the sky with the top of your head (膝で地を押し、頭頂で空を衝く)」という、至ってシンプルなもの、彼の積極的な活動もあってヨーロッパ全土に広まっていきます。そしてその努力は一九七〇年のヨーロッパ禪協会(現・国際禪協会 Association Zen Internationale)の設立として実を結んだのでした。

その後、一九七九(昭和五四)年には、ブローア市のロ

ワール川沿いの Gendronnière に古城を購入、その土地の名を漢字に直して禪道尼苑ぜんどうにえんと名付けました。この施設は、現在、各伽藍も整い、国際禪協会の研修所として機能しています。

また、禪道尼苑が設立された年に、中川正壽がドイツで布教を開始しています。中川は、澤木興道の弟子である酒井得元(駒澤大学教授)に就いて出家しています。現在中心となっている施設は、古いホテルを改装したアイゼンブッフ禪センター・普門寺、で、ミュンヘン郊外に位置しています。

また、同じ澤木門下の成田秀雄が、一九八四年にイタリア北部に正法山普伝寺を開創しています。この普伝寺は、その後、曹洞宗寺院としての正式認可を経て、二〇一六年に、永平寺の直末となりました。毎年国際セミナーを開催するなど、宗旨の研鑽を行いつつ、本山と同じ修行生活を営んでいます。このほか、イタリアやスペイン、スイスなどにも弟子丸泰仙の教えを受けた弟子たちが禪センターを開設しています。

ヨーロッパの禪と日本の曹洞宗との交流は、弟子丸泰仙没後一時途絶えていました。しかしその後、伝統を重んじるヨーロッパの僧侶の呼びかけによって、二〇〇一(平成二三)年に、曹洞宗ヨーロッパ布教総監部

が設置されました。現在はパリ市内にあつて、ヨーロッパ全土の禅センターの連絡調整を行っています。

北米禅の今^{*8}

さて、北米に戻つて、一九七〇年代から八〇年代以降の展開を見ますと、それまでの流れとは少し違つた傾向が見えてきます。まず、多くの日本僧が北米に入り、多くの禅センターを設立しました。坐禅を体験できる機会が飛躍的に増えると、それまでカウンターカーチャーの一翼を担うかたちで受容されていた禅も、一般の人々が気軽にアクセスすることが出来るようになり、日々の生活の心の置き方を見いだす一手法として定着するようになります。

さらに、ちょうどその時期が、日本の経済成長期と

重なつたこともあり、各企業のエグゼクティブクラスが、禅的思考に強い興味を示すようになっていきました。これらの要素が相まって、「禅」が、カウンターカーチャーにおける思想表現の一手段から、多くの人々が、週末などに心を落ち着けて静かに過ごすトリートメント (treatment) のための一手法として取り入れられるようになっていったといえます。

そのような現代の北米の禅の多様な状況を、スタンフォード大学のカール・ビュールフェルト名誉教授は、「参加する仏教」にむけて⁽²⁾「道元の二十一世紀」奈良康明・東隆真編、東京書籍、二〇〇一年所収)において、以下の五種に分類しています。

①「世俗主義 secularism」…宗教を聖なるものと見ず、世界を成り立たせる要素の中の選択肢の一つと見るも

*8 この「もう一人のスズキ」には、拙稿「世界の中のZEN」(「禅と林檎」ステイブ・ジヨブズという生き方) 角田泰隆編、宣帯出版社、二〇一二年) においても言及している。

*9 欧州における弟子丸泰仙の活動については、自身の著作である「禅僧一人ヨーロッパを行く」(春秋社、一九七一年) および「禅と文明」(サンガ文庫、二〇一二年) などを参照。又、ヨーロッパの曹洞禅の現状については、釜田尚紀 [Kir Maki] 海外ZEN通信 [SOUSEU] 一五四号、一六一号、全国曹洞宗青年会、二〇一一年八月〜二〇一二年五月) が参考になる。

*10 本項および次項の作成に当たり、曹洞宗国際センター前所長の藤田一照師に多くのご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

の。仏教は市場の商品と同じ扱いとなる。

② 「個人主義 individualism」…宗教を、制度や社会、あるいは文化とは切り離し、個人的体験のための媒体として取り扱うもの。組織化された宗教には慎重で、個人の純粹体験を重んじる。

③ 「折衷主義 eclecticism」…仏教だけでなく、仏教以外にも目を向け、そこから材料を仕入れて精神性 (spiritual) を高めるための個人版を作り上げるもの。

④ 「平等主義 egalitarianism」…精神生活においてはなんびとも同等のプレーヤーであるとするもの。布教者の優越性は、階層化へ反抗するアメリカ文化により担保されない。

⑤ 「行動主義 activism」…信仰の体系というよりも、実践すべきものとして仏教を考える。教義や儀礼には興味を持たず、悟りという目標とそこへ至る実践を信じるもの。

この五種の分類を見れば、ビート禪、スクエア禪の時代から見ても、「禪」の需要形式が極めて多様化してきていることが分かります。またさらに、「伝統」や、「形式」には比較的淡泊で、むしろ、①以外は、禪のよいところを自分に取り込もうとする方向を見て

取ることができません。やはりここがアメリカ的な部分といえますが、それでも、多くの人が、「種々の形式でアプローチをしながらも、「純粹性」や「安定」を求めていることがわかります。

これはつまり、日本の宗派制度からの「変容」ということになりましたが、しかし、翻ってみれば、じつはこれは、日本の、江戸時代から固定化された寺院と檀家との関連が全く存在しないアメリカならではのアプローチの方法ということになるのかもしれない。何よりも、アメリカの禪センターでは、先祖供養の法事は一切行われませんので、その点で、むしろ、禪の基本思想と実践のみがそのまま取り上げられ、受け入れられると、これらの形式とならざるをえないということかもしれないのです。

このような状況下にあつて、日本の曹洞宗も、一九九七年に、曹洞宗北アメリカ開教センター（現：曹洞宗国際センター）を設置し、北米の禪の指導や、日本との連絡調整を行うようになりました。

以上のような経緯を経て、いま、欧米各国において禪が実践されています。しかし、冒頭でも触れたように、その形式は、極めて伝統的な手法を守る部分と、風土ごとに変革している部分とが混在している状況

に、あります。まさしくこれが、冒頭で触れた、ルノーやシトロエンの販売促進戦略において用いられている「Zen」に対して違和感が生じてくる所以だといえるでしょう。

北米禅のグループ

次に、北米禅の展開の歴史と状況を踏まえながら、活動している北米禅のグループについて紹介することにしたしましょう。

現在、日本の曹洞宗宗務庁に登録されている北米の寺院および禅センターは、曹洞宗公式サイト「曹洞禅ネット」(<https://www.sotozen-net.or.jp>)の寺院検索によると、四十八施設となっています。それらは、大きく分けて次のように分類されます。

第一は、現地の日本人のために、日本の曹洞宗によって建立された、日系の「寺院」があります。ロサンゼルスの禅宗寺や、サンフランシスコの桑港寺、モントレーの禅宗寺など挙げられます。その役割は、

日本の寺院と同様、在米日本人や日系人のコミュニティの中にあつて、葬儀や法事、季節の行事など、日本の文化に根ざした活動を行うことです^{*1}。

次からが現地の参禅者たちに対応したいわゆる「禅センター」で、鈴木俊隆師とその弟子たちによって設立された、サンフランシスコ禅センターが、最も大きなグループとして挙げられます。片桐大忍のミネソタ禅センター、マリアン・ダービーのハイク（俳句）禅堂、レス・ケイの観音堂（マウンテンビュー）など、多くの禅センターが、ここから展開していきました。これが第二のグループです。

ここでは、すでに述べたとおり、道元禅師の「只管打坐」を修行の中心に置き、薬物の使用や、他の瞑想法を廃した修行方法が実践されています。もちろん、現地の文化的背景に即したオプシジョン（ギター法話など）も行われていますが、基本的に、日本の曹洞宗に準拠しています。

第三番目は、前角博雄のグループ。前角は、三宝教団の影響を強く受け、ロサンゼルス禅センター仏真寺

*11 南北アメリカの日系寺院は、SOTO禅インターナショナル (TZN) 創立二〇周年事業として刊行された『曹洞宗海外日系寺院史』(SZJ 編刊、二〇一四年)に詳しい。

およびニューヨーク州キヤッツキルの禪マウンテンモナステリ―道真寺において、公案を用いて「悟り体験」を強調する禪風を実践しました。これは、曹洞禅だけでなく、臨済系の公案を用いる修行を取り入れた、極めて融合的な宗風を特徴としています。

その門下を代表するのが、ジョン大道ローリー（一九三二―二〇〇九）です。彼は、道真寺を嗣ぎ、Mountain River Order of Zen Buddhism (MRO) とする団体を設定すると共に、The Eight Gate of Zen と言う新たな修行プログラムを提唱しました。それは、前角の融合的宗風を受けたものですが、それを受けつつさらなる変革を目指したことについて、米固有の禪の創造形態である、という評価もなされます*11。

第四は、安泰寺系と呼べるグループです。安泰寺は兵庫県美方郡にある曹洞宗寺院で、澤木興道によつて開創されました。現在、ネルケ無方というドイツ出身の僧侶が住職をされている、海外に開かれた寺院です。その六代目の住職である内山興正の門下生が、北米に渡り、開創運営する禅センターがこのグループで、マサチューセッツ州のパイオニア・ヴァレー禅堂と、インディアナ州ブルーミントンの三心寺の二カ所がここに分類されます。施設としての数は少ないです

が、安泰寺出身の奥村正博は、曹洞宗北アメリカ開教センター（現曹洞宗国際センター）創設時の所長であり、前国際センター所長である藤田一照も安泰寺で修行された方ですので、北米全土に大きな影響を及ぼしているグループと言えます。

以上が、現在日本の曹洞宗とコミットしているグループですが、さらにそれ以外に、Silent Thunder Order（黙雷教団）とこうグループが存在しています*12。松岡操雄（一九二二―一九九七）がシカゴに設立したZen Buddhist Temple of Chicago を中心に展開し、現在、一五の施設が所属しているとのこと*13。

松岡操雄は、山口県に生まれ、駒澤大学を卒業後、總持寺に安居、一九三九年に曹洞宗より禅宗寺へ派遣され、のち桑港寺へも所属しました。任期終了後に、コロンビア大学で鈴木大拙の講義を受け、シカゴに移つて禅センターを開創したとのこと*14。

その後を継いだ、ゼンカイ・エリストは、奥村正博の指導も受けており、安泰寺系の法を受けたことも強調しています。やはり融合的な宗風も持った集団ということができるでしょう。法系は曹洞宗ながら、日本の曹洞宗教団に登録することはずせ、独自の活動も行っていますが、ただし、曹洞宗の禅を実践している

という自覚は強く、二〇一五年には指導者たちが、永平寺・總持寺の両本山を拝登され、また、創始者の松岡師が駒澤大学の卒業生であることから、坐禅を学んだ場所として駒澤大学へも訪問しています。

このように、緩い枠組みではありますが、創設に尽力した日本人の禅僧の禅風を受け継ぐかたちでグループが存在しています。このほかにも、ヨーロッパと同様、日本の曹洞禅僧が介在せず、独自に永平寺や總持寺で修行した北米の僧侶が開設した施設もあつて、一口に北米の曹洞禅といっても、かなり多様であるといふことができるでしょう。その点では、AZI（国際禅協会）が中心となつているヨーロッパとは少し様相を異にしています。この辺りは、国や地域の性格ということができるかもしれません。

それぞれに、独自の行事なども盛り込んで運営されていることはすでに触れました。現在では、曹洞宗国際センターが全体を取りまとめる方向で動いておりますが、かつて「開教センター」として開設された当初は、各センターの指導者を集めた摂心で、坐禅の方法

がそれぞれに違つていて、まずは「面壁」で統一するところから始めたというお話しをうかがったことがあります。曹洞宗の坐禅は、「面壁、つまり壁に向かつて坐るのが基本ですが、それをしていないセンターが存在していたということなのです。

本稿では、鈴木俊隆師の活動を中心に扱つたため、内容が曹洞宗中心となると共に、論を進めるに当たり、年表も含めて便宜的に「臨済宗」「曹洞宗」という日本の類型に従つて俯瞰してきましたが、じつは、アメリカの人々の多くは、禅センターにおいて継続的に修行を行つている人すらも、ほとんど宗派の区別をしていません。極めて大まかに、「坐禅を修行の中心に置いた実践的な仏教」の思想と実践全体を「禅」として捉えている傾向が強いです。

かかる意識の下で、自分自身に最も適合した実践形式を模索するという状況があるため、アメリカの禅は、いまだにその「定型」をみるにいたつていません。その定型のないところがアメリカ的であるという評価もありますが、それでも、「坐禅」という実践形

*12 岩本明美「アメリカ禅の誕生—ローリー大道老師のマウンテン禅院」(東アジア文化交渉研究別冊六、二〇一〇年)
*13 教団のホームページ (<http://standalone.org/>) による。

態を蔑ろにしては「禪」は語れませんし、また、日常の規範についても、指導者が日本人僧侶であった禅センターでは、日本語で説経が行われ、日々の行事も、修行規範に則って行われている例が多く見受けられます。

禅の展開への私見―日本と北米

以上のように、北米の禅もヨーロッパと同様に、日本の「お寺」というイメージでは括ることのできないかたちで禅修行を実践しています。

いま、これらが今後どのように展開するのか、そしてそれに日本の禅がどのようにコミットして行くべきなのかを予想する意味から、北米禅の歴史を、日本に中国から禅が伝来し展開してきた歴史と比較してみたいと思います。それが「禅の伝来と展開に関する日米比較」(図一)です。

日本では、鎌倉時代に多くの僧が中国南宋から渡来し、禅を伝えました。弟子を輩出したものだけでも二四人を数えます。その後、室町時代に、幕府や朝廷の庇護を受けた五山と、政府から独立した組織を作り出した林下禅林という、二つの方向性が生まれます

が、そこでは曹洞・臨済といった宗派意識は希薄でした。

北米に目を向けると、今回も紹介したように、複数の禅者が渡米し、それぞれに禅を広めています。臨済宗も同様です。そしてそれは、臨済・曹洞の区別無く、「禅」として受け入れられていて宗派意識は希薄です。その意味で、日本も北米も、始まりはよく似た状況であるといえるでしょう。

その後、日本では、鎌倉や京都では、中国宋代に行われていた五山十刹制度がそのまま導入されましたが、現代まで残っている各派の教えは、そこから日本的展開を示した林下禅林でした。それは、各僧侶が、厳しい叢林修行によって培った境界を基盤としながら、天狗や狐などの各地の信仰と柔軟に結びつくことによって人々の心に定着していきました。

北米にあつては、鈴木大拙の教えを、ビートニクたちが、自らの思想と表現方法に結び付けて取り入れられました。それは、かなりの米国的変容ということができます。ただ、そのような変容だけでなく、その中で、鈴木俊隆師が、日本の禅を忠実に拳揚することによって、禅は、核を失うことなく展開しました。そしてこれも同時に、現地の需要に合わせた禅センターという

図1 禅の伝来と展開に関する日米比較

時代	日本	年代	北米
鎌倉	伝来(二四流)	1950	日本僧それぞれの展開
鎌倉/室町	五山・林下	1960	禅センター建設
	密参禅		曹洞臨済の混在
室町	輪番住持制	1970	運営方式の確立 複数代表制
	叢林修行 各地の信仰との融合	1990	曹洞宗北アメリカ開教センター Soto Zen Community
江戸	本末・寺請制度	2010	×
	明朝禅の流入		○ (天平山禅堂プロジェクト)
	復古運動・集団修行の復活		
明治	神仏分離		×

日本にはない施設の創設がなされたのです。これも、日本の中世後期における展開と同じような経過といえるのではないのでしょうか。

さらにその後には、教えの維持存続のための努力がありました。日本では、大きく展開した曹洞宗と臨済宗妙心寺派が輪番住持制度を取り入れることによって、組織的に大きく発展しました。これは、總持寺のえんじよ（二七五―三六六）が確立した制度とされていますが、宗派の本山を、弟子ひとりか護持するのではなく、数人の弟子が個別に拠点寺院を持ち、それぞれが持ち回りで本山へ住持を送り出すという制度です。これによって、宗派意識が高まると共に、重層的な後継者の育成が可能となりました。

これに類した制度を北米に探せば、北米最大のサンフランシスコ禅センターの複数代表制が挙げられるでしょう。サンフランシスコ禅センターは、権力の一極集中による混乱を経て、運営委員会を設置し、二人の *Abbot*（住職）を置いていたのです。

このように、日米双方が、修行道場の運営を一点集中にせず、組織の安定的な維持存続のための制度をそれぞれに作り上げてきたのです。

以上、禅が、中国から日本へ、そして日本から北米

へと、新たな土地に入り展開する過程に、よく似た経過を見いだすことができるのですが、これを日本の年代に当てはめてみると、現在の北米の状況は、江戸時代の宗教統制前夜といったところになります。つまり、日本で鎌倉時代に禅宗が渡来してから四〇〇年を経てできあがった状況が、北米では、わずか六〇年でかたち作られたということになります。これは、現代の時の流れの速さに比定したとしても劇的な展開ということになるでしょう。

さて、それでは、日本の禅の歴史に照らして、今後ほどのような動きとなることが予想されるでしょうか。

日本では、このあと江戸幕府主導で宗教統制が行われ、本末制度と寺請制度（檀家制度）が確立します。ただ、これと明治維新後の神仏分離は、北米では起こり得ないことです。表では×印を付してあります。

そこで残ってくるのが、一七世紀半ばの隠元隆琦（一五九二—一六七三）の黄檗禅の伝来です。日本の禅宗各派は、この本場中国からの刺激によって、それぞれの禅の実践を再確認し、自らのアイデンティティーを確立してゆくことになりました。

今後、この江戸時代の黄檗禅のような外的刺激が、

現在の北米の禅が、北米の禅として醸成していく過程に必要なかもしれません。もちろんそれが日本と同じかたちである必要はありません。しかし、すでに現地の参禅者の間でも、その必要性に対する認識は存在していたようで、日本の禅の伝統的な修行をそのまま再現し得る施設の建設が要望されていたとのことなのです。

その要望を受けるかたちで、現在進められているのが、「天平山禅堂プロジェクト」です。これは秋葉玄吾北アメリカ布教総監が中心となった、カリフォルニア州ロワーレイクに、日本の専門僧堂と同じ出家者専用の禅堂を建設しようという計画です。坐禅堂はすでに落慶しています。これによって、鈴木俊隆の創設した「禅センター」から展開した北米の「Zen」が、再び日本の「禅」と触れ合い、情報が環流されることになって、日米双方の禅がどのように展開していくのか、大いに期待される場所です。

このように、海外への禅の普及に邁進した日本の禅者たちによって、今や日本の「禅」は、「Zen」として世界に定着しようとしています。それは、少し急ぎ足ではあるものの、爆発的な普及ではなく、受け入れる人々の要求に応じた、地道な活動によって担われてき

たものです。その足がかりとなる設備を作り、「坐禪の実践」を定着させた日本の禪者たちの中心となり、後に続く人々の道しるべとなったのが、鈴木俊隆だったといえるでしょう。

にもかかわらず、その功績が、日本にほとんど伝わっていないのは、大変残念なことです。

その理由の一端はすでに触れました。「訳者のあとがき」(四七四 四七六頁)には、本書の翻訳が、鈴木俊隆の輝かしい業績をできるだけ多くの人に知っていただくためであると記されております。私も、解説者として、まさに本書が、鈴木俊隆の功績を、生まれ故郷

の日本人に知らしめ、日本の伝統文化や思想を世界へ発信することの大切さ、素晴らしさを、改めて認識する縁となることを心から願っております。

石井清純 いしい・せいじゅん

一九五八年、東京生まれ。駒澤大学大学院博士後期課程仏教学満期退学。現、駒澤大学仏教学部教授・禅研究所所長。元駒澤大学学長・スタンフォード大学客員研究員も務めた。専門は道元禪師の著述の総合的研究。欧米との禪の国際交流も積極的に行っている。著書は『禅問答入門』(角川選書)、『禅と林檎—ステイプ・ジョブズという生き方』(宮帯出版社・共著)など。

欧米禪略年表

各僧名に付した(曹)は曹洞宗、(臨)は臨済各派を示す

一八九三 シカゴにおいて万国宗教者会議開催。禅宗からは釋

宗演師(臨済宗円覚寺派)が参加。

一九〇三 曹洞宗が北米に「同胞慰問使」派遣開始。日系移民への対応開始。

一九〇五 釋宗演(臨)再渡米。坐禪の指導を行う。

一九一三 忽滑谷快天(曹) *The Religion of the Sonnets: A Study of Zen Philosophy and Discipline in China and Japan* (「サムライの宗教」)を出版。

一九二二 磯部峰仙(曹)、ホノルルに正法寺開創(北米最古の曹洞宗寺院)。

一九二二 同師、ロサンゼルスに禪宗寺を開創。(北野元峰禪師・新井石禪師を勧請開山とする)

一九二七 千崎如幻(臨)、『Fasting Zendo(文殊菩薩の掛軸を用いた場所不定の修行道場)』を始める。

一九三〇 佐々木指月(臨)、『ニューヨークでBuddhist Society of Americaを立ち上げる(アメリカにおける最初の仏教組織)』。

一九三四 磯部、サンフランシスコに桑港寺開創。

一九三八 鈴木大拙『禅と日本文化』(初版タイトル: *Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture*) を出版。

一九五六 コーネリアス・クレーンがThe Zen Studies Society設立、大拙の活動を補佐。

ブラジル、サンパウロの仏心寺に初代総監高階瓊仙赴任。

曹洞宗、北米開教四〇周年を記念して、モントレー禪宗寺を建立。

一九五七 ジャック・ケルアック、ピート禪を題材とした小説 *The Dharma Bums* を出版。

一九五九 鈴木俊隆(曹)、『サンフランシスコ桑港寺の任職となる』。

鈴木大拙、『*Zen and Japanese Culture* (『禅と日本文化』)を改訂増補し出版。

一九六二 鈴木俊隆、現地参禅者のためにサンフランシスコ市内に善心寺 (Beginners' Mind Temple) を創設。別名(City Center (曹洞宗最初の禅センター))。

一九六七 鈴木俊隆、サンフランシスコ郊外の山中に、安居修行可能なタサハラ禅マウンテンセンター (Tassajara Zen Mountain Center) を建設。

乙川弘文(曹)、『タサハラでの坐禅指導のために永平寺より派遣される』。

前角博雄(曹)、『ロサンゼルス禅センター(仏真寺)開創』。

弟子丸泰仙(曹)、『フランスに渡る。ヨーロッパへの布教始まる』。

鳴野築道(臨)、『ニューヨーク禅堂正法寺を開創』。

佐々木承周(臨)、『ロサンゼルスに臨濟寺を始める』。

一九七〇 鈴木俊隆 *Zen Mind, Beginner's Mind* を出版、世界数十カ国で翻訳出版される。

ケネット・ジュウ師、カリフォルニア州マウンテンシヤスタにシヤスタ・アベイ禅センターを創設。

唐子正定(曹)、『マサチューセッツ州ノーザンプトンで坐禅グループを組織』。

弟子丸師、パリにThe European Zen Association (現: Association Zen Internationale (AZI)) を設立。

一九七一 鈴木示寂。リチャード・ベーカー妙融がサンフランシスコ禅センターの後を嗣ぐ。乙川師、要諦により補佐。このころ、ステイブ・ジョブズと出会う。

- 一九七二 ベーカー、サウスリットにグリーンガルチ禅センター (Green Gulch Farm: Dragon Temple 若龍寺) を開創。後に無農薬農法を開発し、農園を経営。
- 片桐大忍 (曹)、ミスアボリスにミネソタ樞メディテーションセンター設立。
- 佐々木承周 (臨)、ロサンゼルスにマウント・バルディ禅センターを創設
- 一九七三 佐々木、ニューメキシコ州アルバカーキーにボディ・マンダ禅センターを設立
- 一九七五 市田高之 (曹)、マサチューセッツ州チャールミントに土地を購入。唐子師の坐禅グループによってパオニア・パレー禅堂として展開。
- 一九七六 シング・シャヤット、ニューヨーク郊外に大菩薩禅堂金剛寺を設立。
- 一九七八 片桐、ミネソタに宝鏡寺を始める。
- 一九七九 弟子丸、フランス・プロア市の古城を購入し禅堂尼苑とする。
- 中川正壽 (曹)、ドイツにて布教活動開始。
- 一九八一 レス・ケイ、マウンテンビューに観音堂を創設。
- 一九八二 秋葉玄吾 (曹)、オーストラランドに好人庵禅堂を開単。
- 一九八三 乙川、サンタクルズの山麓に慈光寺、ニューメキシコに風光寺を創設。
- 前角、ニューヨーク州に禅マウンテンモナストリー道真寺を開創。
- 一九八四 成田秀雄 (曹)、イタリア北部バルゴーネに普伝寺を開創。
- 一九八五 ジョブズ、Zen社を創設。翌年、宗教指導者として乙川を招聘。
- 一九九一 ジョブズ、ローリン・パウエルと結婚。結婚式は仏式で、乙川が式師を務めた。
- 一九九六 奥村正博 (曹)、インディアナ州ブルーミントンに三心寺を創設。
- 中川、ミュンヘン郊外にアイゼンブッフ禅センター普門寺を開創。
- 一九九七 ロサンゼルスに曹洞宗北アメリカ開教センター (現、曹洞宗国際センター) 設置。のちサンフランシスコ桑港寺内に移転、現在に至る。
- 一九九九 スタンフォード大学にて道元禅師生誕八〇〇年記念シンポジウム開催。
- 二〇〇一 イタリアに曹洞宗ヨーロッパ国際布教総監部設置。のちフランス、パリに移転、現在に至る。
- 二〇〇二 曹洞宗、北アメリカ開教センターを曹洞宗国際センターと改称。
- 二〇一五 カリフォルニア州ロワーレイクに天平山禅堂上棟。
- 二〇一六 イタリア善伝寺、永平寺直末となる。
- 二〇一七 フランス禅道尼苑にてヨーロッパ開教五〇周年記念式典を開催。

『まがったキュウリ 鈴木俊隆の生涯と禅の教え』
に寄せられた書評

『まがったキュウリ 鈴木俊隆の生涯と禅の教え』翻訳の動機は、言うまでもなく、故鈴木老師のアメリカにおける輝かしい業績をできるだけ多くの人たちに知っていただきたいという願いである。本書の「結び」にも述べられているように、禅は今やアメリカ文化の一部としてしっかりと定着している。その最大の功労者は鈴木老師に他ならない。彼は、アメリカ中至るところの家庭の祭壇や書棚の上に写真を飾られるほどポピュラーな存在であるが、残念ながら日本では、その存在はあまり知られておらず、正当な評価も得ていない。終戦直前の半年間、あまりにも短い期間ではあったが、老師から親しくご指導をいただいた私としては、老師がアメリカに仏種を植え付けるために文字とおりに心血を注いだ事実と、その成果を知っていただきたいと切に願っている。

幸いにして、長年老師について学び、得度を受けたデイヴィッド・チャドウィック氏が老師の活動を詳細に記述した素晴らしい伝記が、一九九九年にアメリカで出版された。その五年ほど前、取材のため来日したチャドウィック

氏と林豊院で面会し、老師の思い出について語り合うことができた。一昨年三月、同氏から送られてきた伝記を手にして、その素晴らしい感激すると共に、改めて老師の偉大さを痛感した次第である。出版に際し、アメリカでこの本に寄せられた書評は、老師の活動を簡潔にかつ余すところなく表していると思われるので、以下ここに紹介させていただきます。

* * *

鈴木俊隆は現代思想の古典となっている『Zen Mind, Beginner's Mind』（邦訳『禅マインドビギナーズ・マインド』）の著者として、数限りない読者に知られている。この最も影響力を持った師匠の生涯が、西洋で初めて出版された禅の師匠の完全な伝記である『まがったキュウリ 鈴木俊隆の生涯と禅の教え』の中で鮮明に描かれている。彼に親近感を覚え、人々を魅了する素晴らしい物語を創出するために、デイヴィッド・チャドウィックは鈴木自身の言葉、彼の生徒たちや、友人、家族の思い出を数多く引用してい

る。

日本にいた若かりし頃、鈴木俊隆はアメリカに禪の修行をもたらしたいと望んでいたが、彼の希望は最初の師匠にまよって阻まれた（彼の奇妙な健忘症故に「へぼキュウリ」というあだ名を彼につけた師匠である）。鈴木は日本に留まり、大戦中、寺の住職として歎しれぬ矛盾を体験し、痛ましい家族の悲劇に耐えなければならなかった。

　　齢五五歳にして自由の身となり西洋に向かった鈴木は、一九六〇年代のカウンターカルチャーの興奮のまっただ中であつたサンフランシスコに身を置いた。詩人や画家、学者や教師たちなど、アメリカ求道者世代の先駆者であつた彼らは皆、鈴木がしつかりと地に足の着いた、慈愛に満ちた禪の師匠であることを発見し、歡喜しながら新たな道に従つた。彼はそうした者たちの中に禪の修行を可能にする「初心者の心」を認めたのである。鈴木の周りに集まつた小さな瞑想グループがサンフランシスコ禪センターに成長し、その後間もなく西洋における最初の禪の僧堂、タサハラを創設した。

　　一九七一年に、彼が最後の講話を行うまでのわずか二二年の短い歲月の間に、ますます大勢の者たちが鈴木について学ぶためにやつて来た。そして彼は自分の病と死を類稀な平靜さと優雅さをもって迎えたのである。

　　これまで公にされなかつた鈴木の談話や手紙を所々に配置し、『まがつたキュウリ 鈴木俊隆の生涯と禪の教え』

は宗教の域を越えた、真の人間性とも言うべきものを表す現実の精神生活を如実に描き出している。この男の人生航路を辿ることにより、読者は、すでに非常に大勢の者たちが Zen Mind, Beginner's Mind の中に見いだした心温まる多くの指針を見いだすであらう。鈴木と共にあつて、「山や、木や、石とともに修行する道」を発見し……、そして「この大きな世界に自分を発見する」ことができるのである。

　　鈴木俊隆という人間が、私が信じられなかつたほど生き生きとこの本の中に蘇っている。チャドウィックは、非凡な男の非凡な伝記を創出した」

——ヒューストン・スミス教授
『世界の宗教』の著者

「静かな池に落ち限りなく反響の波を広げる小石のように、さまざまな文化や幾世紀にもわたる仏教の修行を、アメリカ求道者世代の人々の日々の生活の中にもたらした、一人の人間の生涯の軌跡がここに明らかにされている。鈴木俊隆は、澄み切つた英知を持ち、執着するものを一切持たず、全てのものを分かち合い、この世に生きることの輝くような喜びの他は何ものも痕跡を残さず、自ら手本を示し、平凡の中の非凡をもって教えを示した」

——ステイブン・M・ティプトン

『心の習慣』の共著者

我々が旧制・静岡高等学校に入學したのは昭和一八（一九四三）年の春であった。戦局はすでに絶望的な段階に入っており、暗い影が日本全土を覆っていた。静岡の寮生であった我々一年生六人が、その年の一二月末から正月にかけて、一週間ほど林叟院で合宿し坐禅をすることに なった。メンバーは、我々静岡の高同級生六人と先輩二人、一高生二人、一橋大学生など数人、中学生一人の十数名ほどであったと記憶している。我々のクラスには、末常が中心となつて作つた小さな坐禅グループがあつた。このときの合宿についても末常から声が掛かつたのであるが、計画を立てたのは西中間さんなどの先輩方たちでもあつたようである。いずれにしても、我々が初めて林叟院に伺つたのは、この坐禅会るときであり、鈴木老師にお目に掛かつたのも、このときが最初であつた。早朝の坐禅、掃除、駆け足、朝食、その後で先輩たちが前回の会合で討論した内容を基に書いた論文らしきものを下地に、意見を述べ合うのがその行程であつた。この論文なるものは、当時知識階級の間で注目されていた、京都学派の哲学を視野に入れて書

かれたものようであつたが、哲学的表現は入學したばかりの高校一年生の我々には少々難解過ぎた。議論はおおむね先輩たちを中心に進められたが、最初に感想を述べたのが鈴木老師であつたことにはいささか驚いた。まだ四〇歳そこそこの若さではあつたが、物静かな雰囲気と漂わせていた。当時の世相からして、通常禅僧といえは活力に溢れ、圧倒するような大声で説教をする荒法師を想像しがちであつたが、彼は全く違つていた。なにかしら洞察の深みを感じさせるものがあつた。これが初めて会つた我々を引きつけた要因ではなからうか。

大晦日の夜になつて、このグループの中心的存在であつた西中間正雄氏が到着した。夜が明けて元日の早朝、全員で寺の背後に聳える高草山に登り、日の出を山頂で迎えた。雲一つない穏やかな元日であつた。駿河湾が眼下に開け、遙か彼方には、紫色の霧に包まれて伊豆半島が横たわつていた。平和そのものの風景であつた。この会合を機に、鈴木老師および林叟院との関係が深まつていった。日曜日や休日など我々は揃つて林叟院を訪れ、ときには林叟

院から徒歩で島田の旭伝院に行き、岸沢老師にお目には掛かった。

一九四年四月に二年生に進級すると同時に、全員が寮を出て下宿せねばならなかったが、末常と上月の二人は、西中間さんの推薦で林叟院に滞在することになった。二人が大変な苦勞をして静高に通ったことは、「まがったギョウリ 鈴木俊隆の生涯と禅の教え」に述べられているとおりである。なおかつ、二人が林叟院を青春時代の心の故郷として懐かしんでいるのは鈴木老師の人柄に負うところが大きかったと思う。

アメリカの人たちが鈴木老師の深い仏教の理解に惹かれ、彼の教えに魅了されたことは事実であるが、もう一つの大きな吸引力となっていたのは、彼の人柄——人間性にも他ならないと思う。抱擁力に富み、偏見のない取り組み方と同時に、彼の温かい人間性を忘れてはならない。豊かな情感を持っていたが故に、書画を愛し、陶磁器を愛で、石や樹木を鑑賞した彼の人柄は、異文化のアメリカ人にも理解されたのである。さらに、英語で意思を伝達するすべに優れていたことは、彼が布教に成功した大きな要因となっている。私は終戦直後に林叟院を訪れ、本棚にあった、古ぼけて黴の生えたPOD(ポケット・オックスフォード・デイクシヨナリー)を見つければ老師にお願いしてもらって帰ったことがあった。老師が駒澤大学で使ったものであるという。そのときは老師とランサム嬢との関係も、老師が

それほど真剣に英語を勉強されていたという事実も知らなかったが、PODを持っていたという事実は、相当英語にのめり込んでいたことを物語るものであると思う。

老師と我々が身近に接触した期間は極めて短い。昭和一八年暮れに初めてお目に掛かってからの、半年をこそこの短い期間ではなかったらうか。というのも、一九年の六月には、我々二年生全員が川崎の自動車製造工場の社員寮で、泊まり込みの勤勞動員に行ってしまったからである。そしてほとんど全員がその年の一二月から翌年にかけて兵役についたのである。いわゆる学徒出陣である。そして二〇年四月には二年に短縮された高校を卒業し、無試験で大学に編入して大学に籍が移った。復員後は東京、九州、仙台にそれぞれ散っていったのである。それにもかかわらず、その後めいめいが機会あることに林叟院を訪問し、老師との接触を続けてきた。また老師からは晋山式などの大きな儀礼にご招待を受け、我々一同参列の榮に浴したものである。

昭和四二年夏、所用でアメリカに出張の途次、サンフランシスコに立ち寄り、桑港寺を訪問したことがあった。そのとき初めてみつ夫人にお目に掛かった。どことなくじくじくしたちゑ夫人に面差しが似ていると思った。末常はタサハラにも行き、上月は禅センターをしはしば訪れたという。「日本編」に、老師と加藤太郎氏が漢州への旅行の途中、下関で船を待っている間に、当時九州大学に在学中の

小笠原の下宿先に行き、ご馳走になったというエピソードがある。考えてみると、短い交流期間に、どうしてこのような深い絆で結ばれるようになったのであろうかと思ふに思ふことがある。

平成六（一九九四）年四月中旬、みつ夫人からの連絡で、チャドウィックという名のアメリカ人が故鈴木木老師についての取材のため日本に来ていたので、会ってほしい、との依頼を受けた。四月一六日林斐院に一泊し、同氏に面会した。そのとき集まったのは天田、末常と私の三名であった。鈴木木老師の思い出について取り留めのない話をし、天田からは若干の資料を渡した。その後彼からは全く音信がなく、我々もいつの間にか彼のことを忘れていた。

平成一一（一九九九）年三月になつて、突然英文の伝記が林斐院に届いた。読んでみると、アメリカにおける老師の活動が詳細に書かれているだけでなく、老師の生い立ちから修行まで、我々の知らなかった事実が詳細に記述されていることに驚いた。そして啓発される点が多々あった。早速我々の間で手分けして翻訳しようと呼び掛けてみたが、それぞれに仕事を抱えており、すぐには要望に応じられないという返事が返ってきた。やむなく、私だけでも翻訳を始めようと仕事に取り掛かったのが一年五月であった。

当初は半年ぐらいで完了するのでは、と日論んでいたが、一年半以上もかかってしまった。特に禪の専門用語や、固有名詞には悩まされた。専門用語については図書館などで

関係の書籍を漁ったが、結局は林斐院の包一方丈さんのご教示に負うところが大きかった。また、特にアメリカで活躍された日本人の姓名がわからず苦勞していたが、みつ夫人にお伺いして大半が判明し、どうにか格好がついた次第である。

チャドウィック氏が来日した際、我々の間でも老師の思い出を書き残そうではないかという提案もあったが、チャドウィック氏の伝記を讀んでみて、これほど詳細な伝記を作ることは困難ではないか、と正直なところ感じた。特に、アメリカにおける老師の活動の軌跡を追うことは、我々にとつては至難の業である。しかし日本編に出てくる記事の中には、若干正鵠を欠く箇所もあると思われるので、今後この点については検討を加えてみたいと思つている。

また、老師の身近にいてそのときどきの思い出を豊富に持つておられるみつ夫人を始め、ご子息の包一方丈、安子さん、満州と一緒に旅行された加藤太郎さんには、貴重な思い出をできるだけ多く書き留めていただくようお願いしている。ゆくゆくは、これらを公表する機会に恵まれれば幸いである。

平成一三（二〇〇一）年三月三日 浅岡定義

一九〇四 五月一八日、松岩寺(神奈川・平塚市)にて生まれる。本名は俊隆(トシタカ)。

一九〇七 三月、妹・とり生まれる。

一九一〇 四月、小学校に入学する。

六月、妹・愛子生まれる。

一九一五 三月、小学校卒業と同時に僧侶になること、神奈川を出ることを決意し、祖温とともに藏雲院へ発つ。

一九一七 五月一八日、森町の高等小学校に通う。祖温の弟子として受戒し、祥岳俊隆となる。祖温からへばキューリと呼ばれる。

一九一八 林叟院(静岡・焼津市)に移る。祖温より臨濟禪の公案修行に出される。

一九一九 四月、開成中学に入学。

一九二二 九月一日、関東大震災

一九二四 四月、飛びぬし、曹洞宗大学予備校生として寄宿舎生活を送る。

一九二五 七月、左目の上に怪我をし傷が残る。
十一月、一月、二月中旬、顕光院の加藤道順老師の下で座修行を受ける。

一九二六 三月、大学予備校を卒業。

四月、曹洞の大学(現・駒澤大学)仏教・禪哲学科入学(副専攻は英語科)。

八月二一日、祖温より戒を授けられる。結核にかかる。祖学、よね、愛子が藏雲院に移る。

十二月二五日、天皇崩御し、年号が昭和に。

一九二七 七月、ノナ・ランサム女史の住み込みの通訳兼手伝いとして雇われる。仏像事件が起きる。
一九二九 一月二二日、晋山式を行い、二八代目藏雲院の住職に任命される。

五月三〇日、ランサム宅を出て寄宿舎に戻る。
一九三〇 一月二四日、祖温より剃法が認められる。
四月一〇日、駒澤大学を卒業、論文テーマは「一礼拝得随」。英語と倫理の教員免許(高等学校、短期大学)をもらう。祖温にアメリカ行きを反対される。

九月、永平寺(福井)にて修行、嵐沢惟安老師に師事。

一九三二 九月一七日、大本山總持寺(神奈川)にて修行。
一九三三 四月、總持寺を去り、藏雲院で住職となり、可睡齋と大洞院も引き継ぐ。結婚するが、新妻が結核となり離縁する。

一九三三 一月、祖学遷化。

一九三四 四月、祖温が副監院のため永平寺に行く。

五月三日、祖温が遷化し、俊隆が祖温の納骨式を取り仕切る。

一九三五 二月、ちると再婚する。

十一月一日、長女・安子生まれる。

一九三六 四月二三日、義親・天野源一の家に入る。林叟院の

三六代目住職になる。

一九三八 四月、母・よね死去。

一九三九 九月一九、長男・包二生まれる。

一九四一 二月八日、パールハーバー襲撃

一九四二 高草山会が結成される。親友・西中間正雄と出会う。

一九四五 五月二四日、加藤太郎とともに清州、韓国・釜山を

訪問。

七月二五日、静岡に戻る。

八月二五日、終戦

一九四六 高草塾を創設する。

一九四七 三月、在家信者の授戒会を開く。

六月三日、林叟院の禪堂開所式を行う。

一九五〇 一月二日、常盤幼稚園(静岡・焼津市)開園。

一九五一 山田義道と偶然会い、アメリカへの夢が再燃する。

一九五二 三月二七日、前妻・ちると死去(享年三九歳)。

米ソ冷戦。

一九五四 四月、常盤幼稚園分園(静岡・焼津市)を開園する。

一九五五 三月二六日、岸沢惟安遷化。

一九五八 二月、みつと再々婚。

春、林叟院の開山堂、祖師堂、経堂、鐘樓が完成する。

三・五月、林叟院の落慶式を行う。

九月、アメリカ行きを決意する。

一九五九 五月二一日、アメリカ、サンフランシスコへ出発。

五月二三日、アメリカ、サンフランシスコに到着する。

一九六〇 二月、桑港寺にて初めて三日間の摂心を行う。

八月、一週間の摂心を行う。

十二月、日本に渡ったビル・マックニール、ボブ・ヘンスが包一によって得度した。

一九六一 二月二日、雑誌「ウインド・ベル」創刊。

春、グレアム・ベッチー、リチャード・ペーカーらが参禅を始める。

六月一四日、みつと乙宥がサンフランシスコに到着する。

一九六三 四月より七月、日本に一時帰国する。

七月二八日、焼身自殺を図ったクアン・ドックの追悼式を桑港寺にて行う。

八月、俊隆にとってアメリカで初となるグレアム・ベッチーの得度式を行う。

一九六四 妹・おほみが自殺する。

一九六五 一二月、澤木興道遷化。

一九六六 四月七日、タサハラを初めて訪れる。

八月〜十一月、日本へ一時帰国する。

夏、マリアン・ダービーがロスアルトスに俳句禅堂を開く。

一〇月二三日、退院式で林叟院の住職を引退し、包一が晋山式にて住職に就任する。岡本昭孝への副法を行う。

一九六七 一月一四日、Hunan-Beltにてアレン・ギンズバーグと再会を果たす。

七月三日、タサハラ禅センターの開所式を行う。

一九六八 夏〜秋、禅の師匠の一行がタサハラを訪問し、千崎如幻の遺骨をタサハラで散骨する。平和デモに参加する。

一九六九 春、桑港寺と訣別する。

一月一五日、桑港寺からページストリートへ引っ越す。

一九七〇 一月、ページストリートにマハーボーディサットヴァ（大菩薩）禅堂が完成する。

五月、立髪良泉をタサハラの春の修行に招聘す

る。

Zen Mind, Beginner's Mind を刊行する。

夏、首座としてリチャード・ベイカー、フィリップ・ウィルソン、クロード・ダレンバーグ、ジョン・ロス、サイラス・ホードリー、メル・ウアイツマンを任命する。

六月、チヨギヤム・トゥルンバ・リンボチエとタサハラで会う。

八月〜十二月、日本に一時帰国する。アメリカに戻り、三六人を得度させる。

十二月八日、リチャード・ベイカーへの副法儀礼が完了する。

一九七一

八月、五五人の在家信者のための得度式を行う。

一〇月一〇日、アパートにベイエリアの弟子たちを集める。

一月二一日、リチャード・ベイカーの晋山式が行われる。

二月四日、臘八振心の初日に永眠。
享年六七歳。

- Anderson, Reb. *Warm Smiles from Cold Mountains: A Collection of Talks on Zen Meditation*. Rodnell Press, 1999.
- Baker, Richard. *Original Mind: The Practice of Zen in the West*. Riverhead Books, 1999.
- Barry, Fritze. "The Way of the Gateless Gate." Berkeley Barb, September 29, 1967.
- Bein, Edward Hirohito. *Behind the Myth*. Villard, 1989.
- Brown, Edward Espe. *Tonkoku Blessings and Radical Teachings*. Riverhead Books, 1997.
- Chadwick, David. *Thank You and OK! An American Zen Failure in Japan*. Penguin Arkana, 1994.
- Doss, Margaret Patterson. *San Francisco at Your Feet*. Grove Press, 1964.
- Fields, Rick. *How the Swans Came to the Lake* (third edition, revised and updated). Shambhala, 1992.
- Fujimoto, Rindo. *The Way of Zen*. Cambridge Buddhist Assn. Inc., 1966.
- Gaskin, Ina May. *Spiritual Midwifery*. The Book Publishing Co., 1990.
- Gaskin, Stephen. *Amazing Dope Tales*. The Book Publishing Co., 1980.
- Hiesland, Barbara, editor. *Chronicles of Haiku Zendo*. Haiku Zendo Foundation, 1973.
- Jeschke, Matthew Paul. "The Interpretation of Zen in the West." Thesis, Division of Philosophy, Religion, and Psychology, Reed College, May 1995.
- Kato, Kojo. *Soufuku (Running and Resting)*. Tomokichisna, 1994.
- Kawashiri, Rumi. "Sokoji and Zen Center." Unpublished paper, Department of Anthropology, University of California, Berkeley, June 6, 1969.
- Kaye, Les. *Zen at Work*. Crown, 1996.
- Kozuki, Shigeo. "Kokoro no Furusato" (Hometown of the Heart). Nikkei, Tokyo, 1974.
- Lahey, Dennis Myo. "Climbing the Mountain Seat." Unpublished paper, Department of Sociology, University of California, Berkeley, 1972.
- Leighton, Taigen Dan. *Bodhisattva Archetypes*. Penguin Arkana, 1998.
- Mathiessen, Peter. *Nine-Headed Dragon River*. Shambhala, 1986.
- Mitchell, Elsie. *San Buddhas, Maon Buddhas*. Weatherhill, 1973.
- Mountain, Marian. *The Zen Environment*. William Morrow, 1982.
- Needleman, Jacob. *The New Religions*. Doubleday, 1970.
- Olson, Philip. *The Discipline of Freedom*. State University of New York Press, 1993.
- Power, Brian. *The Puppet Emperor*. Universe Books, 1988.
- Reischauer, Edwin O. *Japan Past and Present* (third edition). Knopf, 1964.

- Richmond, Lewis. *Work as a Spiritual Practice*. Broadway Books, 1999.
- Ross, Nancy Wilson. *Buddhism: A Way of Life and Thought*. Knopf, 1980.
- Schneider, David. *Street Zen*. Shambhala, 1993.
- Storlie, Erik. *Nothing on My Mind*. Shambhala, 1997.
- Storry, Richard. *A History of Modern Japan*. Penguin, 1960.
- Suzuki, Mitsuo. *Temple Dusk*. Parallax Press, 1992.
- Suzuki, Shunryu. *Zen Mind, Beginner's Mind*. Weatherhill, 1970.
- Suzuki, Shunryu. *Branching Streams Flow in the Darkness: Lectures on the Sandokai*. University of California Press, Berkeley, 1999.
- Tipton, Steve. *Gaining Saved from the Skies*. University of California Press, 1982.
- Trungpa, Chogyam. *Born in Tibet* (third edition). Shambhala, 1985.
- Trungpa, Chogyam. "Suzuki-roshi: A Recollection of Buddha, Dharmā, Sangha." Garuda. Tail of the Tiger and Karma Dzong Communities, Spring 1972.
- Twokey, Helen. *Zen in America*. Kodansha, 1994.
- Uchiyama, Koshō. "The Zen Teaching of 'Homeless' Kōdo." Kyoto Soto Zen Center, 1990.
- Victoria, Brian. *Zen at War*. Weatherhill, 1997.
- Wenger, Michael. *Thirty-three Fingers*. Clear Glass, 1994.
- Wind Bell (publication of the San Francisco Zen Center), 1961-1998.
- Wise, David Thomas. "Dharma West: A Social-Psychological Inquiry into Zen in San Francisco." Ph.D. Dissertation, Department of Sociology, University of California, Berkeley, September 1971.

原著の原文、本書に関する資料や追記等は全て、

著者のウェブサイトを <http://ouke.com> 内にて管理している。

本書の謝辞・協力、インデックス、註や止誤表等のエンド・マターについても、

同ウェブサイト内の <http://ouke.com/mx> を参照された。

アメリカ編の人名・地名を含むファクト・チェックについて、北アメリカ布教総監の秋葉玄吉老師の協力をいただいた。

著者

デイヴィッド・チャドウィック David Chadwick

一九六六年、二一歳のときに鈴木俊隆について修行を始め、一九七一年鈴木師によって得度した。彼は日本に滞在した年月の記録である *Thank you and OK: An American Zen Pilgrimage in Japan* (「ありがとう、そしてオッケー!」——日本における禪に失敗したあるアメリカ人)、(一九九四年刊)の著者である。現在は妻と息子とともにカリフォルニア州ソノマ・カウンティに住んでいる。ホームページ <http://www.culic.com>

訳者

浅岡定義 あさおか・さだよし

一九二四年、静岡県生まれ。旧制・静岡高等学校在学中、友人数名と共に鈴木俊隆の教えを受ける。学徒出陣で中国に行く。東北大学卒業後、商社勤務。インド(ボンベイ、ニューデリー)、マニラに駐在する。ボンベイ(現ムンバイ)駐在の際、ブータン王国への日本使節団に同行する。二〇一六年、九一歳にて逝去。

監訳者

藤田一照 ふじた・いつしろう

一九五四年、愛媛県生まれ。東京大学大学院博士課程(発達心理学)を中退し、二九歳で得度。渡米後、マサチューセッツ州パイオニア・ヴァレー禅堂で坐禅を指導。二〇〇五年に帰国し現在も、坐禅の研究・指導に当たっている。曹洞宗国際センター第二代所長。著書・共著・訳書など多数。「禅マインドビギナーズ・マインド2」(サンガ)訳者。

まがったキユウリ

鈴木俊隆の生涯と禪の教え

二〇一九年二月一日 第一刷発行

著者 デイヴィッド・チャドウツイク

訳者 浅岡定義

監訳者 藤田一照

発行者 島影 透

発行所 株式会社サンガ

〒100-0052 東京都千代田区神田小川町三二二八

電話 〇三六二七三二二八一

ファックス 〇三六二七三二二八一

ホームページ <http://www.sanga.co.jp/>

郵便振替 〇二二〇〇一四九八八五 (株) サンガ

印刷・製本 株式会社シナノ

©Sadanobu Asoka, Issho Fujita 2019

Printed in Japan

ISBN978-4-86564-142-4 C0015

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はお取り替えいたしません。

ブックデザイン——堀潤伸治©rice graphics

Crooked Cucumber

The Life and Zen Teaching of Shunryu Suzuki

Written by David Chadwick

Copyright © 1999 by David Chadwick

This translation published by arrangement with
Harmony Books, an imprint of Random House,
a division of Penguin Random House LLC
through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo